

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 689 集

はまかわ め さわ だ

浜川目沢田 I 遺跡発掘調査報告書

大沢地区漁業集落防災機能強化事業関連遺跡発掘調査

(第 1 分冊 本文・遺構図版・遺構内出土遺物図版)

2018

山田町建設課

(公財) 岩手県文化振興事業団

浜川目沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書

大沢地区漁業集落防災機能強化事業関連遺跡発掘調査

(第1分冊 本文・遺構図版・遺構内出土遺物図版)



遺跡全景（北東から）



浜川目沢田Ⅰ遺跡内から山田湾を望む



縄文時代中期の竪穴住居跡（東から）



縄文時代中期の遺物出土状況（北東から）



縄文時代後期に堆積した砂層（津波堆積層・南東から）



縄文時代後期の遺物出土状況（北から）



縄文時代晩期の遺物出土状況 1 (南から)



縄文時代晩期の遺物出土状況 2 (北から)



縄文土器（大木 8a 式）



縄文土器（大木 8b 式）



縄文土器 (大木 8b ~ 9 式)



縄文土器 (大木 9 ~ 10 式)



縄文土器（後期前葉～後期中葉）



縄文土器（後期中葉～後葉）



縄文土器（大洞 B～BC 式）



縄文土器（大洞 C1・C2 式）



翡翠製大珠（右・中期）・勾玉（左・晩期）



翡翠製大珠出土状況（南西から）



縄文時代中期～晩期の土製品・石製品



縄文時代後期・晩期の土偶

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多くのこざれております。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であります。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らねばなりません。

一方、県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要とされます。それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財の保護との調和も求められるところであります。

(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は山田町における大沢地区漁業集落防災機能強化事業に関連して平成26年度に発掘調査された、浜川目沢田Ⅰ遺跡の調査成果をまとめたものであります。浜川目沢田Ⅰ遺跡は山田湾の北岸、標高2～7mの低地に立地しており、縄文時代の遺跡としては、特異な環境にありながら、縄文時代中期前～末葉と晩期中葉に営まれた集落遺跡であることが分かりました。またこれらの時期のみならず、前期から晩期に比定される縄文土器や石器が大量に出土しており、集落遺跡であると同時に大きな遺物包含層を形成していたこともわかりました。遺物包含層からは翡翠製の玉や勾玉など貴重なものも出土しており、浜川目沢田Ⅰ遺跡が同地域における重要な位置を占めていた遺跡であったことがうかがえます。浜川目沢田Ⅰ遺跡の発掘調査成果は縄文時代における岩手県沿岸地域の社会様相を知る貴重な資料となりえます。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました山田町建設課、山田町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成30年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野 洋樹

例 言

1. 本報告書は、平成 26 年度に行った浜川目沢田 I 遺跡（下閉伊郡山田町大沢浜川目第 11 地割ほか）の発掘調査の成果を収録したものである。
2. 今回の調査は、大沢地区漁業集落防災機能強化事業に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と山田町との協議を経て、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 遺跡台帳に登録されている遺跡番号は「LG84 - 2393」である。
4. 遺跡略号、発掘調査期間、担当者、調査面積、委託者名は以下の通りである。

遺跡略号：HKSI - 14
調査期間：平成 26 年 6 月 2 日～12 月 17 日
調査担当者：須原 拓・久保賢治・野中裕貴・南野龍太郎
調査面積：6,240㎡
委託者：山田町建設課
5. 室内整理期間と担当者は、以下の通りである。

[平成 26 年度] 整理期間：平成 26 年 11 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日
担当者：須原 拓・南野龍太郎
[平成 27 年度] 整理期間：平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
担当者：須原 拓
[平成 28 年度] 整理期間：平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日
担当者：須原 拓
6. 調査および整理における委託業務については次の機関に依頼した。

基準点測量：有限会社 スカイ測量設計
航空撮影：株式会社 リッケイ
遺構図版編集：株式会社 リッケイ
石材鑑定：花崗岩研究会
黒曜石産地同定：株式会社 パリノ・サーヴェイ
翡翠製石製品の半定量分析：フォッサマグナミュージアム
炭化物年代測定（AMS 測定）：株式会社 加速器分析研究所
剥片石器実測図作成：株式会社 ラング
縄文土器 PEAKIT 図作成：株式会社 ラング
7. 本遺跡の調査成果は、すでに『平成 26 年度発掘調査報告書』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 647 集）において発表しているが、内容については本書が優先する。
8. 土色の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1993）を使用している。
9. 本報告書の執筆は第Ⅸ章の一部を河本純一が、他は須原 拓が行い、編集は須原が行った。
10. 本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行 1:25,000「陸中山田」、「霞露ヶ岳」を使用している。
11. 野外調査ならびに整理作業、報告書作成に際し、次の方々からご協力、ご指導いただいた。記して深く感謝いたします。（敬称略）

阿部昭典、岩田貴之（北上市教育委員会）、町田賢一、町田尚美（富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所）、宮島 宏（フォッサマグナミュージアム）、山田町教育委員会
12. 本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1 遺構について

(1) 本文中の図版縮尺・規模計測

以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

竪穴住居・土坑の平面・断面：1/60・1/40

竪穴住居の炉の平面・断面：1/30

遺構の規模計測については次ページ凡例図に示したものを基準とし、計測した。

(2) 遺構断面の土層注記

野外調査の際、土層の観察記録については以下の項目を基本とし、記録した。

色調（『標準土色帖』（農林水産省農林技術会議局監修）を基準とする）

粘性（4段階表示：強い、やや強い、やや弱い、弱い）

しまり（4段階表示：密、やや密、やや疎、疎）

混入物の有無（混入量は5段階表示：微量 1～10%・少量 11～20%・
中量 21～30%・やや多い 31～40%・多量 41～50%）

2 遺物について

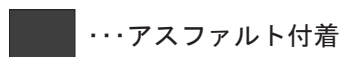
(1) 本文中の図版縮尺は以下を原則とし、各図版にはスケールを付している。

縄文土器：1/4・1/5（立体）・1/3（破片） 土製品：1/2

剥片石器：2/3・1/2 礫石器：1/3・1/4・1/5

(2) 遺物図面のアミかけについては凡例図に示した通りである。

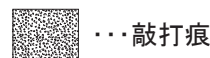
縄文土器



須恵器

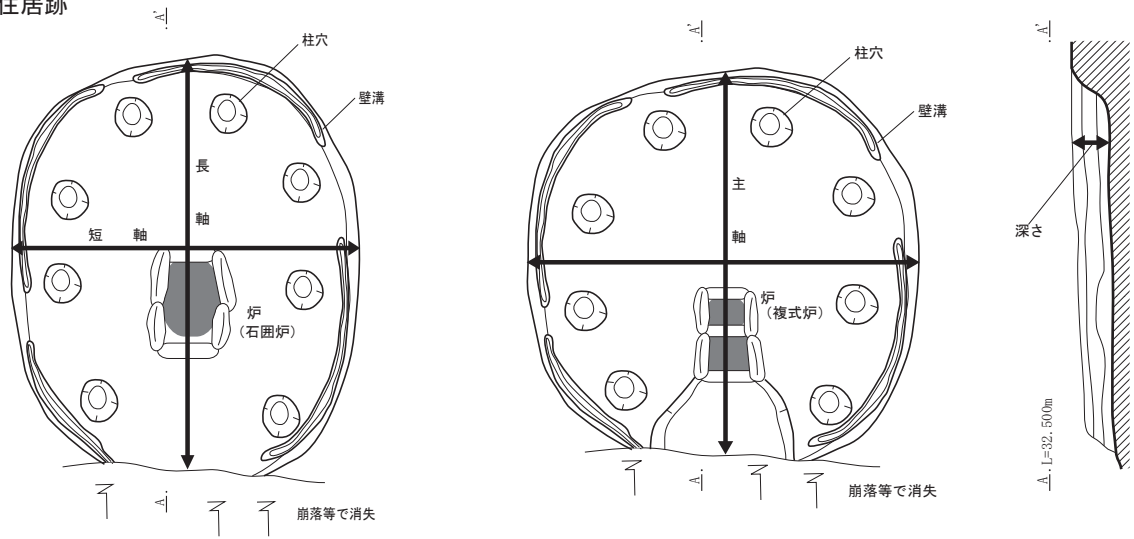


石器



図版凡例

竪穴住居跡



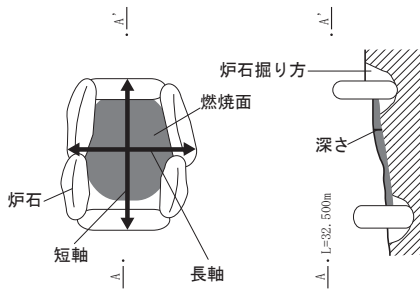
【竪穴住居跡の規模計測について】

石囲炉を伴う竪穴住居跡：住居の最も長い範囲を長軸とし、それに直交する範囲を短軸とし計測した。
 複式炉を伴う竪穴住居跡：複式炉の長軸方向の延長線上を主軸とし、それに直交する範囲と合わせて計測した。

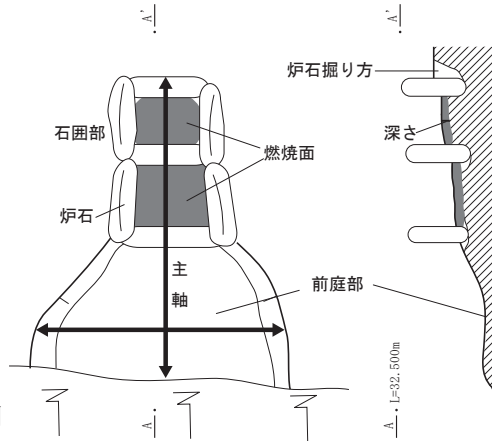
※竪穴住居跡の深さは、検出面から最深部を計測した。

壁・床面が消失している場合は残存する範囲を計測し、(Ocm)と記した。

石囲炉



複式炉



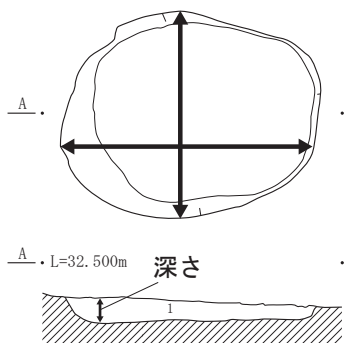
【炉の規模計測について】

石囲炉：最も長い範囲を長軸、それに直交する範囲を短軸とし計測した。

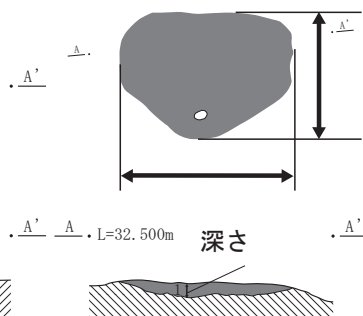
複式炉：石囲部と前庭部が並ぶ方向を主軸とし、それに直交する範囲と合わせて計測した。

※使用面の深さは、床面から焼土が及ぶ範囲の最深部を計測した。

土坑



焼土遺構



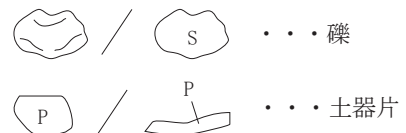
【土坑・焼土遺構の規模計測について】

最も長い範囲を長軸、それに直交する範囲を短軸とし計測した。

深さは、床面から焼土が及ぶ範囲の最深部を計測した。

※壁・床面が消失している場合は残存する範囲を計測し、(Ocm)と記した。

【図中の表記について】



目 次

I	発掘調査に至る経緯	1
II	遺跡周辺の地理的環境	
1	遺跡の位置・調査の現況について	1
2	遺跡の立地	3
III	遺跡周辺の歴史的環境	
1	山田町の遺跡	4
2	山田湾周辺の遺跡と浜川目沢田 I 遺跡	4
IV	調査の経過と方法	
1	野外調査について	8
2	室内整理について	10
V	出土遺物の分類	
1	縄文土器	12
2	石器・石製品	27
VI	調査の概要と基本土層	
1	調査の概要	36
2	基本土層	40
VII	検出遺構と出土遺物	
1	縄文時代	44
2	古代以降	284
VIII	自然科学分析	
1	浜川目沢田 I 遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)	287
2	浜川目沢田 I 遺跡出土黒曜石製遺物の産地同定	291
3	大珠・勾玉の石材について	300
IX	総 括	
1	出土遺物の検討	303
2	検出遺構からの検討	328

図 版 目 次

第1図 浜川目沢田I遺跡位置図 …………… 2	第38図 2号住居跡出土遺物5 …………… 65
第2図 山田湾周辺の地形と 浜川目沢田I遺跡 …………… 3	第39図 2号住居跡出土遺物6 …………… 66
第3図 周辺の遺跡 …………… 6	第40図 2号住居跡出土遺物7 …………… 67
第4図 調査区ついて …………… 9	第41図 2号住居跡出土遺物8 …………… 68
第5図 縄文土器の分類1 …………… 13	第42図 2号住居跡出土遺物9 …………… 69
第6図 縄文土器の分類2 …………… 16	第43図 2号住居跡出土遺物10 …………… 70
第7図 縄文土器の分類3 …………… 17	第44図 2号住居跡出土遺物11 …………… 71
第8図 縄文土器の分類4 …………… 19	第45図 2号住居跡出土遺物12 …………… 72
第9図 縄文土器の分類5 …………… 22	第46図 2号住居跡出土遺物13 …………… 73
第10図 縄文土器の分類6 …………… 23	第47図 2号住居跡出土遺物14 …………… 74
第11図 縄文土器の分類7 …………… 25	第48図 2号住居跡出土遺物15 …………… 75
第12図 石器の分類1 …………… 31	第49図 2号住居跡出土遺物16 …………… 76
第13図 石器の分類2 …………… 32	第50図 2号住居跡出土遺物17 …………… 77
第14図 石器の分類3 …………… 33	第51図 2号住居跡出土遺物18 …………… 78
第15図 石器の分類4 …………… 35	第52図 2号住居跡出土遺物19 …………… 79
第16図 遺構配置図 …………… 37	第53図 2号住居跡出土遺物20 …………… 80
第17図 基本土層柱状図 …………… 40	第54図 2号住居跡出土遺物21 …………… 81
第18図 基本土層1 …………… 41	第55図 2号住居跡出土遺物22 …………… 82
第19図 基本土層2 …………… 42	第56図 2号住居跡出土遺物23 …………… 83
第20図 基本土層3 …………… 43	第57図 3号住居跡1 …………… 85
第21図 1号住居跡1 …………… 45	第58図 3号住居跡2 …………… 86
第22図 1号住居跡2 …………… 46	第59図 3号住居跡出土遺物1 …………… 87
第23図 1号住居跡出土遺物1 …………… 47	第60図 3号住居跡出土遺物2 …………… 88
第24図 1号住居跡出土遺物2 …………… 48	第61図 3号住居跡出土遺物3 …………… 89
第25図 1号住居跡出土遺物3 …………… 49	第62図 4～7号住居跡重複関係 …………… 90
第26図 1号住居跡出土遺物4 …………… 50	第63図 4号住居跡 …………… 91
第27図 1号住居跡出土遺物5 …………… 51	第64図 4号住居跡出土遺物1 …………… 92
第28図 2～10号住居跡重複関係 …………… 53	第65図 4号住居跡出土遺物2 …………… 93
第29図 2・3号住居跡 …………… 54	第66図 4号住居跡出土遺物3 …………… 94
第30図 2号住居跡1 …………… 55	第67図 4号住居跡出土遺物4 …………… 95
第31図 2号住居跡2 …………… 56	第68図 4号住居跡出土遺物5 …………… 96
第32図 2号住居跡3 …………… 57	第69図 5号住居跡1 …………… 99
第33図 2号住居跡4 …………… 58	第70図 5号住居跡2 …………… 100
第34図 2号住居跡出土遺物1 …………… 61	第71図 5号住居跡3 …………… 101
第35図 2号住居跡出土遺物2 …………… 62	第72図 5号住居跡出土遺物1 …………… 102
第36図 2号住居跡出土遺物3 …………… 63	第73図 5号住居跡出土遺物2 …………… 103
第37図 2号住居跡出土遺物4 …………… 64	第74図 5号住居跡出土遺物3 …………… 104
	第75図 5号住居跡出土遺物4 …………… 105

第 76 図	5号住居跡出土遺物 5	106	第 116 図	16号住居跡 1	153
第 77 図	5号住居跡出土遺物 6	107	第 117 図	16号住居跡 2・出土遺物	154
第 78 図	5号住居跡出土遺物 7	108	第 118 図	17号住居跡 1	156
第 79 図	5号住居跡出土遺物 8	109	第 119 図	17号住居跡 2	157
第 80 図	6号住居跡	111	第 120 図	17号住居跡出土遺物 1	158
第 81 図	6号住居跡出土遺物 1	112	第 121 図	17号住居跡出土遺物 2	159
第 82 図	6号住居跡出土遺物 2	113	第 122 図	17号住居跡出土遺物 3	160
第 83 図	6号住居跡出土遺物 3	114	第 123 図	18号住居跡	161
第 84 図	6号住居跡出土遺物 4	115	第 124 図	18号住居跡出土遺物	162
第 85 図	6号住居跡出土遺物 5	116	第 125 図	19号住居跡	163
第 86 図	7号住居跡	117	第 126 図	20号住居跡	164
第 87 図	7号住居跡出土遺物 1	118	第 127 図	20号住居跡出土遺物	165
第 88 図	7号住居跡出土遺物 2	119	第 128 図	21号住居跡	167
第 89 図	8号住居跡 1	121	第 129 図	21号住居跡出土遺物	168
第 90 図	8号住居跡 2	122	第 130 図	22号住居跡	169
第 91 図	8号住居跡出土遺物 1	123	第 131 図	22号住居跡出土遺物	170
第 92 図	8号住居跡出土遺物 2	124	第 132 図	23号住居跡	172
第 93 図	8号住居跡出土遺物 3	125	第 133 図	23号住居跡出土遺物 1	173
第 94 図	8号住居跡出土遺物 4	126	第 134 図	23号住居跡出土遺物 2	174
第 95 図	9号住居跡	128	第 135 図	23号住居跡出土遺物 3	175
第 96 図	9号住居跡出土遺物 1	129	第 136 図	24号住居跡	176
第 97 図	9号住居跡出土遺物 2	130	第 137 図	1～3号埋設土器	178
第 98 図	9号住居跡出土遺物 3	131	第 138 図	埋設土器	179
第 99 図	10号住居跡	132	第 139 図	1～6号土坑	182
第 100 図	10号住居跡出土遺物 1	133	第 140 図	7～11号土坑	184
第 101 図	10号住居跡出土遺物 2	134	第 141 図	12～15号土坑	186
第 102 図	10号住居跡出土遺物 3	135	第 142 図	16～20号土坑	189
第 103 図	11号住居跡 1	137	第 143 図	21～24号土坑	191
第 104 図	11号住居跡 2	138	第 144 図	25～30号土坑	194
第 105 図	11号住居跡出土遺物	139	第 145 図	31～33号土坑	196
第 106 図	12号住居跡 1	141	第 146 図	34～40号土坑 1	198
第 107 図	12号住居跡 2	142	第 147 図	34～40号土坑 2	199
第 108 図	12号住居跡出土遺物	143	第 148 図	41～43号土坑	202
第 109 図	13号住居跡 1	144	第 149 図	土坑出土遺物 1	203
第 110 図	13号住居跡 2	145	第 150 図	土坑出土遺物 2	204
第 111 図	13号住居跡出土遺物	147	第 151 図	土坑出土遺物 3	205
第 112 図	14号住居跡出土遺物	149	第 152 図	土坑出土遺物 4	206
第 113 図	15号住居跡 1	150	第 153 図	土坑出土遺物 5	207
第 114 図	15号住居跡 2	151	第 154 図	土坑出土遺物 6	208
第 115 図	15号住居跡出土遺物	152	第 155 図	焼土遺構	209

第156 図	1号性格不明遺構1	211	第179 図	浜川目沢田I遺跡の変遷	304
第157 図	1号性格不明遺構2	212	第180 図	大木8a式古段階・新段階集成	306
第158 図	1号性格不明遺構出土遺物1	213	第181 図	大木8b式古段階・新段階集成	307
第159 図	1号性格不明遺構出土遺物2	214	第182 図	2～10号住居跡の新旧関係と 出土土器	308
第160 図	1号性格不明遺構出土遺物3	215	第183 図	大木9式～後期前葉集成	310
第161 図	1号性格不明遺構出土遺物4	216	第184 図	後期中葉～後葉集成	311
第162 図	1号性格不明遺構出土遺物5	217	第185 図	大洞B・BC式集成	314
第163 図	柱穴状土坑出土遺物	218	第186 図	大洞BC式集成	315
第164 図	柱穴状土坑	219	第187 図	大洞C1・C2式集成	316
第165 図	遺構外出土土器分布1	221	第188 図	縄文土器の胎土写真(1) 中期大木7a～8a式	319
第166 図	遺構外出土土器分布2	231	第189 図	縄文土器の胎土写真(2) 中期大木8b～10式	320
第167 図	遺構外出土土器分布3	237	第190 図	縄文土器の胎土写真(3) 後期前葉～後葉	321
第168 図	遺構外出土土器分布4	241	第191 図	縄文土器の胎土写真(4) 2種類の材料を使用した土器	322
第169 図	遺構外出土土器分布5	248	第192 図	縄文土器の胎土写真(5) 晩期大洞B～大洞C1式	322
第170 図	遺構外出土土器偶、土製品分布	253	第193 図	遺構の変遷	329
第171 図	出土土器(器種毎)点数	257	第194 図	中期の竪穴住居跡集成	330
第172 図	遺構外出土石器1	266			
第173 図	遺構外出土石器2	267			
第174 図	石器の石質	268			
第175 図	フレイク分布、分析	277			
第176 図	石製品分布1	281			
第177 図	石製品分布2	282			
第178 図	44号土坑・出土遺物	284			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	7	第9表	砂粒・混和材の大きさによる 胎土分類	317
第2表	遺構名変更表	11	第10表	浜川目沢田I遺跡における 縄文土器胎土の変遷	318
第3表	出土土器の時期一覧	12	第11表	土器胎土観察表(1)	323
第4表	遺構内外出土遺物一覧	38	第12表	土器胎土観察表(2)	324
第5表	柱穴一覧	219	第13表	土器胎土観察表(3)	325
第6表	遺構外出土縄文土器一覧(時期別)	222	第14表	土器胎土観察表(4)	326
第7表	遺構外出土石器一覧(器種別)	258			
第8表	砂粒・混和材の種類による胎土分類	317			

I 発掘調査に至る経緯

浜川目沢田 I 遺跡は、「大沢地区漁業集落防災機能強化事業」に伴い、その事業地内に所在することから発掘調査を実施することとなったものである。

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災による津波と地震によって、山田・船越両湾に面した大沢・山田・織笠・船越の 4 地区は、甚大な被害を蒙った。この未曾有の災害から立ち上がるべく、山田町では平成 23 年 12 月に「山田町復興基本計画」を策定し、

- ①津波から命を守るまちづくり
- ②産業の早期復旧と再生・発展
- ③住民が主体となった地域づくり

を基本理念に、新しい町づくりを進めているところである。

大沢地区漁業集落防災機能強化事業は、被災した大沢地区の復興に資するため、町道、や避難所建設、土地造成を実施するものである。浜川目地区においては、個人住宅と水産加工業者用の工場地造成が計画されている。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成 25 年 6 月 10 日付復興第 16 号で山田町復興推進課から山田町教育委員会に対し 7 遺跡の試掘調査実施依頼があったことに端を発する。

試掘調査は、平成 24 年 9 月 4 日から 9 月 25 日まで岩手県教育委員会の応援を受けて実施し、浜川目沢田 I 遺跡において縄文時代の良好な遺物包含層と竪穴住居をはじめとする遺構を検出した。

この結果を受けて、岩手県教育委員会、山田町建設課及び水産商工課、教育委員会が協議を行い、平成 26 年 6 月 1 日付で公益財団法人岩手県埋蔵文化財センターと委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。(山田町)

II 遺跡周辺の地理的環境

1 遺跡の位置・調査前の現況について

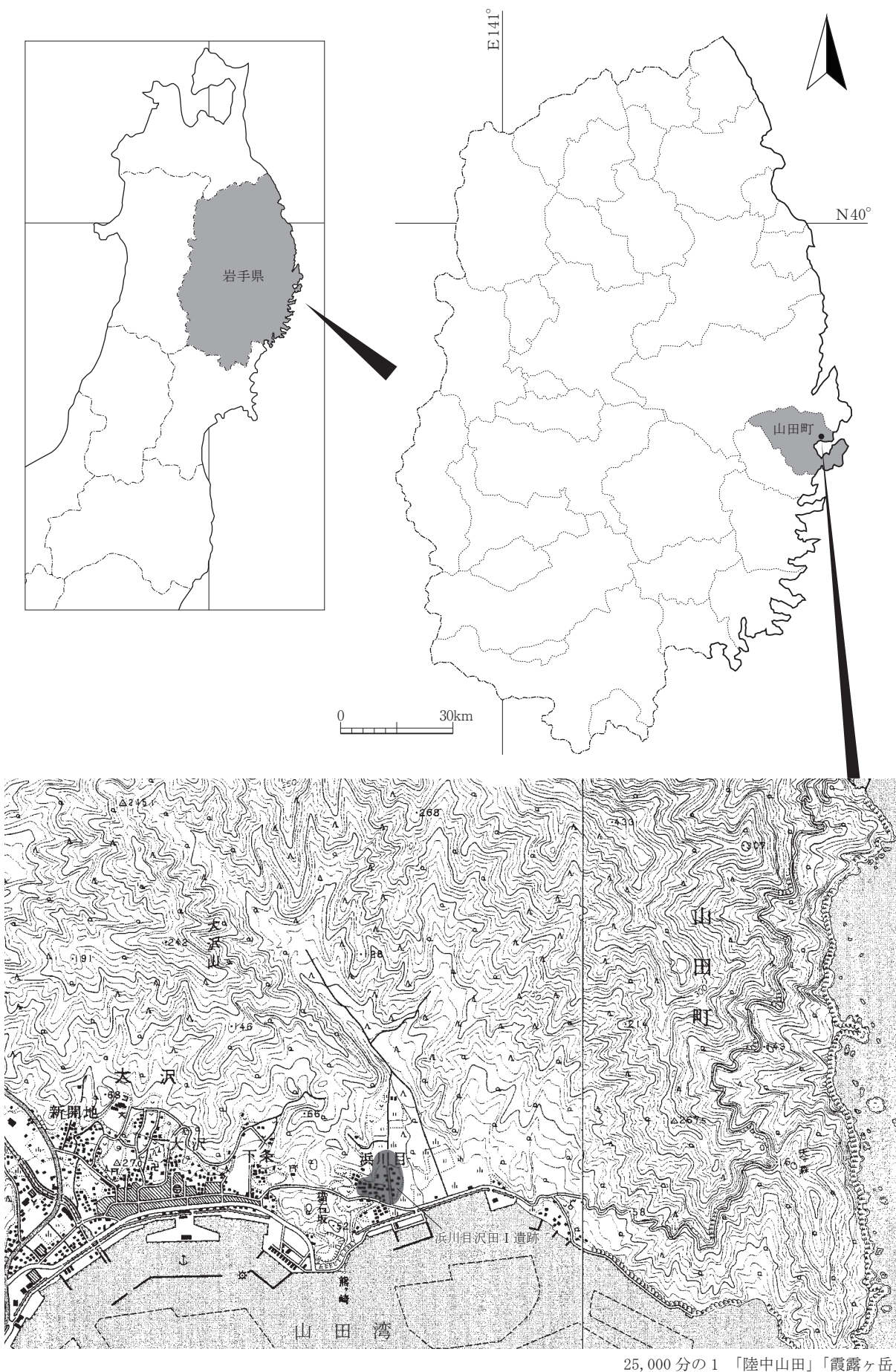
浜川目沢田 I 遺跡は下閉伊郡山田町大沢浜川目第 11 地割ほかに所在し、山田湾から北へ約 200m に位置する。座標では北緯 39 度 29 分 05 秒、東経 141 度 59 分 09 秒付近に相当し、国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図「大槌」の図幅に含まれる。

調査前の現況は荒地であったが、戦時中には日本海軍が建設した石油備蓄庫があった場所でもある。右写真は今回、撮影した空撮写真であるが、所々に半円の盛り上がりが見受けられ、これらが石油備蓄庫の名残ではないかと推察する。また戦後すぐに、大きな土地整備事業があったとの話があり、その際、本調査区を含めた広い範囲が大きく改変され、盛土されたようである。そのため本遺跡の、特に北側の大半は残存状況が良いとは言い難く、検出した遺構も大きく削平されていた。



上空からみた浜川目沢田 I 遺跡

1 遺跡の位置・調査の現況について



第1図 浜川目沢田I遺跡位置図

2 遺跡の立地

浜川目沢田 I 遺跡は、リアス式海岸である山田湾の北岸に位置する。

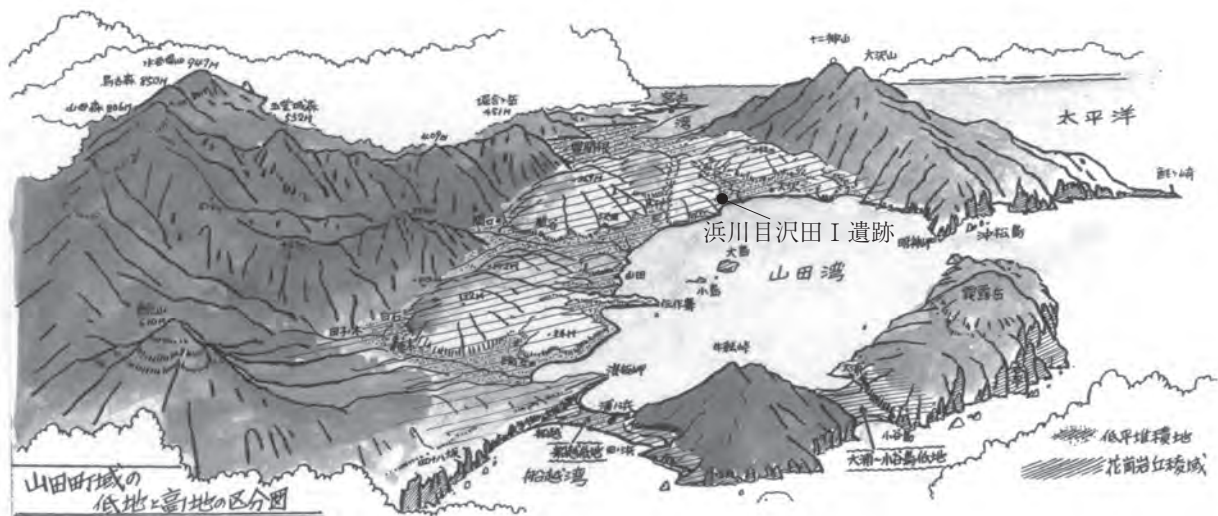
山田湾北岸は、太平洋側に十二神山(731 m)を頂点とする山地が、また内陸側には水呑場山(947 m)を頂点とする山地がそれぞれ宮古湾の方へと連なっている。またそれらの山々の裾野は100～200m前後の丘陵と隣接する、これらの丘陵は海に近づくにつれ低くなり、また小河川により侵食された低地(低平面)が広がっている。

本遺跡は、北から南へと流れる浜川目川によって形成した浜川目低地に立地する。海岸からは約200 mしか離れておらず、極めて海辺に近い遺跡と言える。本遺跡の西側は、狭小でやや低い丘陵地が隣接する。したがって本遺跡は、南側には海が広がり、西から北側は丘陵によって塞がれた、非常に狭い地形に立地する。

この立地環境は、縄文時代中期における遺跡のものとしては、やや特異といえるが、山田湾周辺にみられる縄文時代中期の遺跡では、類似する立地環境にある遺跡が幾つか見受けられる(沢田Ⅲ遺跡・間木戸Ⅰ遺跡など)。したがってこの立地環境は、山田町内周辺の地域では特有なものと言えるかもしれない。また縄文時代後晩期の遺跡は近年、低地でみつかることが多く、特異ではない。しかしそうであっても、本遺跡は標高が2～7 mと、上記の遺跡と比べても非常に低く、また海岸との距離も近い。

本遺跡の地形をみると、北(山側)から南(海側)へと、緩やかに傾斜する。

地質の面からみて、本遺跡は山田湾沿岸に広く見られる花崗岩域と十二神山周辺に見られる古生代層のちょうど境界に位置する。本遺跡の周辺では花崗岩や閃緑岩が多く採集できるが、その他にも様々な種類の石材が採集できた可能性があり、そのためか後述の通り、本遺跡の石器石材はバラエティに富んでいる。花崗岩研究会柳沢忠昭氏によると本遺跡周辺の海岸で、花崗岩や閃緑岩、凝灰岩が確認されている。一方で地元の方の話では海岸に灰白色の軽石(十和田系の軽石?)がよく浜に打ち上げられており、足ミガキ等によく用いたという。後述の通り、本遺構では軽石製石製品も多く、そのような石材も石器石材として用いられていた可能性が高い。



「すばらしい風土 山田の自然探訪Ⅱ」(小岩 1985) に加筆

第2図 山田湾周辺の地形と浜川目沢田 I 遺跡

Ⅲ 遺跡周辺の歴史的環境

1 山田町の遺跡

山田町教育委員会による遺跡分布調査の成果から、山田町内から517の遺跡が確認されている（山田町教委1999・2000・2002・2003）。それらは主に縄文時代（集落跡・散布地）、古代（集落跡・鉄生産関連）、中世城館跡の3つに大別できる。そしてそのなかで最も多い遺跡が古代の鉄生産関連遺跡である点の特筆すべきである。これは鉄生産に欠かせない砂鉄を採集するのに適した環境（花崗岩層に形成された山地が広がり、そこから沢を通じ、流れ出る砂鉄が海岸で多く採取できること）が広がる点の大きいと推察するが、この環境は一見すると、縄文時代の遺跡の立地には適さないものとも考えられる（山地と海岸との距離が近く、また分布する丘陵が比較的狭小である点など）。しかし山田町内で古代の鉄生産関連遺跡に次いで多いのは、縄文時代の遺跡であり、縄文時代の遺跡は山田町内全域でその分布が確認されている。

山田町内の内陸側と海岸側には前述の通り、南北方向に山地が広がり、その間には丘陵が広がる。またその丘陵の間を小河川が流れ、その浸食作用で低地（低平地）が形成されている。縄文時代の遺跡はこれらの丘陵、特に丘陵上に立地するものが多いが、近年、丘陵の裾や丘陵に隣接する低地においても、遺跡が見つかり始めている。例えば縄文時代中期末葉の大集落遺跡である石峠Ⅱ遺跡や、詳細な時期は定かではないが、縄文時代の陥し穴状遺構を300基以上検出した豊間根新田Ⅰ遺跡がこれに該当する。

町内の広い範囲を占めるのは山田湾岸や船越湾岸であるが、こちらは特に海岸から近い距離に山地がせり立っており、従来考えられているような集落の立地環境には適していないようにも見受けられる。しかし山地から海へと流れる河川の周辺に形成された低地や、低地から山地の裾部にかけて、大きな遺跡が分布、展開することがわかりはじめてきており、浜川目沢田Ⅰ遺跡もその1遺跡である。

次節では山田湾や船越湾周辺に分布する遺跡の様相を幾つかの遺跡から見ていき、本遺跡のあり方と比較する。

2 山田湾周辺の遺跡と浜川目沢田Ⅰ遺跡

浜川目沢田Ⅰ遺跡の立地する山田湾は、湾口幅2.7km、湾の奥行6kmを測る。東側のみが海に面したやや奥まった地形を呈し、また南側は大浦半島を挟んで同様な地形を呈する船越湾と隣接している。この2つの湾は本来、一つの湾であったとも聞く。

山田湾は、海岸から約0.5～1kmまで低地が広がり、そこから先は前述の通り、丘陵や山地が続く。この低地から丘陵、山地の縁辺部にかけて縄文時代の遺跡が分布しており、近年調査事例が増加したことで、その様相が明らかになりつつある。

山田湾周辺では早期末葉が最も古く、沢田Ⅰ遺跡（39）で竪穴住居跡2棟が見つかった。

前期に入ると、上記の沢田Ⅰ遺跡で前期前葉（大木2式期）の竪穴住居跡66棟が検出された。このうち6棟が大型住居であり、沢田Ⅰ遺跡は大型住居を中心とした大規模集落であることがうかがえる。前期前葉では他に大浦半島に位置する川半貝塚（100）でも前期前葉の大型住居2棟が見つかった。次の前期中葉では沢田Ⅰ遺跡で遺物が見受けられる程度で、遺構を検出した遺跡は見受けら

れないが、前期後葉に入ると、大浦半島に位置するクク井遺跡（89）で大型住居6棟が見つまっている。そして前期末葉になるといくつかの遺跡で遺物は確認されるが、ふたたび集落遺跡は姿を消す。

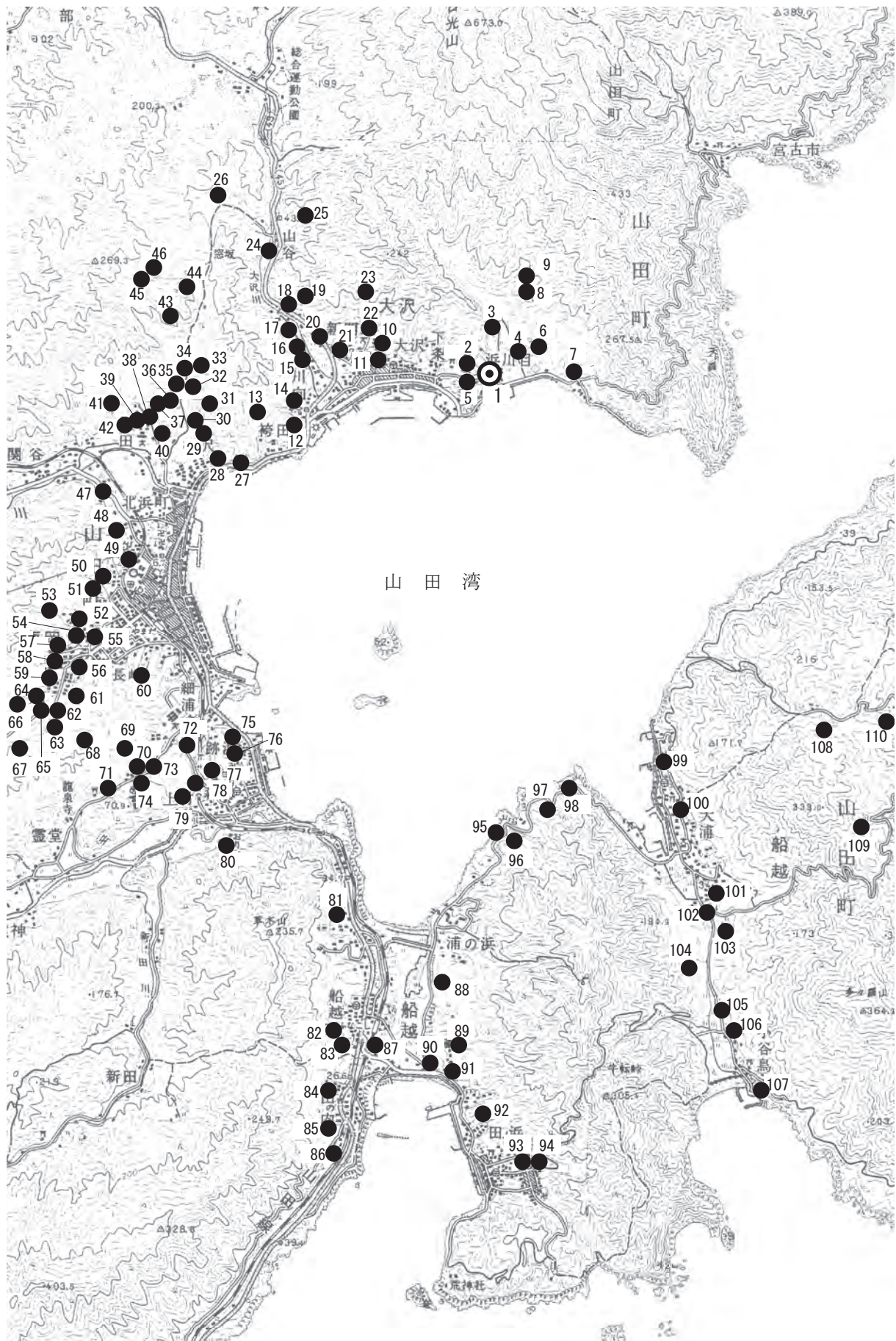
このように前期は、前葉で大規模な集落が出現するものの、続かず、その後小規模な集落が各地に点在する様相が見て取れる。

中期では、初頭に帰属する遺構は見受けられないが、中期前葉に入ると、間木戸Ⅱ遺跡（32）で大木8a式期の竪穴住居跡が見つまっている。そして中葉から末葉にかけては継続的で大規模な集落が幾つか出現する。特に山田湾から約800m内陸に入った沢田地区で多く、前述の沢田Ⅰ遺跡では中期後葉から末葉の竪穴住居跡が42棟、隣接する沢田Ⅲ遺跡では中期後葉から末葉の竪穴住居跡が50棟以上、また間木戸Ⅰ遺跡（35）に至っては、竪穴住居跡が数百棟以上検出された。これらの遺跡群は山田湾周辺のみならず、県内沿岸中央部においての拠点的な集落群ととらえることができそうである。また各遺跡からは竪穴住居跡以外にも、フラスコ状土坑なども多く見つかっており、沢田Ⅲ遺跡（37）ではその他に貝層5箇所が検出され、当時の生活の様相を垣間見ることができる。一方、大浦半島では前述のクク井遺跡や川半貝塚で中期中葉以降の竪穴住居跡が1～数棟ずつ見つかっており、半島内においても小規模な集落が展開している。

後期から晩期になると、遺跡自体が激減し、本遺跡以外では、大浦半島に位置する畠中遺跡（101）のみである。畠中遺跡では、後晩期の遺物包含層が見つかり、多量の遺物が出土している。

このように山田湾周辺にみられる縄文時代の遺跡は、前期前葉の段階ですでに大規模な集落が出現している。そしてその後断絶期を挟みながら、ふたたび中期中葉から末葉にかけて、拠点的な大規模集落がいくつも展開するようになり、その後また減少傾向に転じて縄文時代の終焉を迎える。

中期の大規模集落である、沢田Ⅲ遺跡や間木戸Ⅰ遺跡は、場所こそ違うが浜川目沢田Ⅰ遺跡と類似する地形に立地し、山田町での中期中葉以降の集落のあり方を示していると言える。しかし竪穴住居跡の棟数が全く違うので、沢田Ⅲ遺跡や間木戸Ⅰ遺跡と違い、浜川目沢田Ⅰ遺跡は該期における小規模な集落遺跡と言えよう。また後晩期については、これまで山田湾周辺では、遺構・遺物ともにほとんどみつかってこなかったのが、大きな断絶期ととらえられてきた。しかし後述する通り、本遺跡からは後期初頭から晩期後葉までの遺物がほぼ継続して出土しており、また遺構は後期中葉、晩期中葉の竪穴住居跡やフラスコ状土坑などが見つかっており、山田町地域において、後晩期も断絶せずに集落が営まれていたことが判明した。



1/50,000 「陸中山田」・「霞露ヶ岳」・
「宮古」・「鮭ヶ崎」を合成

第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	報告書
1	浜川目沢田Ⅰ	集落跡	本報告
2	浜川目沢田Ⅱ	集落跡	
3	浜川目沢田Ⅲ	集落跡	
4	浜川目沢田Ⅳ	散布地	
5	猫石坂	散布地	
6	多門	集落跡	
7	サイナイ沢	散布地	
8	赤石沢Ⅲ	散布地	
9	赤石沢Ⅱ	散布地	
10	紅山B	集落跡	
11	紅山A	散布地	
12	袴田Ⅰ	散布地	
13	袴田Ⅲ	散布地	
14	袴田Ⅱ	散布地	
15	川向Ⅰ	散布地	
16	川向Ⅱ	散布地	
17	川向Ⅲ	散布地	
18	新開地Ⅱ	散布地	
19	雲南沢	散布地	
20	新開地Ⅰ	散布地	
21	新開地	散布地	
22	大開	散布地	
23	寺ヶ沢	散布地	
24	山谷	散布地	
25	山谷Ⅷ	散布地	
26	山谷Ⅳ	散布地	
27	柳沢Ⅰ	散布地	
28	柳沢Ⅱ	散布地	
29	柳沢Ⅲ	散布地	
30	柳沢Ⅳ	散布地	
31	山の神Ⅰ	散布地	
32	間木戸Ⅱ	集落跡	
33	間木戸Ⅴ	集落跡	
34	間木戸Ⅳ	散布地	
35	間木戸Ⅰ	集落跡	
36	間木戸Ⅲ	散布地	
37	沢田Ⅲ	集落跡	
38	沢田Ⅱ	散布地	
39	沢田Ⅰ	集落跡	
40	沢田Ⅳ	散布地	
41	沢田Ⅵ	散布地	
42	房の沢Ⅳ	散布地	
43	天井間木戸Ⅸ	散布地	
44	天井間木戸Ⅰ	散布地	
45	天井間木戸Ⅴ	散布地	
46	天井間木戸Ⅲ	散布地	
47	関谷Ⅲ	散布地	
48	関谷Ⅳ	散布地	
49	関谷Ⅴ	散布地	
50	長崎Ⅰ	散布地	
51	長崎Ⅱ	散布地	
52	小沢Ⅰ	散布地	
53	小沢Ⅲ	散布地	
54	小沢Ⅳ	散布地	
55	小沢Ⅱ	散布地	

番号	遺跡名	種別	報告書
56	飯岡Ⅳ	散布地	
57	大畑Ⅱ	散布地	
58	大畑Ⅰ	散布地	
59	長野Ⅰ	散布地	
60	飯岡Ⅲ	散布地	
61	長野Ⅲ	散布地	
62	赤松Ⅶ	散布地	
63	赤松Ⅴ	散布地	
64	長野Ⅱ	散布地	
65	赤松Ⅱ	散布地	
66	赤松Ⅰ	散布地	
67	赤松Ⅵ	散布地	
68	細浦Ⅱ	散布地	
69	細浦Ⅰ	散布地	
70	細浦Ⅲ	散布地	
71	後山Ⅲ	散布地	
72	細浦Ⅳ	集落跡	山田町教委2002
73	後山Ⅰ	散布地	山田町教委2002
74	後山Ⅱ	散布地	
75	跡浜Ⅰ	散布地	
76	跡浜Ⅱ	散布地	
77	細浦Ⅴ	集落跡	
78	細浦Ⅵ	散布地	
79	上村	散布地	
80	草木	散布地	
81	長林	散布地	
82	湾台Ⅲ	散布地	岩文振186集
83	湾台Ⅱ	散布地	岩文振186集
84	山ノ内Ⅱ	集落跡	岩文振249集
85	山ノ内Ⅲ	集落跡	岩文振250集
86	滝の沢	散布地	
87	湾台Ⅰ	集落跡	
88	新道具塚	貝塚	
89	クク井	集落跡	岩文振667集
90	船越御所	散布地	
91	岩ヶ沢	集落跡	
92	早川	集落跡	
93	大洞貝塚	貝塚	
94	大洞Ⅰ	散布地	
95	白石浜	塩生産遺跡?	
96	白石沢	散布地	
97	糸巻沢	塩生産遺跡?	
98	大浦崎	貝塚	
99	極楽	散布地	
100	川半貝塚	貝塚・集落跡	岩文振668集
101	畠中	集落跡	
102	マダノキ沢	散布地	
103	マダノキ沢Ⅰ	散布地	
104	割畑沢Ⅱ	散布地	
105	割畑沢Ⅰ	集落跡	
106	杭の子	散布地	
107	小谷島	散布地	
108	バッコ坂	散布地	
109	滝裏沢	散布地	
110	漣磯Ⅰ	散布地	

※表の「種別」については、未調査の遺跡は山田町遺跡分布調査報告による記載を、また調査報告書が刊行している遺跡はその報告書の内容を基本とし、記載した。

IV 調査の経過と方法

1 野外調査について

本調査に先立ち、平成 25 年度に岩手県教育委員会により試掘調査が実施され、委託者との協議を経て調査区が設定されている。なお今回の調査区は、工事の掘削深度により、従来通りの発掘調査を行う「本調査範囲」と遺構および包含層の範囲確認のみの「確認調査範囲」とに分けて設定されている。「確認調査範囲」では、検出した遺構については、平面プランを写真撮影・実測し、サブトレンチで断面観察（写真撮影・実測）を行うにとどめている。

平成 26 年 6 月 2 日（月）より調査を開始した。調査員 1 名、野外作業員 3 名体制でスタートし、6 月 17 日以降、調査員 3 名、野外作業員 30 名体制に変更した。

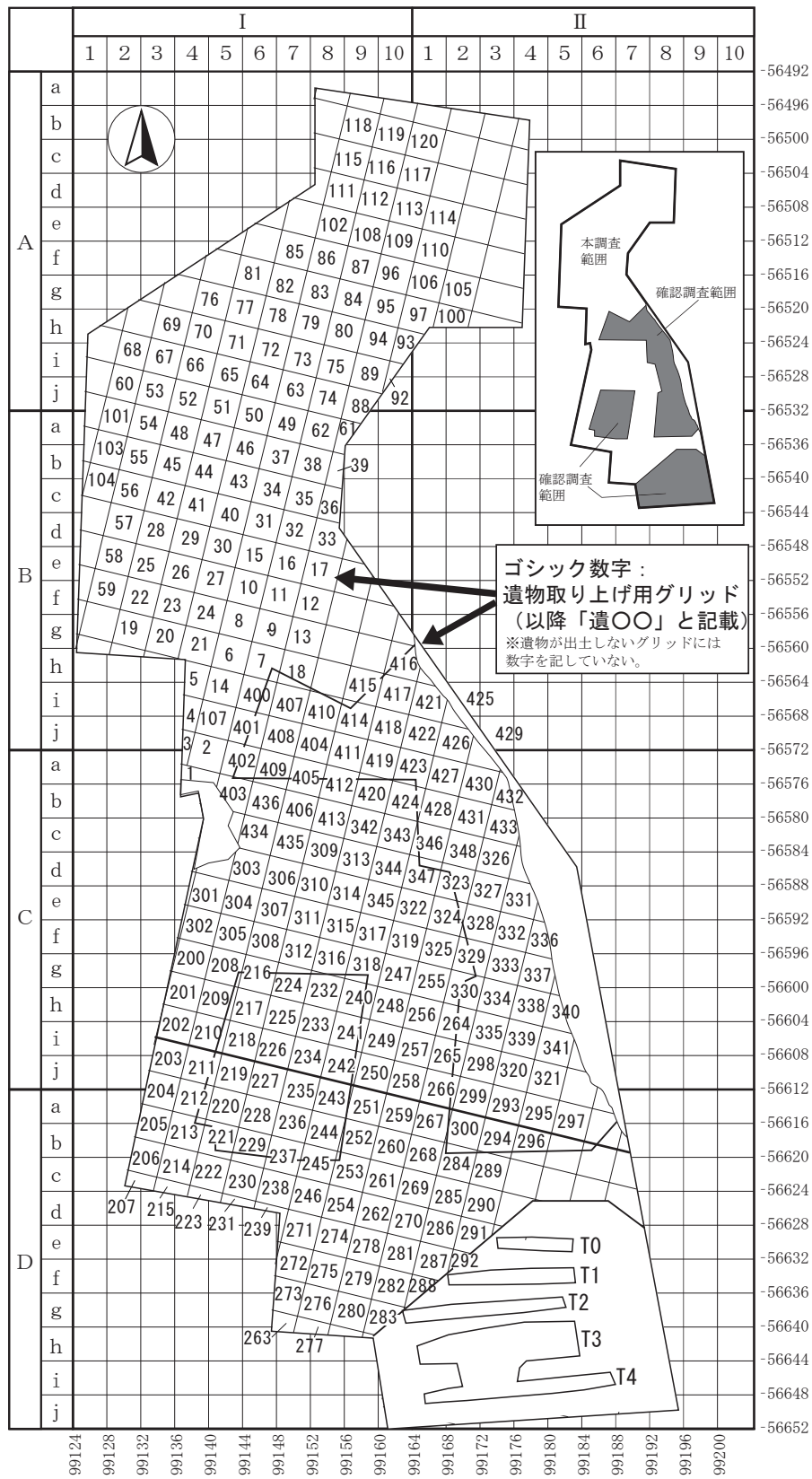
調査開始時はまだ、調査区の北側半分のみが着手可能であり、そちらから調査を進めた。調査区南側については、9 月に中央の一部と南端を除いた範囲が着手可能となったが、残りについては、委託者と地権者との話し合いや手続き等の関係で引き渡しが遅れ、着手できたのは 11 月中旬であった。また調査中、幾度か委託者から工事の設計変更があったとの報告を受けた。それにあわせて県教育委員会を交えた協議の場がもたれ、「本調査範囲」と「確認調査範囲」もその都度変更となった。当然、そのたびに調査の手順を変えていくことを余儀なくされたが、今回の調査は東日本大震災に関わる復興事業関連調査で、迅速性を求められる一面があり、柔軟な対応でのりきる必要があった。また着手の遅れた調査区南端については、着手後の試掘において、遺物包含層は認められるが、遺構は 20 号住居跡のみしか認められないので、この範囲については 5 m ピッチにトレンチ（第 4 図 T0～T4）を入れ、包含層も含めて内容を確認するに留めることとした。なお第 4 図には最終的な本調査範囲と確認調査範囲の位置を示している。

調査については、まず重機（バックホー 0.45m³、0.7m³、キャリアダンプ 6 t、ダンプトラック 4 t）を用いて表土除去を行い、その後、人力による遺構検出作業から行った。

調査区の北端を除きほぼ全域で、表土下から遺物が出土しており、広い範囲で遺物包含層を確認した。包含層中の遺物の取り上げについては、通常の X・Y 座標を基準としたものではなく、調査範囲の地形を基準として 4 m 四方のグリッドを任意で設定し、層位を確認しながら、遺物を取り上げた。グリッドにはそれぞれ、番号を付したが、上記の通り、調査区全域を同時に調査できたわけではないので、番号も調査に着手できた場所から付しているため、ややランダムになっている（第 4 図）。この方法を用いた理由としては、調査区が変則的な形状をしていることと、また調査区の北側半分と南側半分とで約 5 m の比高差があり、この地形を生かしたグリッドを設定し、遺物の出土傾向をうまく算出することを目論んだためである。なお調査区全体については、通常通りの X・Y 座標を基準としたグリッドも設定しており、遺構等の位置についてはそちらを用いている。

検出した遺構は、規模や性格により、適宜に 4 分法と 2 分法を選択し、精査を行った。各遺構については平面と断面、また必要に応じ遺物出土状況の実測、写真撮影を行った。遺構図の実測には、調査期間の短縮を考慮に入れ、デジタルカメラ（OLYMPUS ToughTG - 3）を用いた写真解析測量を活用した（撮影は調査員が行い、解析作業および図化作業を（株）リッケイに委託した）。また調査区の地形測量などには CUBIC 社製遺構実測ソフト「遺構くん」と光波トランシットを用いている。

写真撮影は主に、デジタルカメラ 1 台（Canon EOS 6D）と 35mm カメラ 1 台（モノクローム）を



0 1 : 800 20m

第4図 調査区について

2 室内整理について

使用し、同アングルのデジタル写真・銀塩写真両方を撮影している。また9月24日（水）にラジコンヘリ機を用いて、上空から遺跡全景の写真撮影を行った（株式会社 リッケイに委託）。

平成26年10月18日（土）町民、地元住民を対象とした現地説明会を開催。約150名が来訪した。

平成26年12月5日（金）に委託者、県教育委員会、山田町教育委員会立ち会いの下、終了確認を受けた。以降、残務を片付けつつ、12月17日（水）に調査を終了し、撤収した。

2 室内整理について

平成26年11月1日から平成29年3月31日の2年5ヶ月間の室内整理作業を行った。作業内容は以下の通りである。

平成26年11月1日～平成27年3月31日

調査員：遺構図面の整理、遺構図版の作成、原稿執筆

室内作業員：遺物の水洗、土器の注記

平成27年4月1日～平成28年3月31日

調査員：石器の分類・計測、掲載遺物の選定、原稿執筆

（調査員は平成27年11月1日～平成28年3月31日のみ）

室内作業員：土器の注記、土器の接合・復元

平成28年4月1日～平成29年3月31日

調査員：遺物実測図点検、遺物観察表作成、遺物図版作成、原稿執筆

室内作業員：土器の復元、遺物実測、実測図トレース、遺物図版作成、台帳作成、収納

なお、遺物の写真撮影は、当センターの写場において写真技師が撮影を行った。撮影にはデジタルカメラ（Canon EOS 6D）を用いている。

遺構図面の整理は、（株）リッケイに業務委託しており、野外調査時に作成した図面（「遺構くん」による平面図データと手作業により作成した断面図）から、調査員の指示のもと、第2原図作成および遺構図版作成を行った。

また複雑な形態や文様をもつ縄文土器700点については、従来の実測図ではなく、（株）ラングに委託し、PEAKIT図を作成した。これに当センターで実測、トレースした断面図を合成し、本報告書に掲載している。

遺構・遺物図版の作成には、原寸・2倍台紙・3倍台紙を用いた版下図を作成する他、Adobe社「IllustratorCS6」を使用し、デジタルにて図版を作成したものもある。

なお本報告書作成にあたり、各遺構名を野外調査時から変更した。本報告書に記された遺構名を優先する。遺構名の変更については第2表の通りである。

第2表 遺構名変更表

旧遺構名	新遺構名
SI10	1号住居跡
SI05	2号住居跡
SI06	3号住居跡
SI14	4号住居跡
SI15	5号住居跡
SI17	6号住居跡
SI18	7号住居跡
SI19	8号住居跡
SI20	9号住居跡
SI23	10号住居跡
SI01	11号住居跡
SI02	12号住居跡
SI03	13号住居跡
SI03 貼床	14号住居跡
SI04	15号住居跡
SI09	16号住居跡
SI07	17号住居跡
SI10 上炉	18号住居跡
SI14 炉	19号住居跡
SI11	20号住居跡
SI21	21号住居跡
SI22	22号住居跡
SI16	23号住居跡
SI24	24号住居跡
SI12	1号性格不明遺構
SI13	

旧遺構名	新遺構名
SK09	1号土坑
SK04	2号土坑
SK03	3号土坑
SK07	4号土坑
SK01	5号土坑
SK06	6号土坑
SK08	7号土坑
SK36	8号土坑
SK33	9号土坑
SK02	10号土坑
SK24	11号土坑
SK12	12号土坑
SK32	13号土坑
SK13	14号土坑
SK38	15号土坑
SK46	16号土坑
SK31	17号土坑
SK28	18号土坑
SK29	19号土坑
SK30	20号土坑
SK39	21号土坑
SK21	22号土坑
SK19	23号土坑
SK20	24号土坑
SK15	25号土坑

旧遺構名	新遺構名
SK18	26号土坑
SK27	27号土坑
SK17	28号土坑
SK37	29号土坑
SK34	30号土坑
SK35	31号土坑
SK14	32号土坑
SK45	33号土坑
SK44	34号土坑
SK16	35号土坑
SK26	36号土坑
SK41	37号土坑
SK25	38号土坑
SK43	39号土坑
SK42	40号土坑
SK23	41号土坑
SK22	42号土坑
SK10	43号土坑
SK11	44号土坑

V 出土遺物の分類

1 縄文土器

浜川目沢田 I 遺跡からは大コンテナ 436 箱分の縄文土器が出土している。出土土器の時期は前期、中期、後期、晩期である。前期の出土は断続的で前期初頭～前葉は一定量の出土が見受けられたものの、それに次ぐ大木 2a 式は小片のみ、それ以降の前期の土器は、円筒下層 d 式（前期末葉）がわずかに出土するのみで、他は確認できなかった。中期以降では、中期初頭から晩期中葉に至るまで、ほぼ継続して土器が出土している。また他に点数は少ないが、中期前葉に比定される円筒上層 b 式、c 式も確認した。

第 3 表 出土土器の時期一覧

前期	尖底土器斜行縄文（前期初頭～前葉） 非結束羽状縄文 大木 2a 式・大木 2b 式
	大木 7a 式古段階 大木 7a 式新段階 大木 7b 式 大木 8a 式古段階 大木 8a 式新段階 大木 8b 式古段階 大木 8b 式新段階 大木 9 式古段階 大木 9 式新段階 大木 10 式古段階 大木 10 式中段階 大木 10 式新段階
後期	初頭～前葉前半（門前式平行） 前葉（十腰内遺跡第 I 群平行） 中葉前半（十腰内遺跡第 II・III 群平行） 中葉後半（十腰内遺跡第 IV 群平行） 後葉（十腰内遺跡第 V 群・瘤付土器平行）
	大洞 B 式 大洞 B C 式 大洞 C 1 式 大洞 C 2 式
晩期	

後述するが、出土した縄文土器の多くは遺構外から出土している。この遺構外出土については包含層自体が層位的にはあまり良好ではない。したがって、出土土器の時期や土器型式については、出土層位よりも形態や文様の特徴を優先し判断している。その際、『縄文土器大観』や『総覧 縄文土器』、または相原 1990、阿部 2008、岩埋文 2012 などを参考とし、第 3 表に示した細分時期・土器型式に分類するように努めた。なお本遺跡が所在する岩手県沿岸地域では、時期や土器型式によっては、これまで出土事例が少なく、その内容がよく分かっていないものも多い。したがって、上記の文献を参考にしつつも、本遺跡から出土した土器を観察し、その特徴から各時期・各土器型式を次頁に示したように定義し、分類することとした。そして次章以降や、また第 2 分冊観察表に記した時期や土器型式もこれに準拠している。

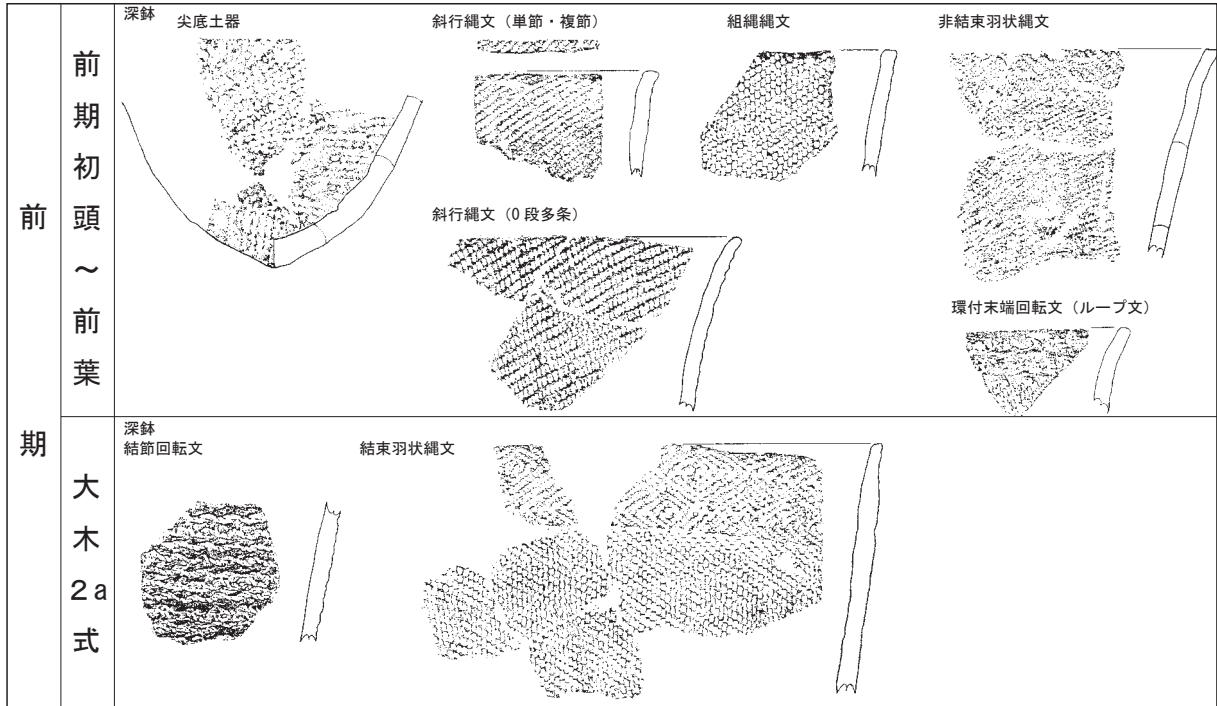
前期

前期初頭～前葉（大木 1 式含む）（第 5 図上）

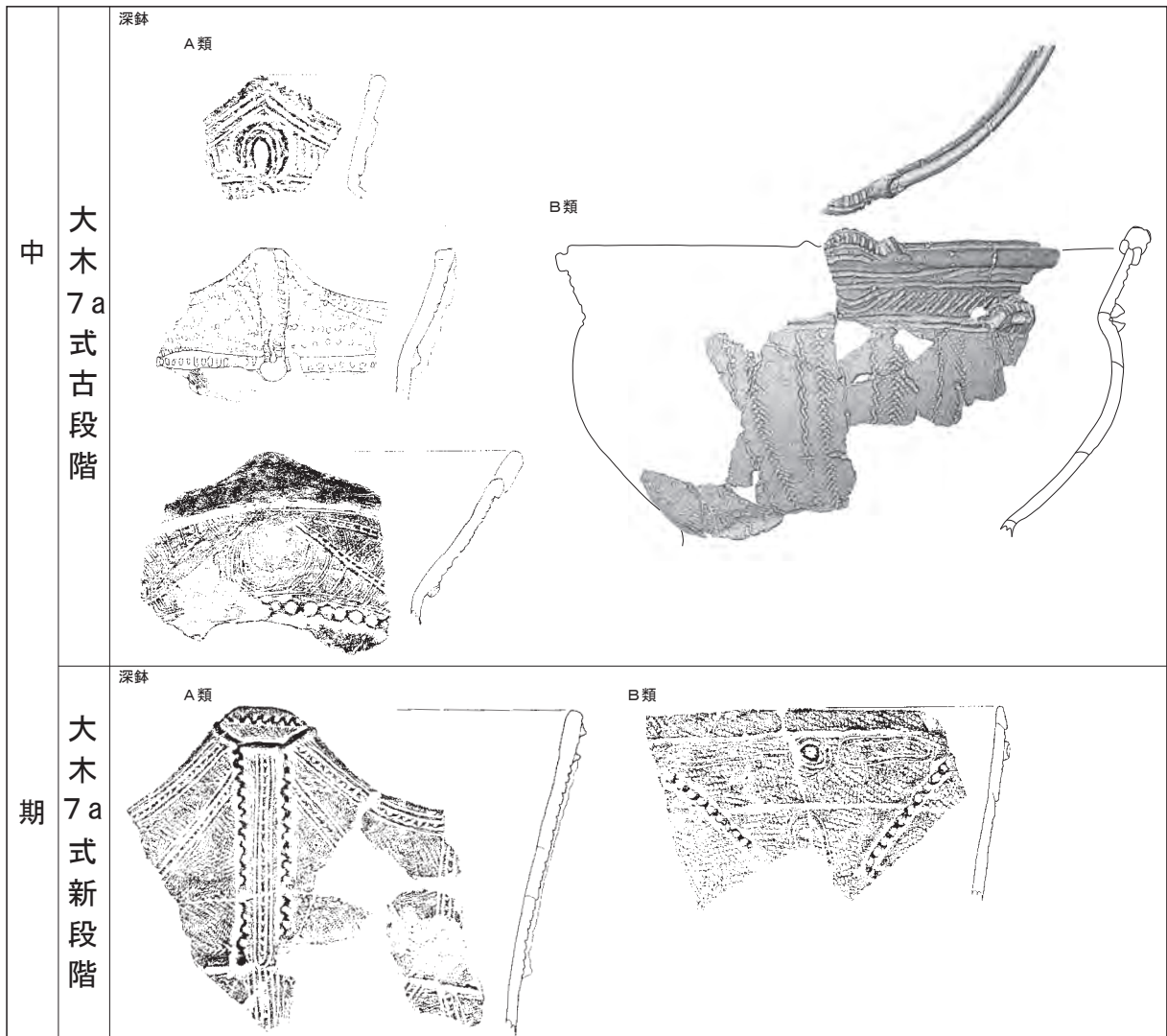
土器型式や内容について、明確に分かっていない時期の土器である。胎土に繊維を多量に含み、下記の文様を施文する土器群で、後述する大木 2a 式の特徴から外れたものを一括した。確認した器種は深鉢のみ。ただし全て破片である。

[形態] 尖底で口縁部が内湾するもの（尖底土器）とほぼ直立で口縁部がわずかに外反するものの 2 種がある。

[文様] 文様帯の区別が明確ではなく、口縁部から胴部に斜行縄文（単節縄文主体、0 段多条も少なくない）、非結束羽状縄文、組縄縄文（ぴっちり縄文）が施文される。また 1 片のみであるが、口縁部に環付末端回転文（ループ文）を施文するものもあり、大木 1 式の特徴と考える（本稿では点数が少ないので前期初頭～前葉に含めた）。



縮尺 1/4



縮尺 1/5

第5図 縄文土器の分類1

大木2a式（第5図上）

胎土に繊維を多量に含み、下記の文様を施文する土器。確認した器種は深鉢のみ。ただし全て破片である。

[形態] 胴部が外へと開き、口縁部がわずかに外反する。

[文様] 口縁部文様帯に横位の結節回転文が巡り、胴部文様帯に斜行縄文が施文されるものと文様帯の区分があいまいで、口縁部から胴部まで、主に横位の結束羽状縄文が施文されるものの2種がある。

円筒下層d式

確認できたのは全て深鉢の口縁部片である。数は少ない。胎土にはわずかに繊維が混入する。

[形態] 胴部がほぼ直立で、口縁部がわずかに開くか外反する。

[文様] 文様帯は細い隆帯や沈線で口縁部文様帯と胴部文様帯とに区分され、口縁部には多段化した横位の縄文原体押圧文、胴部には斜行縄文や結束羽状縄文が施文される。

中期

大木7a式古段階（第5図中央）

確認した器種は深鉢のみ。ただし全て破片である。

[形態] 長胴形のもの（A類）と球胴形のもの（B類）とがある。胴部はA類がほぼ直立で、B類は大きく膨らむが、口縁部形態はどちらも外へと大きく開くかわずかに内湾する。

[文様] 頸部隆帯や沈線を巡らせ、口縁部文様帯と胴部文様帯とを区分する。口縁部文様帯には4単位の突起（隆帯を変形したもの）が付くことが多く、沈線による渦巻状、弧状、波状などを充填する。胴部は地文のみ施文される。地文は斜行縄文が多いが、縦位の結節付き斜行縄文も少なくない。

大木7a式新段階（第5図下）

確認した器種は深鉢のみ。ただし全て破片である。

[形態] 胴部から口縁部に外へとまっすぐ広がるもの（A類）とわずかに内湾するもの（B類）がある。

[文様] 頸部に浅い段を有し、口縁部文様帯と胴部文様帯とを区画するが、地文（斜行縄文、結束羽状縄文）は両文様帯を跨いで施文される。文様は押圧文を加えた隆帯や蛇行する隆帯、平行沈線により描かれ、主に口縁部文様帯に集中する。また口縁部の文様が胴部文様帯にまでのびるものもある。他に沈線による楕円形文や突起状のボタン状文が付されるものが見受けられる。

大木7b式（第6図上）

形態が大木7a式新段階とほぼ同形態で、文様の主体が縄文原体押圧文となるものを大木7b式として一括した。本遺跡からは深鉢と浅鉢とを確認した。

[形態] 深鉢は口縁部が外へと緩やかに開くもの（A類）と、大きく外反するもの（B類）の2種があり、胴部はどちらもわずかに膨らむがほぼ直立である。また口唇部形態は波状口縁と平縁、両方が見受けられる。

浅鉢は外へと大きく開き、口唇部形態は4単位の波状口縁である。

[文様] 深鉢、浅鉢ともに、隆帯や縄文原体押圧文で口縁部文様帯と胴部文様帯とが区画されるが、地文（斜行縄文）は両文様帯の区別なく跨いで施文される。口縁部文様帯に縄文原体押圧文や両脇に縄文原体押圧文を施した隆帯による文様が施文される。なお深鉢には、口縁部の縄文原体押圧文が胴部にまでのびるものが少なくない。浅鉢では胴部は地文である斜行縄文のみが多い。

円筒上層b式・c式

幅広の貼付隆帯に縄文原体押圧文や刺突文を施すものを円筒上層b式、また円筒上層c式とした。

出土した土器は全て深鉢の口縁部片で、円筒上層 b 式か c 式のどちらか不明瞭なものもある。

[形態] 確認できたのは口縁部形態のみであるが、大きく外反するものと内湾するものがある。

[文様] 縄文原体押圧文、刺突文を施した貼付隆帯で波状や鋸歯状を描いている。貼付隆帯の間に縄文原体を馬蹄形に押圧したものを充填するものは円筒上層 b 式、刺突文を充填したものを円筒上層 c 式とした。

大木 8a 式古段階 (第 6 図上)

大木 7a 式とは異なる形態を有し、口縁部を中心に縄文原体押圧文で文様が描かれるものを大木 8a 式古段階とした。本遺跡からは深鉢と浅鉢とを確認した。

[形態] 深鉢はキャリパー形 (A 類) と長胴形 (B 類) の 2 種があり、どちらも胴部は緩やかに膨らむ。また口唇部形態は平縁が主体で、1 単位の突起が付くものがある。

浅鉢は胴部が外へと大きく開き、口縁部で内側に屈曲する。口唇部形態は平縁が多い。

[文様] 深鉢、浅鉢ともに、頸部に主に隆帯を巡らせ口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する。

深鉢は口縁部と胴部とで、異なる地文 (斜行縄文の場合、原体の種類や回転方向が異なる) を施文する。口縁部文様帯には地文の上に縄文原体押圧文で文様を描き、浅い隆帯が付くこともある。胴部は地文のみである。

浅鉢は口縁部を隆帯で 4 単位の区画する。区画頂部に突起が付くものが多い。区画内には横位の縄文原体押圧文が数条施文される。胴部は地文のみ、あるいは口縁部から垂下する隆帯や縄文原体押圧文で文様を描くものがある。

大木 8a 式新段階 (第 6 図中央)

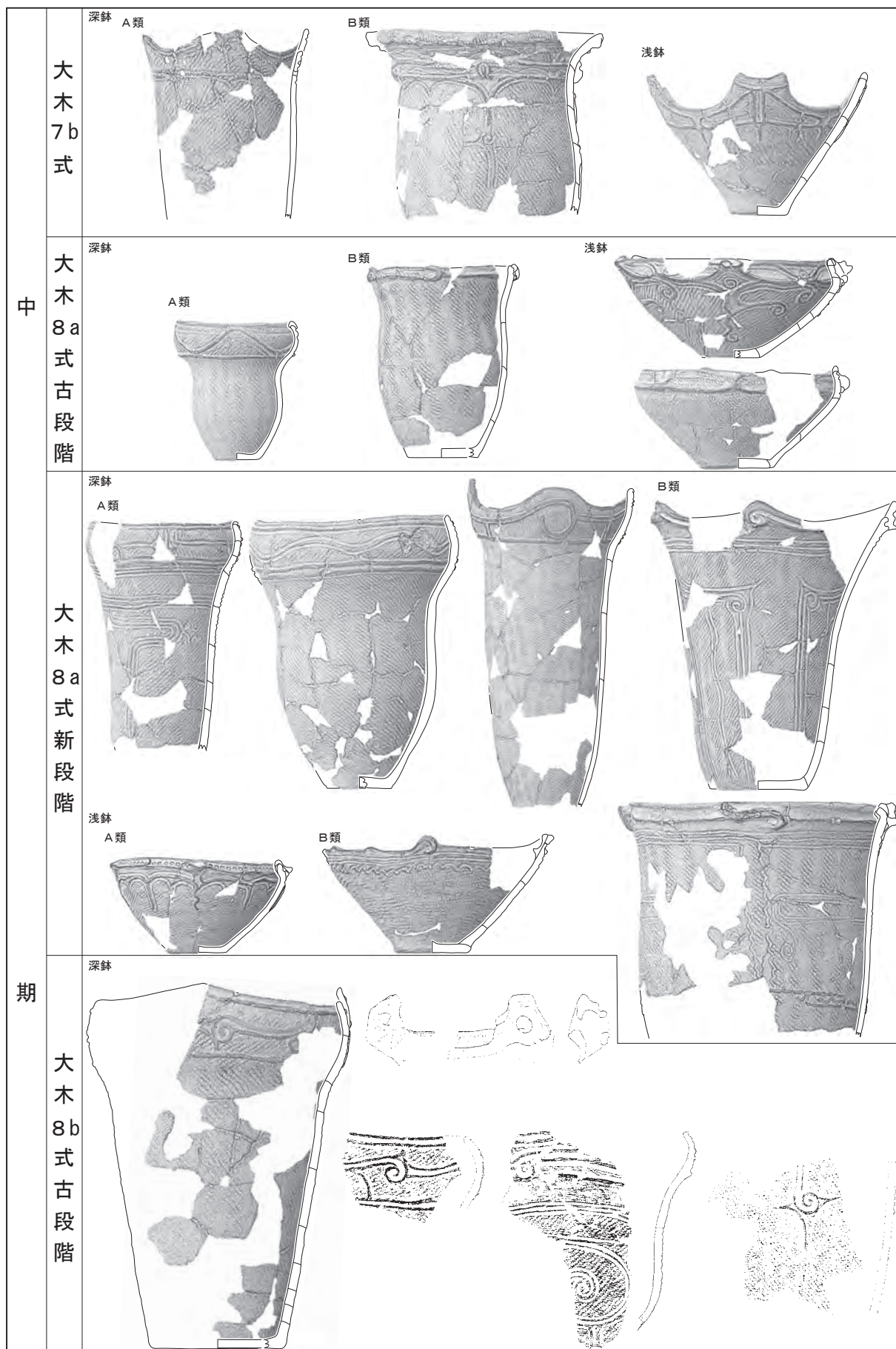
大木 8a 式古段階と類似した形態を有し、隆帯や沈線で下記に示した文様を描くものを大木 8a 式新段階とした。本遺跡では深鉢と浅鉢とを確認した。

[形態] 深鉢はキャリパー形 (A 類) と長胴形 (B 類) の 2 種がある。ただし B 類は口縁部が外反するものと内湾するものがあり、また胴部も膨らむものや直立気味のものなどやや多様である。口唇部形態は、A 類が平縁主体で、B 類は平縁と波状口縁の両方が見受けられる。

浅鉢は口縁部が内湾あるいは内側に屈曲するもの (A 類) と外へと大きく開くもの (B 類) がある。口唇部形態はどちらも平縁主体である。

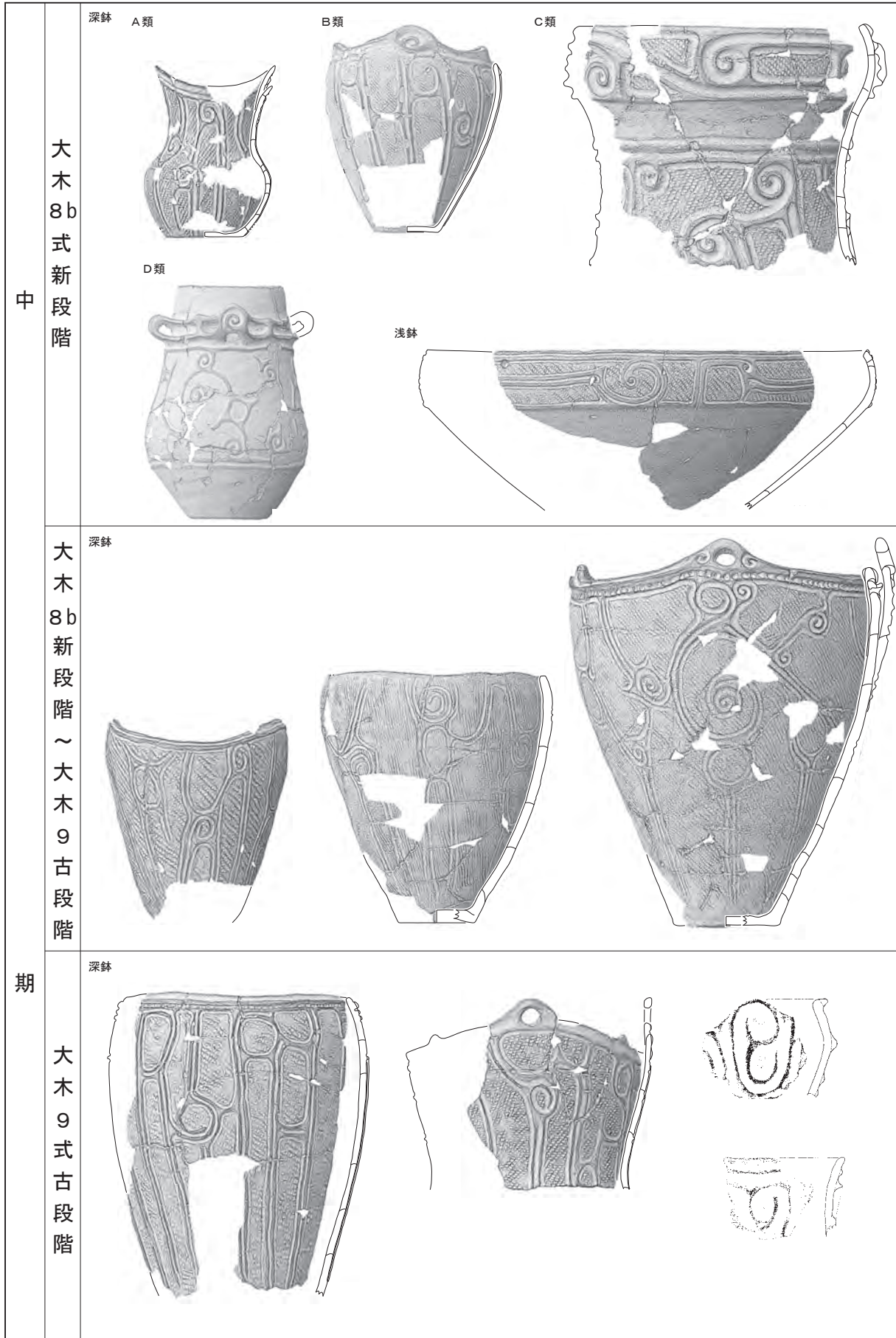
[文様] 深鉢、浅鉢ともに、隆帯あるいは沈線で口縁部文様帯と胴部文様帯が区画される。また深鉢には頸部文様帯を有するものも見受けられる (ほとんどが無文か地文のみ)。深鉢 A 類は口縁部と胴部とで、異なる地文 (斜行縄文の場合、原体の種類や回転方向が異なる) を施文する。その上で、口縁部文様帯には隆帯や沈線 (隆沈線) で横位の波状文、クランク状文、楕円形状文、緩い渦巻き文が描かれる。また口縁部文様帯の上下端に隆帯や沈線を巡らせるものが多い。胴部は地文のみが主体で、数は少ないが沈線で文様を描くものがある。深鉢 B 類は、幅狭な口縁部文様帯に、沈線を加えた隆帯や、沈線で渦巻き文を描く隆帯を横位に巡らせるもの、また横 S 字状の突起が付くものがある。胴部は地文 (斜行縄文) を施文後、1～3 条の沈線により弧状文、波状文、渦巻き文などの文様が描かれる。また数は少ないが沈線の代わりに隆帯で文様を描くものも見受けられる。

浅鉢は口縁部文様帯を縦位の隆帯で 4 単位の区画し、区画内には刺突文や縦位 (斜位) の短沈線を充填させるものや、横位の沈線を巡らせるもののみが見受けられる。胴部は地文に、隆沈線で文様を描くものが主体であるが、地文のみ、または無文も見受けられる。



縮尺 1/6

第6図 縄文土器の分類2



縮尺 1/6

第7図 縄文土器の分類3

大木8b式古段階（第6図下）

所謂「大木8b-1式」（高橋1982、盛岡市教委2004）の範疇と考えるもので、主に口縁部文様帯に隆帯（隆沈線）による渦巻き文と有棘文が組み合わされる文様を有する土器を、大木8b式古段階とした。本遺跡からは深鉢のみ確認した。

[形態]本遺構ではキャリパー形のみ確認した。胴部形態は直立気味のもの膨らむものに2分できる。口唇部形態は平縁が主体である。

[文様]隆帯で口縁部文様帯と胴部文様帯とを区画する。数は少ないが、地文のみか無文の頸部文様帯を有するものもある。口縁部と胴部とで、異なる地文（斜行縄文の場合、原体の種類や回転方向が異なる）を施文するものが多い。口縁部文様帯には地文の上に、隆帯による渦巻き文が横位に描かれ、この渦巻き文の先端に隆帯による有棘文が付属する。また口縁部から口唇部にかけて、中空の大型突起が1単位で付されるものがある。胴部は地文のみと地文の上に2～3条の平行沈線で渦巻き文や有棘文、また直線、曲線文が描かれるものの2種がある。

大木8b式新段階（第7図上）

所謂「大木8b-2式」と一部「大木8b-3式」（高橋1982、盛岡市教委2004）の範疇と考えるもので、口縁部から胴部にかけて隆沈線による渦巻き文が複数描かれる土器を一括して大木8b式新段階とした。本遺跡では深鉢と浅鉢を確認した。

[形態]深鉢は、胴部が大きく括れ、口縁部は大きく開くもの（A類）、胴部が丸く膨らみ、口縁部は内湾するもの（B類）、キャリパー形（C類）、樽形（D類）の4種がある。口唇部形態はA類が2単位の波状口縁主体、他は平縁主体である。

浅鉢は胴部が外へとひらき、口縁部で内湾する。口唇部形態は平縁主体である。

[文様]深鉢、浅鉢ともに、隆帯により、口縁部文様帯と胴部文様帯を区分する。深鉢C類には無文ないしは地文のみの頸部文様帯を有するものもある。また深鉢はC類を除き、口縁部文様が非常に幅狭になるのが特徴である。深鉢A、B類は口縁部が無文となり、胴部には地文（単節、複節の斜行縄文）の上、隆沈線による大小複数の渦巻き文が描かれる。また渦巻き文は短い隆帯や縦位に垂下する直線的な隆帯と連結する。深鉢C類は口縁部文様帯、胴部文様帯それぞれに隆沈線による渦巻き文が描かれるが、口縁部は横位に、胴部は縦位に巡るものが多い。深鉢D類は口縁部が無文、口縁部下に把手が付き、胴部には微隆帯により渦巻き文が描かれる。

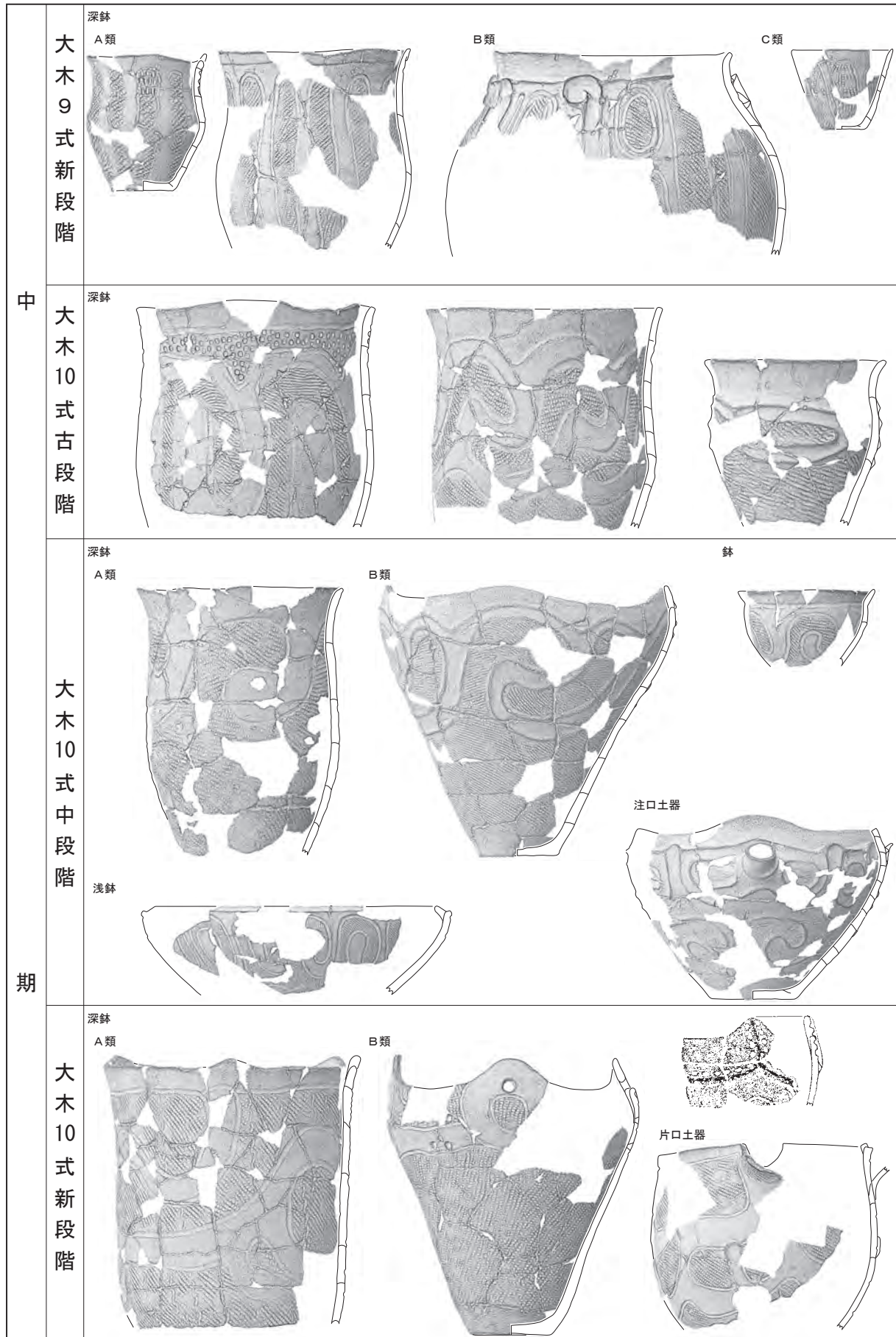
浅鉢は口縁部に地文の上、隆帯（隆沈線）による渦巻き文が施文される。ほかに短沈線が施文されるものがある。胴部は地文のみか無文である。

大木8b新段階～9式古段階（第7図中央）

形態は大木8b式段階の深鉢B類に類似し、文様は大木8b式新段階と大木9式、両者の特徴を有する土器を一括した。文様からみて「最花式」にも類似するが、本遺跡周辺で最花式の出土事例はほとんどなく、また厳密には、文様等が異なっており、したがって最花式とは区別し、本稿では便宜的「大木8b式新段階～大木9式古段階」とした。確認できたのは深鉢のみである。

[形態]胴部が膨らみ口縁部で内湾する。大木8b式新段階の深鉢B類に類似し、口唇部形態は2単位の波状口縁と平縁が見受けられる。

[文様]口縁部文様帯を有するものは幅狭で、横位に沈線が巡るのみである。器面全体に地文（斜行縄文、縦位の単軸絡条体第1類）を施文後、沈線による円文、楕円形文または緩い渦巻き文を複数描き、またそれを直線的な沈線で連結する。渦巻き文は大木8b式の特徴であるが、その他の沈線文は大木9式の区画文にも類似する。ただし磨消技法は見受けられない。



縮尺 1/6

第8図 縄文土器の分類4

大木9式古段階（第7図下）

阿部2008を参考とし、隆帯（隆沈線）による区画文を配する土器を大木9式古段階とした。なお大木8b式新段階の特徴である隆帯による渦巻き文が残る土器も見受けられるが、区画文が施文される土器は大木9式の範疇とした。本遺跡からは深鉢のみ確認した。

[形態] 胴部が膨らみ、口縁部で内湾する。数は少ないが口縁部が外反するものもある。口唇部形態は平縁や2単位の波状口縁が見受けられる。

[文様] 口縁部文様帯は幅が狭く横位に沈線や連続刺突文が巡る。胴部は文様帯に胴部上半から胴部下半にかけ、主に隆帯による縦長の方形あるいは楕円形の区画が描かれ、区画内には斜行縄文（単節、複節）が磨消技法で施文される。また隆帯による渦巻き文が複数、区画の間に描かれるものがある。

大木9式新段階（第8図上）

阿部2008を参考とし、沈線による縦位の区画が器面全体に巡る土器を大木9式新段階とした。本遺跡からは深鉢のみ確認した。

[形態] 胴部が膨らみ口縁部で外反するもの（A類）、胴部が球状に膨らむもの（B類）、逆台形状のもの（C類）の3種が見受けられる。口唇部形態は平縁が主体である。

[文様] 文様帯の区別が明確ではなく、口唇部直下は無文、口縁部から胴部にかけて、沈線により長楕円形あるいは逆U字状の区画が縦位に並ぶ。区画内には斜行縄文（単節、複節）が磨消技法で施文される。また隆帯による渦巻き文が付されるものもある。

大木10式古段階（第8図上）

阿部2008、岩埋文2012を参考とし、細い曲線状区画が巡る土器を大木10式古段階とした。本遺跡からは深鉢のみ確認した。

[形態] 胴部がわずかに膨らみ、口縁部で外反する。口唇部形態は平縁である。

[文様] 口縁部は無文、あるいは円形の刺突文が巡る。胴部上半には沈線による横S字状などの曲線状区画が横位に施文され、区画内には斜行縄文が充填技法で施文される。また胴部下半は沈線による緩やかな波状文が横位に巡り、その下は地文のみが施文される。

大木10式中段階（第8図中央）

阿部2008、岩埋文2012を参考とし、古段階の曲線状区画がややいびつになり、また胴部下半分の地文と区画が連結する土器を大木10式中段階とした。本遺跡からは深鉢、浅鉢、鉢、注口土器を確認した。

[形態] 深鉢は大木10式古段階と同じもの（A類）と、胴部が大きく外へと開き、口縁部で内湾するもの（B類）の2種がある。浅鉢は胴部が大きく開き、口縁部が屈曲する。鉢は胴部が膨らみ、口縁部で外へと屈曲する。注口土器は深鉢B類の口縁部に注口部が付く。

[文様] いずれの器種も口縁部は無文である。深鉢、浅鉢、鉢は、胴部上半にやや幅広の曲線状区画が描かれ、胴部下半の地文と連結する。区画内には斜行縄文が充填技法で施文される。注口土器は胴部上半から下半にかけて微隆帯による曲線状区画が描かれる。

大木10式新段階（第8図下）

阿部2008、岩埋文2012を参考とし、区画内が無文となる土器を大木10式新段階とした。本遺跡からは深鉢、片口土器を確認した。

[形態] 深鉢はほぼ直立のもの（A類）と、胴部が大きく膨らみ口縁部で内湾するもの（B類）の2種がある。口唇部形態は平縁と波状口縁が見受けられる。片口土器は胴部が丸く膨らみ、口縁部は直立する形態で口唇部に片口が付く。

[文様] 深鉢、片口土器どちらも、口縁部は無文が多い。数は少ないが刺突文を伴う隆帯が付されるものや中空の把手（突起）がつくものもある。胴部は斜行縄文を地文とし、区画内は無文にした曲線状区画が描かれる。また区画脇には鱗状突起が1～複数個付くことがある。また区画に沈線ではなく、微隆帯が用いられるものがある。

後期

後期初頭～前葉前半（第9図上）

「門前式」の範疇と考えられる一群であるが、本遺跡では出土量が少なく、内容は不明なため、下記の特徴をもつ土器を一括した。本遺跡では深鉢のみ確認した。

[形態] 長胴形で口縁部が外反するもの（A類）と胴部上半が膨らみ、口縁部が内湾するもの（B類）の2種がある。口唇部形態は緩やかな波状口縁が多い。

[文様] 口縁部は無文が多い。また1単位の把手が付くものもある。胴部は連続する円形刺突文を加えた隆帯が口縁部から胴部にかけて、曲線状区画とともに施文される、あるいは頸部に巡る。

後期前葉後半（第9図中央）

所謂「十腰内式第I群」（今井・磯崎 1968）の特徴をもつ、帯縄文で文様を描く土器を一括した。本遺跡からは深鉢、台付鉢、壺を確認した。

[形態] 深鉢は胴部が緩やかにひろがり、口縁部は外へと屈曲する。台付鉢は口縁部から胴部は逆台形状を呈し、末広がり細身の台部が付く。壺は胴部が丸く膨らみ、口縁部ですぼまる。

[文様] 深鉢と壺は口縁部から胴部上半にかけ、2～3条の平行沈線で文様を描き、沈線内には縄文を充填する、所謂「帯縄文」が施文される。帯縄文で描かれる文様は渦巻き状、矩形、蛇行状、斜行状など多彩である。胴部下半は斜行縄文のみ施文される。高台付鉢も同様に、高台部分にも帯縄文で文様が描かれている。

後期中葉前半（第9図下）

所謂「十腰内式第II・III群」（今井・磯崎 1968）の特徴をもつ、連続する沈線文や磨消縄文を伴う大きな区画文が描かれる土器を一括した。本遺跡からは深鉢、鉢、浅鉢、注口土器を確認した。

[形態] 深鉢は、大きく外へと開く5単位の波状口縁で、胴部下半が括れるもの（A類）、逆台形状に外へと広がるもの（B類）の2種がある。鉢は逆台形状を呈する。浅鉢は外へと大きく開く。注口土器は胴部が球状に膨らみ、頸部が括れ、口縁部は外反、あるいは内湾しながら立ち上がる形で、注口部は胴部の最大径に付く。

[文様] 深鉢A類、鉢、浅鉢は、胴部に斜行縄文を施文した上に、沈線による連続する曲線文や連続弧状文を描くものがあり、また深鉢A類、B類には胴部に沈線によるクランク状区画が描かれ、区画内に磨消縄文を施文するものがある。

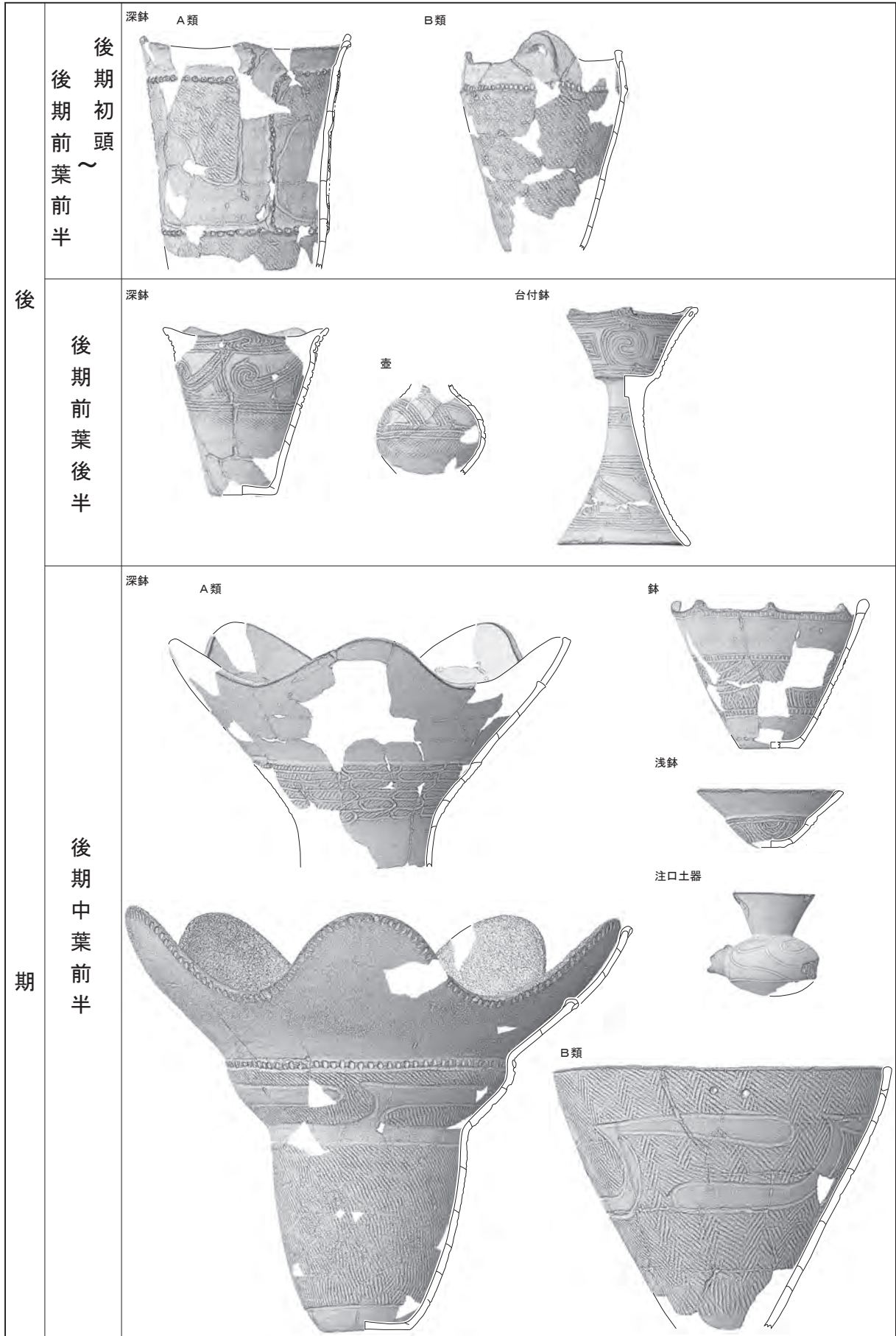
注口土器は、口縁部は無文あるいは刻みを加えた沈線が巡る。胴部には浮き彫り状に文様を描き、沈線による区画と区画内に磨消縄文が施文される。

後期中葉後半（第10図上）

所謂「十腰内式第IV群」（今井・磯崎 1968）の特徴をもつ土器を一括した。形態や文様の在り方は後期中葉前半と類似するが、異方向羽状縄文を多用するのが特徴である。本遺跡からは深鉢、鉢、壺、単孔土器、蓋形土器を確認した。

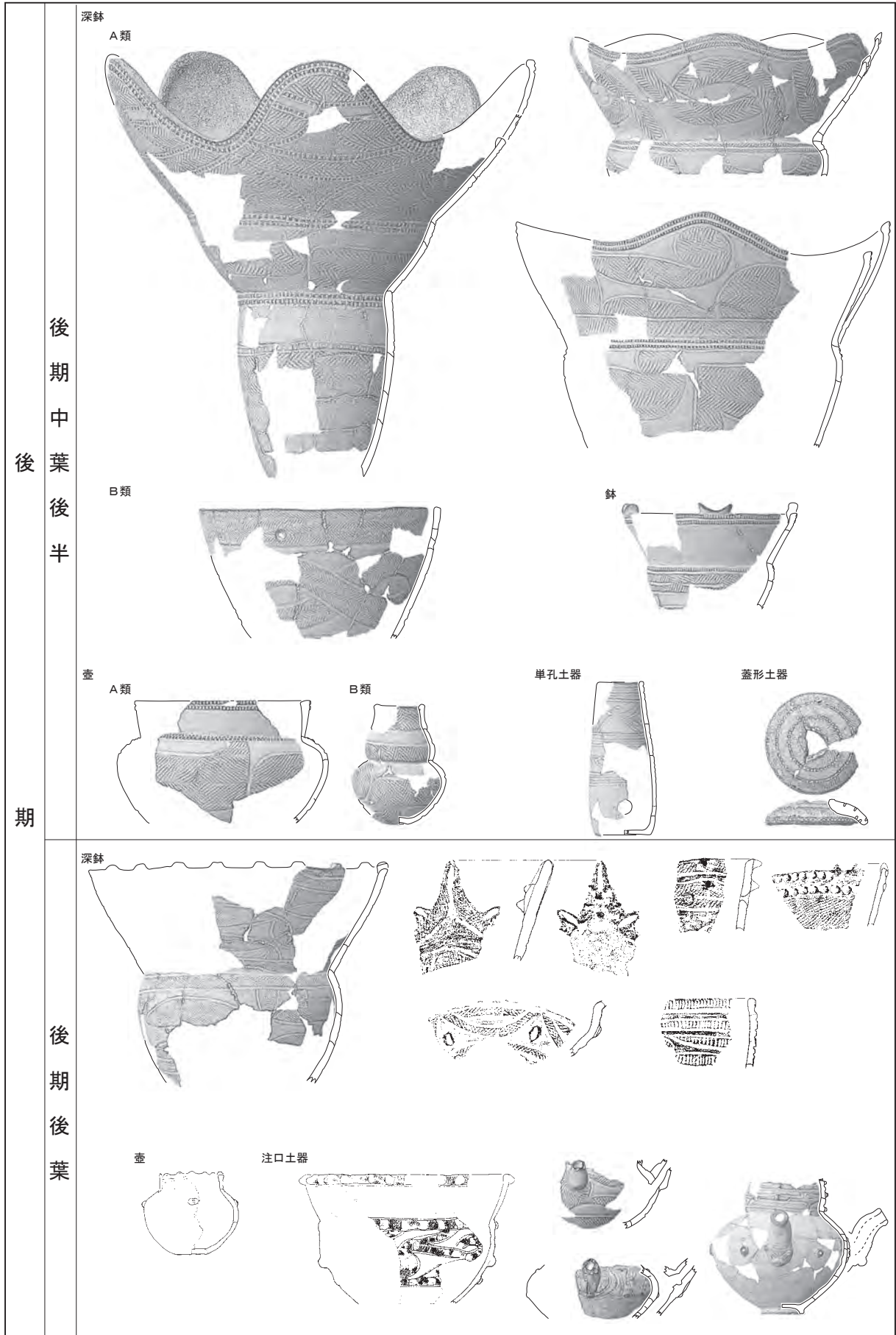
[形態] 深鉢は大きく外へと開く5単位の波状口縁で、胴部下半が括れるもの（A類）、胴部から緩やかに内湾しながら立ち上がるもの（B類）の2種がある。

鉢は頸部が括れ、口縁部は直線的に外へと開くもの（A類）と胴部下半が丸く膨らみ、胴部上半か



縮尺 1/6

第9図 縄文土器の分類5



縮尺 1/6 (破片は 1/5)

第 10 図 縄文土器の分類 6

ら口縁部は直立気味のもの（B類）の2種がある。

壺は胴部が球状に丸みをもち、口縁部はわずかに外傾するが直立する。単孔土器は細長い筒状を呈する。

蓋形土器は円形である。

[文様] 深鉢、鉢、壺ともに、口唇部直下には連続する刻みが巡り、口縁部から胴部には沈線による区画、またクランク状文や入組文が描かれ、文様内には異方向羽状縄文が充填技法で施文される。

単孔土器は口縁部から胴部上半に複数条の沈線が横位に巡る、あるいは矩形の文様を描いている。

後期後葉（第10図下）

所謂「十腰内式第V群」（今井・磯崎 1968）、また「十腰内式第VI群」の古手（関根 2005）の特徴をもつ、文様に貼瘤を多用する、あるいは入組帯状文が描かれる土器を一括した。本遺跡では深鉢、壺、注口土器を確認した。ただし出土量は少なく、ほとんどが破片である。

[形態] 深鉢は胴部が丸く膨らみ口縁部は大きく外へ開く。

鉢は胴部が丸く膨らみ、口縁部はわずかに内湾するが直立する。

注口土器は壺と同じ形態で、注口部は胴部中位に付く。

[文様] 深鉢は口縁から胴部に沈線による入組文や襷掛文、弧状文が横位に巡り、文様内には異方向羽状縄文を充填される。また口縁部から胴部上半にかけ貼瘤が付され、ほかに口縁部に連続する貼瘤巡るものや貼瘤ではなく連続する刻みが充填されるものがある。

壺、注口土器は口縁部に沈線が横位に巡り、胴部は無文で貼瘤が付く。

晩期

大洞B式（第11図上）

三叉文、入組三叉文が施文される土器を一括した。本遺跡からは深鉢、鉢、台付鉢を確認した。

[形態] 深鉢、鉢ともに同じであり、胴部がわずかに膨らみ、口縁部が内湾する。

台付鉢は浅い台形状の台部が付く。口唇部形態は平縁と緩い連続波状口縁がある。

[文様] 深鉢、鉢ともに、口縁部を沈線で区画し、沈線による三叉文、入組三叉文が横位に描かれる。鉢には胴部にも三叉文や入組三叉文が描かれるものがあるが、地文（斜行縄文）のみが多い。

大洞BC式（第11図中央）

羊歯状文、沈線と連続刻み、また沈線によるK字状文が施文される土器を大洞BC式とした。三叉文や入組三叉文が描かれるものでも、上記の文様を伴う土器は該期に含めている。本遺跡では深鉢、鉢、台付鉢、浅鉢、台付浅鉢、壺、注口土器、香炉形土器を確認した。

[形態] 深鉢と鉢は同形態で、胴部が膨らみ口縁部で内湾する。ただし深鉢には口唇部直下がやや外へと屈曲するものがある。

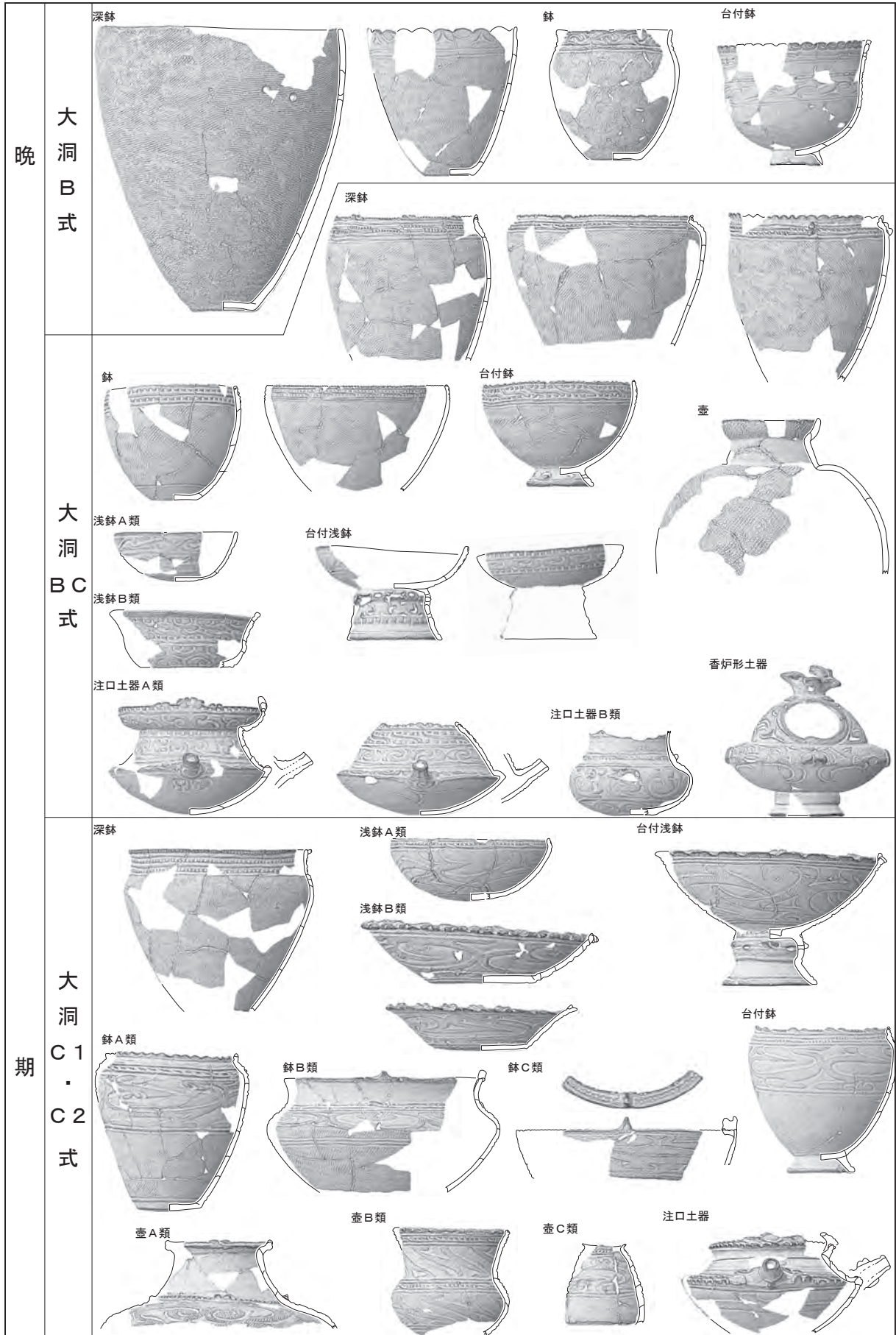
浅鉢は底面が丸底で膨らみながら立ち上がるもの（A類）と、平底で胴部がわずかに括れ、口縁部で外反するもの（B類）の2種がある。台付鉢、台付浅鉢は上記の鉢、浅鉢に中空の台部が付く。

注口土器は底部が丸底で胴部中位が強く屈曲する算盤玉状のもの（A類）と胴部が丸く膨らみ口縁部が直立するもの（B類）の2種があり、A類が主体。またA類は口縁部が大きく膨らむものも少なくない。A・B類ともに注口部は胴部中位に付く。

壺は胴部が丸く膨らみ頸部がほぼ直立、また口縁部で膨らみながら立ち上がる。

香炉形土器は脚台と算盤玉状の胴部に碗形の円窓部が付く。

[文様] 深鉢と鉢はほぼ同様で、口唇部には刻みが巡る、あるいは緩やかな連続波状を呈する。また



縮尺 1/6

第 11 図 縄文土器の分類 7

B突起が付くものもある。口縁部には羊歯状文、または沈線間に連続刺突文を充填する平行沈線文を巡らす。胴部は地文（斜行縄文）のみである。

台付鉢も同様な文様であるが、台部は沈線と刺突文、沈線によるK字状文を施文し、また貫通孔や透かし彫りが施される。

浅鉢は口縁部から胴部にかけて羊歯状文や沈線によるK字状が描かれ、文様は底面にまで及ぶものもある。台付浅鉢も同様な文様であり、台部の文様は、台付鉢の台部と同様である。

壺は口縁部と胴部に斜行縄文が施文され、頸部は無文となるもの、胴部上半に斜行縄文を施文し、沈線による入組文が施文されるものがある。

香炉形土器は天窓部から胴部にかけて沈線による入組文や装飾突起が施文され、また透かし彫りが施される。天井の頂部に突起が付くものもある。

大洞C1・C2式（第11図下）

雲形文が施文される土器を一括した。羊歯状文など大洞BC式の特徴となる文様が描かれても、雲形文が施文される土器は該期とした。また口唇部形態から大洞C1式と大洞C2式とに区分した。ただし本遺跡ではほとんどが大洞C1式に比定され、大洞C2式と判断できた土器は少ない。深鉢、鉢、台付鉢、浅鉢、台付浅鉢、壺、注口土器を確認した。

[形態] 深鉢は胴部上半が膨らみ、頸部が括れ、口縁部は外反する。

鉢は胴部が膨らみ、上半に最大径をもつ、頸部が括れ口縁部はほぼ直立するもの（A類）、胴部が円盤状に張り、頸部で屈曲、口縁部は外反するもの（B類）、緩やかに広がりながら直線的に立ち上がり、口唇部で内側に大きく屈曲するもの（C類）の3種があり、鉢A類は大洞C1式、鉢B、C類は大洞C2式に比定される。

台付鉢は主に鉢A類に台部が付くものである。

浅鉢は丸底で内湾しながら立ち上がるもの（A類）、平底で内湾気味に立ち上がるもの（B類）と平底で外反しながら立ち上がる形（C類）がある。台付浅鉢は浅鉢A類に台部が付くものである。

壺は胴部が大きく膨らみ、口縁部から頸部がすぼまるもの（A類）と、胴部が丸く膨らみ、口径の大きい口縁部が緩やかに外へと開くもの（B類）、筒形（C類）がある。

注口土器は胴部が算盤玉状に中位で大きく屈曲し、また口縁部は外へと括れる。注口部は胴部中位に付く。

[文様] 深鉢は口唇部に押圧文や刻みを巡らせた連続波状を呈する。口縁部は無文、あるいは複数条の沈線が横位に巡る。沈線間に刻みや押圧文が充填されるものもある。胴部は地文（斜行縄文）のみである。

鉢A類は口唇部が連続波状を呈し、口縁部は無文、胴部上半に雲形文が描かれる。鉢B類も同様な文様で、口唇部に山形の突起、または縦位のB突起が付く。鉢C類は屈曲する口唇部に沈線や連続刻みが巡り、山形突起が付く。胴部上半に雲形文が描かれる。

台付鉢は鉢A類と同様な文様で台部は無文である。浅鉢は口縁部に平行沈線および刻みが巡り、胴部に雲形文が施文される。

浅鉢B類、C類は口唇部に装飾突起が巡り、連続波状を呈するものが多い。台付浅鉢も同様な文様で、台部には貫通孔や透かし彫りが施されるものがある。

壺A類、C類は胴部に、壺B類は口縁部と胴部にそれぞれ雲形文が描かれる。また胴部を中心に平行沈線と連続刺突文が横位に巡るものが多い。

注口土器は口唇部に沈線と刻みで連続波状を呈する。屈曲する胴部中位には横位の突起が連続し、胴部上半と下半で別々の雲形文が施文される。

2 石器・石製品

本遺跡からは大コンテナ約 133 箱分の石器・石製品が出土している。石器の器種は石鏃・楔形石器・尖頭器・石錐・石匙・不定形石器・ユーズドフレイク・リタッチドフレイク・異形石器・磨製石斧・礫器・敲磨器類・多面体敲石・特殊磨石・石皿・台石・石核・フレイク・チップである。石製品は石棒・石剣、装飾品、軽石製石製品、円盤形石製品、その他の石製品が出土している。

石器の分類については鈴木 1991 を、また石製品の分類については日本考古学協会 2016 を参考にし、点数が多いものは形態の特徴から、さらに細分した。以下、各器種の特徴と細分類の内容について記す。

石鏃（第 12 図上）

扁平で、二次加工により鋭角な先端部が作り出され、長さ 5 cm 以下のものを石鏃とした。出土した石鏃は形態から以下のように 8 分類した。

また形態や剥離の状態から製作途中と判断できるものがあり、石鏃失敗品とした。

I 類：丸基無茎鏃

II 類：凹基無茎鏃

III 類：平基無茎鏃

IV 類：平基有茎鏃

V 類：凸基有茎鏃

VI 類：凸基有茎鏃（菱形）

VII 類：尖基鏃

VIII 類：摘まみを有する石鏃

楔形石器（第 12 図右上）

形態は方形基調で、上下方向、もしくは上下左右方向に打撃による階段状剥離（第 12 図▲）が連続するもの。階段状剥離の方向から 2 分類した。

I 類：上下方向のみ。

II 類：上下左右方向にみられるもの。

尖頭器（第 12 図左中央）

二次加工により両端を鋭利に作り出した長さ 10cm 大のものを尖頭器とした。出土点数が少ないので細分していない。

石錐（第 12 図右中央）

二次加工により錐状の端部が作出されるものを石錐とした。形態から以下のように 5 分類した。

I 類：棒状を呈するもの。

II 類：摘み部を有し、錐部が長いもの。

III 類：摘み部を有し、錐部が短いもの。

IV 類：錐部は作出されているが、形態が不明瞭なもの。

V 類：フレイク的一端に短い錐部を作出したのみのもの。

石匙（第 12 図下）

突出した摘み部を作出し、また二次加工により幅広の刃部が作出されたものを石匙とした。刃部の向きで 4 分類した。

2 石器、石製品

- I類：刃部が縦方向に付くもの。
- II類：刃部が横方向に付くもの。
- III類：刃部が斜方向に付くもの。
- IV類：刃部の縦横方向の長さがほぼ同じもの。

不定形石器（第12図左下）

定形化した形状をもたず、扁平で縁辺部の半分以上に刃部作出と考えられる二次加工を施しているものを不定形石器として一括した。刃部角度や刃部の形状から3分類した。

- I類：刃部の角度が60°未満のもの。所謂、「削器」を含む。
- II類：刃部の角度が60°以上のもの。所謂、「搔器」を含む。
- III類：刃部作出の二次加工が、粗いものまたは不連続であるもの。

ユーズドフレイク（以降、Uフレイクと表記。第13図左上）

フレイクの中で、縁辺に微細剥離が連続するものや二次加工が縁辺の一部にしか連続しないものを、不定形石器や後述するフレイクとも区別し、Uフレイクとして一括した。細分はしていないが、第2分冊観察表には、素材となるフレイクの分類（後述）を記した。

リタッチドフレイク（以下、Rフレイクと表記。第13図右上）

フレイクの中で、最終剥離面において刃部作出とは考えられない二次加工が施されているものを、後述するフレイクとは区別し、Rフレイクとして一括した。細分はしていないが、第2分冊観察表には、素材となるフレイクの分類（後述）を記した。

異形石器（第12図右下）

特定の形状を呈さない、あるいは特定の位置に刃部などを作出しないが、意図的に何らかの形態を意図し、作出された剥片石器を異形石器とした。本遺跡からは幾つかの形態が見受けられた。細分はしていないが、本文に記した形態的な特徴については久保（2014）を参照した。

磨製石斧（第13図左中央）

平面形が撥形、長方形を呈し、剥離や敲打によって整形された後、研磨を施して仕上げられた石斧を磨製石斧とした。本遺跡から出土した磨製石斧は欠損品も多く、形態全体からは分類項目を決められないので、残存部を考慮し、刃部と基部とでそれぞれ分類項目を設定した。

- 基部 I類：尖るもの。
- II類：平坦のもの。
- III類：丸いもの。
- 刃部 a類：丸く整形されるもの
- b類：平坦に整形されるもの。

礫器（第13図右中央）

礫または大形の剥片を素材とし、周辺の一部に大きな剥離を連続的に加え、刃部としたものを礫器として一括した。形態と刃部の加工で4細分した

- I a類：礫を素材とし、片面のみ二次加工を施し、刃部を作出する。
- I b類：礫を素材とし、両面から二次加工を施し、刃部を作出する。
- II a類：大型の剥片（フレイク）を素材とし、片面のみ二次加工を施し、刃部を作出する。
- II b類：大型の剥片（フレイク）を素材とし、両面から二次加工を施し、刃部を作出する。

敲磨器類（第13図右下）

大きさは長軸あるいは長径が10cm以下で、使用痕（磨痕、敲打痕、凹痕）が確認できた礫石器。所謂「磨石」、「凹石」、「敲石」であるが、本遺跡からは、複数種の使用痕が確認できるものが多く、また形態や大きさが一様ではない。したがって上記3種の器種に分類できないものが多く、これらを敲磨器類として一括した。使用痕の種類や組み合わせで7分類した（第13図参照）。

特殊磨石（第13図左下）

扁平な楕円形の礫を素材とし、その一辺を剥離し（打撃を加え）た上で、磨った痕跡が見受けられる礫石器を特殊磨石とした。形態に一定の規格性がみられるので、敲磨器類とは区分した。

多面体敲石（第13図左下）

チャート、頁岩など硬質な石材を素材とし、全面に敲打痕、あるいは敲打により発生した剥離痕がみられる球状の礫石器を多面体敲石とした。使用痕の在り方は敲磨器類Ⅱ類と類似するが、形態に一定の規格性がみられるので、敲磨器類とは区分した。

石皿（第14図上）

扁平な大型の礫石器で、長軸、短軸ともに10cm以上。正裏面で磨痕、凹痕などの使用痕跡が確認できたものを石皿とした。形態から2分類した。

I類：扁平な自然礫を素材とし、縁辺を加工せずに使用するもの。

Ⅱ類：方形に整形し、また端部を縁状に残す、または整形により脚が付くなど加工を施したもの。

なお、破片の中に使用痕とは異なる擦痕や研溝が見受けられるものがあり、石皿の欠損品を砥石に二次利用しているものと推測するが、形態の特徴から、石皿に含めている。

台石（第14図左中央）

大型の礫石器で、長軸、短軸ともに、あるいは長軸が10cm以上のもの。石皿よりも厚みがあり、扁平ではないのが特徴で、主に片面に敲打痕や磨痕などの使用痕跡が確認できる。形態から2分類した。特にⅡ類は事例が少ないが、本遺跡では多く見受けられる。

I類：球状や厚みのある楕円形を呈するもの。

Ⅱ類：棒状、または角柱状を呈するもの。

砥石（第14図右中央）

形態は一定ではないが、表面に研磨痕と推定される細かい線状の削痕や細い溝状の削痕（研溝）が見受けられるものを砥石とした。前述の通り、石皿の欠損品を二次利用しているものもある。細分はしていないが、重みがあり、大きさも5cm大以上を有するものは置いて使用したもの（置き砥石）と考え、また大きさ5cm未満で片手に収まる程度のもは手でもって使用したもの（手持ち砥石）ではないかと推測する。

石核（第14図左下）

剥片剥離作業で、フレイク（剥片）を剥がし、残った原石。また定型的な石器ではなく、かつフレイクとするには厚みがあるものも石核とした。

剥離作業の方向など、いくつか種類があるが、今回出土したものでは細分はしていない。

フレイク（第14図下）

上記の分類項目全てからはずれた剥片を一括した。打面と背面の形状から以下のように分類した。
まず打面の調整具合で3分類した。

I類：自然面を打面とするもの。

II類：1度剥離作業を行った面を打面とするもの。

III類：2回以上、剥離作業を行った面を打面とするもの。

また、背面にみられる自然面の残存状況により3分類した。

a類：背面全てが自然面（剥離なし）

b類：背面の一部に自然面残るもの。

c類：背面に自然面が見られないもの。

これらの組み合わせで9分類とした。また打面・背面が欠損している、不明なものなど、分類不能なものについては、以下のように4分類した。

IV a類：塊状で、いずれかの面に自然面が残るもの。

IV b類：薄片で、いずれかの面に自然面が残るもの。

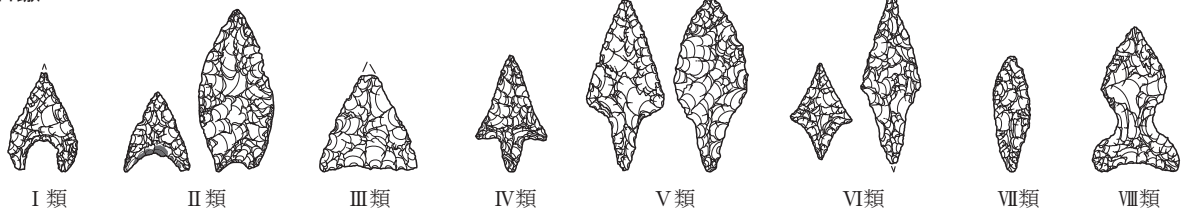
IV c類：塊状で、自然面が全く残らないもの。

IV d類：薄片で、自然面が全く残らないもの。

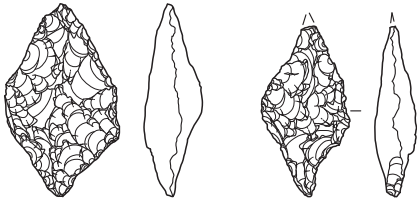
チップ

フレイクのなかで、1 cm 四方に満たないものを、便宜的ではあるが「チップ」とした。細分はしていない。

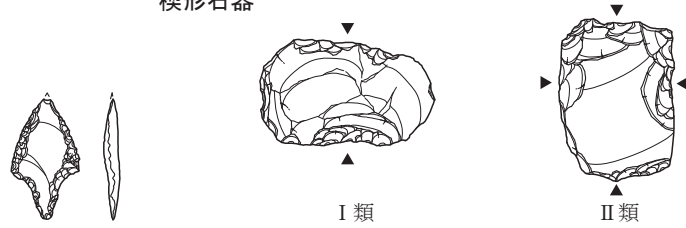
石鏃



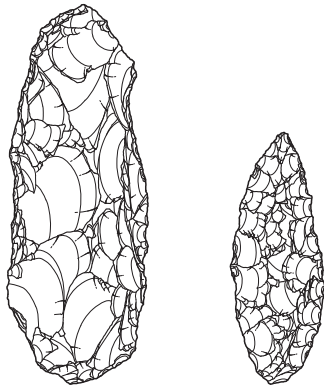
石鏃失敗品



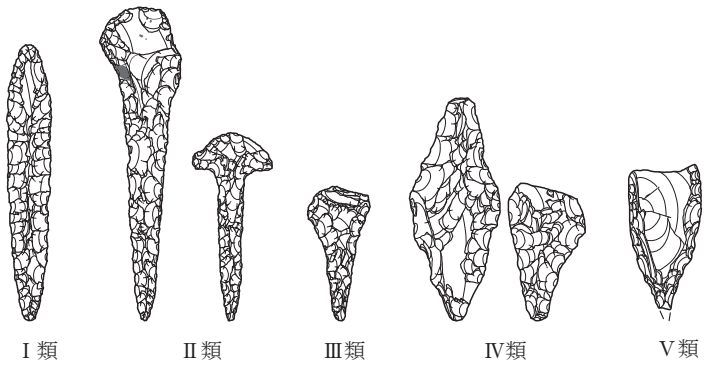
楔形石器



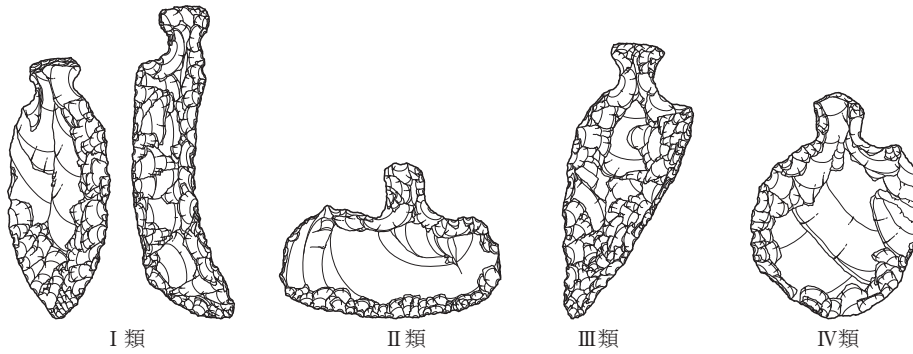
尖頭器



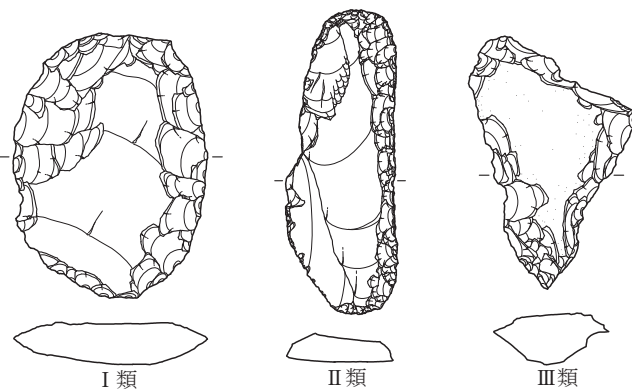
石錐



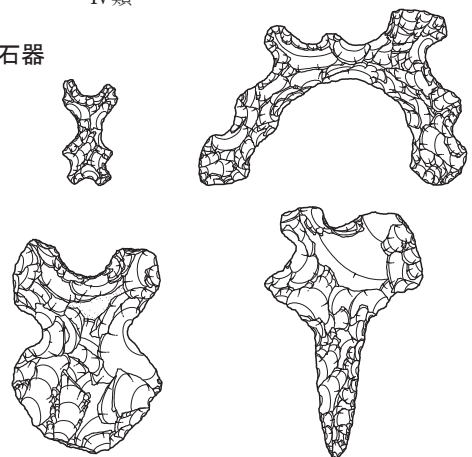
石匙



不定形石器

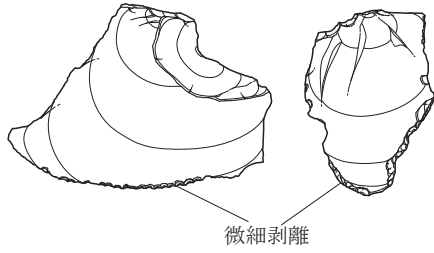


異形石器

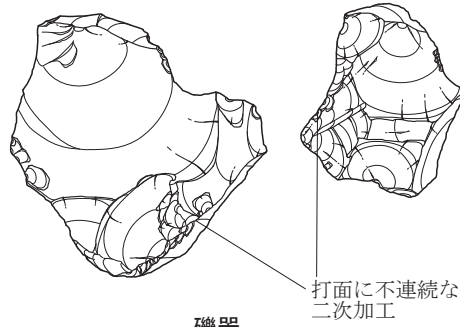


第12図 石器の分類1

ユーズドフレイク
(UF/U フレイク)

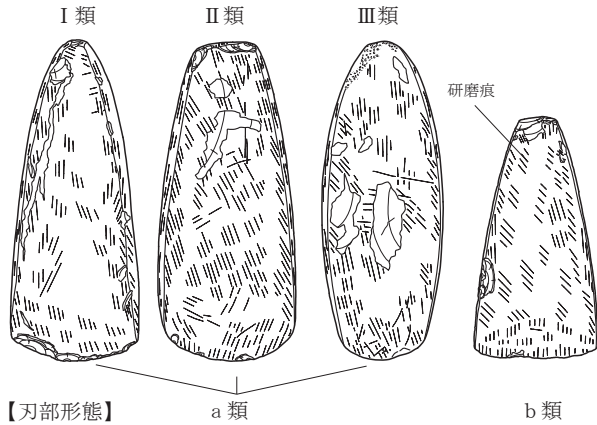


リタッチドフレイク
(RF/R フレイク)

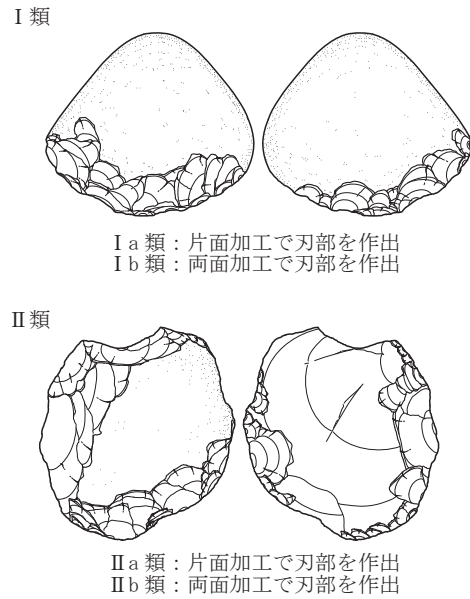


磨製石斧

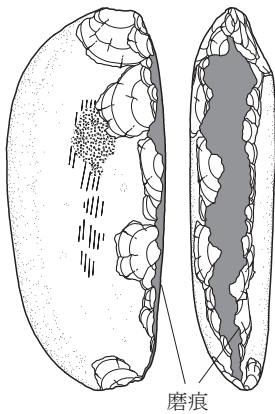
【基部形態】



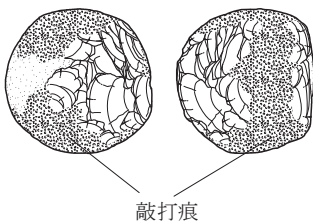
礫器



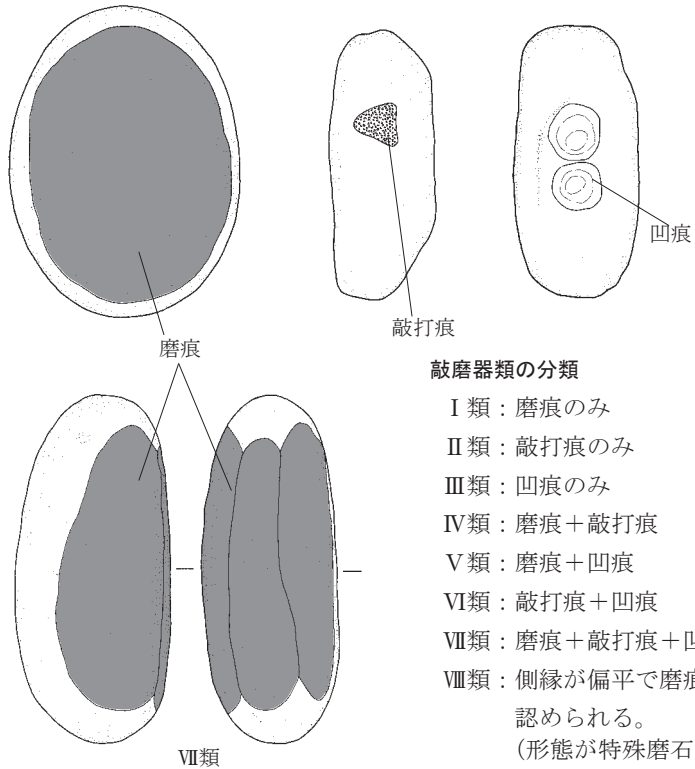
特殊磨石



多面体敲打石



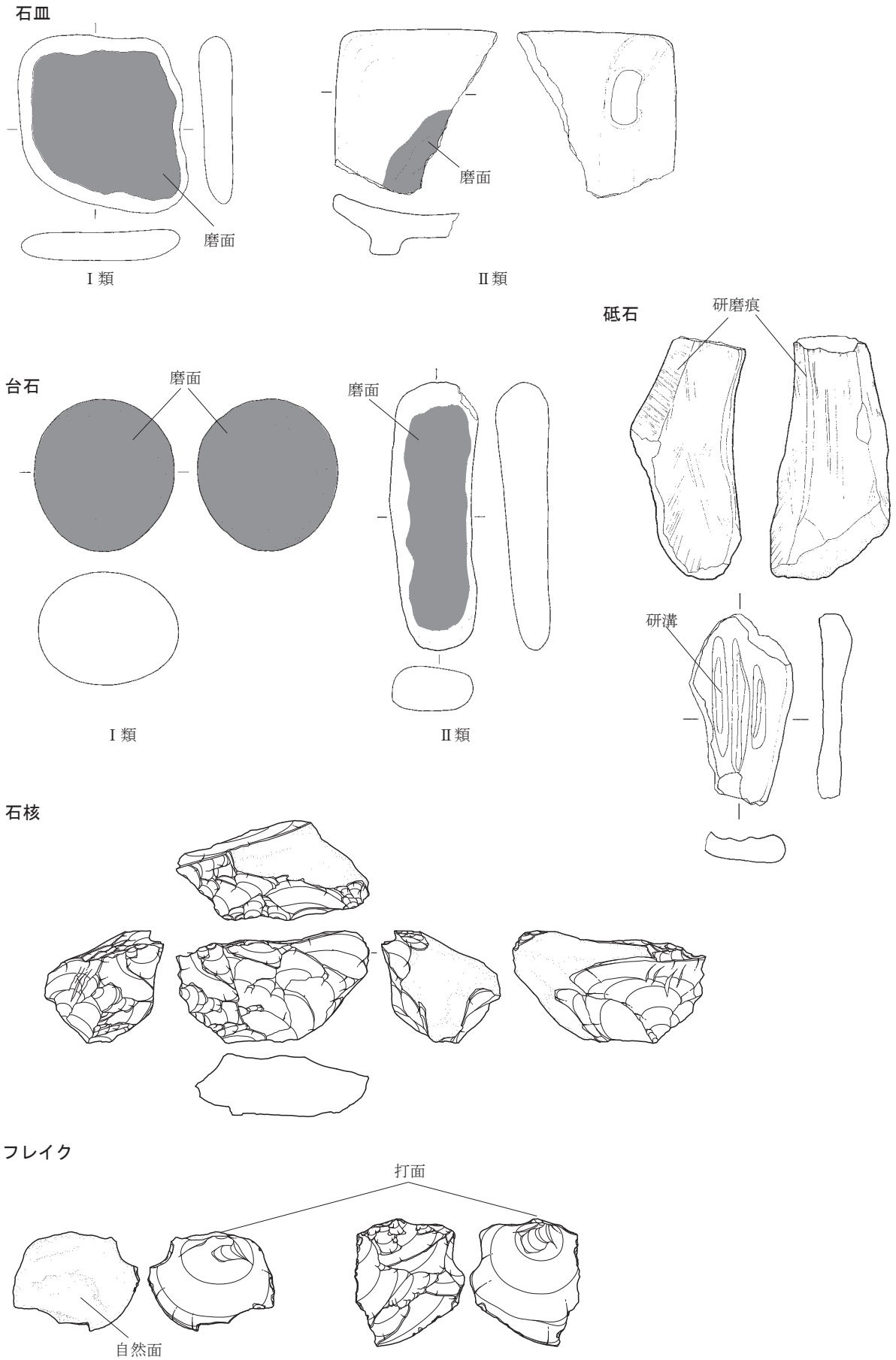
敲磨器類



敲磨器類の分類

- I 類：磨痕のみ
- II 類：敲打痕のみ
- III 類：凹痕のみ
- IV 類：磨痕＋敲打痕
- V 類：磨痕＋凹痕
- VI 類：敲打痕＋凹痕
- VII 類：磨痕＋敲打痕＋凹痕
- VIII 類：側縁が偏平で磨痕が認められる。
(形態が特殊磨石に類似)

第 13 図 石器の分類 2



第 14 図 石器の分類 3

石棒・石刀・石剣（第 15 図上）

長さ 10cm 以上の棒状を呈する磨製石器を一括した。石棒・石刀・石剣は区別が難しいが、本遺跡では断面形から以下のように分類した。

石棒：円形を呈するもの。

石刀：片側は鋭利に作出され、もう片側は丸く整形されるもの。

石剣：両端を鋭利に作出するもの。

石製品

軽石製石製品（第 15 図左中央）

軽石・安山岩を素材とし、板状、あるいは球状に整形したもの。

円盤形石製品（第 15 図右中央）

側面を打ち欠いたり、敲打し、径 4～6 cm の偏平な円形（円盤形）に整形した石製品。出土点数が少ないので細分していない。

大珠・勾玉・玉（第 15 図左下）

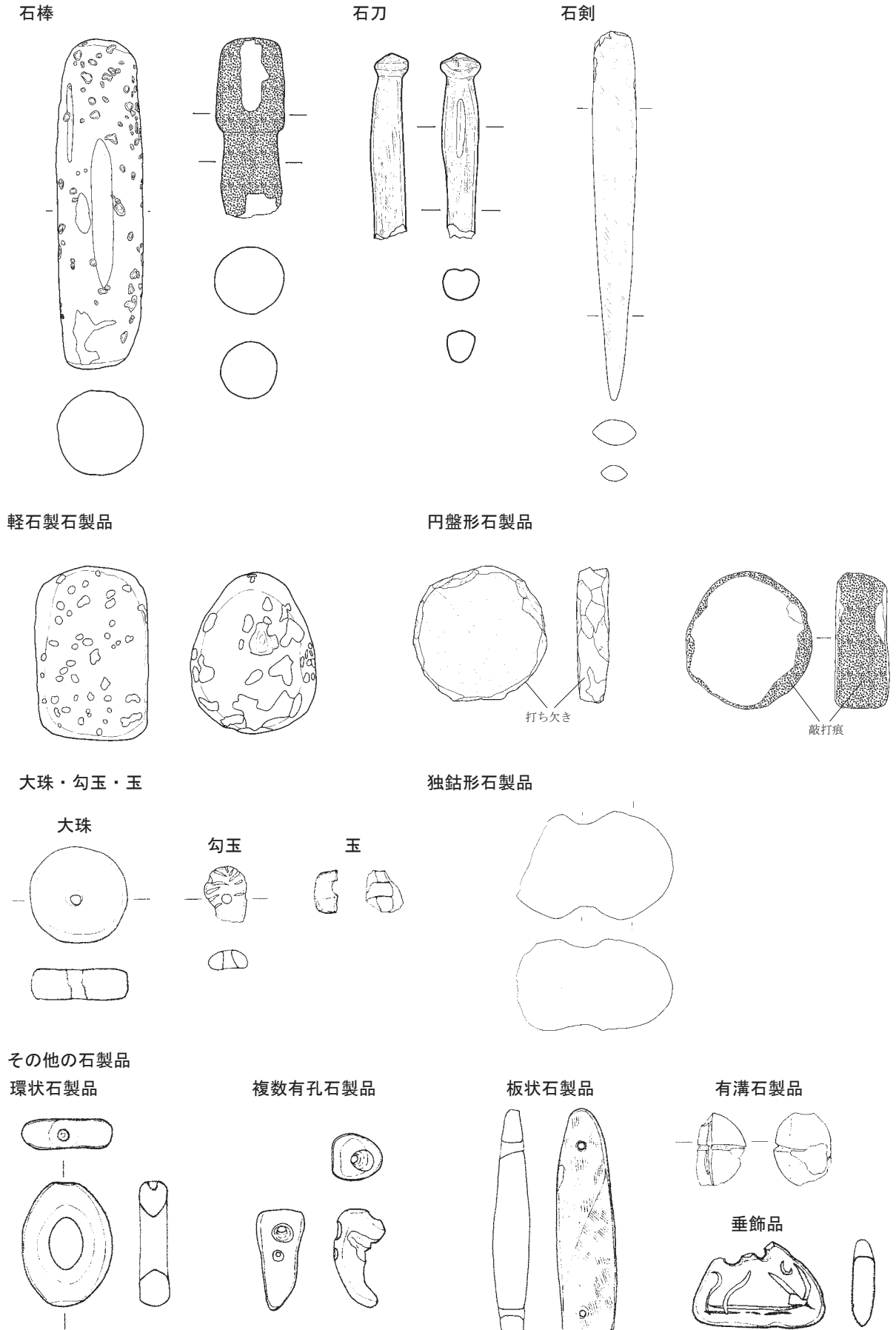
円形・球状に整形し、穿孔されるもの。後述するが、翡翠製で径 3 cm、中央に穿孔があるものを大珠、同じく翡翠製で湾曲する形態に整形し、穿孔するものを勾玉とした。

独鈷形石製品（第 15 図右下）

両端が膨らみ中央が窪む形態の磨製石器。

その他の石製品（第 15 図下）

円形・環状・球状・板状など、意図をもって何らかの形態に整形したと推測されるものを石製品として一括した。また全てではないが穿孔や刻みが施される。形態の特徴から何種かに分けられる。前述の通り、日本考古学協会 2016 に示された石製品の分類を基準として細分し、第七章および第 2 分冊観察表に記した。



第 15 図 石器の分類 4

VI 調査の概要と基本土層

1 調査の概要

調査区の範囲は、南北約 160 m、東西約 72 m に収まり、南北方向に長い。調査区の形は歪な方形を呈し、調査区北側はやや狭く、調査区南側は北側に比べると広い。

標高は 2～7 m を測り、北側が高く、南側が低い。ただし、調査区全体が傾斜しているのではなく、調査区の北側は標高約 7 m の平坦面が、また調査区の南側は標高約 2 m の平坦面で、二段の平坦面が広がり、その両方の平坦面を調査区ほぼ中央（グリッドのⅢ A ライン周辺）の斜面がつないでいる。なお調査区の北側と南側とでは、検出遺構や出土遺物にもそれぞれ時期差が見いだされ、別の遺跡を同時に調査しているかのようであった。

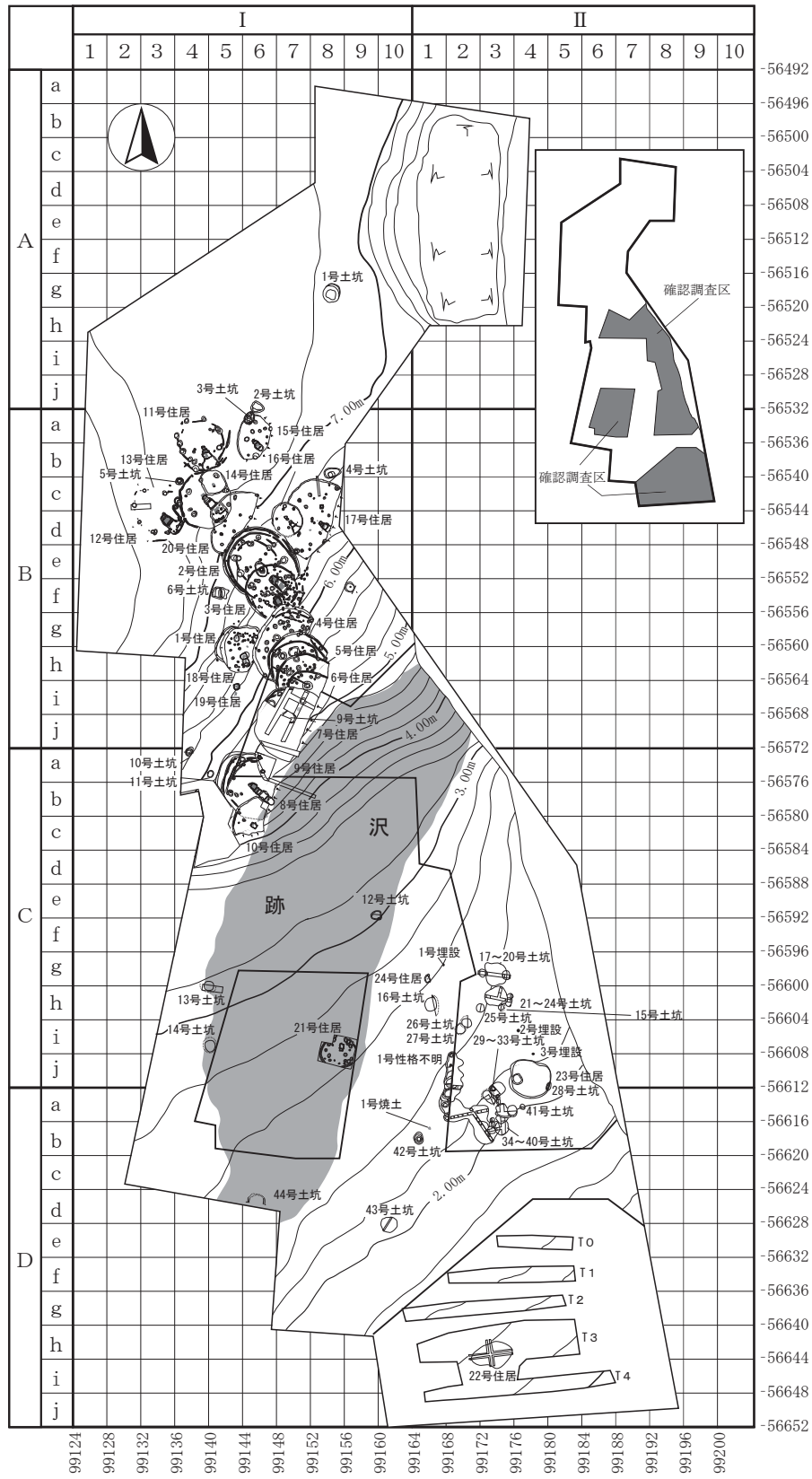
調査区北側の平坦面は広く、標高約 7 m 前後を測る。この平坦面は自然地形ではなく、後世の削平により人為的に改変され形成されたものである。特に調査区の北端に向かうにつれ、削平の度合いが激しく、地山としたⅥ層まで削られている箇所もあった。そのためⅡ A 2b～Ⅱ A 2g グリッド周辺は検出遺構が見受けられないが、実際にそうなのか、削平により消失したのか定かではない。また調査区の北東端には大型の攪乱があり、遺構、遺物共に確認されなかった。なお、この調査区北側では主に縄文時代中期の遺構・遺物を確認した。

調査区南側は概ね標高 2 m 前後の平坦面であるが、わずかに南へと傾斜する。調査区北側と違い、削平された痕跡は見受けられなかった。また調査区の北東から南西にかけての広い範囲が沢跡（旧河道）であり、沢跡には厚く基本土層Ⅳ層が堆積し、縄文時代中～後期の遺物が包含される。また全域にⅢ層が堆積し、後晩期の遺物が包含される。遺構は主に縄文時代後期、晩期を確認し、また平安時代の土坑 1 基を検出した。

検出遺構は、縄文時代と古代（平安時代）の 2 つの時代に帰属する。ただし、主体は縄文時代である。縄文時代の遺構は、中期前葉～末葉（大木 8a～10 式期）の竪穴住居跡 22 棟、晩期（大洞 BC 式期）の竪穴住居跡 1 棟、中期か晩期の竪穴住居跡 1 棟、性格不明遺構 1 基、埋設土器 3 基、中期・晩期の土坑 43 基（うち 6 基はフラスコ状土坑）、焼土遺構 1 基、柱穴 39 個である。古代は土坑 1 基である。

出土遺物は、縄文土器・土製品が大コンテナ 436 箱分、石器・石製品が大コンテナ 133 箱分である。他に古代の土師器、須恵器、近世以降の陶磁器が大コンテナ 1 箱分みつまっている。縄文土器は遺構と同じ中期と晩期が主体であるが、後期の土器も多く、他に多くはないが前期も出土している。土製品は比較的、後期に比定されるものが多く、また後期、晩期の土偶も出土している。石製品は後期、晩期に比定されるものが多い。特筆すべき点として、翡翠製の丸珠（中期）と勾玉（晩期）が出土している。なお、第 4 表に各遺構および包含層から出土した遺物の出土量を、縄文土器は重量（g）で、石器は点数で示した（遺物取り上げグリッド毎の遺物出土量については第 6・7 表に記した）。

調査区は本調査範囲と確認調査範囲に分かれており、第 4 図右に、それぞれの範囲を示した。本調査範囲は第 IV 章 - 1 に記した通りの発掘調査を行い、確認調査範囲では、遺構はプラン（遺構の上端）検出と、トレンチによる断面観察のみにとどめている。なお調査区の南端は特に遺構の希薄な範囲と考え、5 本のトレンチを入れたのみで、包含層の掘り下げも行っていない。



第16図 遺構配置図

出土位置	出土層位	縄文土器 (g)	石器 (点)																	石器 チップ (g)	軽石製 石製品 (点)	石棒/ 石製品 (点)	土偶/ 土製品 (点)		
			石鏃	尖頭 器	石錐	石匙	楔形 石器	不定 形石 器	異形 石器	磨製 石斧	礫器	特殊 磨石	敲磨 器類	石皿	台石	砥石	石核	Uフ レイク	Rフ レイク					フレ イク	
22号住居	埋土上位	7624.32	2								1	4						16				2			
	埋土下位	3037.47	1								1						3	1	11						
	埋土中	976.96															1								
	柱穴/壁溝内	133.92																							
23号住居	埋土上位	24842.56	5				4		1	2	10						5	2	56			1			
	埋土下位	5967.10								1	3						1	1	11			3			
1号埋設土器	埋設土器	1616.50																							
2号埋設土器	埋設土器	301.90																							
3号埋設土器	埋設土器	432.80																							
1号土坑	埋土中	55.22																			2				
2号土坑	埋土中	290.82																							
3号土坑	埋土中	382.90																							
4号土坑	埋土中	952.04																				1			
5号土坑	埋土中	1214.71					1	1													3				
6号土坑	埋土中	2362.90																			1				
7号土坑	埋土中	18.37																							
10号土坑	埋土中	328.22																							
11号土坑	埋土中	347.32																							
12号土坑	埋土中	1971.72								1											5	1			
13号土坑	埋土中	12331.47																			4	1			
14号土坑	埋土中	18832.10					1				2	5					1	1				2			
15号土坑	埋土中	1884.37										2													
16号土坑	埋土中	182.30										1													
22号土坑	埋土中	621.39																							
23号土坑	埋土中	464.34				1																			
24号土坑	埋土中	45.48																			1				
25号土坑	埋土中	508.78																							
26号土坑	埋土中	4105.25			1							1	1									2			
27号土坑	埋土中	528.39						1				1									1	1			
28号土坑	埋土中	1905.66																							
29号土坑	埋土中	0.00											1												
30号土坑	埋土中	0.00											1												
32号土坑	埋土中	2608.71	2														1				2	2			
33号土坑	埋土中	257.99																			1				
34号土坑	埋土中	2513.02								1		1									1				
35号土坑	埋土中	855.43											1												
36号土坑	埋土中	696.56																							
38号土坑	埋土中	1029.47			1																				
40号土坑	埋土中	259.31																							
42号土坑	埋土中	976.31											2												
1号性格不明遺構	埋土上位	28935.29	2					2		1	1	15					8	1	75	0.20		9			
	埋土下位	19671.74	1		1	2		4				26					5	4	36			4			
	埋土中	1959.10																			4				
柱穴群	埋土中	1970.08						1				3									4				
遺構外	I~II層	252.15	1																						
	III層	2000826.60	619	9	140	53	29	233	20	159	87	13	1582	54	23	16	37	810	235	11939	170.00	4	77	290	
	IV層(砂層)	16948.32	1					1					16					2	1	11			4		
	IV~V層	1116600.15	114		35	14	10	74	5	55	23	4	638	22	8	8	9	217	49	1527	39.37	15	163		
	V層	2078139.04	190	11	29	61	15	116	1	65	51	34	619	16	8	9	21	393	79	2117	155.49	6	16	105	
出土地点不明	-	-	19		3			8		4	2	3	35	1	4			1	24	2	232	5.40	2	1	3

2 基本土層

調査区北側で3箇所、調査区南側で5箇所、計8箇所では基本的な土層の堆積様相を観察した。複数箇所では土層を確認したのは、調査区北側（標高7～8m）と調査区南側（標高2m前後）とで土層の堆積が異なっており、それを明らかにするためである。

基本土層は以下の通りである。

I a層：表土、盛土である。灰黄褐色シルトを主体とし、層厚は10～30cmである。粘性やや弱、しまりやや疎、粒子はやや粗く、ボソボソする。

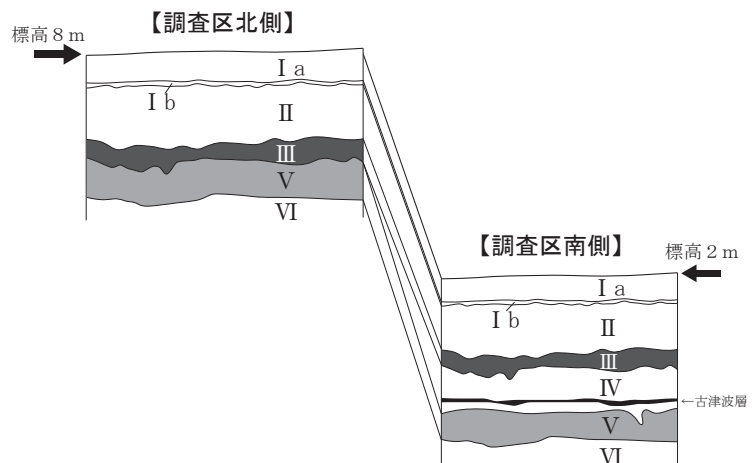
I b層：水田の床土で、調査区北側のみで確認した。褐色シルトを主体とし、層厚は5～10cmである。粘性強、しまり密、粒子は細かい。

II層：無遺物層で、黒褐色シルトを主体とし、層厚は20～30cmである。粘性やや強く、しまり密、粒子は細かい。堆積時期は不明である。

III層：縄文時代後期・晩期の遺物包含層で、調査区北側の一部と南側全域で確認した。黒褐色シルト（II層より明るめ）を主体とし、層厚は20～30cm。ただし、削平により一部消失しており、本来の層厚は不明である。粘性強、しまりやや密、粒子は細かい。第19図に示した5箇所の断面ベルトの通り、III層はさらに細分できるが、これは時期差ではなく、斜面の崩落などに伴い、土色や混入物に差異が生じたものと考えられる。そのため、出土遺物は細分層で時期差はない。なお調査中は「黒色土層①」、「黒色土層②」と呼称した層である。

IV層：土砂堆積層で、調査区南側、主に沢跡の堆積層に相当するが、沢跡の範囲外でも確認した。遺238のIV層（IV～V層）から出土した炭化物の年代測定（AMS測定）から「4010 ± 30yrBP」という結果を得ており、中期末葉には堆積したものと推定でき、一方、層中に含まれる遺物の時期からは、縄文時代中期後葉以降、後期後葉ごろまでに堆積したものと推測する。30～80cm堆積する。暗褐色シルト、暗褐色砂質シルトを主体とし、粘性弱、しまりやや密、粒子はやや粗い。堆積の状況からさらに細分でき、また一部はラミナを形成しているので、幾度も堆積土が動き、また水的作用を受けていることが分かる。また標高が低くなるにつれ砂質シルトが主体となる。さらに調査区南端周辺では、灰白色細砂が層状に堆積しており（第19図C-C'・E-E'ベルトIV層）、これは約3800年前の古津波堆積層（相原2012）ではないかと推測する。この津波堆積層の直上で遺276のIV層から出土した炭化物を年代測定（AMS測定）し、「3360 ± 30yrBP」という結果を得ている（第八章-1）。なお調査中は「暗褐色土層」と呼称した層である。

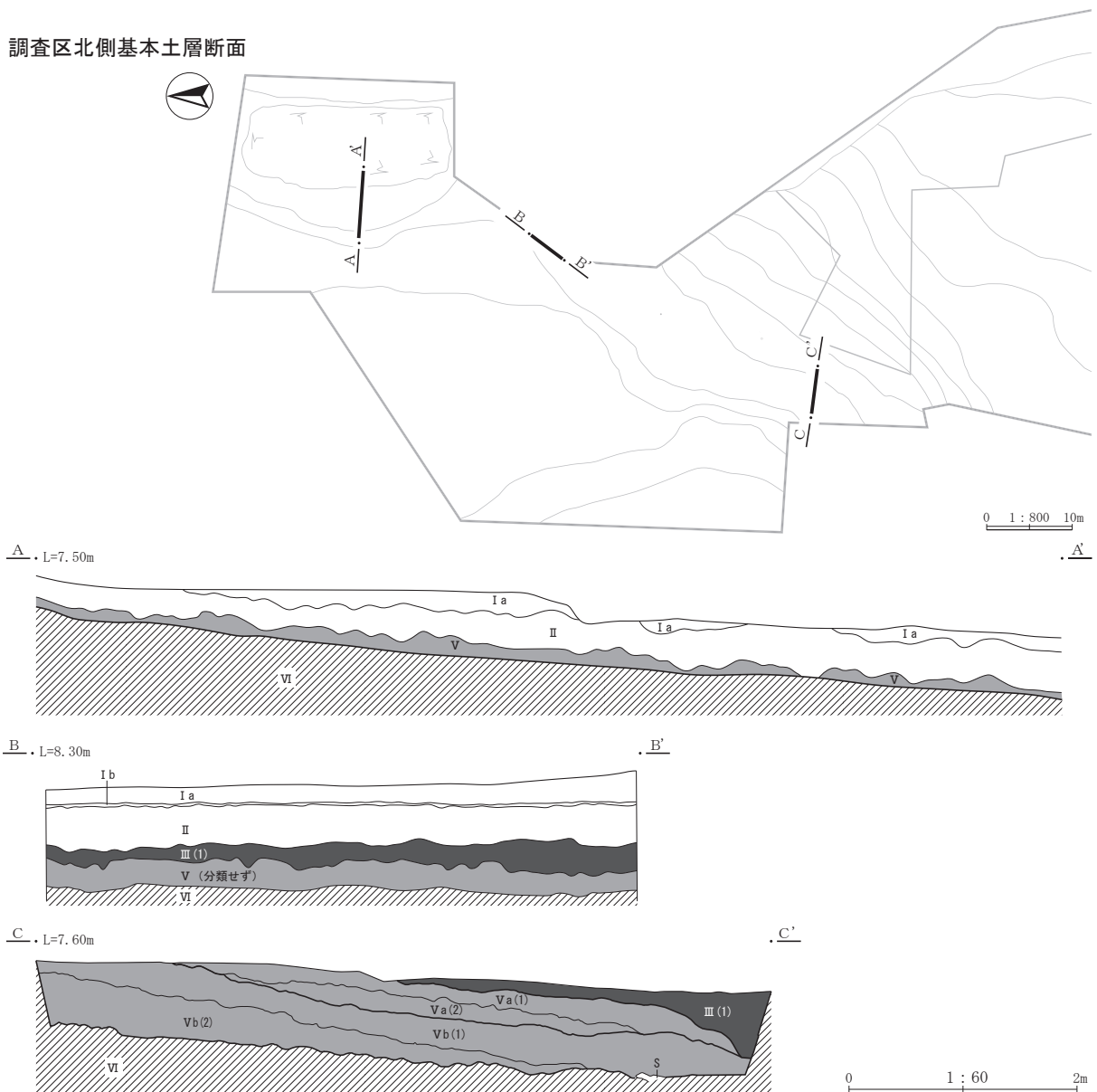
V層：縄文時代中期の遺物包含層で、調査区北側と調査区南側のIV層下の一部で確認した。20～80cm堆積する。暗褐色シルトを主体とし、粘性強、しまり密、粒子は細かい。また調査区南側ではやや砂質シルトが混じる（色調は暗褐色）。III・IV層と同様に、本層はさらに細分できるが、これは時期差ではなく、堆積様相



第17図 基本土層柱状図

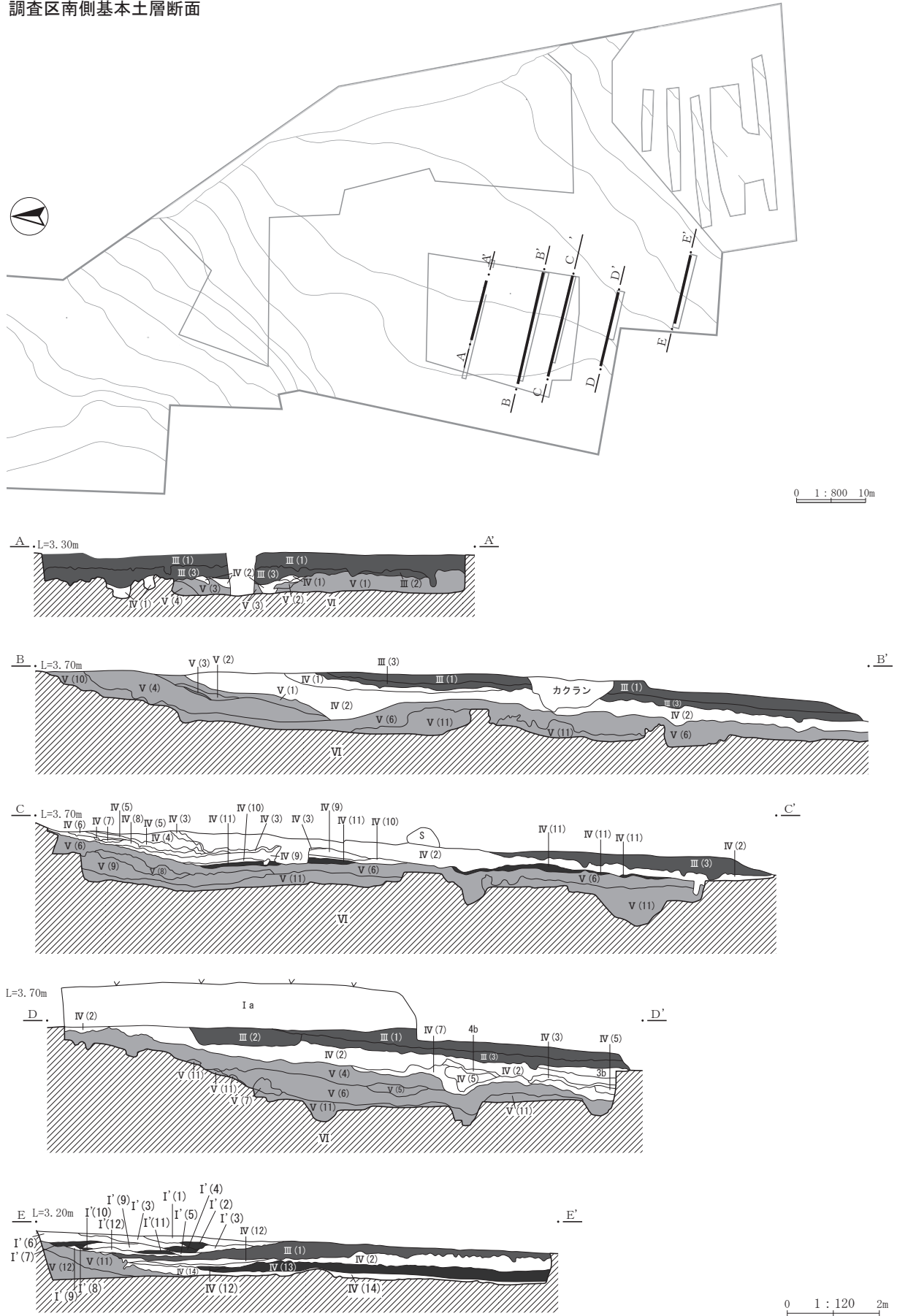
の差と考える。特に遺物の出土量が多かった遺1~5では本層を「V a層」、「V b層」に細分し、出土遺物の時期を確認したが、明瞭な時期差は見いだせなかった。層中からは中期初頭から末葉までの遺物が出土するが、主体は中葉から後葉である。また調査区北側の竪穴住居跡などの埋土は本層に類似する。なお調査中は「Ⅲ層上位」と呼称していた層である。

VI層：無遺物層で、本層を所謂「地山」とし、本層上面において遺構を検出した。また遺構埋土中に含まれる「地山ブロック」は本層土が径5~10cm程度の塊状になったものを指す。黄褐色シルトを主体とし、粘性強、しまり密、粒子は細かく、礫などの混入物をほとんど見受けられない。



第 18 図 基本土層 1

調査区南側基本土層断面



第 19 図 基本土層 2

I 層

- I a. 黒褐色シルト(10YR2/3) 粘性弱 しまり密 草木根による攪乱が激しい。風化花崗岩粒少量含む。
- I b. 褐色シルト(10YR4/4) 粘性強 しまり密 水田の床土か。

I' 層

- I' (1). にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 粘性弱 しまりやや密 炭化物微量、風化花崗岩粒微量含む、土器片(縄文後期)混じる。
- I' (2). 灰白細砂層(2.5Y7/1~8/1) 粘性弱 しまりやや疎 河川由来か。
- I' (3). 灰黄褐色砂質シルト(10YR4/2) 粘性弱 しまりやや密 細砂少量含む。
- I' (4). 灰白細砂層(2.5Y7/1~8/1) 粘性弱 しまりやや疎 河川由来か。
- I' (5). 灰白細砂層(2.5Y7/1~8/1) 粘性弱 しまりやや疎 河川由来か。
- I' (6). 灰黄褐色砂質シルト(10YR4/2) 粘性弱 しまりやや密 細砂多量、炭化物微量含む、土器小片微量に混じる。
- I' (7). 灰白細砂層(2.5Y7/1~8/1) 粘性弱 しまりやや疎 河川由来か。
- I' (8). 灰白細砂層(2.5Y7/1~8/1) 粘性弱 しまりやや疎 河川由来か。
- I' (9). 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性やや弱 しまりやや密 細砂中量、風化花崗岩粒少量、10cm大礫少量含む。
- I' (10). 灰白細砂層(2.5Y7/1~8/1) 粘性弱 しまりやや疎 河川由来か。
- I' (11). 灰白細砂層(2.5Y7/1~8/1) 粘性弱 しまりやや疎 河川由来か。
- I' (12). 黒褐色砂質シルト(10YR3/2) 粘性弱 しまりやや密 細砂多量含む、土器小片混じる。

II 層

- II. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性弱 しまり密 風化花崗岩粒少量含む。

III 層

- III (1). 黒褐色シルト(10YR2/2) 粘性やや弱 しまり密 20cmまでの礫少量、炭化物少量含む、土器片(縄文後晩期)混じる。
- III (2). 黒褐色シルト(10YR2/3) 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量、風化花崗岩粒中量含む。
- III (3). 黒色シルト(10YR2/1) 粘性やや弱 しまり密 風化花崗岩粒少量、2mm前後の炭化物少量含む、土器片(縄文後晩期)混じる。

IV 層

- IV (1). 褐色砂質シルト(10YR4/4) 粘性弱 しまりやや密 10cm程度の花崗岩礫少量、粗砂中量含む。
- IV (2). 暗褐色砂質シルト(10YR3/4) 粘性弱 しまり密 粗砂中量、風化花崗岩粒少量、炭化物微量含む。礫の大きさは10cm前後が主だが、50cm超も混じる。
- IV (3). 明褐色シルト(7.5YR5/6) 粘性弱 しまりやや密 酸化し、やや赤味を帯びる。炭化物微量、風化花崗岩粒中量含む。
- IV (4). 暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性弱 しまり密 粗砂少量、炭化物微量、風化花崗岩粒少量含む、土器片(縄文中期)混じる。
- IV (5). 灰褐色シルト(7.5YR5/2) 粘性弱 しまり密 炭化物微量、風化花崗岩粒少量、酸化した赤味をおびるシルトブロック中量含む。
- IV (6). 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 粘性弱 しまりやや密 炭化物微量、風化花崗岩粒微量含む。
- IV (7). 浅黄褐色シルト(10YR3/3) 粘性弱 しまりやや密 炭化物微量、風化花崗岩粒少量、細砂少量含む。
- IV (8). 褐灰色シルト(10YR5/1) 粘性弱 しまりやや密 炭化物微量、風化花崗岩粒微量含む。グライ化?
- IV (9). にぶい褐色シルト(7.5YR5/4) 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量、風化花崗岩粒少量、細砂少量含む。
- IV (10). 灰褐色シルト(7.5YR5/2) 粘性弱 しまり密 炭化物微量、風化花崗岩粒微量、細砂微量含む。
- IV (11). 灰白色細砂(10YR7/1) 粘性弱 しまり疎 炭化物微量含む。
- IV (12). 灰白細砂層(2.5Y7/1~8/1) 粘性弱 しまりやや疎 海由来の砂か。粒径、形状が揃っている。
- IV (13). 灰白細砂層(2.5Y7/1~8/1) 粘性弱 しまりやや疎 海由来の砂か。粒径、形状が揃っている。層厚3mmほどの砂鉄層がみられる。
- IV (14). 黒褐色砂質シルト(10YR3/2) 粘性弱 しまりやや密 細砂多量、炭化物微量含む。

V 層

- V (1). 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性弱 しまり密 10cmまでの礫少量、風化花崗岩粒少量、炭化物少量含む、土器片(縄文中期?)混じる。
- V (2). 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性弱 しまり密 風化花崗岩粒少量、炭化物少量含む。
- V (3). 褐色焼土(7.5YR4/6) 粘性弱 しまり密 流れ込みの焼土が堆積。炭化物少量含む。
- V (4). にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 粘性やや強 しまり密 風化花崗岩粒少量、5mmまでの炭化物少量含む、土器片(縄文中期?)や礫石器混じる。また礫のほとんどは東に傾斜している。
- V (5). にぶい黄褐色シルト(10YR5/4) 粘性弱 しまりやや疎 砂質。炭化物微量、風化花崗岩粒中量、地山ブロック少量含む。
- V (6). 灰黄褐色砂質シルト(10YR4/2) 粘性弱 しまり密 粗砂中量、地山ブロック少量含む。
- V (7). 褐灰色シルト(10YR6/1) 粘性弱 しまり密 グライ化?炭化物微量、礫少量含む。
- V (8). 暗褐色シルト(7.5YR3/3) 粘性弱 しまり密 炭化物微量、風化花崗岩粒少量含む、土器片(縄文中期)わずかに混じる。
- V (9). 褐色シルト(7.5YR4/3) 粘性弱 しまり密 炭化物微量、風化花崗岩粒微量、礫少量含む、土器片(縄文中期)わずかに混じる。
- V (10). 褐色シルト(10YR4/6) 粘性強 しまり密 地山ブロック斑文状にやや多く、風化花崗岩粒少量、炭化物少量含む。
- V (11). 暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性やや強 しまり密 地山ブロック多量含む。
- V (12). 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性弱 しまり密 5mm大の炭化物少量20cm大の礫少量含む、土器片(縄文中期?)少量混じる。

Va・Vb層

- Va(1). 黒褐色シルト(10YR2/2) 粘性やや弱 しまり密 10cm程度の花崗岩礫少量含む。風化花崗岩粒微量含む。
- Va(2). 暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性弱 しまり密 土器多量含む。焼土粒・炭化物少量含む。10cm程の花崗岩礫がみられる。
- Vb(1). にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 粘性弱 しまり密 土器多量含む。炭化物少量含む。20cm程の花崗岩礫少量含む。
- Vb(2). 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性弱 しまり密 土器少量含む。炭化物微量、風化花崗岩粒微量含む。

VI 層

- VI. 明黄褐色シルト(10YR6/8) 粘性強 しまり密

第 20 図 基本土層 3

以上、I a 層からVI層までを確認した。VI層は調査区北側で約40cm堆積し、層中からは出土遺物がなく、したがってVI層上面を最終面と考え、これより下への掘り下げは行っていない。

調査区北側と南側を比較する。

調査区北側では、III層の堆積がほとんど確認できない(削平により消失か、あるいは元々堆積していないか)が、V層が厚く堆積し、中期の遺物を多量に包含する。またその下からは中期の竪穴住居跡群が見つかっている。一方、調査区南側は、III層が比較的良好に堆積し、縄文時代後晩期の遺物を多量に包含する。そして沢跡内には土砂堆積層(IV層)が堆積し、一部には古津波による堆積層も確認できる。ただしその下のV層は良好な状態ではなく、そのため中期の遺物は多くない。

Ⅶ 検出遺構と出土遺物

1 縄文時代

(1) 竪穴住居跡

1号住居跡（第21～27図、写真図版3・36～39・258）

[位置・検出状況] 調査区北側、I B 5g、I B 6g、I B 5h、I B 6h グリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。

本遺構は東側を重複する4号住居跡に壊され、また南側の一部は斜面の崩落により消失している。

[その他の遺構との重複] 4号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。

[平面形] 不整な楕円形を呈する。

[規模] 長軸 (5.62) × (4.82) m・深さ 25cm

[埋土] 4層を確認したが、いずれも遺構外から流れ込んだⅢ層土を主体とする土と考える。遺構内は3層（黒褐色シルト）が主体的に占めているが、その下の4層は遺構外からの流入土であり（B - B' ベルト）、3層も流れ込みによる土（V b 層類似）と判断した。

[床面・壁] 炉を検出した面を床面と判断した。概ね平坦である。壁は西壁から北壁が残存する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[炉] 石囲炉である。1回作り替えが行われており、炉の南側に古い炉の掘り方を埋めた痕跡を確認した。炉は不整な正方形を呈し、規模 82 × 77cm を測る。深さは床面から 8cm である。炉のほぼ中央に 32 × 46cm の範囲で火を焚いた痕跡（燃焼面）がある。なお、南側の掘り方底面にも火を焚いた痕跡があり、またそのさらに南側にも火を焚いた痕跡がある。

炉石は扁平な礫を利用しているが大きさや形態は不揃いである。また全周せず、一部の炉石は消失している。南側の掘り方は炉石がすべて抜かれている。炉石は掘り方に差し込み、一部、掘り方埋土で埋め、固定している。

なお、炉は検出の段階で、第22図左下の図のように比較的大きな角礫により覆われていた（写真も参照）。この理由については不明である。

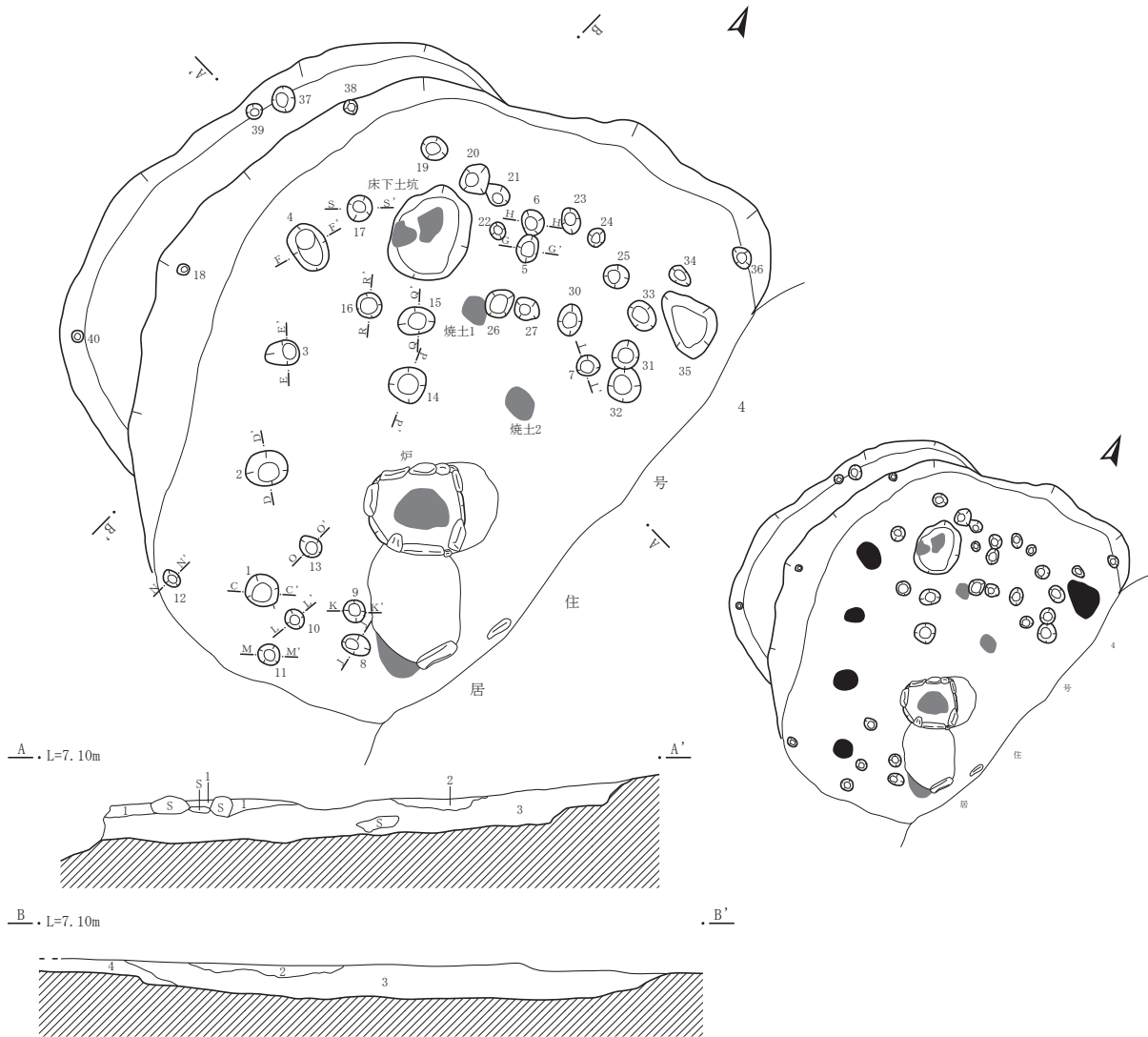
[附属施設] 柱穴 40 個を確認した。配列からは Pit 1～4、35 が支柱穴と考えられ、消失した柱穴もあることを考えると、支柱穴は 8 本柱であったと推定する。

また炉の主軸方向の奥側に床下土坑 1 基を確認した。床下土坑は 85 × 75 の楕円形で深さは床から 10cm と浅いが、底面には 2 箇所、火を焚いた痕跡が見受けられた。

他に西壁際が壇状になっている。別遺構との重複か本遺構の建て替えの痕跡の可能性も考えたが、断面からは判断できず、本遺構に伴う壇状の施設と考えている。

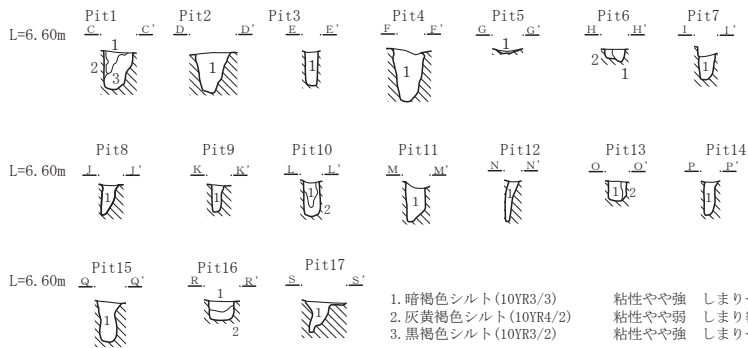
[出土遺物] 床面から埋土上位、また付属施設内から縄文土器 86,117.5g、石器 331 点が出土している。ただし上記の通り、本遺構の埋土は流入土であり、厳密に本遺構に伴う遺物と判断できるものは少ない。床面周辺からは時期的にまとまった土器群が確認されており、それらを本遺構に伴う遺物と判断した。

縄文土器は 30 点掲載した（1～30）。1～24 は大木 8a 式新段階に比定される。19 のみ浅鉢、他は深鉢である。深鉢は A 類が多く、口縁部には隆帯および沈線により文様が描かれている。口唇部直下に縦位の押圧文を施した半球状の突起が付くものも多い。胴部は地文のみが主体である。13 は深

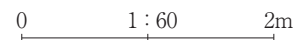


1. にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) 粘性やや弱 しまりやや疎 炭化物微量、風化花崗岩粒微量含み、土器片混じる。
2. 暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量含み、土器片混じる。
3. 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性やや強 しまり疎 地山ブロック斑文状に少量、炭化物・焼土粒微量、5cm程度の花崗岩礫少量含む。
4. 黒褐色シルト(10YR2/3) 粘性やや弱 しまり密 風化花崗岩粒微量、炭化物微量、地山ブロック少量含む。

柱穴

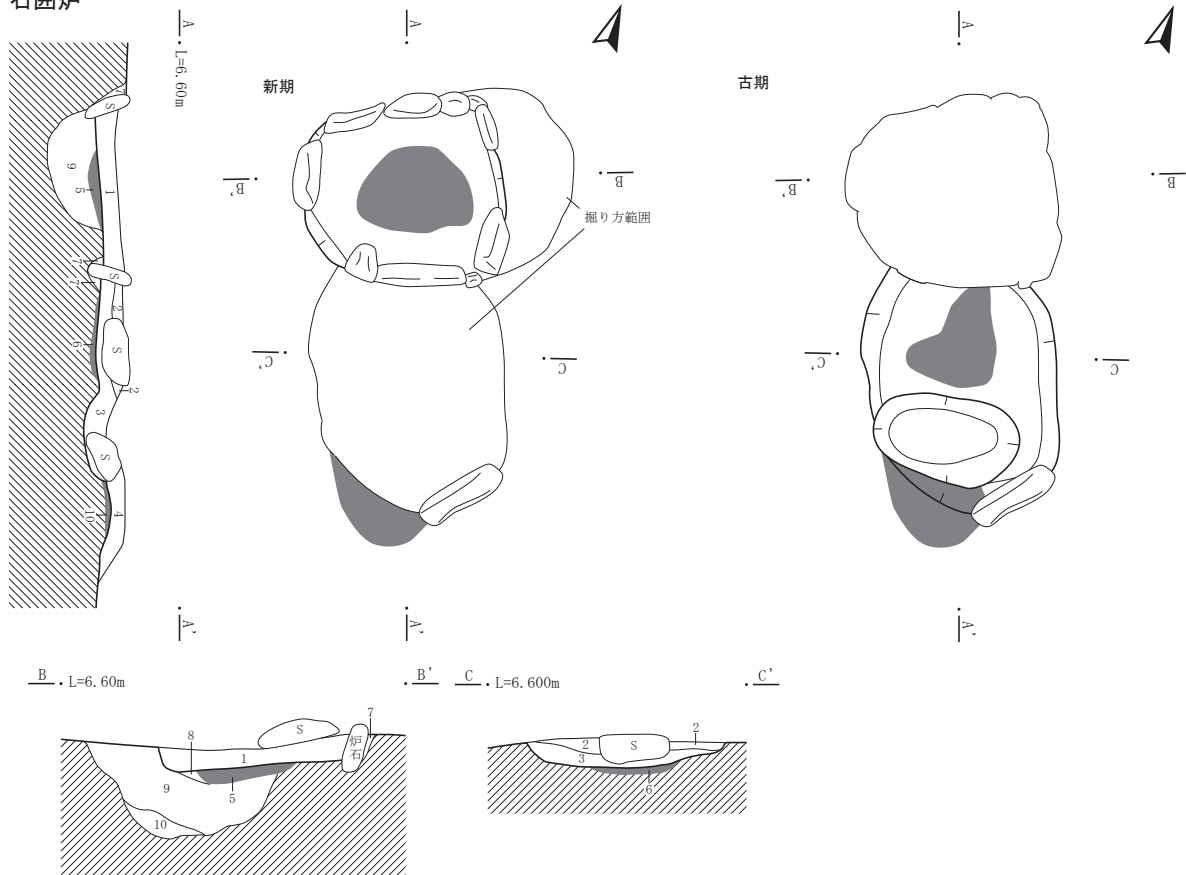


1. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性やや強 しまりやや密 炭化物微量、風化花崗岩粒微量含み。
2. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量、地山ブロック少量含む。
3. 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性やや強 しまりやや密 炭化物微量、地山ブロック少量含む。



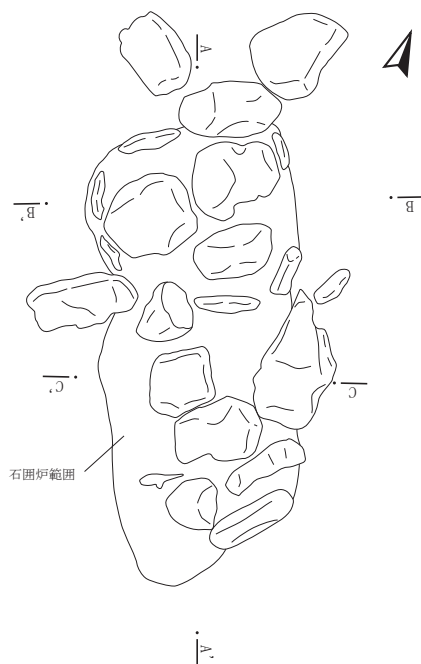
第21図 1号住居跡1

石囲炉



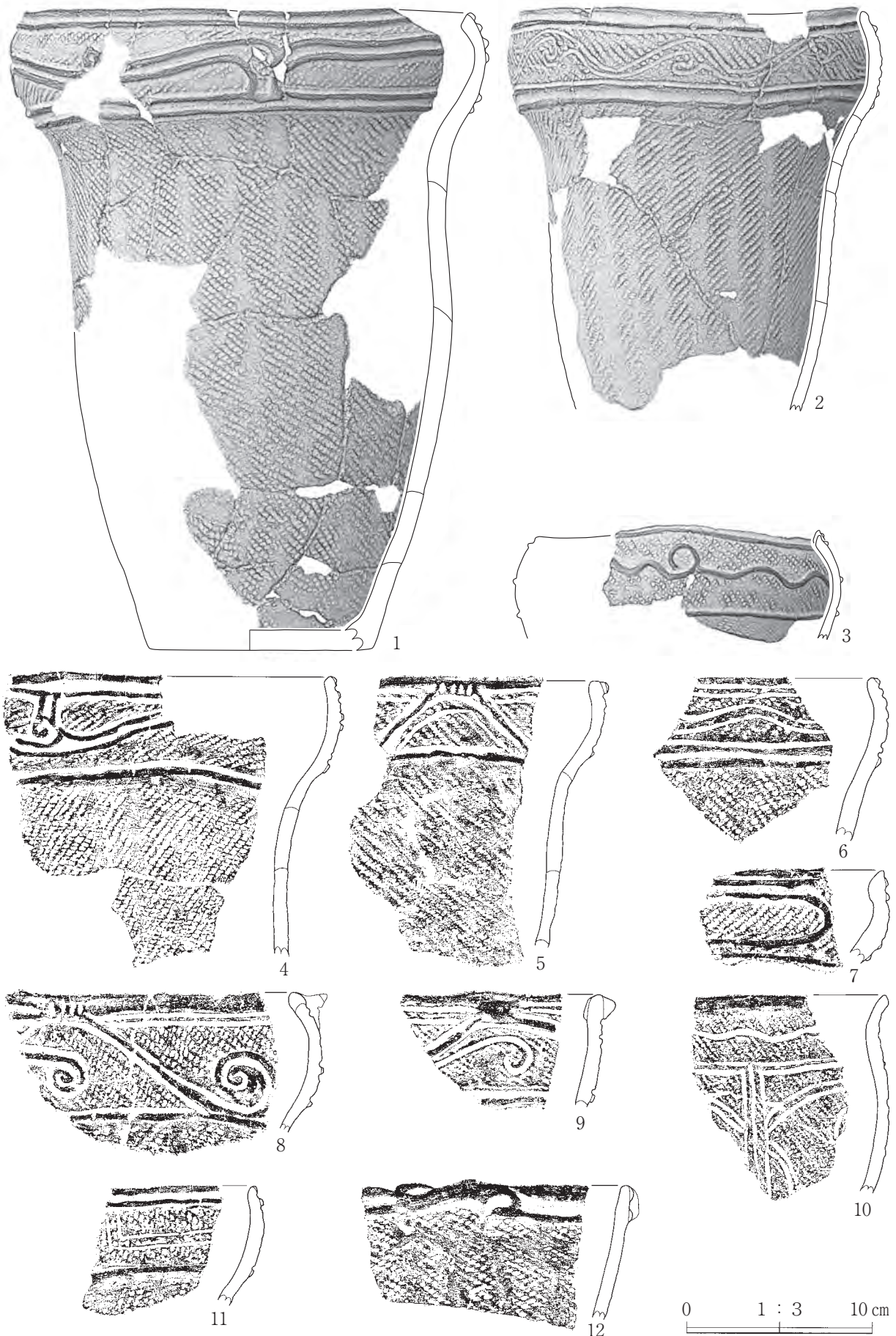
- | | | | |
|------------------------|-------|--------|---------------------------------|
| 1. 暗褐色シルト (10YR3/3) | 粘性弱 | しまり密 | 炭化物微量、風化花崗岩粒微量含む。 |
| 2. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 地山ブロック中量含む。 |
| 3. 褐色シルト (10YR4/4) | 粘性弱 | しまり疎 | 焼土粒少量含む。 |
| 4. 暗褐色シルト (10YR3/4) | 粘性弱 | しまり疎 | 炭化物微量、風化花崗岩粒微量、焼土粒微量含む。 |
| 5. 橙色焼土 (2.5YR6/8) | 粘性弱 | しまり密 | 石囲部焼成面。焼成強く、被熱により激しく還元している。 |
| 6. 明赤褐色焼土 (2.5YR5/8) | 粘性弱 | しまりやや密 | 焼成面。石囲部内より焼成は弱く、被熱による還元も薄い。 |
| 7. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) | 粘性やや強 | しまり密 | 炉石振り方理土。炭化物微量、地山ブロック少量含む。 |
| 8. 褐灰色シルト (10YR4/1) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炉振り方理土。炭化物微量、地山ブロック少量、白色粒子微量含む。 |
| 9. にぶい黄褐色シルト (10YR6/4) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炉振り方理土。炭化物微量、地山ブロック中量含む。 |
| 10. 橙色焼土 (5YR6/6) | 粘性弱 | しまり密 | 地山が被熱により橙色に還元。 |

炉上に散在した礫

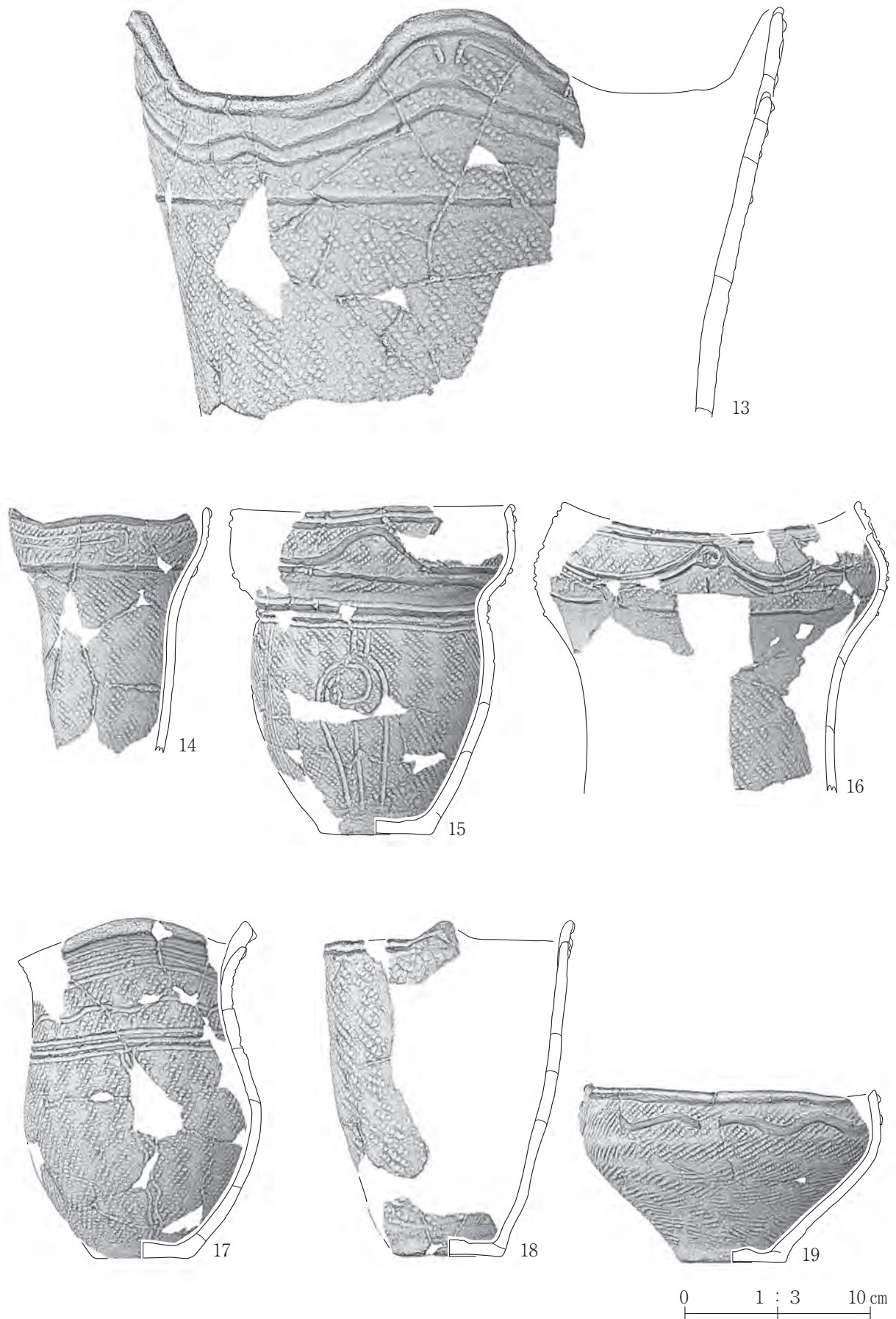


0 1:30 1m

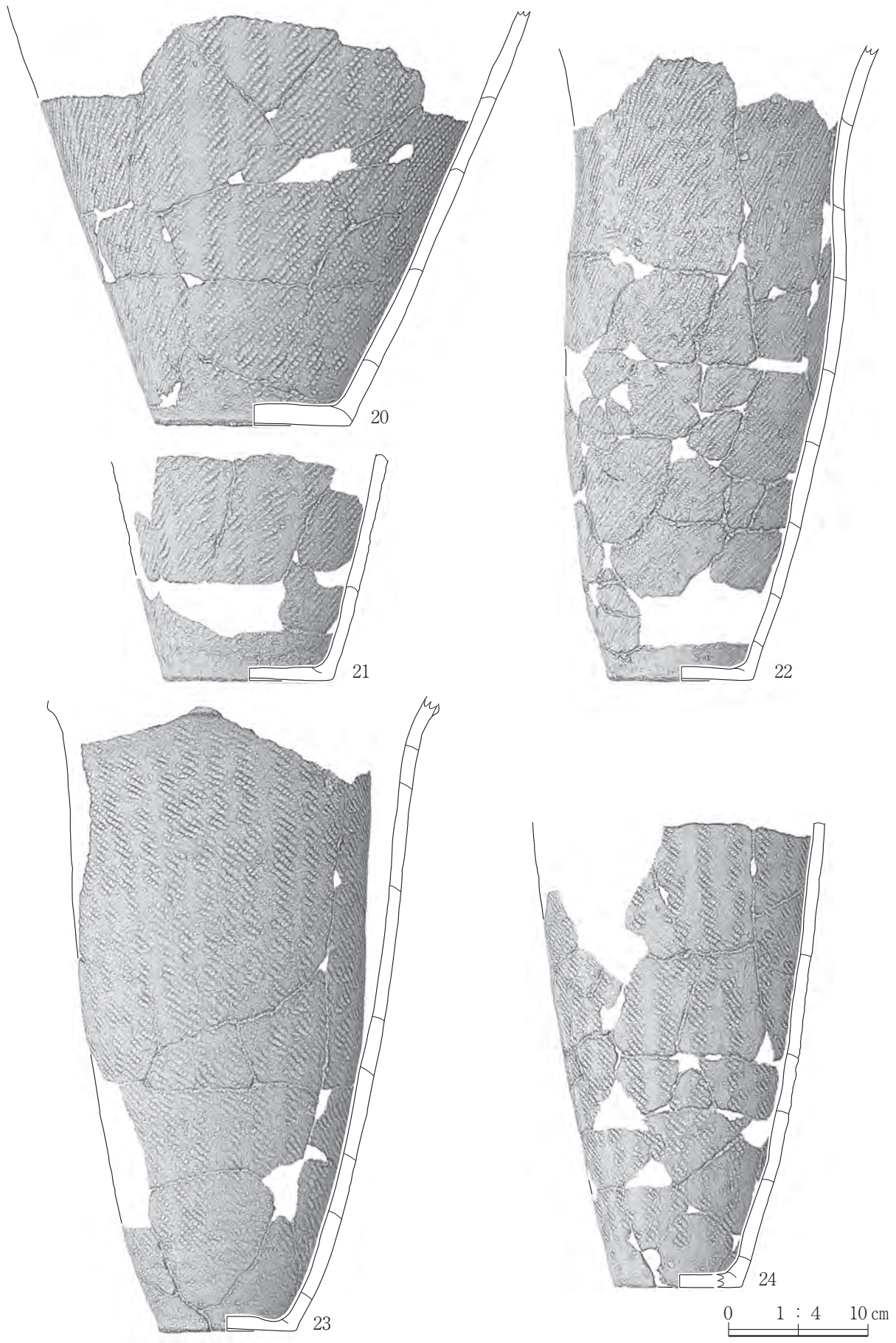
第22図 1号住居跡2



第23図 1号住居跡出土遺物1



第24図 1号住居跡出土遺物2



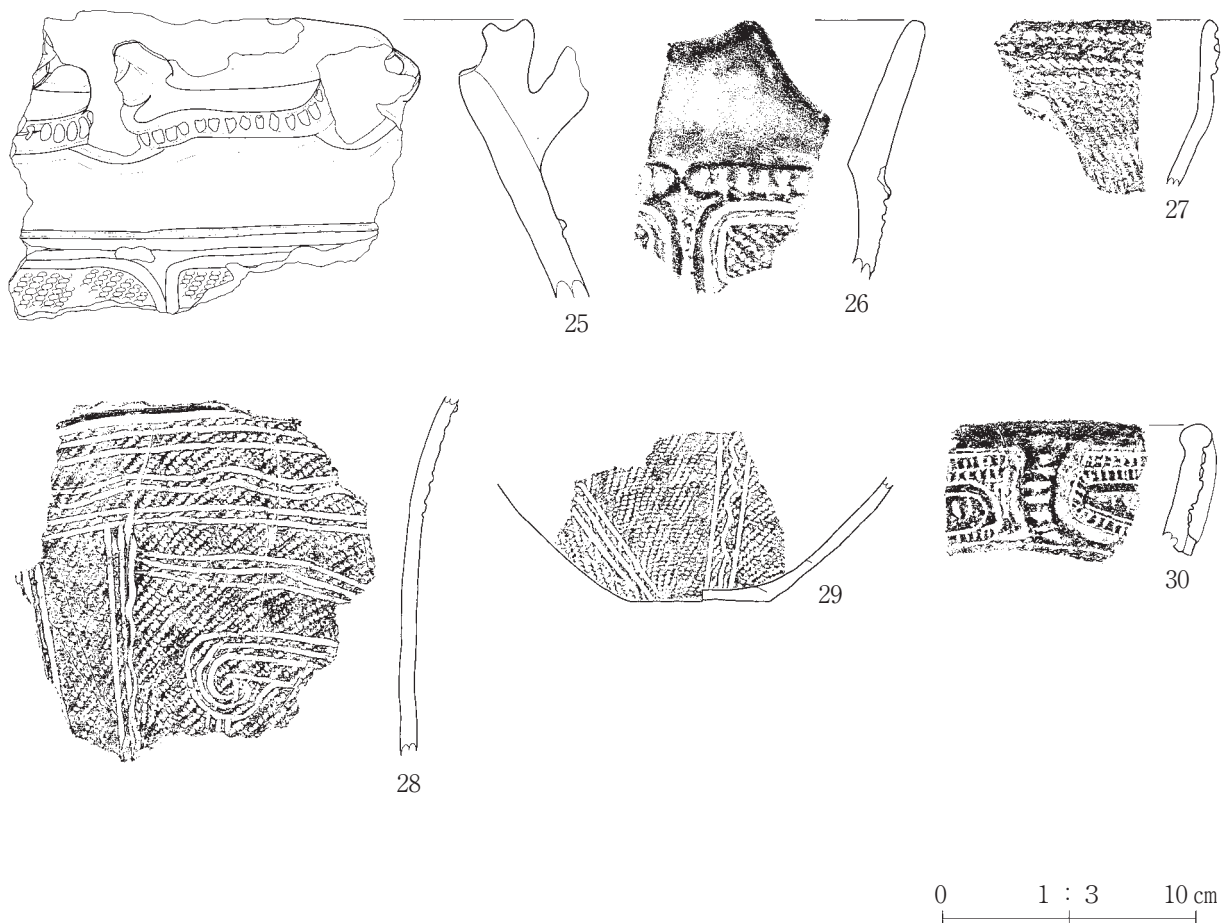
第 25 図 1 号住居跡出土遺物 3

鉢B類としたが、胴部から口縁部へと直立気味に立ち上がる形態で、わずかに外へと広がる。4単位の波状口縁を呈する。地文が器面全体に施されるが、それ以外の文様は口縁部のみである。形態や文様の在り方は大木7b式に類似するが、縄文原体押圧文は見受けられないので大木8a新段階とした。浅鉢(19)は地文が器面全体に施文され、口縁部には隆帯による横位の波状文が巡る。

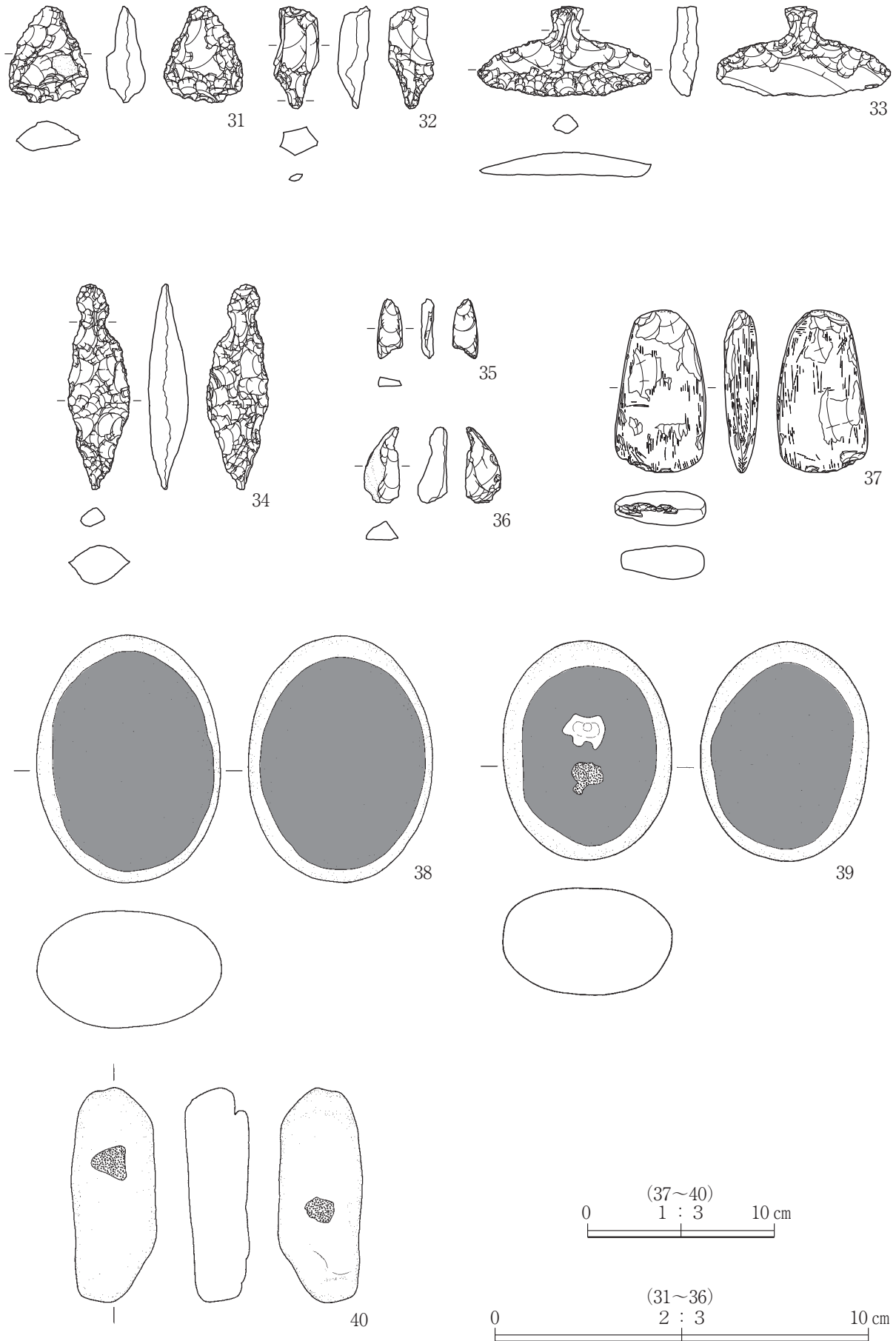
他に流れ込みと考えられるが、大木7a式古段階(30)や大木8a式古段階(27)、大木8b式古段階(28・29)なども埋土中から出土している。

石器は10点掲載した。31は石鏃失敗品である。厚みがあり、体部の中央まで二次加工が及んでいない。32は石錐でⅣ類。錐部の二次加工が全周しない。33は石匙でⅡ類。刃部は片面のみ加工して作出している。34は石匙のⅠ類としたが、刃部がやや歪であること、また体部に厚みがあることが特徴で、尖頭器の可能性もある。35・36はフレイクであるが、どちらも黒曜石である。産地は男鹿、あるいは月山(第七章-2を参照)である。37は磨製石斧で体部が短いのが特徴である。38～40は敲磨器類である。38・39は厚みのある礫を素材とし、両面が使用される。40は棒状の角ばった礫を素材とする。

[時期] 出土した土器の年代から大木8a式新段階期と判断した。



第26図 1号住居跡出土遺物4



第27図 1号住居跡出土遺物5

2～10号住居跡の重複関係について（第28図）

調査区北側、I B 6d 周辺～I C 6c グリッド周辺に位置する2～10号住居跡は、第28図に示した通り、9棟の竪穴住居跡が連鎖的に重複している。これらの竪穴住居跡群の重複関係については、本来、全ての竪穴住居跡を通す断面によって土層を確認し、遺構の新旧関係を判断すべきであるが、調査の進行上、2・3号住居跡、4～7号住居跡、8～10号住居跡の3つの竪穴住居群でのみ、とらえだにすぎず、また6～9号住居跡については、一部ないし、ほぼ全てが確認調査範囲に収まっており、部分的な情報のみで竪穴住居跡群の新旧関係を判断するに至った。

2・3号住居跡は伏甕の掘り方と壁溝の重複関係などから3号住居跡の方が新しいことが分かった。また3号住居跡は4号住居跡に壊されているので4号住居跡の方が新しい。4～7号住居跡は各断面で新旧関係を確認した（第63・70・80図）。7号住居跡と9号住居跡との新旧関係は確認できず不明である。8～10号住居跡のうち、10号住居跡は、8号住居跡の床下で検出したが、8号住居跡の埋土には10号住居跡の埋土は認められず、切り合っていないので、10号住居跡が埋没後、8号住居跡が構築されていることが推測でき、また出土土器は8号住居跡は大木10式主体、10号住居跡は大木9式主体である。したがって8号住居跡と10号住居跡との新旧関係は8号住居跡の方が新しいと考えている。

以上のことから

【古】

2号住居跡→3号住居跡→4号住居跡→5号住居跡→6号住居跡→7号住居跡

【新】

10号住居跡→8号住居跡→9号住居跡

という新旧関係を推定している。したがって、これらの竪穴住居跡群は2～7号住居跡は北から南に向け順に新しい竪穴住居跡へと移行し、8～10号住居跡は逆に南から北へと移行したことが分かる。

2号住居跡（第29～56図、写真図版4・5・39～54・258～260）

[位置・検出状況] 調査区北側、I B 5d、I B 6d、I B 7d、I B 5e、I B 6e、I B 7e、I B 5f グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 3号住居跡と重複する。当初は1棟の竪穴住居跡と想定し精査したが、掘り下げたところ、第29図のように2棟であることが分かった。そして3号住居跡の壁溝が本遺構の柱穴や伏甕埋土を切っているため、本遺構の方が古いと判断した。

[平面形] 円形を呈する。

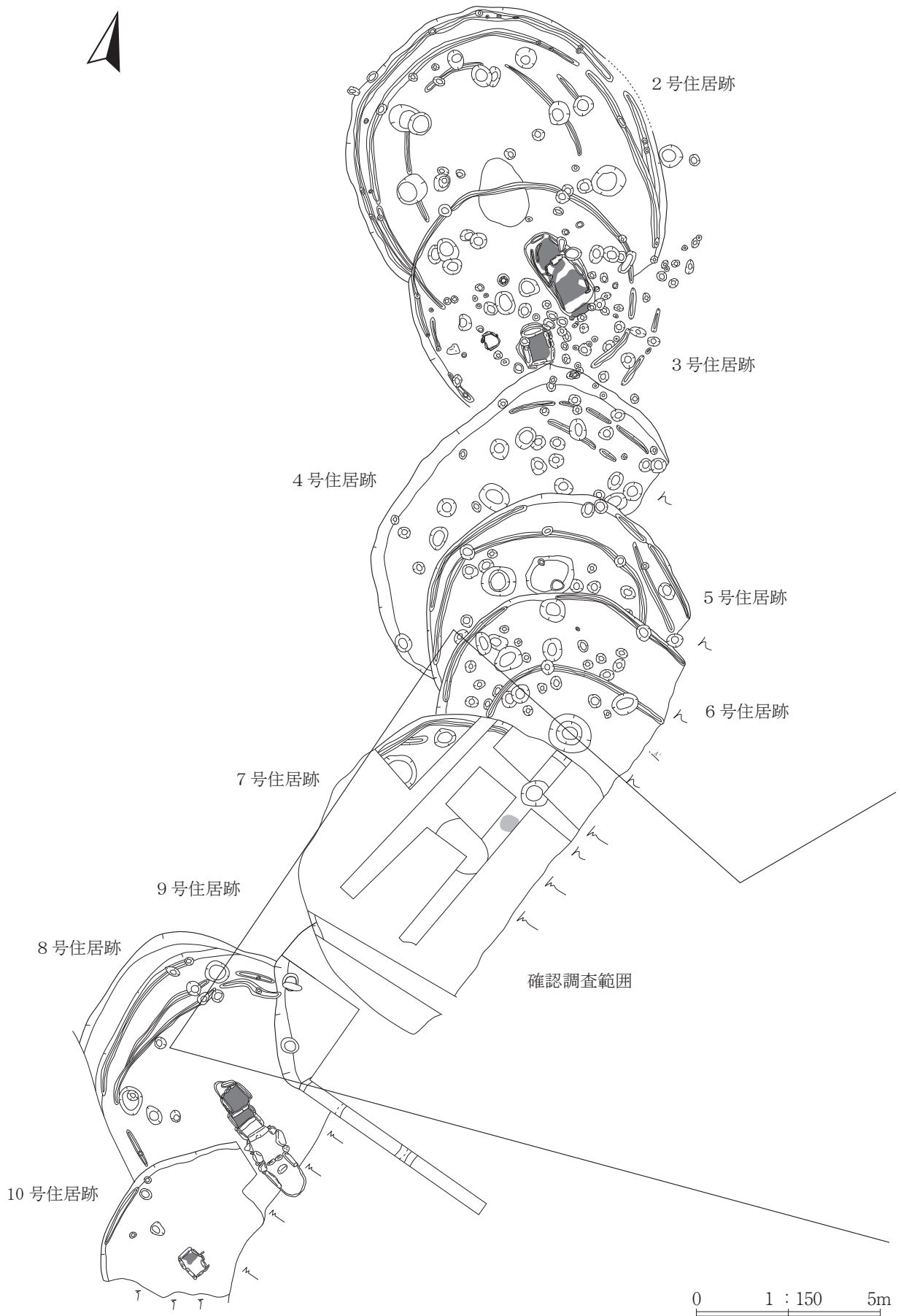
[規模] (897) × (819) cm、深さ68cm

[埋土] 15層からなる。黒～暗褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。ただし7・8層以外は遺構外からの流入土であり、厳密には本遺構の埋土ではない。

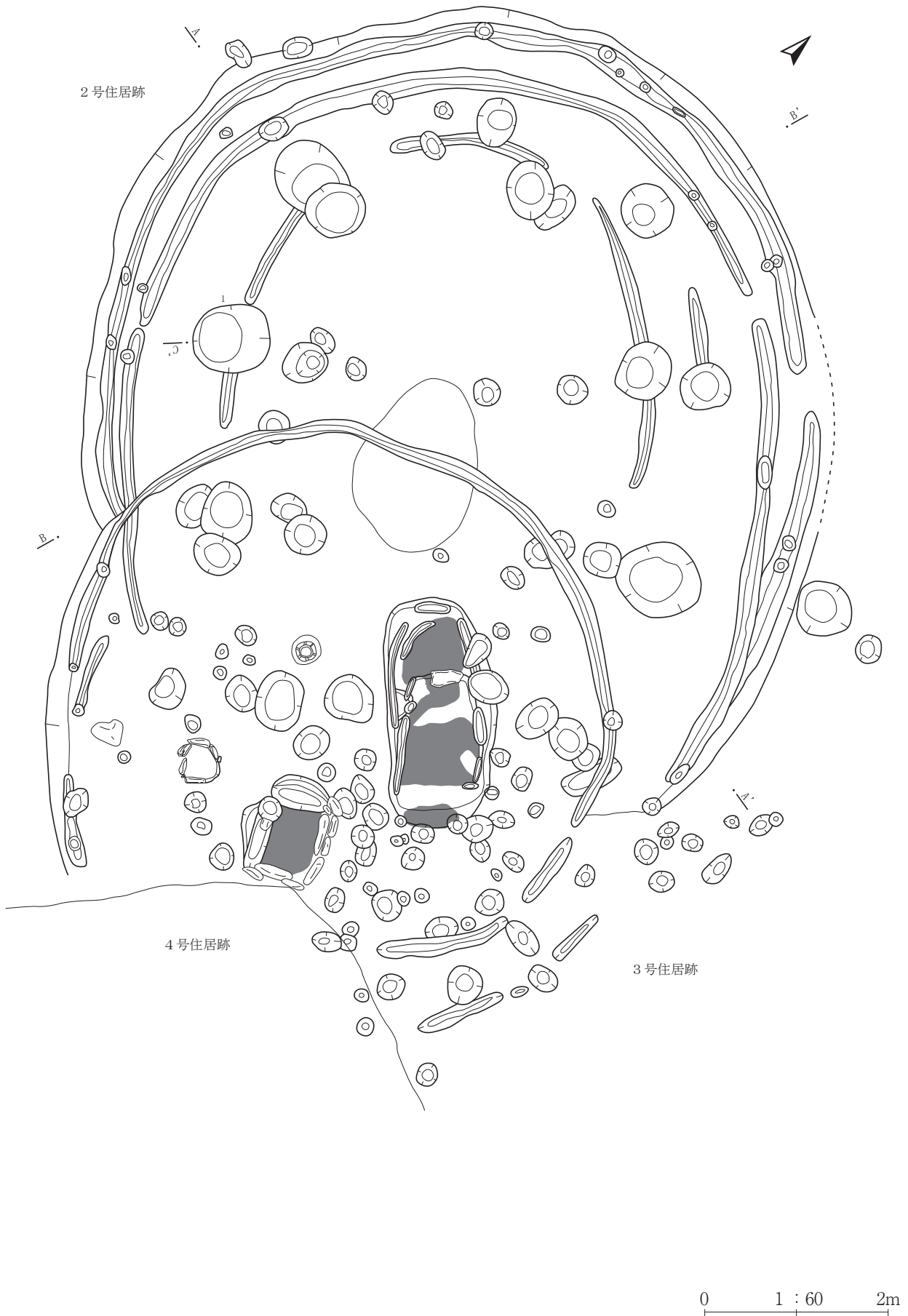
[床面・壁] 炉を検出したVI層面を床面と判断した。概ね平坦である。壁は、南壁以外が残存する。ほぼ直立気味である。

[炉] 石囲炉と推測するが、検出できたのは掘り方のみである（第32図）。

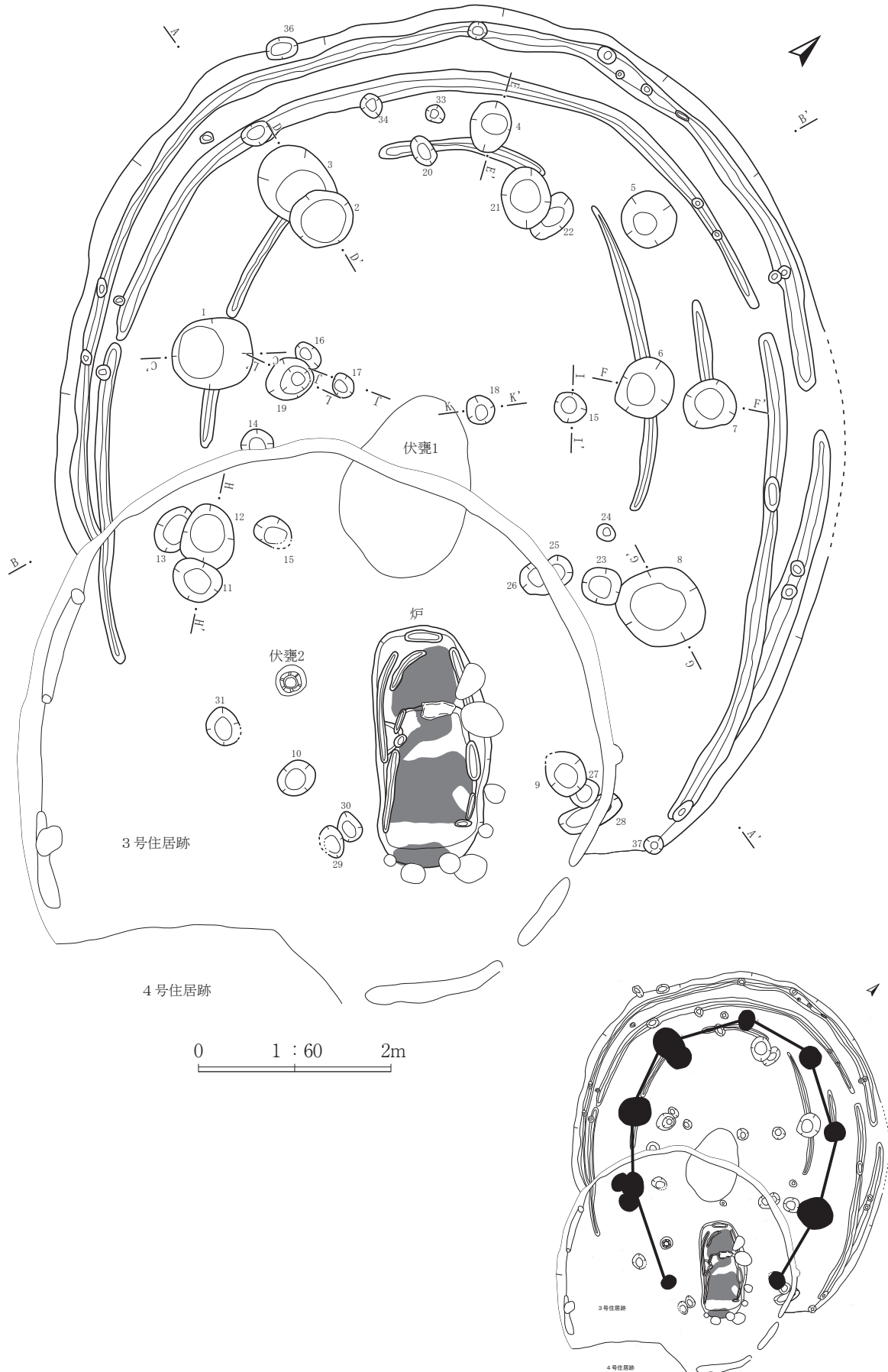
掘り方はやや不整な隅丸長方形を呈し、規模は239 × 134cmを測る。深さは床面から13cmで浅く、また底面（炉の使用面）には炉石の抜き取り痕と考える細い溝状の掘り込みが見受けられる。掘り方内の埋土は黒褐色シルトを呈し、住居埋土と類似するので、住居自体の埋没と同時に炉も埋没したものと推定する。底面には燃焼面（赤褐色の焼土の広がり）を確認した。焼土が広がるが、所々に被熱が及んでいない箇所があり、そこに炉石が据えてあったものと推測する。その点から、炉は元々、正方形



第28図 2～10号住居跡重複関係



第29図 2・3号住居跡



第30図 2号住居跡1

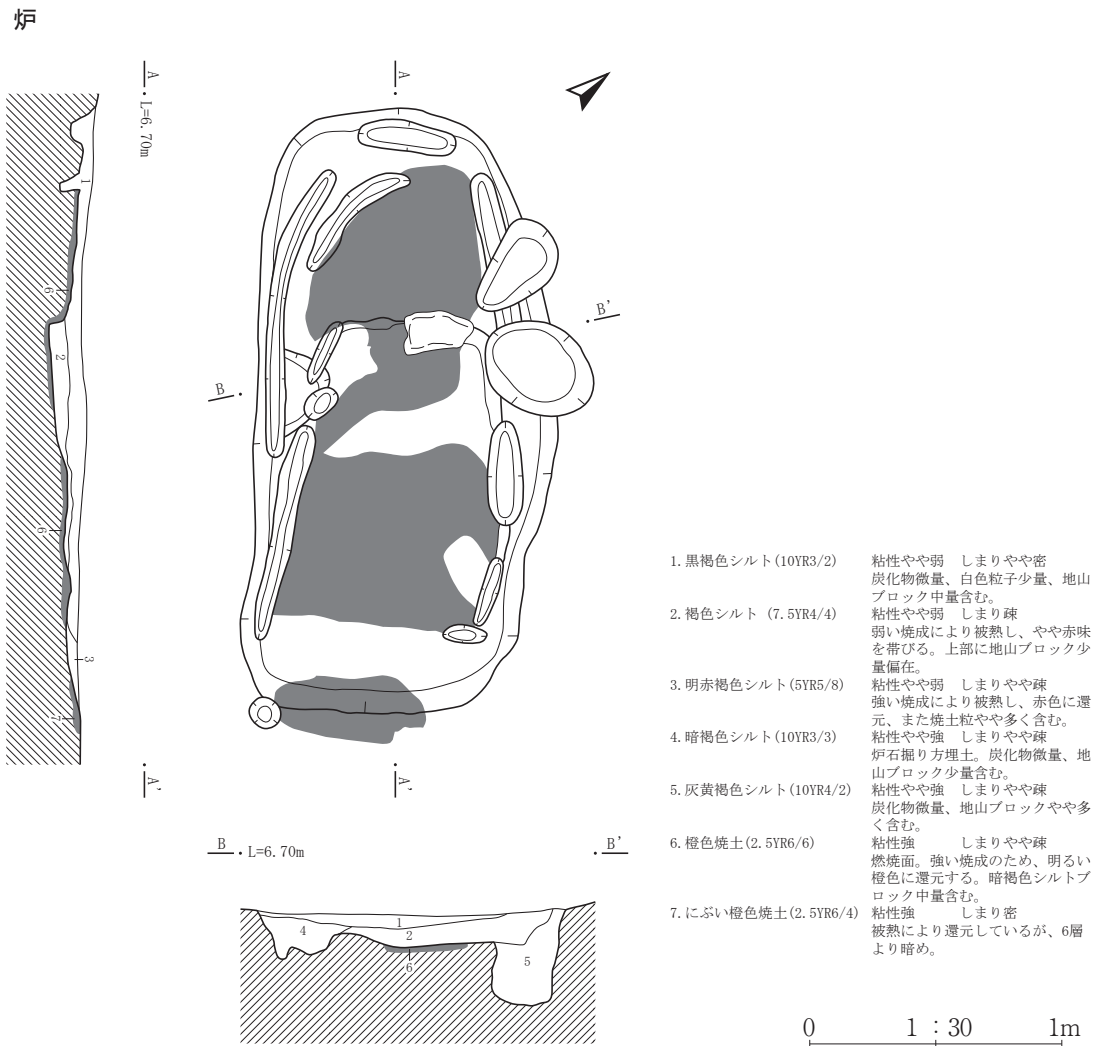
に近い形態の石囲炉で、位置をずらしながら2回以上の作り替えが行われたと推測する。ただし、どのような作り替えが行われたかは、不明である。

[附属施設] 柱穴25個を確認した。配列からPit 1、2(3)、4、5、7~10、11(12、13)を主柱穴とする9本柱であったと推定する。壁溝は3重でみつかっており、3号住居跡と重複する範囲を除き、全周する。したがって本遺構は2回以上の建て替えが行われたものとする。

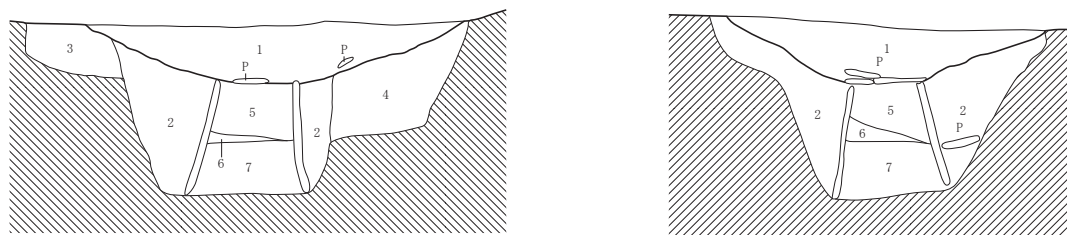
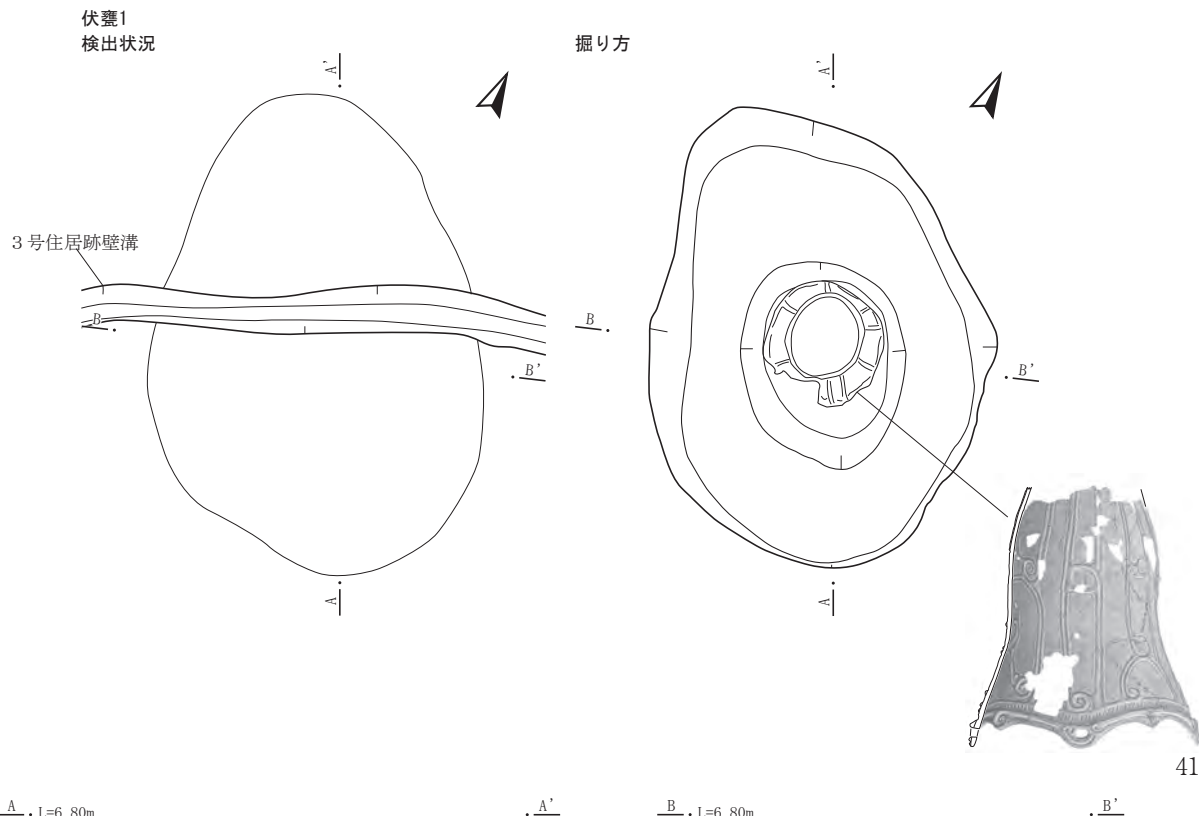
[伏甕] 2個検出した(第33図)。炉の主軸の延長(伏甕1)と炉の西脇(伏甕2)とに位置する。

伏甕1は大型の深鉢(41)を逆位にして設置されている。ただし、土器は胴部下半から底面が壊され、そのうえで、改めて別の土で埋められていた。埋設土器の掘り方は大きく、186×138cmの楕円形を呈する。掘り方底面は土器の口縁部の直径とほぼ同じであるが、中位で壇状に大きく広がっている。

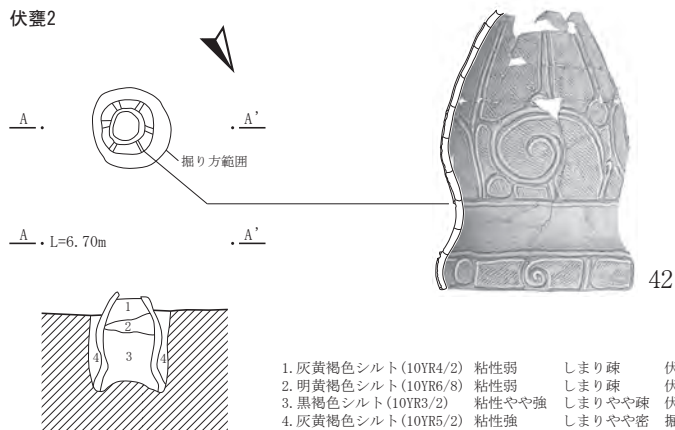
伏甕2は3号住居跡の範囲内で検出したが、炉の位置関係などから本遺構に伴われるものと判断した。伏甕1と比べると小さいが、器高37cmの深鉢(42)を逆位にして設置している。底面を消失しているが、これは重複する3号住居跡の床面が、本遺構の床面よりもわずかに低くなっていることから、3号住居跡構築時に、伏甕2は底部を破壊された可能性がある。この点も伏甕2が本遺構に伴うと考えた理由の一つである。掘り方は伏甕の口径よりわずかに大きい程度に掘り込んで設置している。また掘り方底面を、上げ底状にしてわずかに掘り残しており(第33図断面)、土器を固定しやすくしている。



第32図 2号住居跡3



- | | | | |
|--------------------|-------|--------|---|
| 1. 黒褐色シルト(10YR2/2) | 粘性やや弱 | しまり密 | 伏壘上部(底面)を壊している層。炭化物微量、地山ブロック、白色粒子中量含む。 |
| 2. 黒褐色シルト(10YR3/2) | 粘性やや強 | しまりやや疎 | 伏壘を設置した後に埋めた層。炭化物微量、地山ブロック微量含む。 |
| 3. 暗褐色シルト(10YR3/3) | 粘性強 | しまり密 | 掘り方?埋土。炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。 |
| 4. 暗褐色シルト(10YR3/3) | 粘性強 | しまり密 | 掘り方?埋土。3層土に類似し、炭化物少量、地山ブロック中量、白色粒子少量含む。 |
| 5. 黒褐色シルト(10YR2/2) | 粘性やや弱 | しまり疎 | 伏壘内埋土。底面削平後に流入。炭化物微量、地山ブロック微量含む。 |
| 6. 黒褐色シルト(10YR2/2) | 粘性やや弱 | しまり疎 | 伏壘内埋土。底面削平後に流入。炭化物微量、焼土粒微量含む。 |
| 7. 黒褐色シルト(10YR3/2) | 粘性強 | しまり密 | 伏壘内埋土。底面削平後に流入。炭化物微量、地山ブロック中量、白色粒子微量含む。 |



- | | | | |
|---------------------|-------|--------|------------------------------|
| 1. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) | 粘性弱 | しまり疎 | 伏壘内堆積土。炭化物微量含む。 |
| 2. 明黄褐色シルト(10YR6/8) | 粘性弱 | しまり疎 | 伏壘内堆積土。炭化物微量、暗褐色シルトブロック中量含む。 |
| 3. 黒褐色シルト(10YR3/2) | 粘性やや強 | しまりやや疎 | 伏壘内堆積土。炭化物微量、白色粒子微量含む。 |
| 4. 灰黄褐色シルト(10YR5/2) | 粘性強 | しまりやや密 | 掘り方埋土。地山ブロック中量、白色粒子中量含む。 |

0 1 : 30 1m

第33図 2号住居跡4

[出土遺物] 床面から埋土上位、また付属施設から縄文土器 412,211.9g、石器 505 点出土している。前述の通り、本遺構の埋土はほとんどが遺構外からの流入土であるので、厳密に本遺構に伴うと言える遺物がどれくらいあるかは定かではない。ただし埋土下位から床面上、および炉内から縄文土器、石器が多量に出土しており、これらは本住居跡に伴うと考え、特に縄文土器の多くは、ほぼ大木 8b 式新段階に比定され、まとまったものであると言える。

縄文土器 121 点を掲載した。41 は伏甕 1 である。文様が異なるので 2 方向から図示した (41a、41b)。大木 8b 式新段階に比定される大型の深鉢で胴部の一部と底部が欠損する。4 単位の波状口縁を呈し、波頂部には円孔が施される。深鉢 A 類と考えるがほぼ直立気味で、胴部中位がわずかに括れ、他の深鉢 A 類とは形態がやや異なる。口縁部には縦位の短沈線が巡る。胴部には渦巻き文と縦位に垂下する隆帯が付く。42 は伏甕 2 である。深鉢 C 類で底部が欠損する。頸部は無文で、口縁部と胴部それぞれに隆帯による渦巻き文と区画文が施文される。大木 8b 式新段階と判断するが、隆帯による区画が見受けられ、ほぼ大木 9 式古段階に近い段階と推測する。43 は口縁部から胴部の大型破片で、丸く膨らむ深鉢 B 類で 4 単位の波状口縁を呈する。口縁部から胴部に隆帯による渦巻き文とそれらを連結する隆帯が付く。大木 8b 式新段階である。44～57 はいずれも深鉢 A 類で 2～3 単位の波状口縁を呈する。大木 8b 式新段階。口縁部は無文、胴部には隆帯による複数の渦巻き文と縦位に垂下する隆帯がそれぞれ連結している。52～54 は胴部上半に不整な楕円形区画が形成されており、大木 9 式古段階に近い段階と推測する。55・56 は波頂部下に隆帯による渦巻き文が付き、その下に縦位の隆帯が垂下する。他と比べて簡素な文様となっており、渦巻き文様の退化ととらえることができる。これらも大木 9 式古段階に近い段階と推測する。56 は 3 単位の波状口縁で、あまり例がない。57 は胴部が大きく膨らむ形態で、口唇部は大小突起で 4 単位の波状口縁を呈する。波頂部下には隆帯による渦巻き文が描かれ、また胴部は隆帯による渦巻き文と区画が描かれる。大木 9 式古段階に近い段階か。58 は深鉢 A 類・59 は深鉢 B 類で形態は異なるが同様な文様が描かれている。60 は胴部がやや膨らみ、口縁部が内湾する形態で、隆帯による楕円形や隅丸方形の区画が縦位に並ぶ。渦巻き文は描かれないので、大木 9 式古段階と判断する。

61～80 は破片で、主に口縁部片である。複数の隆帯による渦巻き文とそれらを連結する隆帯が付くので、概ね大木 8b 式新段階であるが、64・65・67～69 のように胴部上半に隆帯による区画が施文される土器もあるので、一部大木 9 式古段階に近い段階のものも含まれる。

81 は深鉢 D 類で下膨れの寸胴状を呈し、口縁部下に 4 単位の大型把手が付く。把手は 4 単位のうち 2 箇所には渦巻き文が描かれ、さらに縦位に穿孔が施される。そして胴部には微隆帯で浮き彫り状に渦巻き文が描かれている。あまり事例の多くない土器であるが、渦巻き文が付されることから大木 8b 式新段階と判断した。82 は口縁部片であるが中空の大型把手が付き、沈線で渦巻き文が描かれる。大木 8b 式新段階である。83～85 は深鉢 A 類で胴部が膨らみ、口縁部が内湾する形態だが、非常に大型である。83 は大木 8b 式新段階で、地文に縦位の単軸絡条体 1 類を施文するのが特徴である。84 は地文の他、隆帯による渦巻き文と垂下する縦位の隆帯のみで簡素な文様構成となり、大木 9 式古段階と判断した。

85～103 は大木 8b 式新段階～大木 9 式古段階に比定される深鉢である。このうち 86～96、109 は形態が復元できた。いずれも胴部が丸く膨らみ口縁部が内湾する形態で、2 単位ないし 4 単位の波状口縁か平縁である。86 は平縁で、縦位の単軸絡条体 1 類を地文とし、沈線による渦巻き文や楕円形区画を描く。87・93・94 も同形態で、文様も類似するが、口縁部がわずかに肥厚し、無文となる。地文は単軸絡条体 1 類か、斜行縄文の 2 種類が見受けられる。それらと文様が類似するのが 88～91 であるが、これらは波状口縁を呈する。92 は 2 単位の波状口縁を呈し、胴部文様は 88～91 と同様であ

るが、口縁部には沈線を加えた隆帯が巡る。95・96は大型の深鉢である。95はやや直立気味に外へと開き、口縁部が内湾する形態で、口唇部は平縁であるが、1単位の突起が付く。突起には円孔が施される。突起も含め口縁部は無文、胴部との間に2段の刺突文列が巡る。胴部は縦位の単軸絡条体1類を地文とし、沈線で渦巻き文や楕円形区画を描いている。96は胴部が丸く膨らみ口縁部が内湾する形態で、2単位の波状口縁を呈する。口縁部は無文で、胴部との間に2段の押し文が巡る。胴部の文様は95と同様であるが、渦巻き文は見受けられないので、大木9式古段階と言っても良いかもしれない。110は95・96と同様の文様で口縁部と胴部の間に2段の刺突文列が巡る。また胴部の地文は単軸絡条体1類で、縦位を主体としながらも、一部に斜位にも施文し、地文同士が一部交差している。97～103・105～108・110は比較的、大きな口縁部片である。描かれる文様は95・96と同様であるが、口縁部文様が異なるものが幾つか見受けられる。103は口縁部下に1条の隆帯と刺突文列が巡る。107は口縁部に2段の円形刺突文列が巡る。108は口唇部に沈線が施文される。口縁部は無文であるが幅が極端に狭い。110は口縁部に2条の隆帯が巡る。

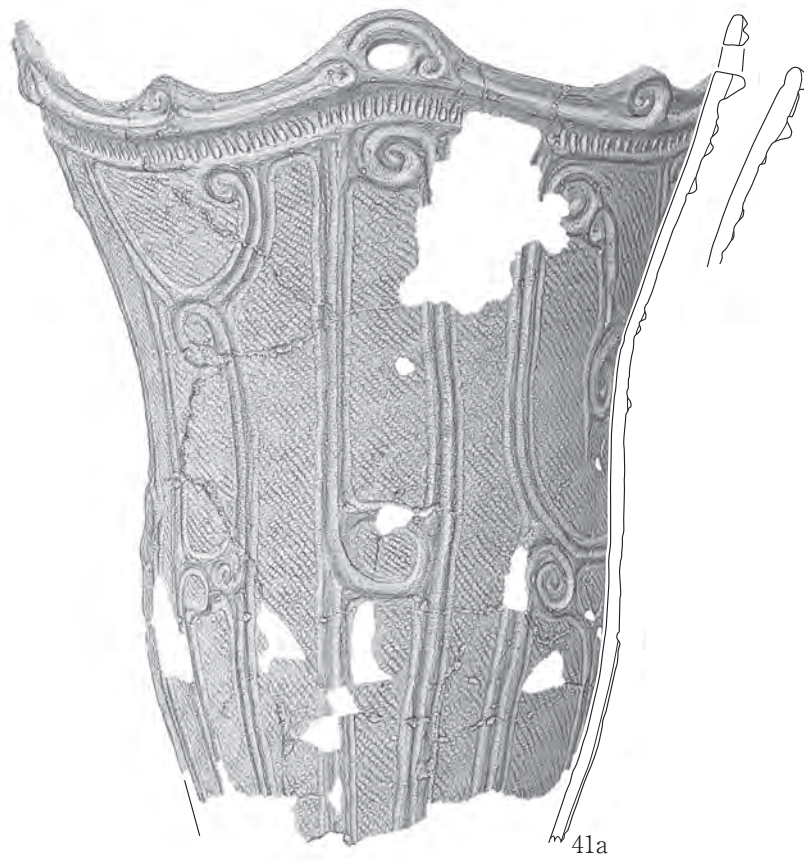
111・112は大木8b式新段階の浅鉢である。111は胴部が大きく開き、口縁部が内湾する形態で、器面全体に縦位の単軸絡条体1類を施文した、口縁部には隆帯による区画と渦巻き文を施文する。112は口縁部～胴部片であるが、胴部は無文、口縁部は隆帯による横位の区画と渦巻き文を施文し、区画内には斜行縄文が施文される。

以上のように出土する縄文土器は概ね、大木8b式新段階、あるいは大木8b式新段階～大木9式古段階に比定される土器が主体である。ただしその時期から外れる土器(113～137)も多い。

113・115～117は大木9式新段階の深鉢である。いずれも口縁部～胴部に、縦位の楕円形区画が施文され、区画内には磨消技法で縄文が施文される。116には胴部中位に横位の把手が付き、それを上下2条の隆帯が連結する。114は大木10式新段階の深鉢口縁部片である。118は大木10式古段階の鉢で、外へと大きく開き、口縁部が屈曲する形態である。口縁部は無文で、胴部には曲線状区画が横へと連結しながら巡る。区画内は充填技法で縄文が施文される。119～135は大木8a式古段階、新段階に比定される土器である。119は深鉢A類で、1単位の波状口縁を呈する。口縁部は斜行縄文を地文とし、隆帯が巡る。胴部は地文のみである。120～131は口縁部片である。122は口唇部に渦巻き状の大型突起が付く。123は大木8a式古段階の浅鉢口縁部片で隆帯による渦巻き文を加えた突起が付き、口縁部、胴部に縄文原体押圧文が施文される。132・134は大型の破片で、口縁部には隆帯による渦巻き文と隆帯が巡り、胴部上半には平行沈線による波状文が巡る。133も同様な文様であるが、口縁部に付く隆帯下は胴部まで無文である。135は口縁部に1単位の突起が付き、横位に隆帯が巡る。胴部は横位の曲線状文が巡る。136は地文の他、口縁部に2段の縄文原体押圧文と沈線による波状文のみである。大木8a式古段階の深鉢と考える。137は大木7b式～大木8a式の浅鉢で、口縁部に幅広のX字状の突起が付き、胴部との間には半裁竹管状工具による刺突文列が巡る。

138～157・159～161は粗製の深鉢である。形態や、口縁部が肥厚し無文となる特徴(138・142・143・148～151)など、大木8b式新段階～大木9式古段階の深鉢に類似する点が多いので、それらの時期に比定される土器群と判断している。158は地文の他、縦位の沈線が施文されるので、大木8b式新段階～大木9式古段階の範疇と推測する。底面に敷物圧痕が見受けられる。159～161は小型の深鉢で、地文のみある。

土製品は埋土上・下位から18点出土しており、そのうち円盤形土製品3点(163～165)掲載した。いずれも深鉢の胴部片を転用し、163は大木8b式に見られる隆帯が付いている。163・165は円形に、164は方形に整形している。

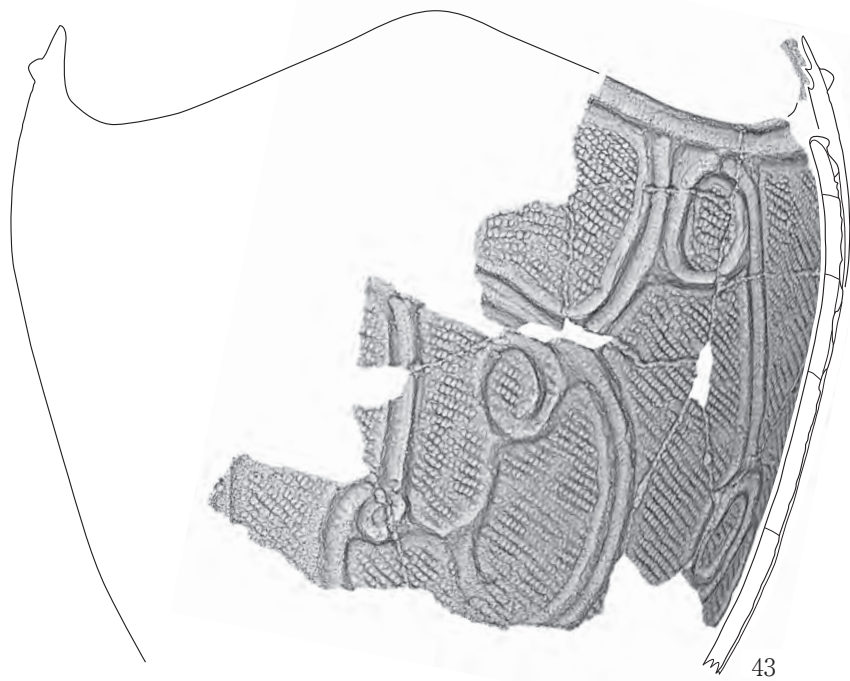


0 1 : 5 10 cm

第 34 図 2号住居跡出土遺物 1



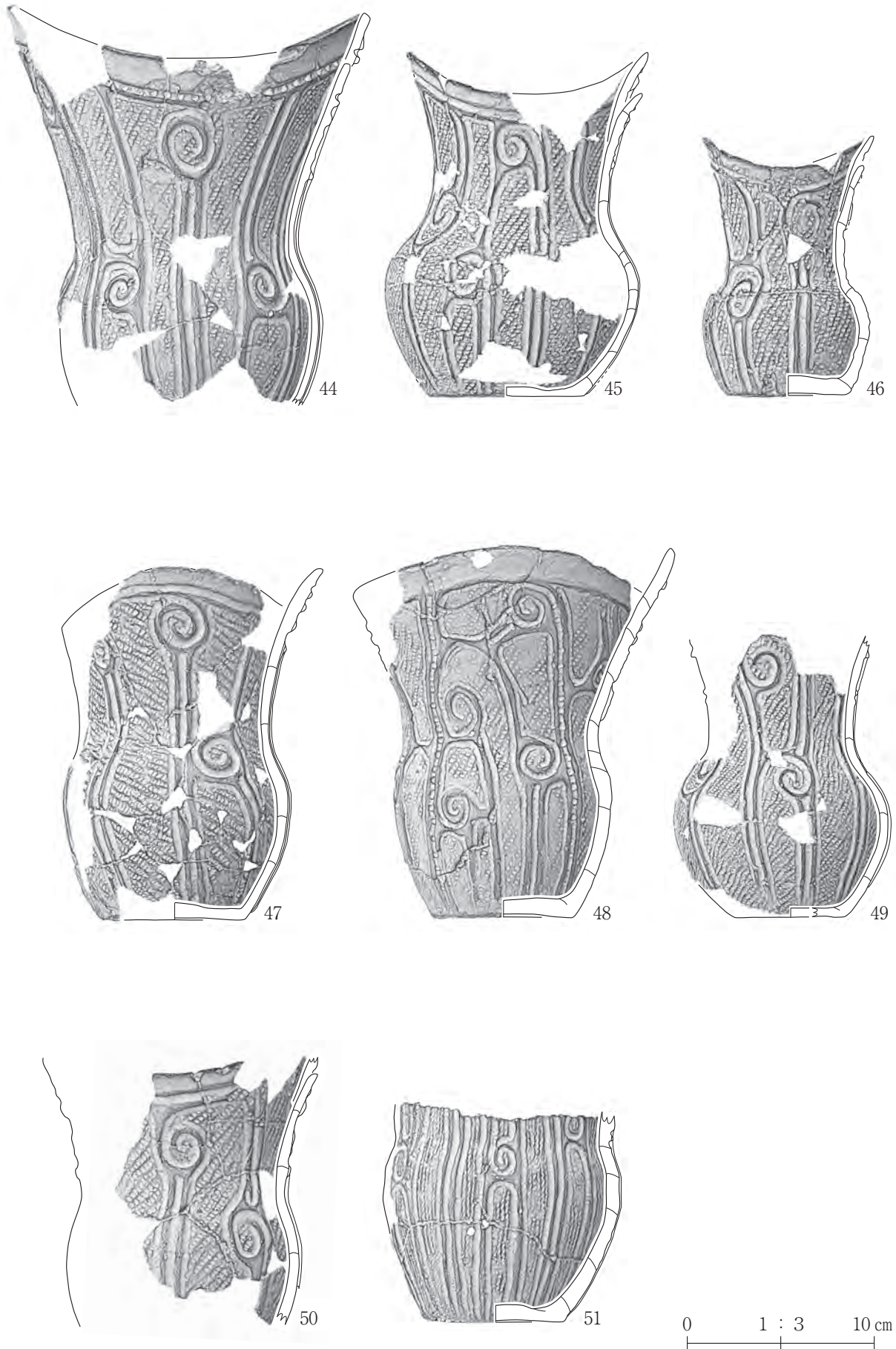
42



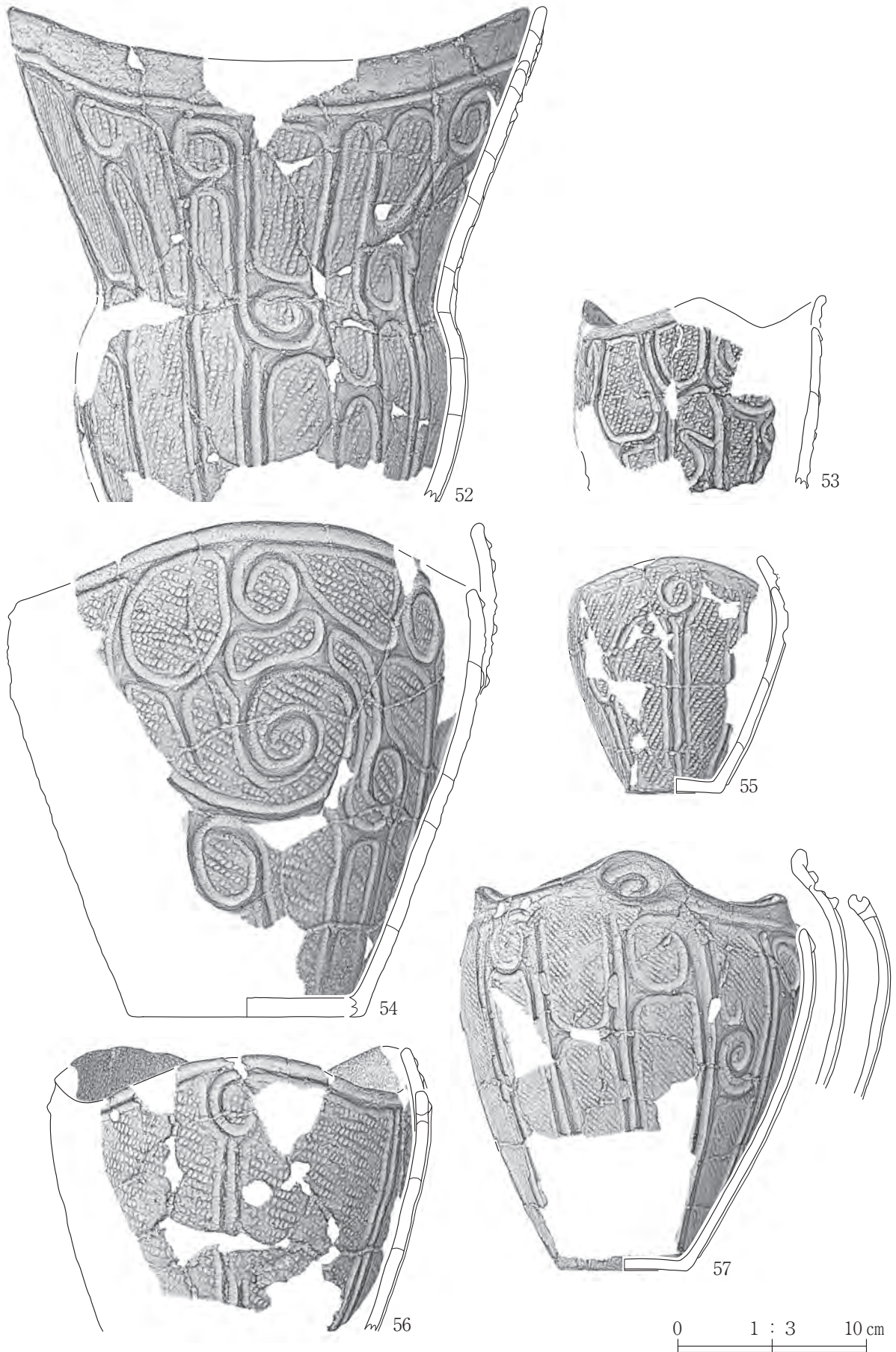
43

0 1 : 3 10 cm

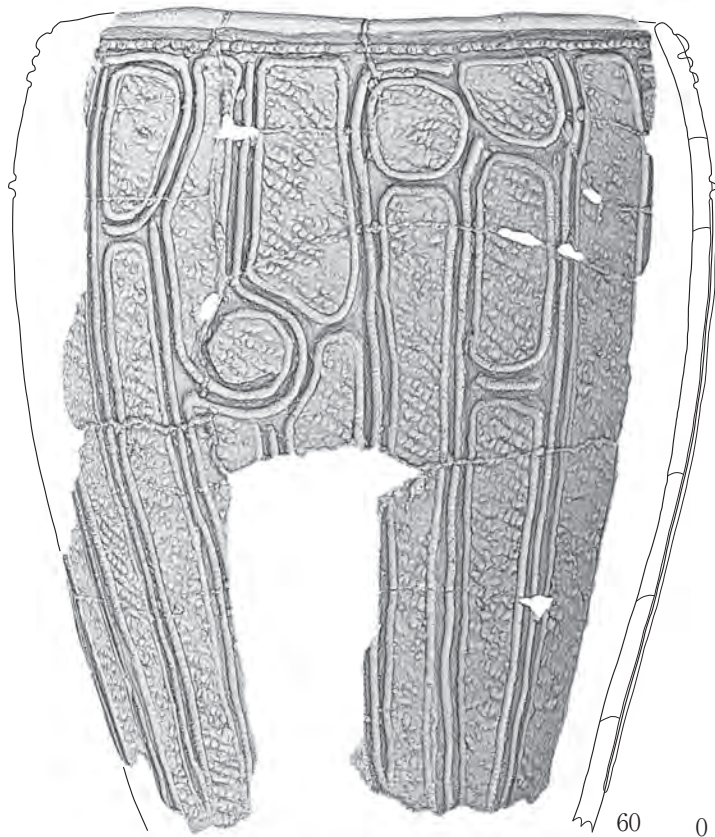
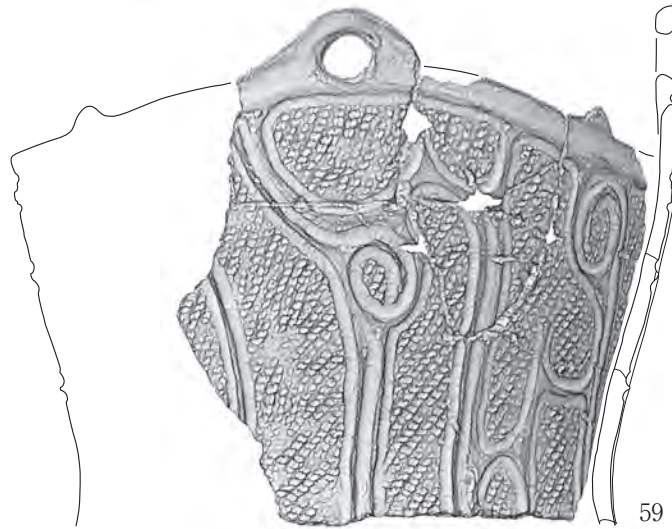
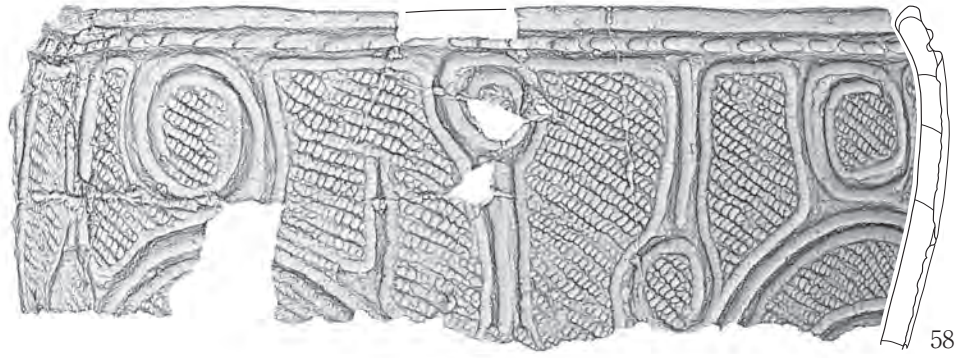
第 35 図 2号住居跡出土遺物 2



第36図 2号住居跡出土遺物3

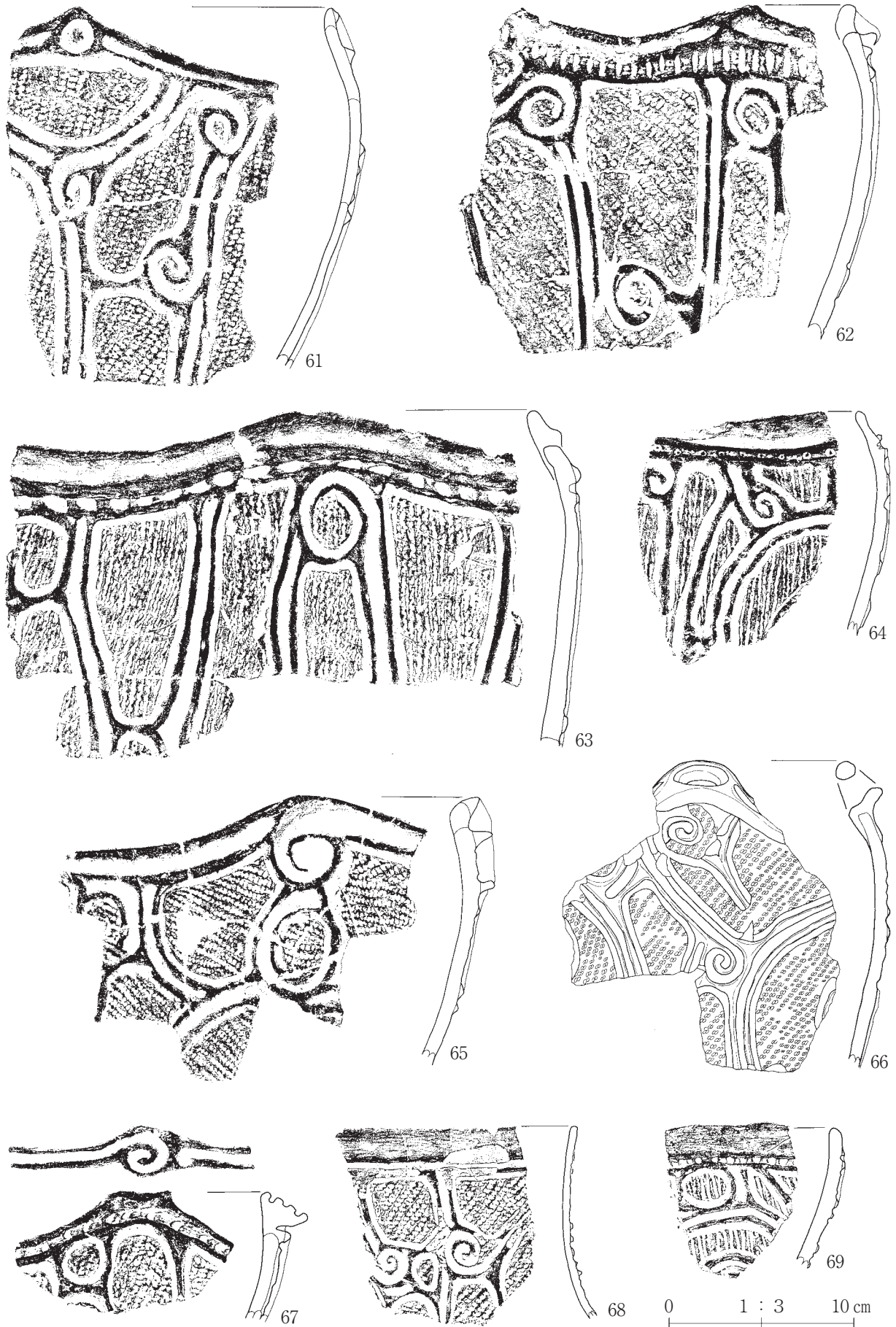


第 37 図 2号住居跡出土遺物 4

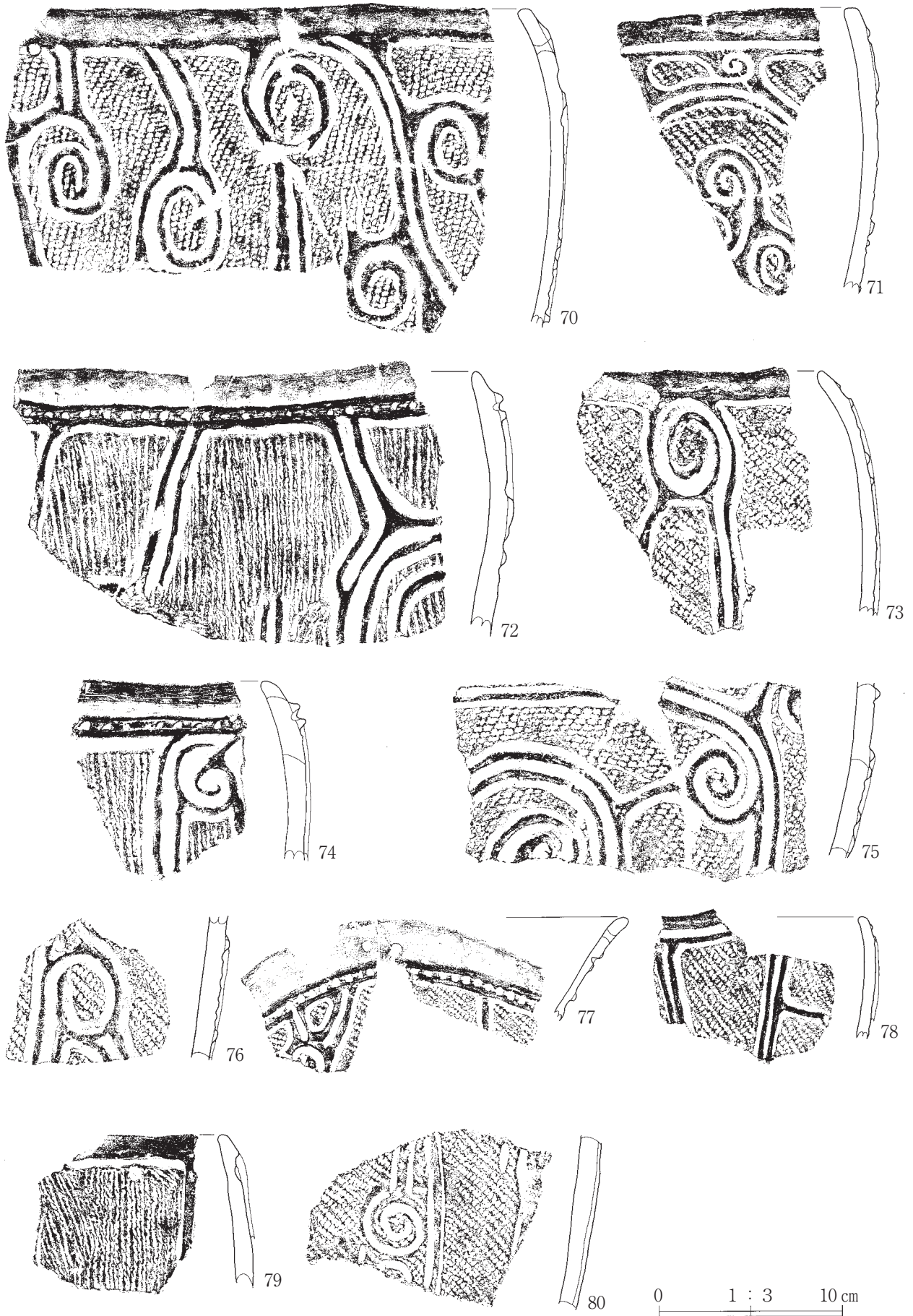


0 1 : 3 10 cm

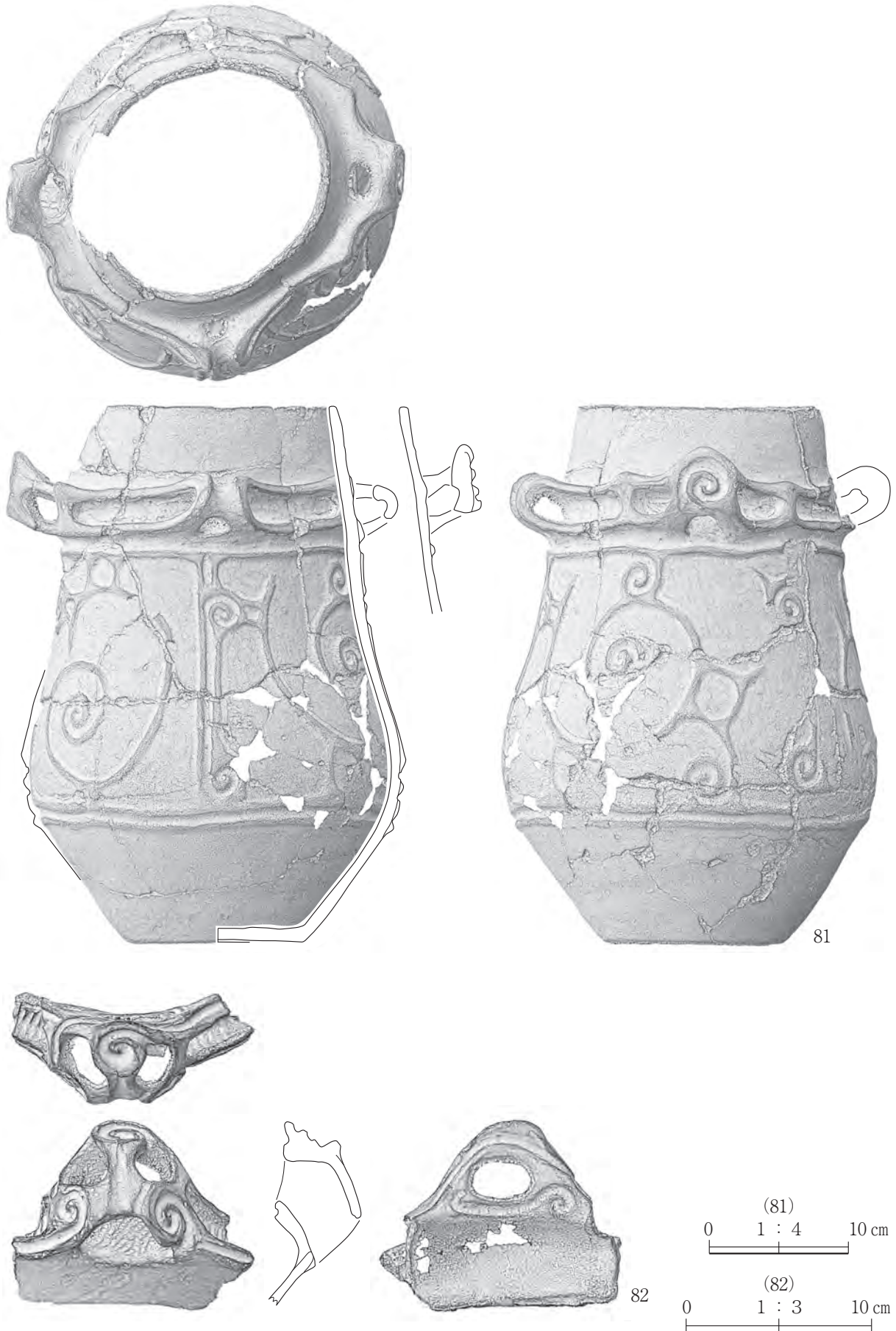
第 38 図 2号住居跡出土遺物 5



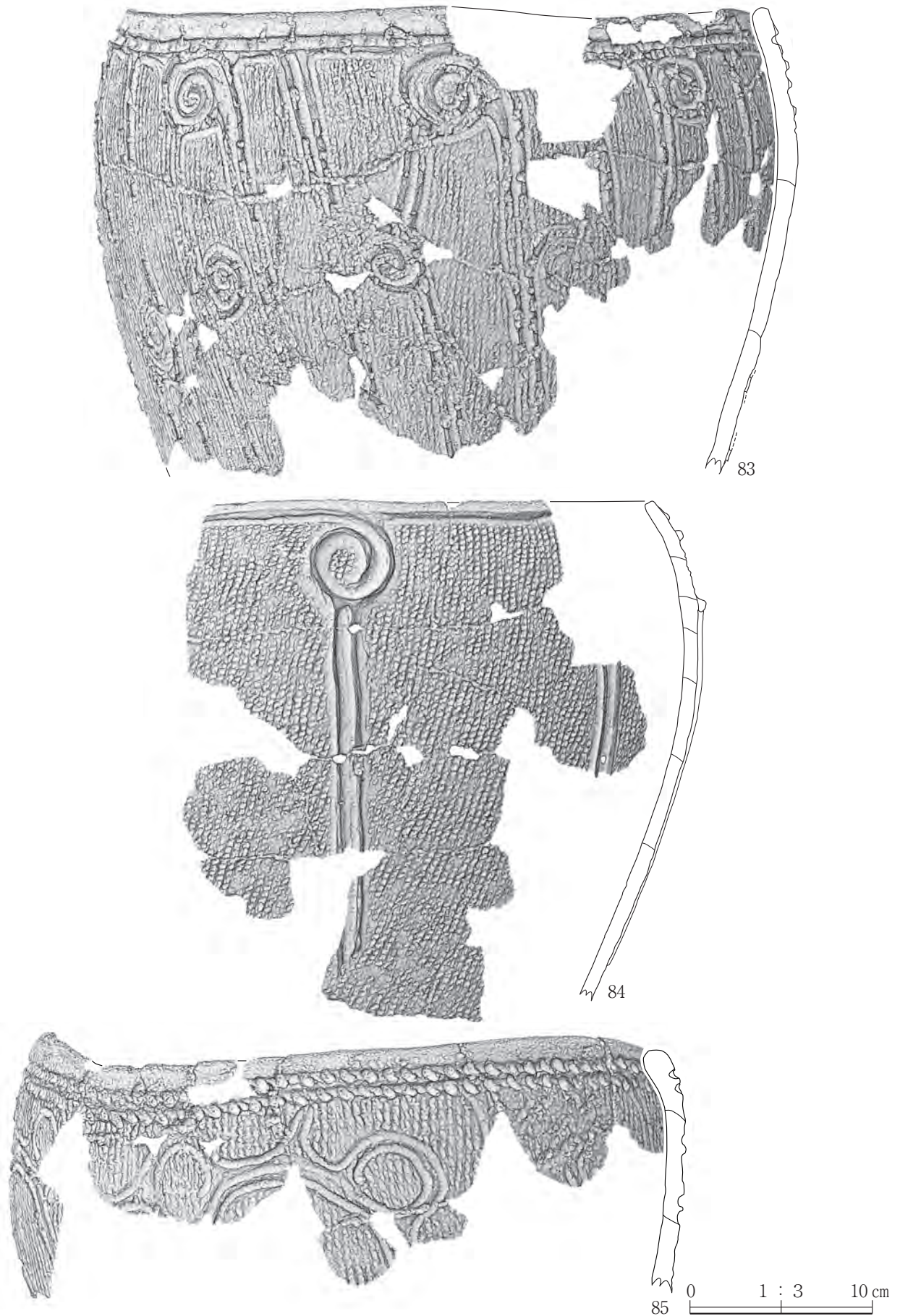
第 39 図 2号住居跡出土遺物 6



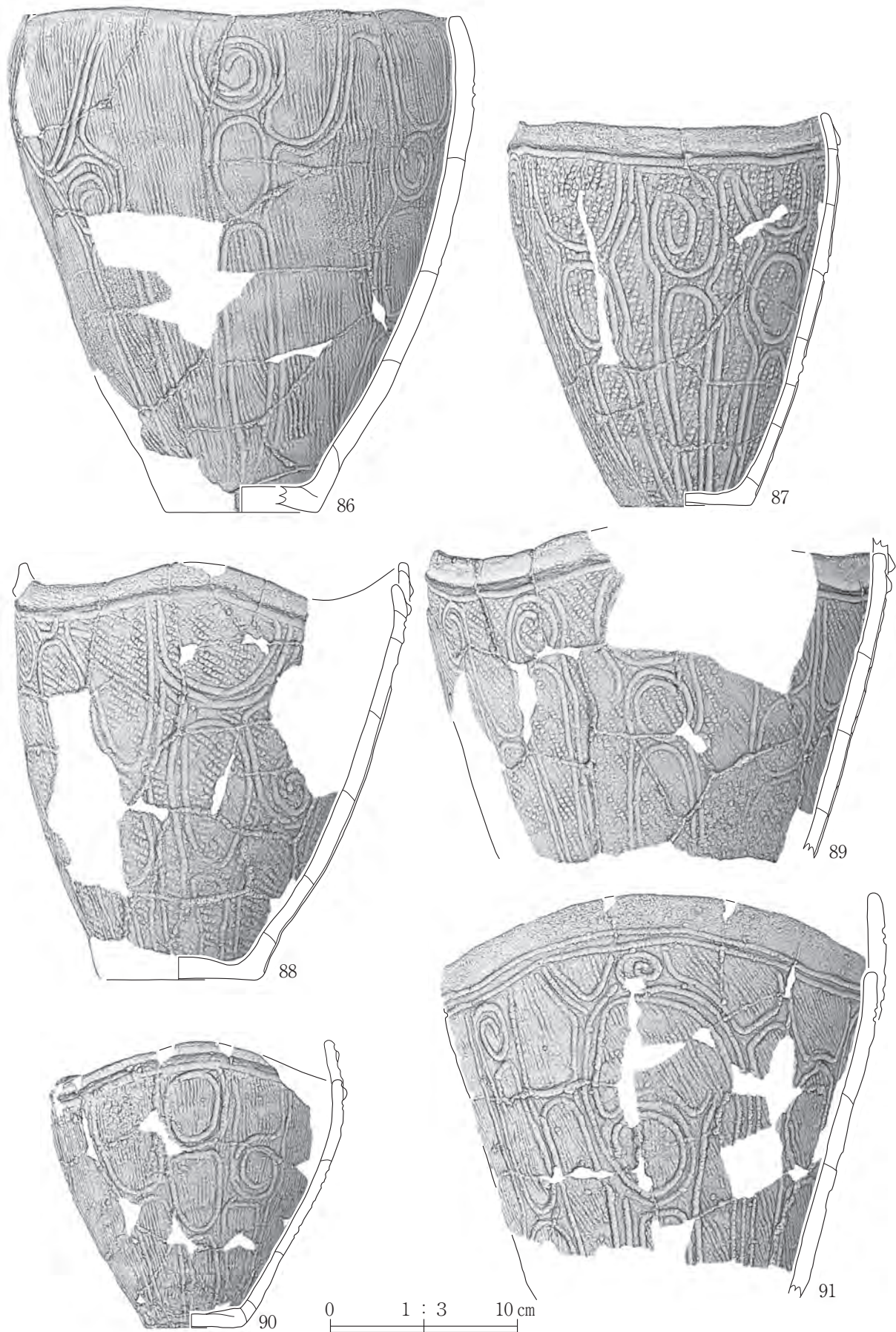
第40図 2号住居跡出土遺物7



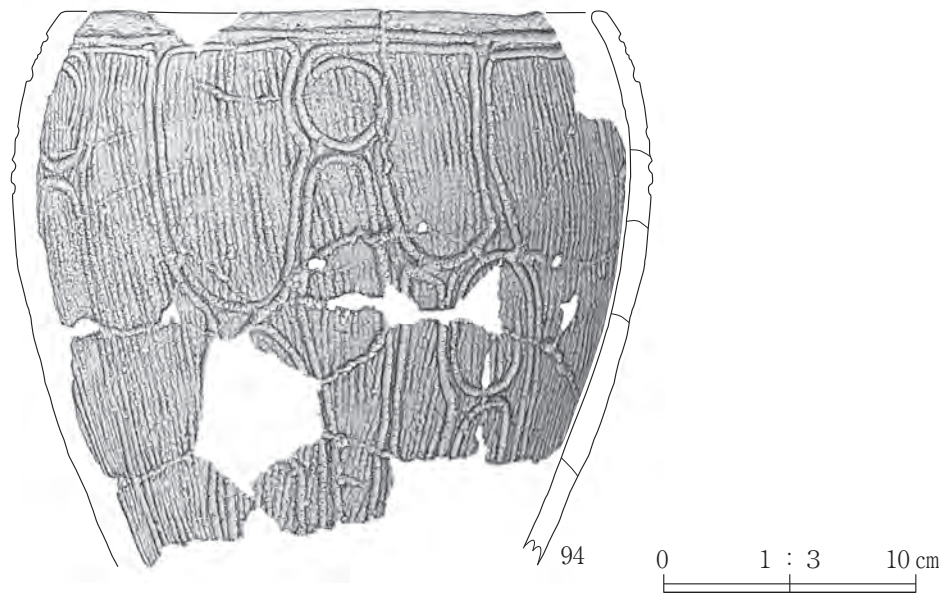
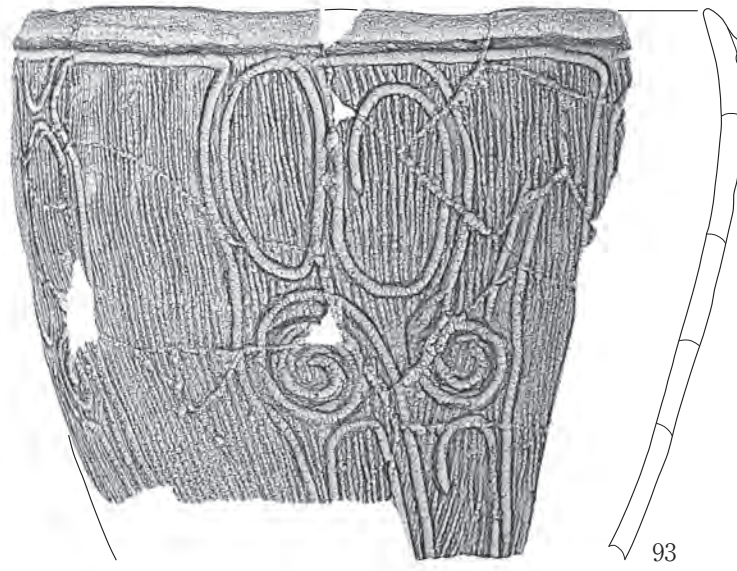
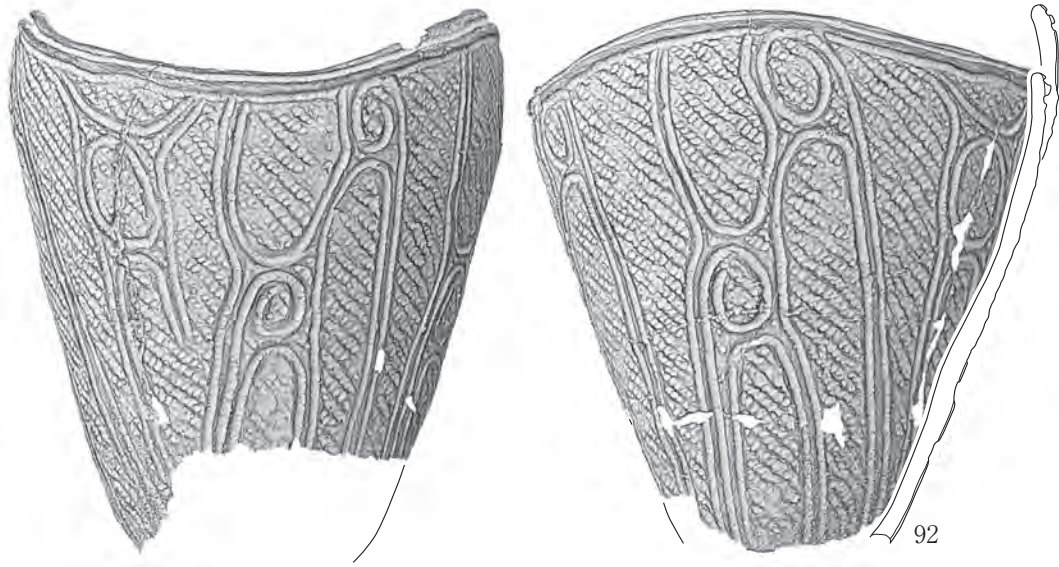
第 41 図 2号住居跡出土遺物 8



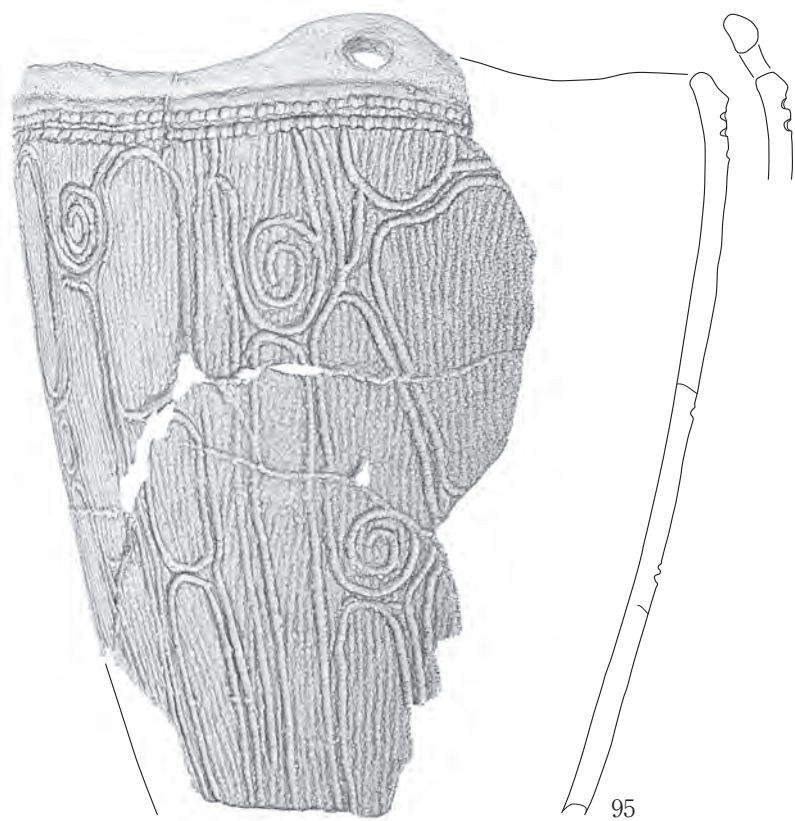
第 42 図 2号住居跡出土遺物 9



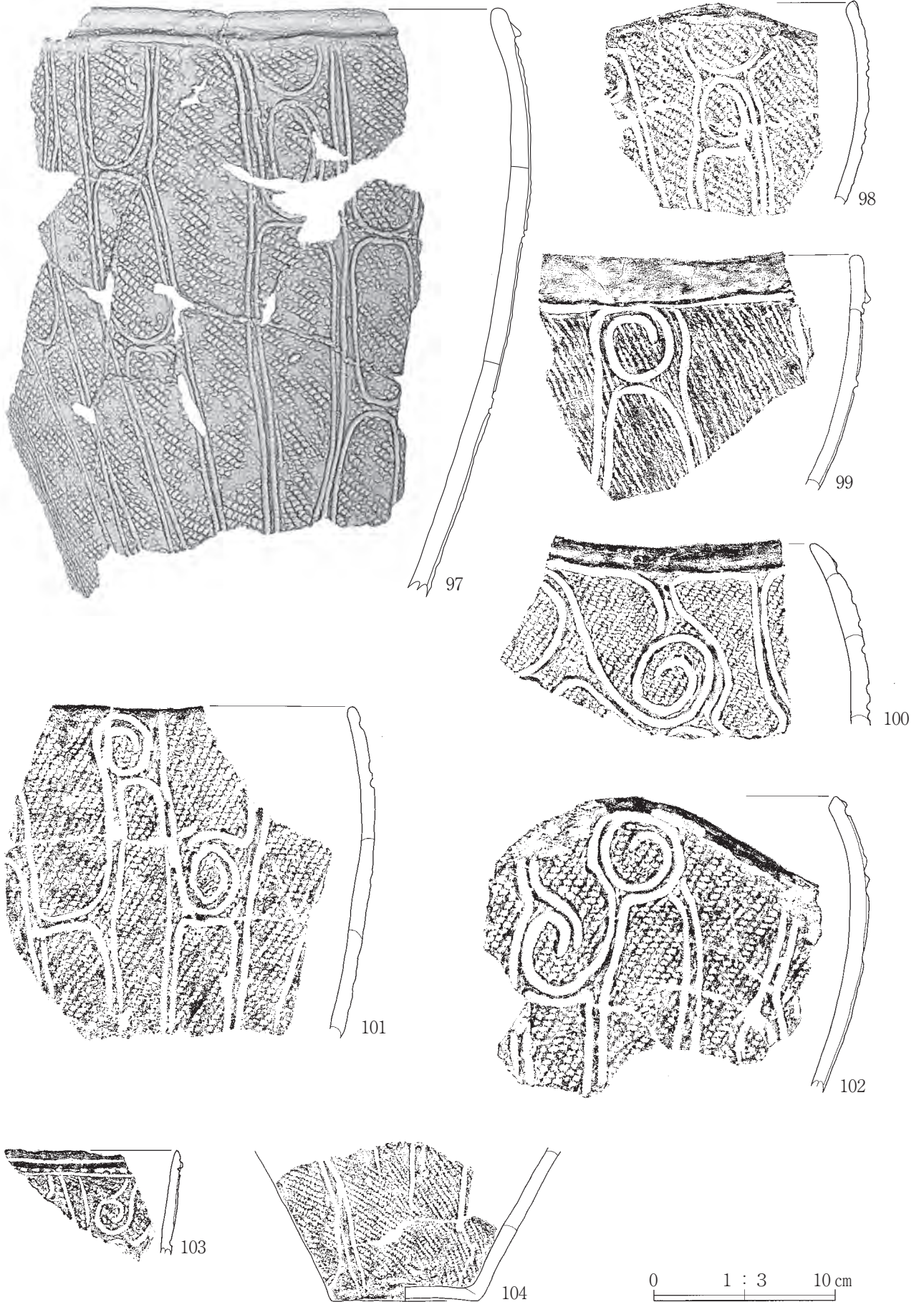
第43図 2号住居跡出土遺物 10



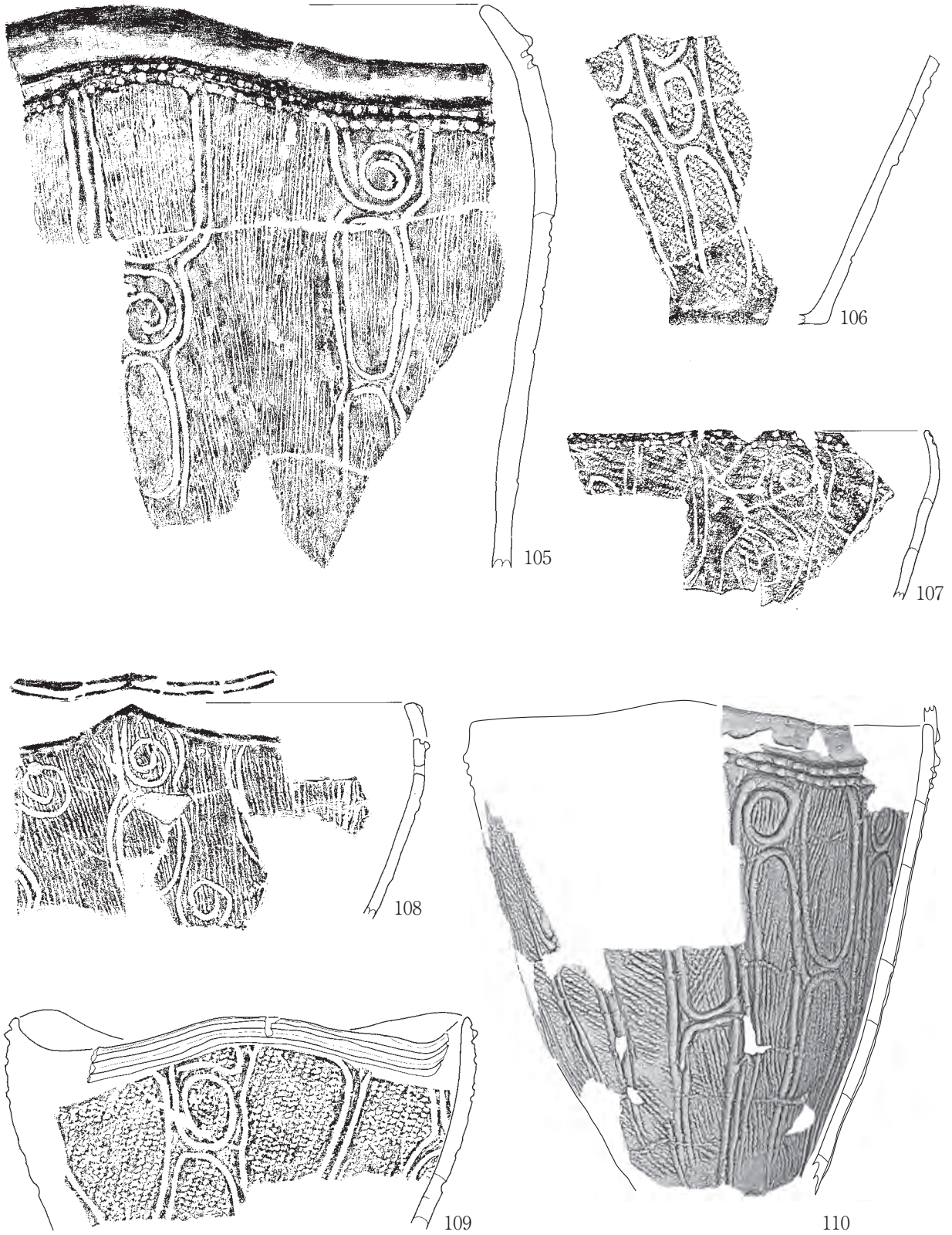
第 44 図 2号住居跡出土遺物 11



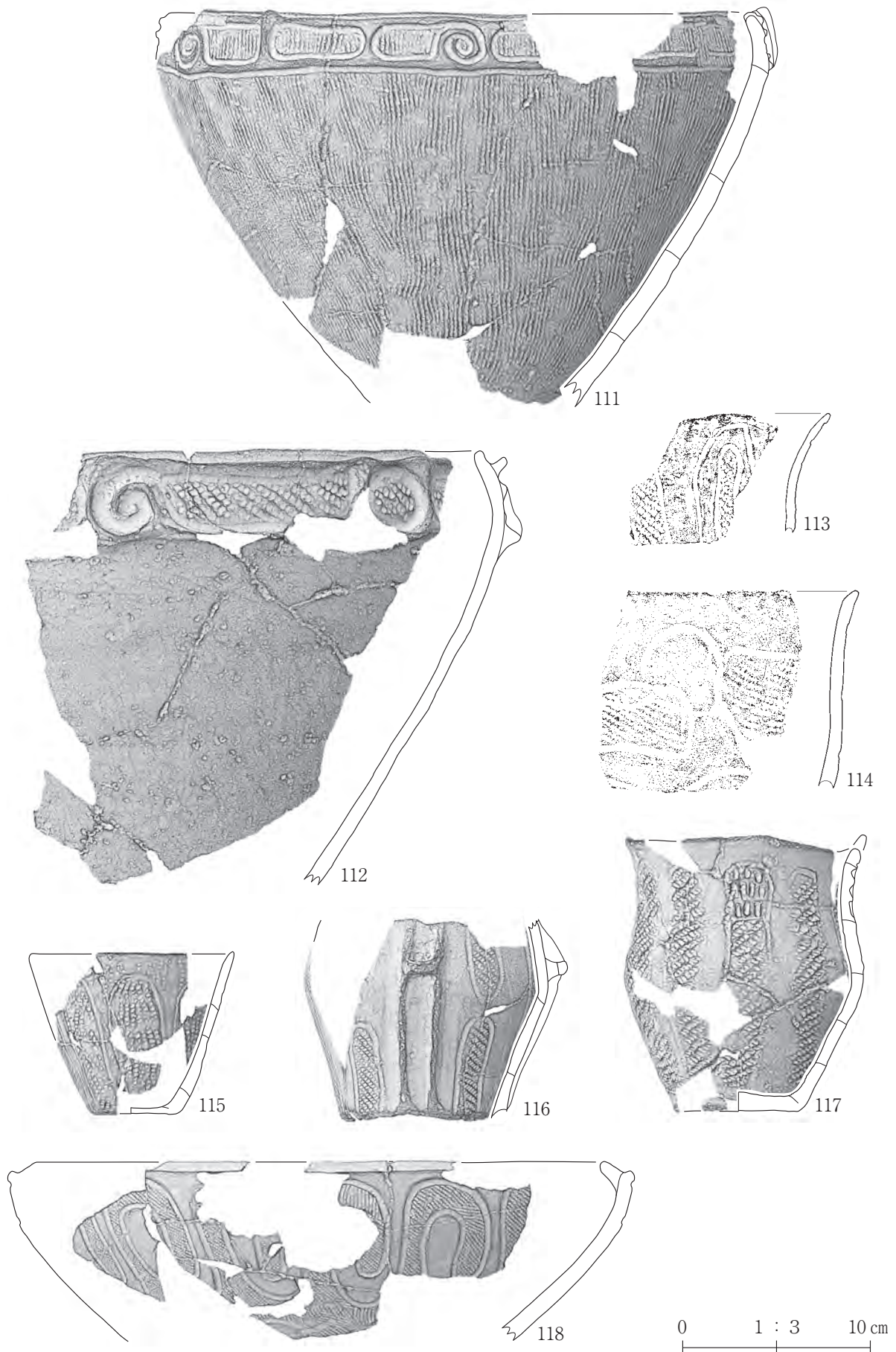
第 45 図 2 号住居跡出土遺物 12



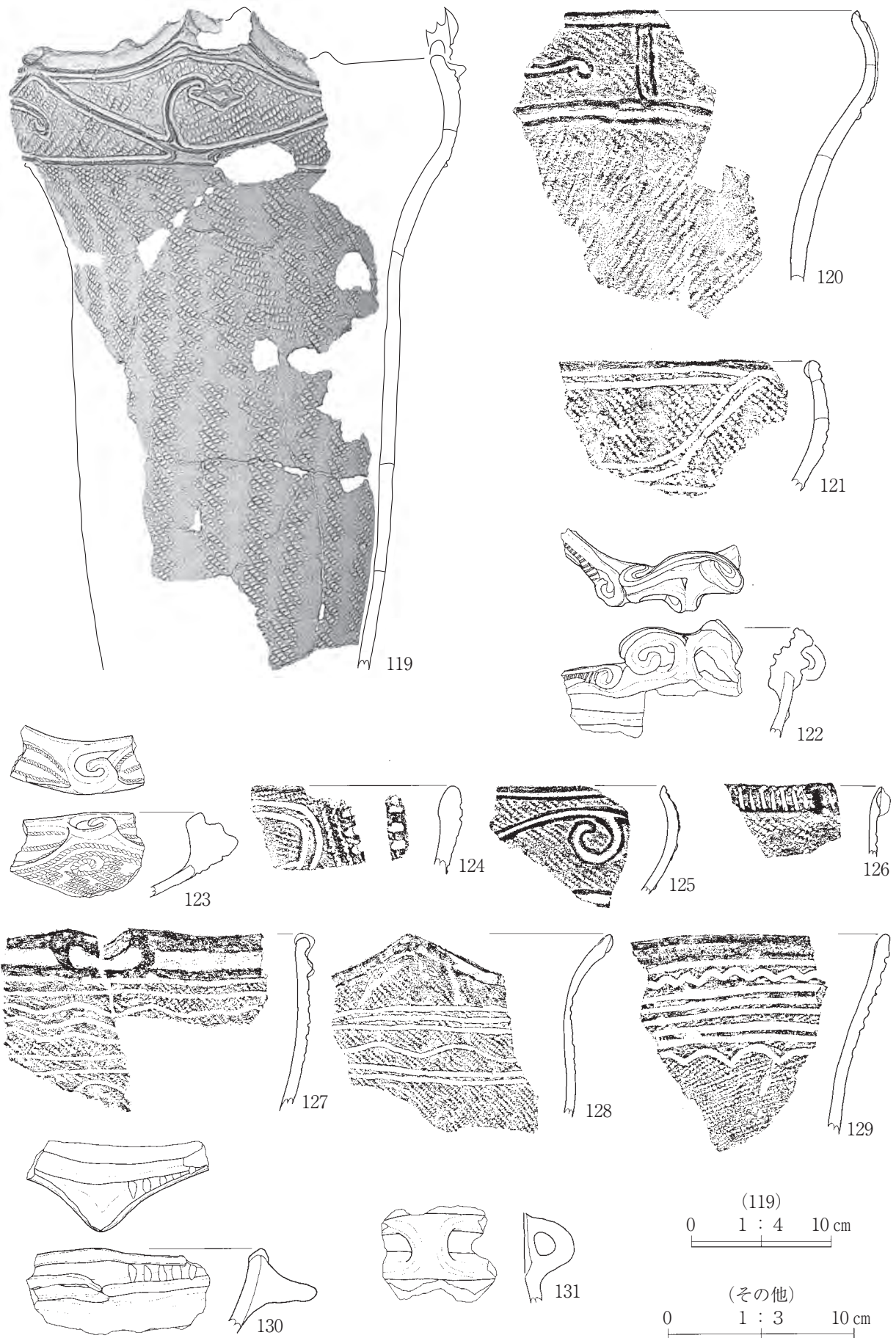
第 46 図 2号住居跡出土遺物 13



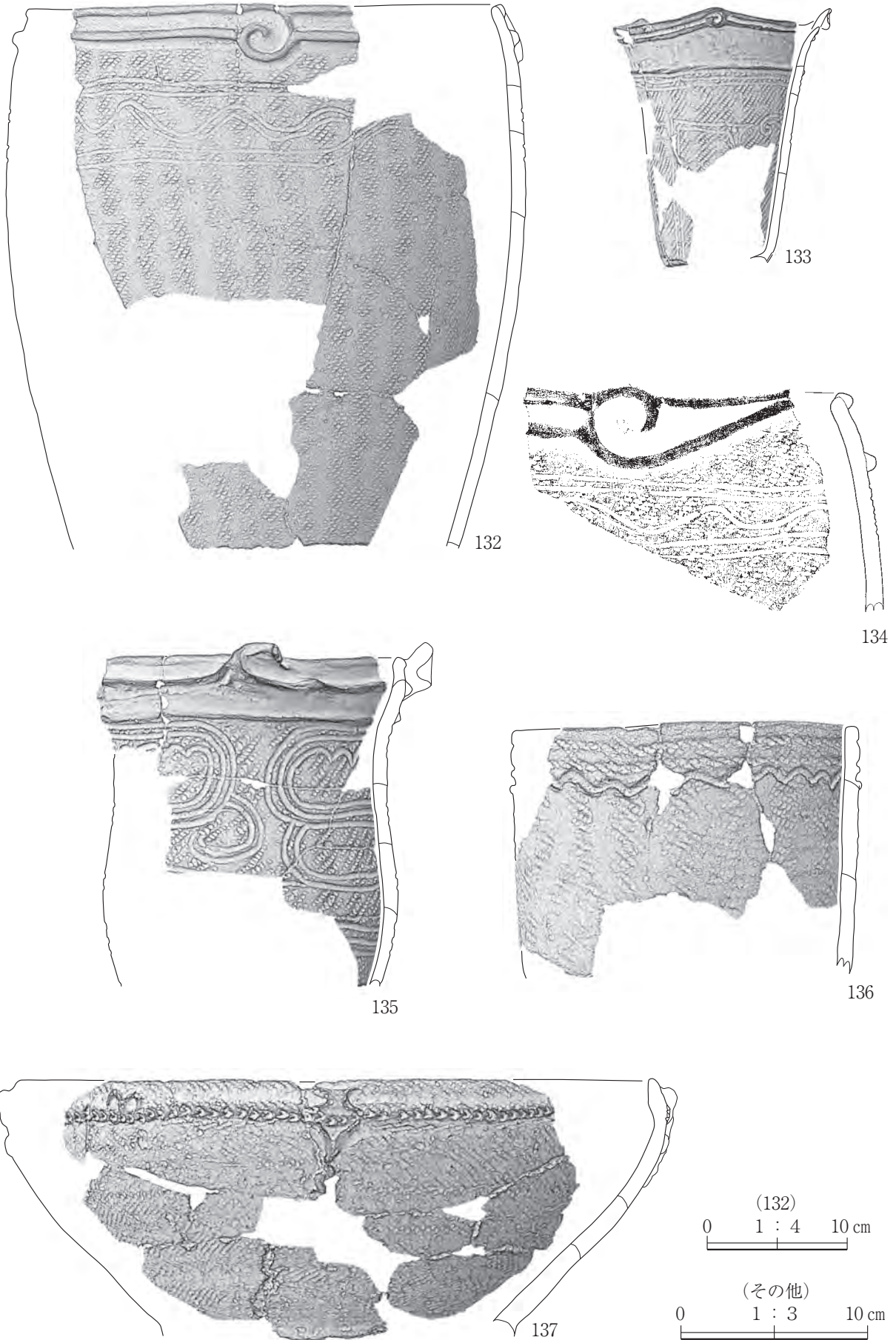
第 47 図 2 号住居跡出土遺物 14



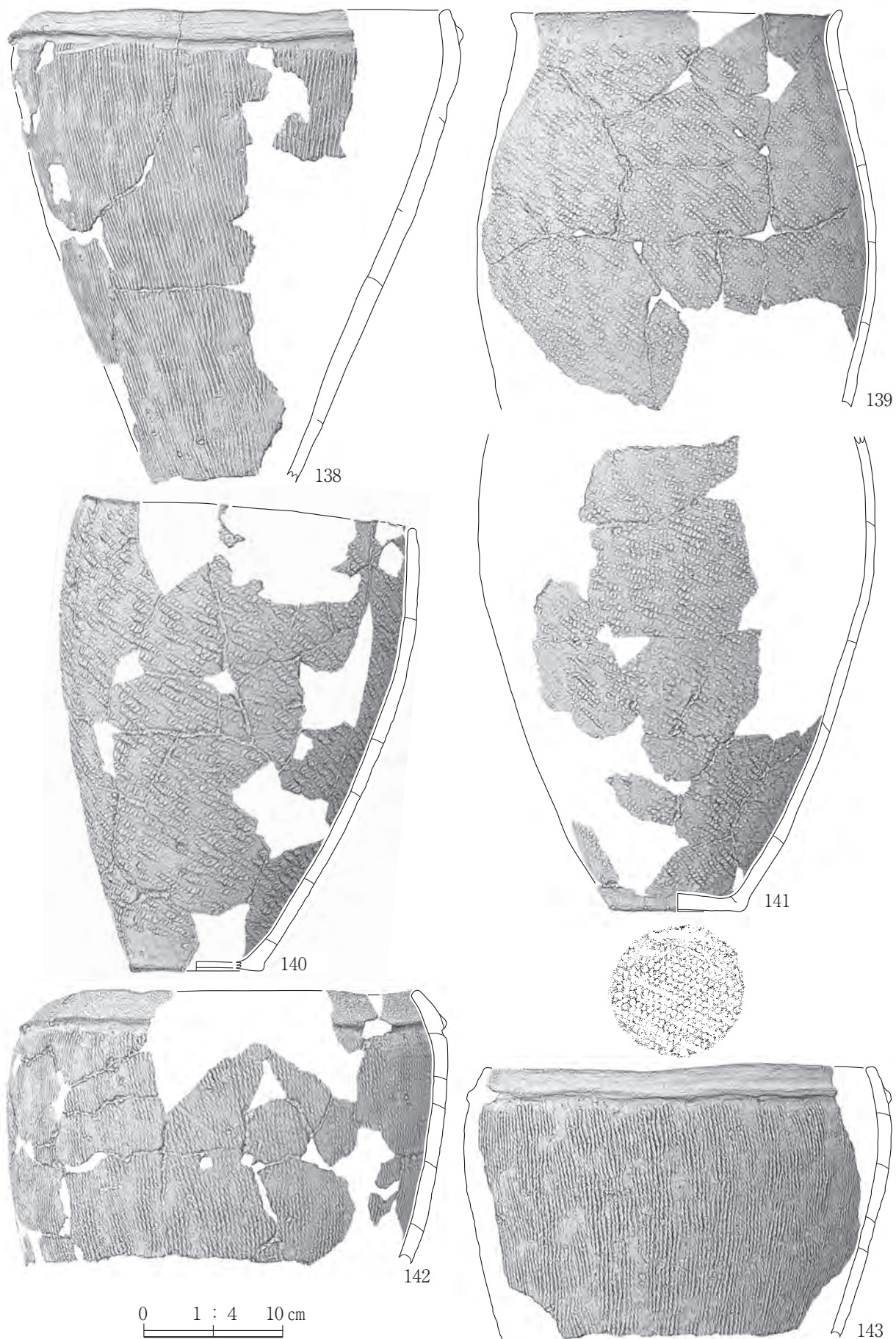
第 48 図 2 号住居跡出土遺物 15



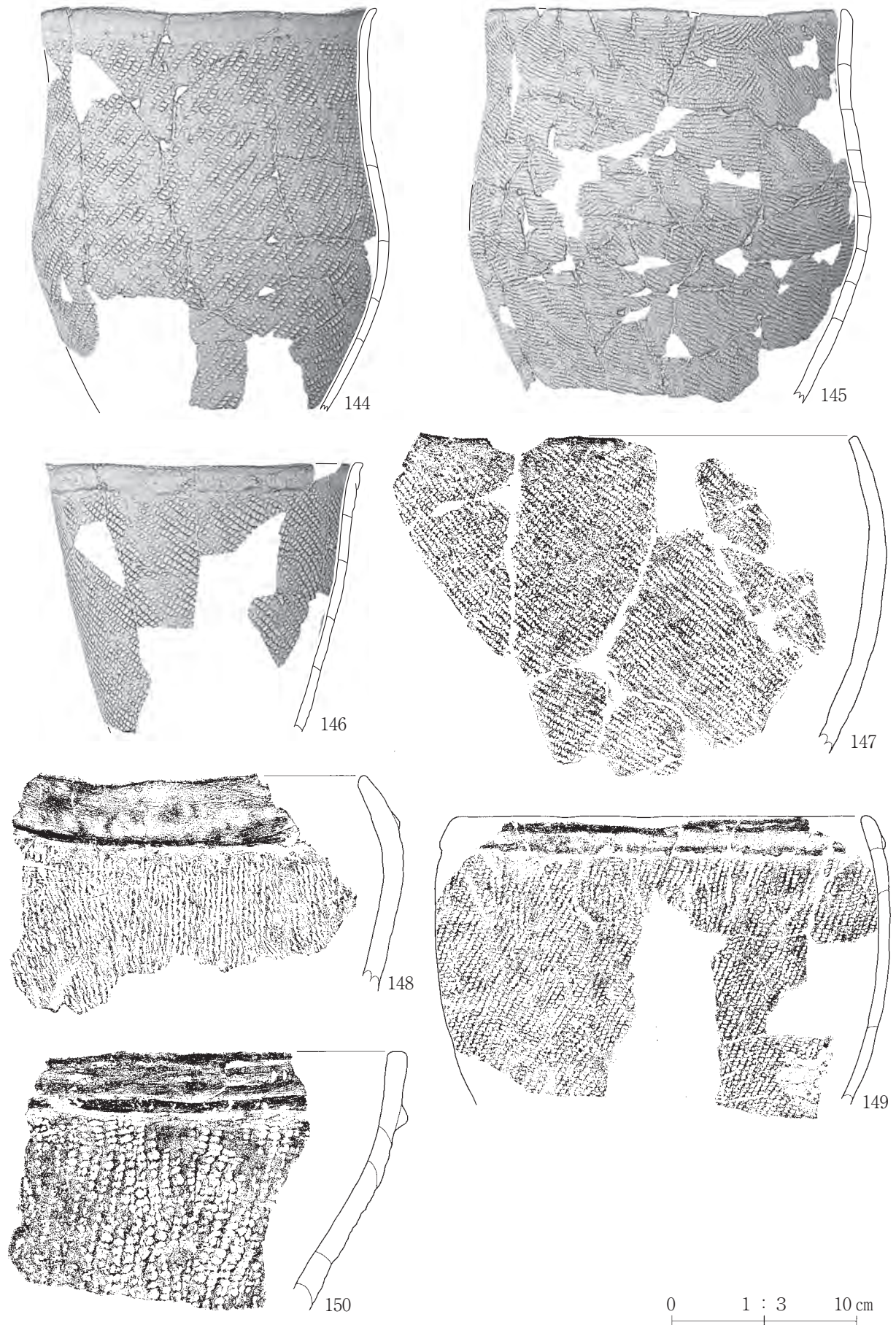
第 49 図 2 号住居跡出土遺物 16



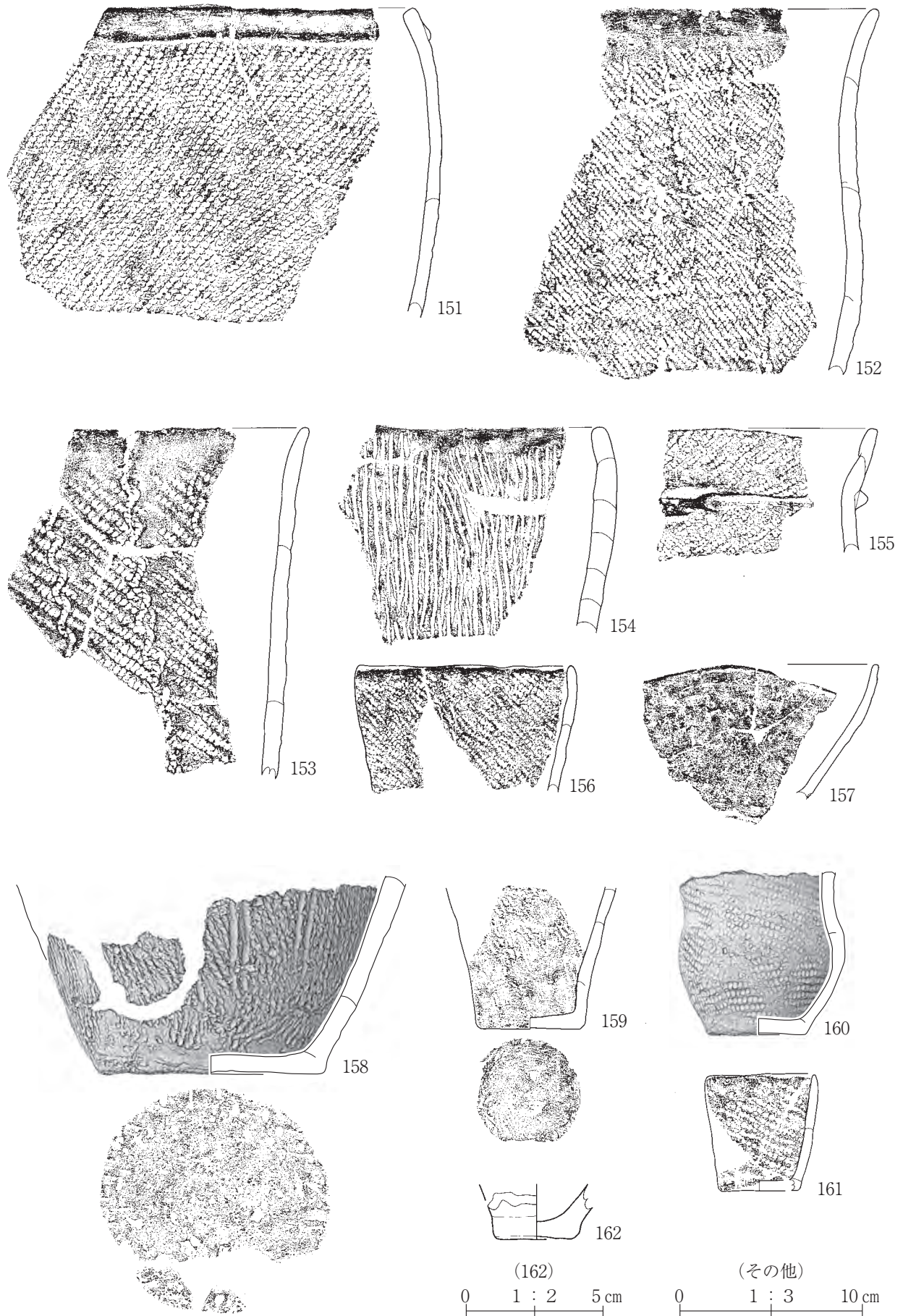
第 50 図 2 号住居跡出土遺物 17



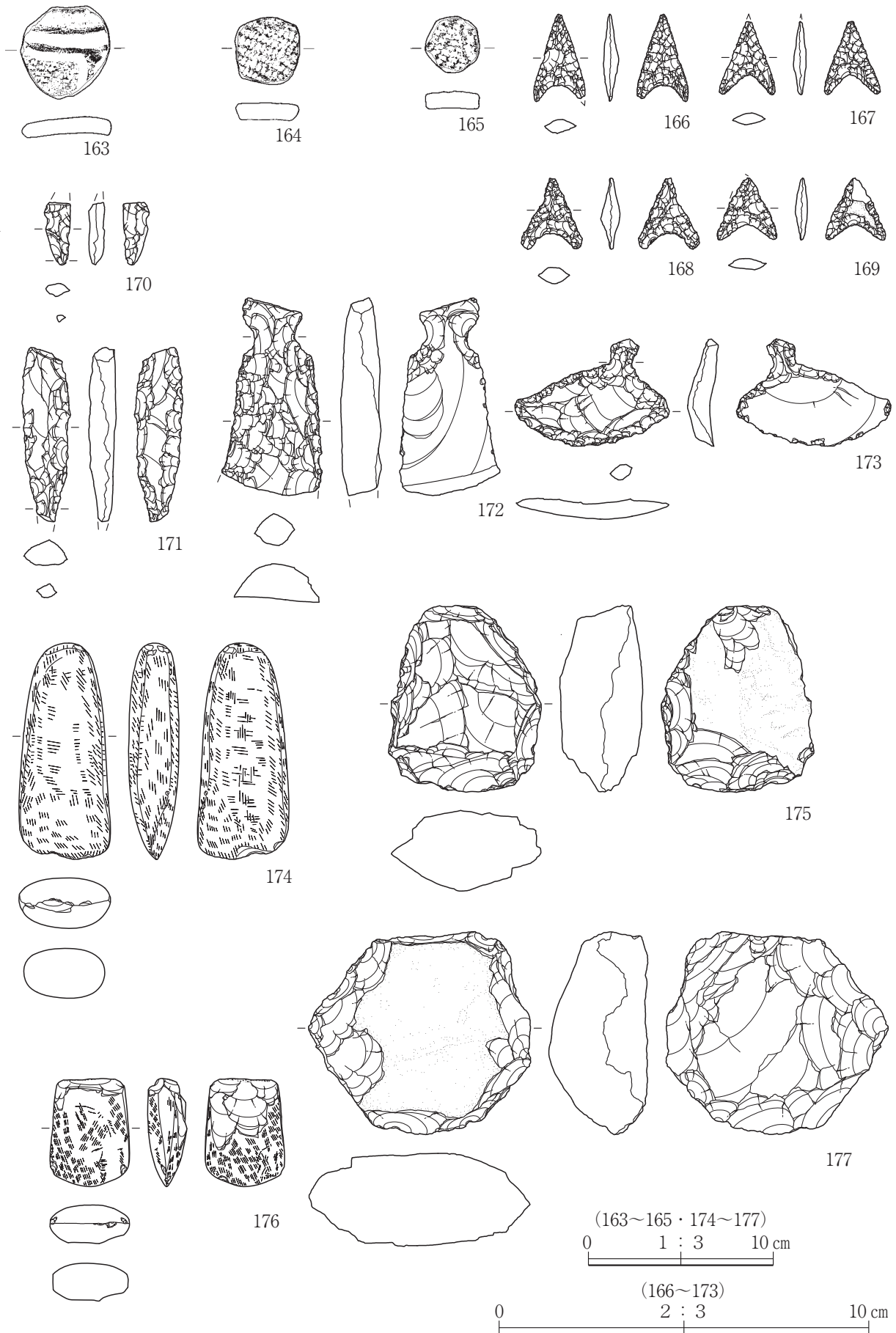
第 51 図 2号住居跡出土遺物 18



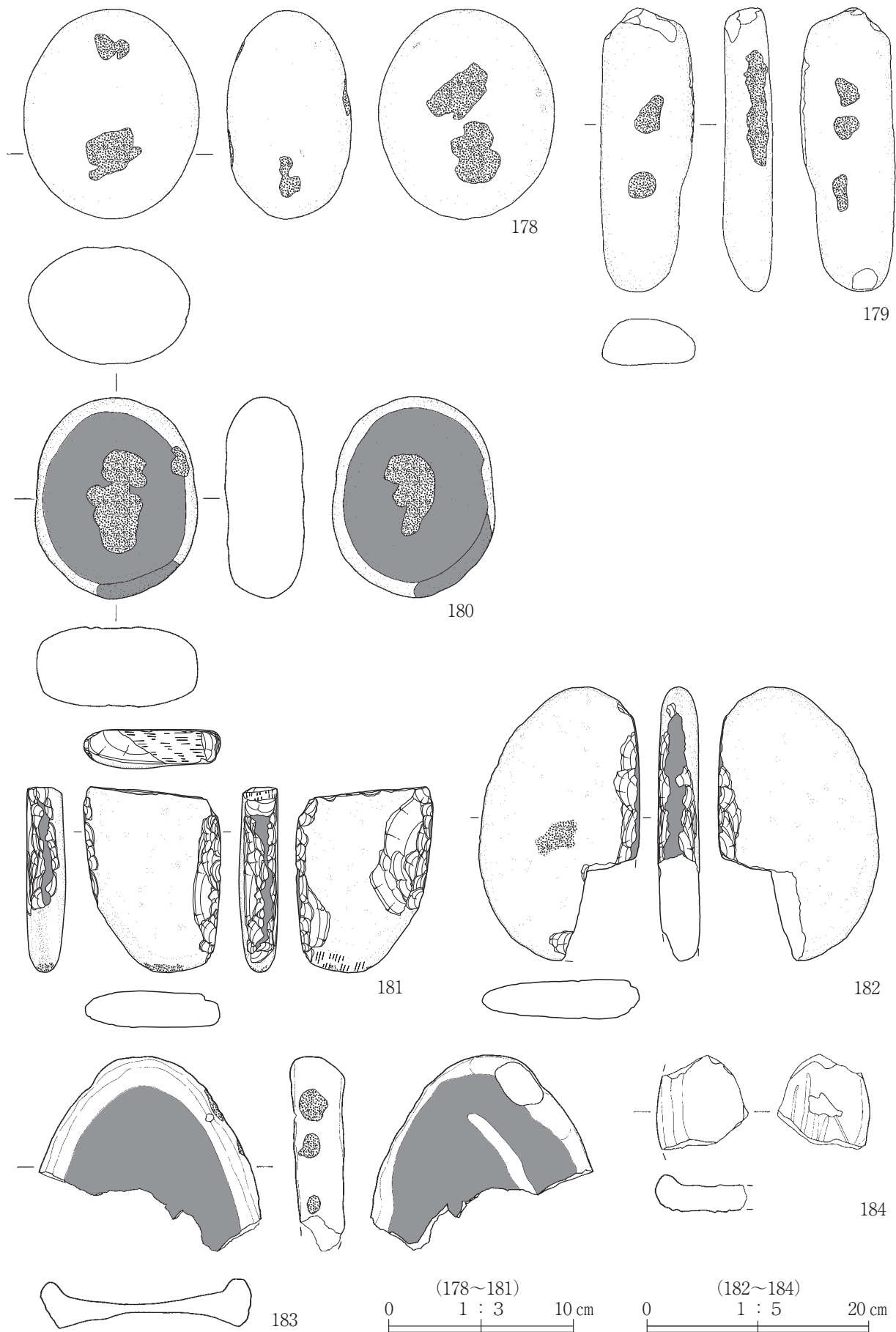
第 52 図 2 号住居跡出土遺物 19



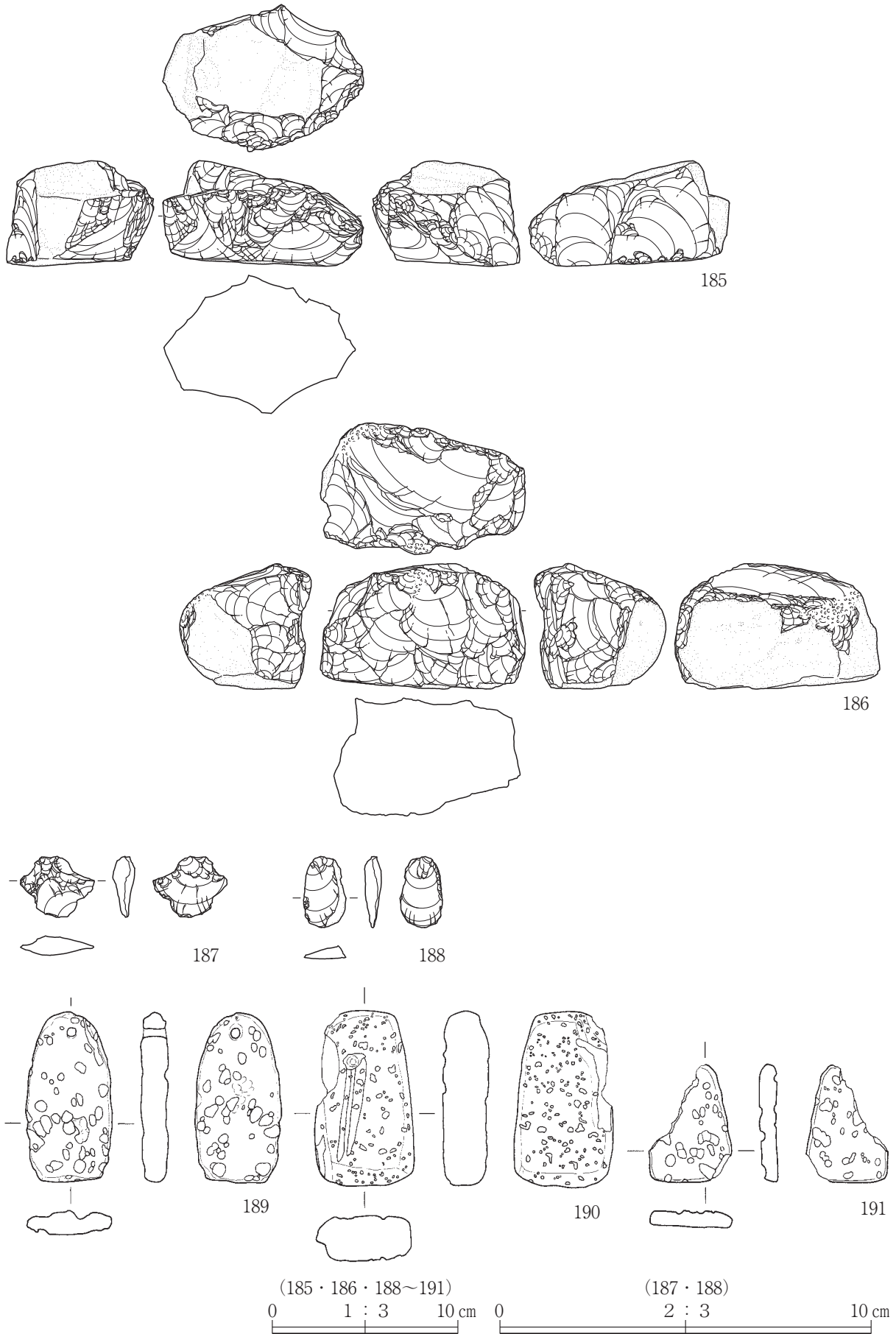
第 53 図 2 号住居跡出土遺物 20



第 54 図 2 号住居跡出土遺物 21



第 55 図 2 号住居跡出土遺物 22



第 56 図 2 号住居跡出土遺物 23

石器は23点掲載した。166～169は石鏃で、いずれもⅡ類である。170・171は石錐で、どちらも欠損品である。170は黒曜石製で産地は男鹿あるいは月山（第Ⅷ章－2参照）である。172は石匙Ⅰ類で、刃部を欠損する。片面加工で刃部を作出する。173は石匙Ⅱ類で、同じく片面加工で刃部を作出する。174は磨製石斧で刃部が剥離する。全面に研磨の痕跡が残る。176も磨製石斧で基部が欠損するが、その欠損部は剥離を施しており、欠損品を二次加工しようとした可能性がある。175・177は礫器である。どちらも厚みのある礫を素材とし、縁辺全周が剥離している。ただし刃部を作出したような細かい剥離ではない。178～180は敲磨器類である。178・179はⅢ類で、178は円形の、179は棒状の礫を素材とする。180はⅣ類で、円形で側縁が偏平な礫を素材とする。181・182は特殊磨石である。182は幅広の面に敲打痕が見受けられる。183・184は石皿でどちらも欠損している。183はⅠb類で、両面を使用しており、また側縁には敲打痕が見受けられる。184は明確な使用面が確認できなかったが上面には研溝が見受けられるので、砥石に転用されている可能性がある。185・186は石核である。187・188は黒曜石を素材とするUフレイクである。どちらも縁辺に微細剥離が見受けられる。黒曜石の産地は月山あるいは男鹿（または出来島）である（第Ⅷ章－2参照）。

埋土上・下位から石製品8点が出土しており、そのうち石製品3点（189～191）を掲載した。いずれも軽石製石製品である。189は楕円形に、190・191は方形に整形している。189は端部が1箇所穿孔されている。いずれも灰白色を呈し、十和田系の軽石ではないかと推測する。

[時期] 伏甕2個（41・42）の時期から大木8b式新段階、ただし大木9式古段階に近い段階と判断した。

なお、伏甕1の掘り方埋土から出土した炭化物について、年代測定（AMS）測定し、「4090 ± 30yrBP」という結果を得ている。

3号住居跡（第57～61図、写真図版6・7・55・56・260）

[位置・検出状況] 調査区北側、ⅠB6e、ⅠB7e、ⅠB6f、ⅠB7f、ⅠB6gグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。

前述の通り、当初は2号住居跡1棟と考え精査していたが、南側にさらに柱穴が続き、また炉を検出した。2号住居跡の建て替えかとも考えたが、床面の高さが2号住居跡の床面よりも3cmほど低く、また炉の形態も2号住居跡とは異なるので、別の住居跡と考え、本遺構とした。なお本遺構の南側は4号住居跡により壊されている。

[その他の遺構との重複] 2・4号住居跡と重複する。本遺構は2号住居跡より新しく、4号住居跡より古い。

[平面形] 円形を呈する。

[規模] 長軸621 × (595) cm、深さ不明

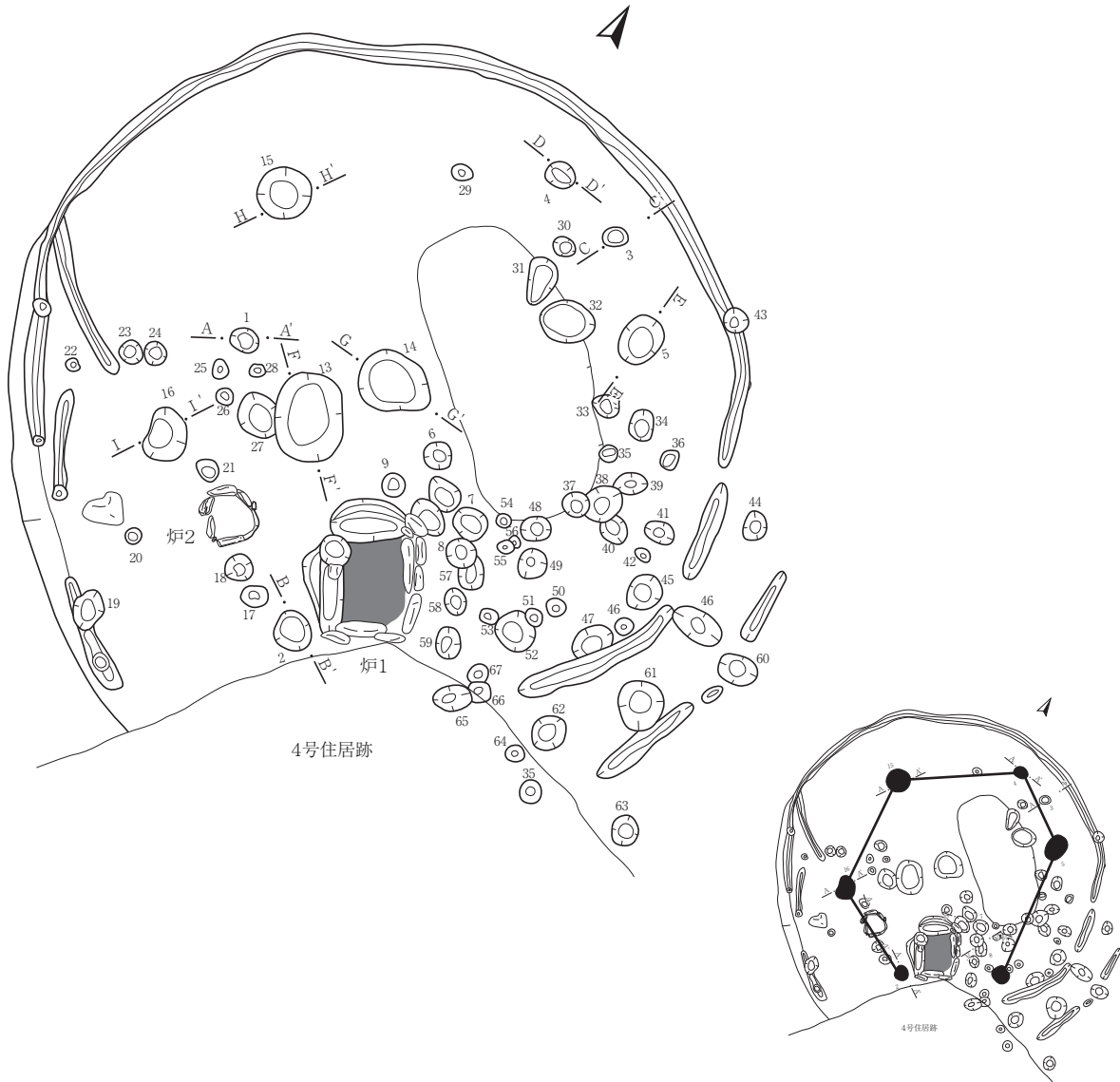
[埋土] 埋土を床面まで掘り下げるまで本遺構を2号住居跡の一部と考えていたため、本遺構に伴う断面を確認していない。掘り下げの際、黒褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する埋土であることを確認している。ただし、2号住居跡と同じく、遺構外からの流入土である。

[床面・壁] 炉を検出したⅥ層面を床面と判断した。概ね平坦である。上記の通り、2号住居跡の床面より3cmほど下がっている。

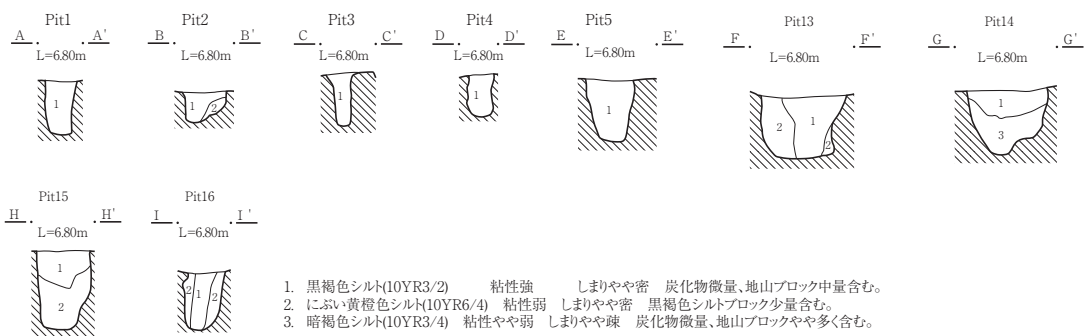
壁は西壁の一部のみがわずかに残存する。ほぼ直立気味である。

[炉] 2基ある。便宜上「炉1」、「炉2」と呼称する。

炉1は石囲炉である。不正な正方形を呈し、規模114 × 103cm、深さ15cmである。炉石は大型で偏平な花崗岩、閃緑岩礫を素材としている。炉の北・西側の炉石は抜き取られ、掘り方のみである。



柱穴



0 1 : 60 2m

第 57 図 3号住居跡 1

炉の底面には赤褐色の燃焼面が広がっており、激しく焼成している。炉の掘り方規模は炉自体とほぼ同規模で、炉石を差し込むというより立てかけるような状態で設置されたものと推測する。

炉2も石囲炉である。不整な方形を呈し、59×45cmを測る。使用面は床面を6cm掘り込んで構築している。炉石は形状、規模共に不規則な花崗岩や閃緑岩を素材としている。また炉の東角は炉石がない。炉の底面は被熱痕が見受けられず、火を焚いたか不明である。

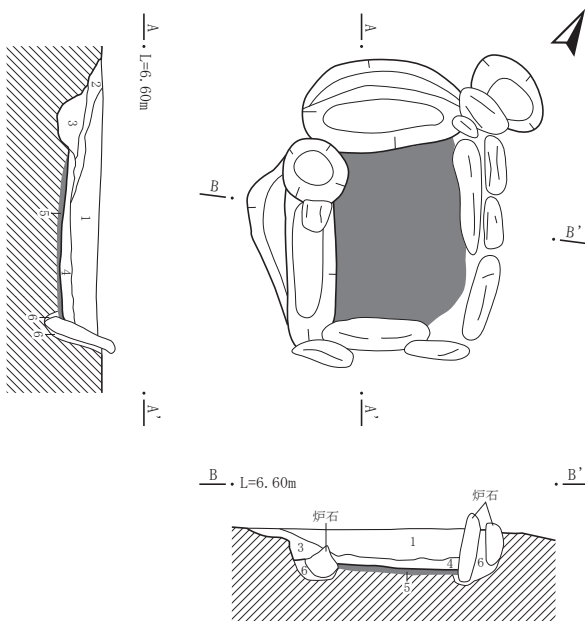
[附属施設] 柱穴67個を確認した。配列からPit 2、4、5、15、16、52を主柱穴とする6本柱であったと推定する。

壁溝は4号住居跡に削平された南側以外全周する。また東側の一部はわずかに壁溝が2重になっており、建て替えの可能性はある。

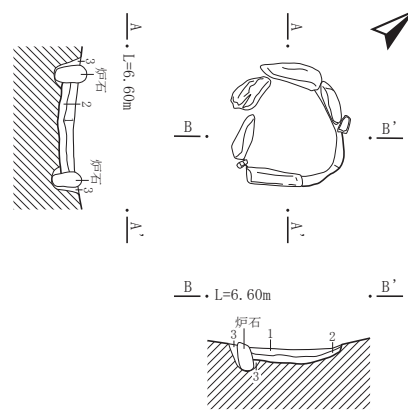
[出土遺物] 床面から埋土上位、また附属施設から縄文土器25,128.0g、石器10点が出土している。ただし上記の通り、本遺構の埋土はほとんどが遺構外からの流入土である。また2号住居跡と明確に区別しながらの遺物の取り上げができておらず、したがって本遺構に伴う遺物がどれくらいあるかは、定かではなくなってしまった。明確に本遺構から出土したものと判断できた遺物のみを選別し掲載した。

縄文土器は13点掲載した。概ね大木8b式新段階が主体であり、一部大木8b式新段階～大木9式古段階に比定される土器が含まれる。192～197は大木8b式新段階の深鉢である。192は完形の深鉢A類で、2単位の波状口縁を呈する。192～194は文様の特徴として、渦巻き文がやや退化（簡略化？）気味、あるいは数が少ない。また渦巻き文を連結あるいは縦位に垂下する隆帯が長くなり、方形の区画が形成し始めているように見える。197は192～196と同様な文様を地文の上、沈線で描いているのが特徴である。198・199は大木8b式新段階～大木9式古段階の深鉢である。198は地文として縦位の単軸絡条体1類を施文している。199は沈線で、簡略化した渦巻き文と隅丸方形の区画が描かれている。他に大木8a式新段階（202）、大木8b式古段階（203）も含まれるが流れ込みと判断した。

炉1



炉2

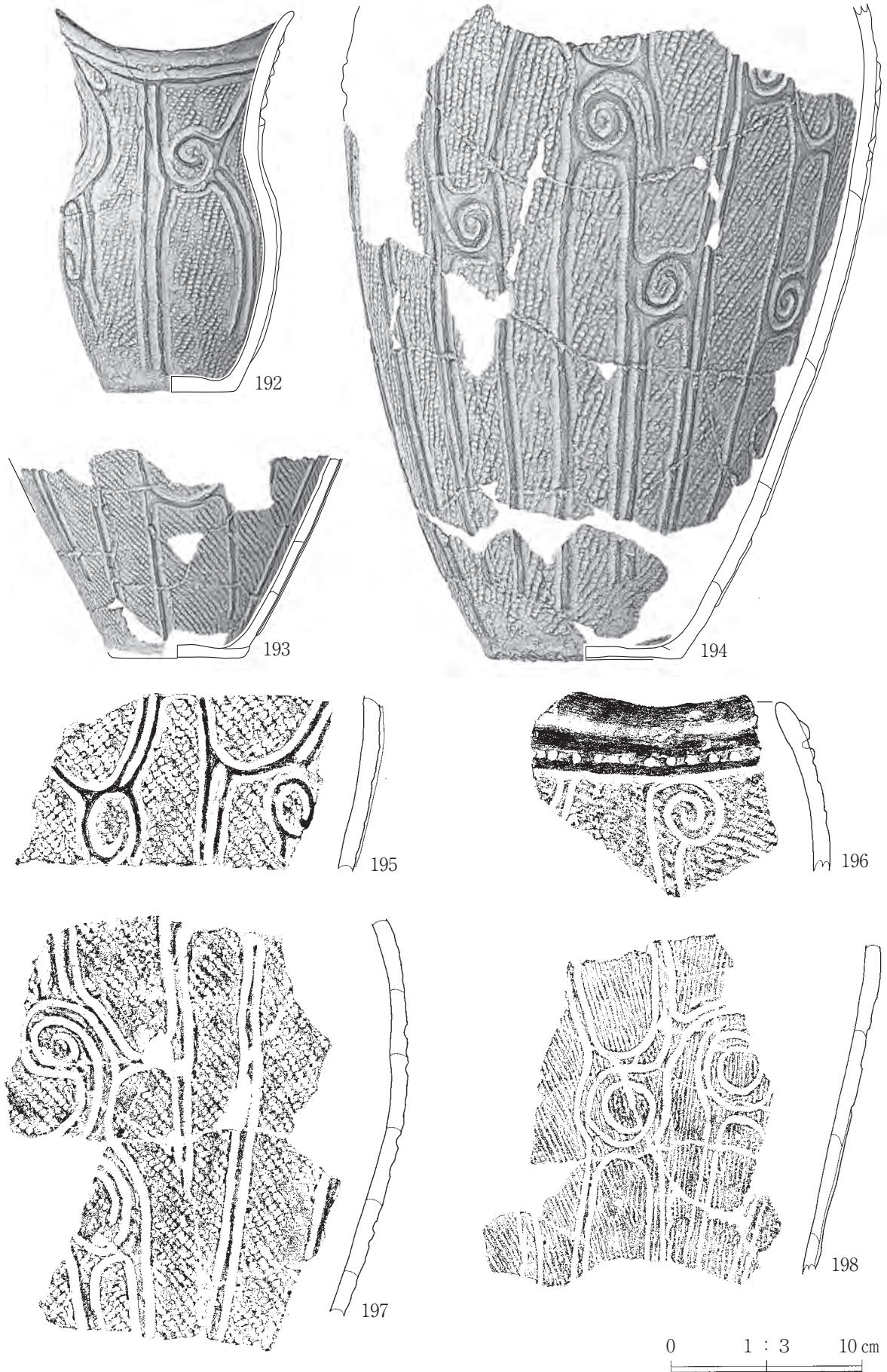


- 1. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 粘性やや弱 しまりやや疎 炭化物微量、地山ブロック少量、白色粒子少量含む。
- 2. 暗赤褐色シルト(5YR5/8) 粘性やや強 しまり疎 炭化物微量、わずかに被熱し、赤色化。
- 3. 黒褐色シルト(10YR2/2) 粘性強 しまり密 炭化物微量、地山ブロック中量含む。

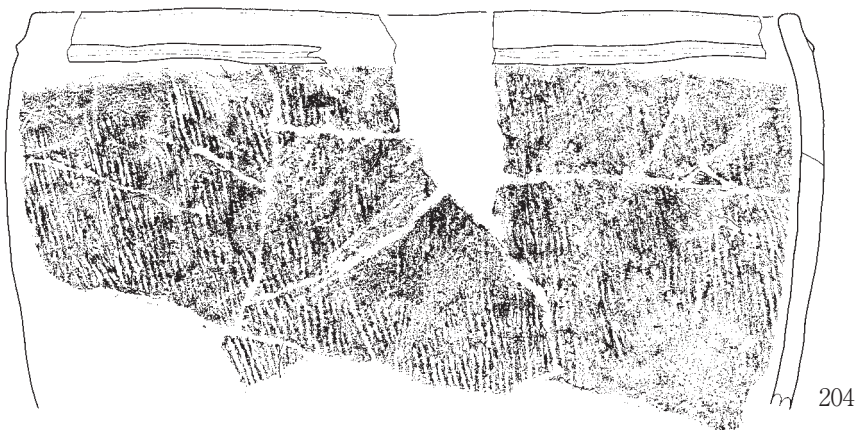
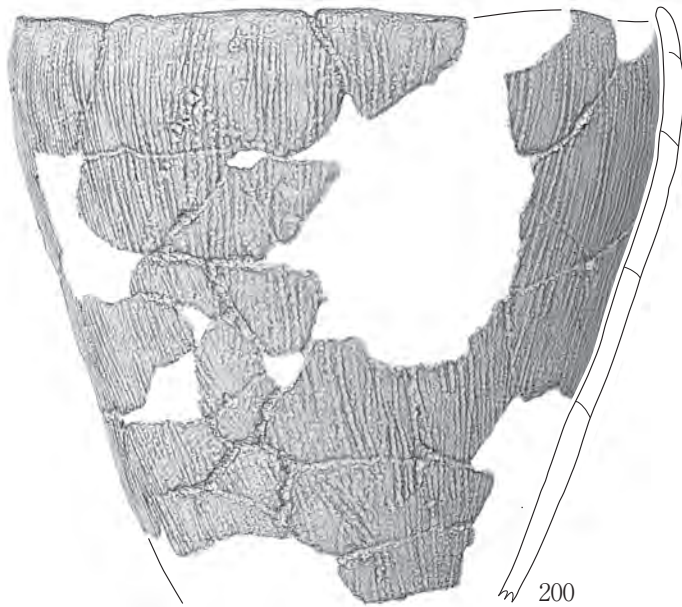
- 1. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 粘性強 しまりやや密 炭化物・焼土粒微量、白色粒子やや多く含む。
- 2. 黄褐色砂質シルト(10YR7/8) 粘性やや強 しまり密 黒褐色シルトブロック中量含む。
- 3. 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性強 しまり疎 炉石掘り方に流入した土。炭化物微量、地山ブロック少量含む。
- 4. 暗赤褐色シルト(5YR3/4) 粘性強 しまりやや疎 炭化物微量含む。わずかに被熱し、赤色化。
- 5. 明赤褐色焼土(5YR5/8) 粘性やや弱 しまり密 燃焼面。被熱強く、激しく赤色化。
- 6. 黒褐色シルト(10YR2/2) 粘性強 しまり密 炉石掘り方埋土。炭化物微量、地山ブロック中量含む。

0 1 : 30 1m

第58図 3号住居跡2

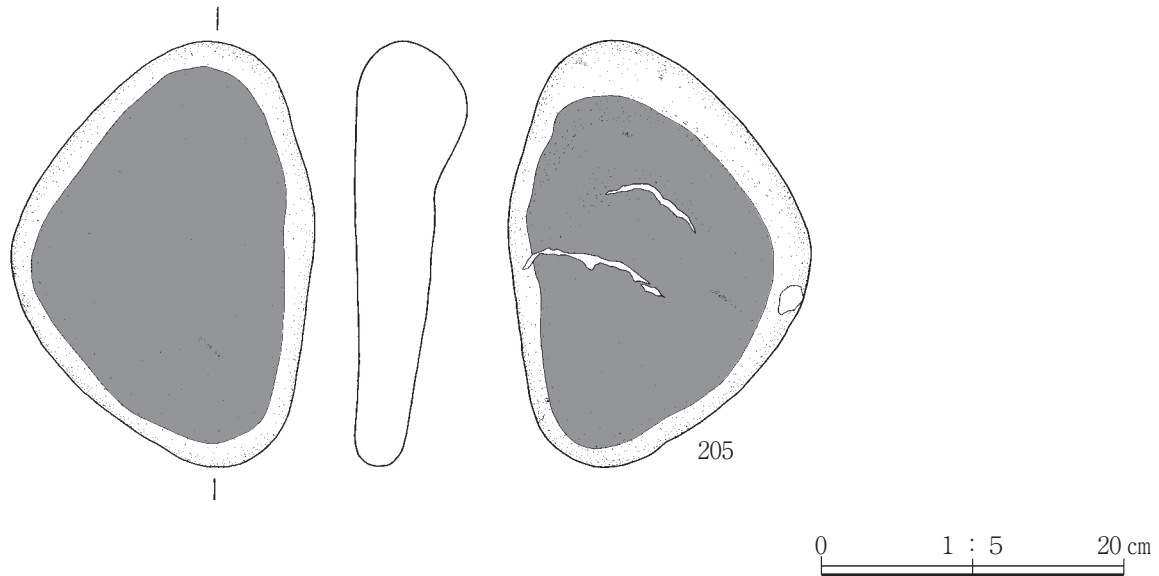


第 59 図 3号住居跡出土遺物 1



0 1 : 3 10 cm

第60図 3号住居跡出土遺物2



第61図 3号住居跡出土遺物3

石器は比較的少ない。ただ前述の通り、本遺構に伴うと判断できたものが少ないだけで、実際には2号住居跡程度の出土量であった可能性がある。205のみ掲載した。石皿で1類に相当する。両面に使用された痕跡（磨面）がある。片面は縁辺の一部が瘤のように膨らんでいるのが特徴である。

[時期] 出土した土器の年代から大木8b式新段階と判断した。

4～7号住居跡の重複関係について（第62図）

前述した通り、2～10号住居跡は重複しており、その新旧関係については、部分的であるが断面による土層観察で推測している。4～6号住居跡の新旧関係については第62図に、また6号、7号住居跡の新旧関係は第79図に示した通りである。

この断面観察により、4～7号住居跡は、北から南へと移行しながら、4号→5号→6号→7号住居跡の順に新しくなっていくことが分かった。また古い竪穴住居跡の床面を掘り下げて、新しい竪穴住居跡が構築されており、したがって、床面の高さは新しい竪穴住居跡になるにつれ、徐々に下がっていくことが分かった。4～7号住居跡は附属していたと考えられる炉はいずれも確認されなかった。おそらく重複する竪穴住居跡によって全て消失したものと推測する。

4号住居跡（第63～68図、写真図版8・56～59・260・261）

[位置・検出状況] 調査区北側、I B 7f、I B 6g、I B 7g、I B 6hグリッドに位置する。VI層上面で検出した。

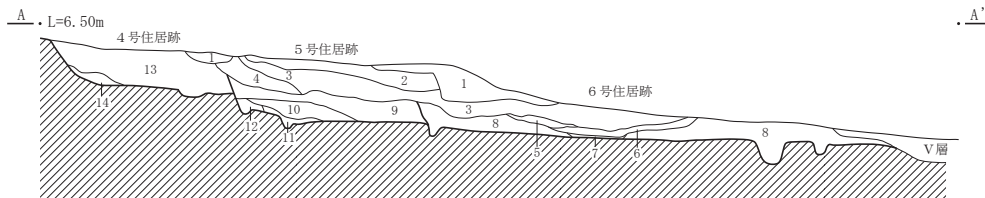
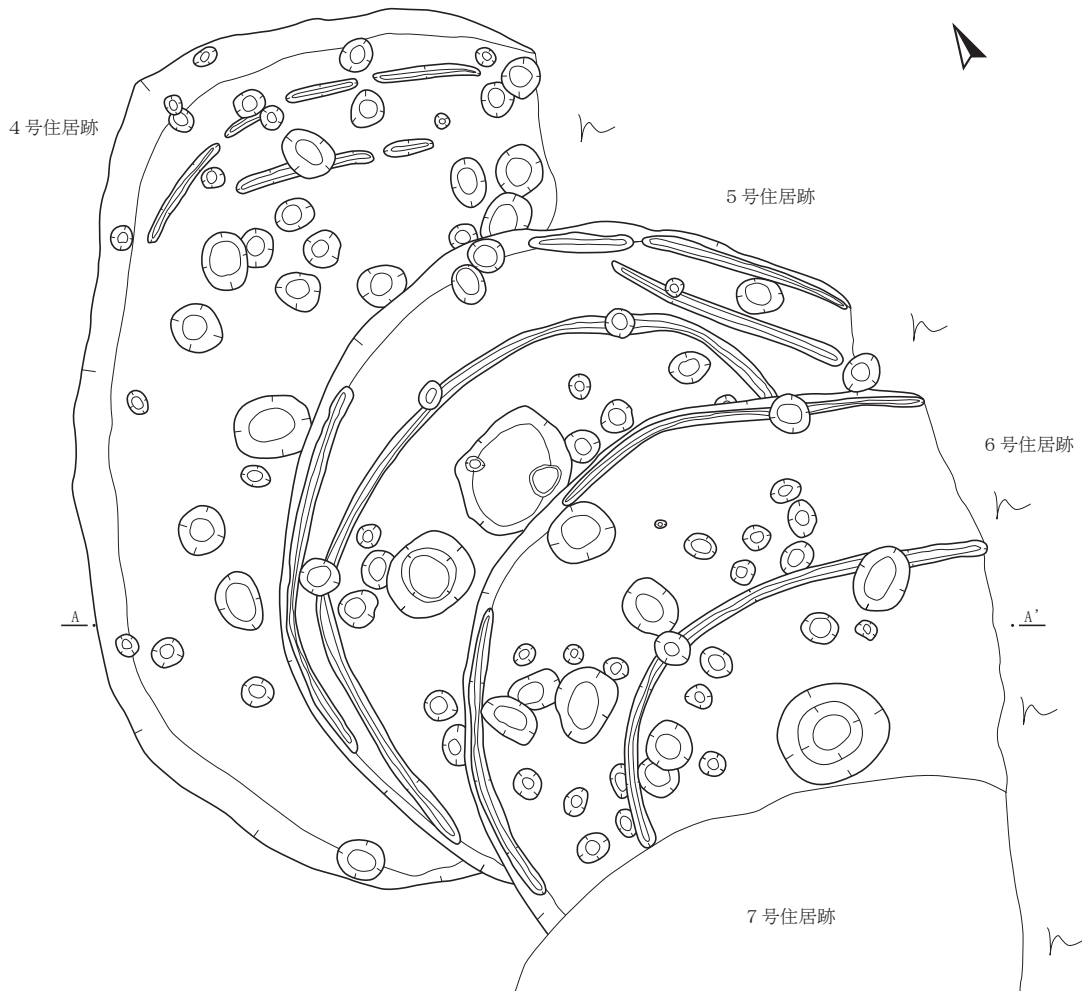
本遺構は東側約半分を5号住居跡と斜面の崩落で消失している。

[その他の遺構との重複] 3号、5号住居跡と重複する。本遺構は3号住居跡より新しく、5号住居跡より古い。

[平面形] 残存部から楕円形と推定する。

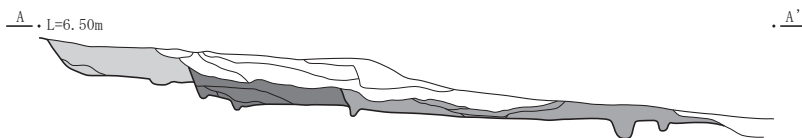
[規模] 925 × (521) cm、深さ50cm

[埋土] 3層確認したが、うち1・2層は崩落および攪乱土であり、本遺構に伴うのは第63図の断面



- | | | | |
|------------------------|-------|--------|--------------------------------------|
| 1. 暗褐色シルト(10YR3/4) | 粘性やや弱 | しまり疎 | カクラン層。土はV層類似。 |
| 2. 黒褐色シルト(10YR2/3) | 粘性やや強 | しまり密 | 土砂堆積層で、V層類似。1層より明るめ。土器片が混じる。 |
| 3. にぶい黄褐色シルト(10YR5/4) | 粘性やや弱 | しまり密 | 炭化物少量、白色粒子少量含む。 |
| 4. 暗褐色シルト(10YR3/3) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 崩落土。炭化物微量、白色粒子微量含む。 |
| 5. 黒褐色シルト(10YR3/2) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 6号住居跡埋土。炭化物少量、白色粒子微量含む。 |
| 6. 黒褐色シルト(10YR3/1) | 粘性強 | しまりやや密 | 6号住居跡埋土。炭化物中量含む。 |
| 7. 赤褐色焼土(5YR 4/8) | 粘性やや弱 | しまりやや疎 | 6号住居跡埋土。焼土は現地性ではない。暗褐色シルトブロック中量含む。 |
| 8. 褐色シルト(10YR4/4) | 粘性やや強 | しまりやや疎 | 6号住居跡埋土。炭化物微量、白色粒子少量含む。 |
| 9. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) | 粘性やや弱 | しまり密 | 6号住居跡埋土。炭化物少量、白色粒子少量含む、層中位に焼土粒少量偏在。 |
| 10. 黒色炭(10YR2/1) | 粘性弱 | しまり疎 | 5号住居跡埋土。床面上の炭堆積層。 |
| 11. 暗褐色シルト(10YR3/4) | 粘性強 | しまりやや密 | 5号住居跡壁溝埋土。炭化物微量、白色粒子少量、地山ブロック少量含む。 |
| 12. にぶい黄褐色シルト(10YR5/3) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 5号住居跡壁溝埋土。炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。 |
| 13. 黒褐色シルト(10YR2/2) | 粘性強 | しまり密 | 4号住居跡埋土。炭化物・焼土粒微量、白色粒子少量、地山ブロック少量含む。 |
| 14. 黒褐色シルト(10YR3/2) | 粘性やや強 | しまり密 | 4号住居跡埋土。壁崩落土。地山ブロック多量含む。 |

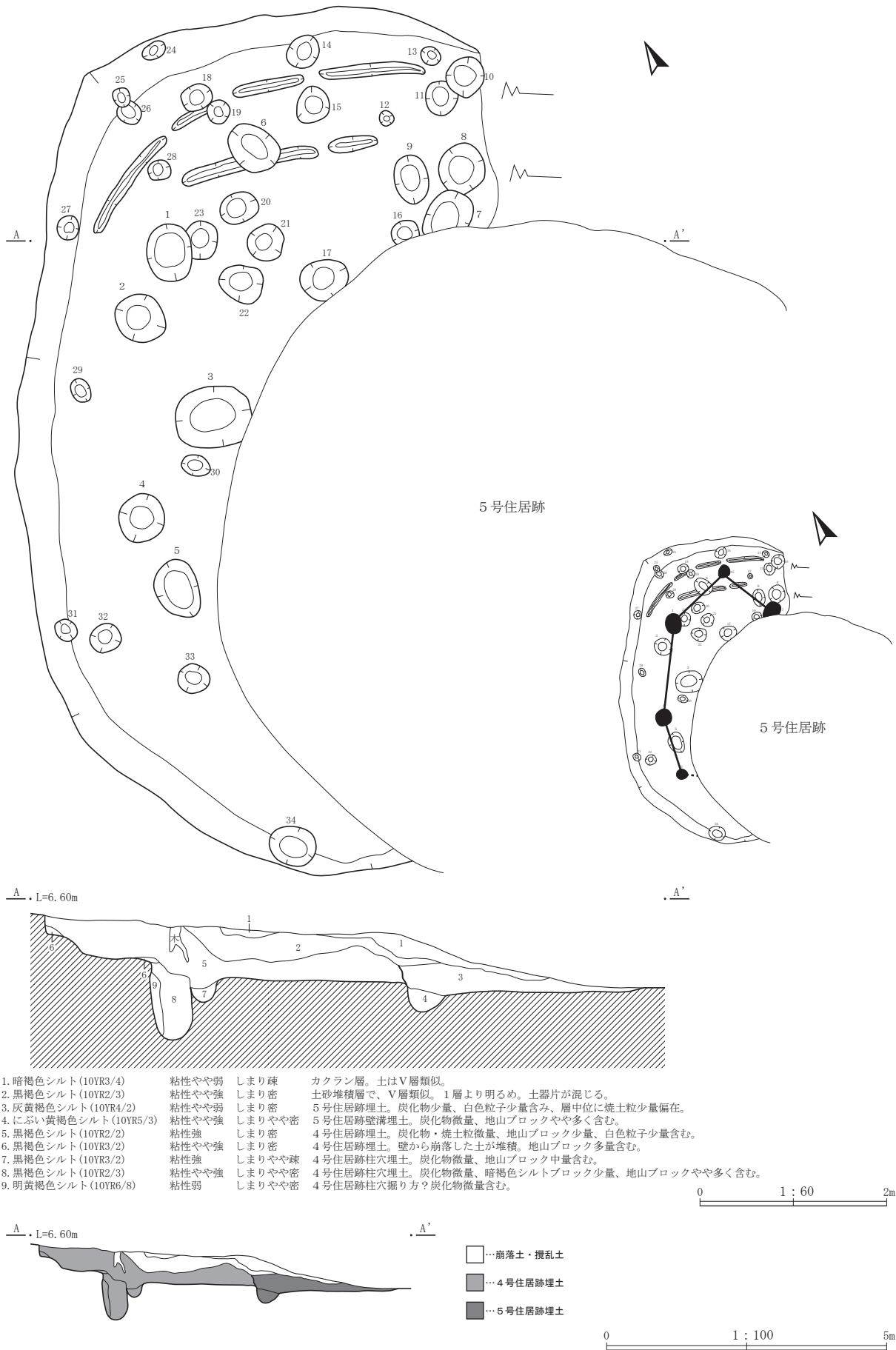
0 1 : 80 2m



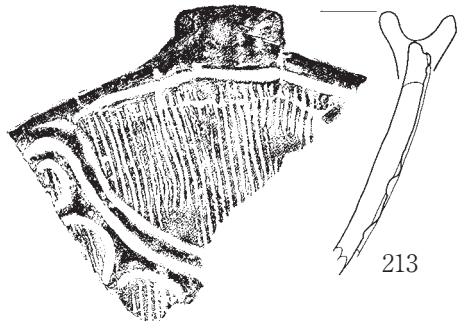
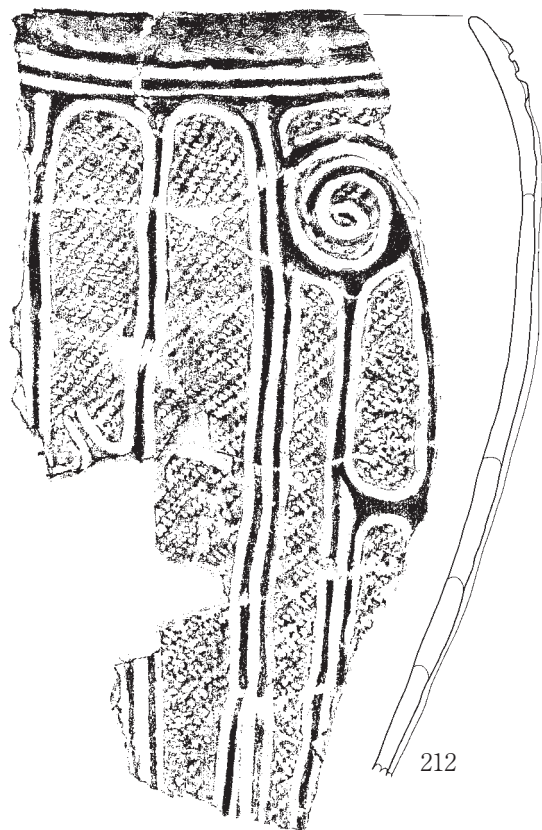
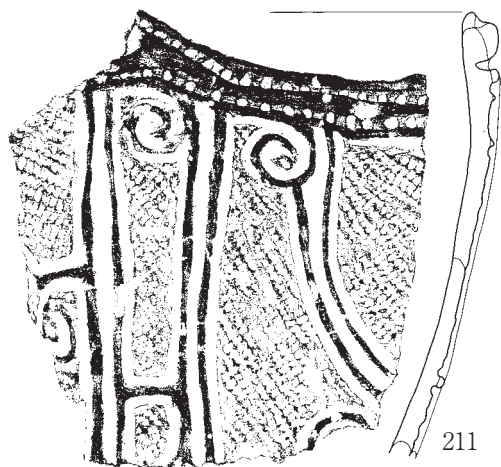
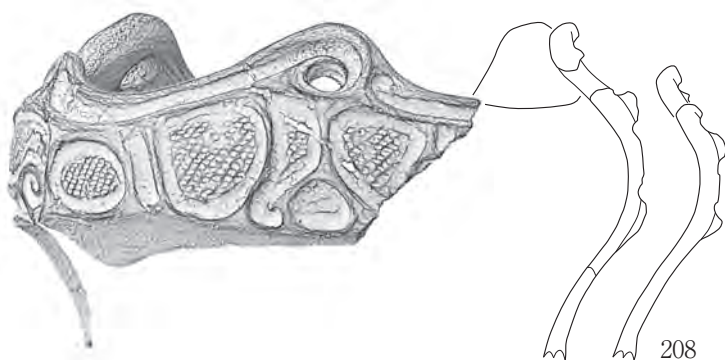
- ...崩落土
- ...4号住居跡埋土
- ...5号住居跡埋土
- ...6号住居跡埋土

0 1 : 100 5m

第 62 図 4～7号住居跡重複関係

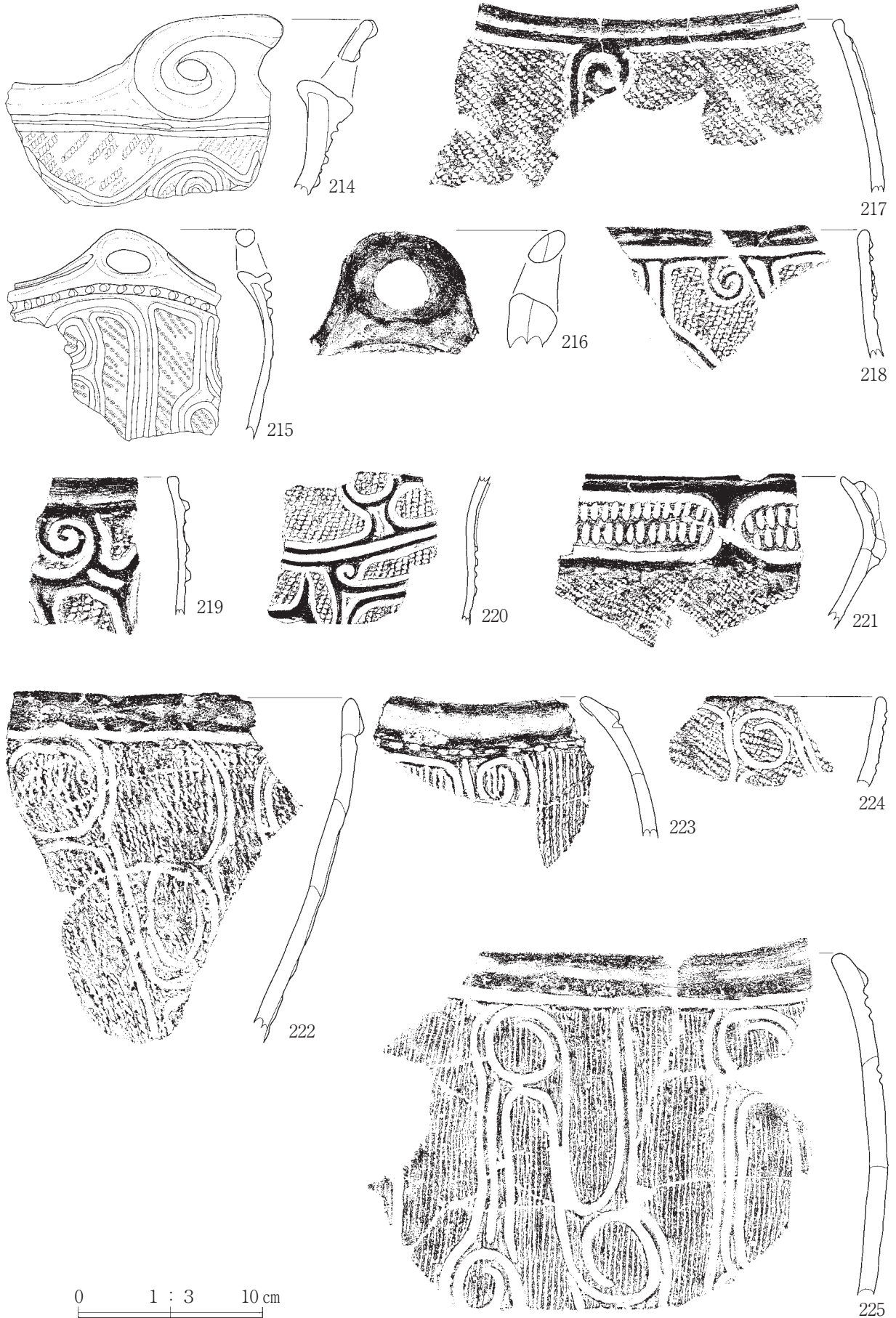


第63図 4号住居跡

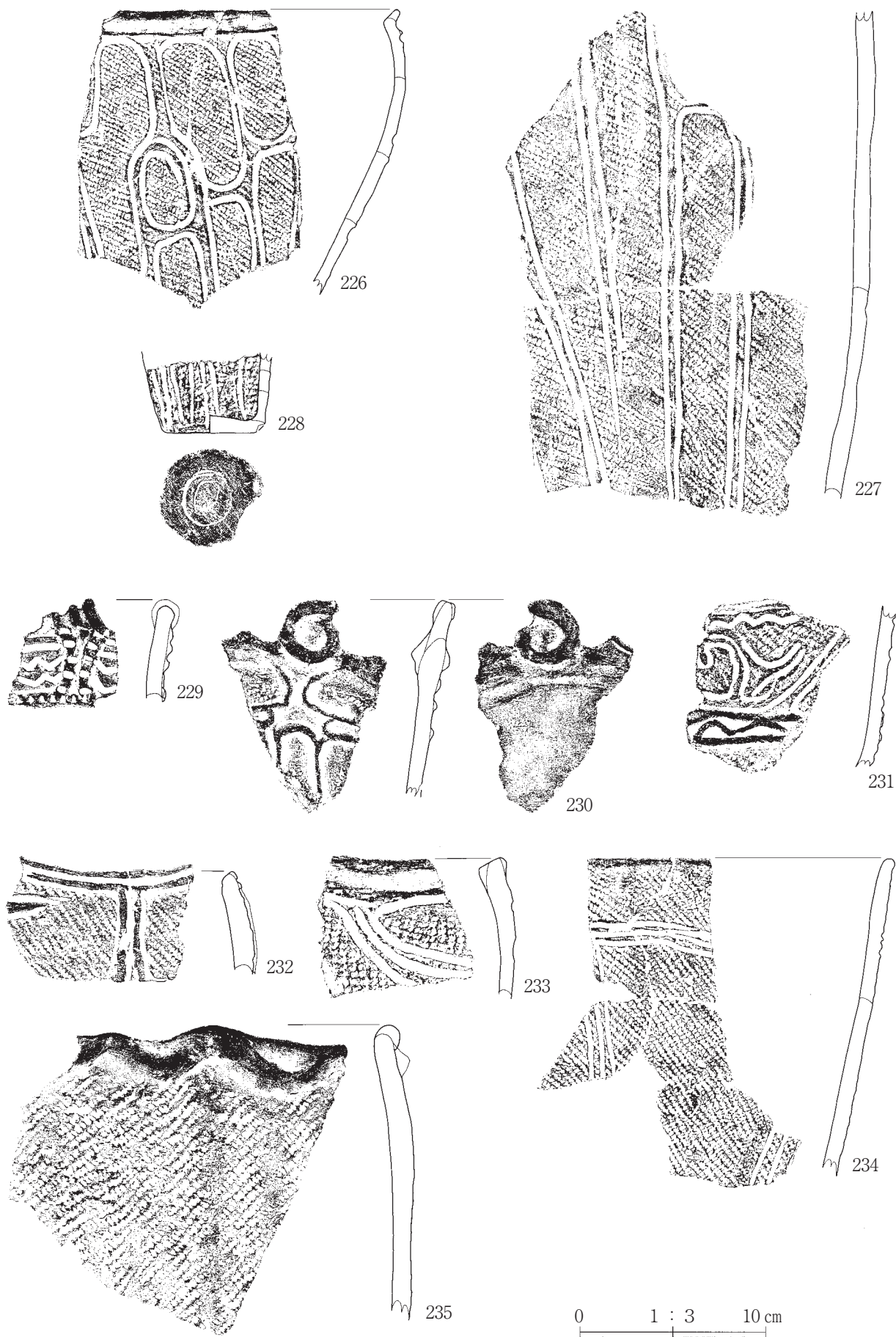


0 1 : 3 10 cm

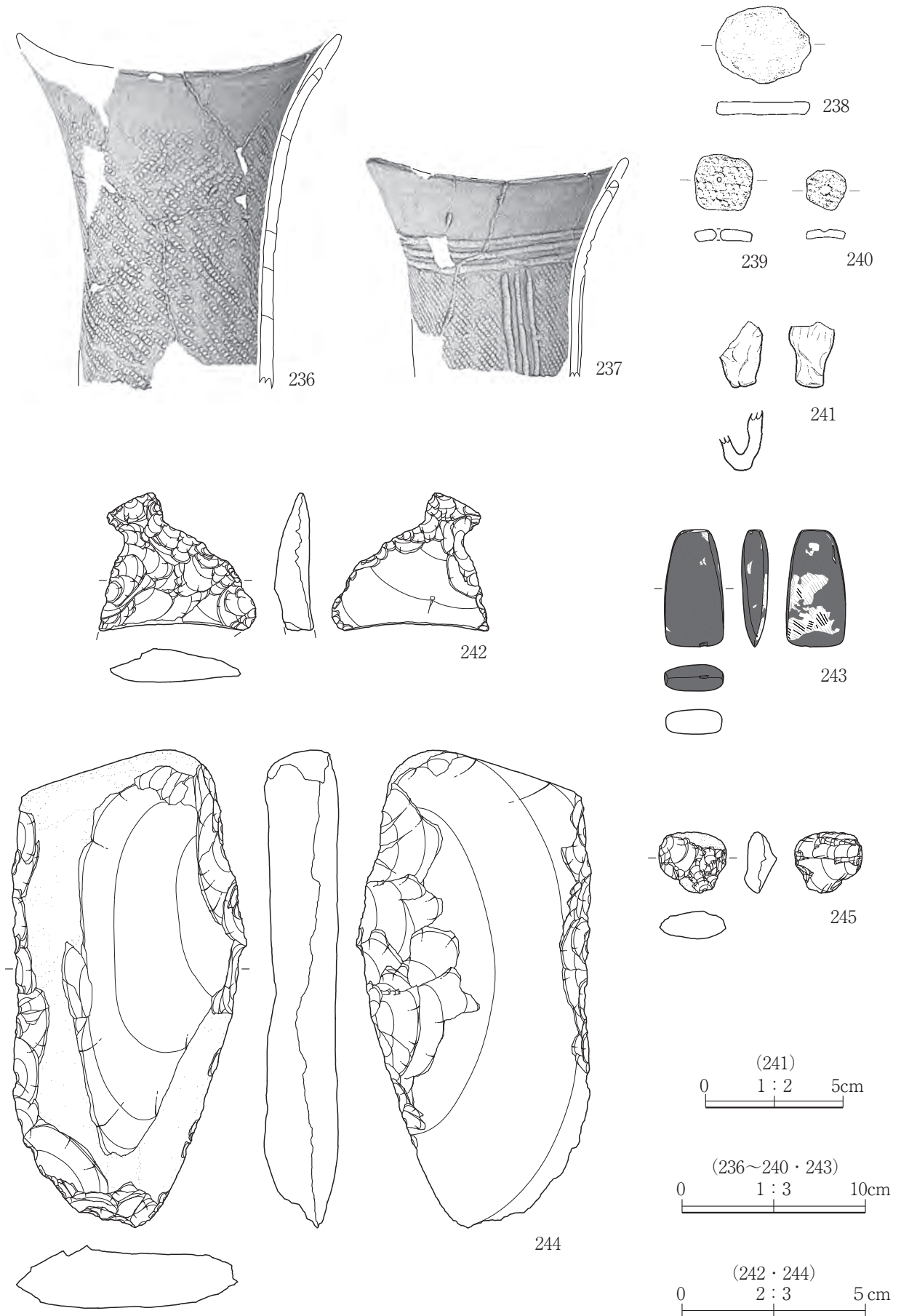
第64図 4号住居跡出土遺物1



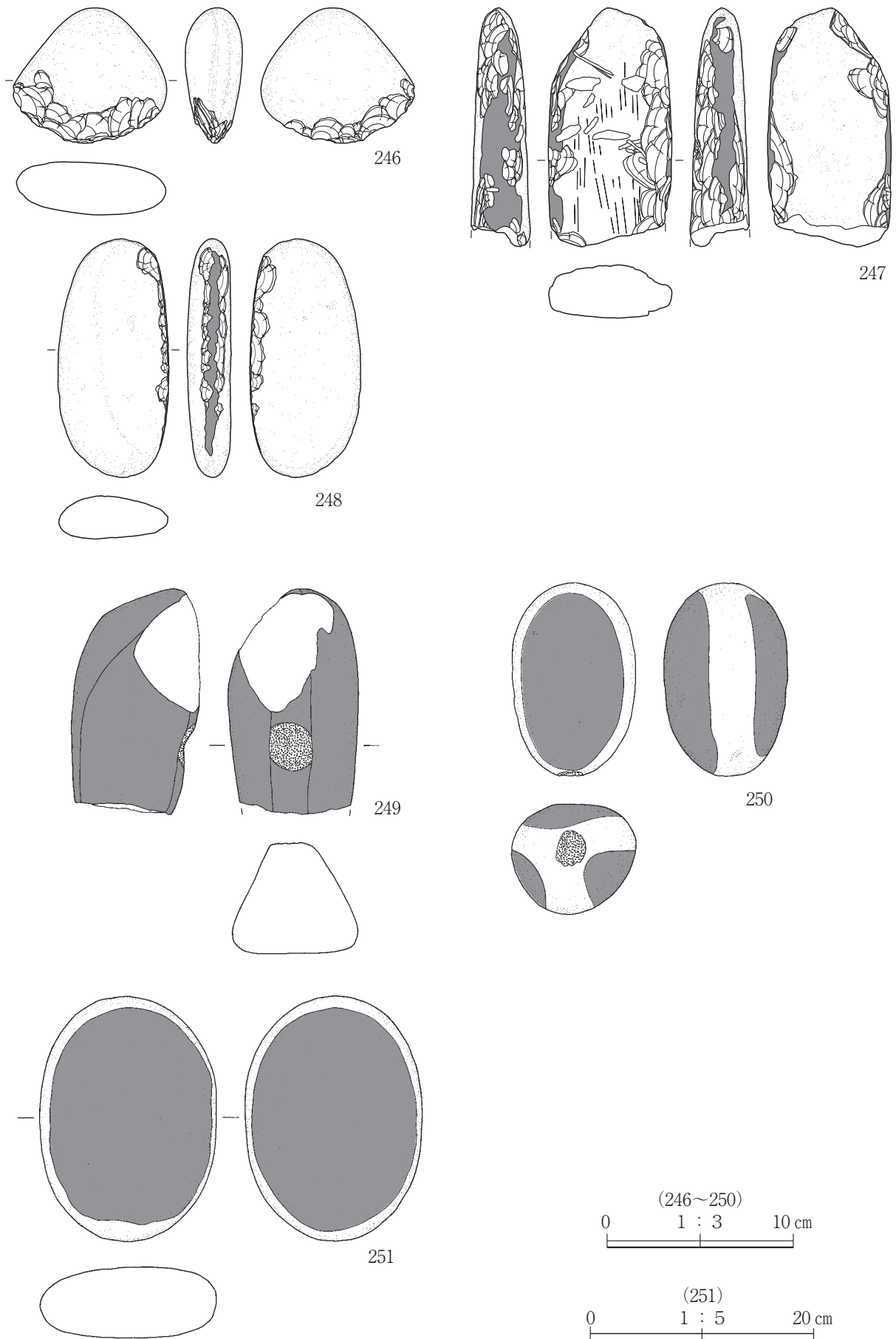
第65図 4号住居跡出土遺物2



第66図 4号住居跡出土遺物3



第67図 4号住居跡出土遺物4



第 68 図 4号住居跡出土遺物 5

5層のみである。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。

[床面・壁] VI層面を床面と判断した。概ね平坦である。

壁は北西壁の一部のみが残存する。ほぼ直立気味である。

[炉] 確認できなかった。5号住居跡に壊されたと推測する。

[附属施設] 柱穴34個を確認した。配列からはPit 1・4・7・15・33が主柱穴の可能性がある。消失した範囲も含め、6本以上の主柱穴配列であったと推定する。

壁溝は北壁際のみ確認した。一部2重である。

[出土遺物] 床面から埋土上位、また附属施設から縄文土器113,926.8g、石器199点が出土している。本遺構の埋土（5層）が占める埋土下位からも多量の遺物が出土している。

縄文土器は32点(206～237)掲載した。206～208は大木8b式新段階の深鉢である。206・208は深鉢C類で、206は2単位、208は3単位の波状口縁である。口縁部に施文される渦巻き文は簡略化し、代わって隆帯による楕円形区画が横位に巡る。大木8b式新段階としたが、大木9式古段階に近い段階と推測する。207は深鉢A類で2単位の波状口縁を呈する。口縁部は無文、胴部には隆帯による渦巻き文と不整形の区画が描かれている。209・210は大木8b式古段階の深鉢でキャリパー形を呈する。口縁部には渦巻き文が横位に巡る。211～234は破片で、概ね上記の土器と同時期である。隆帯による渦巻き文と縦位の長楕円形区画が施文される土器が多く、大木9式古段階に近いと言える。221は大木8b式新段階の浅鉢口縁部片で口縁部には隆帯による横位の楕円形区画が並び、区画内には短沈線を充填している。222～227は大木8b式新段階～大木9式古段階の深鉢である。222・223・225は地文に単軸絡条体1類が縦位に施文される。他に流れ込みと考えるが、大木7a式古段階(229)や大木7a式新段階(230)なども出土している。

土製品は埋土上・下位から6点出土しており、そのうち4点掲載した。238～240は円盤形土製品である。全て深鉢の胴部片の転用で、239は体部中央を穿孔しており、240は穿孔途中である。241は性格不明の土製品で、一部を欠損している。

石器は10点掲載した。242は石匙Ⅲ類で刃部が欠損する。243磨製石斧で、やや小型。全体が炭化物(?)によって、黒く覆われているのが特徴である。244は不定形石器とした。大型のフレイクを素材とし、両面から押圧剥離による刃部を作出している。245は自然面の残るフレイクで、黒曜石である。分析の結果、産地は男鹿あるいは月山と推測される(第Ⅷ章-2)。246は礫器である。小型の礫を素材とし、縁辺の一辺のみ両面から割り、刃部を作出する。247・248は特殊磨石である。249～251は敲磨器類で、磨痕、敲打痕の残るものが多い。

[時期] 出土した土器の年代から大木8b式新段階と判断した。

5号住居跡（第69～79図、写真図版9・10・59～64・261）

[位置・検出状況] 調査区北側、I B 6g、I B 7g、I B 6h、I B 7h、I B 8hグリッドに位置する。VI層上面で検出した。

本遺構は6号住居跡に大きく壊されており、北から西側の約1/3程度しか残存していない。

[その他の遺構との重複] 4号、6号住居跡と重複する。本遺構は4号住居跡より新しく、6号住居跡より古い。

[平面形] 残存部から円形と推定する。

[規模] 719 × (465) cm、深さ50cm

[埋土] 9層からなる。埋土上位は灰黄褐色や暗褐色シルトを、埋土下位は黒褐色シルトを主体とする。

[床面・壁] VI層面を床面と判断した。概ね平坦である。

壁は北壁と東壁、西壁の一部が残存する。ほぼ直立気味である。

[炉] 確認できなかった。6号住居跡に壊されたものと推測する。

[附属施設] 柱穴19個を確認した。これが全てではないが、配列からPit 2・5・8・18は主柱穴の可能性はある。

壁溝は壁が残存する範囲で2重に巡る。

また床面のほぼ中央、北寄りで132 × (102) cmの楕円形を呈する床下土坑を1基確認した。深さは床面から38cmを測る。底面から縄文土器の深鉢(253)が逆位の状態で出土している(第71図写真参照)。深鉢(253)は接合・復元の結果、ほぼ完形であることが分かったが、土坑内で見つかった際は胴部下半から底部は破損していた。なお胴部下半から底部の破片は床下土坑の埋土中から出土している。253が伏甕で、床下土坑はその掘り方の可能性もあるが、土器の出土状態からは断定できず、床下土坑とした。一部、6号住居跡に壊されている。

[出土遺物] 本遺構は残りが悪い割に、遺物の出土量は比較的多く、埋土上・下位、また附属施設から縄文土器142,134.3g、石器106点が出土した。

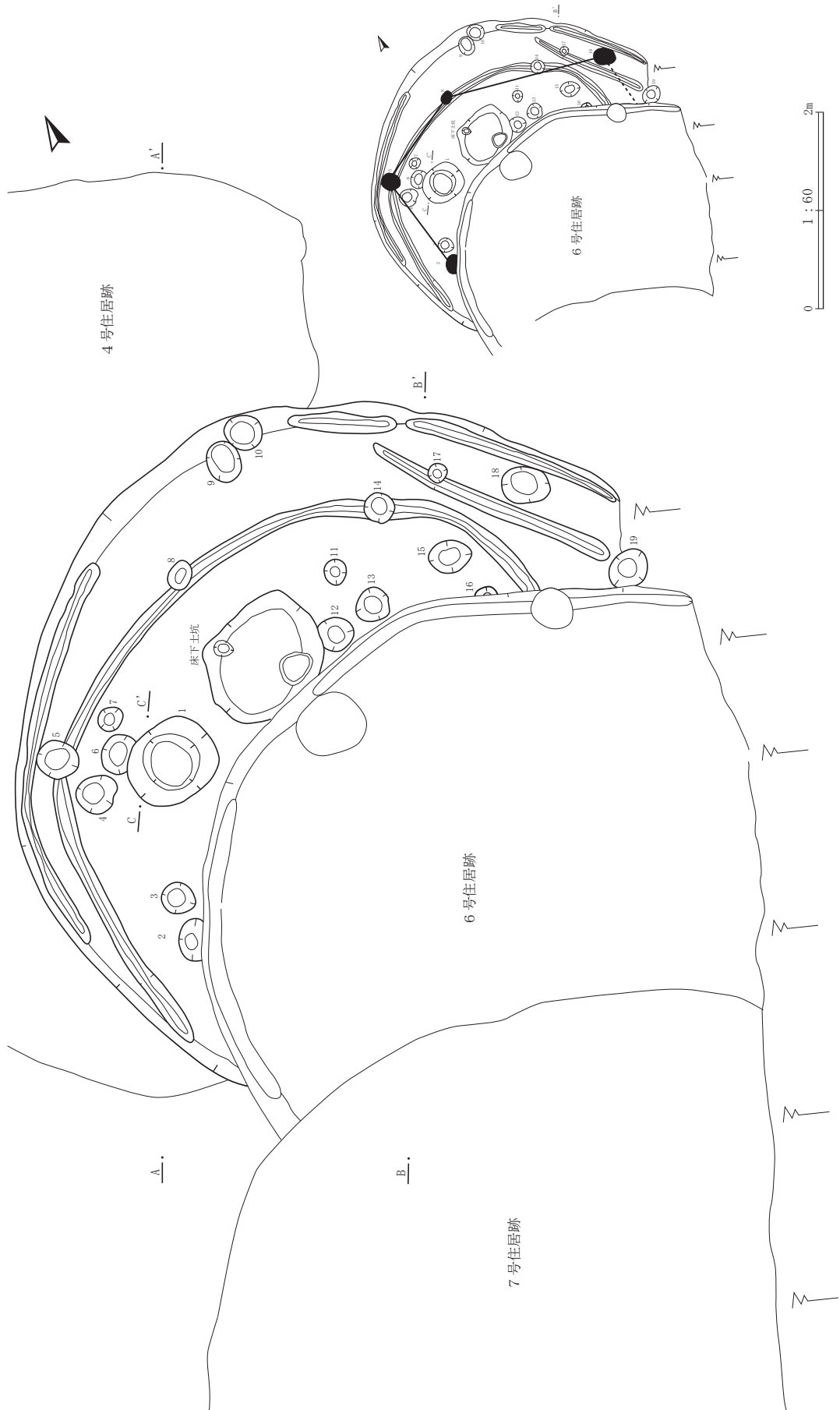
縄文土器は42点掲載した。252・253は深鉢で、非常に大型である。どちらも類似する形態、文様であるが、252は埋土中から出土しており、大木9式古段階に比定される。4単位の波状口縁を呈し、胴部上半が膨らみ、口縁部が内湾する。縦位の単軸絡条体1類を地文とし、沈線で不整形区画および、円文に近い渦巻き文を描く。253は床下土坑内から出土した。252と同形態で、斜行縄文を地文とし、文様は沈線による不整形区画や渦巻き文も施文される。大木8b式新段階に比定され、232より古い。

254～262は大木8b式新段階に比定される深鉢である。いずれも渦巻き文が退化し、連結する隆帯や縦に垂下する隆帯が長く伸びている。また口縁部から胴部上半に小さい不整形区画が配されており、大木8b式新段階でも、次の大木9式古段階に近い時期のものと推測する。263・265・274は大木8b式新段階～大木9式古段階に比定される深鉢で、上記の土器群とほぼ同じ文様を沈線で描いている。

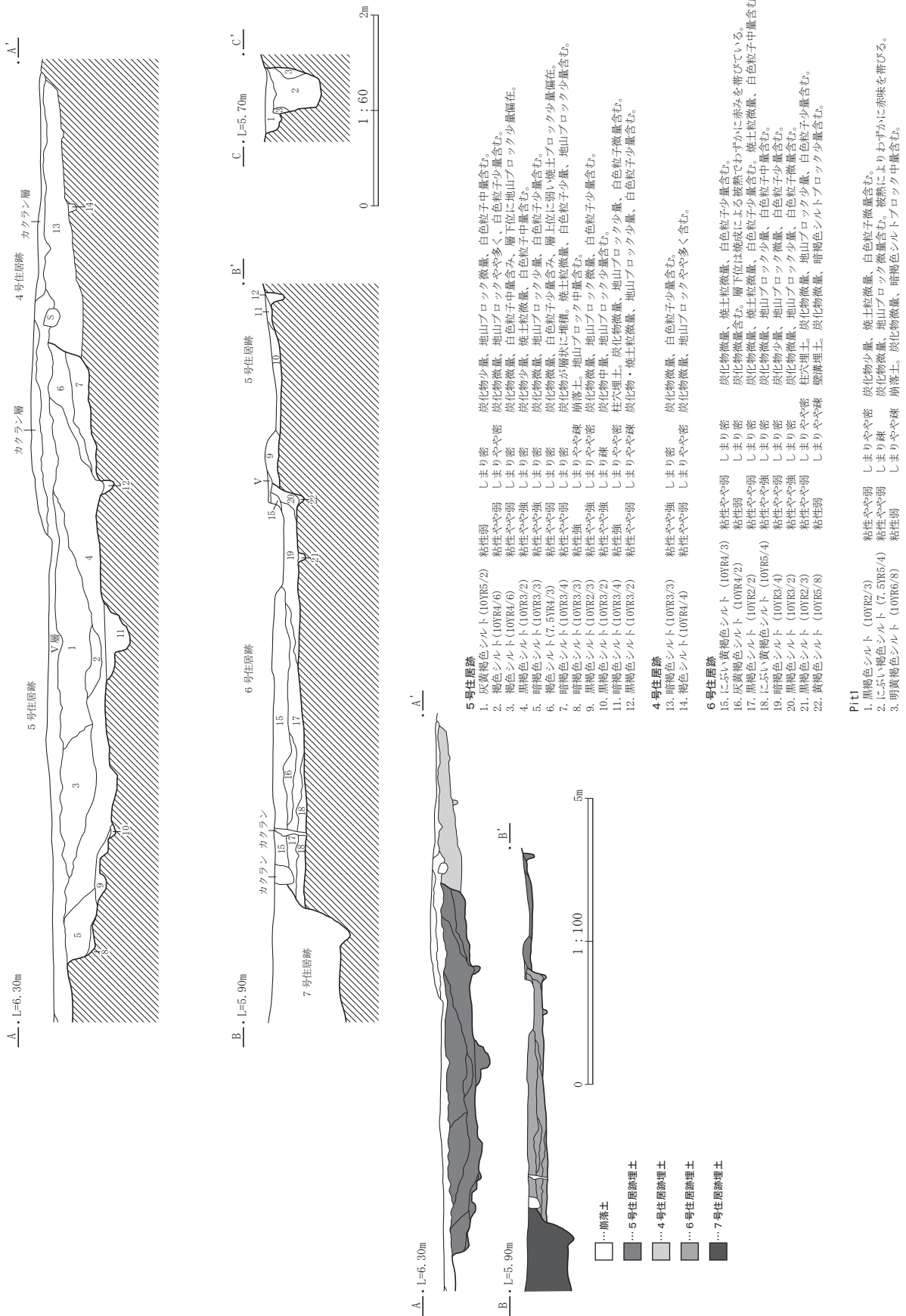
264以降は破片資料である。264～273は大木8b式新段階、275～280は大木8b式新段階～大木9式古段階に比定される。また271は大木8b式新段階の浅鉢の口縁部片である。口縁部は隆帯で区画され、区画内に矢羽根状の短沈線を充填する。

281は器台形土器の破片で全体の1/5程度残存するのみである。地文を施文後、沈線により二段の弧状文が描かれている。大木8b式新段階から大木9式古段階の範疇と推測する。280・282・283は大木9式古段階であり、他の土器と比べやや新しい。

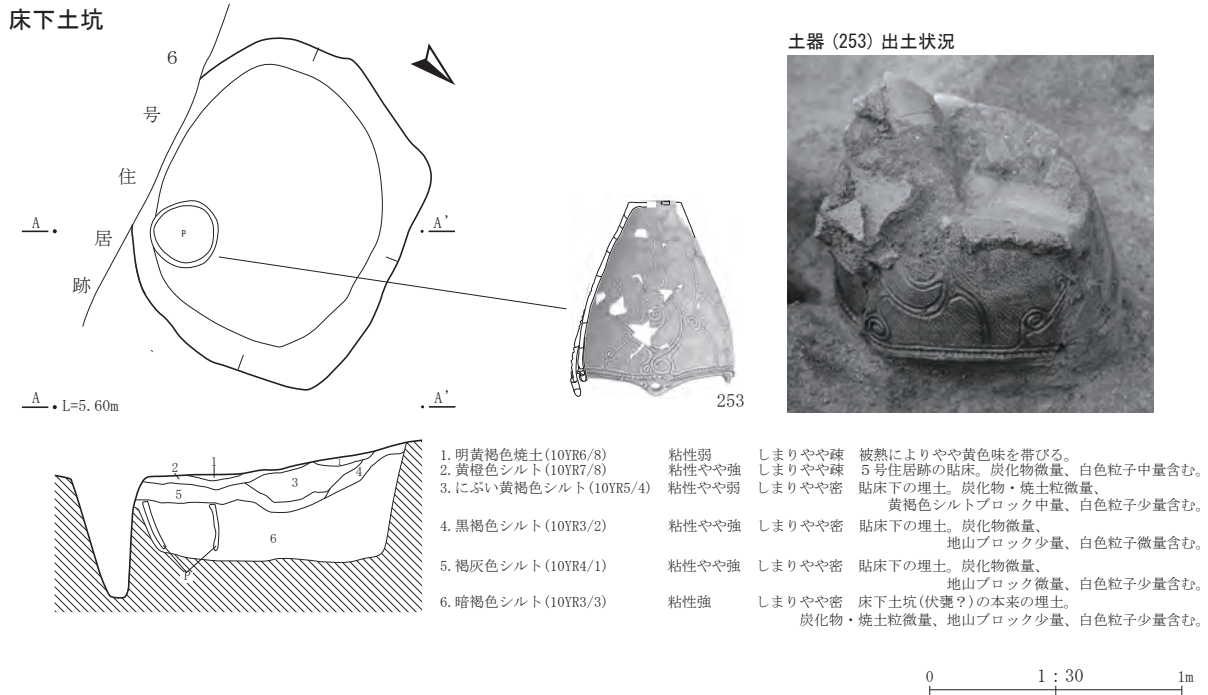
土製品は円盤形土製品2点(294・295)と粘土塊(296)を掲載した。円盤形土製品はいずれも深鉢の胴部片を転用し、294は円形、295は三角形に整形されている。295は中央を穿孔している。粘土



第69図 5号住居跡1



第70図 5号住居跡2



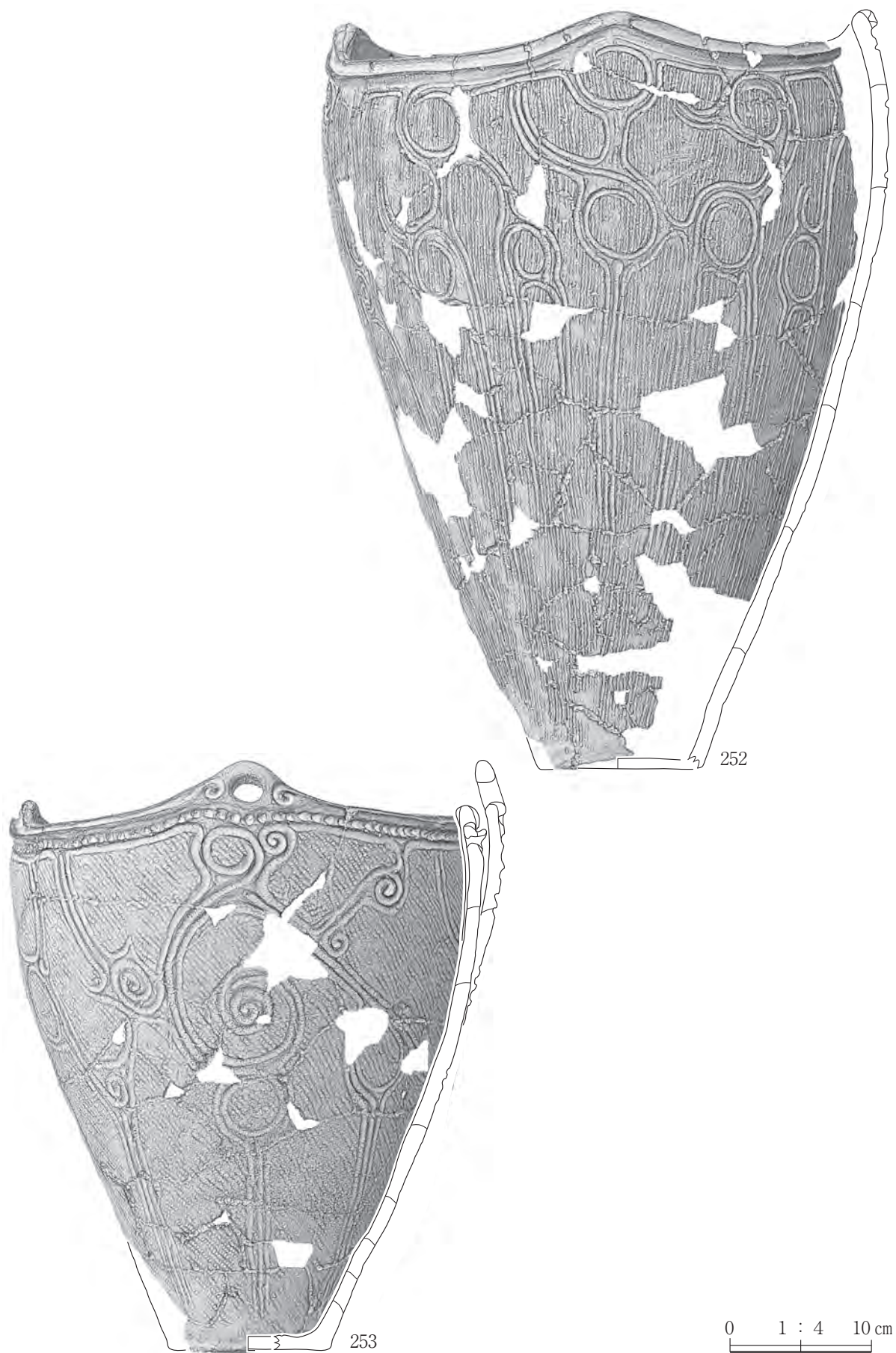
第 71 図 5号住居跡3

塊(296)は小さく、指頭で押したような痕跡が目立つ。

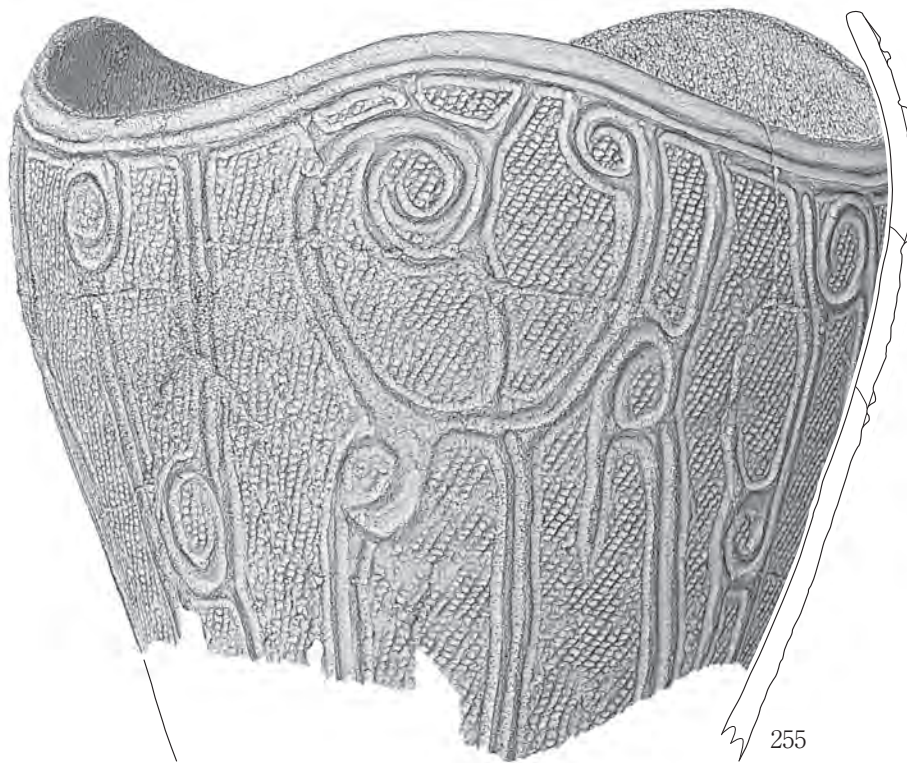
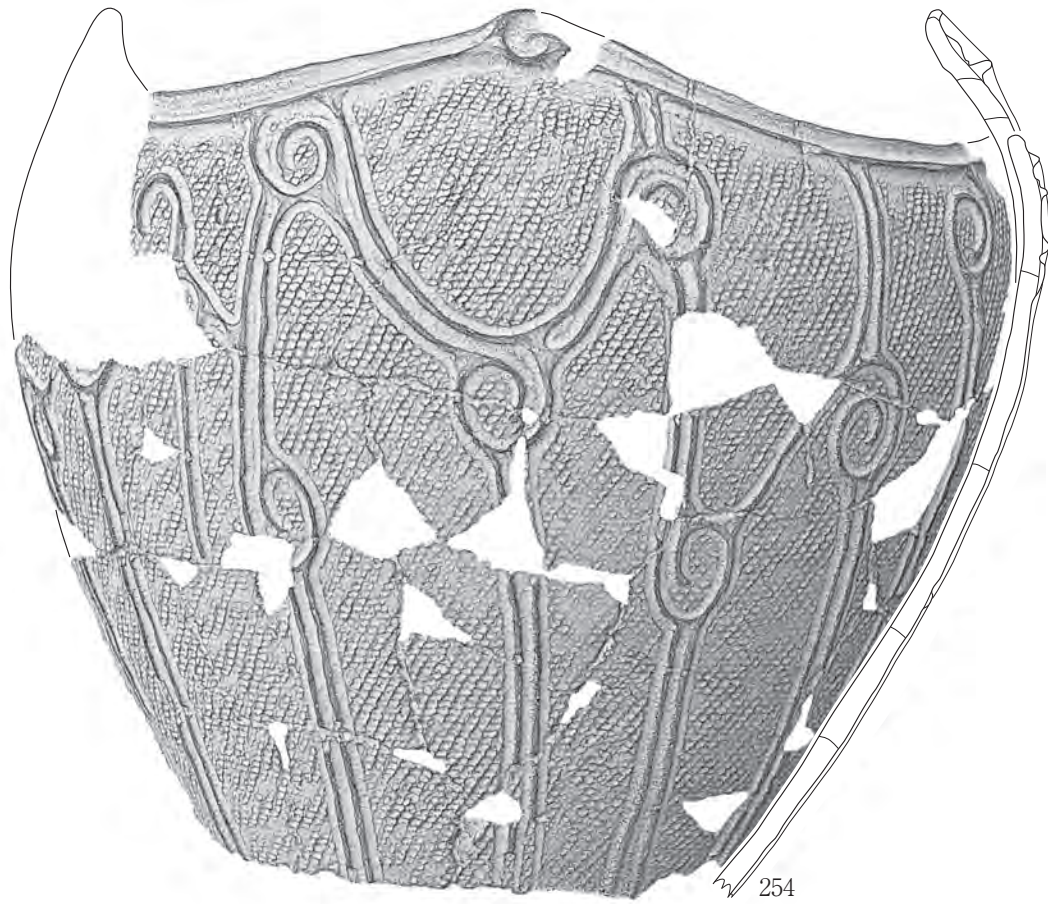
石器は5点掲載した。297は石鏃である。Ⅱ類でやや大きく、片面の二次加工がやや雑である。298は不定形石器Ⅰ類である。先端を欠損している。299～301は磨製石斧で、いずれも完形である。全体に研磨の痕跡が見受けられる。また299・300は体部の広い範囲に炭化物が付着している。

石製品は1点(302)掲載した。石棒の破片と推定する。表面に痘痕のような小穴(敲打痕?)が残っていることから、未成品の可能性が高い。

[時期] 床下土坑から出土した土器(253)の年代から大木8b式新段階と判断した。

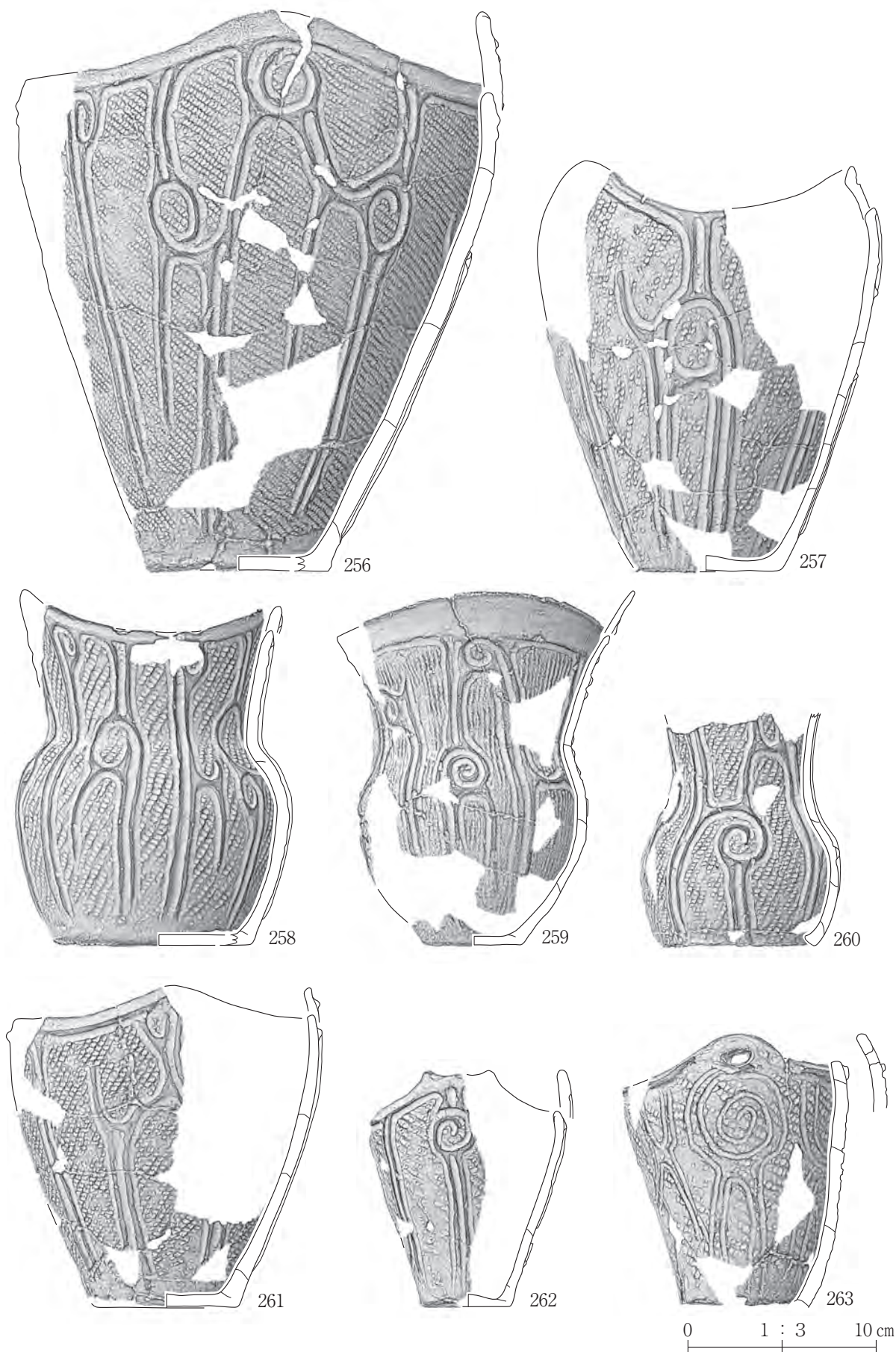


第 72 図 5号住居跡出土遺物 1

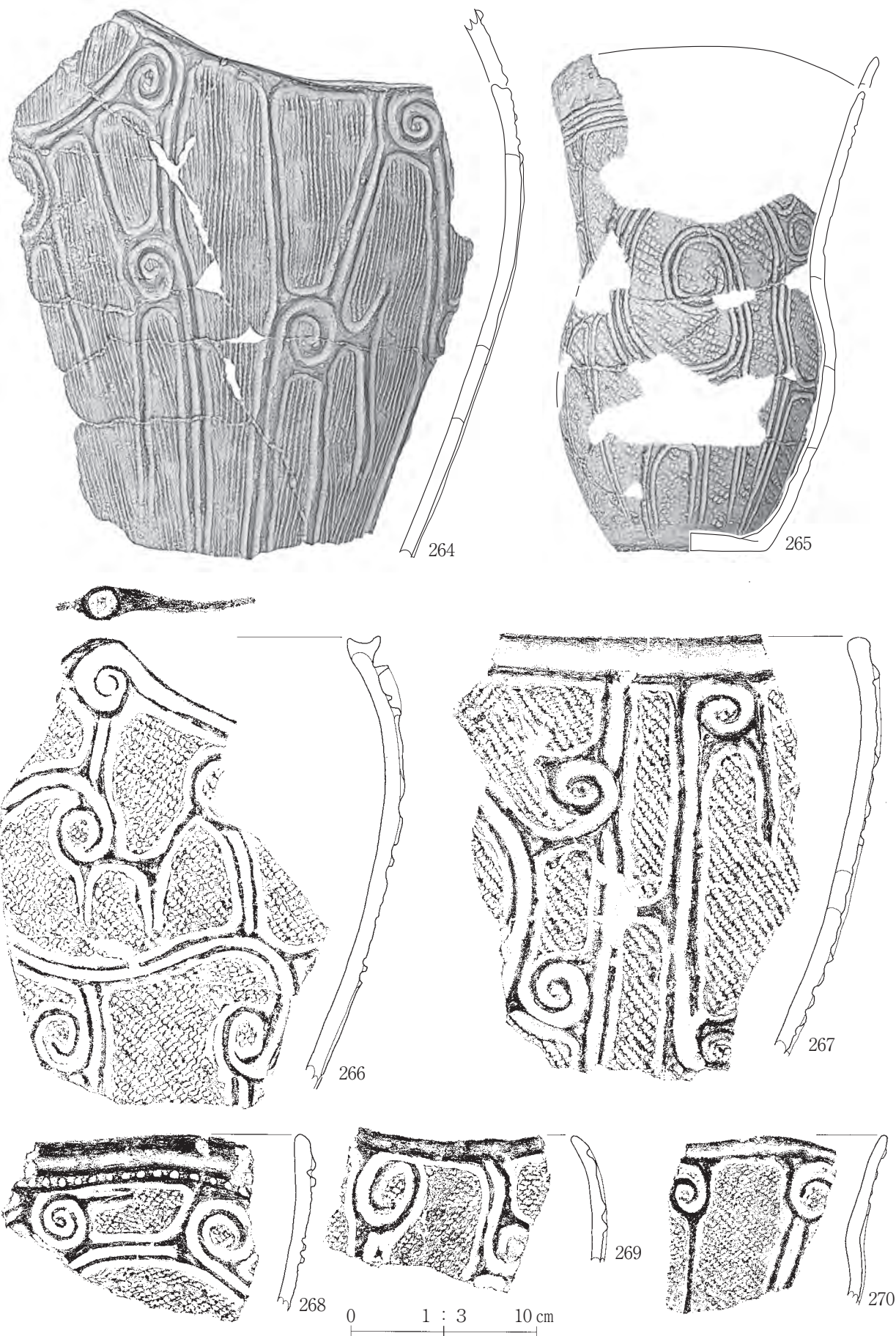


0 1 : 3 10 cm

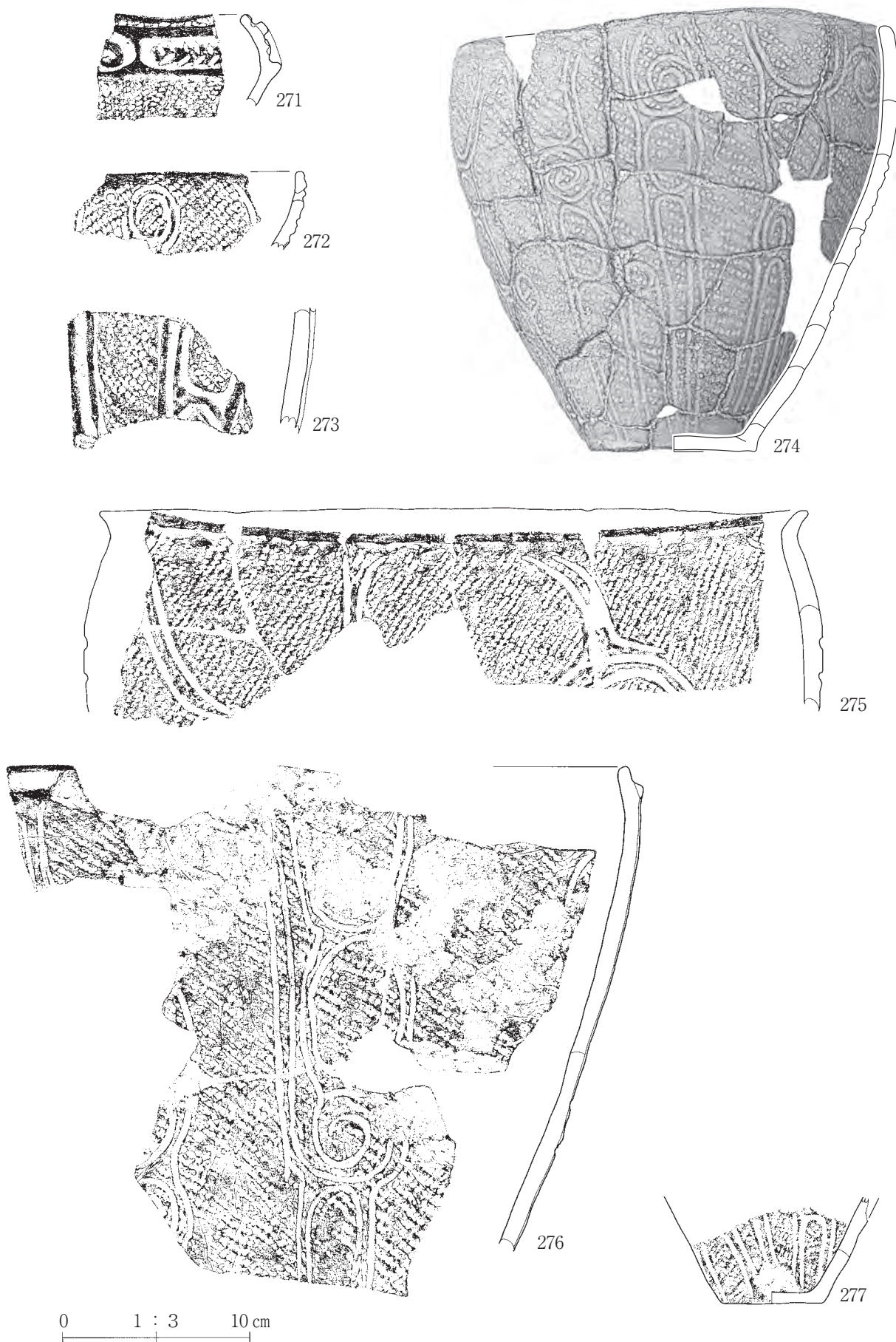
第 73 図 5号住居跡出土遺物 2



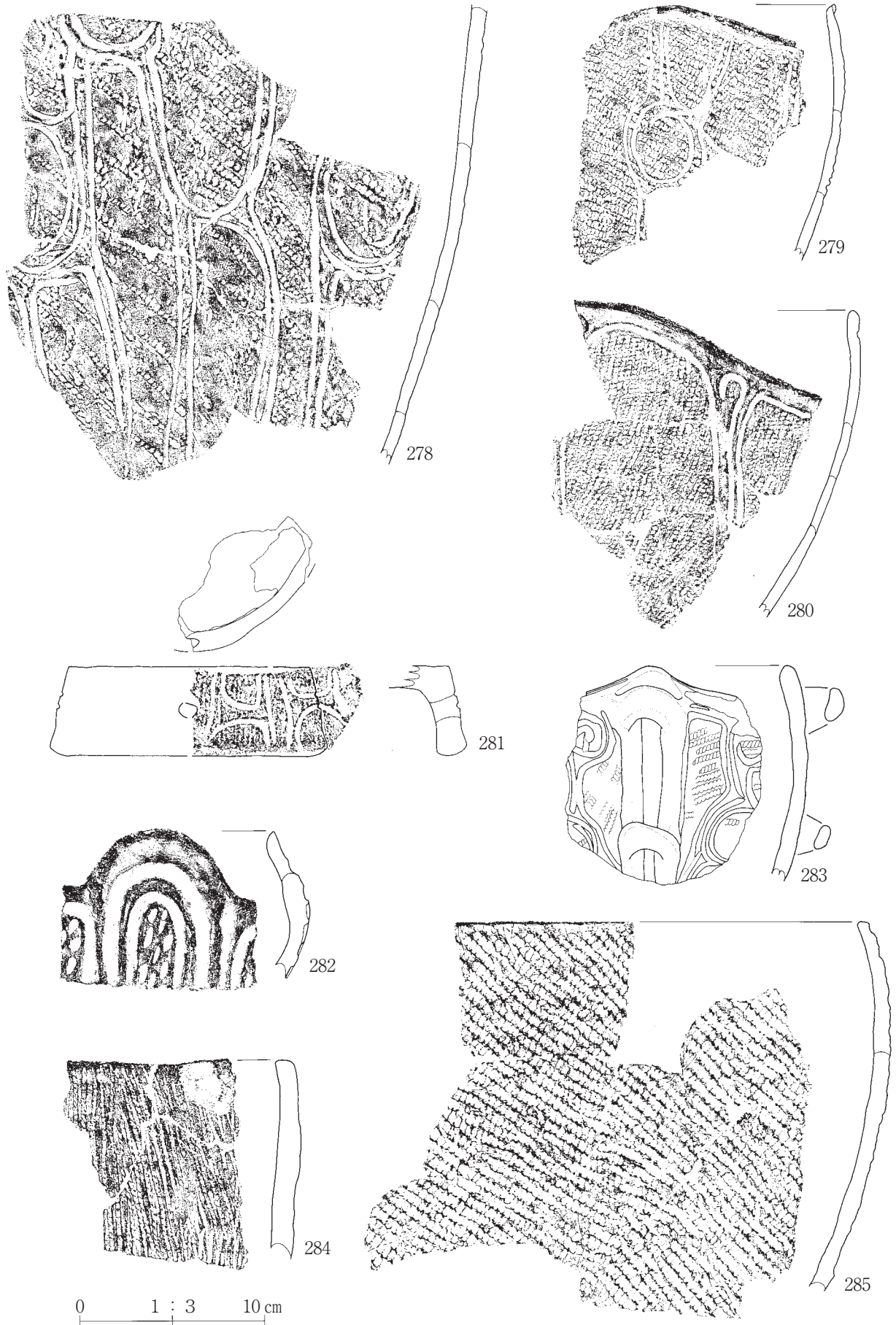
第 74 図 5号住居跡出土遺物 3



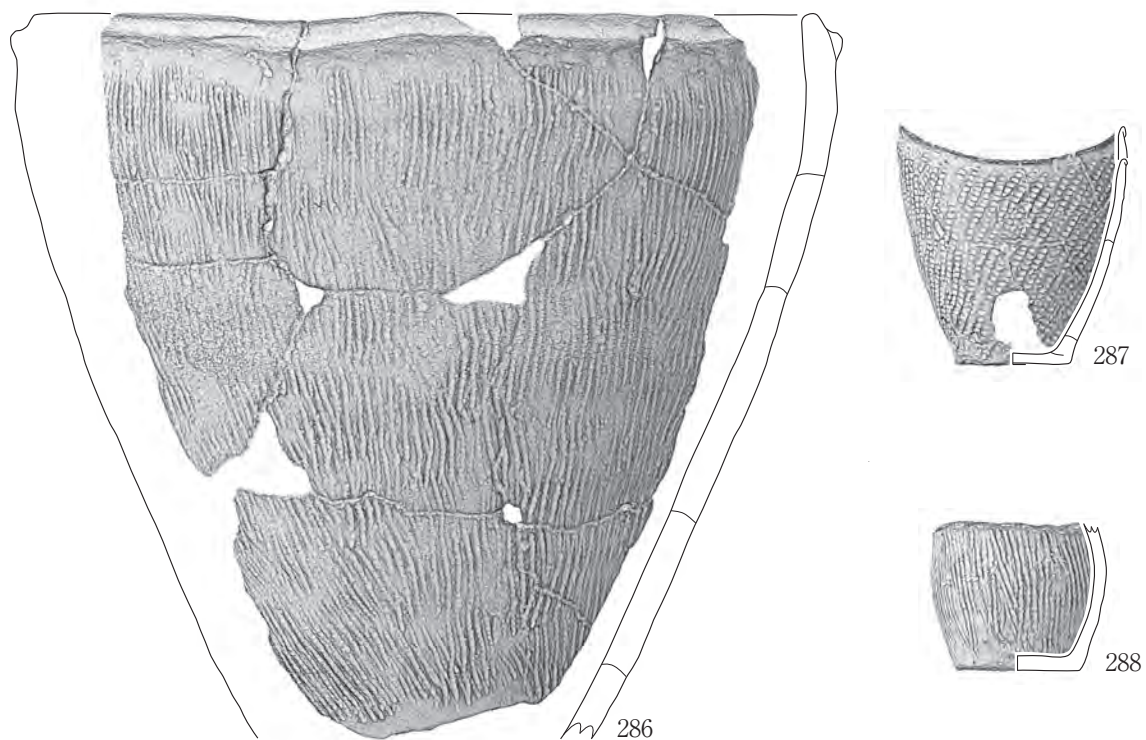
第 75 図 5 号住居跡出土遺物 4



第 76 図 5号住居跡出土遺物 5

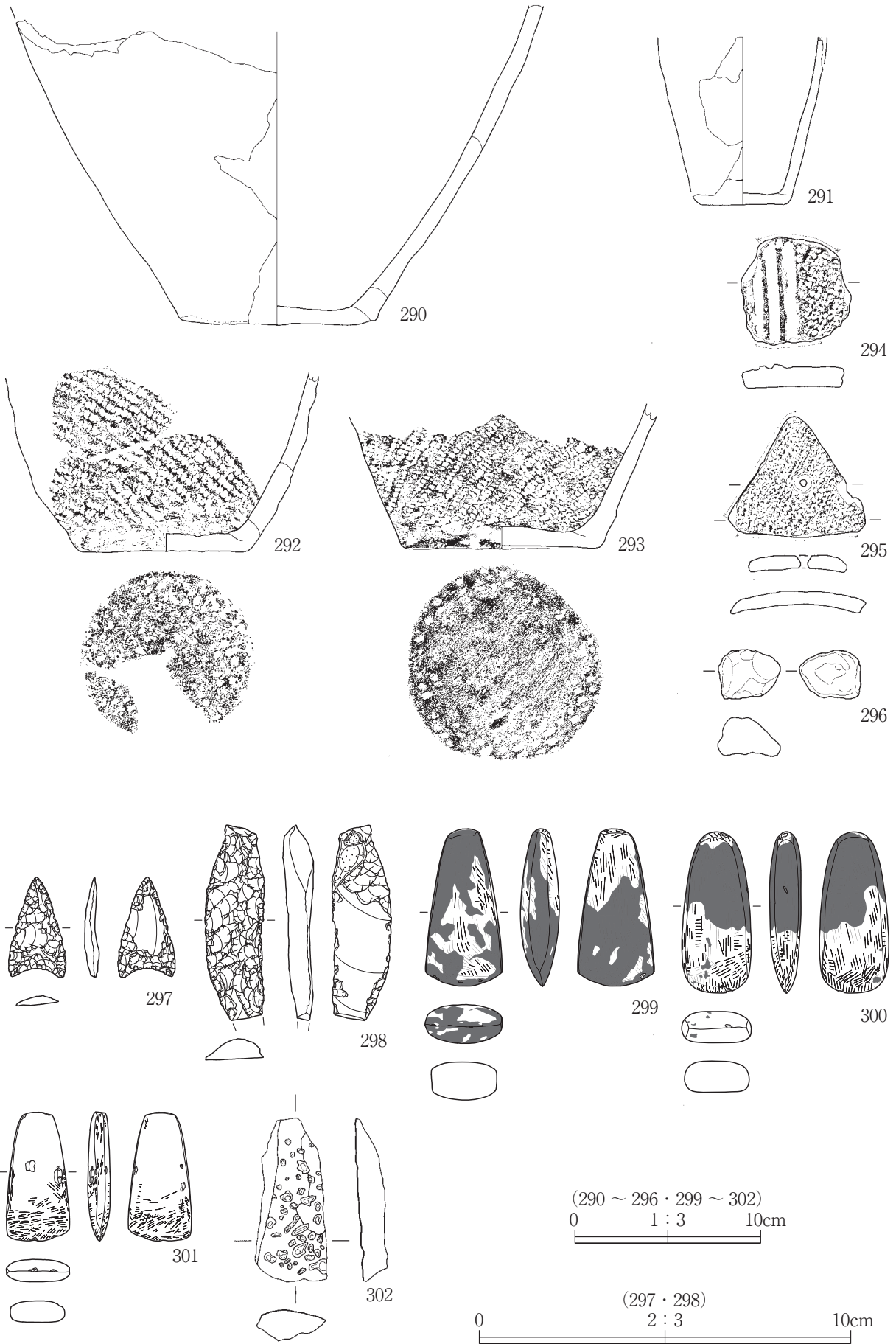


第 77 図 5号住居跡出土遺物 6



0 1 : 3 10 cm

第 78 図 5 号住居跡出土遺物 7



第 79 図 5号住居跡出土遺物 8

6号住居跡（第80～85図、写真図版11・65～67・261）

[位置・検出状況] 北側調査区 I B 7h、I B 8h、I B 7i、I B 8i グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

本遺構は南側の一部が7号住居跡に壊され、東側の一部は斜面の崩落により消失している。

[その他の遺構との重複] 5号、7号住居跡と重複する。本遺構は5号住居跡より新しく、7号住居跡より古い。

[平面形] 残存部から円形と推定する。

[規模] (572) × (540) m、深さ20cm

[埋土] 5層からなる(第80図2～6層)。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。

[床面・壁] VI層面を床面と判断した。概ね平坦である。

壁は北壁、西壁の一部のみが残存する。ほぼ直立気味である。

[炉] 確認できなかった。7号住居跡に壊されたものと推測する

[附属施設] 柱穴30個を確認した。配列からは主柱穴配列は推定できない。

床下土坑は床面のほぼ中央に位置している。伏甕の可能性も考えたが、掘り下げても土器は出土なかった。また断面で土層を確認したが、土器を埋設する際の掘り方とはとらえられないので、土器を取り去ったとも考えられない。

壁溝は壁が残存する範囲で、2重に確認した。内側の壁溝は本住居跡の壁から100cm近く離れており、本遺構が2回以上、拡張されているとともに、古い段階では住居の直径が新しいものより1～2m小さかったことが推測される。

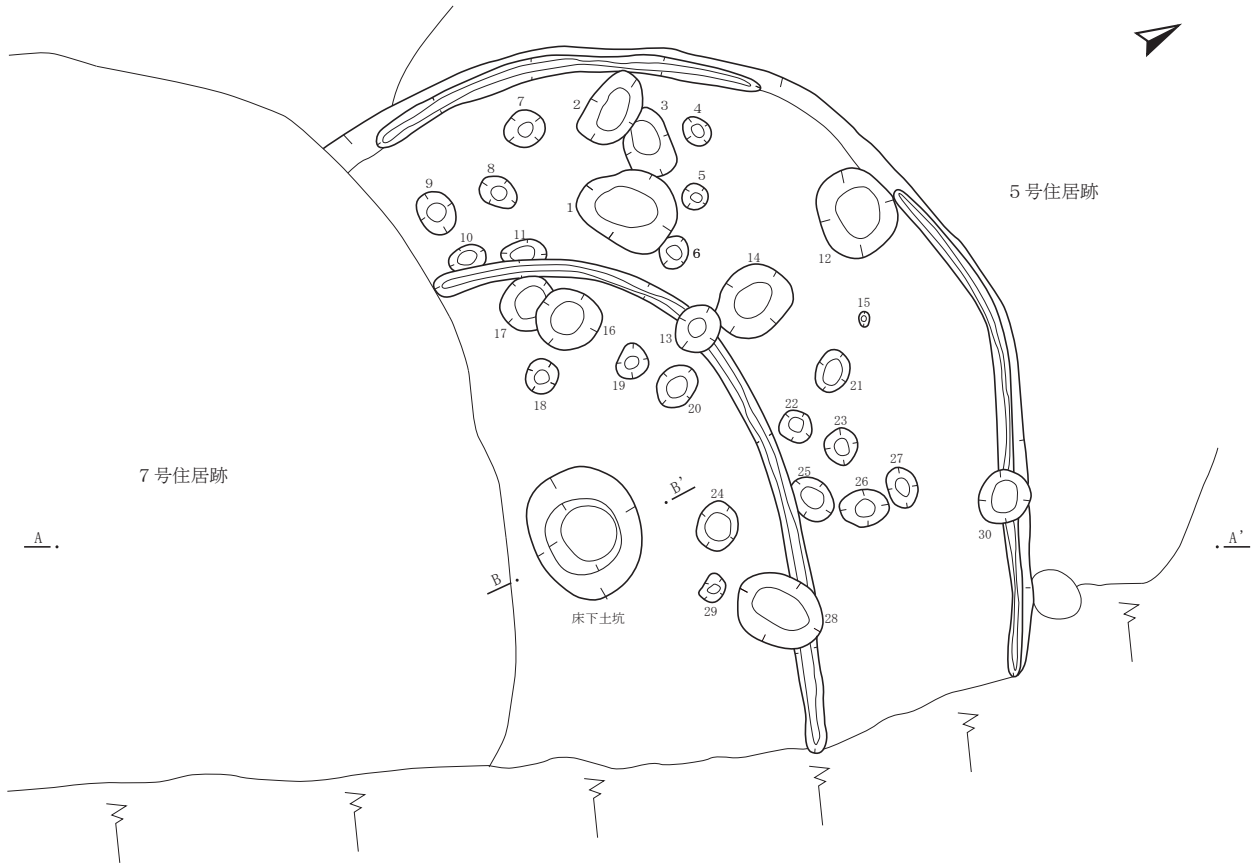
[出土遺物] 本遺構は遺構全体の約1/2が消失している割に、出土遺物は、縄文土器が埋土上・下位、附属施設から64,437.9g出土し、特に略完形、ないし形態の復元できる縄文土器が少なくない。また石器も81点出土している。本来は他の住居跡同様、さらに多くの出土遺物があったものと推定する。

縄文土器は27点掲載した。303～319は大木8b式新段階の深鉢である。いずれも口縁部から胴部上半にかけて、隆帯による複数の渦巻き文が付されるが、それらに合わせて縦位に垂下する直線的な隆帯も付される土器が目立つ(303～308など)。309は深鉢A類で口縁部が欠損する。胴部下半が大きく下膨れな形態の小型深鉢で、口縁部から胴部上半を欠損する。底面は側縁部分を残して欠損する。欠損部分を確認したが、割れた形跡がなく、元々無いか、あるいは輪積み部分から底面のみ外れた可能性も考えられる。310は台付深鉢(鉢?)の台部である。地文のほか、縦位の隆帯が付され、また円形の透かしが2個一対で施されている。

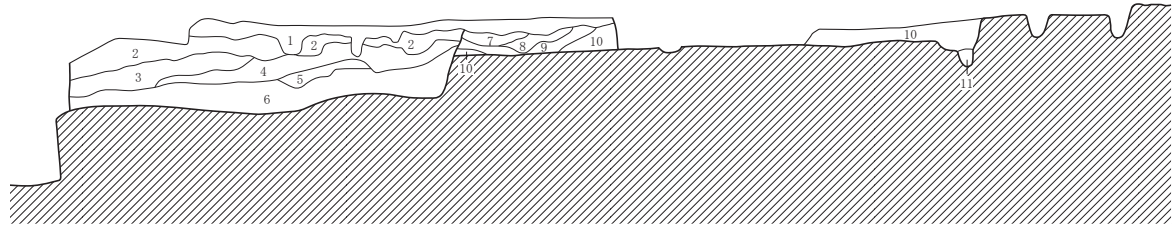
311～318は破片であるが、概ね上記の文様が施文される土器である。320・321は大木8b式新段階～大木9式古段階の深鉢である。地文を施文後、沈線による縦位の楕円形や隅丸方形の区画が施文される。302は渦巻き文が描かれるが、大木8b式新段階にみられるような形態の渦巻き文ではなく、ほぼ円形区画に近い形に退化している。322は略完形の深鉢である。大木10式古段階と判断したが、文様はあまり見受けられない。胴部上半にT字状の区画が描かれ、区画内に磨消技法で縄文が施文される。またT字状の区画は、地文のみの胴部下半とも連結する。323は大木9式新段階の深鉢である。324～325は粗製の深鉢である。325は口縁部が3単位の波状口縁を呈する。

土製品は埋土下位から3点出土しているが円盤形土製品1点(330)を掲載した。深鉢の胴部片の転用で、三角形に整形されている。

石器は6点掲載した。331は石鏃である。II類でやや大振りである。332は黒曜石のフレイクである。分析で産地は男鹿と推定される(第VIII章-2)。333・334は敲磨器類でどちらも棒状の礫を素材にし、



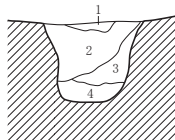
A · L=5.70m



- | | | | |
|------------------------|-------|--------|--|
| 1. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや疎 | V層土類似。炭化物微量、白色粒子少量含む。 |
| 7号住居跡 | | | |
| 2. 黒褐色シルト (10YR2/2) | 粘性やや弱 | しまりやや疎 | V層土類似。炭化物微量、1層土ブロック少量、白色粒子微量含む。 |
| 3. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物微量、焼土粒微量、暗褐色シルトブロック少量、白色粒子少量含む。 |
| 4. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性やや弱 | しまり密 | 炭化物微量、白色粒子中量含む。 |
| 5. 黒褐色シルト (10YR2/3) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 白色粒子少量含む、層上位に炭化物少量偏在。 |
| 6. 暗褐色シルト (10YR3/4) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子微量含む。 |
| 6号住居跡 | | | |
| 7. 褐色シルト (10YR4/6) | 粘性やや強 | しまりやや疎 | 炭化物微量、白色粒子微量含む。 |
| 8. 褐色シルト (7.5YR4/6) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 炭化物微量、焼土ブロックやや多く含む。焼成による被熱でわずかに赤みを帯びる。 |
| 9. 黒褐色シルト (10YR2/2) | 粘性強 | しまりやや密 | 白色粒子中量含む、層下位に炭化物微量偏在。 |
| 10. 暗褐色シルト (10YR3/4) | 粘性強 | しまり密 | 炭化物微量、焼土粒微量、白色粒子少量含む。 |
| 11. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性強 | しまりやや密 | 壁溝埋土。炭化物微量、地山ブロック中量、白色粒子微量含む。 |

床下土坑

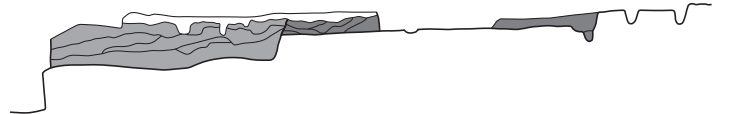
A · L=5.40m



- | | | | |
|------------------------|-------|--------|---------------------|
| 1. 黒褐色シルト (10YR2/3) | 粘性やや強 | しまり疎 | 炭化物微量、白色粒子少量含む。 |
| 2. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物微量、地山ブロック少量含む。 |
| 3. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性やや強 | しまりやや疎 | 炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。 |
| 4. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物微量、地山ブロック微量含む。 |

0 1 : 60 2m

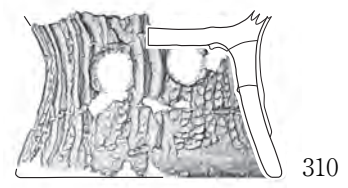
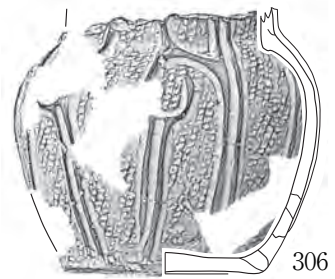
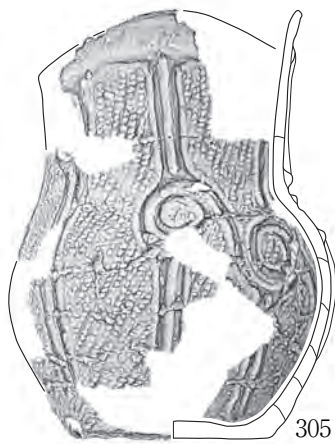
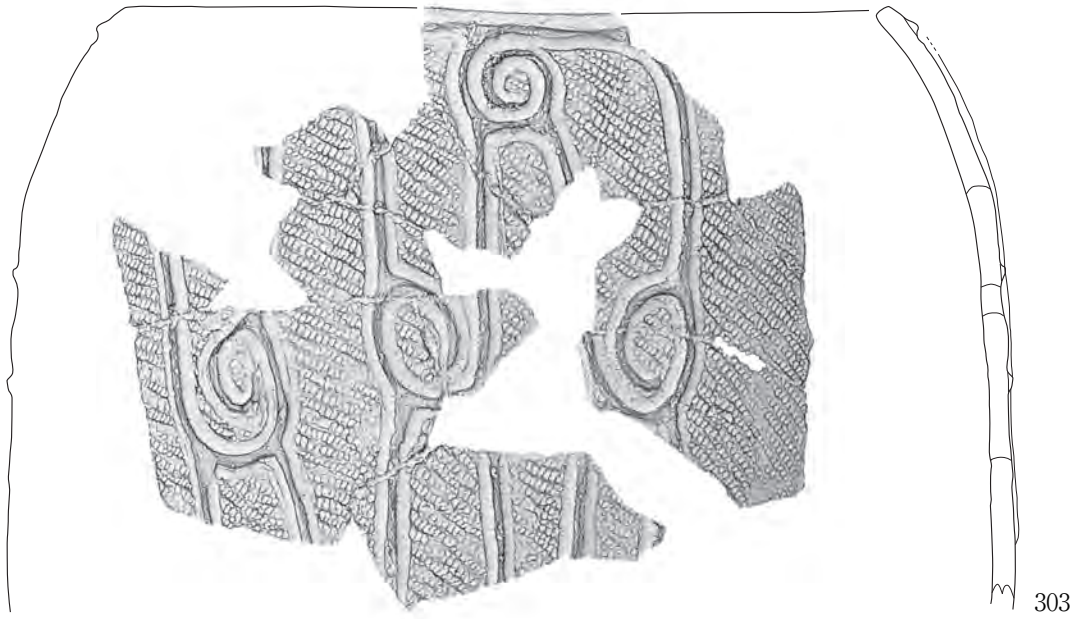
A · L=5.70m



- ... 崩落土
- ... 6号住居跡埋土
- ... 7号住居跡埋土

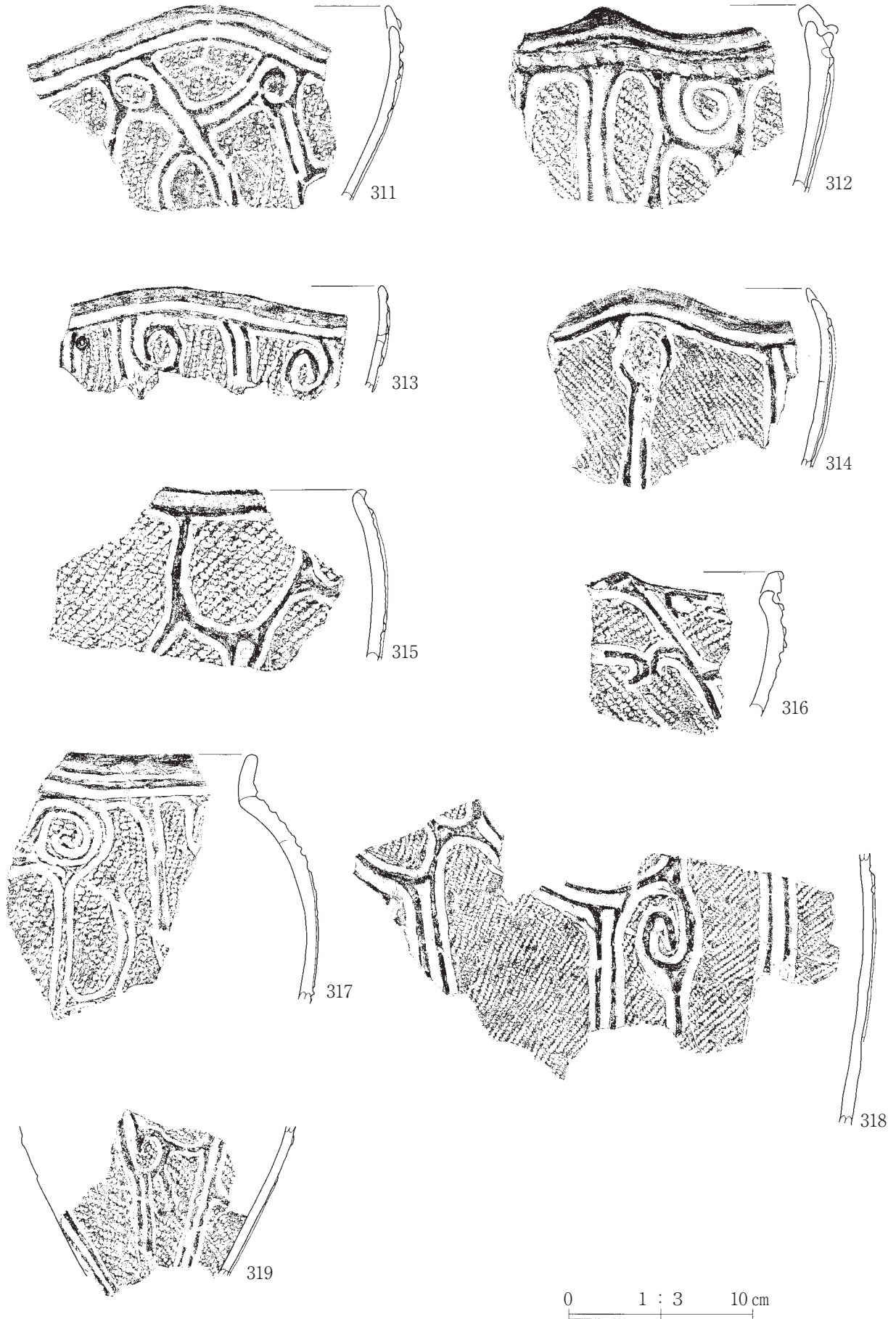
0 1 : 100 5m

第 80 図 6号住居跡

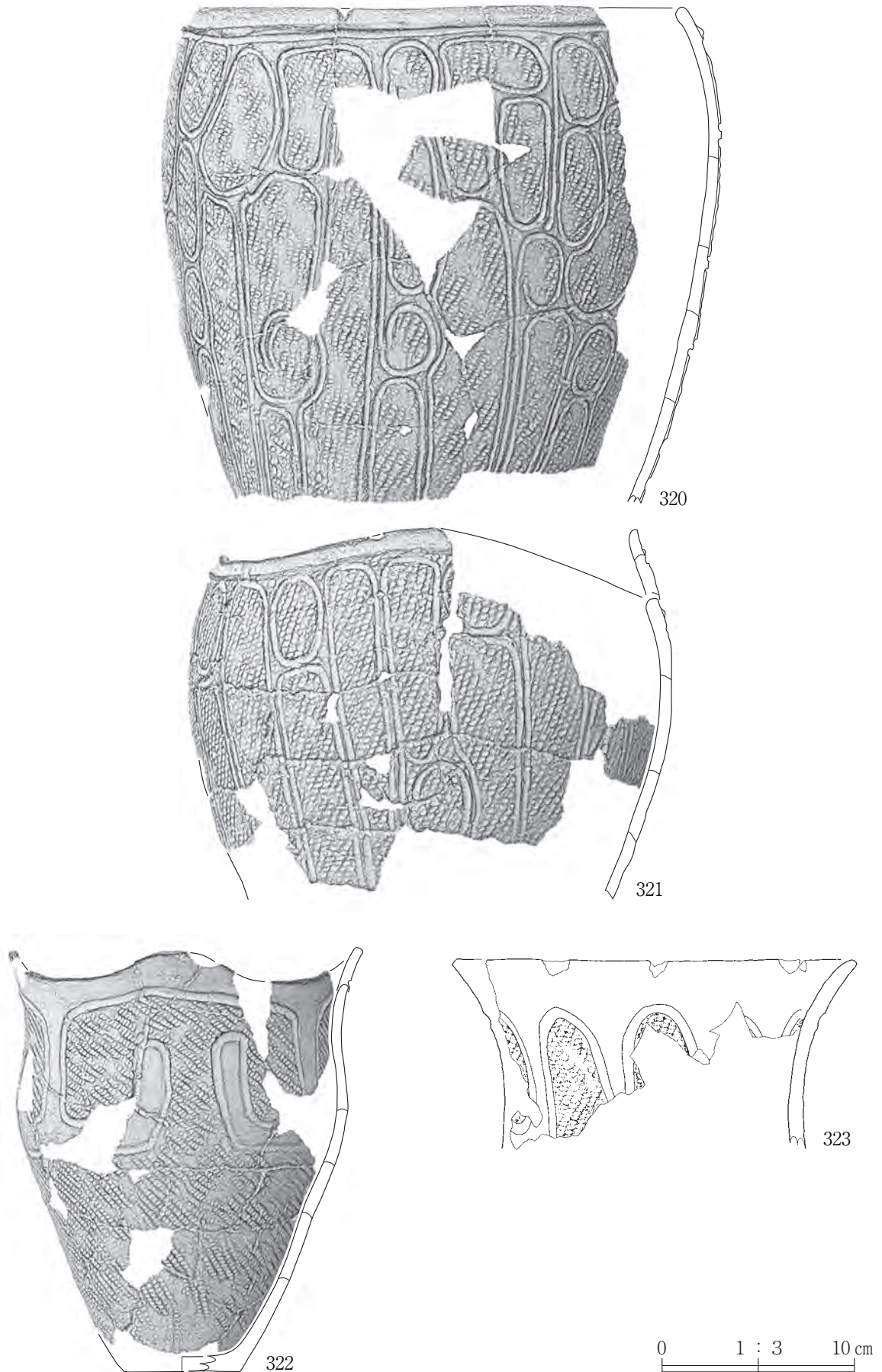


0 1 : 3 10 cm

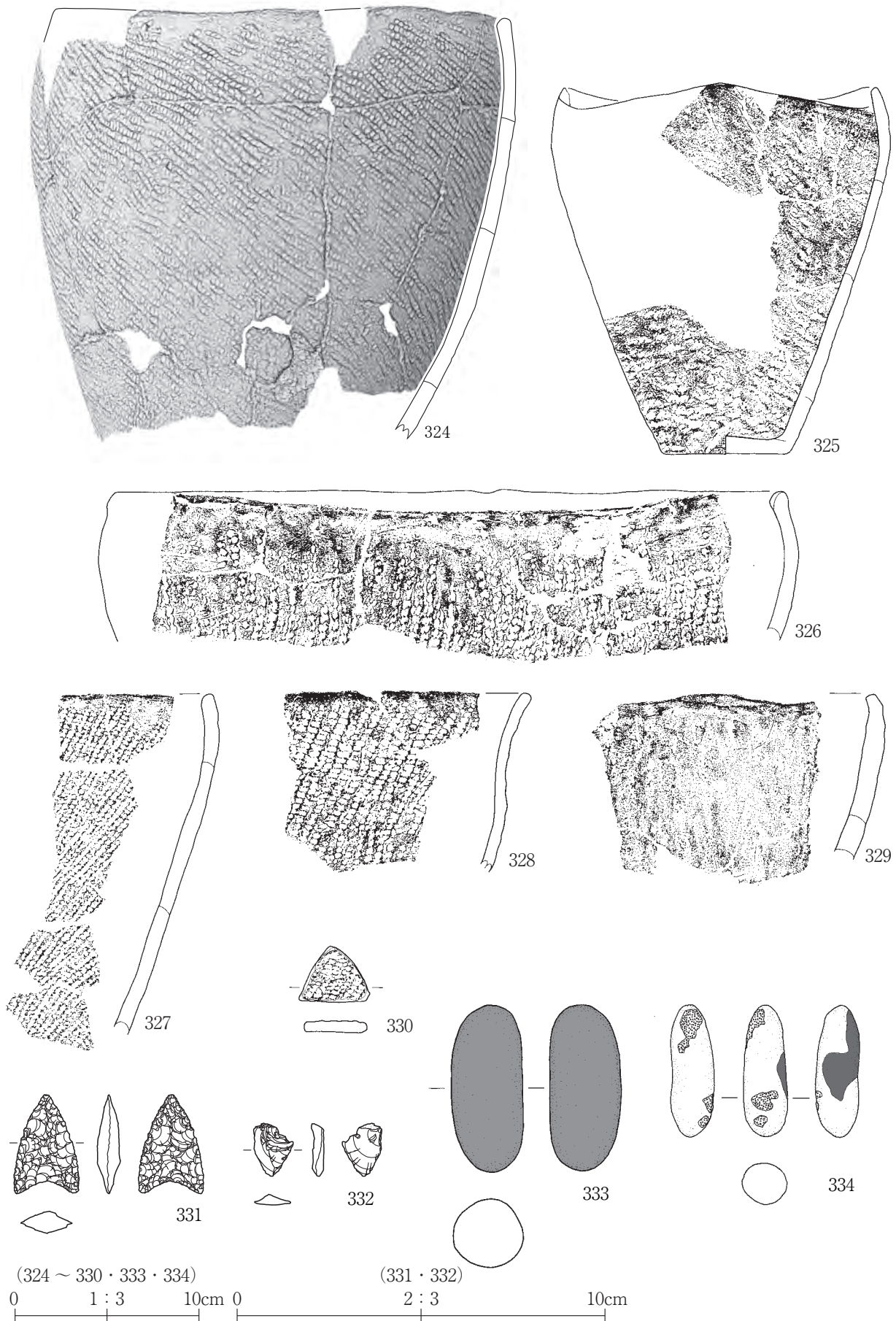
第 81 図 6号住居跡出土遺物 1



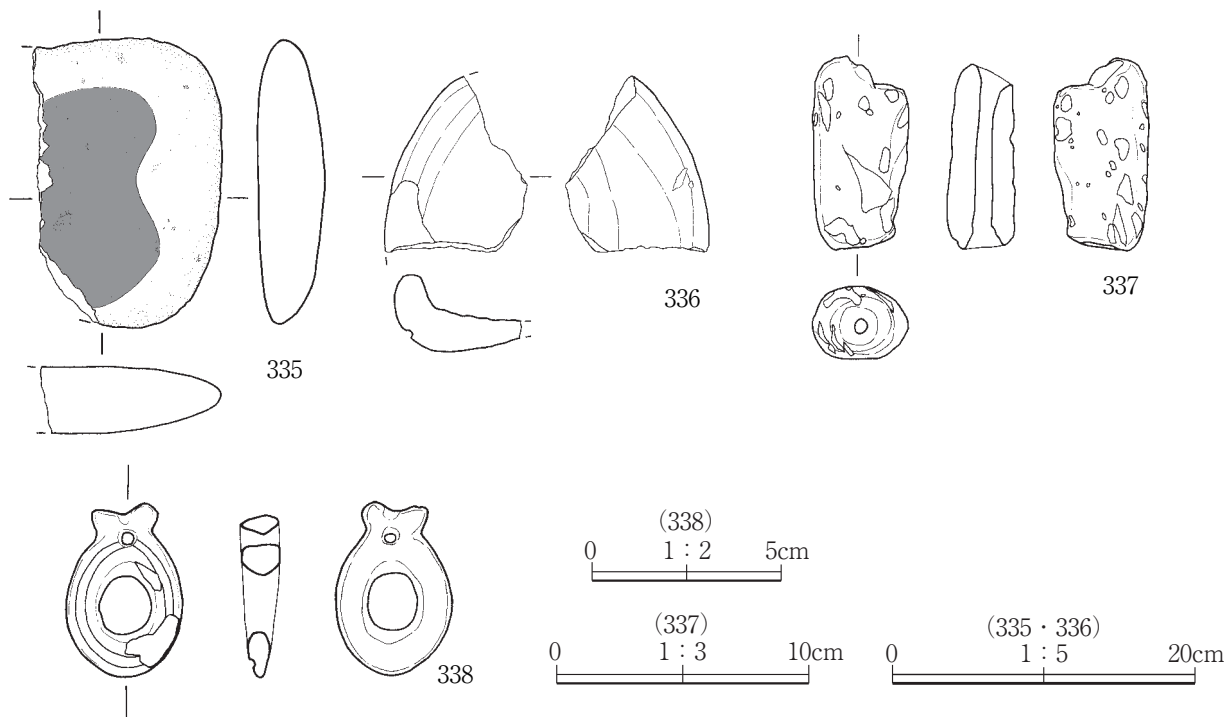
第 82 図 6 号住居跡出土遺物 2



第 83 図 6 号住居跡出土遺物 3



第 84 図 6号住居跡出土遺物 4



第 85 図 6号住居跡出土遺物5

やや小型である。333 は前面に磨痕が、334 は磨痕のほかに敲打痕が見受けられる。336・337 は石皿で、どちらも欠損している。335 は I 類で片面のみ使用面（磨面）がある。336 は II 類で、安山岩（軽石）を素材とし縁辺部分を作出している。ただし、使用面と考えられる面に、磨痕などの痕跡が見受けられない。

石製品は埋土下位から 7 点出土している。そのうち 2 点掲載した。337 は軽石製石製品で、円柱状の形態で縦位に穿孔されている。用途は不明。338 は装飾品（指飾りか？）である。滑石を素材とし、環状に整形され、片面は環に沿って線刻されている。また一端には小さい穿孔が見受けられる。小さい穿孔の上は、V 字の突起状に整形される。

[時期] 出土した土器の年代から大木 8b 式新段階～大木 9 式古段階と判断した。

7号住居跡（第 86～88 図、写真図版 12・68・69・261）

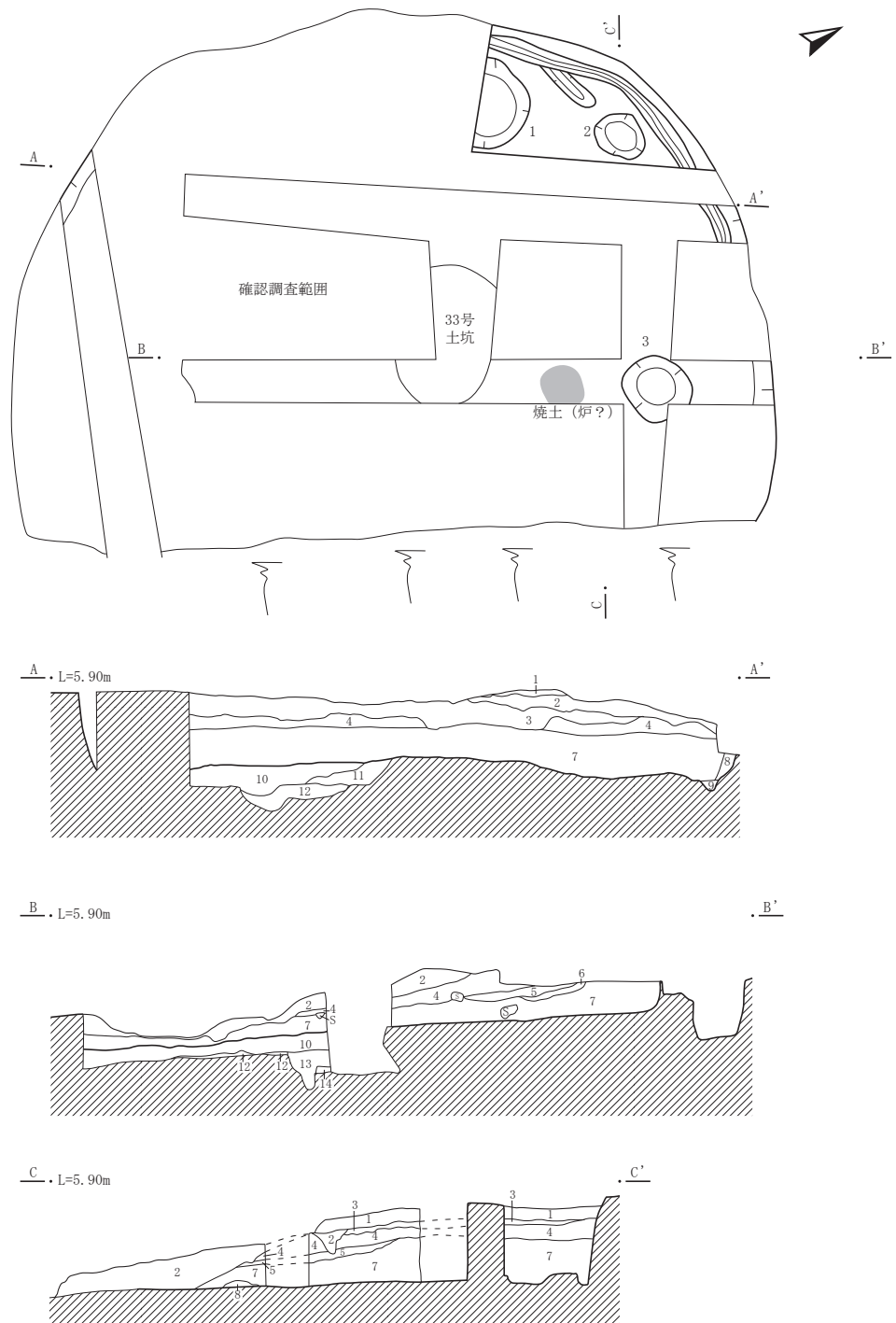
[位置・検出状況] 調査区北側 I B 6i、I B 7i、I B 8i、I B 6j、I B 7j、I C 7a グリッドに位置する。VI 層上面で検出した。本遺構は確認調査範囲内で検出した遺構であり、3 箇所のトレンチと北西端の一部を掘り下げたのみである。また本遺構の東側は遺構プランも不明瞭で、斜面の崩落により、消失したものと推測する。

[その他の遺構との重複] 6号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。また 9号住居跡と重複するが、新旧関係をトレンチでは確認できなかった。

[平面形] 検出した遺構プランの形態からは、楕円形を呈すると推定する。

[規模] 650 × (450) cm、深さ 58cm

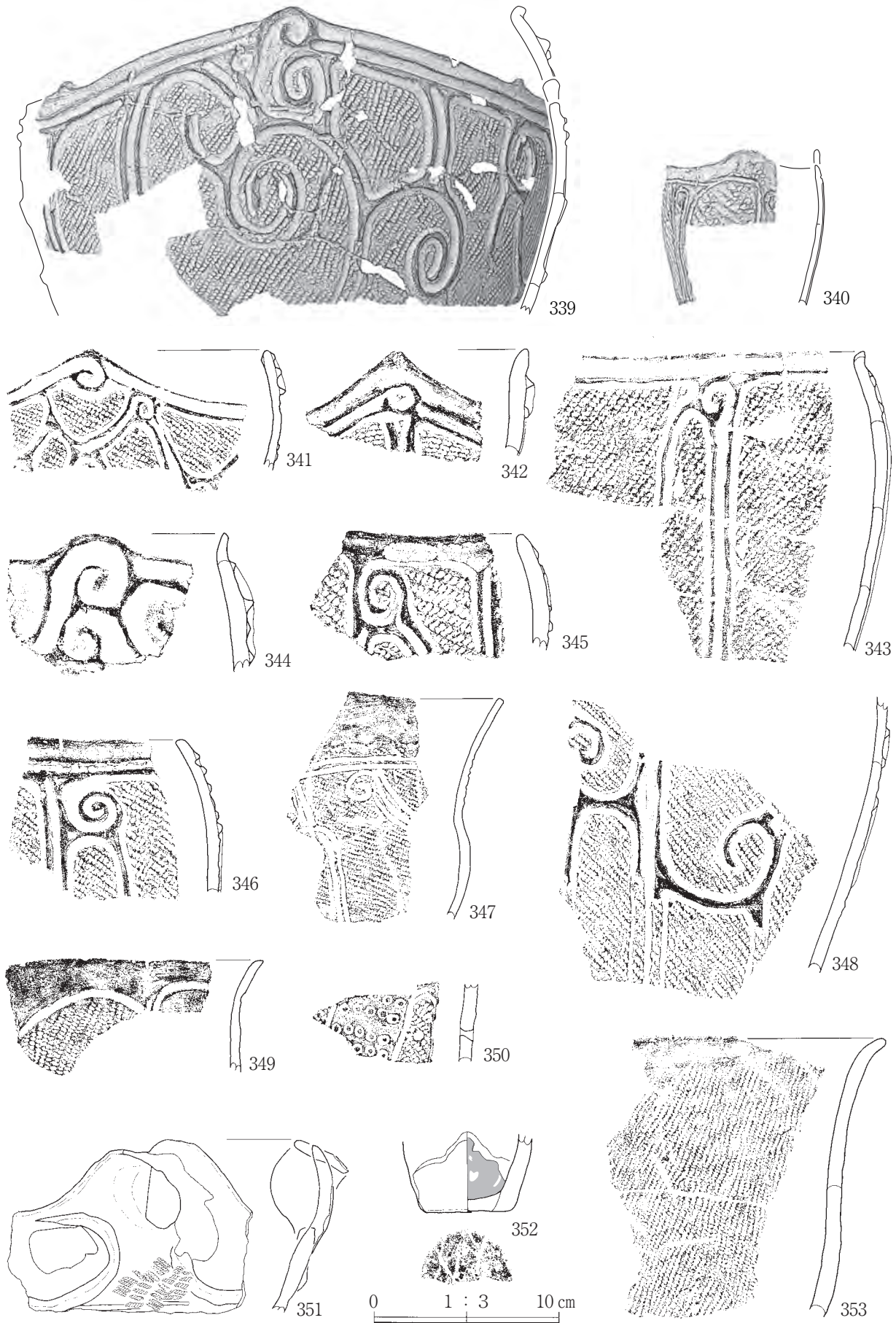
[埋土] 6層からなる（第 86 図 3～8 層）。灰黄褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。



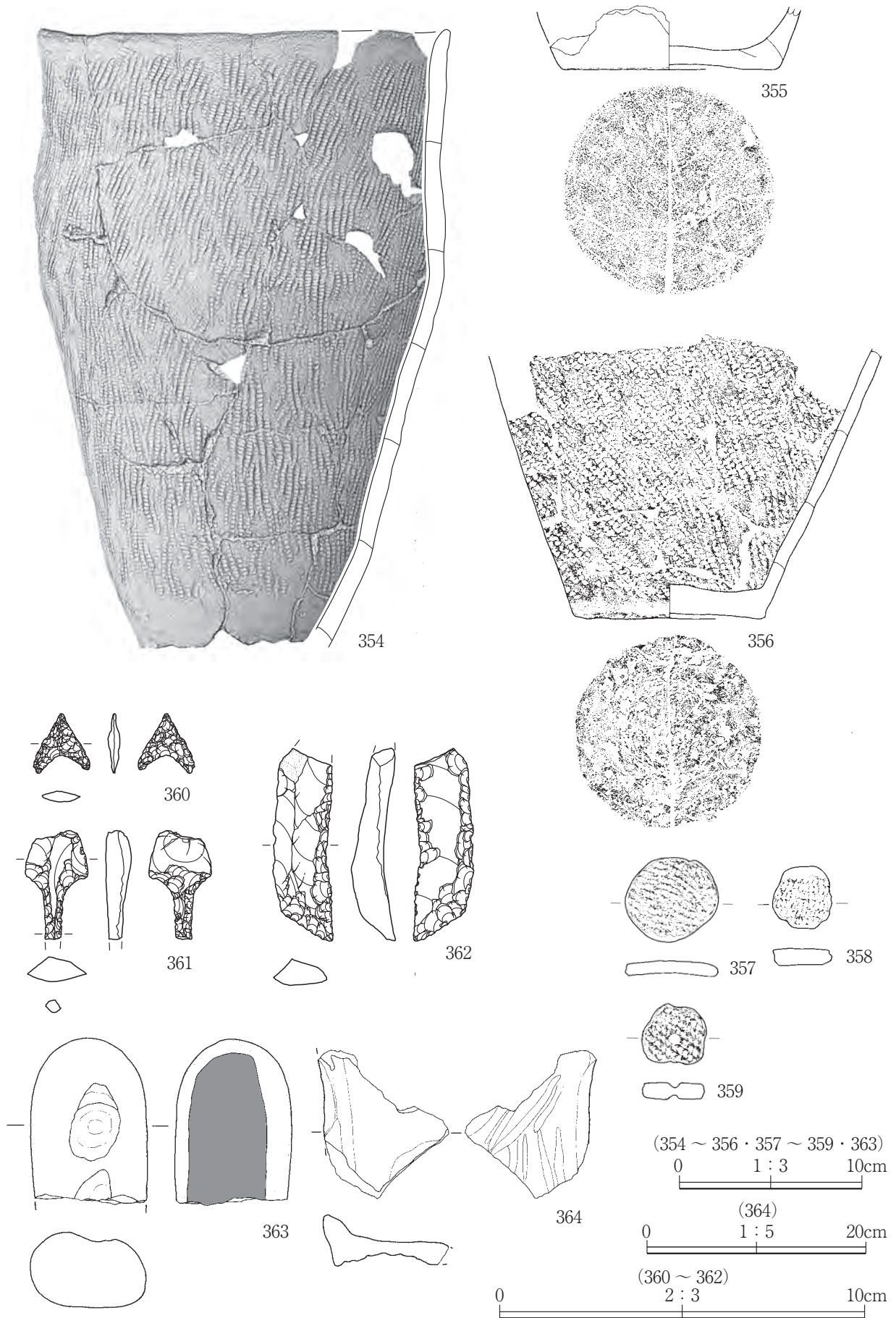
- | | | | |
|------------------------|-------|--------|-----------------------------------|
| 1. 褐灰色シルト (10YR6/1) | 粘性弱 | しまりやや疎 | 攪乱土。 |
| 2. 黒褐色シルト (10YR2/1) | 粘性弱 | しまり疎 | V層類似土。後世に攪乱されている。 |
| 3. 褐灰色シルト (10YR4/1) | 粘性弱 | しまり疎 | 炭化物微量、白色粒子中量含む。 |
| 4. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子中量含む。 |
| 5. にぶい黄褐色シルト (10YR7/3) | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子微量、礫少量含む。 |
| 6. 黒褐色シルト (10YR2/3) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子少量、地山ブロック微量含む。 |
| 7. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物微量、白色粒子少量含む、層下位に地山ブロック少量偏在。 |
| 8. 浅黄褐色シルト (10YR8/4) | 粘性強 | しまりやや密 | 崩落土。炭化物微量、白色粒子少量含む。 |
| 9. にぶい黄褐色シルト (10YR7/3) | 粘性やや強 | しまりやや疎 | 壁溝埋土。炭化物微量含む。 |
| 10. 暗褐色シルト (10YR3/4) | 粘性やや強 | しまりやや密 | IV層類似土。層上面は遺構の床面か。炭化物微量、白色粒子微量含む。 |
| 11. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや強 | しまりやや疎 | 崩落土?炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。 |
| 12. 明黄褐色シルト (10YR7/6) | 粘性強 | しまり疎 | 崩落土か、暗褐色シルトブロックやや多く含む。 |
| 13. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや強 | しまり密 | 9号土坑埋土。炭化物微量、白色粒子少量、地山ブロック微量含む。 |
| 14. 明黄褐色シルト (10YR7/6) | 粘性強 | しまり疎 | 9号土坑埋土。壁崩落土。炭化物微量、暗褐色シルトブロック中量含む。 |

0 1 : 80 2m

第 86 図 7号住居跡



第 87 図 7号住居跡出土遺物 1



第 88 図 7号住居跡出土遺物 2

[床面・壁] VI層面を床面と推定した。概ね平坦である。壁は掘り下げた北西壁の一部を確認した。ほぼ直立気味である。おそらく消失した東側以外は全周するものと推測する。

[炉] 炉は確認できなかった。ただし床面の中央に(45)×45cmの楕円形を呈する焼土が見受けられた。
[附属施設] 柱穴3個を確認した。

[出土遺物] トレンチも含め、部分的にしか掘り下げていない割に、比較的遺物の出土量は多く、埋土上位、下位から縄文土器 90,769.8g、石器 63 点が出土している。特に縄文土器が多く、339・340・354 など形態の復元できる土器も見受けられる。

縄文土器 18 点掲載した。339 は大木 8b 式新段階に比定される。深鉢 B 類で、2 単位の波状口縁を呈する。胴部には大小の渦巻き文が施文され、短い隆帯で連結する。340 は大木 9 式古段階の深鉢で胴部を大きく欠損している。文様が不明瞭であるが、地文施文後、沈線による縦位の不整形区画を施文している。341～353 は破片である。341～348 は大木 8b 式新段階の深鉢で、隆帯による渦巻き文が施文される。347 は隆帯ではなく、沈線で渦巻き文が施文される。349・350 は大木 9 式新段階の深鉢である。350 は区画外に円形刺突文を充填させる。351 は大木 10 式新段階の深鉢で、口唇部に橋状の把手が付く。352 は小型の深鉢底部片である。無文であるが、内部には全面に朱が塗られている。354 は粗製の深鉢で、底面のみ欠損する。355・356 は深鉢の胴部から底部で、どちらも底面に木葉痕が見受けられる。

土製品は、埋土上・下位で 10 点出土し、そのうち円盤形土製品 3 点を掲載した。いずれも深鉢の胴部片の転用で、円形に整形される。359 は中央両面から穿孔しようとして止めた痕跡がある。

石器は 5 点掲載した。360 は石鏃で、Ⅱ類である。361 は石錐Ⅱ類で錐部が欠損する。362 は不定形石器でⅡ類。一端の縁辺が欠損する。363 は敲磨器類Ⅴ類で、片面には凹痕、もう片面には磨痕が見受けられる。364 は石皿の破片で、Ⅱ類。縁辺をおそらく長方形に作出していると推測する。使用面は 1 面と考えるが、磨面は見受けられず、もう片面には研溝が複数条、見受けられる。欠損後、砥石に二次利用されている可能性もある。

[時期] 出土した土器のなかで比較的多いのは大木 8b 式新段階がであるが、本遺構は重複する 6 号住居跡よりも新しいので、349～351 の時期を基に大木 9 式新段階と判断した。

8 号住居跡 (第 89～93 図、写真図版 13・69～71・261・262)

[位置・検出状況] 調査区中央、I C 5a、I C 6a、I C 5b、I C 6b グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

本遺構は東側の一部が調査区外に及んでおり、また西側は 9 号住居跡に壊され、南側は斜面の崩落により消失している。

[その他の遺構との重複] 9 号、10 号住居跡と重複し、本遺構は 10 号住居跡より新しく、9 号住居跡より古い。

[平面形] 残存部から円形と推定する。

[規模] (850) × (684) cm・深さ 45cm

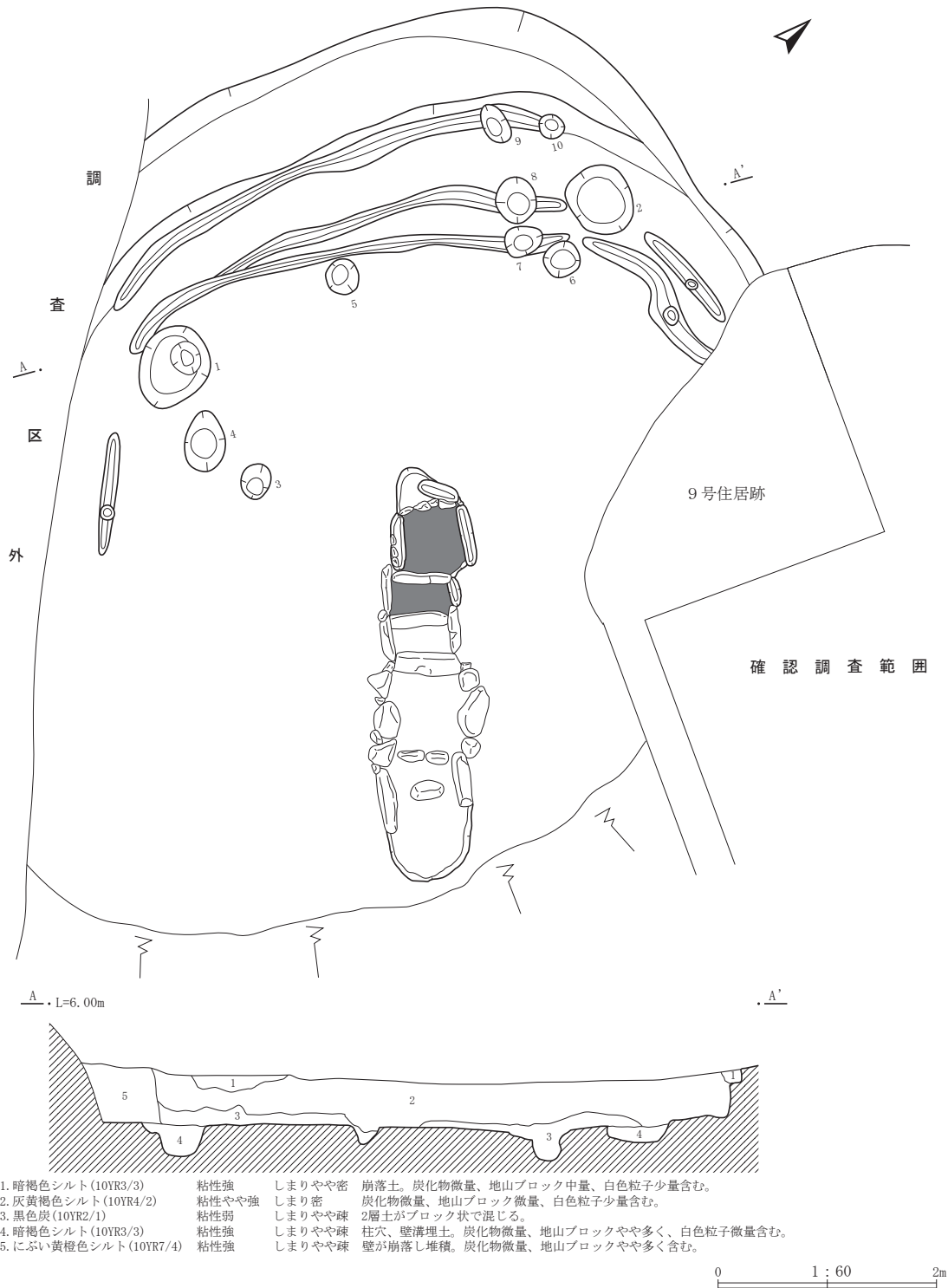
[埋土] 3 層からなる。灰黄褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。

[床面・壁] 炉を検出した VI 層面を床面と推定した。概ね平坦である。壁は北壁が残存する。ほぼ直立気味である。

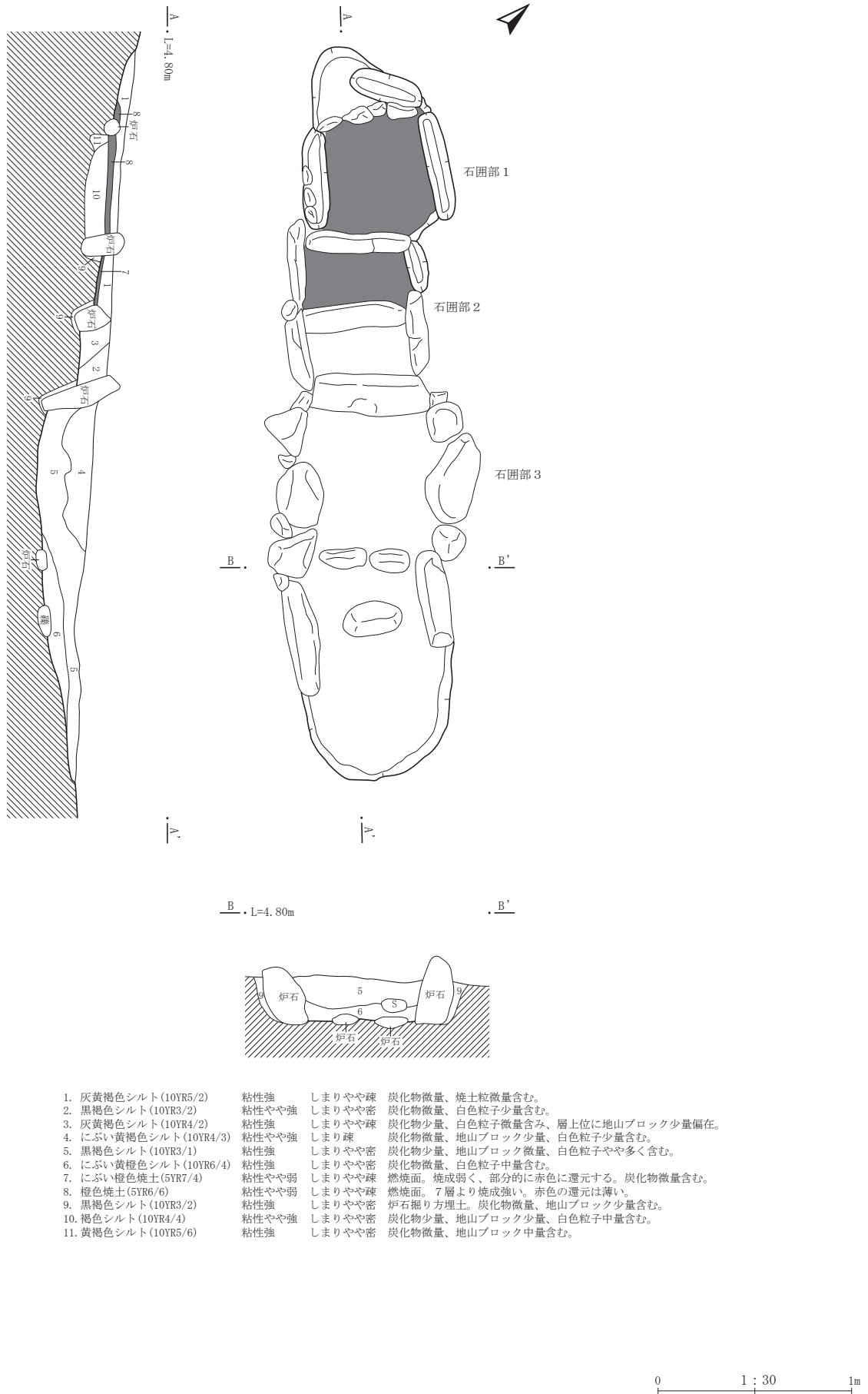
[炉] 複式炉である。石囲部 3 個と前庭部で構成される。規模は長軸 377cm、短軸 104cm を測り、比較的大きな複式炉である。各石囲部は便宜上、第 90 図に示した通り、「石囲部 1・2・3」と呼称する。

燃焼面は石囲部1と石囲部2の奥側半分で確認した。どちらも石囲部内の全体が被熱して赤褐～橙色に還元するが、被熱自体は弱い。燃焼面のある炉の底面までの深さは、床面から石囲部1が4cm、石囲部2が7cm、石囲部3が28cmで、前庭部側の方が深くなる傾向が見受けられる。

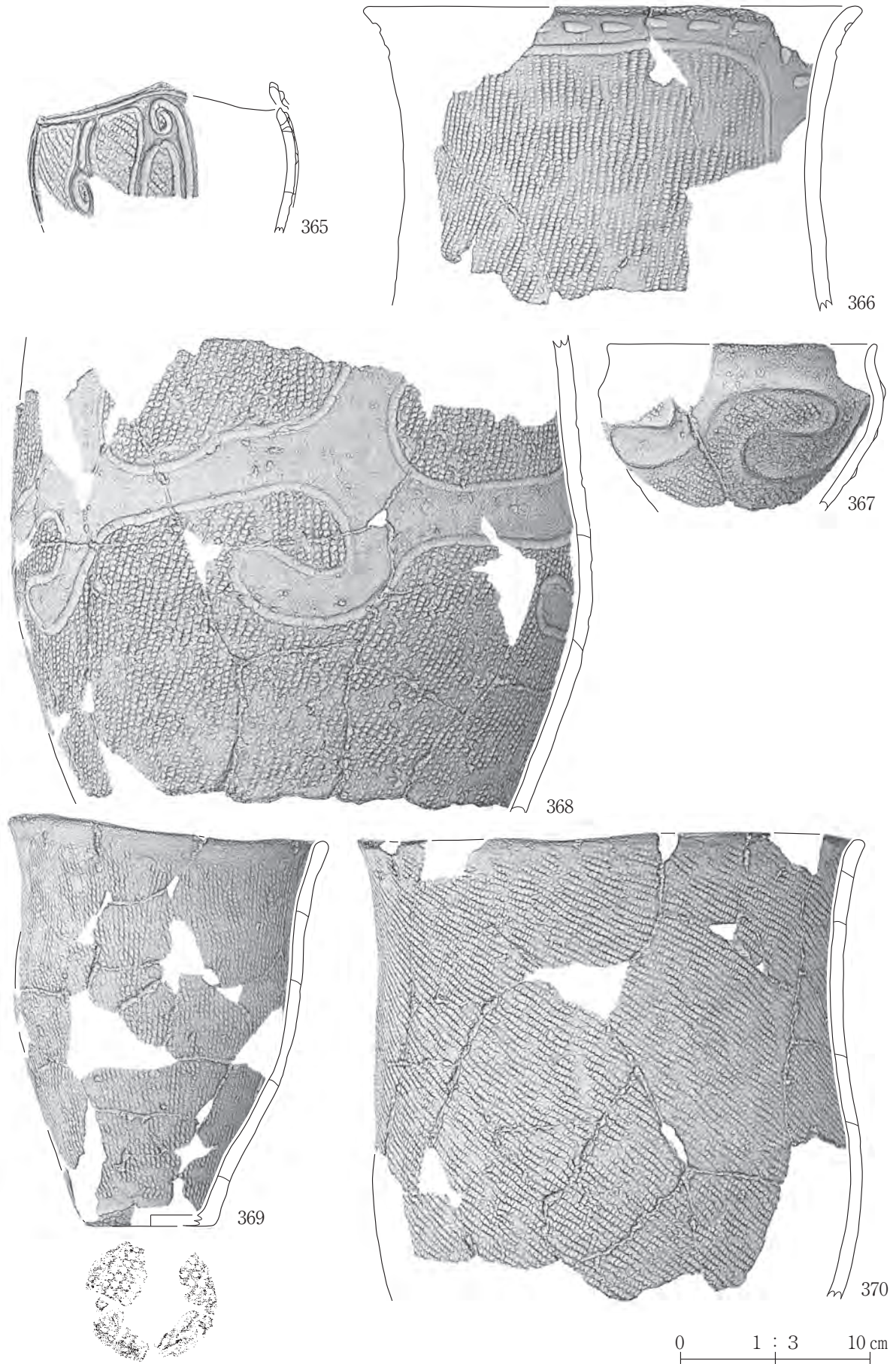
炉石については、石囲部1は西側1辺を除き、抜き取られている。石囲部2は比較的大型で扁平な礫を素材とし、差し込むようにして方形に設置される。また中央にも横方向に炉石が設置され、間仕



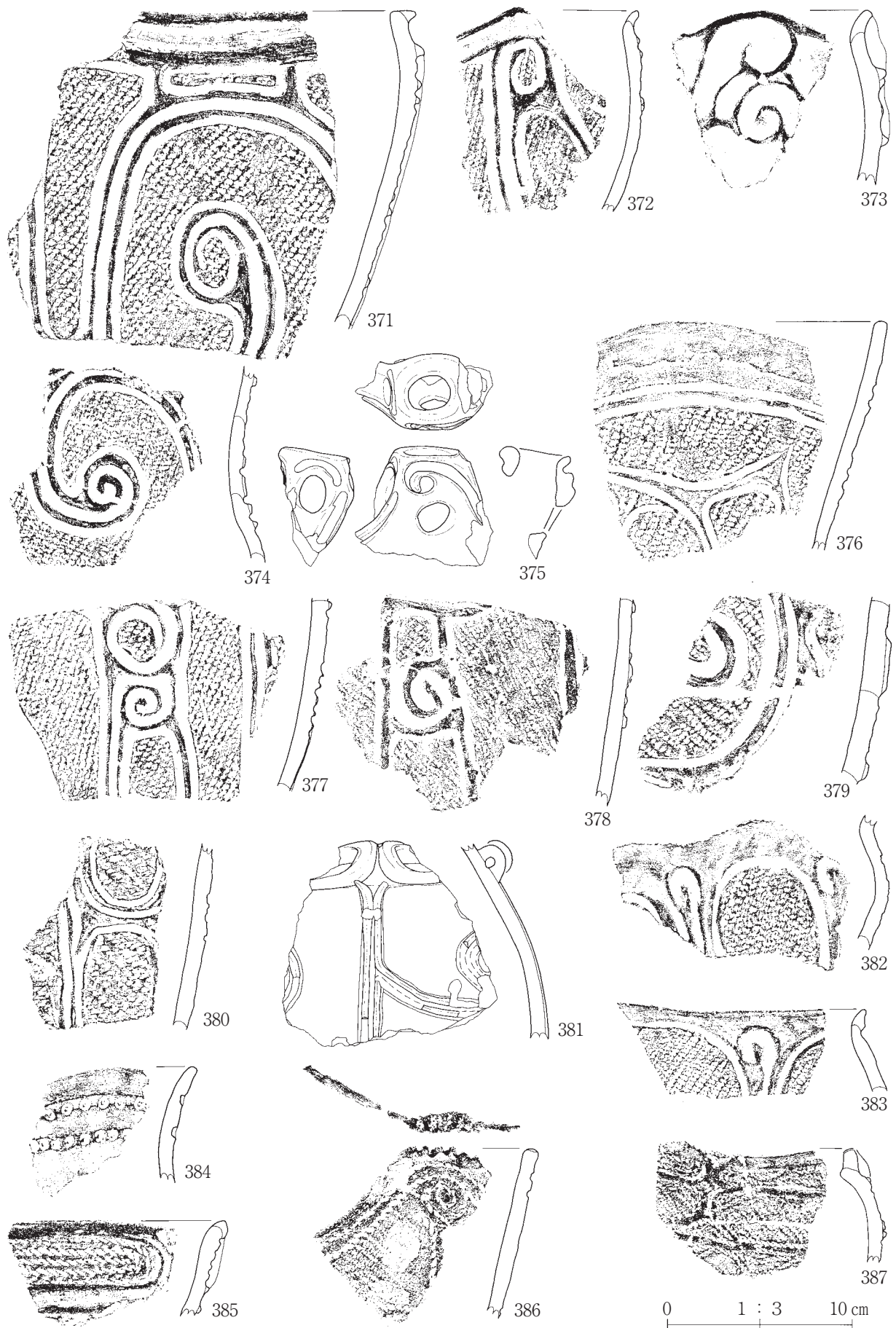
第 89 図 8 号住居跡 1



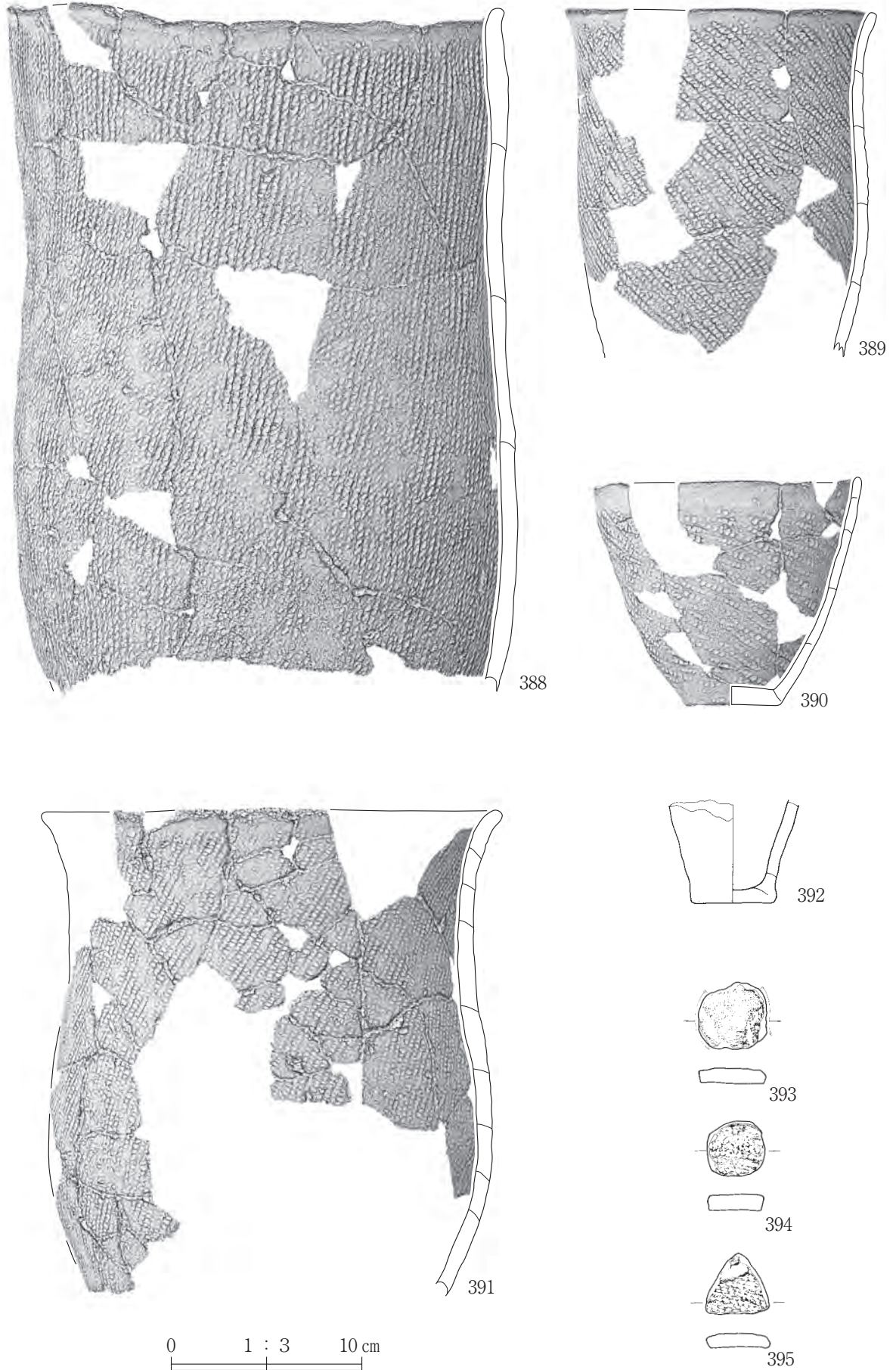
第90図 8号住居跡2



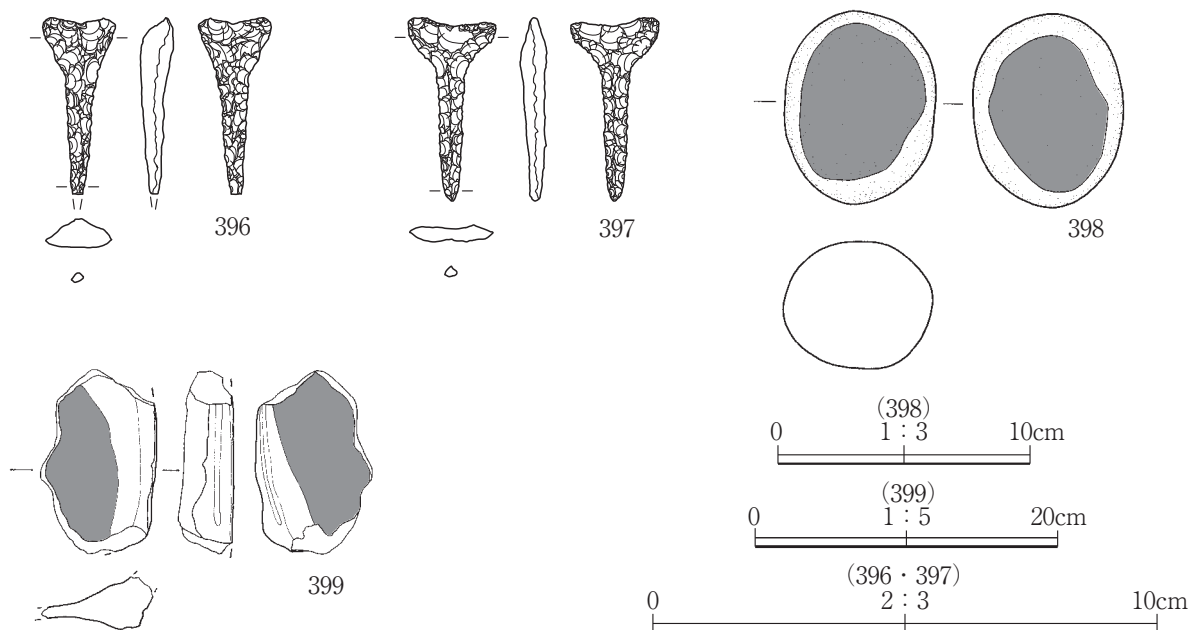
第91図 8号住居跡出土遺物1



第92図 8号住居跡出土遺物2



第93図 8号住居跡出土遺物3



第94図 8号住居跡出土遺物4

切りがなされており、この間仕切りより奥側は被熱し橙色に還元するが、手前側は被熱していない。石囲部3は大きさ、形態が不規則な礫を素材とし、方形に設置している。なお炉石を設置する際、掘り方に差し込むか、掘り方の壁に立てかけるように設置しているが、隙間には黒褐色シルト（9層）を埋めて補強としている。

前庭部は床面から20cm掘り込んで構築し、両脇には炉石と同じ石材の礫を並べている。また前庭部中央にも礫が1点埋まっているが用途は不明である。前庭部底面には硬化面は確認できなかった。〔附属施設〕柱穴10個を確認したが、本遺構は中央から北側のみしか残存しないので、本来、柱穴ももっと多かったことが想定される。柱穴の配列は推定できないが、柱穴の大きさからみてPit 1・2は主柱穴である可能性が高い。

壁溝は壁が確認できた範囲で三重に巡るのを確認した。柱穴と重複していることからみても、本遺構は2回以上、拡張されたものと推定する。

〔出土遺物〕埋土上・下位、または附属施設から縄文土器144.0375g、石器56点が出土している。削平や消失によって、残存する範囲が限られているにも関わらず、遺物の出土量は少なくない。特に縄文土器は第91・93図に示した通り、完形や形態の復元できる土器が多く、本来、出土遺物は、他の竪穴住居跡同様に多量であったものと推測する。

縄文土器は28点掲載した。365は大木9式古段階の深鉢で、2単位の波状口縁を呈する。隆帯による渦巻き文がまだ見受けられるが、縦位に垂下する隆帯により長方形区画が描かれている。366は大木10式新段階の深鉢で無文となる区画内に押引文が巡る。367は大木10式中段階の鉢で、胴部下半から底部を欠損する。口縁部は無文で、胴部には横位に巡る区画文が施文され、区画文は地文のみの胴部下半と連結する。368は大木10式新段階と判断した。深鉢の胴部で、地文となる縄文を施文後、胴部上半には横位に曲線状区画が描かれ、区画内は無文である。胴部下半は地文のみである。371～387は破片である。371～379・381は大木8b式新段階に比定され、渦巻き文が施文される。375は口縁部に付く、中空の大型突起である。380は大木8b式新段階～大木9式古段階に比定される深鉢

である。382～384は大木9式新段階の深鉢である。384は口縁部に二段の円形刺突文が巡る。またこれらとは時期がかなり離れた土器も出土しており、385・387は大木8a式古段階の深鉢、386は大木7b式の深鉢である。369・370・388～392は粗製の深鉢で、縄文のみ施文される。390以外は深鉢。390は鉢である。形態の特徴から見て大木9式～大木10式の範疇に収まると考える。

土製品は埋土下位から9点出土しており、そのうち円盤形土製品3点(393～395)を掲載した。393・394は胴部片を転用し円形に、395は口縁部片を転用し三角形に整形している。

石器は4点掲載した。396・397は石錐である。どちらもⅡ類である。398は敲磨器類Ⅰ類で、厚みのある球状の礫を素材とし、両面に磨痕が見受けられる。399は石皿の破片である。Ⅱ類で両面に磨面が見受けられるが、使用面はかなり凹んでおり、また側面には研溝が1条あることから、破損した石皿を砥石に転用した可能性もある。

[時期] 出土した土器の時期幅が広く、判断が難しいが、367や368の時期を基準に、大木10式中段階と判断した。

9号住居跡(第95～98図、写真図版14・71～73・262)

[位置・検出状況] 調査区中央、IC6a、IC7aグリッドに位置する。

8号住居跡の精査中に、その床面に別の遺構プランを確認し、8号住居跡の壁溝を壊していることが分かり、8号住居跡とは別の遺構と判断した。本遺構プランは確認調査範囲内に位置しており、東西方向のトレンチ1本と8号住居と重複する範囲の掘り下げのみしか行っていない。なおトレンチで確認した限りであるが、本遺構は東側の半分以上を重複する土坑群や斜面の崩落により消失しているものと推定する。

[その他の遺構との重複] 7号、8号住居跡と重複する。本遺構は8号住居跡より新しい。7号住居跡とは、どちらも確認調査範囲であり、両者の重複関係を観察する断面を確認していないので、新旧関係は不明である

[平面形] 不明である。円形か楕円形と推定する。

[規模] (205) × (96) cm、深さ30cm

[埋土] 1層(第95図8層が相当)のみ確認した。灰黄褐色シルトを主体とし、炭化物や白色粒子を含む。

[床面・壁] 床面は、掘り下げた本遺構南西端のみで確認した。概ね平坦である。

壁も同じ範囲で確認した。ほぼ直立である。断面で一部壇状を呈するのを確認したが、これは人為的なものではなく、崩落により形成したものと考えている。

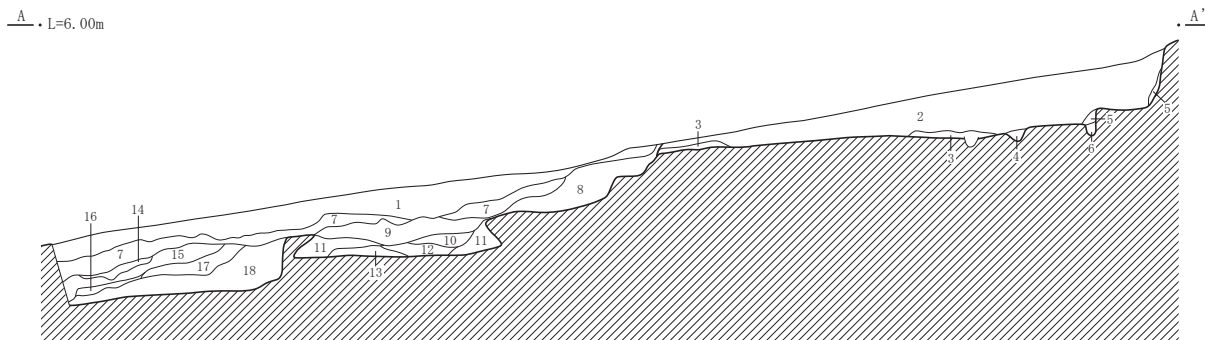
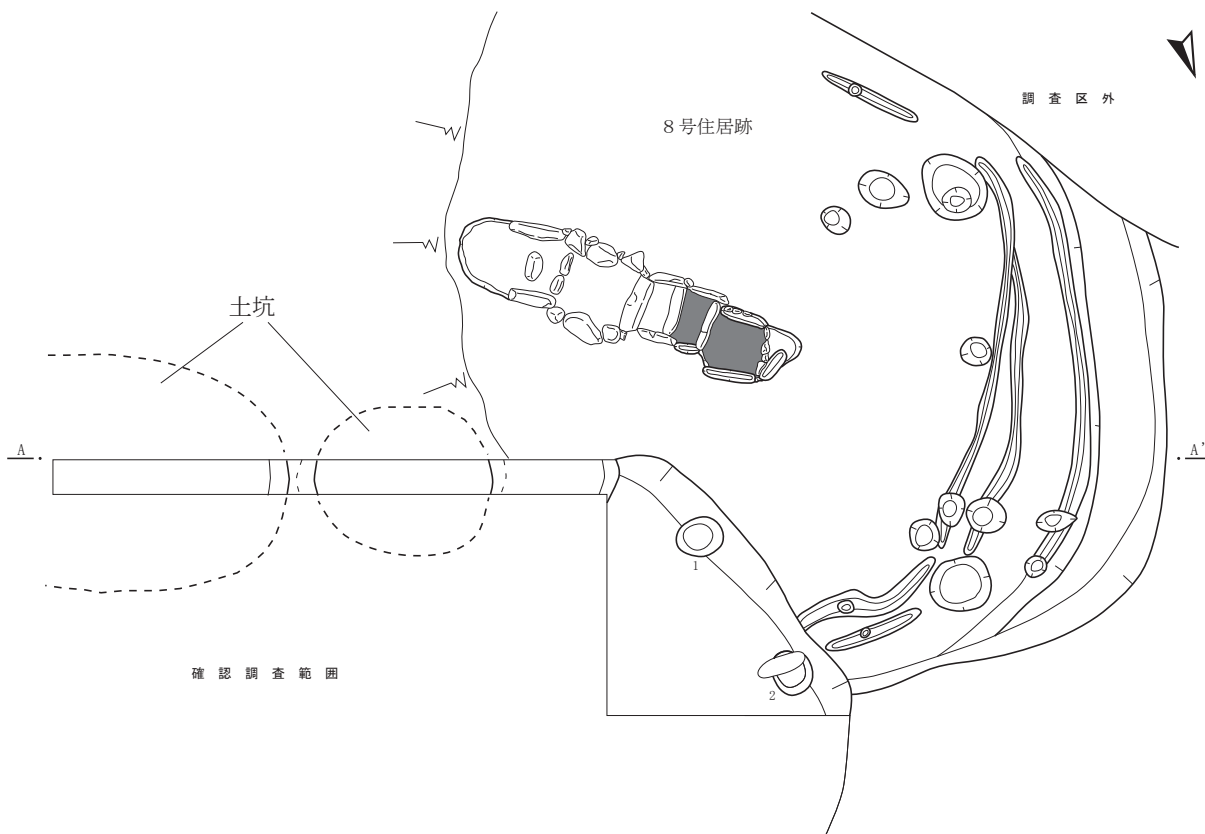
[炉] 不明である。

[附属施設] 柱穴2個を確認した。ただしどちらも南西壁にかかっており、柱穴として機能するものか不明である。重複する8号住居跡に帰属する柱穴の可能性もある。

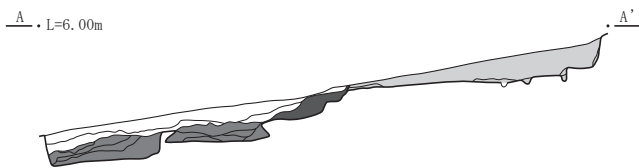
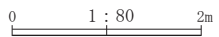
[出土遺物] 埋土上・下位から縄文土器52,155.2g、石器32点出土している。トレンチ1本と南西端のみの掘り下げであったが、出土遺物は少なくない。ただし縄文土器は大木8a式新段階から大木10式新段階までと時期幅が広い。本遺構の埋土上位は斜面の崩落土であり、またその斜面の崩落により遺構の半分以上を壊されていることから考えても、出土遺物の多くは流れ込みによるものとも考えられる。

縄文土器は16点掲載した。400～402は大木10式新段階の深鉢である。400は胴部中央に小さな楕円形区画が横位に並び、区画内に刺突文を充填する。時期的にまとまっているのはこの3点であり、ほかには403が大木8b式新段階～大木9式古段階、404は大木9式新段階、405は大木8b式新段階、406・407・410は大木8a式新段階とばらばらである。また408は文様から大木8b式新段階に比定さ

1 縄文時代

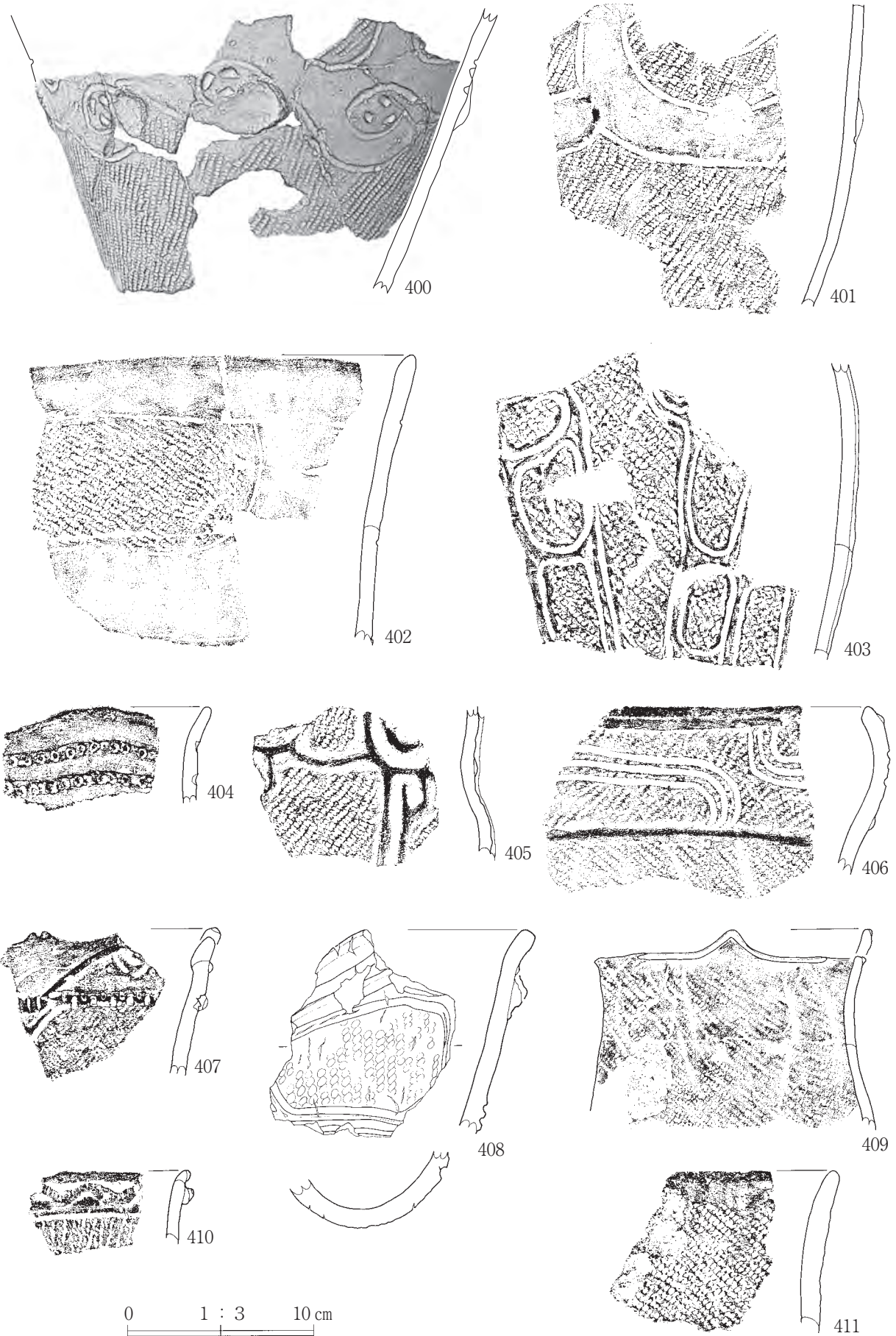


- | | | | |
|------------------------|-------|--------|--|
| 1. 暗褐色シルト(10YR3/3) | 粘性強 | しまりやや密 | 崩落土。炭化物微量、地山ブロック中量、白色粒子少量含む。 |
| 2. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) | 粘性やや強 | しまり密 | 8号住居跡埋土。炭化物微量、地山ブロック微量、白色粒子少量含む。 |
| 3. 黒色炭(10YR2/1) | 粘性弱 | しまりやや疎 | 8号住居跡埋土。2層土がブロック状で混じる。 |
| 4. 暗褐色シルト(10YR3/3) | 粘性強 | しまりやや疎 | 8号住居跡柱穴、壁溝埋土。炭化物微量、地山ブロックやや多く、白色粒子微量含む。 |
| 5. にぶい黄褐色シルト(10YR7/4) | 粘性強 | しまりやや疎 | 8号住居跡の壁が崩落し堆積。炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。 |
| 6. 黒褐色シルト(10YR3/2) | 粘性強 | しまりやや疎 | 8号住居跡壁溝埋土。炭化物微量、地山ブロック少量含む。 |
| 7. にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) | 粘性やや強 | しまり密 | 崩落土。1層に類似し、1層よる明るい。炭化物微量、白色粒子少量含む。 |
| 8. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) | 粘性強 | しまり密 | 9号住居跡埋土。炭化物微量、白色粒子やや多く含む。 |
| 9. 暗褐色シルト(10YR3/3) | 粘性強 | しまりやや密 | 遺構(フラスコ状土坑)埋土。炭化物微量、地山ブロック中量含み、酸化鉄(錆?)が塊状で混じる。 |
| 10. 黒褐色シルト(10YR3/2) | 粘性強 | しまりやや疎 | 遺構(フラスコ状土坑)埋土。炭化物微量、白色粒子少量含む。 |
| 11. 黒褐色シルト(10YR2/3) | 粘性強 | しまりやや密 | 遺構(フラスコ状土坑)埋土。炭化物微量、地山ブロック中量、白色粒子少量含む。 |
| 12. にぶい黄褐色シルト(10YR7/4) | 粘性やや強 | しまり密 | 遺構(フラスコ状土坑)埋土。炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。 |
| 13. 黒褐色シルト(10YR3/2) | 粘性強 | しまりやや密 | 遺構(フラスコ状土坑)埋土。炭化物微量、白色粒子微量含み、酸化鉄(錆?)がわずかに混じる。 |
| 14. 明黄褐色シルト(10YR7/6) | 粘性弱 | しまり密 | 遺構(土坑?)埋土。地山類似土。暗褐色シルトブロック微量含む。 |
| 15. 暗褐色シルト(10YR3/3) | 粘性やや強 | しまり密 | 遺構(土坑?)埋土。炭化物微量、白色粒子微量含む。 |
| 16. 黒褐色シルト(10YR2/2) | 粘性やや強 | しまり密 | 遺構(土坑?)埋土。炭化物少量、白色粒子微量含む。 |
| 17. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 遺構(土坑?)埋土。炭化物微量、白色粒子微量含む。 |
| 18. 暗褐色シルト(10YR3/4) | 粘性強 | しまり密 | 遺構(土坑?)埋土。炭化物微量、地山ブロック少量、白色粒子微量含む。 |

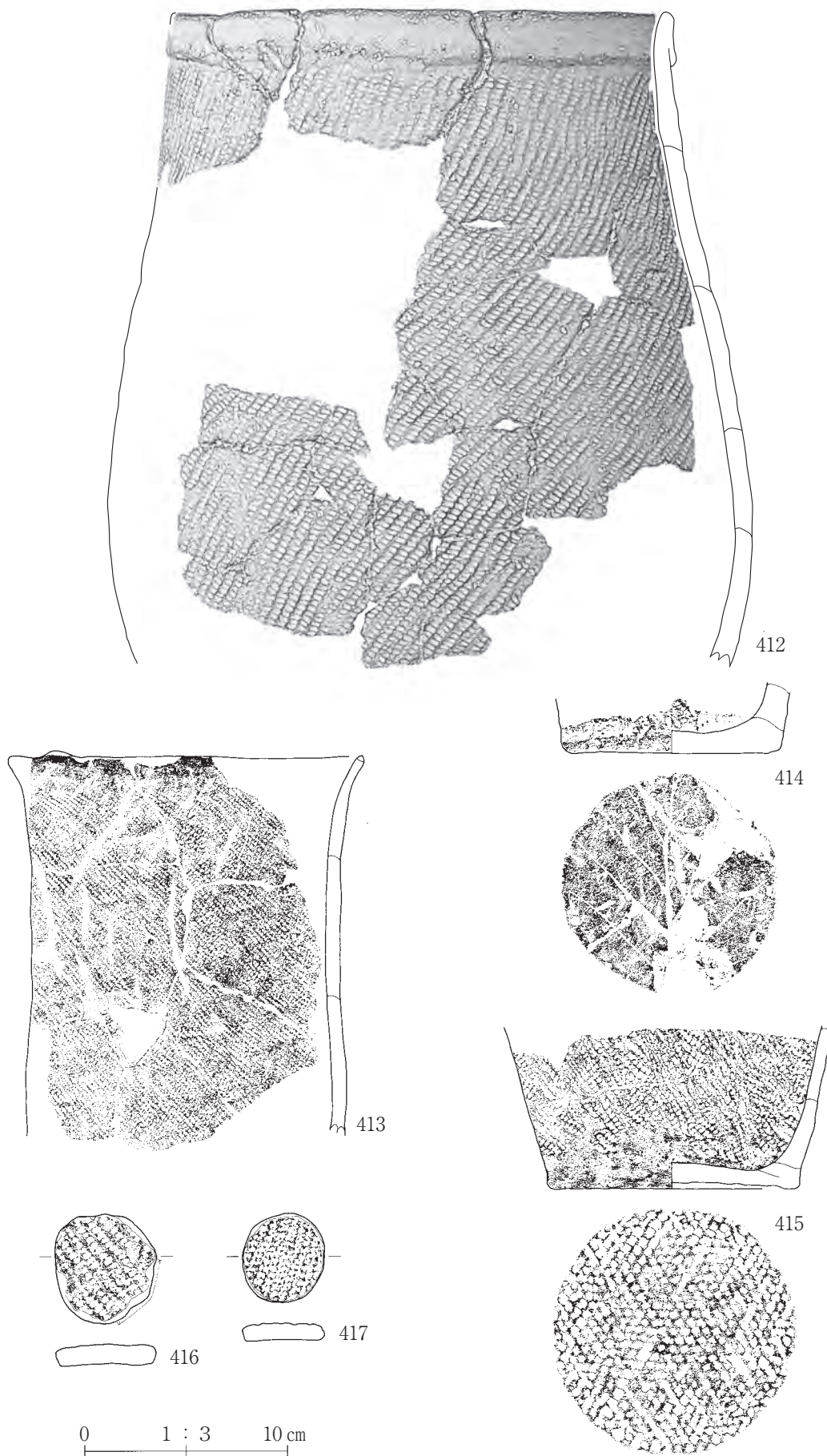


- …崩落による堆積土
- …8号住居跡埋土
- …9号住居跡埋土
- …土坑の埋土

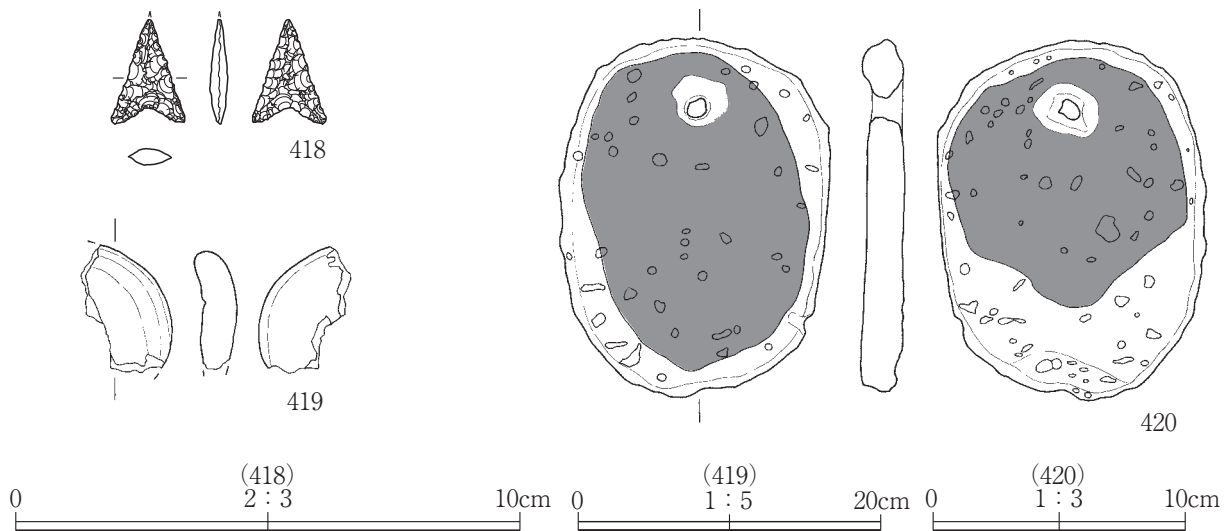
第95図 9号住居跡



第96図 9号住居跡出土遺物1



第97図 9号住居跡出土遺物2



第98図 9号住居跡出土遺物3

れるものと推測する深鉢であるが、胴部の径が他の土器よりも著しく小さく、また所々にひび割れが縦に走っている。焼成も他の土器と比べ、著しく硬い。焼成失敗品ではないかと推測する。409・411～415は粗製の深鉢である。414・415は底面に敷物圧痕が残る。

土製品は13点出土しており、そのうち円盤形土製品2点(416・417)を掲載した。どちらも深鉢の胴部片を転用し、円形に整形している。

石器は2点掲載した。418は石鏃でⅡ類、419は石皿の破片で、縁辺部のみ残存する。Ⅱ類で使用面は1面と推測するが、明確な磨面は見受けられない。

石製品は4点出土しており、そのうち1点(420)掲載した。性格不明な石製品で垂飾品には大きい。安山岩を素材とし、偏平な楕円形の形態に整形している。偏平な両面には磨痕が認められたが、使用目的ではなく、整形によって研磨された痕跡の可能性が高い。また端部1箇所を穿孔している。

[時期] 上記の通り、出土土器の時期幅が広い。本遺構は重複する8号住居跡より新しいので、出土した土器のなかから400～402を基準とし大木10式新段階と判断した。

10号住居跡(第99～102図、写真図版14・74～76・262)

[位置・検出状況] 調査区北側、I C 6b、I C 5c、I C 6cグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。

本遺構は8号住居跡の床面上で、Ⅵ層土とは異なる土が堆積する遺構プランとして確認した。掘り下げたところ、炉を検出し、8号とは別の竪穴住居跡と判断した。なお南側を後世の削平により、東側は斜面崩落により消失している。

[その他の遺構との重複] 8号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。

[平面形] 不明。円形か楕円形と推定する。

[規模] (510) × (404) cm、深さ20cm

[埋土] 確認していない。

[床面・壁] 炉を検出したⅥ層面を床面と推定した。概ね平坦である。

壁は北～西壁の一部が残存する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[炉] 石囲炉である。長方形を呈し、規模78 × 60cmである。炉の底面までの深さは床面から2cm下である。

炉石は、大きさは不規則であるが、扁平な礫を素材とし、差し込むようにして設置している。

炉内の燃烧面は西側に偏っている。被熱は弱く、わずかに明赤褐色に還元した痕跡を確認する程度である。

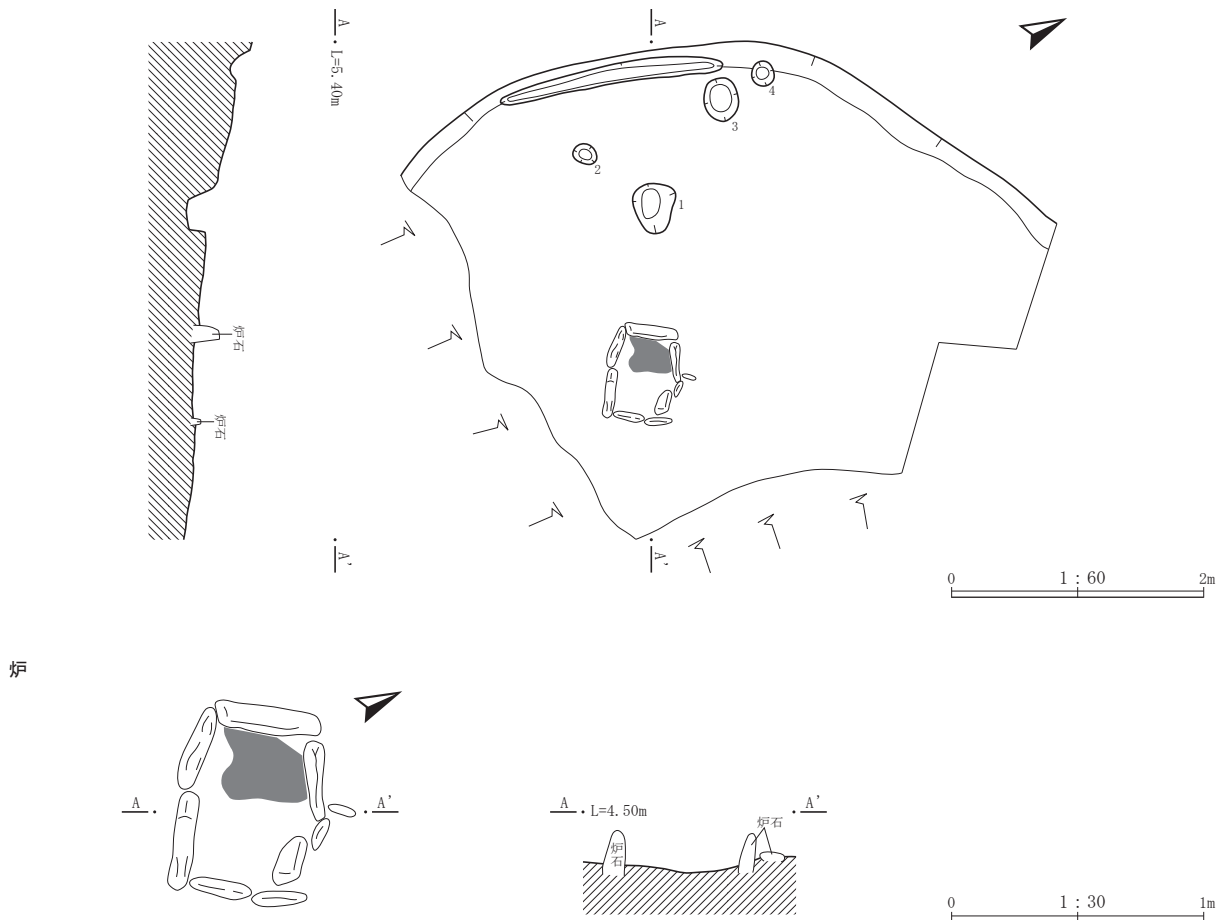
[附属施設] 柱穴4個を確認した。本遺構は中央から北西側のみしか残存しないので、本来、柱穴ももっと多かったことが想定される。柱穴の配列は推定できない。

[出土遺物] 埋土下位、また附属施設から 36,492.3g、石器 22 点出土している。残存部分が狭い住居跡の割に遺物の出土量は少なくない。特に縄文土器は第 100 図に示した通り、大木 9 式新段階に比定される土器がまとまって出土した。

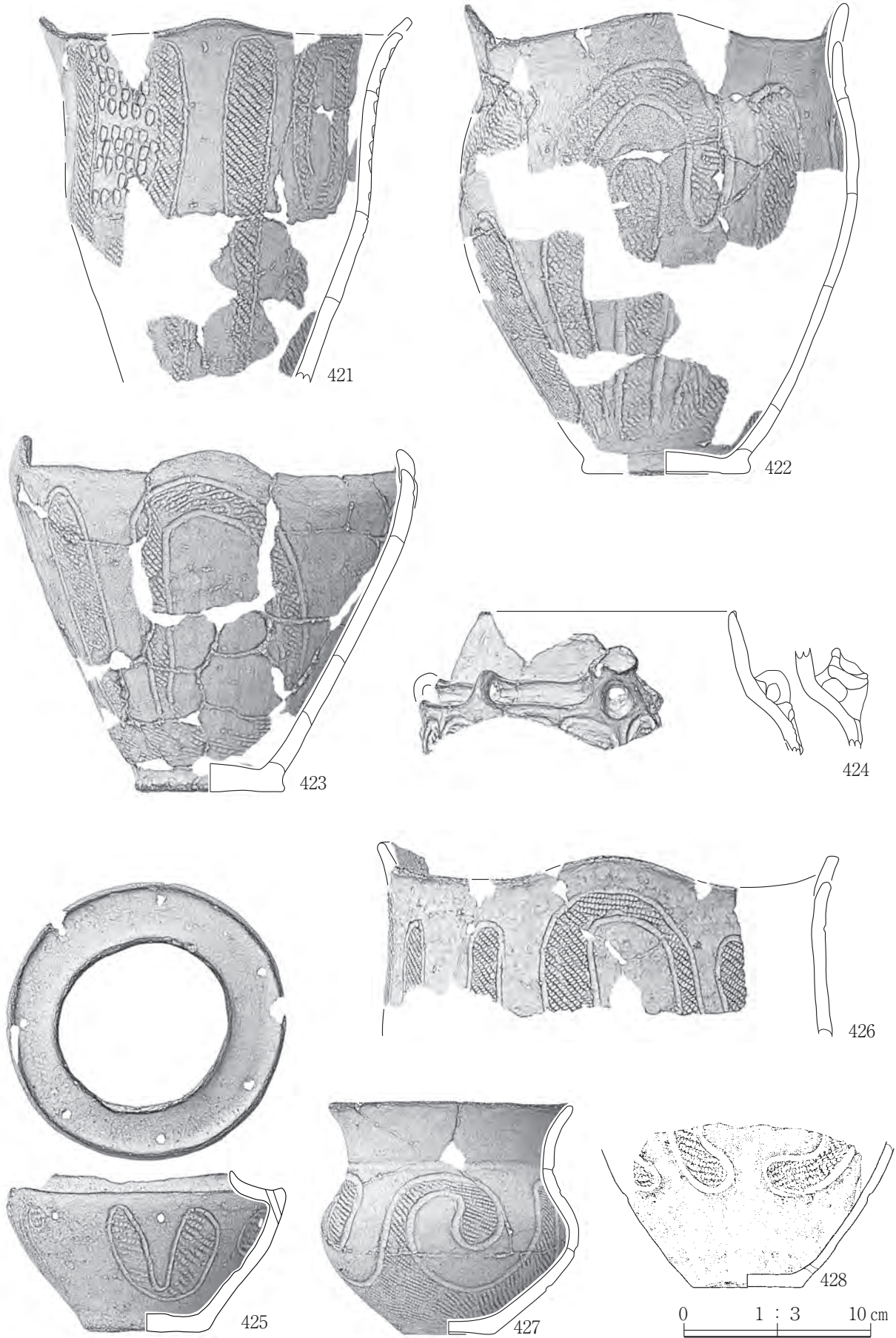
縄文土器は 21 点図示した。421 ~ 426・428 ~ 433 は大木 9 式新段階に比定される。425 を除き、いずれも深鉢で、文様は縦位に楕円形区画や逆 U 字状区画が並ぶ。425 は有孔鏝付土器である。鉢形に類似する形態で、口縁部で強く屈曲し、その縁辺に 7 箇所の穿孔が縦位に施される。文様は胴部のみで稚拙な V 字状の区画が並ぶ。427 は大木 10 式古段階の深鉢で、完形である。胴部が大きく張り出す形態である。432 は縦位の把手が付き、朱が塗られている。

これらの土器群よりも古い土器も出土している。434 ~ 436 が大木 8 b 式新段階で、437 は大木 8 a 式新段階に比定される。438 ~ 441 は粗製の深鉢である。

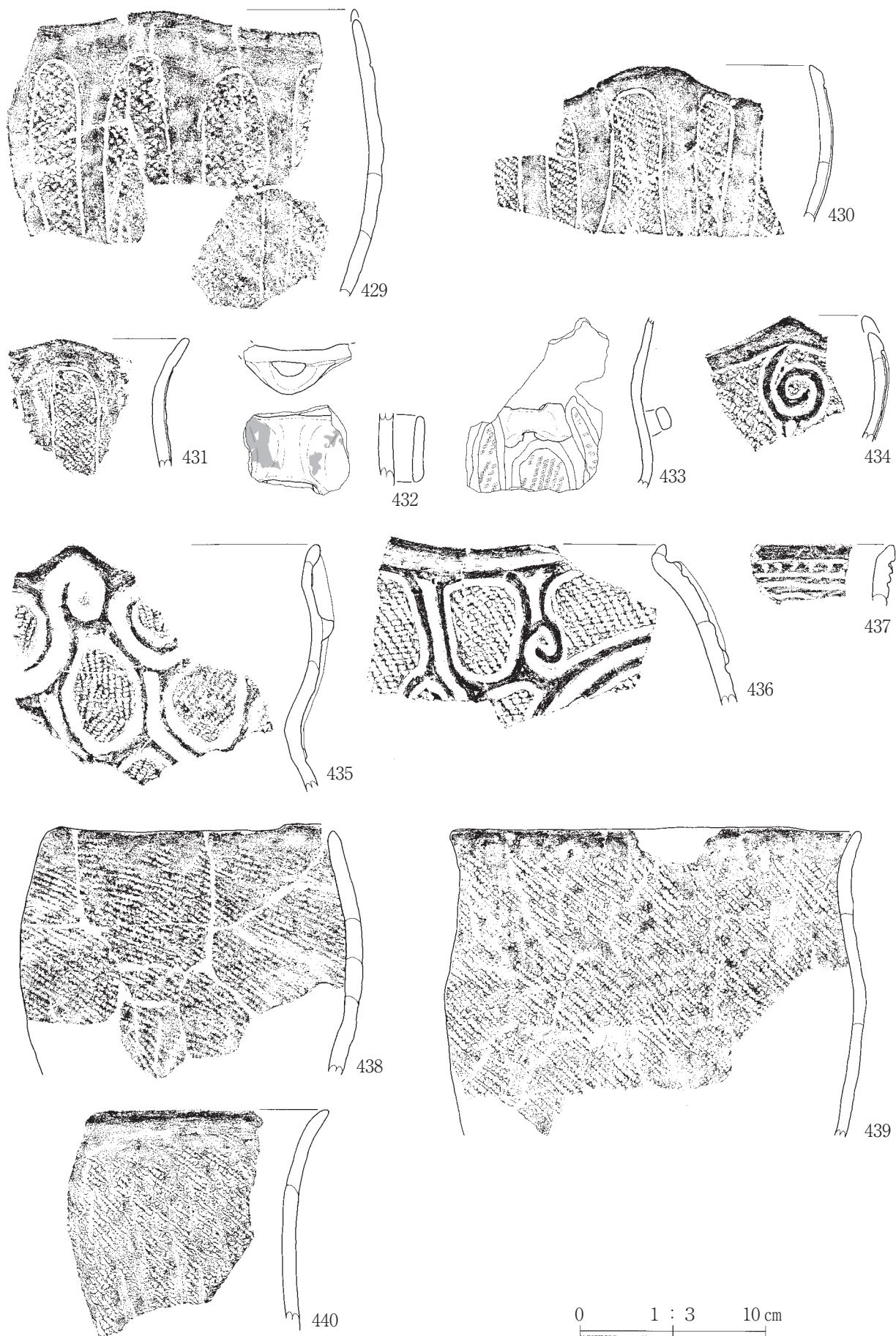
土製品は埋土下位から円盤形土製品 1 点 (442) が出土している。深鉢胴部片の転用で、隆帯が付く。三角形に整形し、また三箇所、穿孔している。



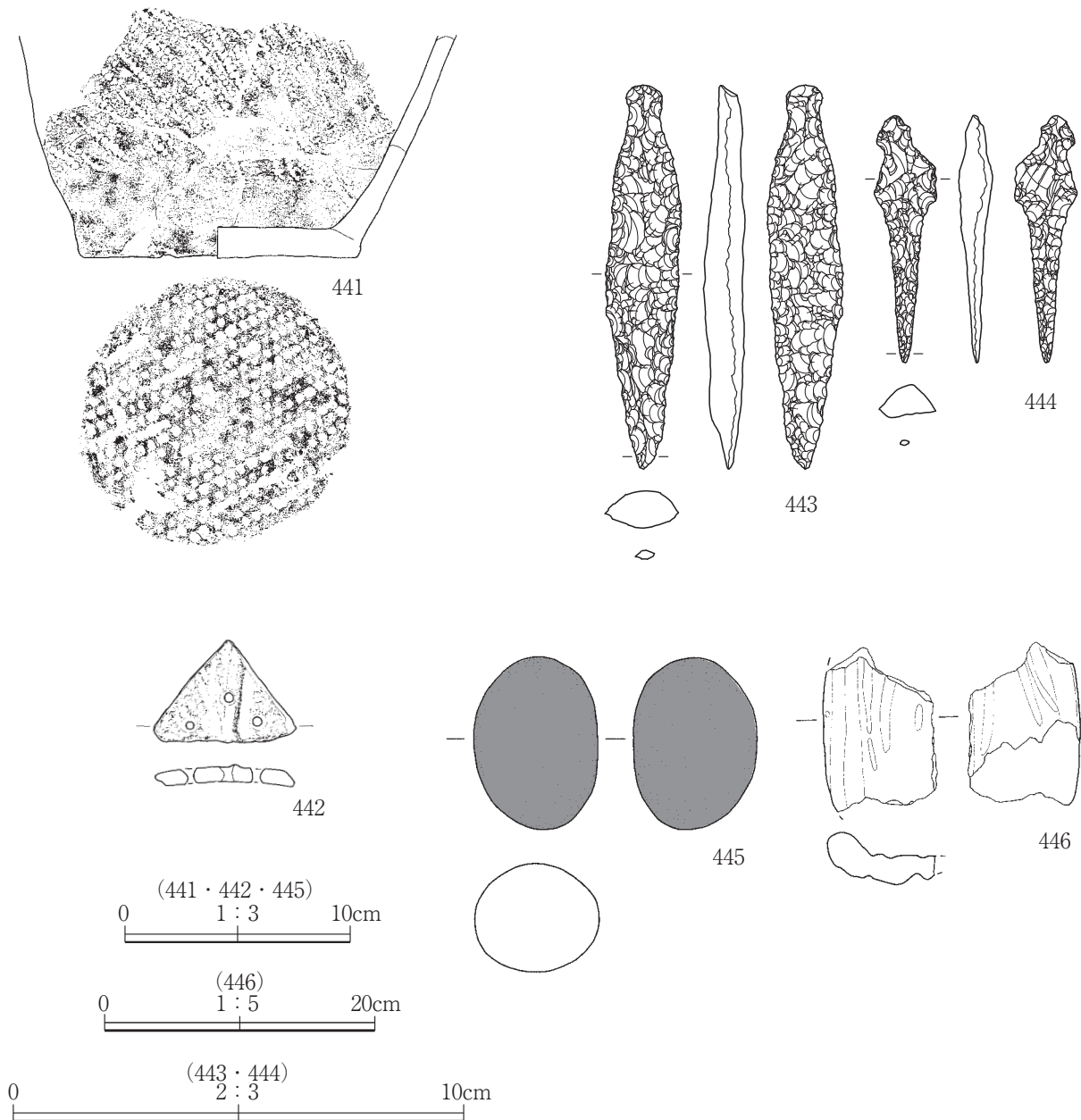
第 99 図 10 号住居跡



第100図 10号住居跡出土遺物1



第 101 図 10 号住居跡出土遺物 2



第 102 図 10 号住居跡出土遺物 3

石器は 4 点掲載した。443・444 は石錐である。443 は I 類としたが、形態から尖頭器とすべきかもしれないが、やや厚みががないので石錐とした。基部に摘みが付くのが特徴である。444 も基部に摘みが付く。石匙にもみえるが、先端は鋭利な錐部を作出しており、石錐の範疇にとらえている。445 は敲磨器類 I 類で球状の礫を素材とし、全面に磨痕が見受けられる。446 は石皿の破片で、II 類である。縁辺が整形されているが本来楕円形を呈していた可能性が高い。使用面は 1 面と推測するが、明確な磨面を見受けられず、両面に研溝が 2～3 条見受けられる。欠損後を砥石に転用している可能性が高い。
 [時期] 出土した土器 (421～425) の年代から大木 9 式新段階と判断した。

11号住居跡（第103～105図、写真図版15・76・262）

[位置・検出状況] 調査区北側、I B 4a、I B 5a、I B 4b、I B 5b グリッドに位置する。VI層上面で検出した。後世の削平により壁は消失しており、床面のみ残存する。

[その他の遺構との重複] 13号住居跡と重複するが、11号、13号住居跡ともに壁がなく、重複する状態から新旧関係の推測が難しい。

[平面形] 残存する壁溝から円形を呈するものと推定する。

[規模] (672) × (670)、深さ不明。

[埋土] 削平によって消失しており、不明である。

[床面・壁] 炉を検出したVI層面を床面と判断した。概ね平坦である。

壁は消失している。

[炉] 複式炉である。石囲部2個（石囲部1・2）と前庭部で構成され、294 × 194cmを測る。

石囲部1の底面は床面から4cm下である。底面全体が燃焼しており、被熱により赤色に還元している。炉石は扁平な花崗岩や閃緑岩を素材として並べている。

石囲部2は不整な台形を呈し、底面は床面から24cm下である。石囲部1と同じく底面全体が燃焼している。石囲部1・2の掘り方を確認した。炉とほぼ同規模に掘り込み、炉石を設置している。

前庭部は台形に広がる。床面より20cm掘り下げて構築している。硬化した範囲は確認できない。

[附属施設] 柱穴16個を確認した。炉の周囲を巡っており、配列からPit 2、4、6、7、8、9、11を支柱穴とする7本柱と推定する。またその外側にも大きな柱穴がある。

壁溝が2重に巡る。内側の壁溝はほぼ全周するが柱穴と重複している。外側の壁溝は部分的で途切れる。柱穴の配列と2重の壁溝から本遺構は1回以上の建て替えがあり、その際、外へと広げたものと推測する。

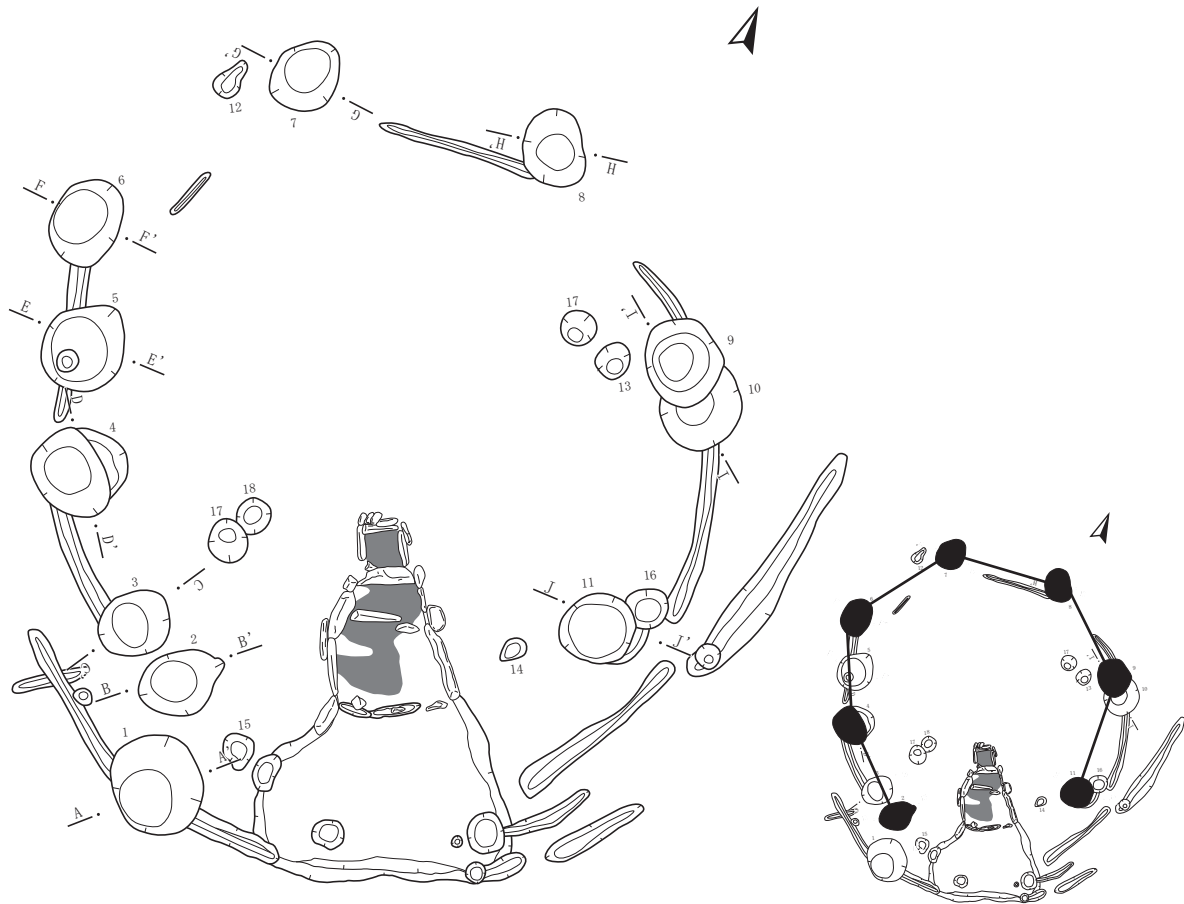
[出土遺物] 床面や附属施設から縄文土器11,088.7g、石器31点が出土している。本遺構は埋土が無いことから遺物が少なく、また炉内から縄文土器、石器が出土しているものの、縄文土器は小片のみで、時期にも幅が見受けられるので、流れ込みによる混入の可能性が高い。

縄文土器は12点掲載した。447・448は大木8b式新段階の深鉢である。449は大木8b式新段階～大木9式新段階の深鉢胴部片である。これらは炉の形態と合わせて考えると、本遺構に伴う遺物と考えられる。一方、450～453は大木8a式新段階の深鉢、また454は大木7a式新段階、455は大木7b式、456は大木8a式古段階、457は大木7a式新段階とばらばらである。458は唯一形態の復元できた粗製の小型鉢である。

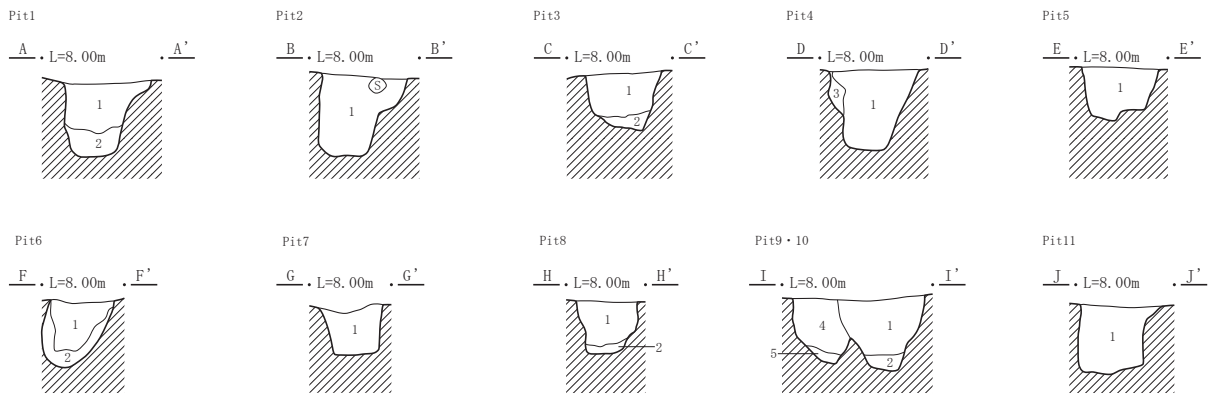
土製品は6点出土しており、そのうち円盤形土製品1点（459）を掲載した。一部欠損するが、深鉢の胴部片を転用し、円形に整形している。

石器は3点掲載した。460は石鏃でⅡ類。体部にアスファルトが付着する。461・462は敲磨器類でどちらも厚みのある楕円形の礫を素材とし、461はⅠ類で両面に磨痕、462はⅣ類で両面に磨痕、側面に敲打痕が見受けられる。

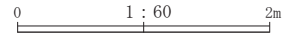
[時期] 数少ない出土遺物は時期幅があり、遺構の時期判断の根拠に乏しいが、炉内から出土した炭化物を年代測定（AMS測定）した結果、「4060 ± 30yrBP」という値を得ており、この測定結果を基に、大木8a式～大木10式の範疇と判断した。



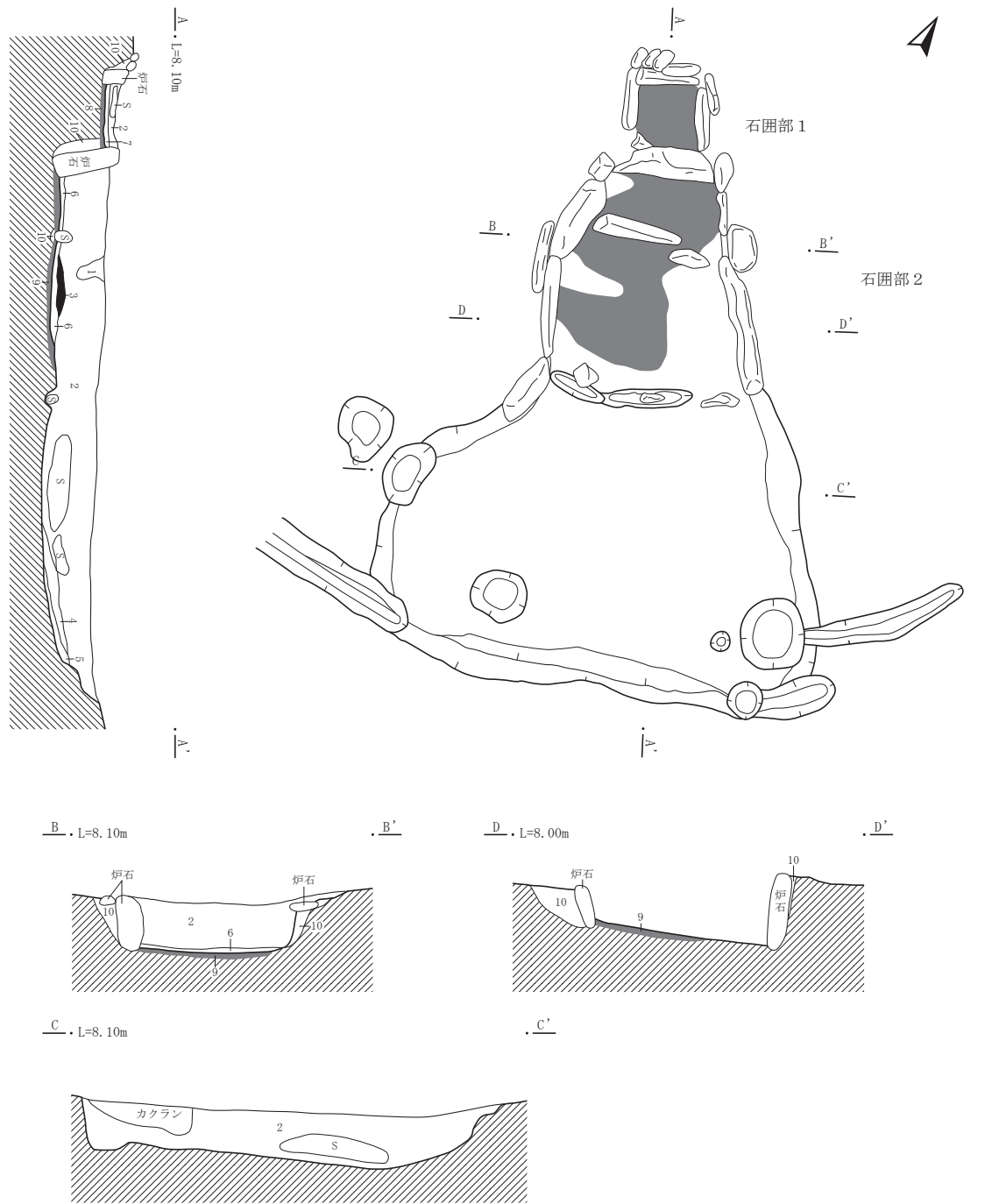
柱穴



- | | | | |
|--|--|---|--|
| <p>1. 暗褐色シルト(10YR3/3)
 2. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
 3. 暗褐色シルト(10YR3/4)
 4. 黒褐色シルト(10YR3/2)
 5. 暗褐色シルト(10YR3/4)</p> | <p>粘性強
 粘性やや弱
 粘性強
 粘性やや弱
 粘性やや強</p> | <p>しまりやや密
 しまりやや密
 しまりやや密
 しまりやや密
 しまり密</p> | <p>炭化物微量、地山ブロック少量含む。
 炭化物微量、地山ブロック多量含む。
 根堅めか。人為堆積。炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。
 1層と類似するが、やや暗め。炭化物微量、地山ブロック中量含む。
 炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。</p> |
|--|--|---|--|



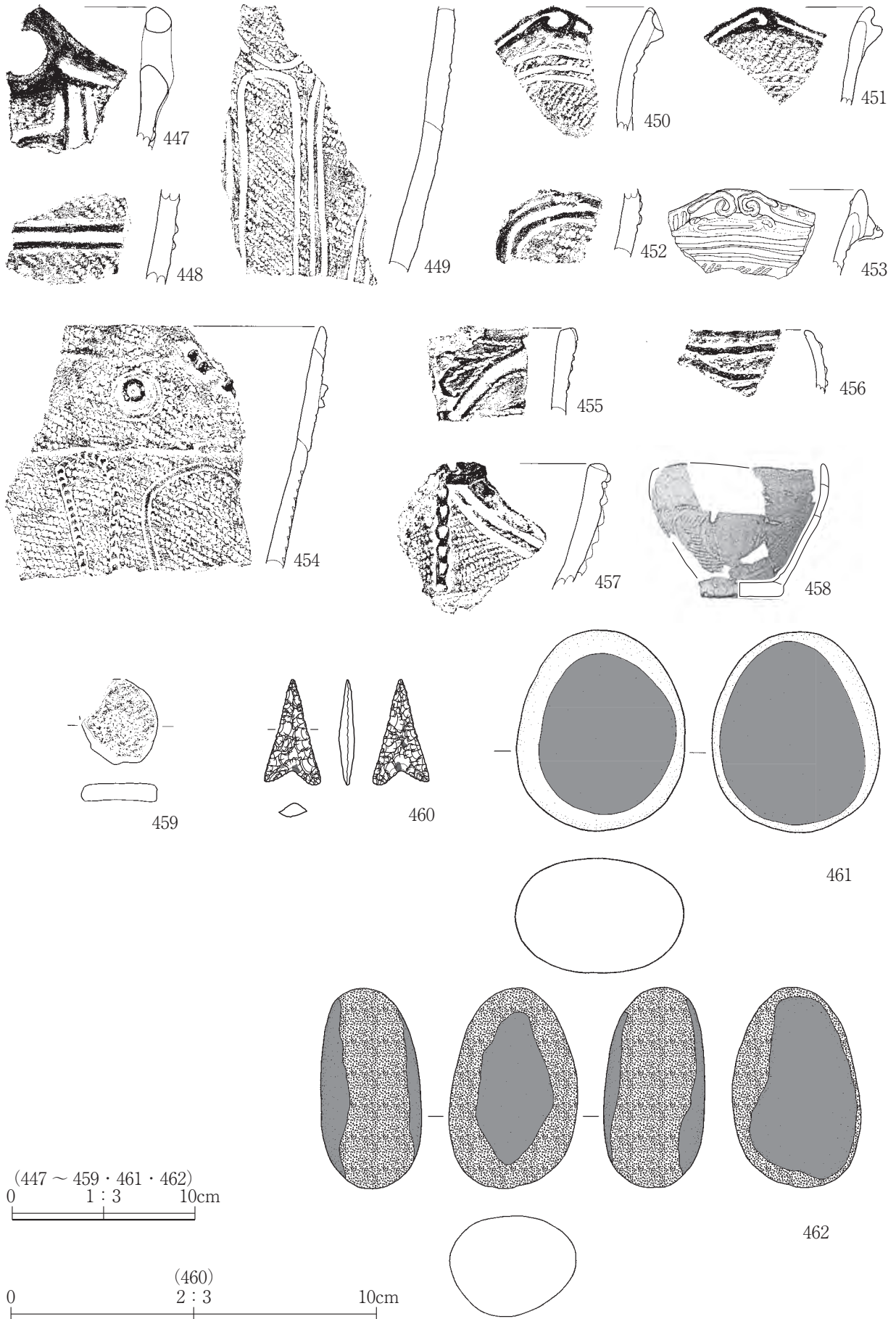
第103図 11号住居跡1



- | | | | |
|----------------------|-------|--------|------------------------------------|
| 1. 黒色シルト (10YR2/1) | 粘性やや弱 | しまり密 | 炭化物微量、白色粒子微量含む。 |
| 2. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | II層土類似。炭化物微量、焼土粒微量、白色粒子やや多く含む。 |
| 3. 黒色炭 (10YR1.7/1) | 粘性やや強 | しまり疎 | |
| 4. 明黄褐色シルト (10YR7/6) | 粘性弱 | しまり密 | V層土を貼床した層。2層土がブロックで少量含む。 |
| 5. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、地山ブロック中量、白色粒子微量含む。 |
| 6. 褐色シルト (7.5YR4/3) | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物少量、焼土粒中量、白色粒子微量含む。 |
| 7. 褐色シルト (7.5YR4/3) | 粘性強 | しまり疎 | 炭化物少量、焼土ブロック中量含む。 |
| 8. 明赤褐色焼土 (2.5YR5/6) | 粘性やや強 | しまり密 | 燃焼面。焼成やや弱く、被熱により赤色に還元しているが、わずかに暗い。 |
| 9. 橙色焼土 (2.5YR6/6) | 粘性弱 | しまり密 | 燃焼面。焼成強く、赤色に還元し、また酸化している。 |
| 10. 暗褐色シルト (10YR3/3) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 炬石掘り方埋土。炭化物少量、地山ブロックやや多く含む。 |

0 1 : 30 1m

第 104 図 11 号住居跡 2



第 105 図 11 号住居跡出土遺物

12号住居跡（第106～108図、写真図版16・76・77・262）

[位置・検出状況] 調査区北側、I B 2c、I B 3c、I B 4c、I B 2d、I B 3d、I B 4dグリッドに位置する。VI層上面で検出した。後世の削平により、壁は消失し床面のみ残存する。

[その他の遺構との重複] 13号住居跡と重複する。重複する壁溝、柱穴の新旧関係から本遺構の方が新しいと判断した。

[平面形] 不明。壁溝から円形か多角形を呈するものと推定する。

[規模] (698) × (668) cm、深さ不明。

[埋土] 削平され、不明である。

[床面・壁] 炉を検出したVI層面を床面と判断した。概ね平坦である。壁は消失している。

[炉] 複式炉である。ただし掘り方と炉石の一部が残存するのみである。

炉石の抜き採り痕から石囲部1個と前庭部で構成される複式炉と推定される。規模は294 × 195cmを測る。残存する炉石は閃緑岩である。

炉内の埋土は確認できなかった。燃烧面は床面から3cm下で確認した。また中央よりやや奥側に間仕切りの炉石が設置されている。燃烧面は焼成が強く、広い範囲が赤色に還元している。前庭部は石囲部よりわずかに広がる。硬化した範囲は確認できない。また前庭部内に小さな掘り込みがある。

[附属施設] 柱穴15個を確認した。配列からPit 1～7、10(12)を主柱穴とする8本柱であったと推定する。

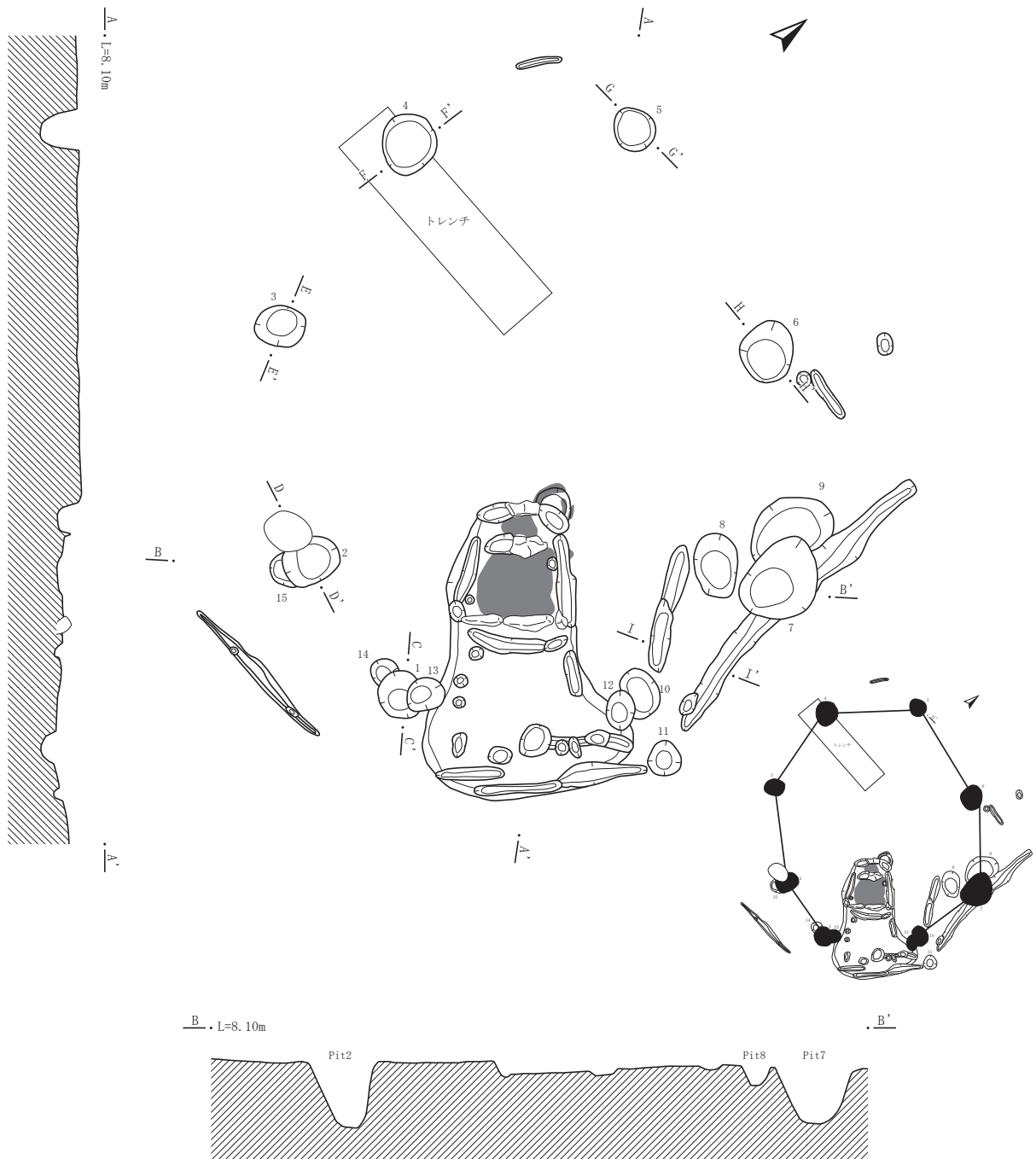
[出土遺物] 炉内と附属施設から縄文土器3,776.4g、石器9点が出土している。本遺構は埋土が消失しているため、出土遺物が著しく少ない。かろうじて炉の埋土から出土した縄文土器、石器が本遺構に伴われる遺物と判断した。ただし縄文土器は小片のみで、また時期も大木8b古段階～9式古段階と幅が広い。

縄文土器は3点掲載した。463は大木8b式古段階に比定される深鉢の口縁部片である。隆帯による横位の渦巻き文が剥落している。464は大木8b式新段階の深鉢で、口縁部に隆帯による渦巻き文が付く。465は大木8b式新段階～大木9式古段階の深鉢で縦位の単軸絡条体1類を地文とし、沈線で縦位の楕円形区画や曲線文を描く。

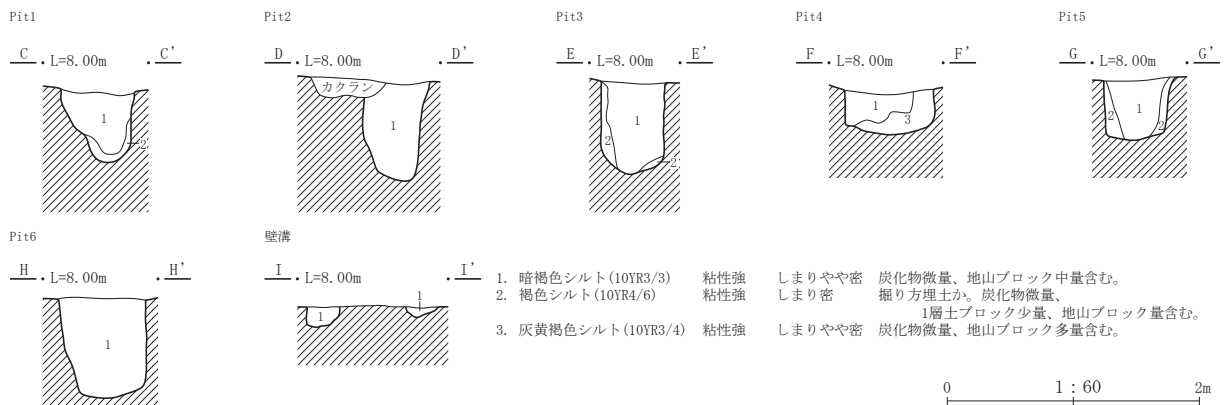
土製品は床面から円盤形土製品1点(466)が出土している。深鉢の胴部片の転用で、不整な円形に整形する。

石器は1点掲載した。467は石錐Ⅱ類で大きな摘み部が付くが、錐部の大半は欠損している。

[時期] 数少ない出土遺物は時期幅があり、遺構の時期判断の根拠に乏しい。隣接する11号住居跡や13号住居跡の時期を基に、大木9式～大木10式の範疇と判断した。

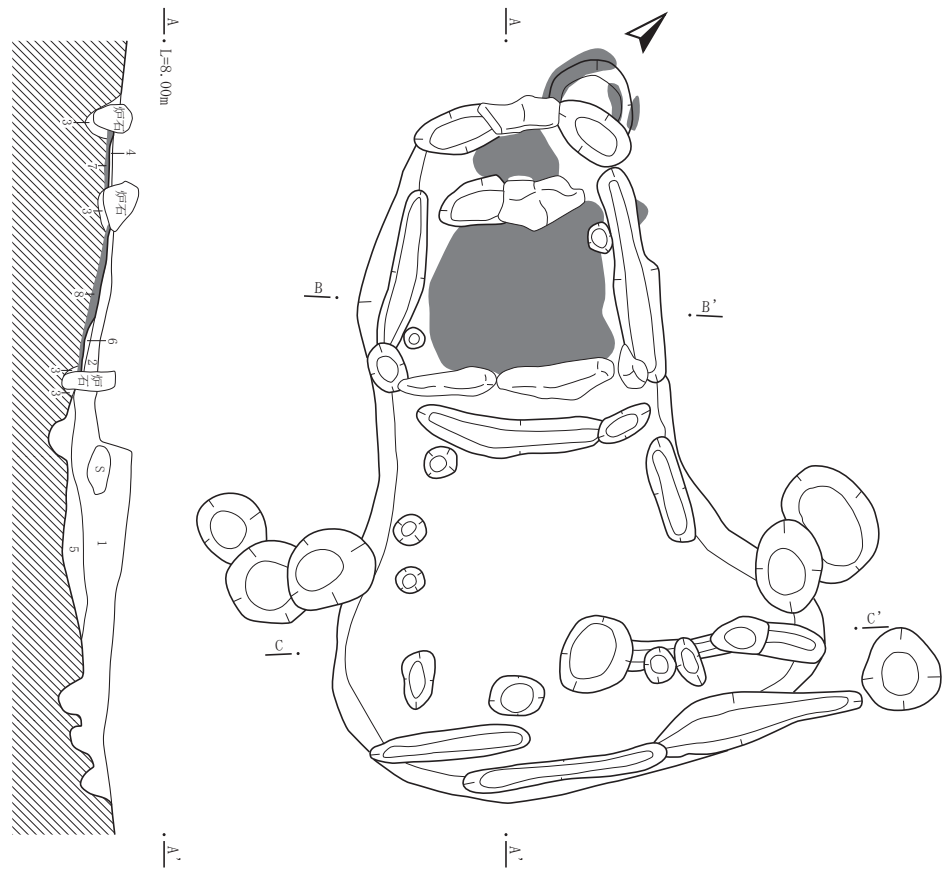


柱穴・壁溝

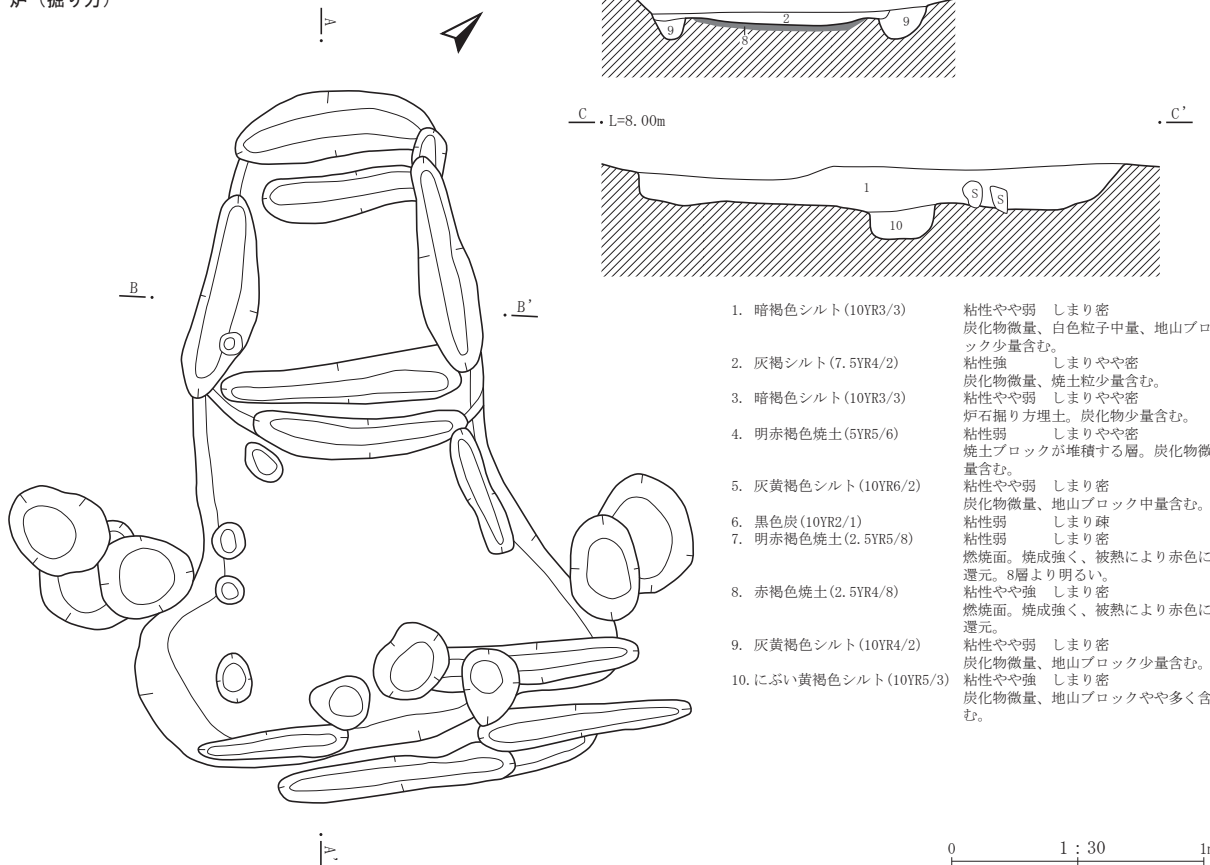


第106図 12号住居跡1

炉



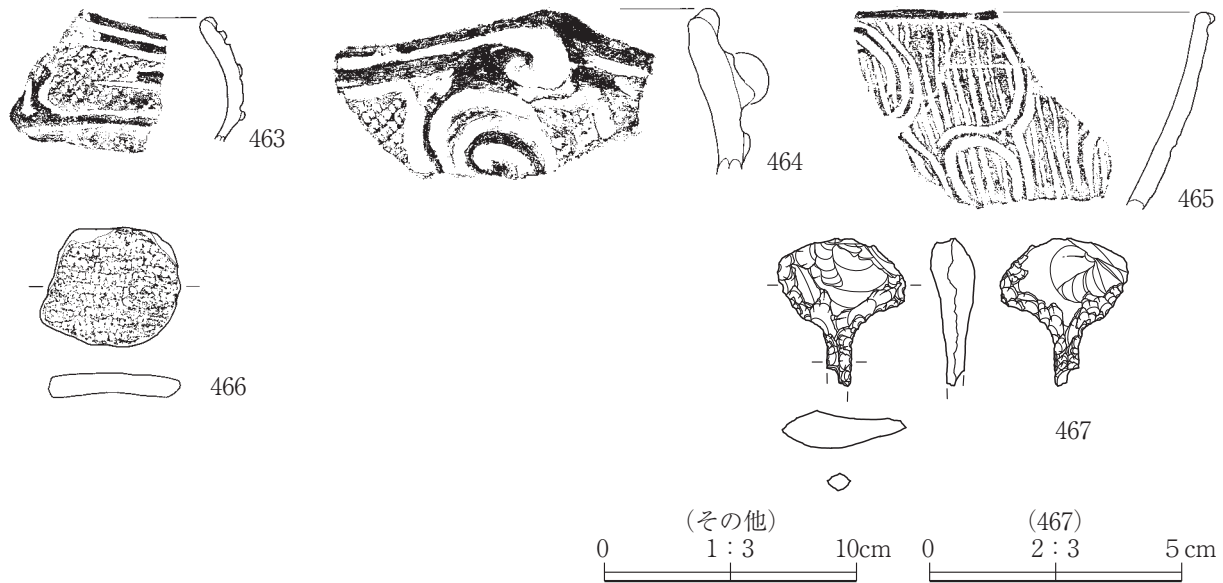
炉（掘り方）



- | | |
|-------------------------|--|
| 1. 暗褐色シルト (10YR3/3) | 粘性やや弱 しまり密
炭化物微量、白色粒子中量、地山ブロック少量含む。 |
| 2. 灰褐シルト (7.5YR4/2) | 粘性強 しまりやや密
炭化物微量、焼土粒少量含む。 |
| 3. 暗褐色シルト (10YR3/3) | 粘性やや弱 しまりやや密
炉石掘り方埋土。炭化物少量含む。 |
| 4. 明赤褐色焼土 (5YR5/6) | 粘性弱 しまりやや密
焼土ブロックが堆積する層。炭化物微量含む。 |
| 5. 灰黄褐色シルト (10YR6/2) | 粘性やや弱 しまり密
炭化物微量、地山ブロック中量含む。 |
| 6. 黒色炭 (10YR2/1) | 粘性弱 しまり疎 |
| 7. 明赤褐色焼土 (2.5YR5/8) | 粘性弱 しまり密
燃焼面。焼成強く、被熱により赤色に還元。8層より明るい。 |
| 8. 赤褐色焼土 (2.5YR4/8) | 粘性やや強 しまり密
燃焼面。焼成強く、被熱により赤色に還元。 |
| 9. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) | 粘性やや弱 しまり密
炭化物微量、地山ブロック少量含む。 |
| 10. にぶい黄褐色シルト (10YR5/3) | 粘性やや強 しまり密
炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。 |

0 1 : 30 1m

第 107 図 12 号住居跡 2



第108図 12号住居跡出土遺物

13号住居跡（第109～111図、写真図版17・77・262）

[位置・検出状況] 調査区北側、I B 4b、I B 5b、I B 4c、I B 5c、I B 4dグリッドに位置する。概ねVI層上面で検出したが、本遺構の南側一部はV層面で見つかっている。また後世の削平により、壁は消失しており床面のみ残存する。

[その他の遺構との重複] 14号、20号住居跡と重複する。本遺構が最も新しい。また11号、12号住居跡とも重複関係にあるが、いずれも壁がなく重複する状態から新旧関係の推測が難しい。

[平面形] 不明。壁溝から円形か多角形を呈するものと推定する。

[規模] (654) × (744) cm、深さ12cm

[埋土] 削平され、不明である。

[床面・壁] 炉を検出したVI層面を床面と判断した。概ね平坦である。壁は消失している。

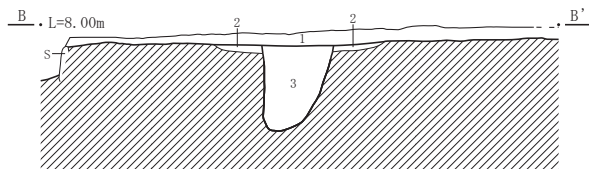
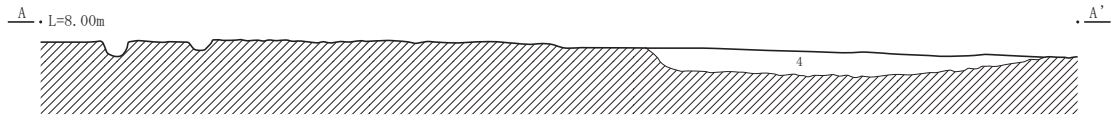
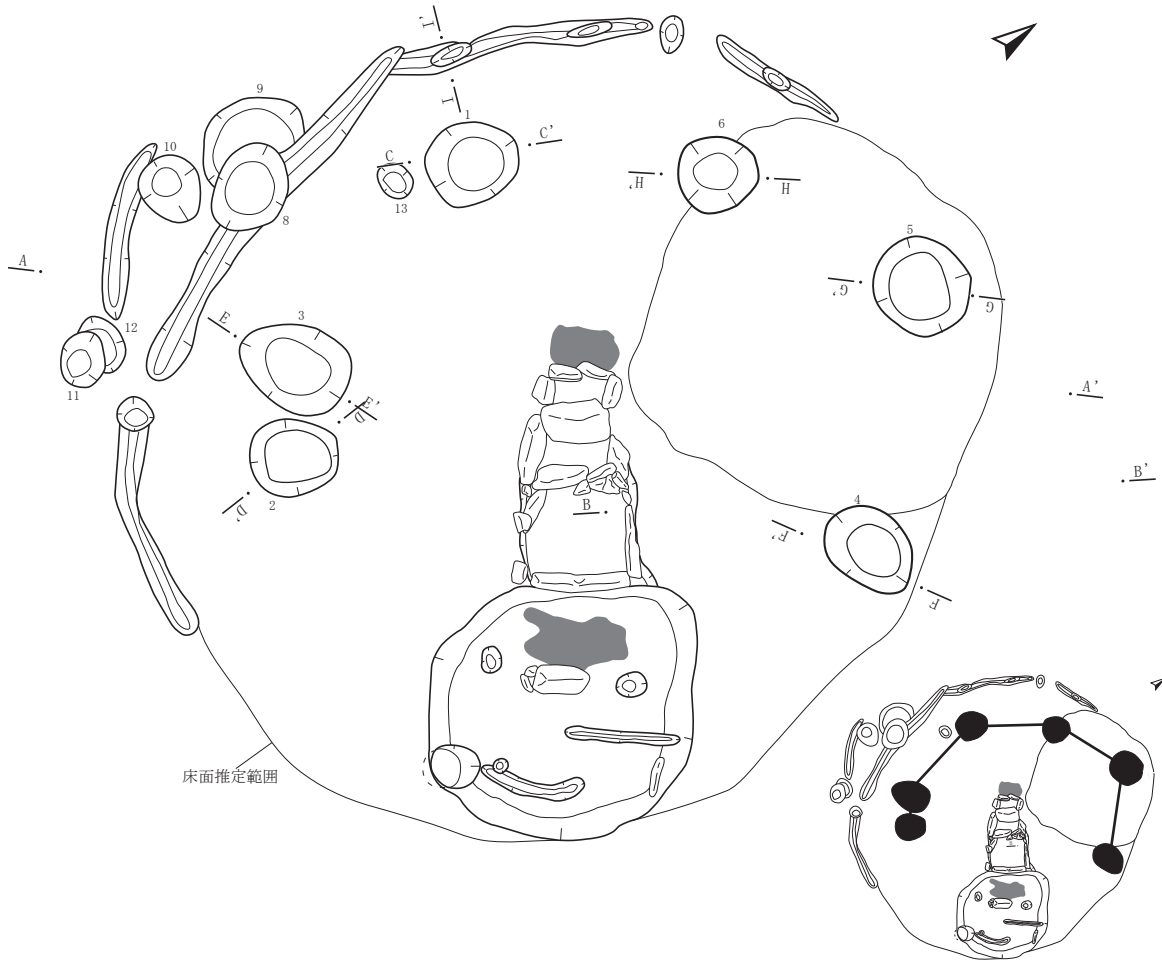
[炉] 複式炉である。石囲部3個（石囲部1・2・3）と前庭部で構成され、407cm × 208cmを測る。炉石は形状、大きさ共に不揃いな花崗岩や閃緑岩を素材としている。

石囲部1は床面から21cm掘り下げて構築している。炉内に燃焼面はなく、火を使用していない可能性が高い。ただし石囲部1の外側には55 × 30cmの焼土が広がっている。石囲部2・3は床面から35cm掘り下げて構築している。これらも石囲部内に燃焼面は見受けられず、火を使った痕跡は見受けられない。

前庭部は一辺280cmの隅丸方形を呈し、床面から35cm下まで掘り込んでおり、あまり前庭部らしくない。石囲部との連結部分に焼土の広がりを確認した。また底面のほぼ中央に大きな礫が配されているが、用途は不明である。

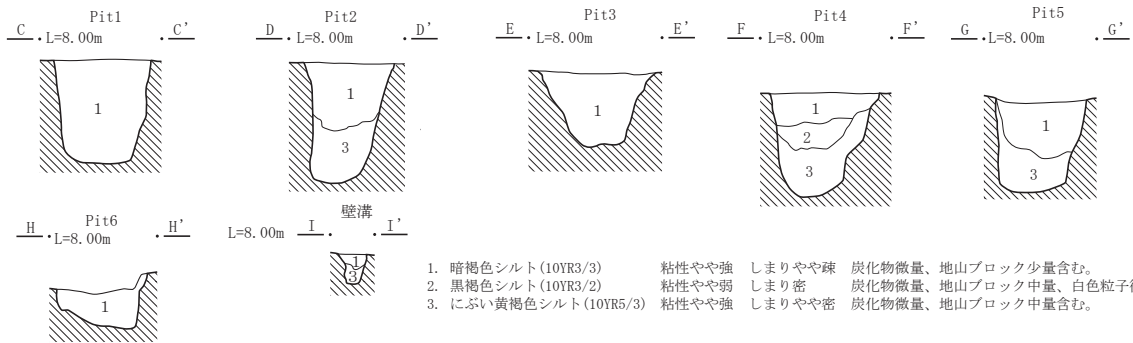
[附属施設] 柱穴14個を確認した。配列からPit 1～6を主柱穴とする6本柱であったと推定する。また住居の北側には壁溝が巡る。

[出土遺物] 床面、附属施設から縄文土器13,153.3g、石器32点出土している。本遺構は埋土が消失しているため、出土遺物が少ない。炉の埋土から出土した縄文土器、石器が本遺構に伴われる遺物と判断したが、縄文土器は小片が多く、また時期が大木8a式新段階～9式古段階と幅が広いので、流れ込みによる混入の可能性もある。



1. 黒褐色シルト(10YR3/1) 粘性やや強 しまり密 炭化物・焼土粒微量、白色粒子微量、地山ブロック中量含む。
2. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性やや弱 しまり密 炭化物少量、白色粒子中量含む。
3. 黒褐色シルト(10YR2/3) 粘性やや弱 しまりやや密 柱穴埋土。炭化物微量、白色粒子微量含む。
4. 黒褐色シルト(10YR3/1) 粘性やや強 しまり密 炭化物・焼土粒微量、白色粒子微量、地山ブロック中量含む。

柱穴・壁溝

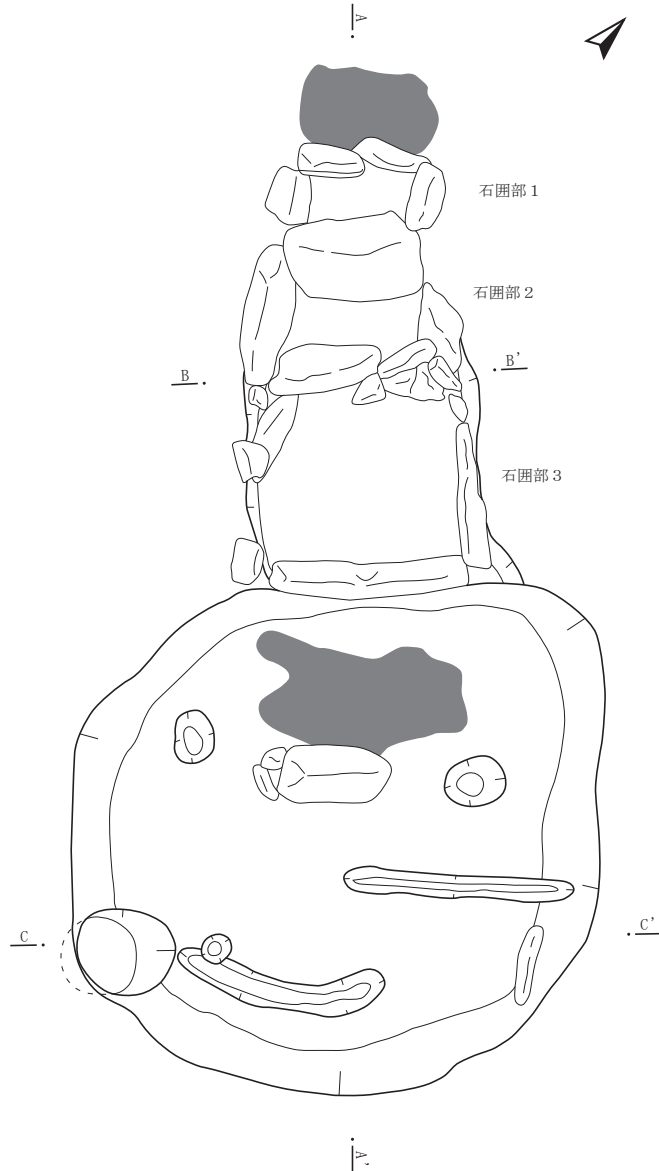
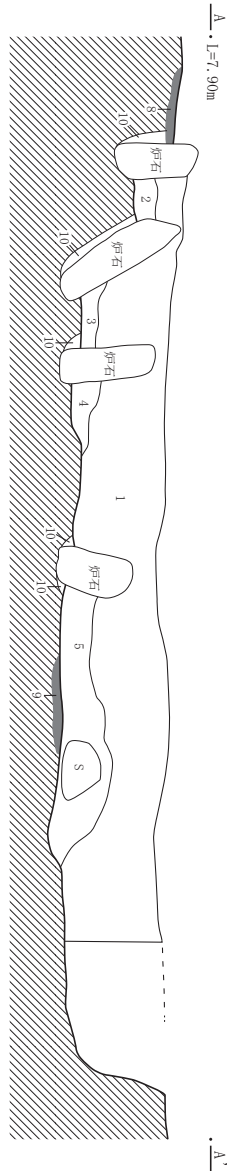


1. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性やや強 しまりやや疎 炭化物微量、地山ブロック少量含む。
2. 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量、地山ブロック中量、白色粒子微量含む。
3. にぶい黄褐色シルト(10YR5/3) 粘性やや強 しまりやや密 炭化物微量、地山ブロック中量含む。

0 1 : 60 2m

第109図 13号住居跡1

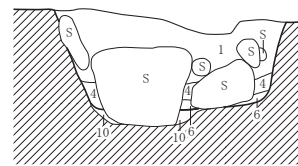
炉



1. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性やや弱 しまりやや密 II層類似土・炭化物微量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。
3. 黒色シルト(10YR2/1) 粘性やや弱 しまり疎 炭化物中量、白色粒子微量、地山ブロック少量含む。
4. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性強 しまりやや密 地山ブロック中量含む、焼土ブロック上部に中量偏在。
5. 暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性やや強 しまりやや密 炭化物微量、焼土粒微量、地山ブロックやや多く含む。
6. 黒色炭層(10YR2/1) 粘性弱 しまり疎 ブロック状の炭化物が堆積。
7. 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性強 しまり密 炭化物微量、地山ブロック少量含む。
8. にぶい橙色焼土(5YR6/4) 粘性やや強 しまりやや密 燃焼面。焼成弱く、還元による変色も淡い。
9. 橙色焼土(5YR6/6) 粘性強 しまり密 焼成によって橙色に還元し、炭化物微量散在。
10. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性やや弱 しまり密 炉石堀方埋土。炭化物微量、白色粒子少量含む。

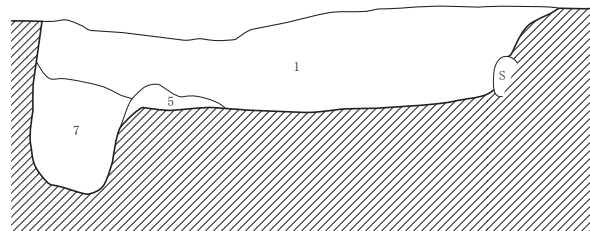
B . L=7.90m

B'



C . L=7.90m

C'



0 1 : 30 1m

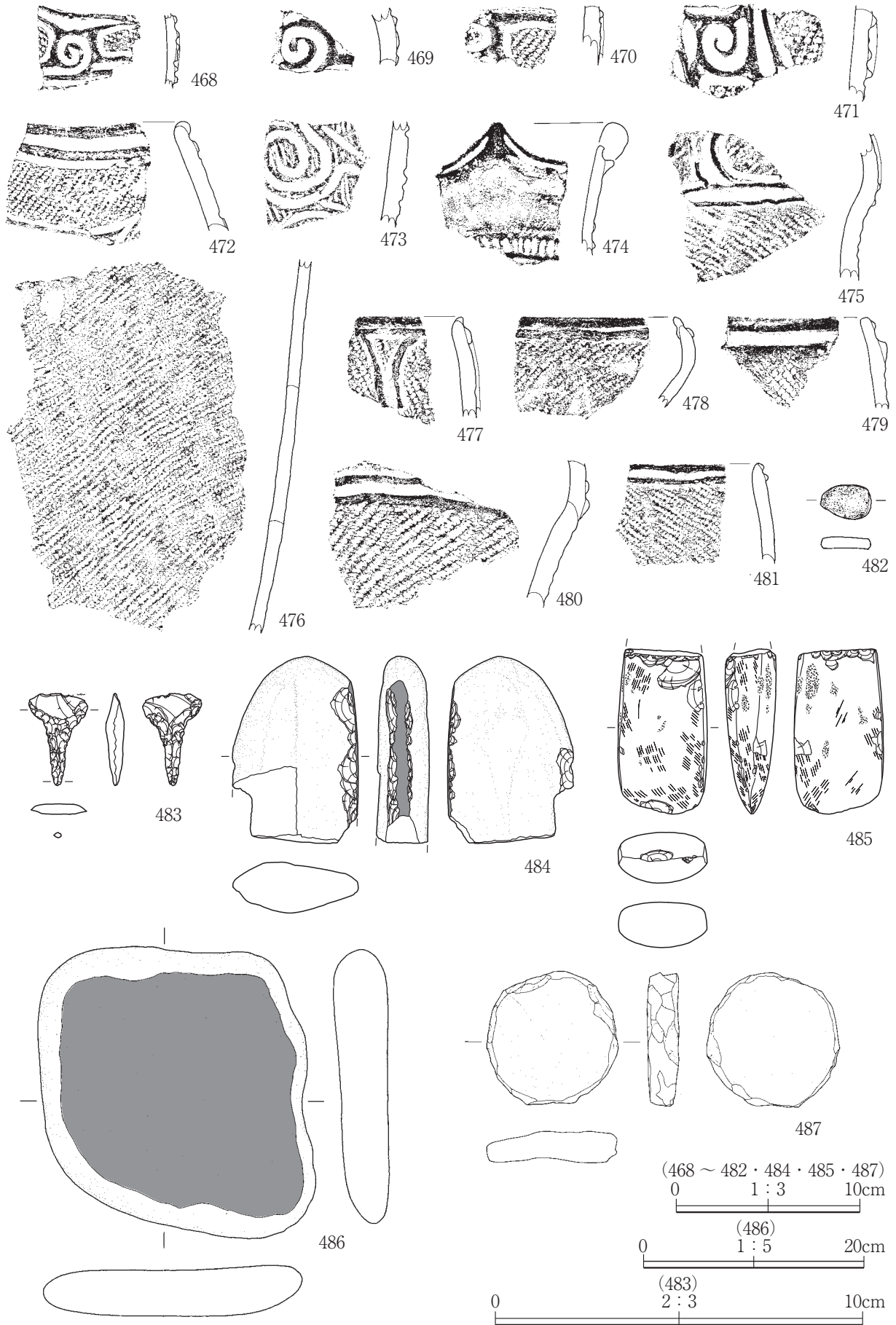
第110図 13号住居跡2

縄文土器 14 点を掲載した。468～472 は大木 8b 式新段階に比定される深鉢で、隆帯による渦巻き文が施文される。473 は大木 8b 式新段階～大木 9 式古段階の深鉢で、縦位の単軸絡条体 1 類を地文とし、沈線による渦巻き文が施文される。これらの土器群については、本遺構の炉の形態からみても時期的に符合すると考える。一方、474・475・477～481 は大木 8a 式新段階で、上記の土器と比べ、やや古い。

土製品は円盤形土製品 1 点（482）を掲載した。深鉢の胴部片を転用し、楕円形に整形されている。無文である。

石器は 4 点掲載した。483 は石錐Ⅱ類で T 字状の摘みが特徴である。484 は特殊磨石で約 1/3 を欠損する。485 は磨製石斧で基部の一部を欠損し、また刃部も剥離している。全体に敲打、研磨による整形の痕跡が見て取れる。486 は石皿でⅠ類に相当し、完形である。やや不整形であるが、隅丸方形基調の偏平な礫を素材とし、片面のみ使用している。

石製品 1 点（487）を掲載した。円盤形石製品である。側縁は打ち欠きにより円形に整形され、またわずかだが、研磨した痕跡が見受けられる。偏平な両面には何もなされておらず、自然面が残る。
[時期] 上記の通り、出土土器には時期幅があり、本遺構の時期判定は難しい。隣接（重複）する 11 号、12 号住居跡の時期を基に大木 9 式～大木 10 式を本遺構の時期と判断した。



第 111 図 13 号住居跡出土遺物

14号住居跡（第112図、写真図版18・77）

[位置・検出状況] 調査区北側、I B 4b、I B 5b、I B 4c、I B 5cグリッドに位置する。VI層上面で検出した。本遺構は13号住居跡の床面上に黒褐色に広がるプランで確認した。当初は13号住居跡の床下土坑かと考えたが、掘り下げたところ、炉を検出したので、竪穴住居跡と判断した。

[その他の遺構との重複]13号住居跡と重複する。新旧関係を判断するための断面は設定しなかったが、13号住居跡の埋土には本遺構の埋土と考えられる土層は認められないので、本遺構は13号住居跡の構築以前と考え、本遺構の方が古いと判断した。

[平面形] 不整な隅丸方形を呈する。

[規模] 285×285cm、深さ11cm

[埋土] 1層のみ確認した。埋土の厚さからみて、ほとんどは13号住居跡の構築時に消失したものと推定する。黒褐色シルトを主体とし、炭化物・白色粒子が混じる。また地山ブロックの混入が目立つので、人為的に埋められたのではないかと推測する。

[床面・壁] 炉を検出したVI層面を床面と判断した。概ね平坦である。

壁は北壁を除き全周する。大きく広がりながら立ち上がる。

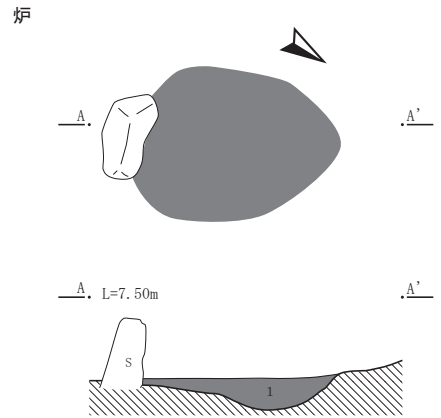
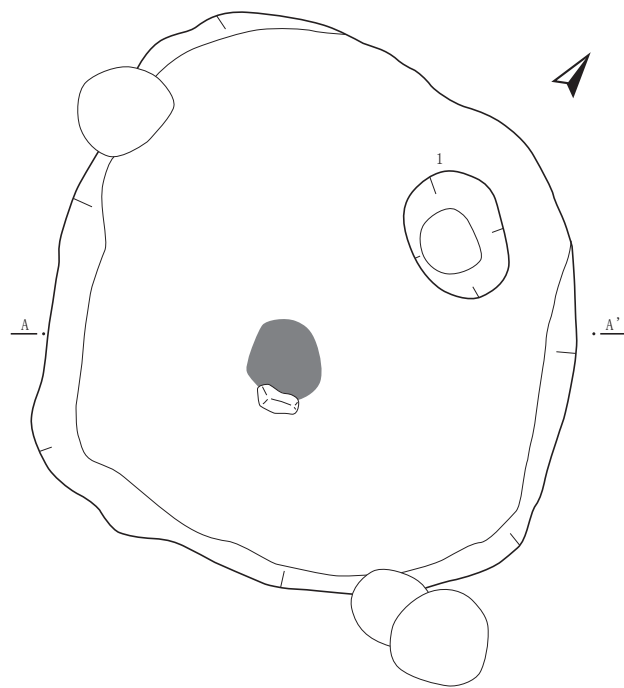
[炉] 地床炉である。焼面は64×40cmの楕円形を呈し、床面下8cmまで焼土である。ただし被熱は弱く、淡い橙色に還元する程度である。炉の南端に1点、礫（炉石？）が据えられている。礫は浅くだが床面に差し込んでおり、人為的に据え置いたものと考えが、それ以外に礫は設置されておらず、また焼面の周辺に炉石の抜き取り痕は確認できなかったため、石囲炉ではないと考えている。

[附属施設] 柱穴1個を確認した。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器が6,732.7g、石器17点出土している。縄文土器は小片のみで、また時期幅があり、流れ込みの土器が含まれている可能性が高い。

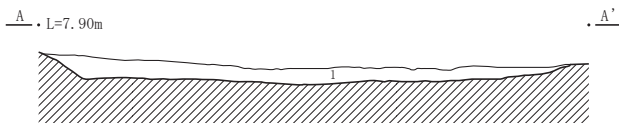
縄文土器5点を図示した。488は大木8a式新段階の深鉢胴部片で横位に隆帯が巡る。489は地文と隆帯のみであるが、大木8b式新段階と推測する。490は大木9式新段階の深鉢口縁部片で、円形刺突文を円形に巡らせる。491は大木8b式新段階～大木9式古段階と推測する。このように、文様の残る土器を掲載したが、時期はいずれもばらばらである。

[時期] 出土土器が少なく時期を判断するのは難しいが、重複する13号住居跡より本遺構の方が古い点と、出土土器の時期から、本遺構は大木8a式新段階～大木8b式新段階の範疇と判断した。

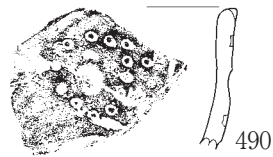
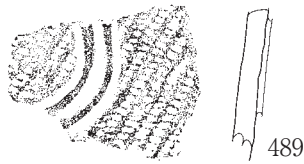
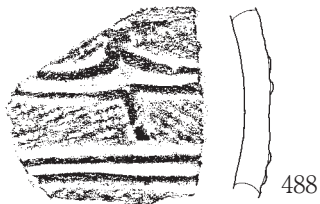


1. にぶい橙色焼土(5YR6/4) 粘性やや強 しまりやや密 炭化物・焼土粒微量、
燃焼面。焼成弱く、還元による変色も淡い。

0 1 : 20 1m



1. 黒褐色シルト(10YR3/1) 粘性やや強 しまり密 炭化物・焼土粒微量、
白色粒子微量、地山ブロック中量含む。 0 1 : 40 1m



0 1 : 3 10 cm

第 112 図 14 号住居跡出土遺物

15号住居跡（第113～115図、写真図版19・77・263）

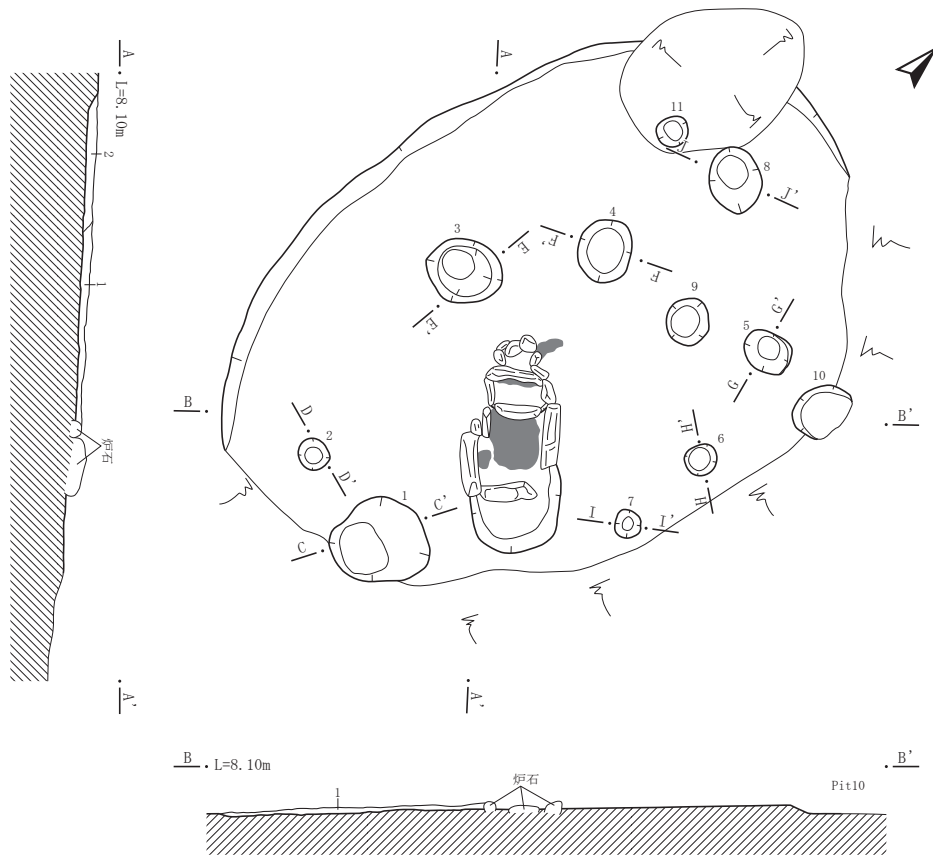
[位置・検出状況] 調査区北側、I B 6a、I B 6b グリッドに位置する。VI層上面で検出したが、本遺構の南側はわずかにV層が残る面で見ついている。後世の削平により、遺構上部のほとんどを消失し、検出できたのは埋土下位から床面のみである。また遺構の南側は床面も残存していない。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 残存する範囲から楕円形と推定する。

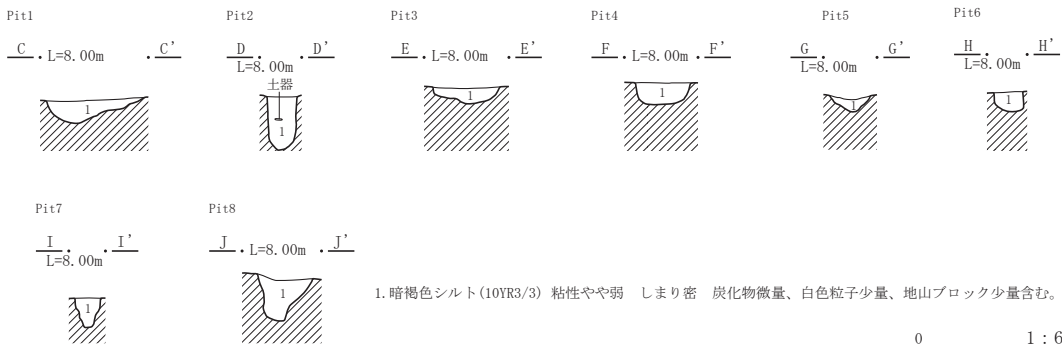
[規模] (436) × (500) cm、深さ5 cm。

[埋土] 北側の壁面で本遺構埋土の一部を確認した。1層のみで暗褐色シルトを主体とする。



1. 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量、白色粒子中量、地山ブロック少量含む。
2. 黄褐色シルト(10YR5/8) 粘性やや強 しまり密 炭化物微量、黒褐色シルトブロック少量含む。

柱穴



第113図 15号住居跡1

[床面・壁] 炉を検出したⅥ層面を床面と判断した。概ね平坦だが、わずかに南へと傾斜している（床面が崩落?）。

壁は北壁のみ残存する。直立気味である。

[炉] 複式炉である。石囲部3個と前庭部で構成される。規模は172×77cmを測る。石囲部は便宜上、第114図に示した通り、「石囲部1・2・3」と呼称する。

石囲部1は床面から7cm掘り下げ、不揃いな円礫を炉石とし、楕円形に並べて、構築している。底面に燃焼面は認められなかったが、石囲部の外側に焼土の広がりを確認した。

石囲部2は床面から11cm掘り込んで偏平な礫を方形に並べて、構築している。石囲部1との境に当たる炉石の周辺で底面に、わずかに焼土の広がりを確認したが、燃焼面というほどではない。

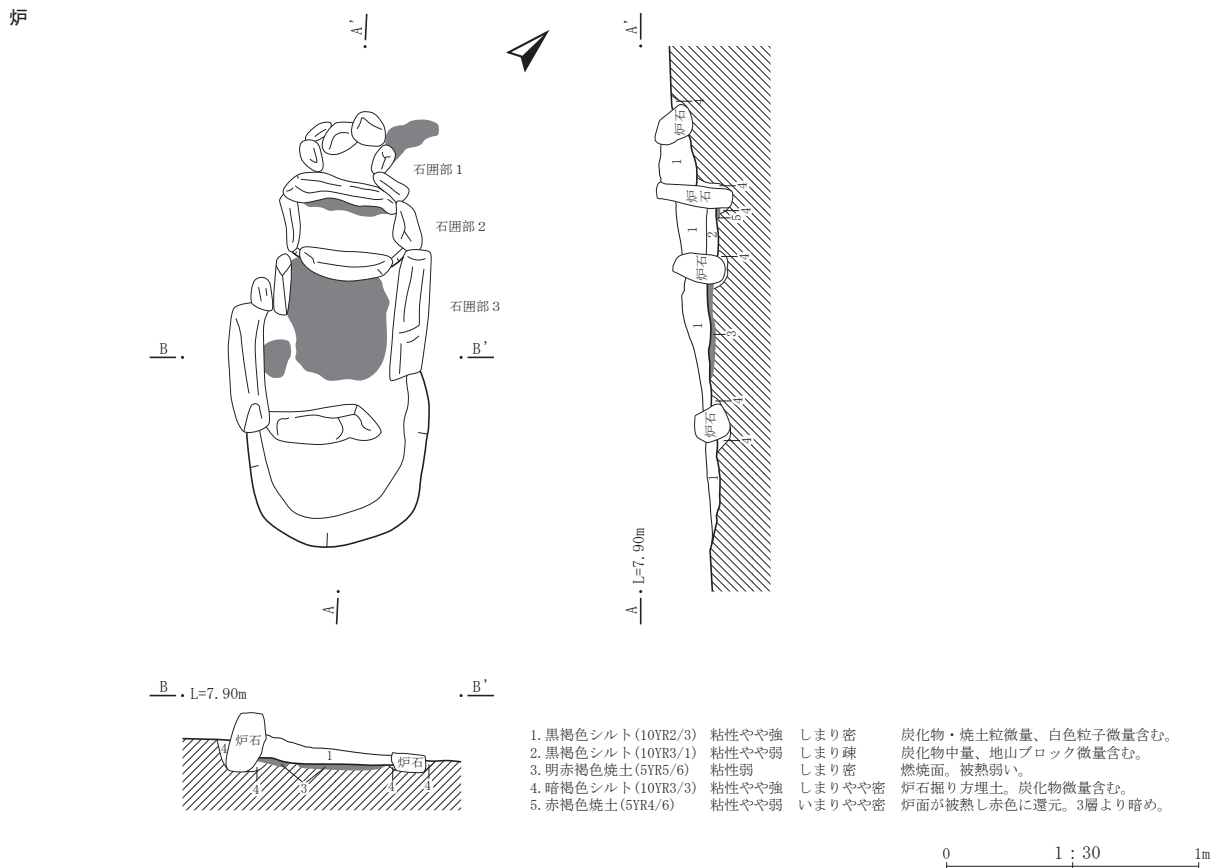
石囲部3は床面から11cm掘り込んで大きさが不揃いな礫を炉石とし、長方形に並べて、構築している。燃焼面は40×40cmの範囲に焼土が広がる。ただし被熱は弱く、淡い明赤褐色に還元する程度である。

炉の掘り方は明瞭ではない。したがって炉石は床面に差し込み、石囲部を構築したものと推測する。

前庭部は小さく、石囲部3と同規模で、石囲部3から延長して構築したようにも見える。また硬化面は認められない。

[附属施設] 柱穴10個を確認した。炉を囲むような配列で、いずれか支柱穴と考えられるが、壁から推測する住居跡そのものの平面形と比較すると、どれが支柱穴か判断できない。

[出土遺物] 床面から埋土下位、または附属施設から縄文土器6,589.6g、石器34点が出土している。上記の通り、本遺構は埋土のほとんどを消失しているため、出土遺物が少なく、また流れ込みにより混入した遺物が多い傾向がある。



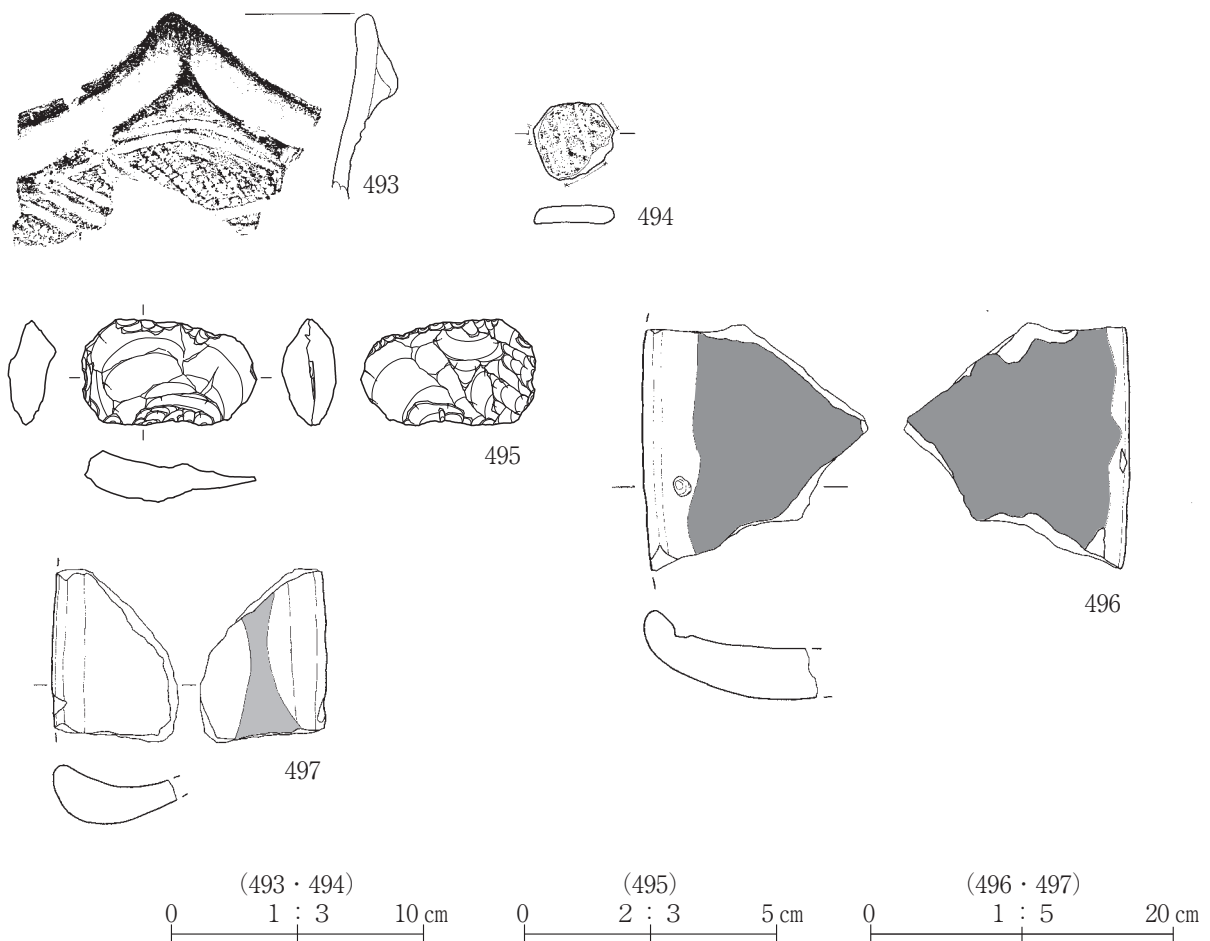
第114図 15号住居跡2

縄文土器 1 点を掲載した。本遺構からの出土土器は小片が多く、文様の分かるものはさらに少ない。掲載した 493 はその数少ない文様の分かる土器片である。ただし 493 は深鉢の口縁部片であるが、大木 8a 式新段階に比定されるものであり、炉の形態から推測する、本遺構の時期とは異なるものである。

埋土下位から土製品 1 点 (494) が出土している。円盤形土製品である。深鉢の胴部片を転用しているが、地文以外に沈線が見受けられる。わずかに欠損するが、円形に整形されたものと推測する。

石器は 3 点掲載した。495 は楔形石器で、1 方向のみ打撃が加えられている I 類である。496・497 は石皿。どちらも II 類で、縁辺が整形されている。496 は両面で使用面が確認できたが、片面 (外側の方) は整形時の研磨痕の可能性もある。また縁辺には凹痕が 1 箇所見受けられる。497 は片面のみに磨面に見受けられる。ただし外側の面なので、使用面ではなく、整形時の研磨痕の可能性が高い。また窪んだ痕跡は両面にあり、破損した後、砥石に転用している可能性がある。

[時期] 出土した土器 (493) は大木 8a 式新段階であるが、本遺構に伴われる炉が複式炉であるので、遺構の在り方から考えられる年代と出土土器の時代は符合しない。複式炉の形態は 11 号住居跡の複式炉に類似することから、本遺構は大木 9 式～大木 10 式の範疇と推定している。



第 115 図 15 号住居跡出土遺物

16号住居跡（第116・117図、写真図版20・77・263）

[位置・検出状況] 調査区北側、I B 7c、I B 7d グリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。調査の際、重複する2号住居跡との新旧関係を見誤って、時期が新しい本遺構の南壁及び、床面の一部を削平してしまったが、概ね第116図の点線で示した通りである。

[その他の遺構との重複] 2号、17号住居跡と重複する。本遺構が最も新しい。

[平面形] 不整な楕円形を呈する。

[規模] 400 × (357) m、深さ39cm

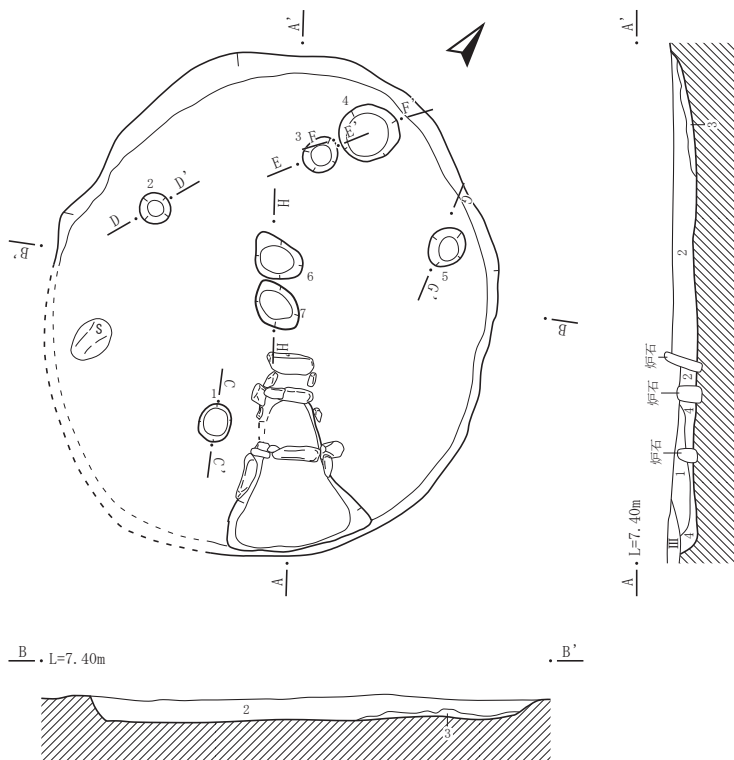
[埋土] 3層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。

[床面・壁] 炉を検出したⅥ層面を床面と判断した。ただし炉の周辺はまだⅤ層が残る。概ね平坦である。

壁は削平してしまった南側を除き、全周する。やや開き気味で立ち上がる。

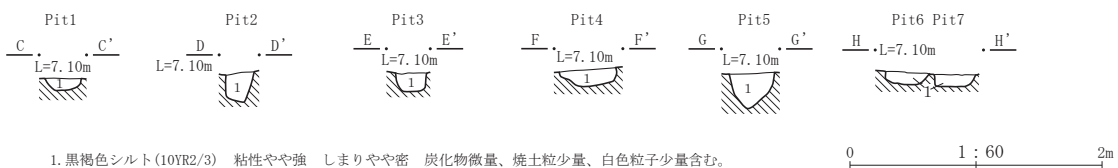
[炉] 複式炉である。石囲部2個と前庭部で構成される。規模は162 × 114cmである。石囲部については第117図に示した通り、便宜上「石囲部1・2」と呼称する。炉石はどちらも形状・大きさ共に不揃いな礫を素材とする。

石囲部1は炉石を主軸に対し横長の長方形に並べている。底面は床面とほぼ同じ高さであり、構築の際、掘り込んでいない。



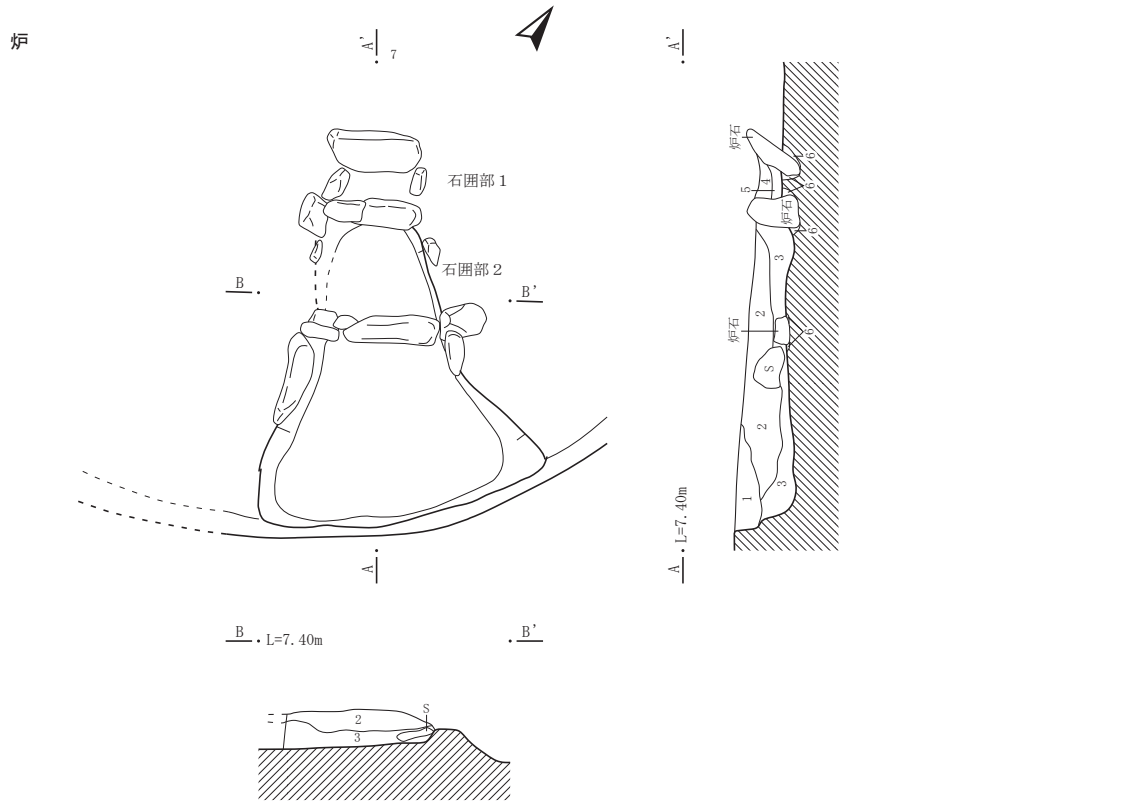
- | | | | |
|----------------------|-------|--------|--------------------------|
| 1. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性強 | しまりやや密 | 炭化物微量、焼土粒少量、白色粒子少量含む。 |
| 2. 黒褐色シルト (10YR2/2) | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物微量、白色粒子少量、地山ブロック少量含む。 |
| 3. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物微量、地山ブロック少量、白色粒子微量含む。 |
| 4. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性やや弱 | しまりやや疎 | 炉内埋土。炭化物微量含む。 |

柱穴



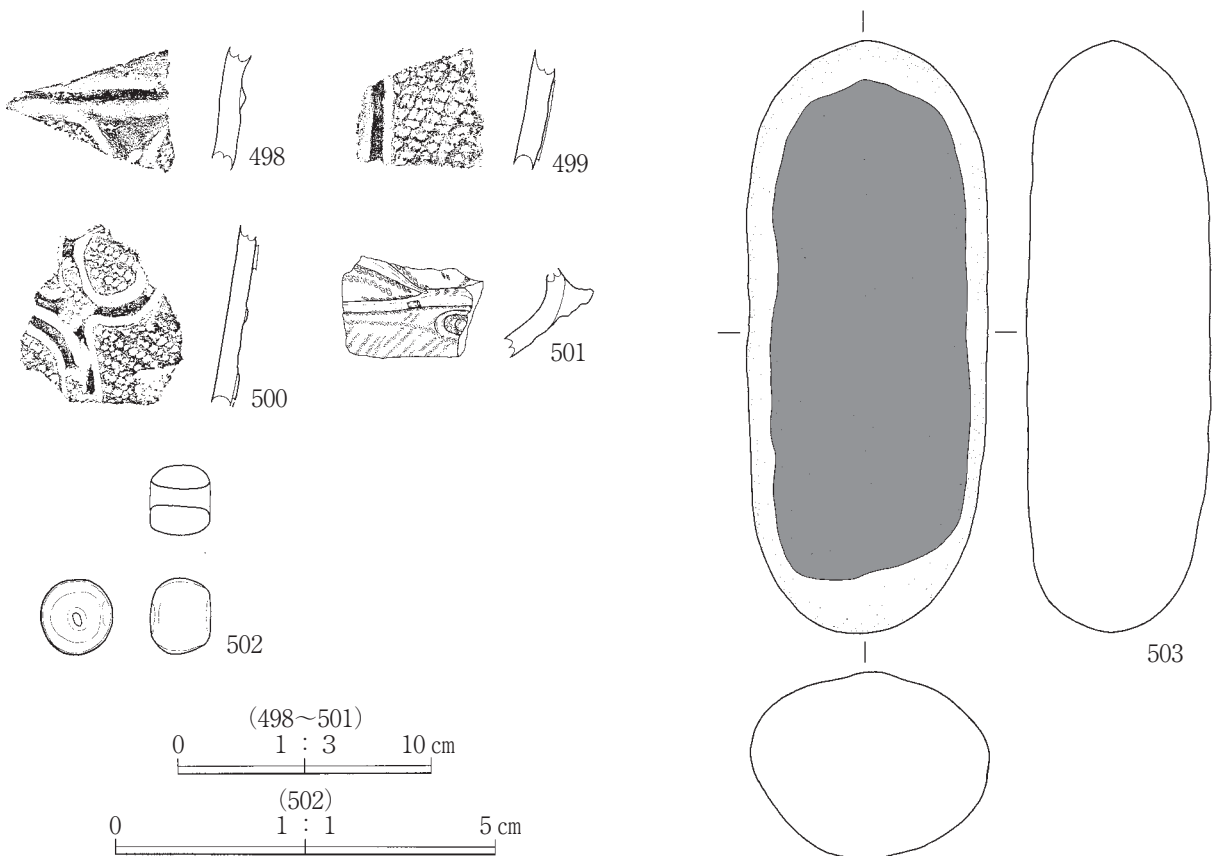
第116図 16号住居跡1

1 縄文時代



- | | | | |
|-----------------------|-------|--------|--------------------------|
| 1. 黒褐色シルト (10YR2/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子少量、地山ブロック少量含む。 |
| 2. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物・焼土粒微量、白色粒子少量含む。 |
| 3. 暗褐色シルト (10YR3/3) | 粘性強 | しまり密 | 炭化物微量、白色粒子中量含む。 |
| 4. 暗褐色シルト (7.5YR3/4) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、被熱によりわずかに赤色化。 |
| 5. 極暗褐色シルト (7.5YR2/3) | 粘性強 | しまり密 | 炭化物少量含む。 |
| 6. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炉石掘り方埋土。炭化物微量含む。 |

0 1 : 30 1m



第117図 16号住居跡2・出土遺物

石囲部2は概ね長方形を呈すると推測するが、主軸方向の炉石が両側とも抜き取られている。こちらの底面は床面から3cm掘り下げて構築されている。石囲部1・2共に燃焼面は見受けられず、炉の埋土に焼土粒が混じる程度である。

前庭部は台形を呈する。床面から4cm掘り下げ構築し、西側の一部に礫を設置している。硬化面は認められなかった。

[附属施設] 柱穴7個を確認した。ただし配列からは主本柱がどれであるかを推定できない。

[出土遺物] 埋土下位と炉内で縄文土器5,604.0g、石器13点出土している。本遺構は、周辺に位置する竪穴住居跡群のなかでは、比較的、埋土が残っている割に、出土遺物は著しく少ない。また縄文土器は小片が多く、時期も大木8a式古段階から大木9式新段階と幅が広い。

縄文土器は、文様の見受けられる土器片4点を掲載した。498は大木9式古段階の深鉢で、隆帯の下にわずかに縦位の楕円形区画が並んでいる。499・500は大木8b式新段階と推定する。501は大木8a式古段階の浅鉢で、他の3つよりもさらに古い。胴部へ張り出す突起が付き、縄文原体押圧文が施文される。

土製品は埋土下位から1点(502)出土している。土玉である。円柱状で中央に穿孔が施される。

石器は1点掲載した(503)。台石Ⅱ類としたもので、厚みのある棒状の礫を素材とし、片面のみに使用痕(磨痕)が見受けられる。石棒に類似するが、磨痕の在り方から台石と推測する。

[時期] 数少ない出土土器は時期幅があり、遺構の時期を推定する根拠に乏しい。検出した炉が複式炉であり、また重複する17号住居跡の時期から大木9式～大木10式の範疇と判断した。

17号住居跡(第118～122図、写真図版21・22・77・78・263)

[位置・検出状況] 調査区北側、IB7c、IB8c、IB7d、IB8d、IB7e、IB8eグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。南側の一部は後世の削平(?)によって消失している。

[その他の遺構との重複] 16号住居跡と重複し、本遺構の方が古い。

[平面形] 不整な楕円形を呈する。

[規模] (650) × (958) cm、深さ12cm

[埋土] 単層で黒褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。

[床面・壁] 炉を検出したⅥ層面を床面と判断した。概ね平坦である。

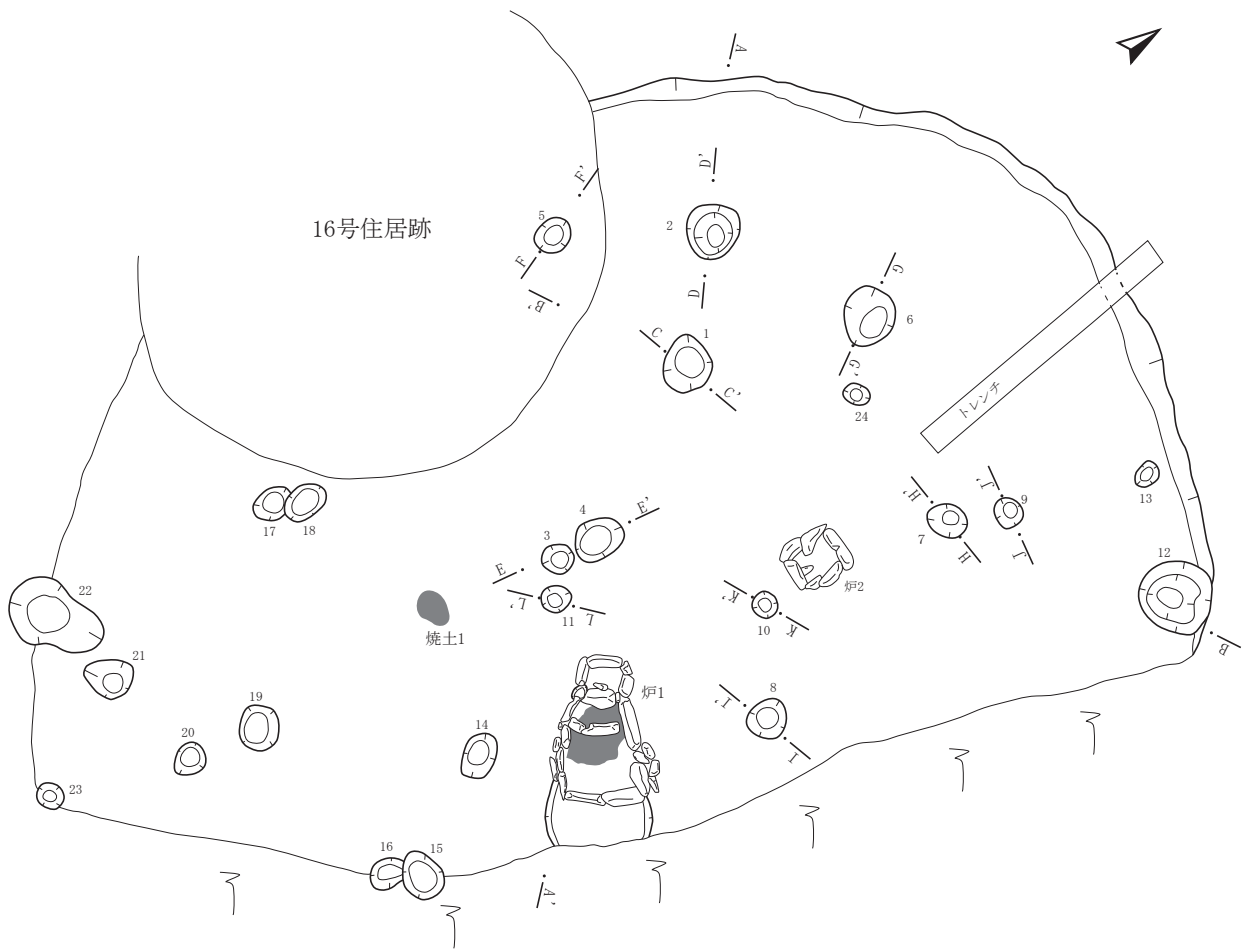
壁は北壁のみが残存する。わずかに開きながら立ち上がる。

[炉] 炉は2個検出した。1個は床面の南端に位置する(以下「炉1」)。もう1個は床面のほぼ中央に位置する小型の炉(以下、「炉2」)である。

炉1は複式炉である。規模(150) × 86cmで、石囲部2個と前庭部で構成される。前庭部は東側の一部が消失している。

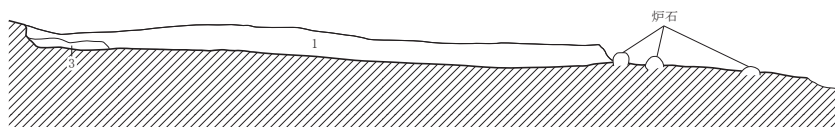
石囲部は第119図に示した通り、便器上「石囲部1・2」と呼称する。深さはそれぞれわずかに異なっており、石囲部1が床面から7cm、石囲部2は床面から3～8cm、前庭部は床面から13cm掘り下げて構築している。炉石は花崗岩や閃緑岩を素材とし、不整な方形に並べている。また石囲部2には中央、短軸方向に間仕切りと考える炉石が設置されている。この間仕切りを境に深さが異なるのが特徴であるが用途は不明である。燃焼面は石囲部2のみで確認した。間仕切りの炉石を境にして両側に広がるが、被熱は弱く、わずかに赤褐色に還元する。

炉2は石囲炉である。規模は50 × 46cmである。床面から4cm掘り下げて構築し、炉石を正方形に並べている。炉石には炉1と同様に花崗岩や閃緑岩を素材とし、大きさ、形状が不揃いである。焼



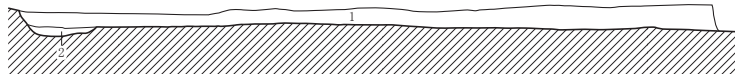
A · L=7.40m

A'



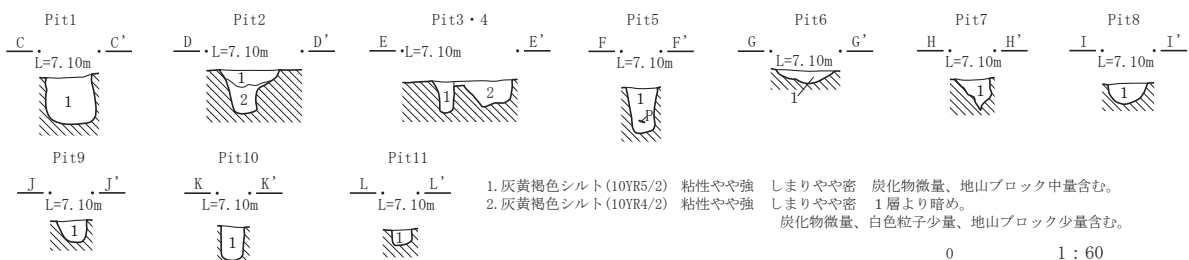
B · L=7.40m

B'



1. 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性やや強 しまり密 炭化物微量、白色粒子中量含む。
2. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) 粘性強 しまり密 炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。
3. 暗褐色シルト (10YR3/4) 粘性やや強 しまりやや密 炭化物微量、白色粒子少量、地山ブロック少量含む。

柱穴



1. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) 粘性やや強 しまりやや密 炭化物微量、地山ブロック中量含む。
2. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) 粘性やや強 しまりやや密 1層より暗め。炭化物微量、白色粒子少量、地山ブロック少量含む。

0 1 : 60 2m

第118図 17号住居跡1

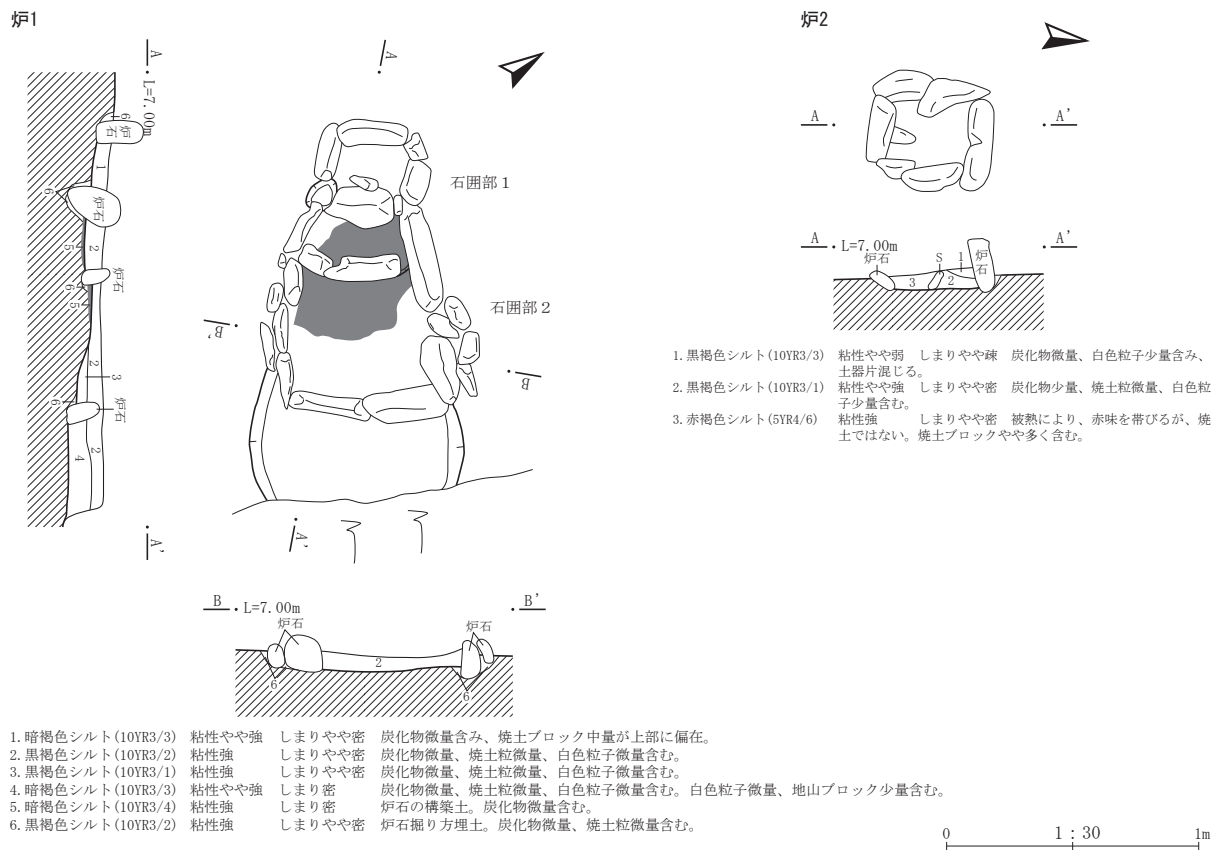
成面は見受けられず、炉の埋土にわずかに焼土粒が混じる程度である。

[附属施設] 柱穴 24 個を確認した。ただし配列からは主本柱がどれであるかを推定できない。また炉の南西側の床面に現地性の焼土（焼土 1）が見受けられる。断面を図示していないが、床面下約 3cm は被熱で還元している。この焼土の用途は不明である。

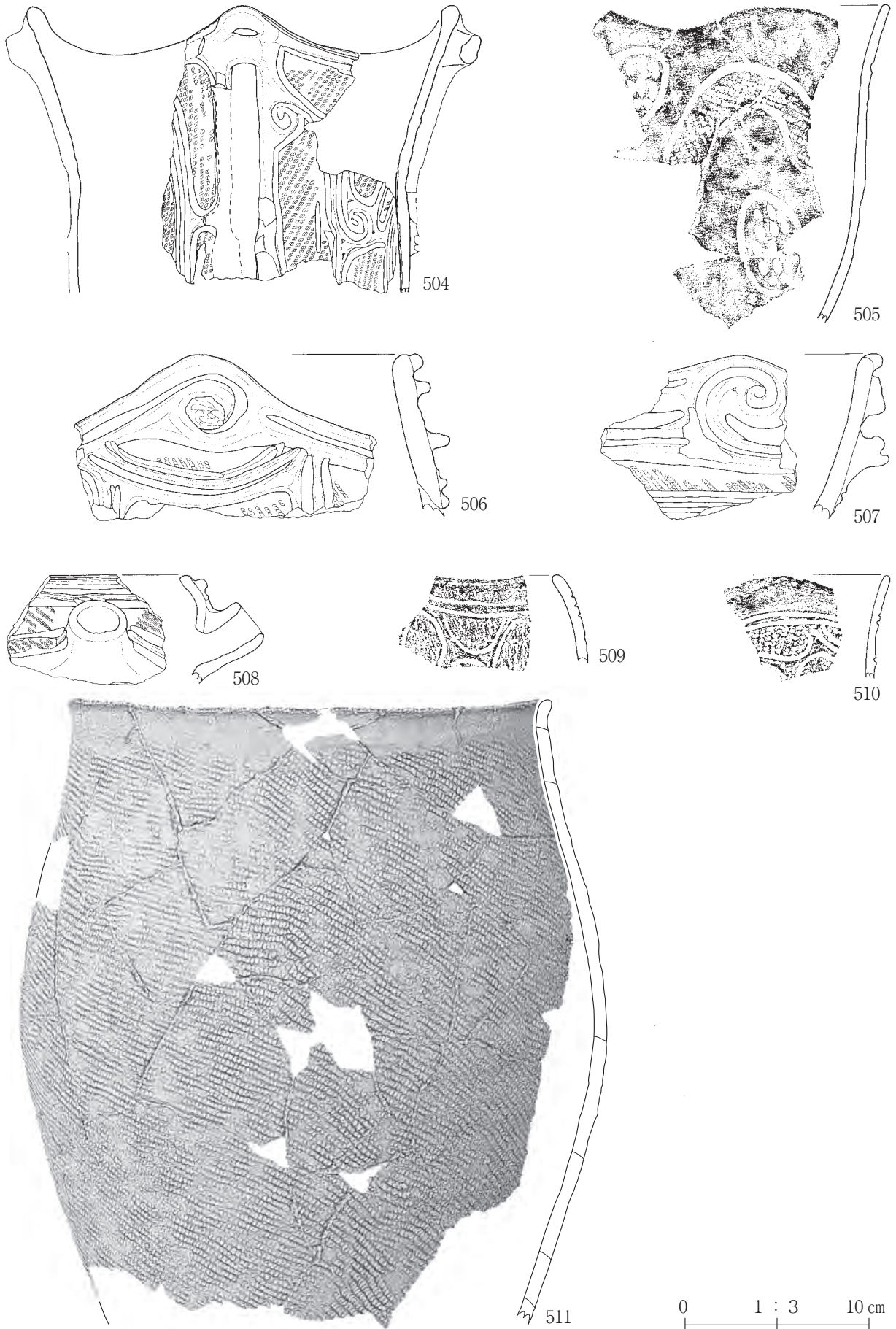
[出土遺物] 埋土上・下位、床面、附属施設から縄文土器 39,912.3g、石器 53 点が出土している。

本遺構は規模が大きい割に、埋土の残りが悪いいためか、他の住居跡と比べると、遺物の出土量は多くない。また出土した土器の時期を見ても、大木 8a 式新段階から大木 9 式新段階と時期幅が広いので、流れ込みにより混入した遺物が多いと考えられる。

縄文土器は 15 点掲載した。504 は大木 9 式古段階に比定する深鉢の大型の破片である。4 単位の波状口縁を呈し、波頂部から縦位に把手が付く。505 は大木 10 式古段階の破片である。胴部に曲線状区画が描かれ、区画内に、縄文が押圧文が充填される。506・507 は大木 8a 式新段階で、508 は時期不明（大木 10 式中～新段階）の注口土器である。509・510 は大木 8b 式新段階～大木 9 式古段階の深鉢である。このようにばらつきがあるが、最もまとまって出土しているのは大木 8a 新段階（512～518）である。512 は深鉢 A 類で、口縁部と胴部に同じ地文を施文し、口縁部のみ隆帯が付く。513 は深鉢 B 類で、口縁部には幅広の隆帯に沈線で渦巻き文を描き、胴部には 2～3 条の沈線による波状文などが描かれている。514～517 は深鉢の口縁部片で、概ね同様な文様が施文されている。518 は縄文原体押圧文が見受けられることから、大木 8a 式古段階に比定される。

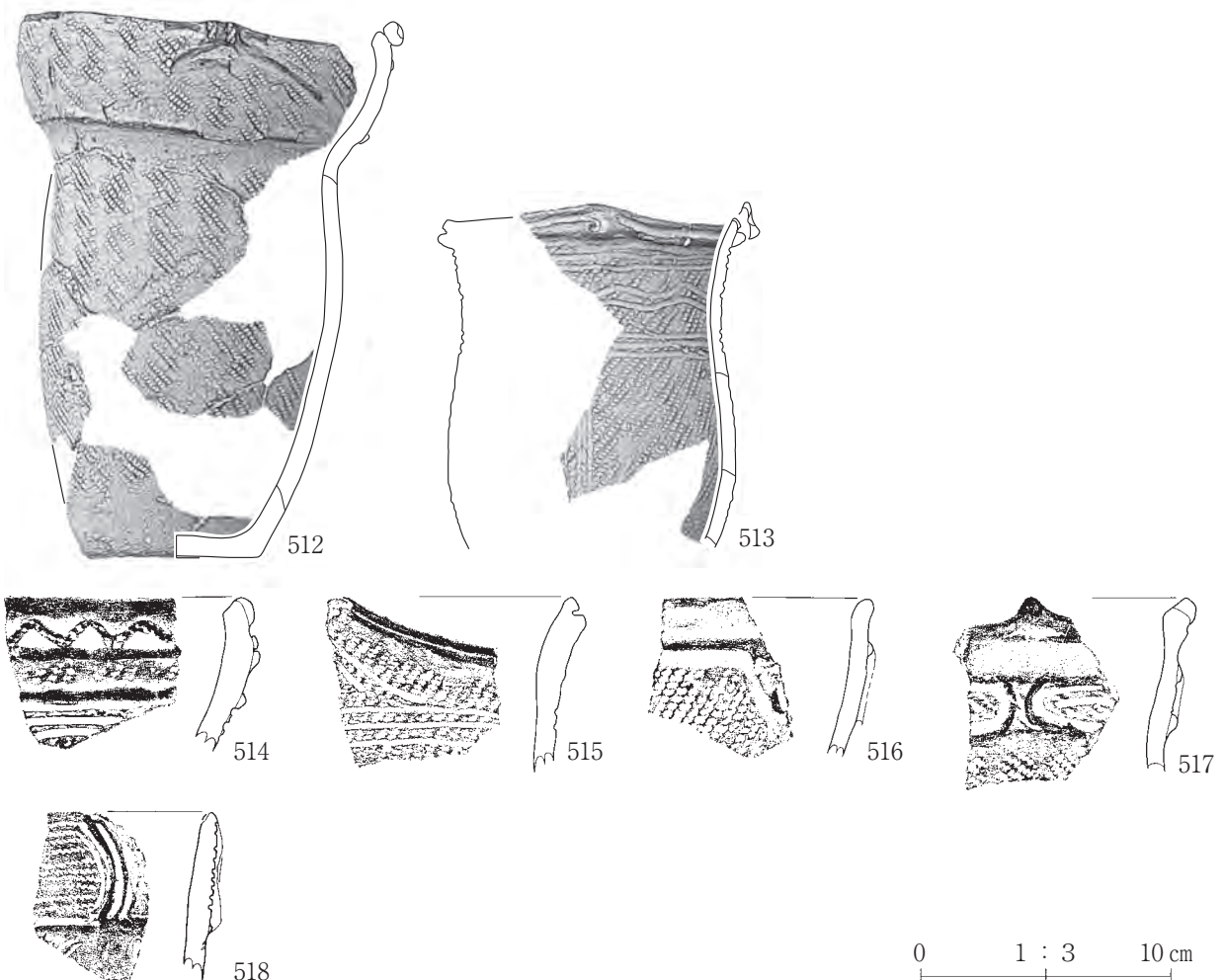


第 119 図 17 号住居跡 2

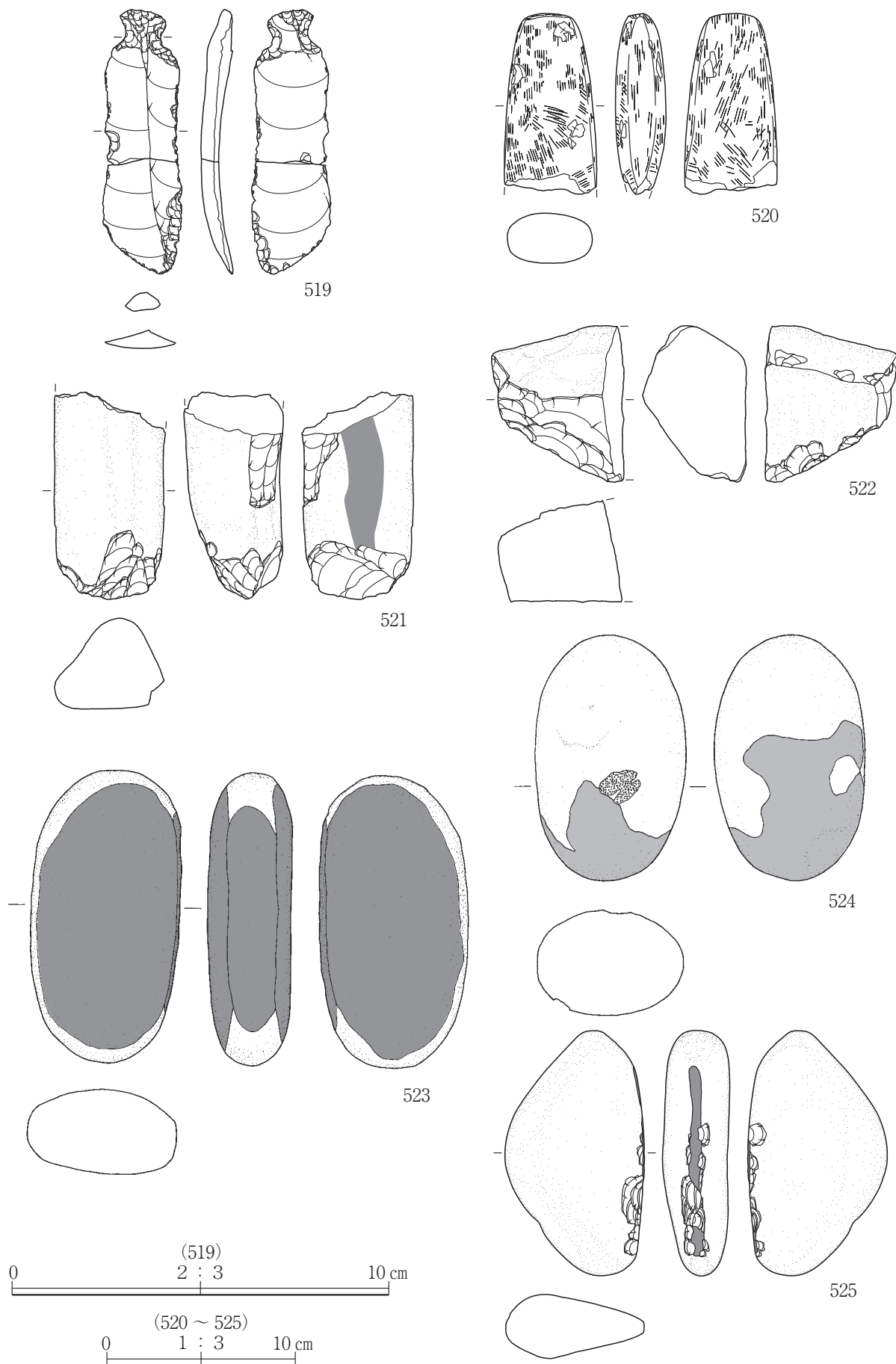


第 120 図 17 号住居跡出土遺物 1

石器は7点掲載した。519は石匙でⅠ類である。刃部を作出するための二次加工が縁辺の一部にしか及んでいない点の特徴である。520は磨製石斧で刃部が欠損する。全体的に研磨の痕跡が残る。521・522は礫器である。521は棒状の礫を素材とし、片側の先端には打撃が加えられ、剥離が全周に及んでいる。また被熱痕が見受けられる。522は1/2ほど欠損する。縁辺の一部に打撃を加えた痕跡がある。523・524は敲磨器類で、523はⅧ類とした。偏平な両面と側縁の一部に磨痕が見受けられる。一見すると特殊磨石にも見えるが、側縁の磨り面周辺に打撃を加えてない。524はⅢ類で、厚みのある楕円形の礫を素材とし、中央に敲打痕が見受けられる。また端部に被熱の痕跡が見受けられる。525は特殊磨石である。偏平な三角形の礫を素材とし、最も広い縁辺に磨痕が見受けられる。
 [時期] 出土した土器のうち本遺構に伴われる炉が複式炉であることを考え、504・505を基準とし大木9式新段階～大木10式の範疇と判断した。



第121図 17号住居跡出土遺物2



第 122 図 17 号住居跡出土遺物 3

18号住居跡（第123・124図、写真図版22・78）

[位置・検出状況] 調査区中央、I B 6g、I B 6hグリッドに位置する。

1号住居跡の精査中に、1号住居跡の炉のほぼ直上で別の炉を検出した。この炉の検出面は1号住居跡の床面にはまだ達していないので、別の竪穴住居跡と判断した。炉を検出した1号住居跡の検出面が本遺構の床面となる。ただし、その面で本遺構の柱穴や壁溝は見受けられず、また壁の立ち上がりも確認していない。したがって本遺構は炉のみしか確認できていない遺構である。

[その他の遺構との重複] 1号住居跡と重複する。本遺構の方が新しい。

[平面形] 不明である。

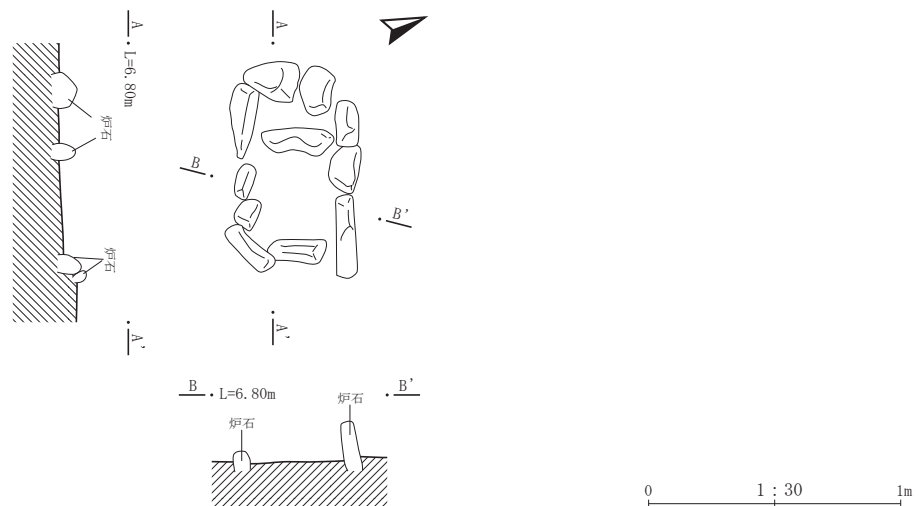
[規模] 不明である。

[埋土] 不明である。

[床面・壁] 不明である。

[炉] 石囲炉である。規模85×52cmで、方形を呈する。炉石は全周する。形態や大きさが不揃いな閃緑岩や花崗岩を床面に差し込むように設置している。また炉内のほぼ中央、短軸方向に間仕切りの炉石が設置されている。炉内に燃焼面はなく、炉の埋土は断面で確認していないが、掘り下げの段階で炉内に焼土は残存していなかった。

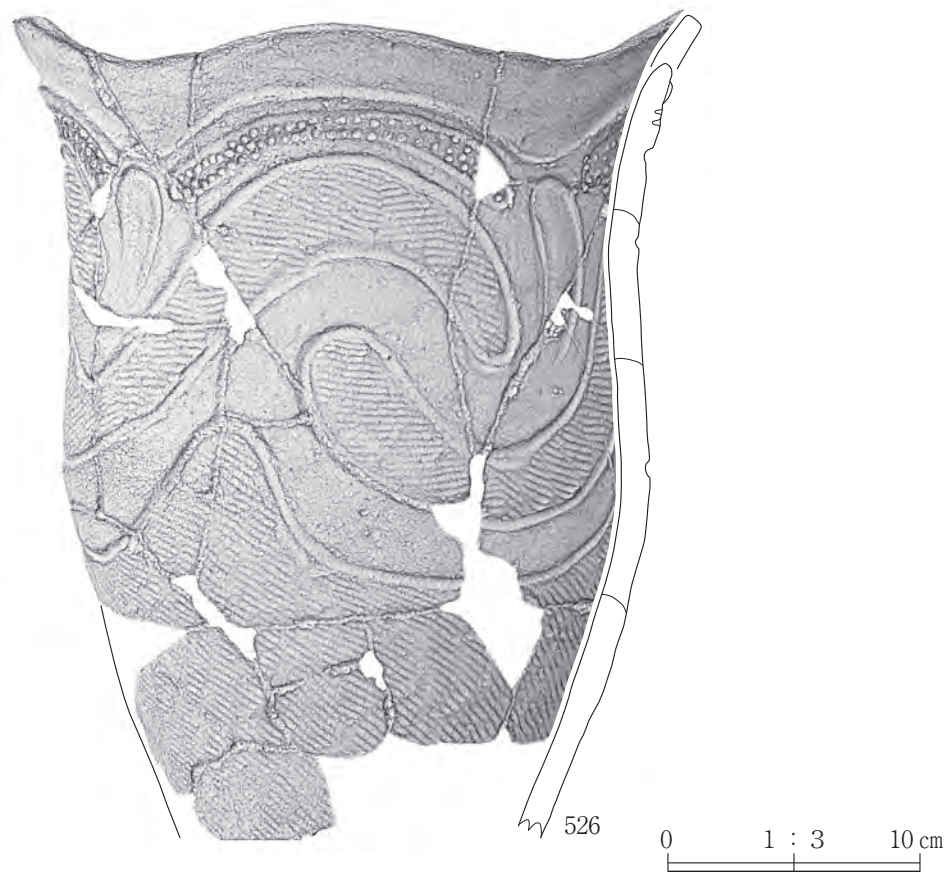
[附属施設] 不明である。



第123図 18号住居跡

[出土遺物] 炉の直上から縄文土器 1 点 (526) が出土した。大木 10 式古段階に比定される大型の深鉢である。胴部下半から底面が欠損する。4 単位の波状口縁を呈し、口縁部から胴部上半には横位に曲線状区画が巡り、胴部下半は地文のみが施文される。

[時期] 出土した土器 (526) の年代から、大木 10 式古段階と判断した。



第 124 図 18 号住居跡出土遺物

19号住居跡（第125図、写真図版22）

[位置・検出状況] 調査区中央、I B 5i グリッドに位置する。VI層上面で検出した。本遺構は炉のみ検出した。炉の周辺について何度か遺構検出したが、床面や柱穴の痕跡がなく、炉以外は不明である。炉のある場所はわずかに傾斜しており、床面や附属施設も含め、消失している可能性がある。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不明である。

[規模] 不明である。

[埋土] 不明である。

[床面・壁] 不明である。

[炉] 石囲炉である。規模は80×76cmを測る。扁平な閃緑岩や花崗岩を炉石として、不整な正方形に並べている。

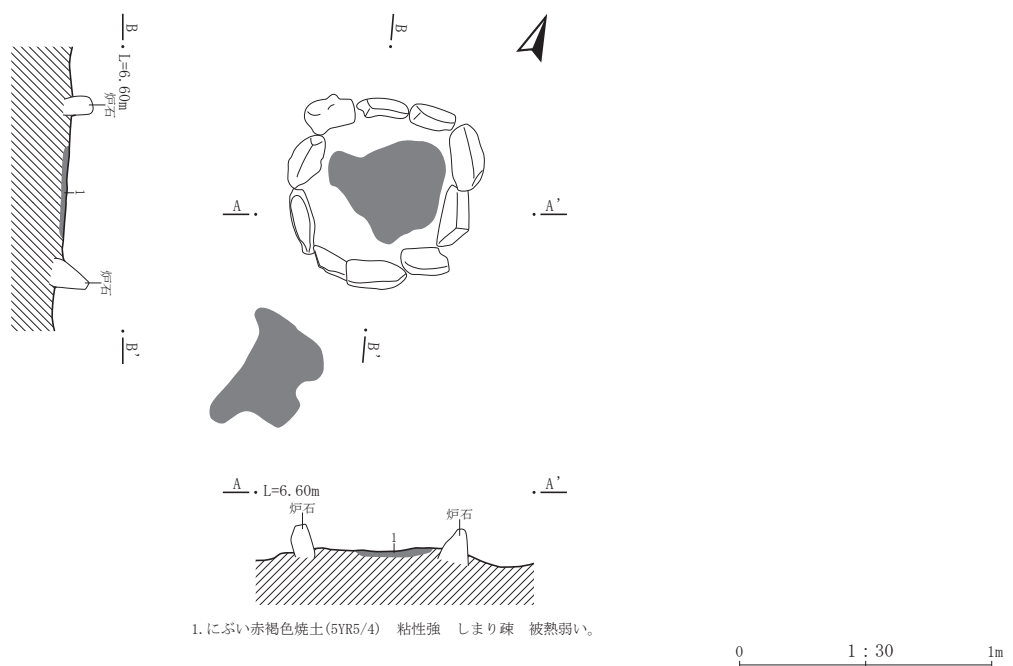
炉石は床面に差し込むように設置している。炉内の深さは床面と同じ高さであると考え、床面を掘りすぎている可能性もある。炉内のほぼ中央に燃焼面が見受けられる。規模は45×40cmで、被熱は弱く、にぶい赤褐色に還元する程度である。

また炉外の南側にも同規模の現地性の焼土があり、被熱の度合いは石囲炉とほぼ同じであった。ただし、この焼土周辺には炉石の抜き取り痕は見受けられないので、石囲炉の造り替えなどではないと考える。

[附属施設] 不明である。

[出土遺物] なし。

[時期] 出土遺物がないので、不明であるが、隣接する1号住居跡の石囲炉と規模・形態が類似しているため、その点からの推測で、大木8a式新段階に比定される可能性が高い。



第125図 19号住居跡

20号住居跡（第126・127図、写真図版23・78・79・263）

[位置・検出状況] 調査区北側、I B 5c、I B 6c、I B 5d、I B 6d、I B 5e グリッドに位置する。VI層上面で検出した。2号、13号住居跡に挟まれた範囲でV層土に類似する土の広がりを確認し、改めて掘り下げたところ、小型の炉を検出し、竪穴住居跡と判断した。なお本遺構は南東側を2号住居跡に壊され、また北東側は後世の削平により消失しており、全体の約1/2ほどしか確認できなかった。また西側については、壁の一部は13号住居跡に壊されている。ただし、壁の上部のみなので、第126図では13号住居跡に壊された状態は図示していない。

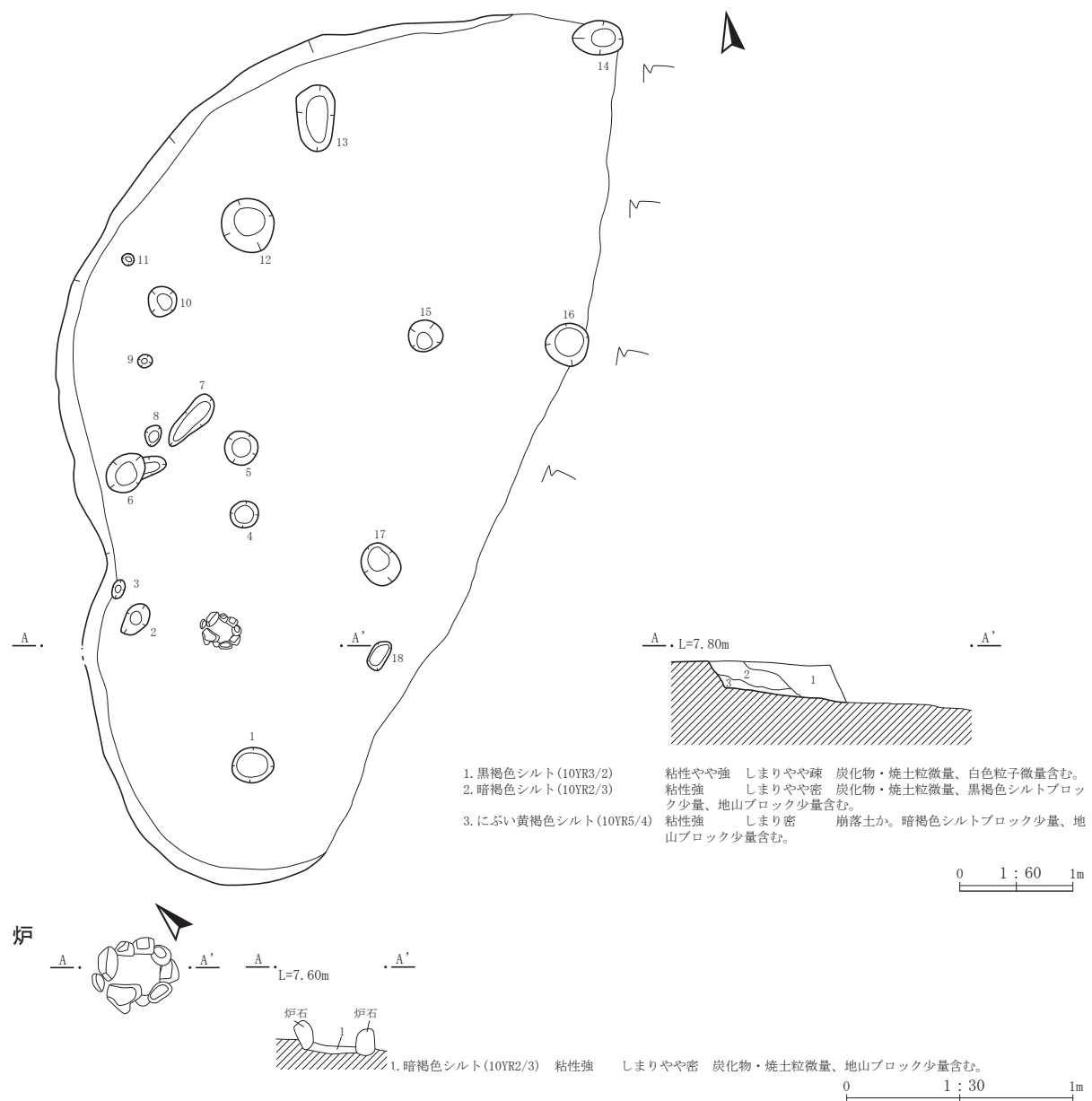
[その他の遺構との重複] 2号、13号住居跡と重複し、本遺構が最も古い。

[平面形] 残存する範囲から不整な楕円形と推定する

[規模] 長軸802×(440)m、深さ30cm

[埋土] 3層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。

[床面・壁] 炉を検出したVI層面を床面と判断した。概ね平坦である。壁は西壁が残存する。外へと



第126図 20号住居跡

広がりながら立ち上がる。

[炉] 石囲炉である。規模は $36 \times 32\text{cm}$ を測り、大きさ、形状が不揃いな礫を炉石として楕円形に設置し、床面から 5cm 掘り込んで構築している。炉石は床面に差し込むように設置している。炉内に燃焼面はなく、炉内の埋土にも焼土粒は混入しなかった。炉は小型であり、また火を焚いた痕跡がないことから、炉の形態は呈しているが、用途は不明である。したがって他の竪穴住居跡に伴われるような炉は別にあったものと推測され、2号住居跡ないし、後世の削平によって消失した可能性が高い。

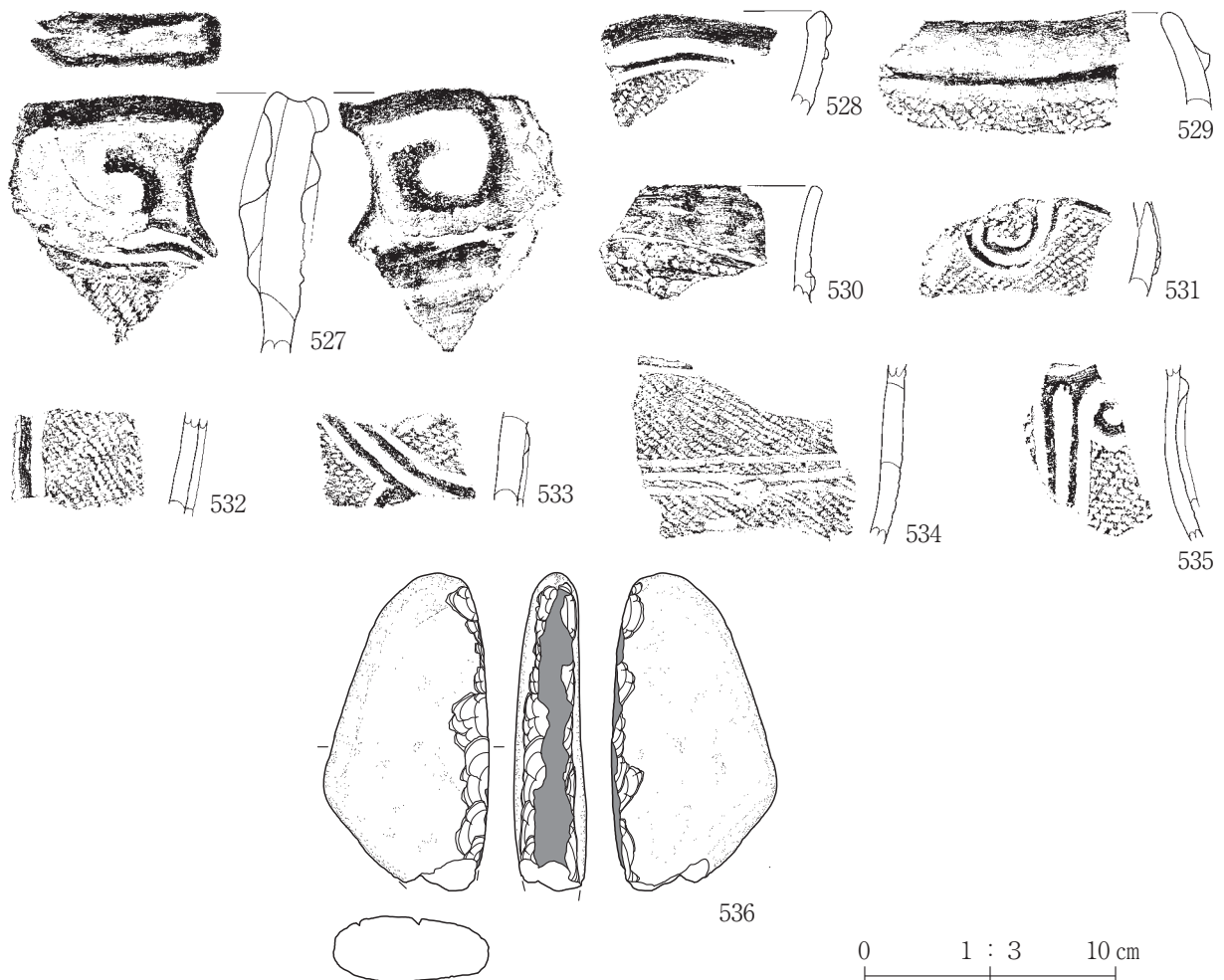
[附属施設] 柱穴 18 個を確認した。配列からは主柱穴配列は推定できない。

[出土遺物] 埋土および床面、附属施設から縄文土器 4,520.6g、石器 17 点が出土している。本遺構は比較的大きいが、埋土を本遺構と認識せずに掘り下げたためか、本遺構に伴う遺物が少ない。また埋土中から出土した縄文土器は小片が多く、時期も大木 8a 式新段階から大木 8b 式新段階までと幅が広い。

縄文土器 9 点を掲載した。527～529 は大木 8a 式新段階の深鉢である。527 は口縁部片で、内外ともに隆帯による渦巻き文が付く。530～535 は大木 8b 式新段階の深鉢である。

石器は 1 点掲載した (536)。特殊磨石で端部を欠損する。三角形の礫を素材とし、長い縁辺の両側面が剥離し、磨った痕跡が見受けられる。

[時期] 出土土器の年代が幅広く、また炉の形態では判断ができない。重複する 2号住居跡や 13号住居跡より古いことから考えて、大木 8a 式新段階～大木 8b 式新段階の範疇とする。



第 127 図 20 号住居跡出土遺物

21号住居跡（第128・129図、写真図版24・79・263・264）

[位置・検出状況] 調査区南側、IC8i、IC9i、IC8j、IC9jグリッドに位置する。

南側調査区に広がる沢跡について、埋土の堆積様相を知るためにトレンチを入れたところ、その底面（VI層上面）で炉を検出し、検出した炉を中心にして、約4×3.5m四方に掘り広げたところ、柱穴、壁溝を確認したので竪穴住居跡と判断した。また広げた範囲の壁で土層観察を行ったが、本住居跡は、壁に相当する立ち上がりは見受けられない。考えられるとすれば、沢跡が形成（または埋没）の際、本遺構の壁も壊された可能性がある。ただし、壁溝や柱穴が確認できたので本遺構の範囲は概ね把握できる。

なお本遺構は確認調査範囲内にあるので、遺構確認のため、上述の範囲のみ掘り下げたにすぎず、壁溝などについては、すべてを検出したわけではない。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 円形である。

[規模] (406) × (400) cm、深さ不明。

[埋土] 不明である。

[床面・壁] 炉を検出したVI層面を床面と推定した。概ね平坦である。壁は残存しない。

[炉] 複式炉と推定される。ただし2個の石囲部のみ検出し、前庭部は確認できなかった。2個の炉石は第128図に示した通り、便宜上「石囲部1・2」と呼称する。

炉の規模は94×55cmで、大きさの不規則な閃緑岩や花崗岩を炉石とし、方形に並べている。設置に際しては炉石よりもわずかに広く掘り、炉石を設置する。また炉石掘り方の埋土は灰黄褐色シルト（4層）である。

燃焼面は石囲部1の底面のみで確認した。また石囲部2では南端の炉石周辺で焼土の広がりを確認した。どちらも被熱は弱く、わずかに赤褐色に還元するのみである。

[附属施設] 柱穴を21個確認した。柱穴が密集的に分布する箇所があり、その点から4本柱であろうと推測する。

また壁溝が1条巡る。上記の通り、全ては確認していないが、おそらく全周するものと推測する。

[出土遺物] 埋土および床面、炉内から縄文土器7,208.8g、石器16点が出土している。厳密に本遺構の埋土は消失していると考えられるので（第4表「埋土上位」、「埋土下位」は掘り下げる際、遺構の範囲内から出土した遺物である）、本遺構に伴う遺物は少ない。床面周辺から出土した遺物については、本遺構に伴うと判断したが、縄文土器は小片が多く、また大木8b式新段階から大木9式古段階、また大洞BC～C1式とバラつきがある。本遺構の床面上に堆積する土層は、沢跡の埋土であり、そのため中期から後晩期の遺物が混入するといえる。また本遺構の炉内からは時期の判断できる遺物が出土していない。

縄文土器8点掲載した。537・538は大木9式古段階である。537には隆帯による渦巻き文が付く。539は大木8b式新段階と推測する。540・541は粗製の深鉢である。本遺構の炉の形態からみて、これらの土器は本遺構に伴われる可能性が高い。一方、542～544は縄文時代晩期大洞BC式に比定される。542・543は鉢、544は壺である。

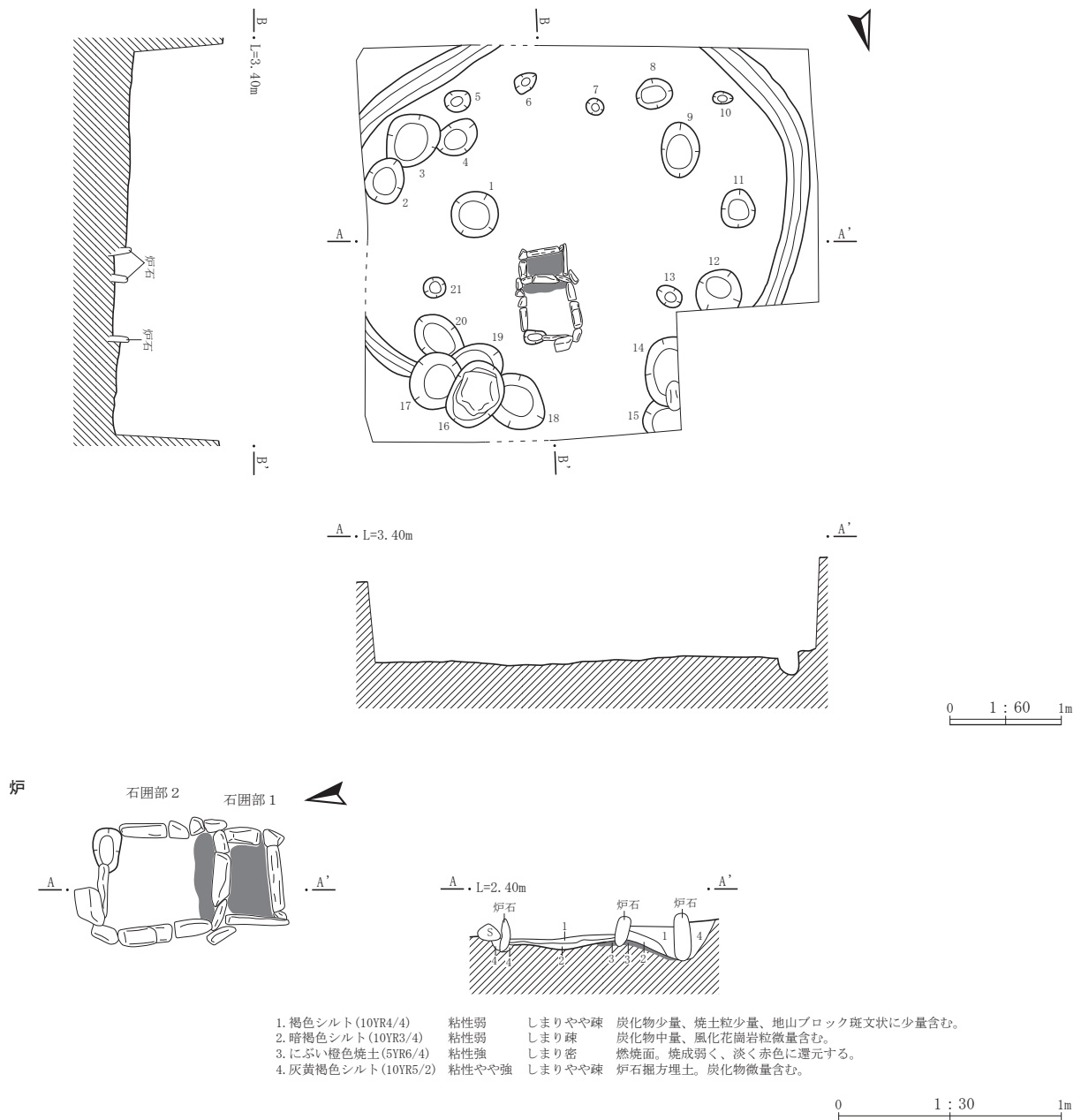
土製品は埋土上位から3点出土しており、円盤形土製品1点（545）を掲載した。端部が欠損するが、円形に整形されている。

石器は2点掲載した。546は砥石である。側面は全周欠損している。石皿の欠損したものを転用したと考える。一面のみであるが、研溝や研磨の痕跡が著しい。547は石核である。立方形の礫を素材

とし、一方向から幾度も打撃を加えた痕跡が見受けられる。また自然面が全体の1/2ほど残っている。

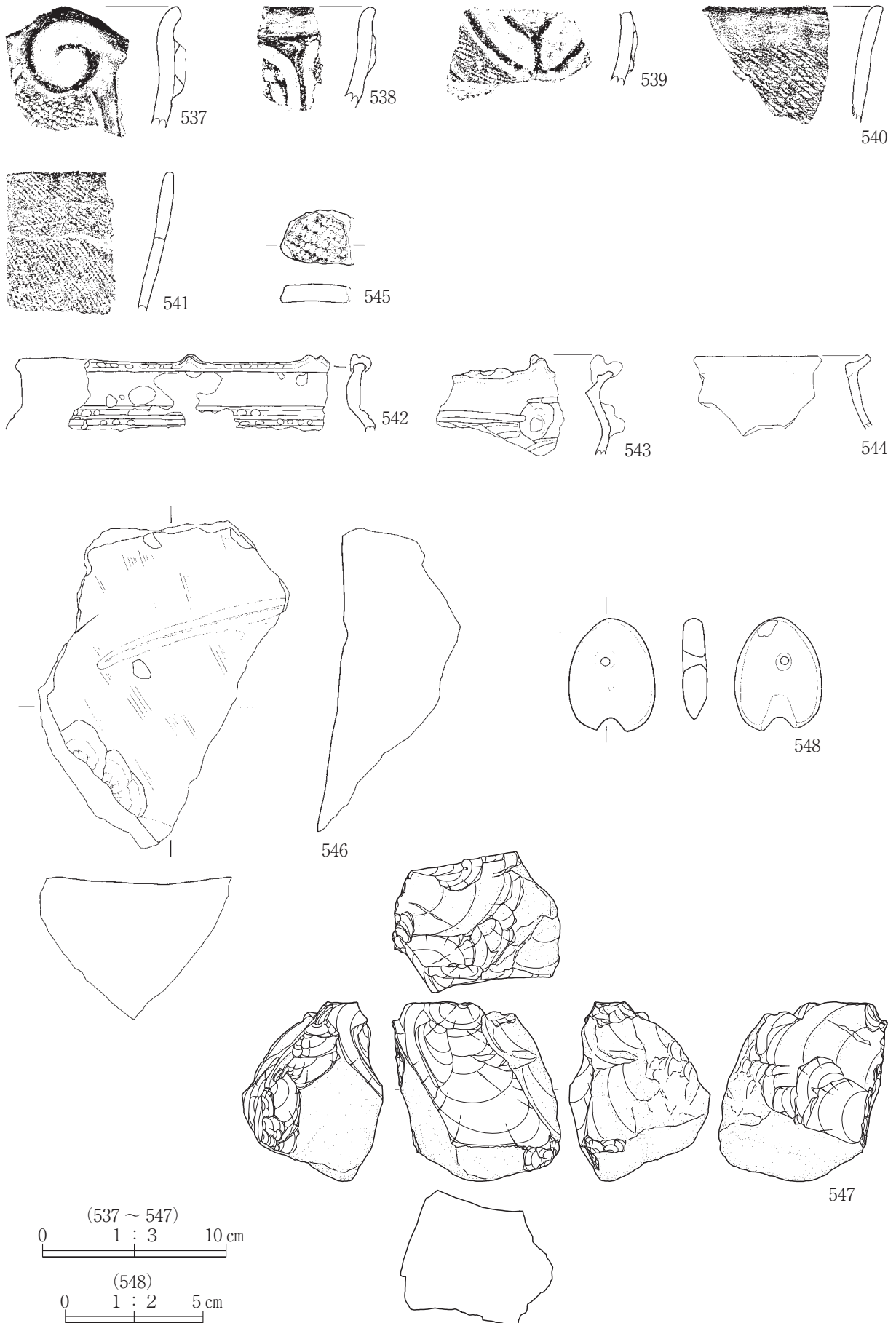
石製品は1点(548)掲載した。滑石製の垂飾品である。楕円形を呈し、片側はV字状に切り込まれている。ほぼ中央が穿孔されている。

[時期] 時期の根拠となる出土土器がなく、詳細な年代は不明である。検出した炉の形態と出土した縄文土器のうち537～539を根拠とすると、大木8b式新段階～大木9式古段階の範疇と推測する。



第128図 21号住居跡

1 縄文時代



第 129 図 21 号住居跡出土遺物

22号住居跡（第130・131図、写真図版25・79・264）

[位置・検出状況] 調査区南端、ⅡD2h、ⅡD3h、ⅡD2i、ⅡD3iグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。本遺構は確認調査範囲に位置しており、遺構プランを確認し、また長軸、短軸に入れたトレンチで土層を観察したのみである。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 検出した遺構プランから不整な楕円形と推定する。 [規模] 480×296cm、深さ36cm

[埋土] 3層からなる。黒～暗褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。

[床面・壁] Ⅵ層面を床面と推定した。概ね平坦である。壁はトレンチでのみ確認した。おそらく全周するものと推定する。大きく外へと広がりながら立ち上がる。

[炉] 確認できなかった。

[出土遺物] 掘り下げたトレンチ分のみであるが、埋土から縄文土器が11,772.7g、石器43点が出土している。

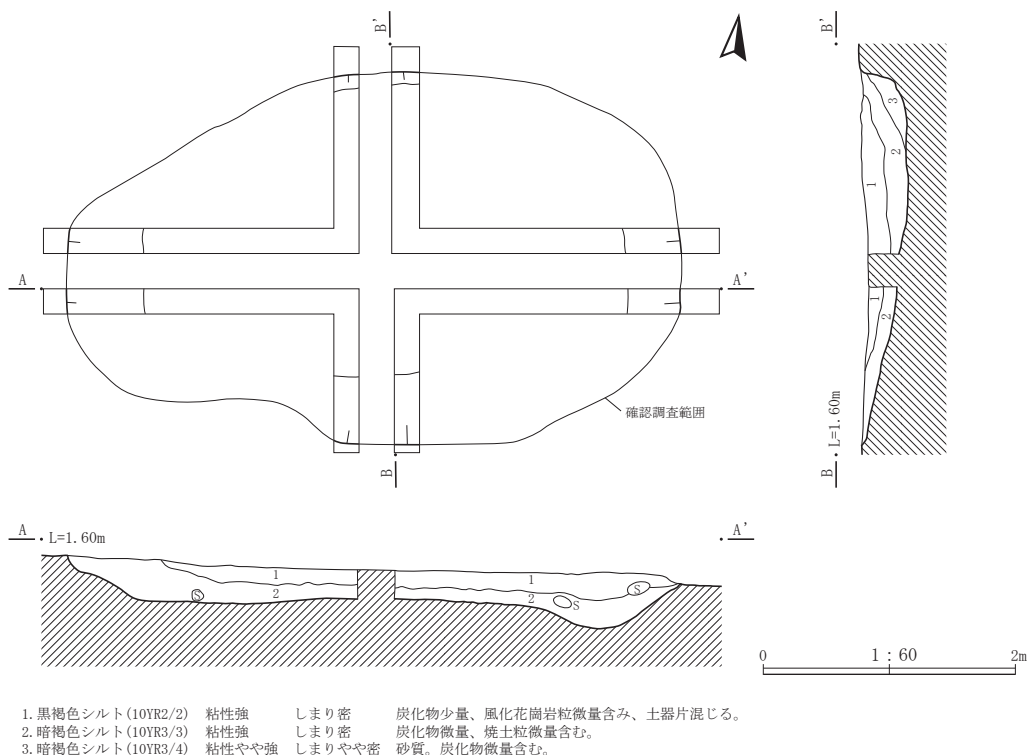
縄文土器は12点掲載した。549～553は縄文時代後期中葉前半の深鉢で、いずれも縄文を地文とし、集合沈線が施文される。549は大型の波状口縁を呈する。550は波状口縁の波頂部に団扇状の突起が付く。554は壺の口縁部と推定する。縦位の異方向羽状縄文が施文される。555・557・558は帯縄文が施文される深鉢で、縄文時代後期前葉後半に比定される。556・560は注口土器である

土製品は埋土上位から円盤形土製品1点(561)が出土している。深鉢の胴部片の転用であり、縄文と沈線が見受けられる。円形に整形される。

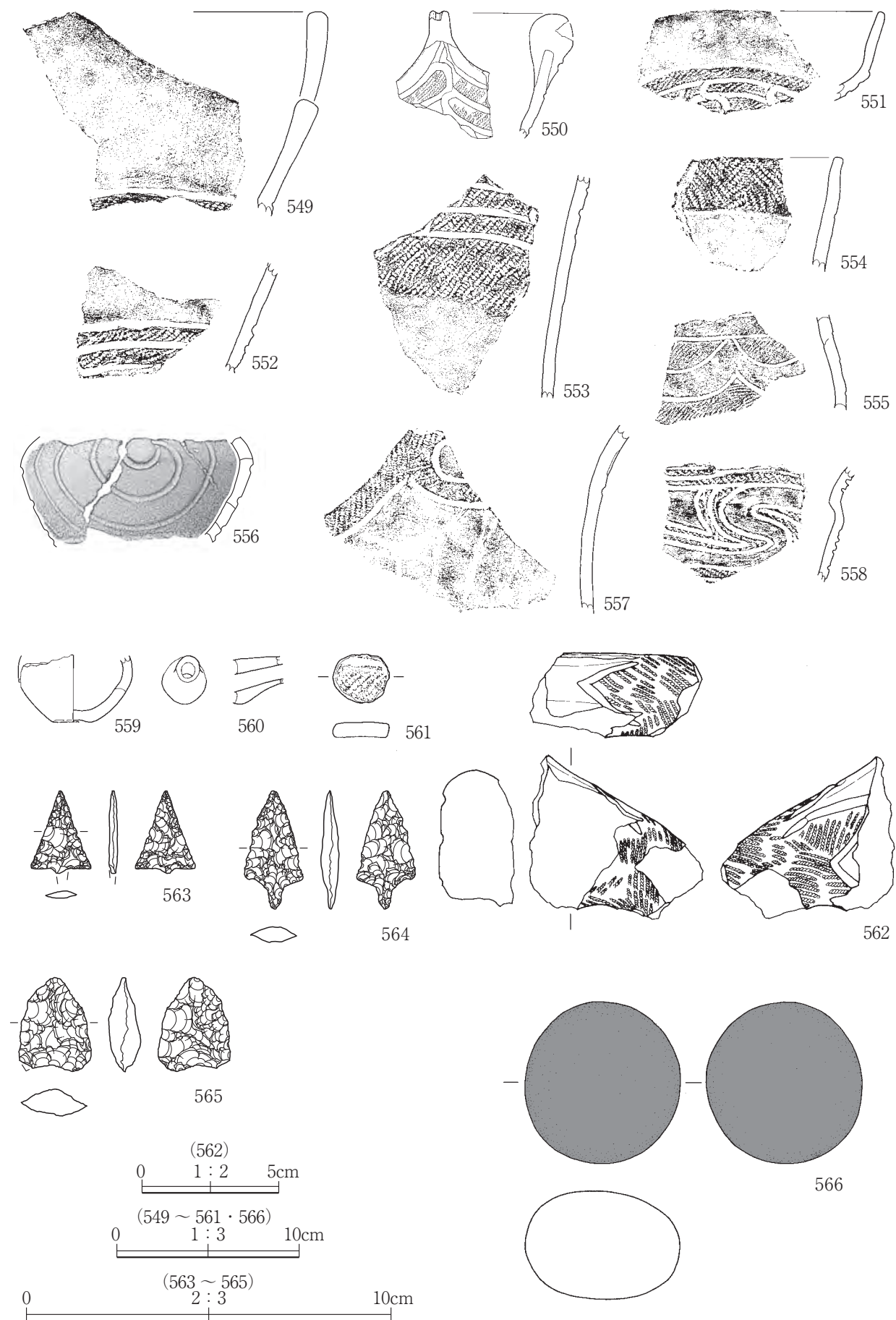
また同じく埋土上位から土偶1点(562)が出土している。左肩部分の破片で縄文と沈線で文様を描く。

石器は4点掲載した。563～565は石鏃である。563はⅣ類で基部を欠損する。564はⅤ類で二次加工がやや粗雑であるのが特徴である。565はⅢ類ともとらえられるが、失敗品とした。566は敲磨器類Ⅰ類である。厚みのある円形の礫を素材とし、全面に磨痕が見受けられる。

[時期] 出土土器から縄文時代後期中葉前半と判断した。



第130図 22号住居跡



第 131 図 22 号住居跡出土遺物

23号住居跡（第132～135図、写真図版25・80・81・264）

[位置・検出状況] 調査区南側、II C 4j、II C 5j、II D 4a、II D 5a グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な楕円形を呈する。

[規模] 長軸 480 × 424m・深さ 96cm

[埋土] 32層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックが混入する。

[床面・壁] VI層面を床面と判断した。概ね平坦であるが部分的に歪である。壁は全周する。直立気味である。

[炉] なし。

[附属施設] なし。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 30,809.7g、石器 102点が出土している。特に縄文土器は多いが、そのほとんどは埋土上位から出土している。

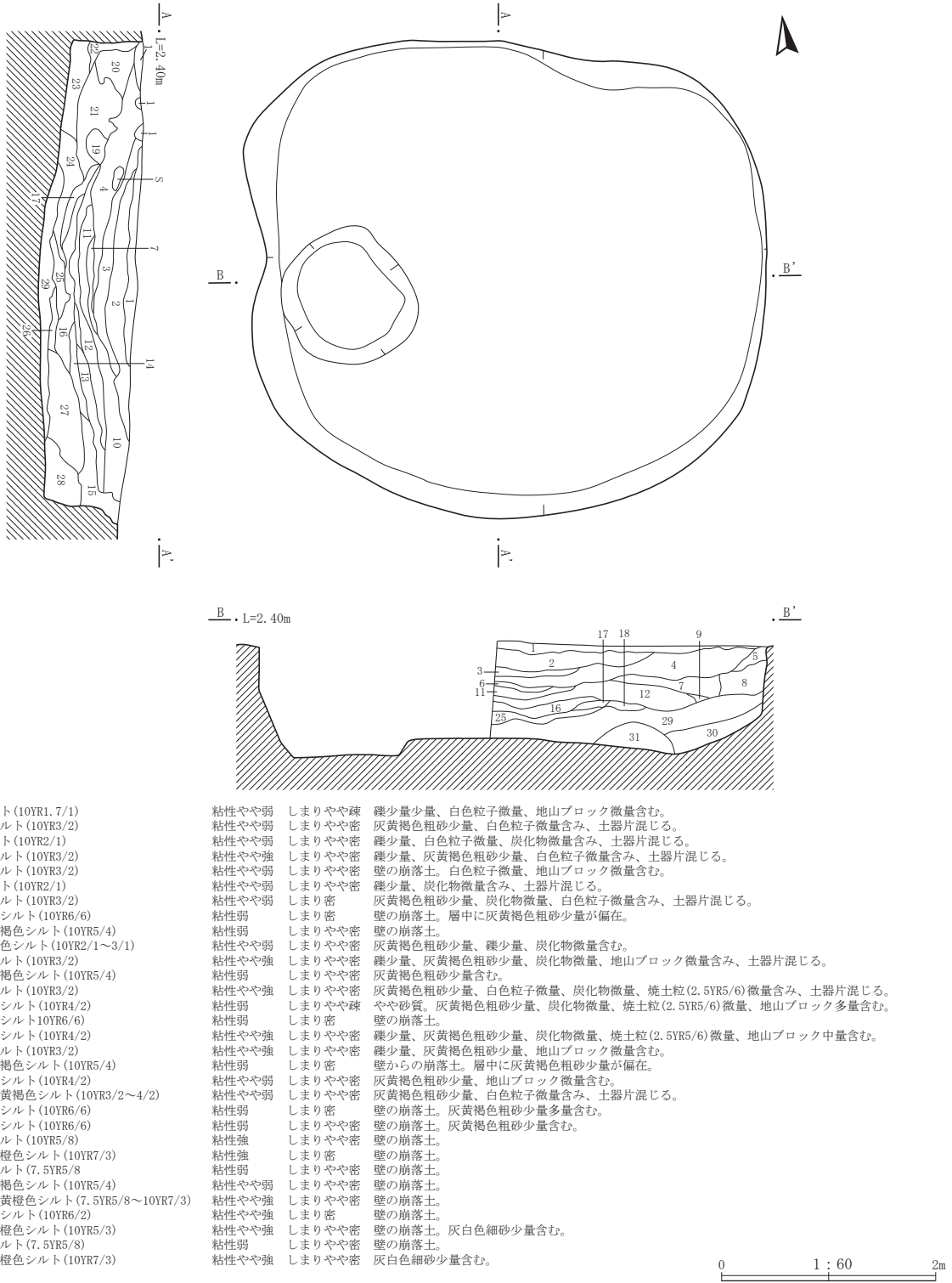
縄文土器は24点掲載した。567は深鉢である。口縁部がややすぼまり、直立気味になる形態で、口縁部には横位に巡る沈線に刻みが連続する。568～571は鉢である。568～570は頸部が括れる形態で、568は口縁部に4単位の突起が付き、また569・570は波状口縁を呈する。胴部には縄文を地文とし、沈線による雲形文が施文される。大洞C1～C2式と判断する。571は粗製で、縄文のみ施文される。572～574は破片である。口縁部には沈線（572）、沈線と刺突文の組み合わせ（573）、羊歯状文（574）が見受けられる。これらの土器は大洞BC式に比定されるものと推測する。575・576は粗製で縄文のみ施文される。577は台付鉢の胴部から台部で胴部は縄文のみで、台部は無文である。578～580は浅鉢B類で、いずれも底面が平坦で、大きく外へと開く形態である。胴部には雲形文が施文されており、大洞C1式と判断した。581は台付浅鉢の台部分の破片と推測する。沈線のみ見受けられる。582～587は壺である。584は壺の頸部であるが4箇所、補修孔が見受けられる。585～587は頸部から胴部上半の破片であるが、頸部には刻みを施した隆帯が巡り、胴部には雲形文が見受けられる。大洞C1式と判断した。588・589は注口土器である。589はA類で算盤玉状を呈し、口縁部が大きく外へと開く。胴部上半と下半とで、別々の雲形文が施文される胴部の中位に突起が巡り、合わせて注口部が付く。大洞C1式の範疇と推測する。他に縄文時代後期前葉後半に比定される深鉢（590）も混じる。

埋土上位から土偶1点（591）出土している。体部の破片で中央に突起（へそ？）が付く以外は無文である。

石器は6点掲載した。592～594は石鏃である。いずれもV類である。594は体部から基部にアスファルトが付着する。595は不定形石器でI類に相当し、やや厚みがある。刃部を作出する二次加工が雑なのが特徴である。596は敲磨器類のⅧ類で、楕円形の礫を素材とし、3面に磨痕が見受けられる。特に側縁は磨痕により、平坦に変形し、形態は特殊磨石に類似する。597はフレイクである。

[時期] 出土した土器から大洞BC～C1式の範疇と判断した。なお、埋土上位から出土した炭化物について年代測定（AMS測定）をし、「2830 ± 30yrBP」という結果を得ている（第Ⅷ章－1）。

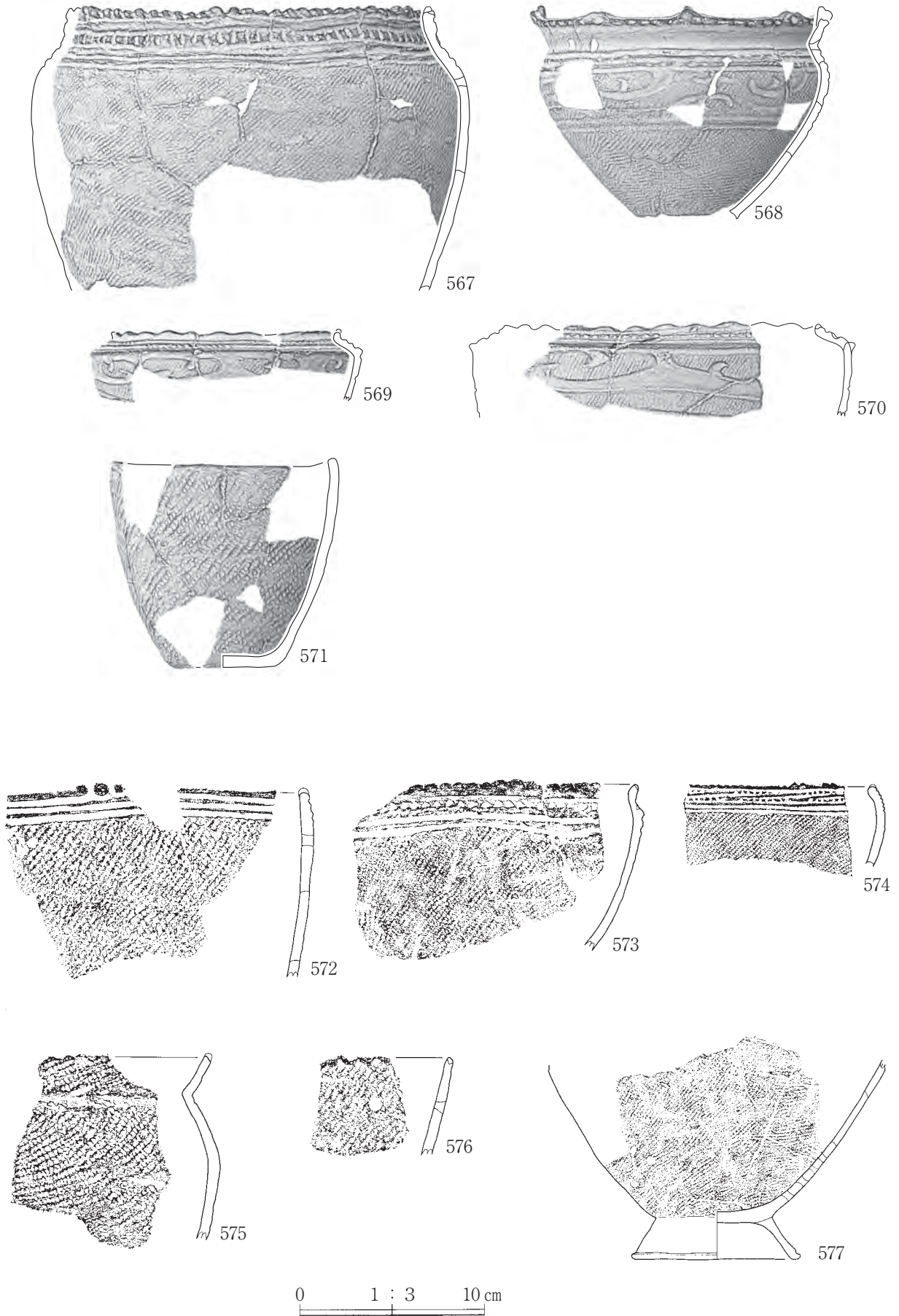
1 縄文時代



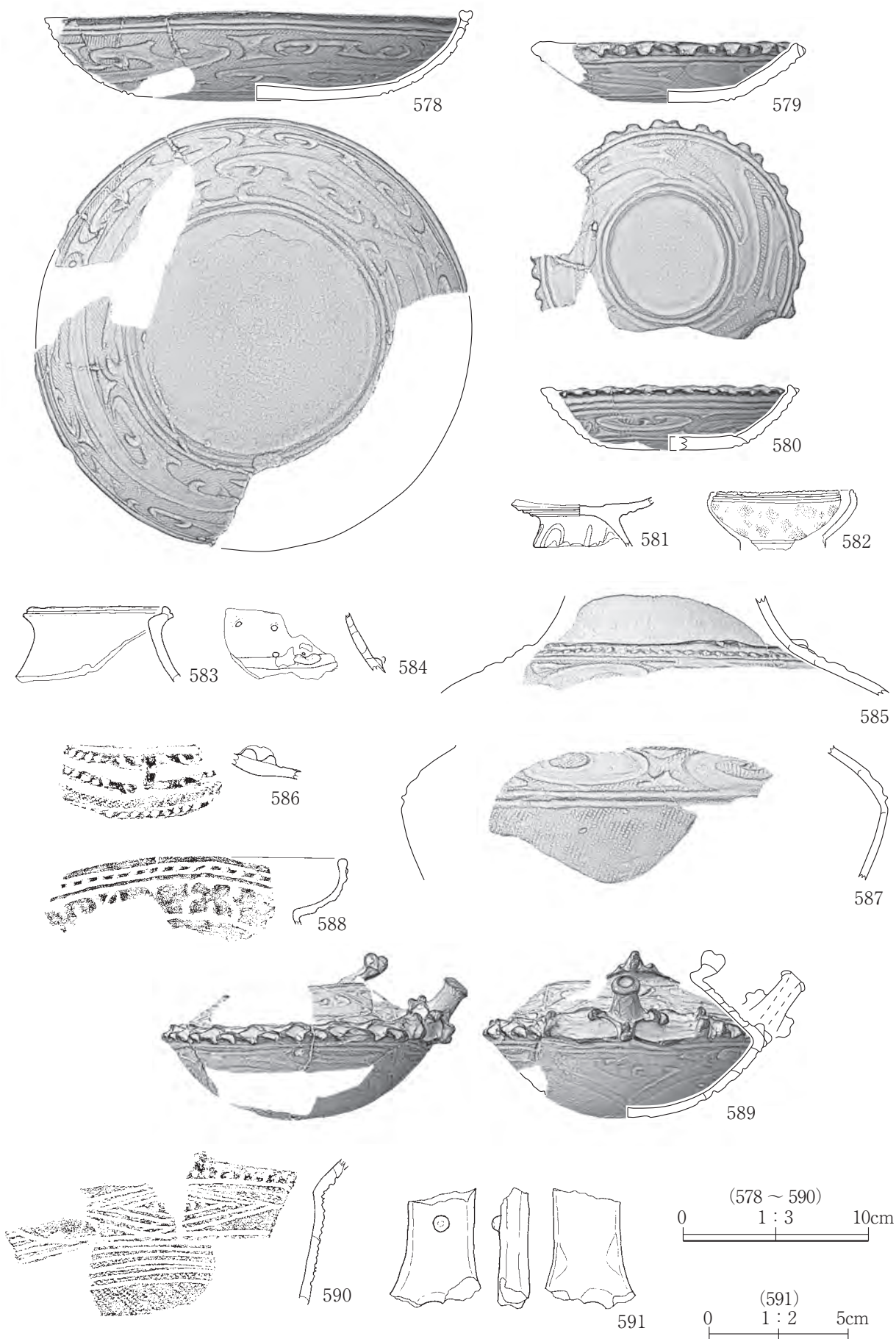
1. 黒色シルト (10YR1.7/1)
2. 黒褐色シルト (10YR3/2)
3. 黒色シルト (10YR2/1)
4. 黒褐色シルト (10YR3/2)
5. 黒褐色シルト (10YR3/2)
6. 黒色シルト (10YR2/1)
7. 黒褐色シルト (10YR3/2)
8. 明黄褐色シルト (10YR6/6)
9. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)
10. 黒～黒褐色シルト (10YR2/1～3/1)
11. 黒褐色シルト (10YR3/2)
12. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)
13. 黒褐色シルト (10YR3/2)
14. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)
15. 明黄褐色シルト (10YR6/6)
16. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)
17. 黒褐色シルト (10YR3/2)
18. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)
19. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)
20. 黒褐～灰黄褐色シルト (10YR3/2～4/2)
21. 明黄褐色シルト (10YR6/6)
22. 明黄褐色シルト (10YR6/6)
23. 黄褐色シルト (10YR5/8)
24. にぶい黄褐色シルト (10YR7/3)
25. 明褐色シルト (7.5YR5/8)
26. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)
27. 明褐色～黄褐色シルト (7.5YR5/8～10YR7/3)
28. 灰黄褐色シルト (10YR6/2)
29. にぶい黄褐色シルト (10YR5/3)
30. 明褐色シルト (7.5YR5/8)
31. にぶい黄褐色シルト (10YR7/3)

粘性やや弱	しまりやや疎	礫少量少量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。
粘性やや弱	しまりやや密	灰黄褐色粗砂少量、白色粒子微量含む、土器片混じる。
粘性やや弱	しまりやや密	礫少量、白色粒子微量、炭化物微量含む、土器片混じる。
粘性やや強	しまりやや密	礫少量、灰黄褐色粗砂少量、白色粒子微量含む、土器片混じる。
粘性やや弱	しまりやや密	壁の崩落土。白色粒子微量、地山ブロック微量含む。
粘性やや弱	しまりやや密	礫少量、炭化物微量含む、土器片混じる。
粘性やや弱	しまり密	灰黄褐色粗砂少量、炭化物微量、白色粒子微量含む、土器片混じる。
粘性弱	しまり密	壁の崩落土。層中に灰黄褐色粗砂少量が偏在。
粘性弱	しまりやや密	壁の崩落土。
粘性やや弱	しまりやや密	灰黄褐色粗砂少量、礫少量、炭化物微量含む。
粘性やや強	しまりやや密	礫少量、灰黄褐色粗砂少量、炭化物微量、地山ブロック微量含む、土器片混じる。
粘性弱	しまりやや密	灰黄褐色粗砂少量含む。
粘性やや強	しまりやや密	灰黄褐色粗砂少量、白色粒子微量、炭化物微量、焼土粒(2.5YR5/6)微量含む、土器片混じる。
粘性弱	しまりやや疎	やや砂質。灰黄褐色粗砂少量、炭化物微量、焼土粒(2.5YR5/6)微量、地山ブロック多量含む。
粘性弱	しまり密	壁の崩落土。
粘性やや強	しまりやや密	礫少量、灰黄褐色粗砂少量、炭化物微量、焼土粒(2.5YR5/6)微量、地山ブロック中量含む。
粘性やや強	しまりやや密	礫少量、灰黄褐色粗砂少量、地山ブロック微量含む。
粘性弱	しまり密	壁からの崩落土。層中に灰黄褐色粗砂少量が偏在。
粘性やや弱	しまりやや密	灰黄褐色粗砂少量、地山ブロック微量含む。
粘性やや弱	しまりやや密	灰黄褐色粗砂少量、白色粒子微量含む、土器片混じる。
粘性弱	しまり密	壁の崩落土。灰黄褐色粗砂少量多量含む。
粘性弱	しまりやや密	壁の崩落土。灰黄褐色粗砂少量含む。
粘性強	しまり密	壁の崩落土。
粘性強	しまり密	壁の崩落土。
粘性弱	しまりやや密	壁の崩落土。
粘性やや弱	しまりやや密	壁の崩落土。
粘性やや強	しまりやや密	壁の崩落土。
粘性やや強	しまり密	壁の崩落土。
粘性やや強	しまり密	壁の崩落土。灰白色細砂少量含む。
粘性弱	しまりやや密	壁の崩落土。
粘性やや強	しまりやや密	灰白色細砂少量含む。

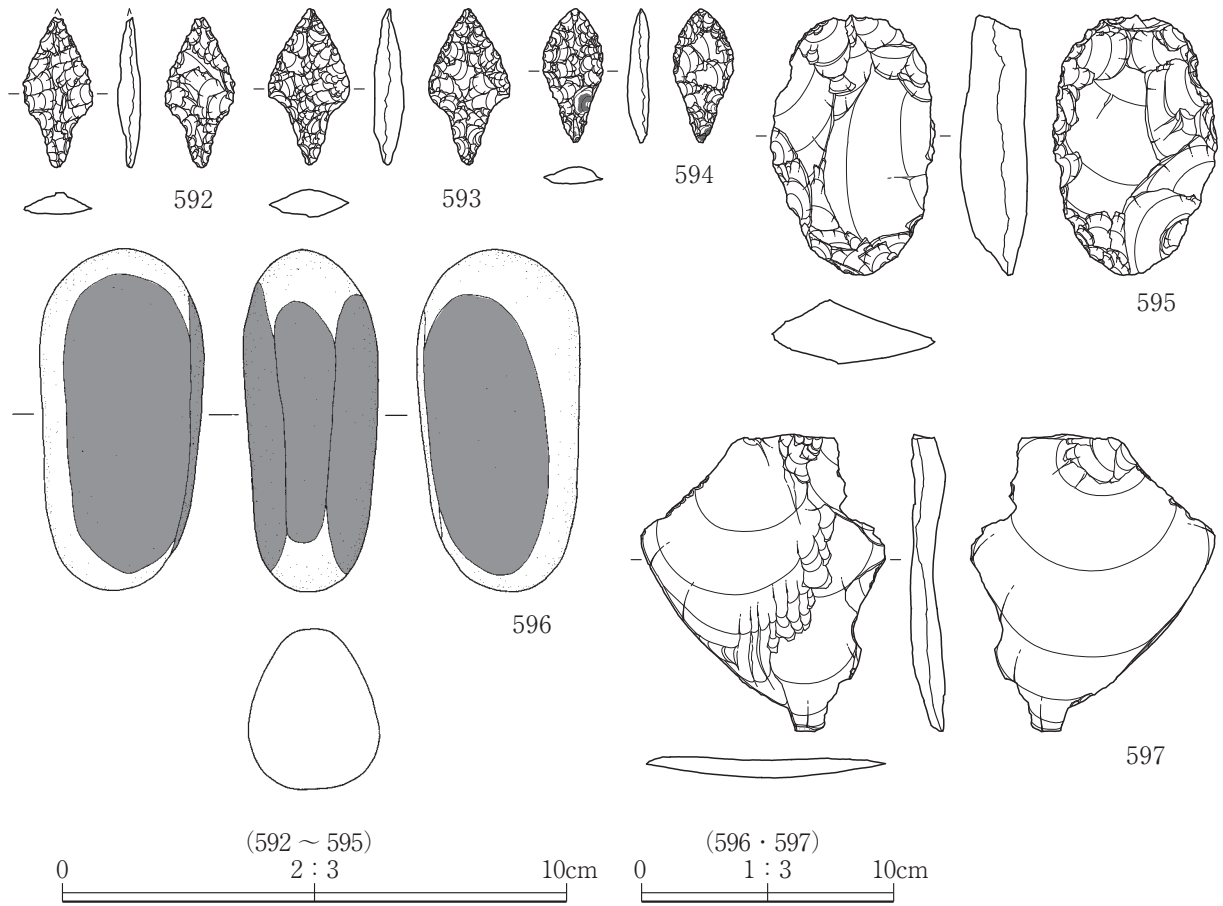
第 132 図 23号住居跡



第 133 図 23 号住居跡出土遺物 1



第 134 図 23 号住居跡出土遺物 2



第 135 図 23 号住居跡出土遺物 3

24号住居跡（第136図、写真図版25）

[位置・検出状況] 調査区南側、II C 1g グリッドに位置する。VI層上面で検出した。本遺構はV層土を掘り下げ、炉のみを検出し、竪穴住居跡と判断し周辺に遺構検出を行ったが、竪穴住居跡の壁や柱穴等は見受けられなかった。屋外炉とも考えたが炉石を伴うので、竪穴住居跡の炉と判断した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不明である。

[規模] 不明である。

[埋土] 確認できなかった。

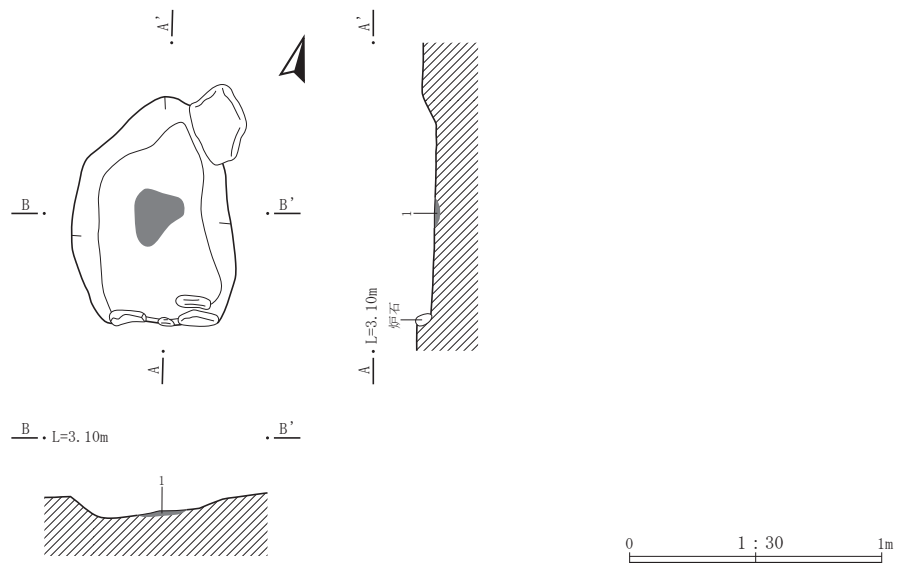
[床面・壁] 不明である。

[炉] 石囲炉と推定する。ただし、炉石は南側と北東側の一部のみで確認できたが、他は抜き取られ、掘り方のみである。残存する規模は92×64cmを測り、深さは床面と思われる検出面から6cm掘り込んで構築している。底面の中央には、20×20cmの燃焼面が見受けられる。焼成は強く、明瞭な橙色に還元する。

[附属施設] 不明である。

[出土遺物] なし。

[時期] 出土遺物がなく、また炉も掘り方のみで形態の特徴から時期を推測できない。中期あるいは晩期に帰属すると推定する。



1. 橙色焼土(5YR6/6) 粘性弱 しまりやや密 炉の燃焼面。範囲は小さいが焼成強く、橙色に還元。

第136図 24号住居跡

(2) 埋 設 土 器

1号埋設土器 (第137・138図、写真図版26・82)

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡC1gグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[規模] 直径38cm、深さ24cm

[埋土] 土器内の土層は3層に分層できる。暗褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。

[掘り方] 直径41cmでわずかに土器よりも大きく掘り込まれている。掘り方埋土は黒褐色シルトを主体とする。

[埋設土器] 正位で設置している。粗製の深鉢(598)で胴部下半のみである。欠損部分を確認したが、土器には故意に打ち欠いたような痕跡はなかった。

[時期] 出土した土器の年代から縄文時代晩期と判断した。

2号埋設土器 (第137・138図、写真図版26・82)

[位置・検出状況] 調査区南側、ⅡC3iグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[規模] 直径30cm、深さ12cm

[埋土] 土器内の土層は1層のみである。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。

[掘り方] 直径35cmで土器よりも大きく掘り込まれている。土器を埋設するための掘り方は2層のみであるが、そのほかにも埋めた痕跡があり(3～7層)、これらも含めて掘り方としているが、理由は不明である。

[埋設土器] 正位で設置している。粗製の深鉢の胴部下半から底部(599)である。底面を欠損するが、故意に打ち欠いたり、穿孔した痕跡はない。

[時期] 出土した土器の年代から縄文時代晩期と判断した。

3号埋設土器 (第137・138図、写真図版26・82)

[位置・検出状況] 調査区南側、ⅡC3iグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。本遺構は土器の底面のみしか確認できていない。

[その他の遺構との重複] なし。

[規模] 不明、深さ5cm

[埋土] 土器内の埋土は不明である。

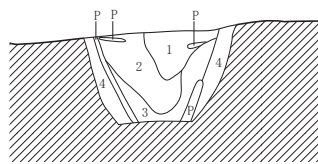
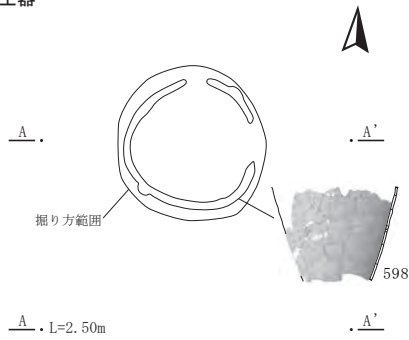
[掘り方] 規模28×23cmでわずかに土器よりも大きく掘り込まれている。掘り方埋土は黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混じる。

[埋設土器] 正位で設置と推定。粗製の深鉢で底面のみ(600)である。

[時期] 出土した土器の年代から縄文時代晩期と判断した。

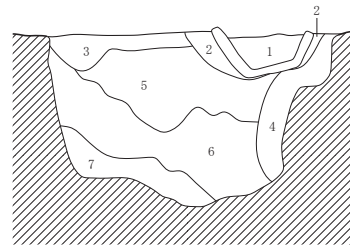
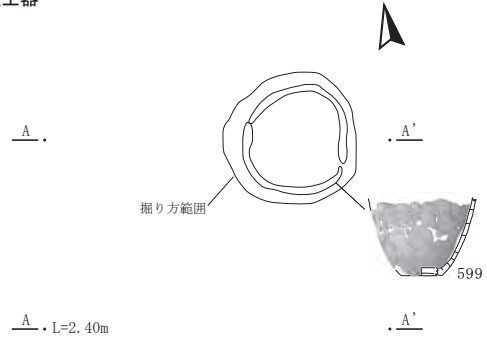
1 縄文時代

1号埋設土器



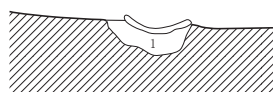
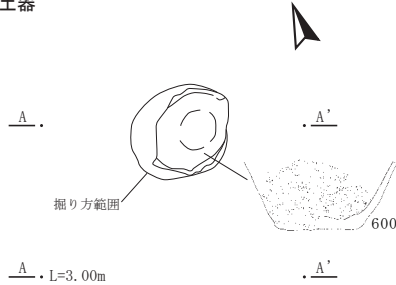
- 1. 黒色シルト (10YR2/1) 粘性やや弱 しまりやや疎 白色粒子微量、地山ブロック微量含む。
- 2. 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性やや弱 しまりやや密 白色粒子微量含む。
- 3. 黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性やや弱 しまりやや密 白色粒子微量含む。
- 4. 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性やや弱 しまりやや密 掘り方土。白色粒子微量、粗砂少量、地山ブロック微量含む。

2号埋設土器

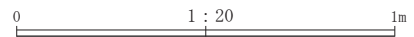


- 1. 黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性やや弱 しまりやや密 明黄褐色粗砂少量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。
- 2. 黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性弱 しまりやや疎 明黄褐色粗砂少量、白色粒子微量含む。
- 3. 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性弱 しまりやや疎 明黄褐色粗砂少量、白色粒子微量含む。
- 4. 明黄褐色シルト (10YR6/6) 粘性弱 しまりやや密 壁崩落土。礫少量含む。
- 5. 黒色シルト (10YR2/1) 粘性弱 しまりやや疎 礫 白色粒子微量、地山ブロック微量含む。
- 6. 黒色シルト (10YR2/1) 粘性弱 しまりやや密 地山ブロック微量含む。
- 7. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) 粘性弱 しまりやや密 崩落土。白色粒子微量含む。

3号埋設土器



- 1. 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性弱 しまり密 掘り方埋土。炭化物微量、白色粒子微量、地山ブロック微量、焼土粒 (2.5YR4/4) 微量含む。

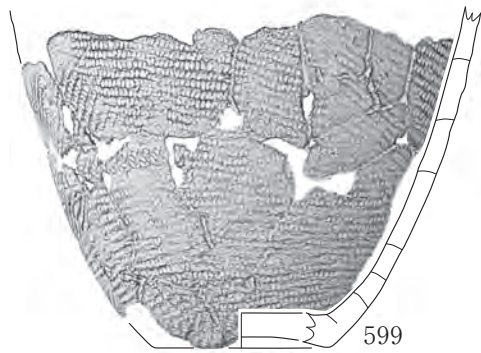


第 137 図 1～3号埋設土器

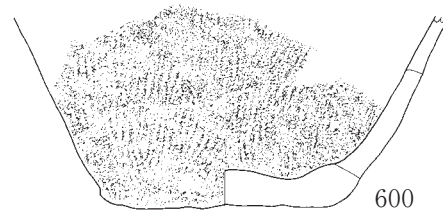
1号埋設土器



2号埋設土器



3号埋設土器



0 1 : 3 10 cm

第138図 埋設土器

(3) 土 坑

1号土坑 (第139図、写真図版27)

[位置・検出状況] 調査区北側 I A 8g グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 225 × 198cm、深さ38cm

[埋土] 2層からなる。灰黄褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。皿状に窪む。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 55.2g、石器2点が出土している。縄文土器は小片、石器はフレイクである。

[性格] 不明。

[時期] 周辺の遺構の年代から縄文時代中期の範疇と判断した。

2号土坑 (第139図、写真図版27)

[位置・検出状況] 調査区北側 I A 6j、I B 6a グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 157 × 137cm、深さ22cm

[埋土] 2層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。皿状に窪む。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 290.8g が出土している。縄文土器は小片である。

[性格] 不明。

[時期] 周辺の遺構の年代から縄文時代中期の範疇と判断した。

3号土坑 (第139図、写真図版27・82)

[位置・検出状況] 調査区北側 I B 6a グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 154 × 112cm、深さ33cm

[埋土] 2層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。底面中央が円錐状に窪む。壁は全周する。大きく広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 382.9g が出土している。縄文土器1点掲載した(601)粗製の深鉢で口縁部から胴部にかけて縄文のみ施文される。縄文時代中期の範疇である。

[性格] 不明。

[時期] 出土した土器の年代から縄文時代中期と判断した。

4号土坑 (第139図、写真図版27・82)

[位置・検出状況] 調査区北側 I B 8b グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 205 × 119cm、深さ15cm

[埋土] 埋土を確認しないまま掘り下げてしまったので不明である。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。平坦である。壁は全周する。ほぼ直立気味である。また底面

ほぼ中央に 80 × 60cm、深さ 78cm の小穴がある。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器、土製品が出土している。606 は大木 8 a 式新段階の深鉢で、口唇部直下に刺突を加えた突起が付く。607 は大木 8 b 式新段階～大木 9 式古段階に比定される深鉢の胴部片で、縄文を施文とし、沈線で楕円形区画を描く。608 は円盤形土製品で深鉢の胴部片を転用する。

[性格] 不明。

[時期] 出土した土器の年代はばらばらであり、根拠となりえない。縄文時代中期の範疇と判断した。

5号土坑（第 139 図、写真図版 28・82・264）

[位置・検出状況] 調査区北側 I B 4 c グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 96 × 78cm、深さ 67cm

[埋土] 2層からなる。ただし黒褐色シルトを主体としたほぼ単層である。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。ほぼ平坦である。壁は全周する。わずかに外へと広がるが、ほぼ直立である。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 952.0g、土製品 1 点が出土している。縄文土器は破片が多く出土している。4 点掲載した (602～605)。いずれも大木 8 b 式古段階の深鉢である。605 は口縁部に付く大型の土器であり、上面に沈線で渦巻き文が施文される。石器は 1 点掲載した (685)。楔形石器で上下左右の 2 方向から打撃を加えた痕跡がある。

[性格] 不明。

[時期] 出土した土器の年代から縄文時代中期、大木 8 b 式古段階と判断した。

6号土坑（第 139 図、写真図版 28・82）

[位置・検出状況] 調査区北側 I B 5 f グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 歪な楕円形。 [規模] 212 × 140cm、深さ 45cm

[埋土] 4層からなる。暗～黒褐色シルトが互層を呈する。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。ほぼ平坦で、中央に溝状の窪みがある。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 2,362.9g、石器 1 点が出土している。比較的大きな破片が多い。縄文土器を 3 点掲載した。609 は大木 7 a 式古段階の深鉢である。610 は深鉢の口縁部片で地文のほかに、半円状の隆帯が縦位に垂下する。大木 7 a 式新段階か。611 は深鉢の口縁部から胴部の大型破片で、大木 8 a 式新段階に比定される。

[性格] 不明。

[時期] 出土した土器の年代はばらばらであり、根拠となりえない。縄文時代中期の範疇と判断した。

7号土坑（第 140 図、写真図版 28）

[位置・検出状況] 調査区北側 I B 7 e グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

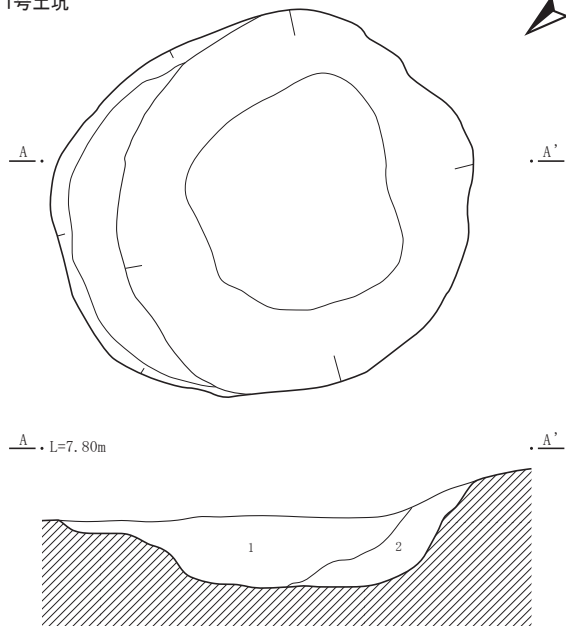
[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な長楕円形。 [規模] 132 × 60cm、深さ 13cm

[埋土] 2層からなる。黒褐色シルトと灰黄褐色シルトが互層を呈する。

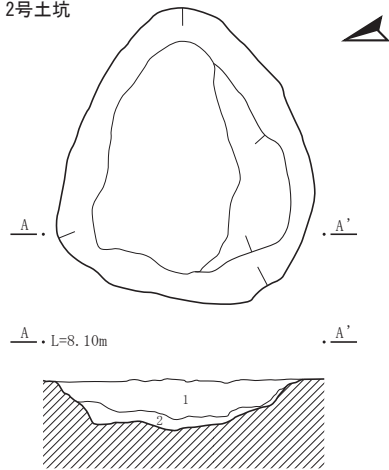
1 縄文時代

1号土坑



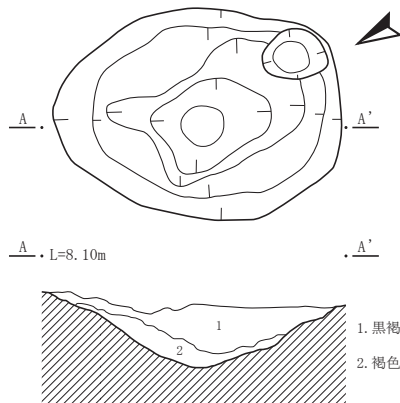
1. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 粘性弱 しまり密 風化花崗岩粒少量含む。
2. 褐色シルト(10YR4/6) 粘性やや弱 しまり密 地山ブロック多量含む。

2号土坑



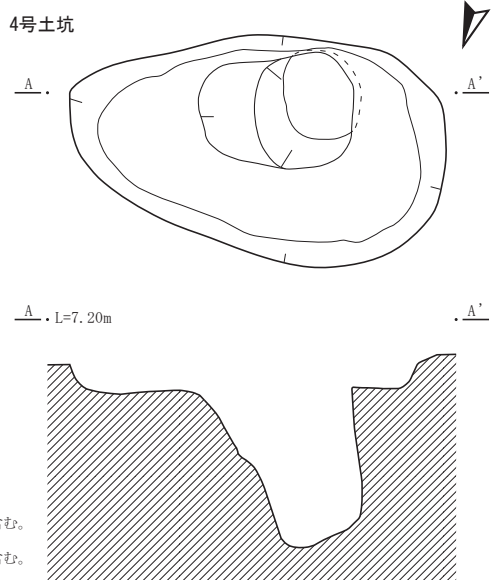
1. 黒褐色シルト(10YR2/3) 粘性やや強 しまり密 炭化物微量、白色粒子少量、地山ブロック中量含む。
2. 褐色シルト(10YR4/6) 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、黒褐色シルトブロック中量含む。

3号土坑

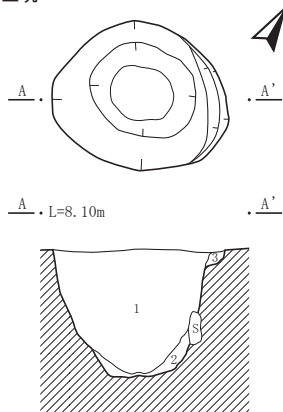


1. 黒褐色シルト(10YR2/3) 粘性やや強 しまり密 炭化物微量、白色粒子中量含む。
2. 褐色シルト(10YR4/6) 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量、黒褐色シルトブロックやや多く含む。

4号土坑

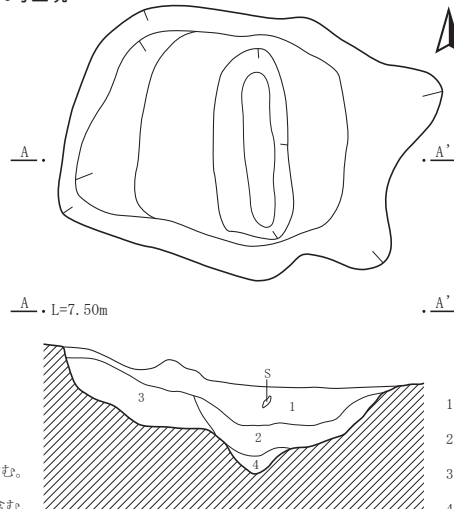


5号土坑



1. 黒褐色シルト(10YR2/2) 粘性やや弱 しまりやや密 炭化物微量、地山ブロック少量、白色粒子少量含む。
2. 黄褐色シルト(10YR4/3) 粘性やや強 しまりやや疎 崩落土。地山ブロックやや多く含む。
3. 褐色シルト(10YR4/4) 粘性やや強 しまりやや密 崩落土。地山ブロック少量含む。

6号土坑



1. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性やや強 しまりやや疎 炭化物少量含み、土器片混じる。
2. 黒褐色シルト(10YR2/3) 粘性強 しまりやや疎 炭化物微量、白色粒子微量含む。
3. 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性強 しまりやや疎 炭化物微量、地山ブロック中量、白色粒子微量含む。
4. 黒色シルト(10YR2/1) 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、地山ブロック微量含む。

0 1:40 2m

第139図 1~6号土坑

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。やや凹凸に窪む。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 18.4g が出土している。いずれも小片である。

[性格] 不明。

[時期] 周辺の遺構の時期から縄文時代中期の範疇と判断した。

8号土坑（第140図、写真図版28）

[位置・検出状況] 調査区北側 I B 9f グリッドに位置する。VI層上面で検出した。なお遺構の東端は攪乱に壊されている。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な円形。 [規模] (117) × 117cm、深さ 69cm

[埋土] 12層からなる。黒～暗褐色シルトを主体するが、間に黄褐色シルト、灰黄褐色シルトを挟む。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。丸く窪む。壁は全周する。わずかに外へと広がるが直立気味である。

[出土遺物] なし。

[性格] 貯蔵穴と推定する。

[時期] 周辺の遺構の時期から縄文時代中期の範疇と判断した。

9号土坑（第140図、写真図版29）

[位置・検出状況] 調査区中央 I B 7i、I B 7j グリッド（確認調査範囲）に位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 7号住居跡と重複する。本遺構の方が新しい。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 147 × (110) cm、深さ 74cm

[埋土] 8層からなる（第140図5～12層）。黒～暗褐色シルトを主体とするが、埋土下位は灰黄褐色～黄褐色シルトが多くなる。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。平坦である。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] なし。

[性格] 貯蔵穴である。

[時期] 重複する7号住居跡の時期から縄文時代中期、大木8b式新段階～大木9式新段階と判断した。

10号土坑（第140図、写真図版29）

[位置・検出状況] 調査区中央 I C 4a グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 116 × 80cm、深さ 62cm

[埋土] 2層からなる。ただし暗褐色シルト（1層）を主体とし、ほぼ単層に近い。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。中央が円錐状に窪む。壁は全周する。外へと大きく広がりながら立ち上がる。

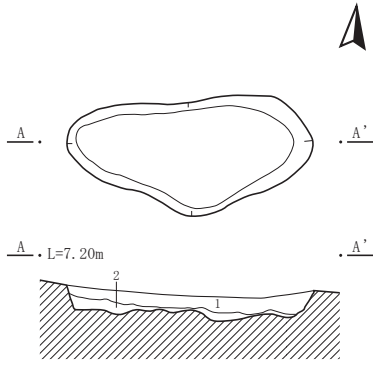
[出土遺物] 埋土中から縄文土器 328.2g 出土している。いずれも小片である。

[性格] 不明。

[時期] 周辺の遺構の時期から縄文時代中期の範疇と判断した。

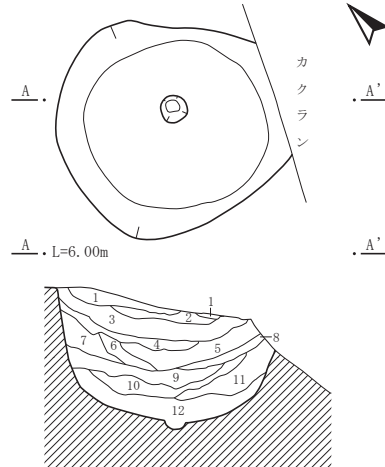
1 縄文時代

7号土坑



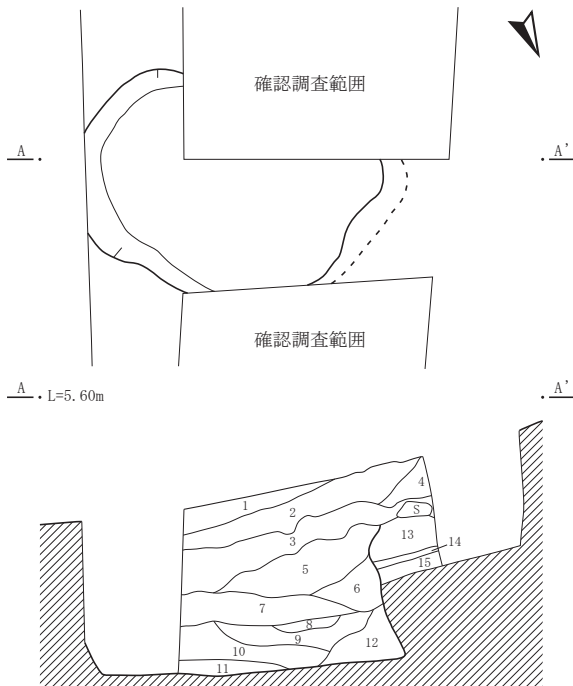
1. 黒褐色シルト(10YR2/3) 粘性やや強 しまり密 炭化物微量、地山ブロック少量、白色粒子少量含む。
2. 灰黄褐色シルト(10YR5/2) 粘性やや強 しまり密 炭化物微量、地山ブロック中量含む。

8号土坑



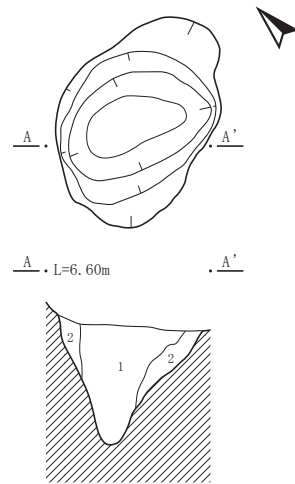
1. 黒褐色シルト(10YR3/1) 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量、地山ブロック微量、白色粒子中量含む。
2. 暗褐色シルト(10YR3/4) 粘性やや強 しまり密 炭化物微量、地山ブロックやや多く、白色粒子微量含む。
3. 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性やや強 しまりやや密 炭化物微量、暗褐色シルトブロック少量、白色粒子中量含む。
4. 明黄褐色シルト(10YR6/8) 粘性強 しまりやや疎 炭化物微量、暗褐色シルトブロック中量、白色粒子中量含む。
5. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性強 しまり密 炭化物微量、地山ブロック少量、白色粒子少量含む。
6. 黒褐色シルト(10YR3/1) 粘性やや強 しまりやや疎 炭化物微量、暗褐色シルトブロック少量、白色粒子少量含む。
7. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性やや強 しまり密 炭化物微量、黒褐色シルトブロックやや多く、地山ブロック少量含む。
8. 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、地山ブロック微量、白色粒子少量含む。
9. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、地山ブロック微量、白色粒子中量含む。
10. 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、地山ブロック少量、白色粒子微量含む。
11. 明黄褐色シルト(10YR6/8) 粘性やや弱 しまり密 炭化物微量、暗褐色シルトブロック中量、白色粒子微量含む。
12. 黒褐色シルト(10YR3/1) 粘性やや強 しまりやや疎 炭化物微量、地山ブロック微量、白色粒子少量含む。

9号土坑



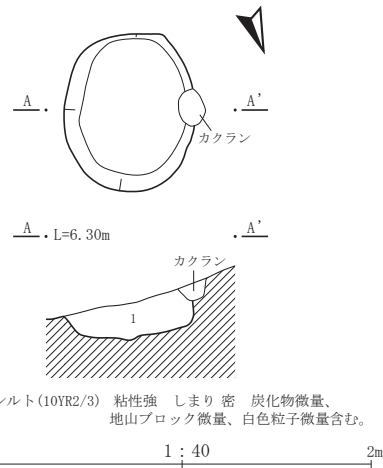
1. 黒色シルト(10YR2/1) 粘性やや弱 しまりやや疎 崩落土(III層類似)。炭化物微量、白色粒子少量含む。
2. にぶい黄褐色シルト(10YR7/3) 粘性やや強 しまりやや疎 崩落土(III層類似)。炭化物少量、白色粒子中量含む。
3. にぶい黄褐色シルト(10YR5/3) 粘性やや強 しまりやや密 崩落土(III層類似)。炭化物少量上部に偏在し、白色粒子微量含む。
4. 黒褐色シルト(10YR2/2) 粘性やや弱 しまり疎 崩落土(III層類似)。炭化物微量、白色粒子中量含む。
5. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性強 しまりやや疎 炭化物少量、白色粒子微量、地山ブロック少量含む。
6. にぶい黄褐色シルト(10YR6/3) 粘性強 しまりやや密 炭化物微量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。
7. 黒褐色シルト(10YR2/2) 粘性強 しまりやや密 炭化物中量、白色粒子少量含む。
8. 明褐色シルト(7.5YR5/6) 粘性やや強 しまり密 炭化物微量、焼土粒中量、白色粒子少量含む。
9. にぶい黄褐色シルト(10YR7/4) 粘性強 しまり密 炭化物微量、焼土粒微量、白色粒子微量、地山ブロック少量含む。
10. にぶい黄褐色シルト(10YR5/3) 粘性強 しまり密 炭化物微量、白色粒子微量含む。
11. にぶい黄褐色シルト(10YR7/4) 粘性やや強 しまりやや疎 炭化物微量、地山ブロックやや多く含む。
12. 灰黄褐色シルト(10YR6/2) 粘性強 しまり密 炭化物微量、地山ブロック微量含む。
13. 灰黄褐色シルト(10YR5/2) 粘性やや弱 しまりやや疎 7号住居跡埋土。
14. 明黄褐色シルト(10YR7/6) 粘性やや弱 しまり疎 炭化物微量、白色粒子少量、地山ブロック微量含む。
15. にぶい黄褐色シルト(10YR6/3) 粘性弱 しまり疎 7号住居跡埋土。炭化物微量、白色粒子微量、地山ブロック中量含む。

10号土坑



1. 暗褐色シルト(10YR3/3) 粘性やや強 しまり密 風化花崗岩粒微量含む。
2. 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性やや強 しまり疎 炭化物微量、焼土粒微量含む。

11号土坑



1. 黒褐色シルト(10YR2/3) 粘性強 しまり密 炭化物微量、地山ブロック微量、白色粒子微量含む。

第140図 7~11号土坑

11号土坑（第140図、写真図版29・83）

[位置・検出状況] 調査区中央 I C 5b グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 楕円形。 [規模] 86 × 70cm、深さ 20cm

[埋土] 黒褐色シルトを主体とする単層である。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。皿状に窪む。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 347.3g が出土している。縄文土器を 1 点 (617) 掲載した。大木 7a 式古段階の深鉢である。

[性格] 不明。

[時期] 出土した土器の年代から大木 7a 式古段階と判断した。

12号土坑（第141図、写真図版29・83・264）

[位置・検出状況] 調査区南側 I C 9e、I C10e グリッドに位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 131 × 108cm、深さ 42cm

[埋土] 6層からなる。上位は黒褐色シルトを主体、下位はにぶい黄褐色シルトを主体とする。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。平坦である。壁は全周する。南側は直立気味、北側は外へと大きく広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 1,971.7g、石器 6 点、土製品 1 点が出土している。縄文土器は小片であるが、他の土坑と比べて出土量は少なくない。ただし、出土土器の時期はバラバラである。612 は大木 8b 式新段階～大木 9 式古段階の深鉢胴部片である。613・614 は縄文時代後期前葉後半の深鉢、615 は後期中葉前半の深鉢である。616 は円盤形土製品で、深鉢胴部片の転用である。石器は 1 点掲載した (686)。磨製石斧で刃部のみ残存する。やや厚みがある。全体的に研磨の痕跡が見受けられる。

[性格] 不明。

[時期] 出土した土器の時期からの推定であるが、縄文時代後期前葉から中葉の範疇と判断した。

13号土坑（第141図、写真図版30・83）

[位置・検出状況] 調査区南側 I C 4g、I C 5g、I C 4h、I C 4g グリッドに位置する。VI層上面で検出した。なお本遺構は精査中、確認調査範囲であったが、最終的には本調査範囲へと変更した。したがって全てを掘り下げてはいない。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 円形。 [規模] 開口径 115cm、底面径 189cm、深さ 130cm

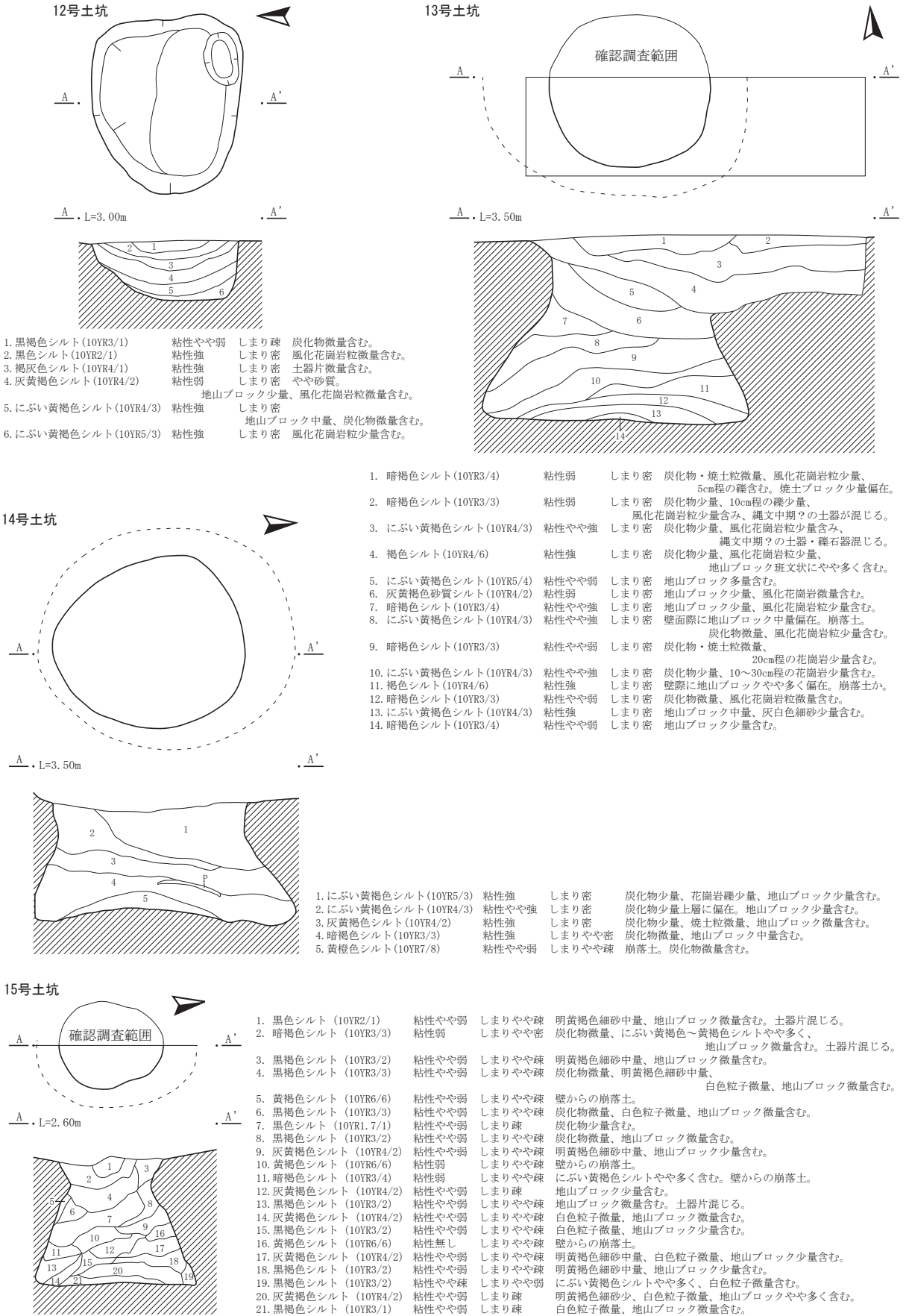
[埋土] 10層（5～14層）からなる。暗褐色シルトとにぶい黄褐色シルトが互層を呈する。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。平坦である。壁はトレンチのみで確認した。大きくオーバーハングしながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 12,331.5g、石器 8 点が出土している。比較的出土量が多い。縄文土器を 10 点掲載した。621 は大木 8a 式新段階に比定される。622～626 は大木 8b 式新段階～大木 9 式古段階の範疇である。627・628 は大木 9 式新段階の深鉢である。629・630 は深鉢の底部片で、どちらも底面に敷物圧痕が見受けられる。

[性格] 貯蔵穴。

1 縄文時代



第141図 12~15号土坑

[時期] 出土した土器から縄文時代中期（大木8b式新段階～大木9式古段階）の範疇と判断した。

14号土坑（第141図、写真図版30・84・264）

[位置・検出状況] 調査区南側IC4i、IC5iグリッドに位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 開口部136×120cm、底面183×166cm、深さ84cm

[埋土] 5層からなる。にぶい黄褐色シルトを主体とし、炭化物、焼土粒が混入する。

[底面・壁] VI層上面を底面と推定した。ほぼ平坦で、中央がわずかに上がる。壁は全周する。大きくオーバーハングしながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器18,832.1g、石器10点、土製品2点、石製品1点が出土している。縄文土器は大型の破片が多い。14点掲載した。631は大木8b式古段階の深鉢で口縁部から胴部上半まで残る大型の破片である。口縁部に横位の渦巻き文が付く。632は大木8a式古段階で縄文原体押圧文が施文される。633～636は大木8b式新段階の深鉢である。638は大木9式新段階の深鉢で、口縁部に横位の押引文が巡る。639～641は大木10式新段階の深鉢である。642～644は粗製の深鉢である。

645は円盤形土製品である。深鉢の胴部片の転用で、一部欠損するが、円形に整形している。

石器は1点掲載した(687)。礫器で、一部欠損する。片方の端部に打撃を加えた痕跡がある。

[性格] 貯蔵穴。

[時期] 出土した土器の年代から縄文時代中期後葉と判断した。

15号土坑（第141図、写真図版30・83）

[位置・検出状況] 調査区南側IC3hグリッド（確認調査範囲）に位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 21号土坑と重複する。本遺構方が新しい。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 開口部75×63cm、底面径(115)cm、深さ87cm

[埋土] 21層からなる。黒褐色シルトと黄褐色シルトが互層を呈する。

[底面・壁] VI層上面を底面と推定した。ほぼ平坦である。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器1,884.4g、石器2点が出土している。縄文土器を1点掲載した(618)。深鉢の胴部片で縄文のみ施文される。

[性格] 貯蔵穴。

[時期] 出土した土器の年代からは推測できないが、周辺の遺構の時期から縄文時代晚期中葉と判断した。

16号土坑（第142図、写真図版30・83）

[位置・検出状況] 調査区南側IC1hグリッド（確認調査範囲）に位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な円形。 [規模] 開口径102cm、底面径162cm 深さ115cm

[埋土] 28層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物、地山ブロック、白色粒子の混入が様々に異なる。

[底面・壁] VI層上面を底面と推定した。平坦である。壁は全周する。大きくオーバーハングしながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器182.3g、石器1点が出土している。2点掲載した。619は大木7a式

古段階、620 は大木7a 式新段階に比定される深鉢である。

[性格] 貯蔵穴。

[時期] 出土した土器の年代では縄文時代中期初頭である。ただし、本遺構の周辺には中期初頭に帰属する遺構はなく、したがって断定はできない。周辺の遺構の年代からは縄文時代晩期に比定される。

17号土坑（第142図、写真図版30）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡC 3g グリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 20号土坑と重複する。本遺構の方が新しい。

[平面形] 不整な円形。 [規模] 径85cm、深さ35cm

[埋土] 11層からなる。黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルト、灰黄褐色シルトが互層を呈する。

[底面・壁] Ⅴ層面を底面と推定した。丸く窪む。壁は全周する。わずかに外へと広がるが、直立気味である。

[出土遺物] なし。

[性格] 貯蔵穴か。

[時期] 周辺の遺構の年代から縄文時代晩期中葉の範疇と判断した。

18号土坑（第142図、写真図版30）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡC 3g グリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 20号土坑と重複する。本遺構の方が古い。

[平面形] 不整な円形。 [規模] (105) × 90cm、深さ(45) cm

[埋土] 5層からなる。黄～灰黄褐色シルトを主体とし、下位に黒～暗褐色シルトが堆積する。

[底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。ほぼ平坦である。壁はトレンチのみで確認した。わずかにオーバーハングしながら立ち上がる。

[出土遺物] なし。

[性格] 貯蔵穴か。

[時期] 周辺の遺構の年代から縄文時代晩期中葉の範疇と判断した。

19号土坑（第142図、写真図版30）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡC 3g グリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。20号土坑を精査中、断面で別の土坑を確認し、本遺構とした。

[その他の遺構との重複] 20号土坑と重複する。本遺構の方が古い。

[平面形] 不明。 [規模] 大きさ不明、深さ(30) cm

[埋土] 2層からなる。灰黄褐色シルトを主体とし、下位は黒褐色シルトが主体となる。

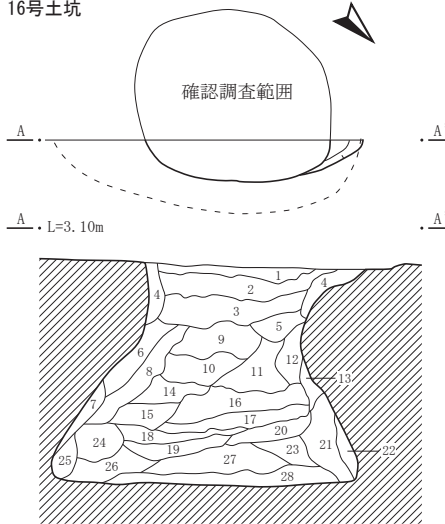
[底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。平坦である。壁はトレンチのみで確認した。ほぼ直立気味である。

[出土遺物] なし。

[性格] 不明。

[時期] 周辺の遺構の年代から縄文時代晩期中葉の範疇と判断した。

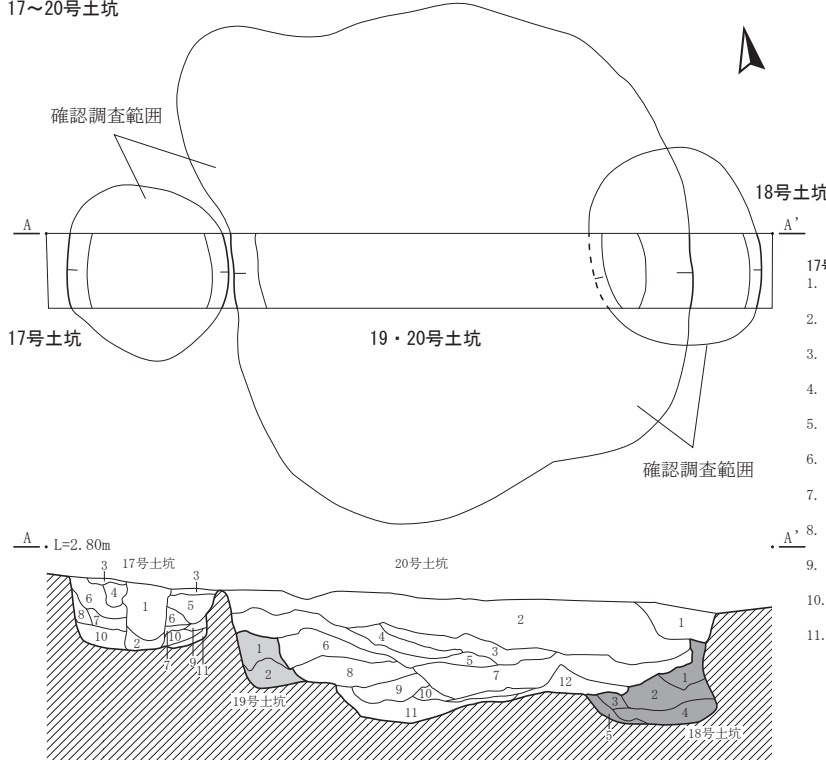
16号土坑



1. 黒褐色シルト(10YR3/3)
2. 黒褐色シルト(10YR3/3)
3. 黒褐色シルト(10YR3/2)
4. 黒褐色シルト(10YR3/2)
5. 黒褐色シルト(10YR3/1)
6. 黒褐色シルト(10YR3/2)
7. 黒褐色シルト(10YR3/1)
8. 黒褐色シルト(10YR3/2)
9. 黒褐色シルト(10YR3/2~3/1)
10. 黒褐色シルト(10YR3/2)
11. 黒褐色シルト(10YR3/2~3/1)
12. 黒褐色シルト(10YR3/1)
13. 黒褐色シルト(10YR3/2)
14. 黒褐色シルト(10YR3/1)
15. 黒褐色シルト(10YR3/2)
16. 黒褐色シルト(10YR3/2)
17. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
18. 黒褐色シルト(10YR3/1)
19. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
20. 黒褐色シルト(10YR3/2)
21. 黒褐色シルト(10YR3/2)
22. 黒褐色シルト(10YR3/1)
23. 黒褐色シルト(10YR3/2)
24. 黒褐色シルト(10YR3/2)
25. 黒褐色シルト(10YR3/2~3/1)
26. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
27. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
28. 黒褐色シルト(10YR3/1)

- | | | |
|-------|--------|----------------------------|
| 粘性やや弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや密 | 粗砂少量、焼土粒・炭化物微量、白色粒子微量含む。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや密 | 壁からの崩落土。白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや密 | 地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや疎 | 地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子微量、地山ブロック中量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子微量、地山ブロック多量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子微量、地山ブロック少量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや密 | 地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、地山ブロック中量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや疎 | 地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 地山ブロック少量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 地山ブロック少量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや密 | 地山ブロック微量含む。 |

17~20号土坑



- 18号土坑
1. 黄褐色シルト(10YR6/6)
 2. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
 3. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
 4. 黒褐色シルト(10YR3/2)
 5. 暗褐色シルト(10YR3/3)

- | | | |
|-------|--------|----------------|
| 粘性やや弱 | しまりやや疎 | 壁からの崩落土。 |
| 粘性やや疎 | しまりやや弱 | 地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや疎 | 地山ブロック中量含む。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや疎 | 地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや強 | しまりやや疎 | にぶい黄褐色シルト多量含む。 |

- 19号土坑
1. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
 2. 黒褐色シルト(10YR3/2)

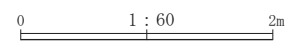
- | | | |
|-------|--------|---------------------|
| 粘性やや弱 | 縮まりやや疎 | 地山ブロック多量含む。壁からの崩落土。 |
| 粘性やや弱 | 縮まりやや疎 | 地山ブロック中量含む。壁からの崩落土。 |

- 20号土坑
1. 黒色シルト(10YR1.7/1)
 2. 黒褐色シルト(10YR3/2)
 3. 黒褐色シルト(10YR3/2)
 4. 黒褐色シルト(10YR3/1)
 5. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
 6. 黒褐色シルト(10YR3/1)
 7. 黒褐~黒色シルト(10YR3/1~2/1)
 8. 黒褐~黒色シルト(10YR3/1~2/1)
 9. 暗褐色シルト(10YR3/4)
 10. 黒色シルト(10YR2/1)
 11. 暗褐色シルト(10YR3/3)
 12. 黒褐色シルト(10YR3/2)

- | | | |
|-------|--------|-----------------------------|
| 粘性弱 | しまり疎 | 明黄褐色細砂中量、地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや密 | 明黄褐色細砂中量、白色粒子微量含む、土器片混じる。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや密 | 明黄褐色細砂中量、白色粒子微量、地山ブロック少量含む。 |
| 粘性やや疎 | しまりやや疎 | 白色粒子微量、地山ブロック微量含む、土器片混じる。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや密 | 明黄褐色細砂中量、白色粒子微量、地山ブロック少量含む。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや密 | 明黄褐色細砂中量、地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや疎 | しまりやや疎 | 明黄褐色細砂中量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや密 | 明黄褐色細砂中量、白色粒子微量、地山ブロック少量含む。 |
| 粘性弱 | しまりやや疎 | 黄褐色シルトブロックやや多く含む。壁からの崩落土。 |
| 粘性やや弱 | しまりやや疎 | にぶい黄褐色シルト多量含む。壁からの崩落土。 |
| 粘性弱 | しまりやや疎 | 黄褐色シルト多量含む。18号土坑の壁の崩落土。 |

17号土坑

1. 黒色シルト(10YR1.7/1) 粘性弱 しまり疎
下部に明黄褐色細砂中量偏在、地山ブロック微量含む。
2. 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性弱 しまりやや疎
明黄褐色細砂中量、地山ブロック微量含む。
3. 黒褐色砂質シルト(10YR3/2) 粘性弱 しまりやや疎
明黄褐色細砂中量、白色粒子微量含む。
4. 黒褐色シルト(10YR3/2) 粘性やや弱 しまりやや疎
白色粒子微量 地山ブロック微量含む。
5. にぶい黄褐色シルト(10YR5/3) 粘性弱 しまり疎
壁の崩落土。
6. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 粘性弱 しまりやや疎
白色粒子微量、地山ブロック微量含む。
7. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 粘性弱 しまりやや疎
地山ブロックやや疎量含む。壁からの崩落土。
8. 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 粘性やや弱 しまりやや疎
地山ブロック微量含む。
9. にぶい黄褐色シルト(10YR5/4) 粘性弱 しまり疎
壁からの崩落土。
10. 黒色シルト(10YR2/1) 粘性やや弱 しまりやや疎
地山ブロック微量含む。
11. 黄褐色シルト(10YR5/6) 粘性弱 しまり密
壁からの崩落土。



第142図 16~20号土坑

20号土坑（第142図、写真図版30）

- [位置・検出状況] 調査区南側ⅡC3gグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。
- [その他の遺構との重複] 18・19号土坑と重複する。本遺構が最も新しい。
- [平面形] 歪な楕円形。 [規模] (272) × (262) cm、深さ67cm
- [埋土] 12層からなる。黒褐色シルトを主体とし、明黄褐色細砂が混入する。
- [底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。凹凸がある。壁はトレンチで確認した。わずかに外へと広がりながら立ち上がる。
- [出土遺物] なし。
- [性格] 不明。
- [時期] 周辺の遺構の年代から縄文時代晩期中葉の範疇と判断した。

21号土坑（第143図、写真図版31）

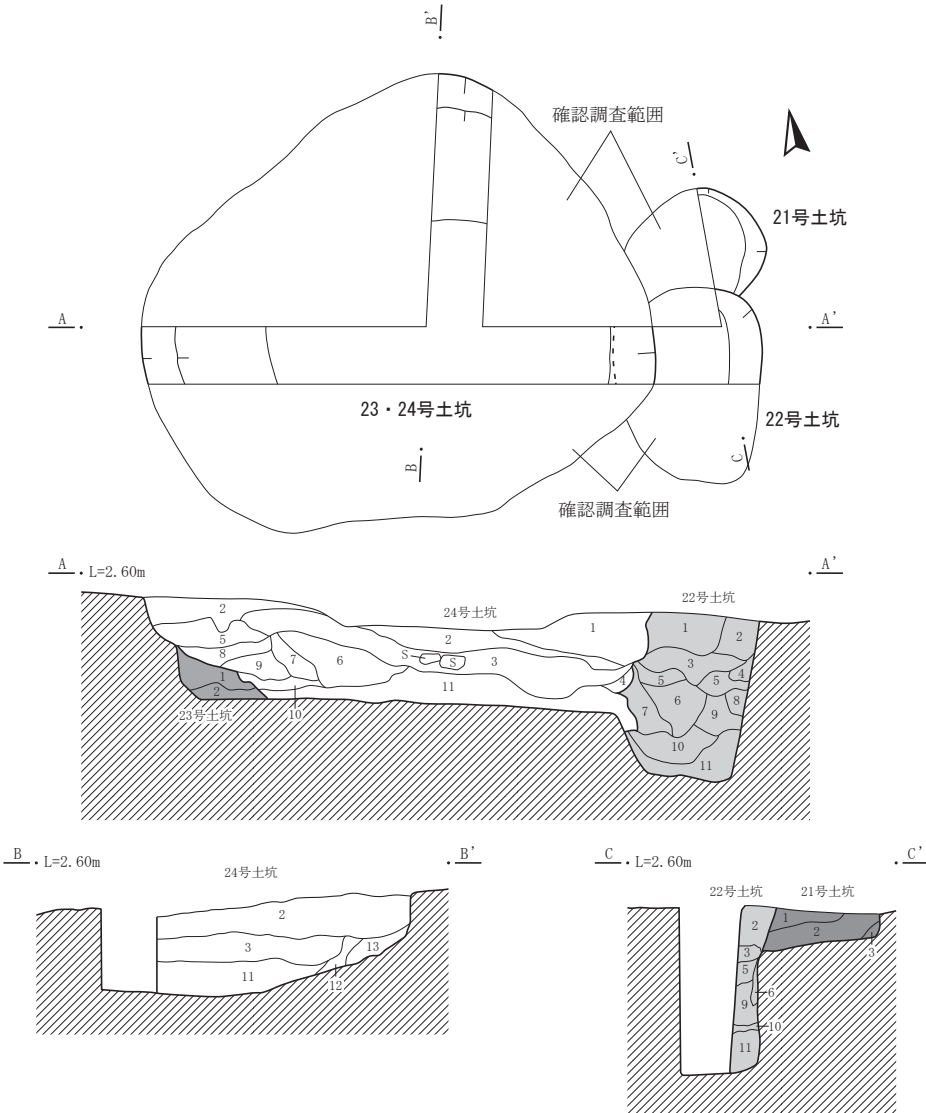
- [位置・検出状況] 調査区南側ⅡC3hグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。
- [その他の遺構との重複] 22号・24号土坑と重複する。本遺構が最も古い。
- [平面形] 不整な楕円形。 [規模] (70) × (62) cm、深さ15cm
- [埋土] 3層からなる。黒褐色シルトを主体とし、白色粒子が混入する。
- [底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。ほぼ平坦である。壁はトレンチで確認した。直立気味である。
- [出土遺物] なし。
- [性格] 不明。
- [時期] 周辺の遺構の年代から縄文時代晩期中葉の範疇と判断した。

22号土坑（第143図、写真図版31）

- [位置・検出状況] 調査区南側ⅡC3hグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。
- [その他の遺構との重複] 21号、24号土坑と重複する。本遺構は21号土坑より新しく、24号土坑より古い。
- [平面形] 不整な楕円形。 [規模] (103) × (62) cm、深さ87cm
- [埋土] 11層からなる。黒褐色シルトと黄褐色シルトが互層を呈する。
- [底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。やや歪である。壁はトレンチのみで確認した。わずかに外へと広がるがほぼ直立である。
- [出土遺物] 埋土中から縄文土器621.4gが出土している。いずれも小片である。
- [性格] 不明。
- [時期] 周辺の土器の年代から縄文時代晩期中葉の範疇と判断した。

23号土坑（第143図、写真図版31・85）

- [位置・検出状況] 調査区南側ⅡC3hグリッド（確認調査範囲）に位置する。24号土坑の下で別の遺構を確認し、本遺構とした。
- [その他の遺構との重複] 24号土坑と重複する。本遺構の方が古い。
- [平面形] 不明。 [規模] 不明、深さ(30) cm
- [埋土] 2層からなる。にぶい黄褐色シルトを主体とする。壁崩落土である。
- [底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。平坦と推定する。壁はトレンチのみ確認した。ほぼ直立である。



21号土坑

- | | | | |
|---------------------|-------|--------|--------------------|
| 1. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや疎 | 白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 2. 黒色シルト (10YR2/1) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量含む。 |
| 3. 黄褐色シルト (10YR6/6) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 崩落土。 |

22号土坑

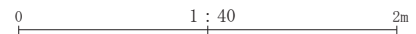
- | | | | |
|-------------------------|-------|--------|---------------------------|
| 1. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性弱 | しまり密 | 粗砂少量、白色粒子微量含む。 |
| 2. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性弱 | しまりやや密 | 粗砂少量、白色粒子微量 地山ブロック微量含む。 |
| 3. 黒褐色砂質シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 礫 粗砂少量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 4. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 壁からの崩落土。 |
| 5. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 6. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性弱 | しまりやや密 | 粗砂少量、白色粒子微量含む。 |
| 7. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性弱 | しまりやや密 | 粗砂少量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 8. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性弱 | しまり密 | 白色粒子微量含む。 |
| 9. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性弱 | しまりやや密 | 粗砂少量、白色粒子微量、地山ブロック少量含む。 |
| 10. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性やや弱 | しまりやや疎 | 粗砂少量、白色粒子微量、地山ブロック少量含む。 |
| 11. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性やや強 | しまりやや疎 | 崩落土。地山ブロック多量含む。 |

23号土坑

- | | | | |
|------------------------|-----|------|----------|
| 1. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性弱 | しまり密 | 壁からの崩落土。 |
| 2. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) | 粘性弱 | しまり密 | 壁からの崩落土。 |

24号土坑

- | | | | |
|-------------------------|-------|--------|------------------------------------|
| 1. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 2. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量、地山ブロック少量含む。 |
| 3. 黒色シルト (10YR2/1) | 粘性弱 | しまりやや密 | 明黄褐色粗砂少量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む、土器片混じる。 |
| 4. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) | 粘性弱 | しまり密 | 白色粒子微量、明黄褐色粗砂少量含む。 |
| 5. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性弱 | しまりやや密 | 崩落土。明黄褐色粗砂少量、白色粒子微量、地山ブロックやや多く含む。 |
| 6. 黒色シルト (10YR2/1) | 粘性やや弱 | しまり密 | 明黄褐色粗砂少量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。 |
| 7. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 明黄褐色粗砂少量、白色粒子微量、地山ブロック少量含む。 |
| 8. 黒色シルト (10YR2/1) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量、地山ブロック微量含む、土器片混じる。 |
| 9. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性弱 | しまりやや密 | 壁からの崩落土。 |
| 10. 黒褐色砂質シルト (10YR3/2) | 粘性弱 | しまりやや密 | 明黄褐色粗砂少量、地山ブロック微量含む。 |
| 11. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性弱 | しまり密 | 斜面上からの崩落。 |
| 12. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性弱 | しまりやや疎 | 灰黄褐色シルトブロックやや多く、地山ブロック少量含む。 |
| 13. 黄褐色シルト (10YR6/6) | 粘性弱 | しまりやや密 | 壁の崩落土。 |



第 143 図 21～24 号土坑

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 464.3g、石器 1 点が出土している。1 点掲載した (655)。大洞 BC 式の注口土器である。

[性格] 貯蔵穴か。

[時期] 出土した土器の年代から大洞 BC 式期と判断した。

24 号土坑 (第 143 図、写真図版 31・85)

[位置・検出状況] 調査区南側 II C 3h グリッド (確認調査範囲) に位置する。VI 層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 21～23 号土坑と重複する。本遺構が最も新しい。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 272×234cm、深さ 50cm

[埋土] 11 層からなる。上位は黒～黒褐色シルト、下位はにぶい黄褐色シルトが主体である。

[底面・壁] VI 層面を底面と推定した。平坦である。壁はトレンチのみで確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 45.5g、石器 1 点が出土している。1 点掲載した (646)。大木 8b 式新段階の深鉢、胴部片である。

[性格] 不明。

[時期] 出土した土器の年代は大木 8b 式新段階であるが、周辺の遺構の年代やまた重複する 23 号土坑の年代から縄文時代晩期中葉の範疇と判断した。

25 号土坑 (第 144 図、写真図版 31・85・264)

[位置・検出状況] 調査区南側 II C 3h、II C 4h グリッド (確認調査範囲) に位置する。VI 層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な円形。 [規模] 径 100cm、深さ 34cm

[埋土] 9 層からなる。黒褐色シルトを主体とし、地山ブロックが白色粒子の混入が目立つ。

[底面・壁] VI 層面を底面と推定した。ほぼ平坦である。壁は掘り下げた半分のみで確認した。直立する。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 508.8g、石器 2 点が出土している。

縄文土器を 1 点掲載した (647)。大洞 BC 式の鉢で、口縁部に羊歯状文が描かれる。石器は 1 点掲載した (688)。石皿で、縁辺のほぼ全周欠損し、形態からみておそらく全体の 1/4 程度しか残存していないが、II 類で、脚が作出されている。使用面には凹痕は見受けられるが、磨面は確認できなかった。

[性格] 貯蔵穴か。

[時期] 出土した土器の年代から大洞 BC 式期と判断した。

26 号土坑 (第 144 図、写真図版 31・85)

[位置・検出状況] 調査区南側 II C 2i グリッド (確認調査範囲) に位置する。VI 層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 27 号土坑と重複する。本遺構の方が新しい。

[平面形] 不整な円形。 [規模] 開口径 100cm、底面径 (115) cm、深さ 143cm

[埋土] 16 層からなる。暗褐色シルトを主体とし、炭化物、地山ブロックの混入が目立つ。

[底面・壁] VI 層面を底面と推定した。ほぼ平坦である。壁は掘り下げた範囲で確認した。大きくオーバーハングしながら立ちあがる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 4,105.3g、石器 4 点、土製品 2 点が出土している。縄文土器の出土量

は多いが、いずれも小片である。

縄文土器を6点掲載した。648は中期の深鉢で、横位の把手が付く。無文なので、詳しい時期は不明である。649は大木8b式新段階の深鉢胴部片である。651は後期後葉の鉢か。652は大木10式新段階の深鉢胴部片で、単軸絡条体1類を地文とする。653は中期の深鉢底部で、底面に敷物圧痕（ごぞ目）が見受けられる。

円盤形土製品1点（654）掲載した。深鉢の胴部を転用している。施文される縄文原体の形態から、中期の範疇と推測する。

[性格] 貯蔵穴。

[時期] 出土した土器の年代は縄文時代中期中葉から後葉であるが、周辺に分布する貯蔵穴の年代を考慮して縄文時代晩期中葉と判断した。

27号土坑（第144図、写真図版31・85）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡC2iグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。26号土坑の精査中にその底面が大きく広がり、別の土坑が重複していることが分かった。

[その他の遺構との重複] 26号土坑と重複する。本遺構の方が古い。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] (117) × 110cm、深さ140cm

[埋土] 本遺構は26号土坑を掘り下げた際、同時に掘ってしまい、断面を確認していない。したがって不明である。

[底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。平坦である。壁は全周する。大きくオーバーハングしながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器528.4g、石器3点、土製品1点が出土している。

縄文土器を1点掲載した（656）。小片だが、細い沈線文を地文とし、沈線による弧状文や押し文が施文されており、大木7a式古段階と判断した。

また円盤形土製品1点（657）も掲載している。深鉢の胴部片の転用で、施文される縄文原体の形態から中期の範疇と推測する。

[性格] 貯蔵穴。

[時期] 出土した土器の年代は縄文時代中期初頭であるが、周辺に分布する貯蔵穴の時期を考慮し、縄文時代晩期中葉の範疇と推測する。

28号土坑（第144図、写真図版31・85）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡC4jグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 23号住居跡と重複する。本遺構の方が古い。

[平面形] 長楕円形。 [規模] 105 × 52cm、深さ42cm

[埋土] 5層からなる。黒褐色シルトを主体とし、明黄褐色細砂の混入が目立つ。

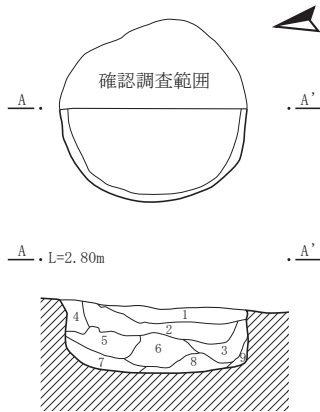
[底面・壁] Ⅴ層面を底面と推定した。平坦である。壁は掘り下げた範囲で確認した。直立だが、中位に段がある。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器1,905.7gが出土している。

5点掲載した。658は大木10式～後期初頭の深鉢である。口縁部に把手が付き、また押し文を加えた隆帯が巡る。659・661は後期前葉後半の深鉢胴部片で、659は帯縄文が施文される。660は大洞B式の深鉢で入組文が施文される。662は大洞BC式の壺の頸部で突起が巡る。

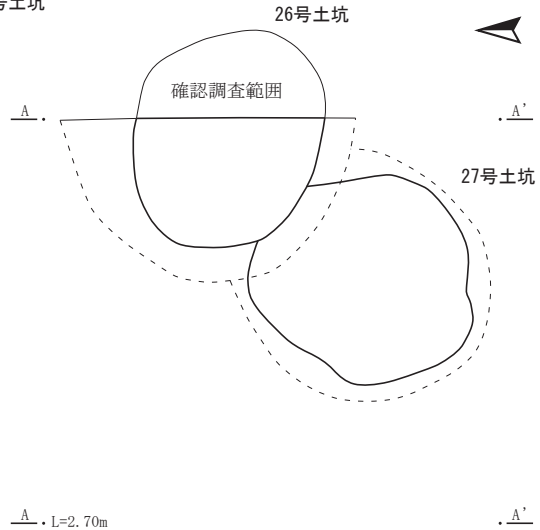
1 縄文時代

25号土坑



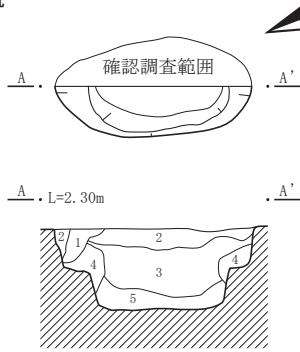
- | | | | |
|----------------------------|-------|--------|-------------------------------------|
| 1. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量含む。 |
| 2. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量、
明黄褐色粗砂中量、
地山ブロック微量含む。 |
| 3. 黒色シルト (10YR2/1) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量、
地山ブロック微量含む。 |
| 4. 黄褐色シルト (10YR5/6) | 粘性弱 | しまりやや疎 | 壁からの崩落土。 |
| 5. 黒褐～暗褐色シルト (10YR3/2～3/3) | 粘性やや弱 | しまりやや疎 | 白色粒子微量、
地山ブロック微量含む。 |
| 6. 暗褐色シルト (10YR3/3) | 粘性弱 | しまり密 | 明黄褐色粗砂少量、
にぶい黄褐色シルトブロック多量含む。 |
| 7. 暗褐色シルト (10YR3/3) | 粘性弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量、
地山ブロック微量含む。 |
| 8. 暗褐色シルト (10YR3/3) | 粘性弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量、
地山ブロック微量、
明黄褐色細砂中量含む。 |
| 9. 黄褐色シルト (10YR5/6) | 粘性弱 | しまり密 | 壁からの崩落土。 |

26・27号土坑



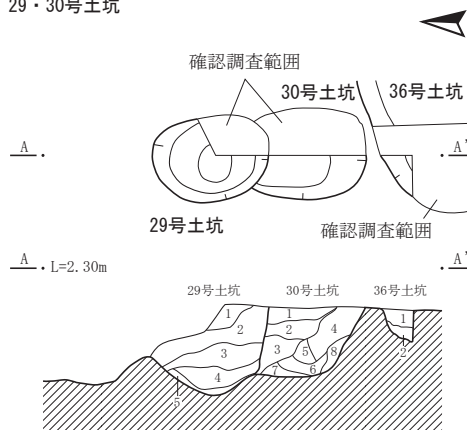
- | | | | |
|-------------------------|-------|--------|-------------------------------------|
| 1. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性弱 | しまり疎 | カクラン土。礫少量、
地山ブロック少量含む。土器片混じる。 |
| 2. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量含む。 |
| 3. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子微量、
地山ブロック微量含む。 |
| 4. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 礫少量、炭化物微量、
地山ブロック少量含む。 |
| 5. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 礫少量、地山ブロック少量含む。 |
| 6. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 炭化物微量含む。 |
| 7. 黒褐色シルト (10YR3/1～3/2) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 地山ブロック微量含む。 |
| 8. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 炭化物微量、白色粒子微量含む。 |
| 9. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 地山ブロック微量含む。 |
| 10. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 壁からの崩落土。粗砂少量、
白色粒子微量、地山ブロック多量含む。 |
| 11. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 地山ブロック少量含む。 |
| 12. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 礫少量、明黄褐色粗砂少量含む。 |
| 13. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 粗砂少量、炭化物微量含む。 |
| 14. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性弱 | しまりやや密 | 崩落土。 |
| 15. 明黄褐色シルト (10YR6/6) | 粘性弱 | しまり密 | 崩落土。 |
| 16. 褐色シルト (10YR4/4) | 粘性弱 | しまりやや密 | 崩落土。 |

28号土坑

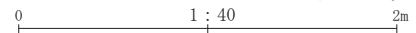


- | | | | |
|----------------------|-------|--------|----------------------------------|
| 1. 黒色シルト (10YR1.7/1) | 粘性やや弱 | しまり疎 | |
| 2. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや疎 | 明黄褐色細砂中量含む。 |
| 3. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 明黄褐色細砂中量、
白色粒子微量含む。 |
| 4. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) | 粘性やや弱 | しまりやや疎 | 明黄褐色細砂中量、
地山ブロック少量含む。壁からの崩落土。 |
| 5. 黒色シルト (10YR2/1) | 粘性中 | しまりやや疎 | 明黄褐色細砂中量、
地山ブロック微量含む。 |

29・30号土坑



- | | | | |
|------------------------|-------|--------|-----------------------------|
| 29号土坑 | | | |
| 1. 黒色シルト (10YR2/1) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 粗砂少量含む。 |
| 2. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 粗砂少量、白色粒子微量、
地山ブロック微量含む。 |
| 3. 黒褐色シルト (10YR3/1) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 粗砂少量、白色粒子微量、
炭化物微量含む。 |
| 4. 黒色シルト (10YR2/1) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 地山ブロック微量、炭化物微量含む。 |
| 5. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性弱 | しまりやや疎 | 壁からの崩落土。 |
| 30号土坑 | | | |
| 1. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 粗砂少量、白色粒子微量含む。 |
| 2. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 粗砂少量、白色粒子微量、
地山ブロック微量含む。 |
| 3. 黄褐色シルト (10YR6/6) | 粘性やや強 | しまり強 | 粗砂少量、白色粒子微量含む。 |
| 4. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 粗砂少量、地山ブロック微量含む。 |
| 5. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 地山ブロック中量含む。 |
| 6. 黒色シルト (10YR2/1) | 粘性やや強 | しまりやや疎 | 地山ブロック微量含む。 |
| 7. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 地山ブロック少量含む。 |
| 8. 黄褐色シルト (10YR6/6) | 粘性やや強 | しまり強 | 壁からの崩落土。 |
| 36号土坑 | | | |
| 1. 黒色シルト (10YR2/1) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 白色粒子微量含む。 |
| 2. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 礫少量、白色粒子微量含む、
土器片混じる。 |



第144図 25～30号土坑

[性格] 不明。

[時期] 出土した土器は年代がばらばらで、時期判断の根拠にはなりえない。重複する 23 号住居跡の年代から縄文時代晩期、大洞 BC ～ C1 式期の範疇と判断した。

29 号土坑（第 144 図、写真図版 31・85）

[位置・検出状況] 調査区南側 II D 3a グリッド（確認調査範囲）に位置する。VI 層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 30 号土坑と重複する。本遺構の方が新しい。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 63 × 44cm、深さ 48cm

[埋土] 5 層からなる。黒～黒褐色シルトを主体とし、明黄褐色細砂の混入が目立つ。

[底面・壁] VI 層面を底面と推定した。中央が窪む。壁はほぼ全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 257.4g、石器 1 点が出土している。

縄文土器を 2 点掲載した。663 は大洞 BC 式の鉢である。口縁部に羊歯状文が施文される。664 は大木 8b 式新段階の深鉢胴部片である。

[性格] 不明。

[時期] 出土した土器は年代がばらばらで、時期判断の根拠にはなりえない。周辺の遺構の年代から縄文時代晩期、大洞 BC 式期の範疇と判断した。

30 号土坑（第 144 図、写真図版 31・265）

[位置・検出状況] 調査区南側 II D 3a グリッド（確認調査範囲）に位置する。VI 層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 29 号土坑と重複する。本遺構の方が古い。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] (60) × 47cm、深さ 35cm

[埋土] 8 層からなる。黒褐色シルトと黄褐色シルトが互層を呈する。

[底面・壁] VI 層面を底面と推定した。平坦である。壁は掘り下げた範囲で確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 石器 1 点が出土している (689)。敲磨器類 I 類で、球状の礫を素材とし、全面に磨痕が見受けられる。

[性格] 不明。

[時期] 時期判断できる遺物が出土していないので、時期の推定は難しいが、重複する 29 号土坑の年代から縄文時代晩期中葉の範疇と推測する。

31 号土坑（第 145 図、写真図版 32）

[位置・検出状況] 調査区南側 II D 3a グリッド（確認調査範囲）に位置する。VI 層上面で検出した。

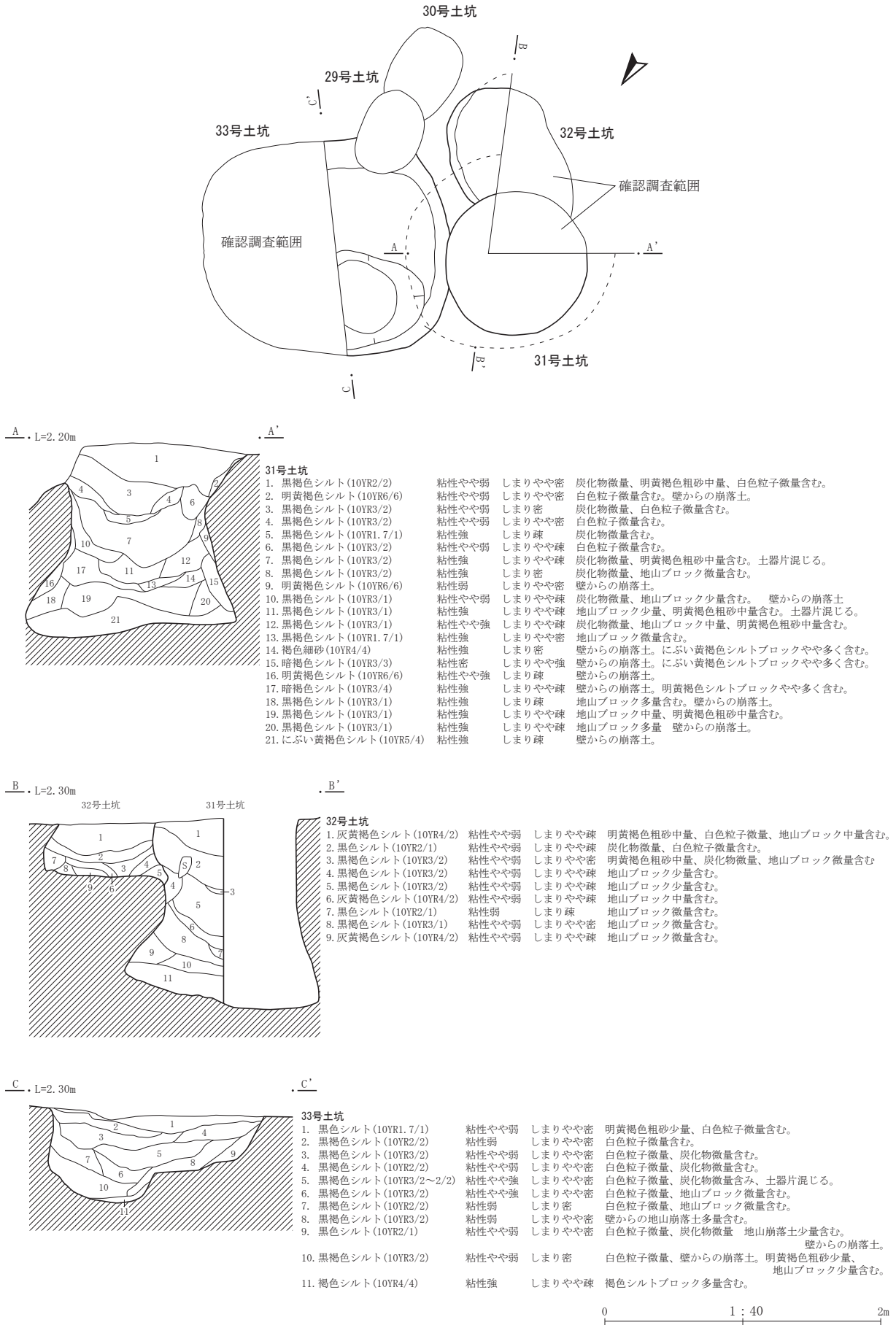
[その他の遺構との重複] 32・33 号土坑と重複する。本遺構が最も新しい。

[平面形] 楕円形。 [規模] 開口径 103cm、底面径 (151) cm、深さ 120cm

[埋土] 21 層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や地山ブロックの混入が目立つ。また壁際には崩落土が堆積する。

[底面・壁] VI 層面を底面と推定した。やや歪だが平坦である。壁は掘り下げた範囲で確認した。大きくオーバーハングしながら立ち上がる。

[出土遺物] なし。



第 145 図 31~33 号土坑

[性格] 貯蔵穴。

[時期] 遺物が出土しないので、時期の推定は難しいが、周辺の遺構の年代から縄文時代晩期中葉の範疇と推測する。

32号土坑（第145図、写真図版32・85・86・265）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡD3aグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 31号土坑と重複する。本遺構の方が古い。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] (110) × (75) cm、深さ40cm

[埋土] 9層からなる。上位は灰黄褐色シルト、下位は黒褐色シルトを主体する。

[底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。平坦である。壁は掘り下げた範囲で確認した。緩やかにオーバーハングしながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器2,608.7g、石器5点、土製品2点が出土している。

縄文土器を3点掲載した。665は大洞BC式の鉢で、口縁部に羊歯状文が施文される。666は大洞C1式の壺か。667は晩期の壺底部である。他に円盤形土製品1点（668）を掲載した。深鉢胴部片の転用で、円形に整形している。石器は1点掲載した（690）。石鏃で、やや大型である基部が欠損するが、Ⅴ類と推測する。

[性格] 貯蔵穴か。

[時期] 出土した土器の年代から縄文時代晩期、大洞BC～C1式期と判断した。

33号土坑（第145図、写真図版32・86）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡD3aグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 29号、31号土坑と重複する。本遺構が最も古い。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 180 × 155cm、深さ63cm

[埋土] 11層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や白色粒子の混入が目立つ。

[底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。ほぼ平坦で、北側に小穴がある。壁は掘り下げた範囲で確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器258.0g、石器2点が出土している。

縄文土器を1点掲載した（669）。大洞BC式の鉢で口縁部に沈線と刻みが施文される。

[性格] 不明。

[時期] 出土した土器の年代から縄文時代晩期、大洞BC式期と判断した。

34号土坑（第146図、写真図版32・86）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡD3bグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

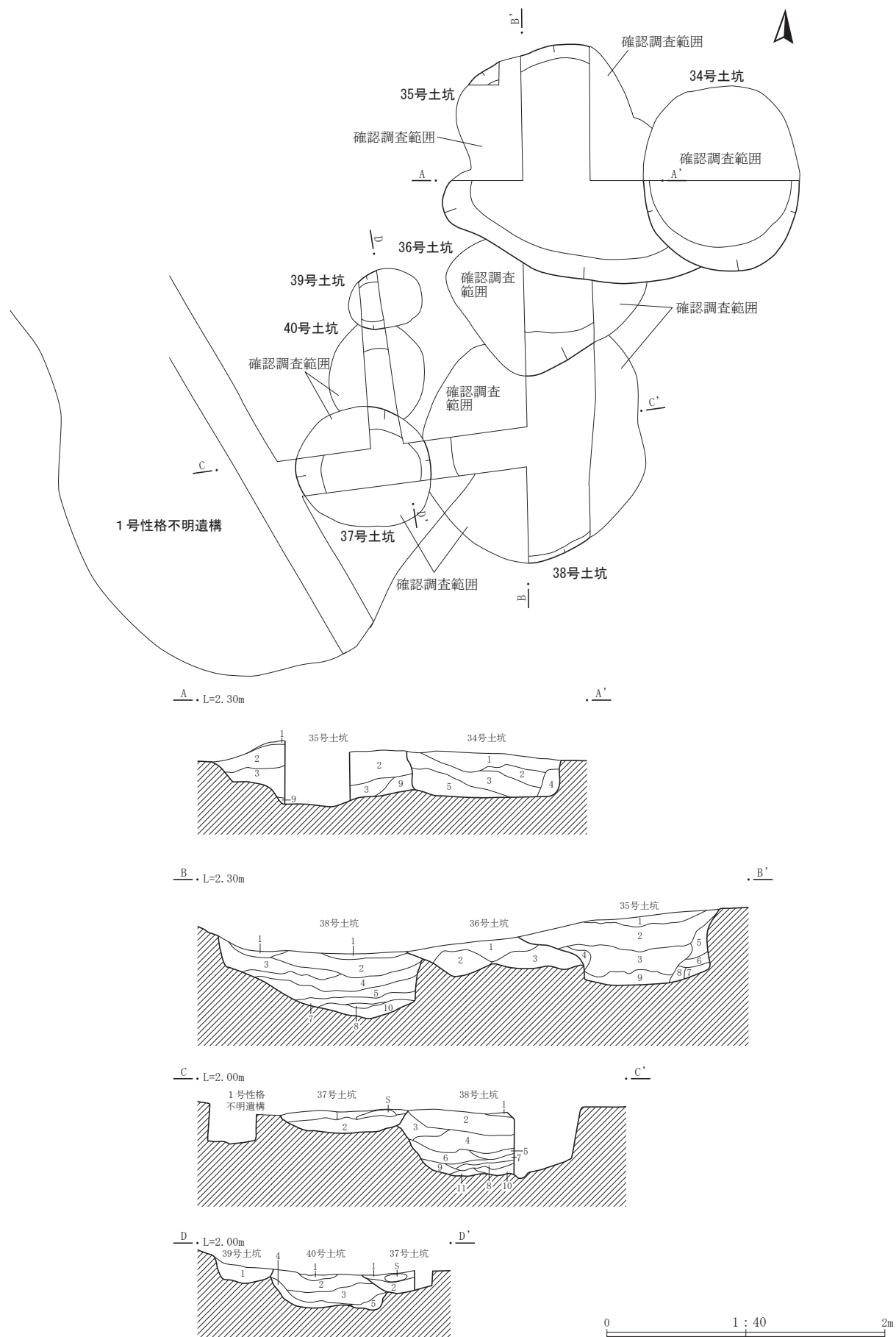
[その他の遺構との重複] 35号土坑と重複する。本遺構の方が新しい。

[平面形] 楕円形。 [規模] 114 × (113) cm、深さ31cm

[埋土] 5層からなる。黒褐色シルトを主体とし、明黄褐色細砂、白色粒子の混入が目立つ。

[底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。ほぼ平坦である。壁は掘り下げた範囲で確認した。直立である。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器2,513.0g、石器3点が出土している。比較的縄文土器の出土量が多い。縄文土器を5点掲載した。670は後期中葉後半の深鉢口縁部の突起である。671～673は大洞BC式の鉢で、いずれも口縁部に羊歯状文や沈線と刻みが巡る。674は大洞BC式の注口土器で、注口部から胴部に沈線が施文される。



第 146 図 34~40 号土坑 1

34号土坑

1. 黒褐色シルト(10YR3/2)	粘性やや弱	しまりやや密	炭化物微量、明黄褐色粗砂少量含む。
2. 黒褐色シルト(10YR3/2)	粘性やや弱	しまりやや密	明黄褐色粗砂少量、白色粒子微量含む。
3. 黒褐色シルト(10YR1/3)	粘性やや弱	しまりやや密	明黄褐色粗砂少量、白色粒子微量含む。
4. 黒褐色シルト(10YR3/2)	粘性やや弱	しまりやや密	明黄褐色粗砂少量、地山ブロック微量含む。
5. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)	粘性やや弱	しまりやや密	地山ブロック微量含む。

35号土坑

1. 黒色シルト(10YR2/1)	粘性やや弱	しまりやや密	白色粒子微量含む。
2. 黒褐色シルト(10YR3/2)	粘性やや弱	しまりやや密	礫少量、白色粒子微量含む、土器片混じる。
3. 黒褐色シルト(10YR2/2)	粘性やや弱	しまりやや密	礫少量、白色粒子微量含む。
4. 黒褐色シルト(10YR3/2)	粘性やや強	しまりやや密	36号土坑からの流れ込み、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。
5. 黒褐色シルト(10YR3/2)	粘性やや弱	しまりやや密	崩落土。白色粒子微量、地山ブロック中量含む。
6. 黒色シルト(10YR2/2)	粘性やや強	しまりやや密	白色粒子微量、地山ブロック微量含む、土器片混じる。
7. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)	粘性やや強	しまりやや密	地山ブロック(崩落土)多量含む。
8. 灰黄褐色シルト(10YR4/2)	粘性やや強	しまりやや密	白色粒子微量、粗砂少量、地山ブロック(崩落土)やや多く含む。
9. 黒褐色シルト(10YR3/2)	粘性やや弱	しまりやや密	地山ブロック微量含む。

36号土坑

1. 灰黄褐色～黒褐色シルト(10YR4/2～3/2)	粘性弱	しまりやや疎	明黄褐色細砂中量、白色粒子微量、地山ブロック少量含む。
2. 黒褐色シルト(10YR3/2)	粘性やや弱	しまりやや疎	明黄褐色細砂中量、白色粒子微量、地山ブロック中量含む。
3. 黄褐色シルト(10YR5/6)	粘性やや弱	しまり密	

37号土坑

1. 黒褐色シルト(10YR3/1)	粘性やや弱	しまりやや疎
2. 黒褐色シルト(10YR3/2)	粘性やや弱	しまりやや疎

38号土坑

1. 黒褐色シルト	(10YR3/2)	粘性やや弱	しまりやや密	礫少量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。
2. 黒褐色シルト	(10YR2/2)	粘性やや強	しまりやや密	礫少量、白色粒子微量、地山ブロック微量含む。
3. 黄褐色シルト	(10YR6/6)	粘性弱	しまりやや密	白色粒子微量含む。
4. 黒褐色シルト	(10YR2/2)	粘性やや強	しまりやや密	壁からの崩落土。
5. 黒褐色シルト	(10YR2/2)	粘性やや強	しまりやや密	白色粒子微量、地山ブロックやや多く含む。
6. 灰黄褐色シルト	(10YR4/2)	粘性やや強	しまりやや密	白色粒子微量、地山ブロック少量含む。
7. 黒褐色シルト	(10YR2/2)	粘性やや強	しまりやや密	白色粒子微量、地山ブロック中量含む。
8. 黒色シルト	(10YR2/1)	粘性やや強	しまりやや密	礫少量、地山ブロック微量含む。
9. にぶい黄褐色シルト	(10YR5/4)	粘性弱	しまりやや密	
10. 暗褐色シルト	(10YR2/2)	粘性やや強	しまりやや密	礫微量、地山ブロック少量含む。
11. 黄褐色シルト	(10YR6/6)	粘性弱	しまりやや密	

39号土坑

1. 黒褐色シルト(10YR3/2)	粘性やや弱	しまりやや密	白色粒子微量、地山ブロック微量含む。
--------------------	-------	--------	--------------------

40号土坑

1. 黒褐色シルト(10YR3/1)	粘性やや弱	しまりやや疎	炭化物微量、白色粒子微量含む。
2. 黒褐色シルト(10YR3/2)	粘性やや弱	しまりやや疎	炭化物微量、地山ブロック微量、白色粒子微量含む。
3. 黒褐色シルト(10YR3/2)	粘性やや強	しまりやや密	白色粒子微量、地山ブロック少量含む。
4. 黒褐色シルト(10YR3/1)	粘性やや強	しまりやや密	白色粒子微量、地山ブロック微量含む。
5. 黄褐色シルト(10YR6/6)	粘性弱	しまりやや疎	壁からの崩落土。

第 147 図 34～40号土坑2

[性格] 貯蔵穴か。

[時期] 出土した土器には時期幅があるが、最も多く出土している縄文時代晩期、大洞 BC 式期を本遺構の時期と判断した。

35号土坑(第146図、写真図版32・86)

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡD3bグリッド(確認調査範囲)に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 34号、36号土坑と重複する。本遺構は36号土坑より新しく、34号土坑より古い。

[平面形] 歪な楕円形。 [規模] (184) × 169cm、深さ35cm

[埋土] 9層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物が混入する。

[底面・壁] Ⅵ層土面を底面と推定した。ほぼ平坦である。壁は掘り下げた範囲で確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器855.4g、石器1点が出土している。

縄文土器を1点掲載した。大洞 BC 式の鉢口縁部片で、羊歯状文が施文される。

[性格] 貯蔵穴か。

[時期] 出土した土器の年代から縄文時代晩期、大洞 BC 式期と判断した。

36号土坑（第146図、写真図版32・86）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡD3bグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 35号、38号土坑と重複する。本遺構は38号土坑より新しく、35号土坑より古い。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 220×200cm、深さ35cm

[埋土] 3層からなる。灰黄褐～黒褐色シルトを主体とし、明黄褐色細砂、白色粒子の混入が目立つ。

[底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。やや歪に凹凸がある。壁はトレンチのみで確認した。大きく広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器696.6gが出土している。

縄文土器を2点掲載した。676は晩期の深鉢の口縁部片である無文なので、詳細は不明。677は後期中葉の深鉢胴部片である。

[性格] 不明。

[時期] 出土した土器は年代がばらばらで、時期判断の根拠にはなりえない。周辺の遺構の年代から縄文時代晩期の範疇と判断した。

37号土坑（第146図、写真図版33）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡD3bグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 38号、40号土坑と重複する。本遺構が最も新しい。

[平面形] 楕円形。 [規模] 97×(86)cm、深さ15cm

[埋土] 2層からなる。黒褐色シルトを主体とする。

[底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。丸く窪む。壁はトレンチのみで確認した。大きく広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] なし。

[性格] 不明。

[時期] 遺物が出土しないので、時期の推定は難しいが、重複する1号性格不明遺構の年代から縄文時代晩期、大洞BC～C1式期の範疇と推測する。

38号土坑（第146図、写真図版33・86・265）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡD3bグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 36号・37号土坑と重複する。本遺構が最も古い。

[平面形] 不整な円形。 [規模] 径160cm、深さ45cm

[埋土] 11層からなる。黒褐色シルトを主体とし、地山ブロック、白色粒子が混入する。

[底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。丸く窪む。壁はトレンチのみで確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器1,029.5g、石器3点が出土している。

3点掲載した。678～680は小片だが、いずれも大木8b式新段階に比定される。

石器1点掲載した(691)。石錐である。Ⅱ類でT字状の摘みが作出されている。

[性格] 貯蔵穴か。

[時期] 出土した土器の年代は大木8b式新段階であるが重複する1号性格不明遺構の年代から縄文時代晩期、大洞BC～C1式期と判断した。

39号土坑（第146図、写真図版33）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡD3bグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 40号土坑と重複する。本遺構の方が新しい。

[平面形] 楕円形。 [規模] 55 × (42) cm、深さ10cm

[埋土] 黒褐色シルトを主体とする単層で、地山ブロック、白色粒子の混入が目立つ。

[底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。丸く窪む。壁は全周する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] なし。

[性格] 不明。

[時期] 遺物が出土しないので、時期の推定は難しいが、周辺の遺構の年代から縄文時代晩期の範疇と推測する。

40号土坑（第146図、写真図版33）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡD3bグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] 37号・39号土坑と重複する。本遺構が最も古い。

[平面形] 楕円形。 [規模] (70) × (68) cm、深さ25cm

[埋土] 5層からなる。黒褐色シルトを主体とし、炭化物や白色粒子の混入が目立つ。

[底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。わずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。壁はトレンチのみで確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 259.3g が出土している。いずれも小片である。

[性格] 不明。

[時期] 遺物が出土しないので、時期の推定は難しいが、周辺の遺構の時期を基に縄文時代晩期の範疇と推測する。

41号土坑（第148図、写真図版33）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡD4aグリッド（確認調査範囲）に位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] (64) × (56) cm、深さ31cm

[埋土] 6層からなる。黒褐色シルトを主体とし、明黄褐色細砂の混入が目立つ。

[底面・壁] Ⅵ層面を底面と推定した。丸く窪む。壁は掘り下げた範囲で確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] なし。

[性格] 不明。

[時期] 遺物が出土しないので、時期の推定は難しいが、周辺の遺構の年代から縄文時代晩期の範疇と推測する。

42号土坑（第148図、写真図版33・86）

[位置・検出状況] 調査区南側ⅡD1bグリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] 145 × 116cm、深さ43cm

[埋土] 掘り下げてしまっており、埋土を確認していない。

[底面・壁] VI層面を底面と判断した。平坦である。壁は全周する。大きく広がりながら立ち上がる。
 [出土遺物] 埋土中から縄文土器 976.3g、石器 2点が出土している。

縄文土器を 3点掲載した。681 は大木 8a 式新段階か。682 は大木 8 b 式新段階～大木 9 式古段階に比定される。683 は後期後葉か。

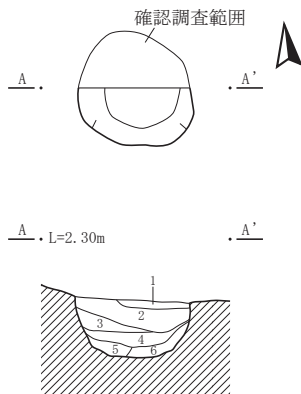
[性格] 不明。

[時期] 出土した土器は年代がばらばらで、時期判断の根拠にはなりえない。周辺の遺構の時期から基にして、縄文時代晩期の範疇と判断した。

43号土坑 (第148図、写真図版33・86)

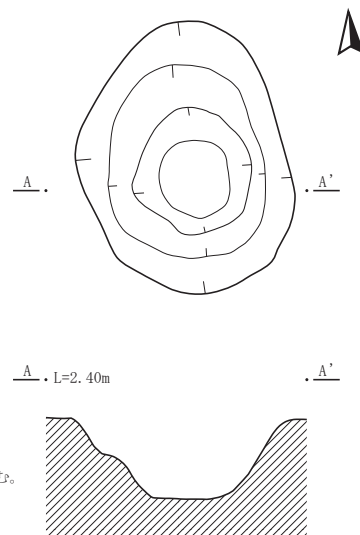
[位置・検出状況] 調査区南側 II D10e、II D10f グリッドに位置する。VI層上面で検出した。なお本遺構の位置する範囲は、精査中、確認調査範囲であったが最終的には本調査範囲となり、そのため本来、全体を掘り下げなければならなかったが、トレンチのみで確認したにすぎない。

41号土坑

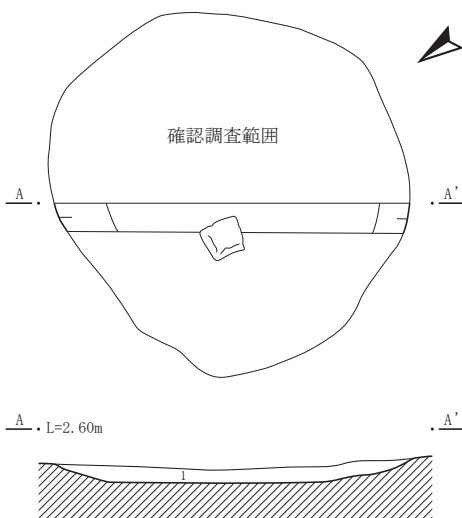


- | | | | |
|----------------------|-------|--------|----------------------|
| 1. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 粗砂 炭化物微量含む。 |
| 2. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 礫・明黄褐色粗砂少量、白色粒子微量含む。 |
| 3. 黒褐色シルト (10YR1/3) | 粘性やや強 | しまりやや密 | 粗砂少量、白色粒子微量含む。 |
| 4. 黒褐色シルト (10YR3/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 粗砂少量、地山ブロック微量含む。 |
| 5. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 地山ブロック微量含む。 |
| 6. 黄褐色シルト (10YR5/6) | 粘性やや弱 | しまりやや密 | 黒褐色シルトブロック少量含む。 |

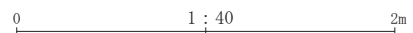
42号土坑



43号土坑



- | | | | |
|---------------------|-------|------|-----------------|
| 1. 黒褐色シルト (10YR2/3) | 粘性やや強 | しまり密 | 炭化物微量、白色粒子微量含む。 |
|---------------------|-------|------|-----------------|



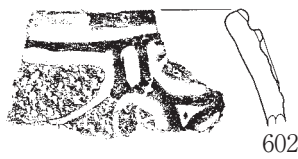
第 148 図 41 ~ 43 号土坑

3号土坑

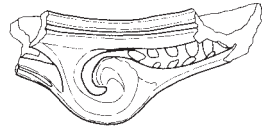


601

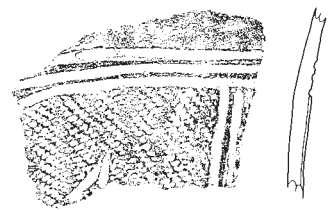
5号土坑



602



603

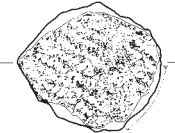


604

4号土坑



606

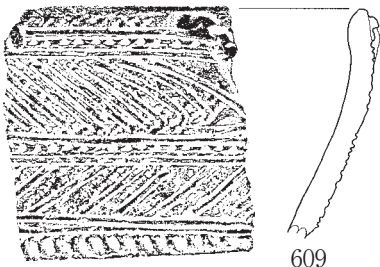


608

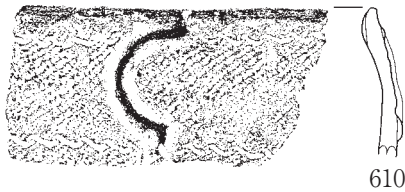


607

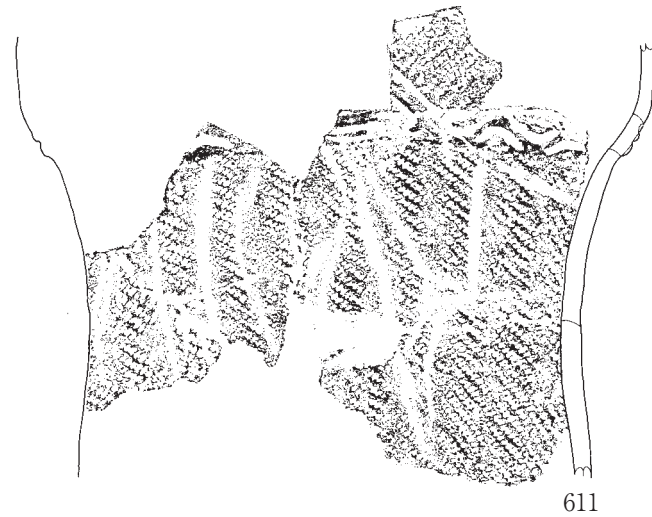
6号土坑



609



610



611

12号土坑



612



613



614



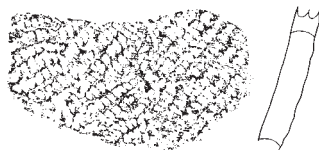
615

11号土坑



617

15号土坑



618

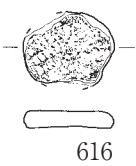
16号土坑



619



620

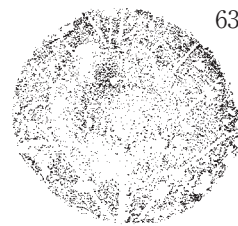
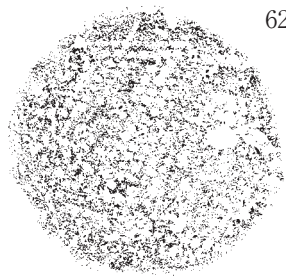
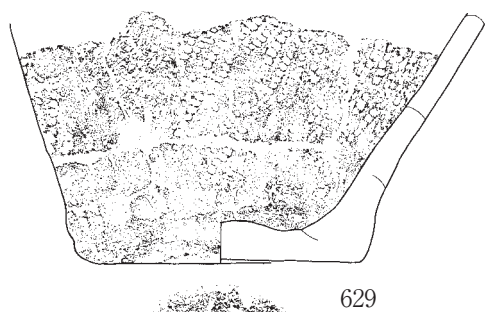
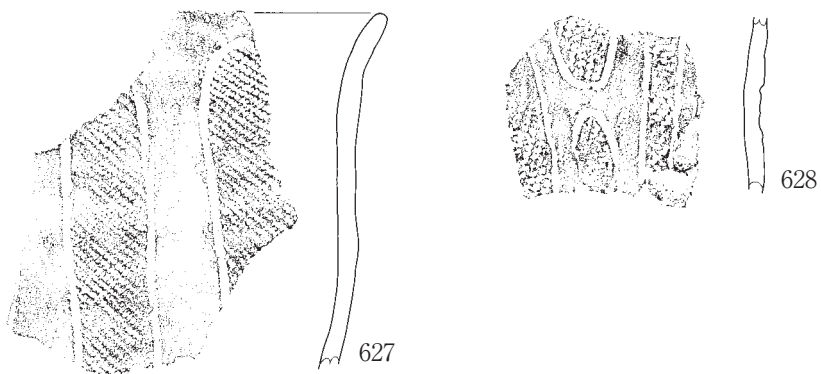
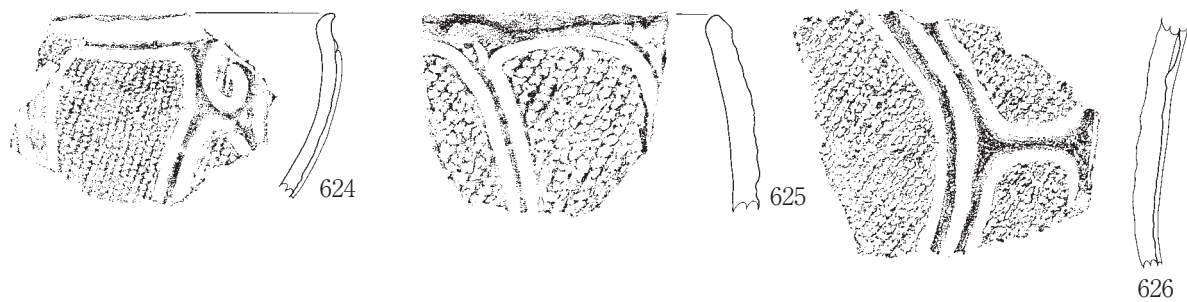
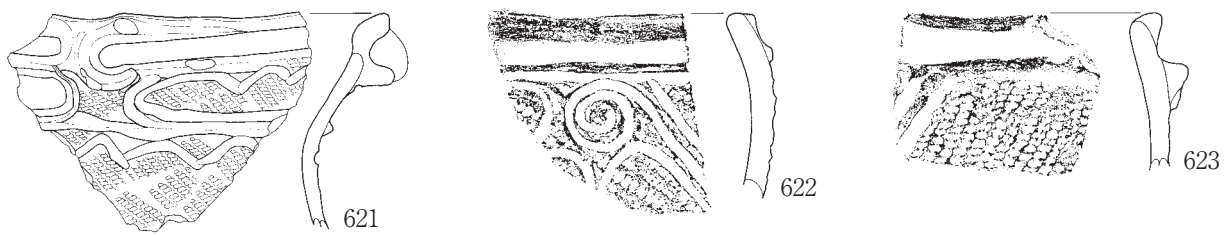


616

0 1 : 3 10 cm

第 149 図 土坑出土遺物 1

13号土坑



0 1 : 3 10 cm

第 150 図 土坑出土遺物 2

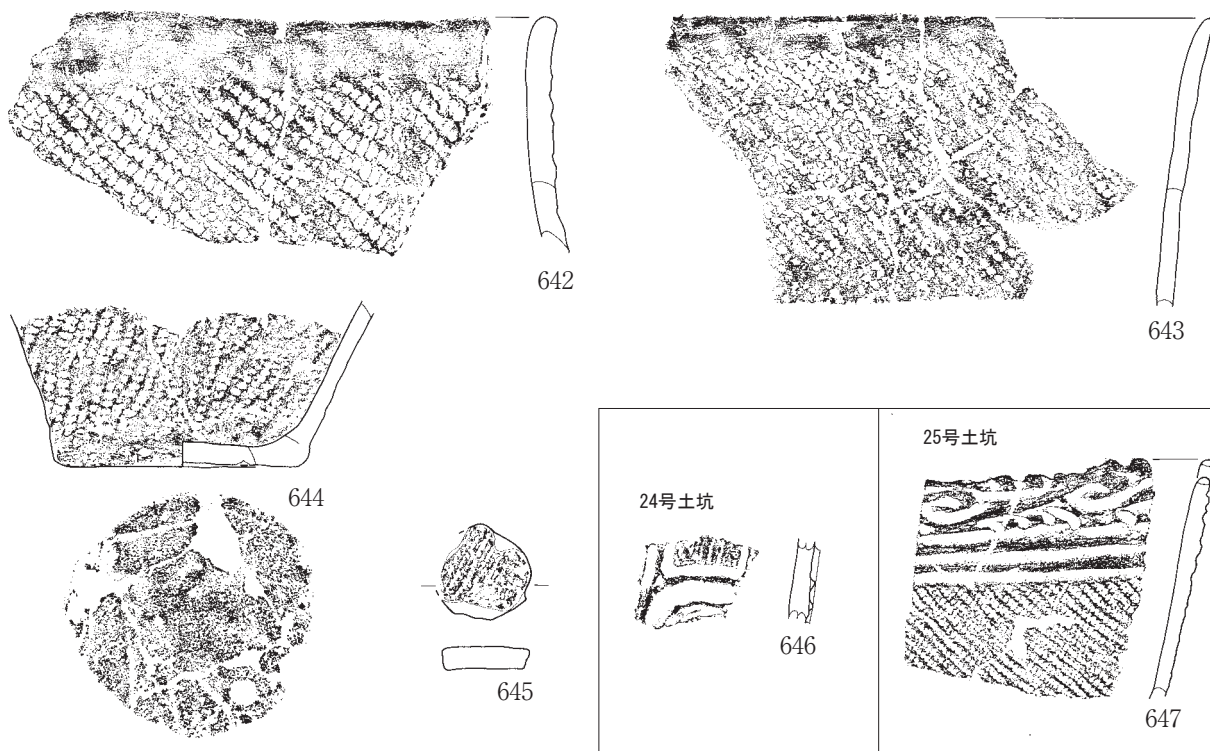
14号土坑 (1)



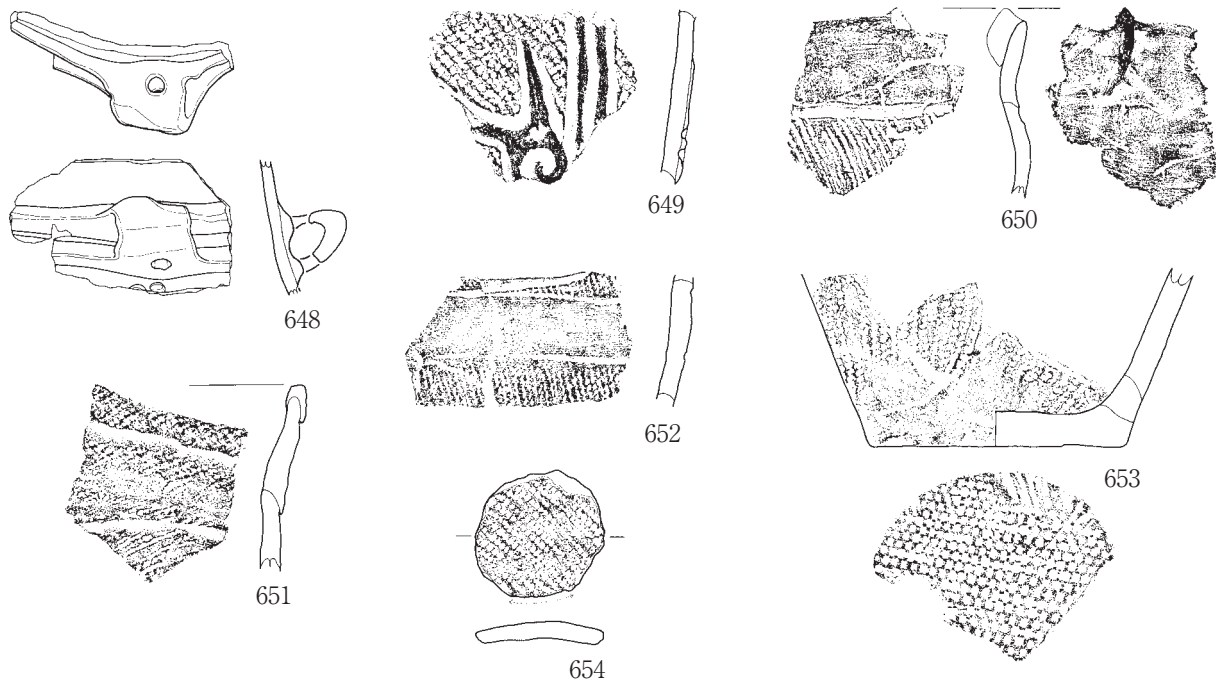
第 151 図 土坑出土遺物 3

1 縄文時代

14号土坑 (2)



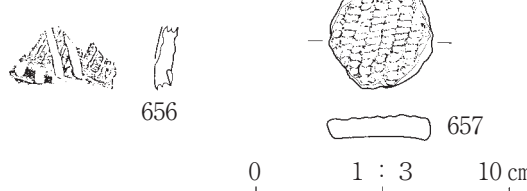
26号土坑



23号土坑



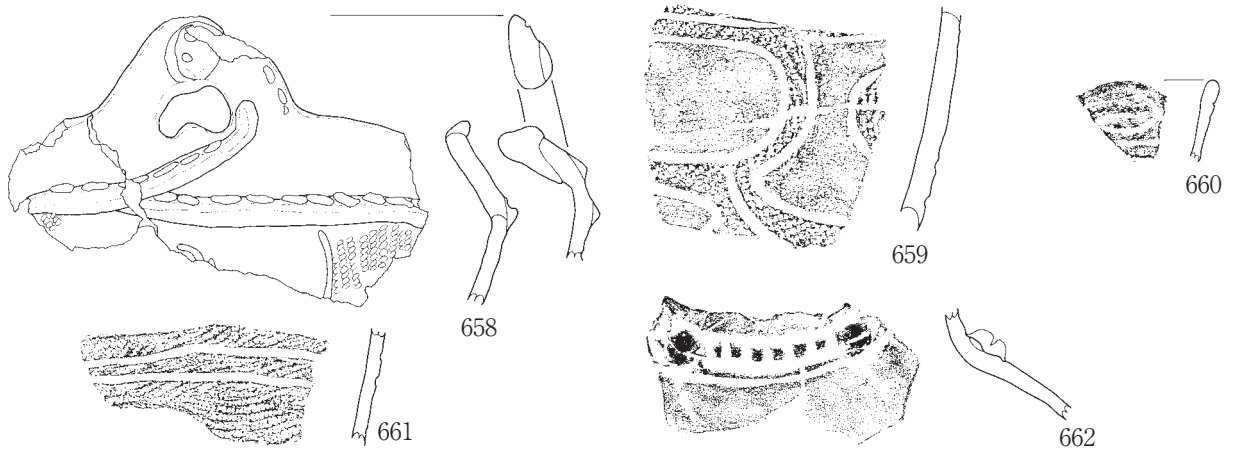
27号土坑



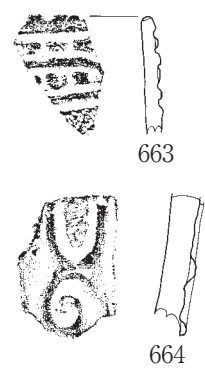
0 1 : 3 10 cm

第 152 図 土坑出土遺物 4

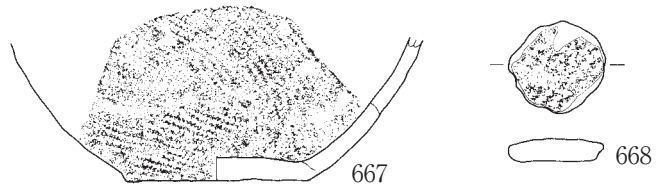
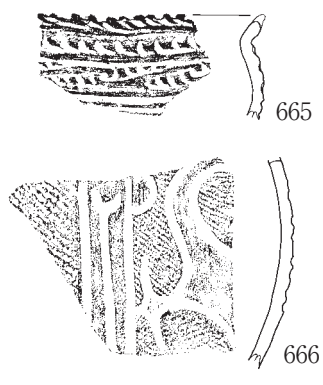
28号土坑



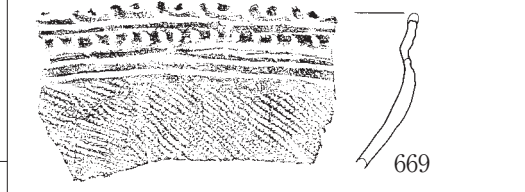
29号土坑



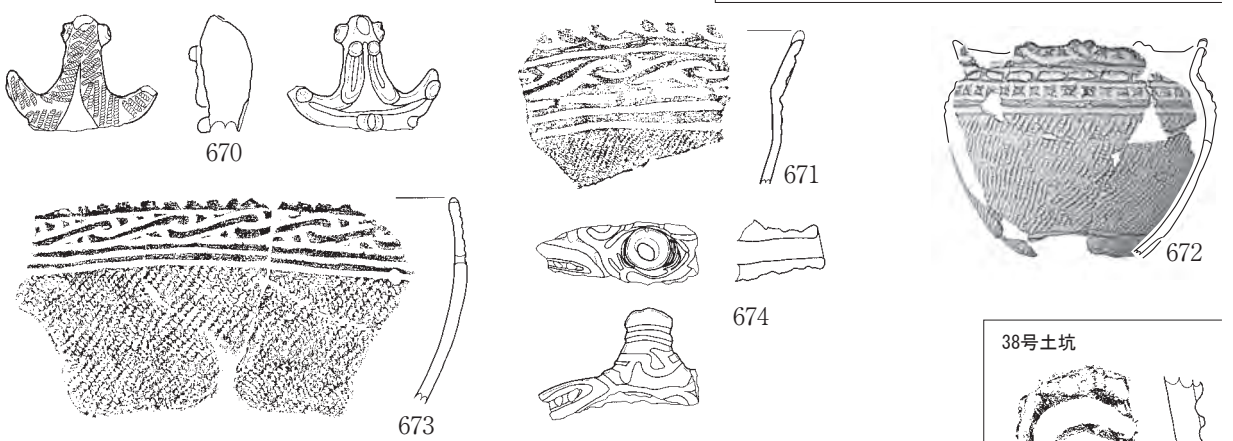
32号土坑



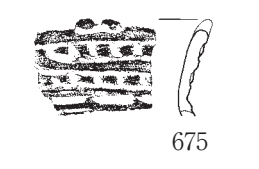
33号土坑



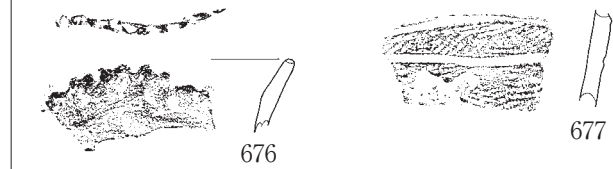
34号土坑



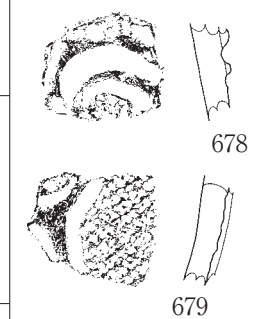
35号土坑



36号土坑



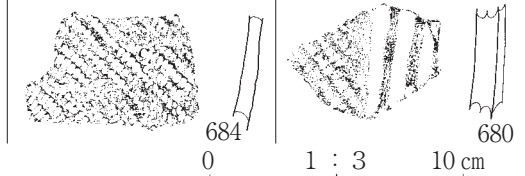
38号土坑



42号土坑



43号土坑

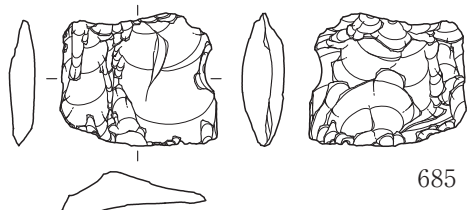


0 1 : 3 10 cm

第 153 図 土坑出土遺物 5

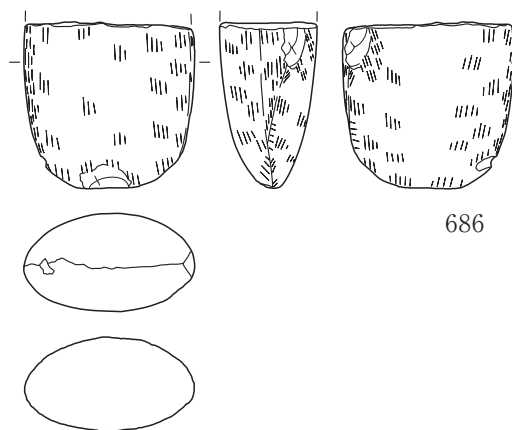
1 縄文時代

5号土坑



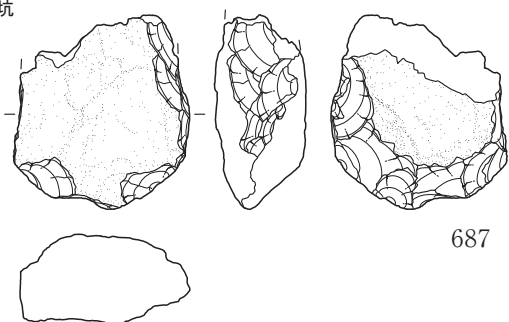
685

12号土坑



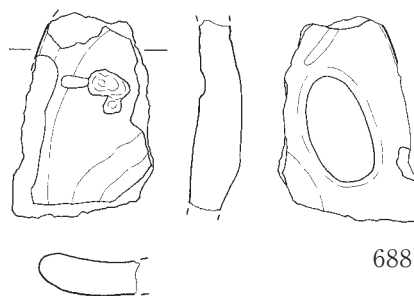
686

14号土坑



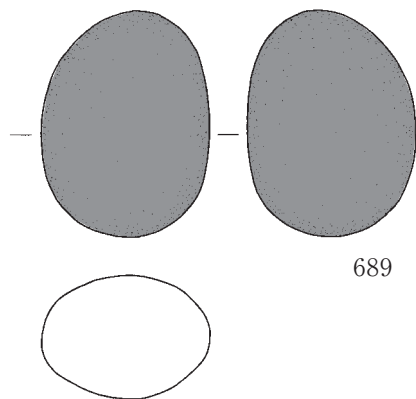
687

25号土坑



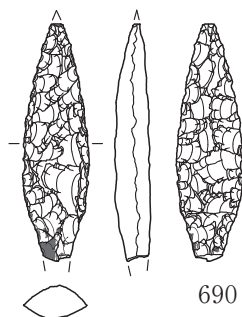
688

30号土坑



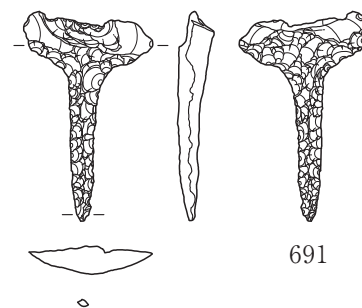
689

32号土坑



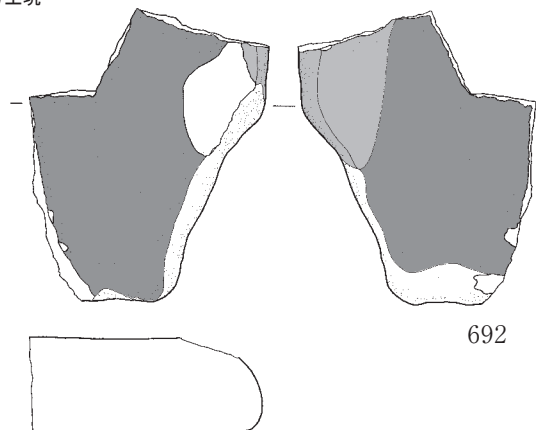
690

38号土坑



691

43号土坑



692

(686 · 687 · 689)
0 1 : 3 10cm

(688 · 692)
0 1 : 5 20cm

(685 · 690 · 691)
0 2 : 3 10cm

第 154 図 土坑出土遺物 6

[その他の遺構との重複] なし。

[平面形] 不整な楕円形。 [規模] (195) × (190) cm、深さ 6 cm

[埋土] 黒褐色シルトを主体とする単層で、炭化物が混入する。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。ほぼ平坦である。壁はトレンチのみで確認した。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 39.1g、石器 1 点が出土している。

縄文土器 1 点を掲載した。684 は深鉢の胴部片で縄文のみ施文される。縄文原体の形態から中期と推測する。

石器 1 点を掲載した (692)。石皿で 1/3 ほどを欠損する。I 類で、偏平な礫を素材とし、平坦な両面を使用面としている。

[性格] 不明。

[時期] 出土した土器の年代は縄文時代中期であるが、周辺の遺構の年代から縄文時代晩期の範疇と判断した。

(4) 焼土遺構

1号焼土遺構 (第 155 図、写真図版 26)

[位置・検出状況] 調査区南側に位置する。VI層上面で検出した。

[その他の遺構との重複] なし。

[規模] 25 × 30cm

[焼土の状態] 焼成は弱く、焼土は 5 cm 堆積するのみ。

[時期] 不明。周辺の遺構の時期から縄文時代晩期中葉と推定した。



第 155 図 焼土遺構

(5) 性格不明遺構

1号性格不明遺構（第156～162図、写真図版33・86～91・265）

[位置・検出状況] 南側調査区ⅡC 2i、ⅡC 2j、ⅡD 2a、ⅡD 2b、ⅡD 3a、ⅡD 3bグリッドに位置する。Ⅵ層上面で歪な形状のプランとして検出した。検出段階では、複数棟の竪穴住居跡が重複しているものと想定し、精査を進めたが、掘り下げたところ、住居床面のような平坦面が見受けられず、また平面形は竪穴住居跡とは考えられない不整形を呈するようになった。土坑とするには大きすぎる上に、他の土坑と比べて平面形が歪である。したがって竪穴住居跡や土坑とは異なる遺構と判断し、性格不明遺構とした。なお、検出プランは北側半分は南北方向に長く、また南側半分はL字状を呈する。遺構検出の段階で北半分と南半分とが別の遺構で、新旧関係があるようにも見受けられるが、確認調査範囲で全てを掘り下げたわけではなく、不明瞭な範囲が多いので、1基の性格不明遺構として報告する。

[その他の遺構との重複] 37～40号土坑と重複し、本遺構が最も古い。

[規模] 全体では(1004)×(746)cm、北側は594×220cm、南側は800×(430)cm、深さ20～75cm

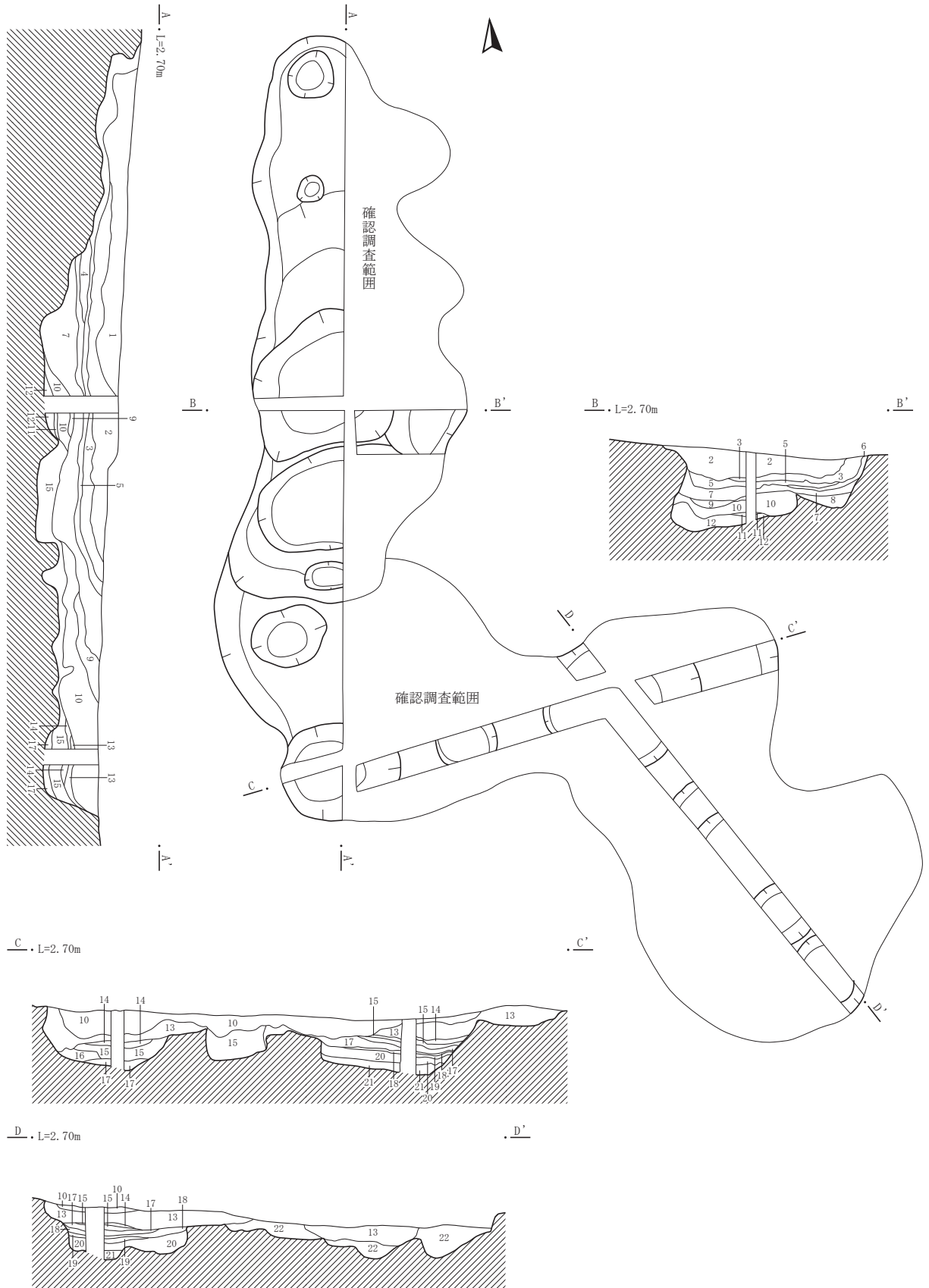
[埋土] 22層からなる。黒褐色シルトを主体とするが、灰黄褐色シルトやにぶい黄褐色シルトが互層に堆積する。また全体的に地山ブロックが多く混じる傾向にあり、人為堆積の可能性も高い。

[底面・壁] Ⅵ層面を底面と判断した。上述の通り歪で、凸凹が激しい。壁は全周する。概ね大きく広がりながら立ち上がるが、一部直立気味で、一様ではない。

[附属施設] なし。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器 50,566.1g、石器 188点、土製品 13点が出土している。特に縄文土器は多く、しかも形態の分かる土器が多い。

縄文土器 67点掲載した。693～705は深鉢である。概ね粗製であり晩期の範疇である。693は口縁部が外反し、口唇部は波状を呈する形態、695～702は緩やかに外へと開くか、口縁部が内湾する形態である。いずれも地文のみであるが、703・704は沈線による曲線文が横位に巡る。705は底部片であるが、底面の側縁が1箇所穿孔されている。706～729は鉢、台付鉢である。706は胴部が大きく膨らみ、口縁部が外反する形態で、胴部には雲形文が施文される。頸部に補修孔が1箇所見受けられる。大洞C1式である。707は外へと開きながら口縁部で屈曲する形態で、口唇部は波状を呈する。文様は口縁部のみで、横位に平行沈線が巡り、その間に刺突文が充填される。また縦位にB突起が付く。大洞BC式とした。708は大洞C1式の台付鉢である。胴部は丸く膨らみ口縁部が外反する形態で口唇部刻みが巡る。胴部に雲形文が施文される他、平行沈線に刻みや縦位のB突起が付き、大洞BC式の雰囲気を残す。台部は無文で、底面が肥厚するのが特徴である。710は小型鉢の破片で、706に類似する形態である。胴部に浮き彫り状のK字状文(無文の雲形文?)が施文される。大洞C1式～2式の範疇か。711～722は鉢の口縁部片である。羊歯状文が施文される711・716～719・722や、沈線と刻みが施文される720・721は大洞BC式に、雲形文が施文される712・713は大洞C1式と判断した。724は鉢を模したミニチュア土器と考える。胴部が丸く膨らみ、口縁部は内湾する。口唇部には刻みが施される。口縁部から胴部にかけて平行沈線が巡り、その間には刺突文が巡る。725～729は台付鉢の台部分の破片である。いずれも文様は沈線と斜行縄文のみである。730～741は浅鉢、台付浅鉢である。730～737は口縁部片で雲形文が施文されるので、大洞C1式と推定する。738は外へと大きく外反する形態の浅鉢で、無文である。739は台付鉢で、胴部から口縁部へと内湾しながら立ち上がる形態で、口唇部は波状を呈する。胴部には雲形文が描かれる。台部には浮き彫り状の文様が施文され、透かしが見受けられる。740、741は浅鉢B類で、底面が平坦になり、胴部から口縁部へと内湾しながら立



第156図 1号性格不明遺構1

1号性格不明遺構

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)	粘性やや弱	しまりやや密	炭化物少量、風化花崗岩粒微量含み、土器片混じる。
2. 暗褐色シルト (10YR3/3)	粘性弱	しまりやや密	炭化物少量、風化花崗岩粒微量、20cm大の礫少量含み、土器片混じる。
3. 暗褐色シルト (10YR3/4)	粘性弱	しまりやや密	炭化物少量、風化花崗岩粒微量含む。
4. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)	粘性強	しまり密	炭化物少量、地山土やや多く含む。
5. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)	粘性やや弱	しまり密	地山土多量含む。
6. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)	粘性やや弱	しまり密	炭化物少量、地山ブロックやや多く含む。
7. 黄褐色シルト (10YR5/6)	粘性やや強	しまり密	炭化物少量、地山ブロックやや多く含む。
8. 暗褐色シルト (10YR3/3)	粘性弱	しまりやや密	炭化物少量、地山ブロック中量、風化花崗岩粒微量、5cm大礫少量含む。
9. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3)	粘性弱	しまり密	地山ブロック斑文状に中量含む。
10. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)	粘性やや強	しまり密	炭化物微量、地山ブロック少量、風化花崗岩粒微量含む。
11. 褐灰色シルト (10YR4/1)	粘性弱	しまり密	炭化物微量、地山ブロック少量含む。
12. 褐色シルト (10YR4/6)	粘性弱	しまり密	砂質。風化花崗岩粒少量含む。
13. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)	粘性弱	しまり密	炭化物微量、地山ブロック多量含む。
14. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3)	粘性弱	しまり密	非常に硬く締まっている。炭化物少量、地山ブロックやや多く、風化花崗岩粒微量含む。
15. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)	粘性やや強	しまり密	非常に硬く締まっている。炭化物微量、地山ブロック多量含む。
16. 黄褐色シルト (10YR5/6)	粘性やや強	しまり密	非常に硬く締まっている。地山ブロック多量含む。
17. 褐灰色シルト (10YR4/1)	粘性弱	しまり密	風化花崗岩粒少量含む。
18. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)	粘性弱	しまり密	地山ブロック斑文状に中量含む。風化花崗岩粒微量含む。
19. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4)	粘性弱	しまり密	地山ブロック多量含む。
20. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3)	粘性弱	しまり密	砂質。炭化物微量、地山ブロック中量含む。
21. 褐色シルト (10YR4/4)	粘性弱	しまり密	炭化物微量、地山ブロックやや多く、風化花崗岩粒少量含む。
22. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)	粘性やや強	しまりやや密	炭化物微量、地山ブロック中量含む。

第157図 1号性格不明遺構2

ち上がる。741の方がやや丸い形態である。どちらも雲形文が施文され、大洞C1式と判断した。742～747は壺である。742は頸部より上を欠損する。胴部中位が大きく膨らむ形態で、胴部上半に雲形文が施文される。743は胴部下半から底部を欠損する。742に類似する形態で、胴部上半に雲形文が施文される。どちらも大洞C1式と判断した。744は完形で、口縁部はやや直立気味。胴部上半が膨らみ、742や743より縦長に見える。口縁部は無文、胴部は地文（縄文）のみである。745は胴部片であるが、744と同様と推測する。746は口縁部片、747は胴部片で、どちらも雲形文が施文されるので大洞C1式と判断した。748～755は注口土器である。748・749は口縁部片で、羊歯状文や刻みが施文されるので、大洞BC式と判断した。750は胴部片である。沈線で浮き彫り状の雲形文を描く。751・752は注口部周辺の破片である。注口部に付く隆帯などから大洞C1式と判断した。754は口縁部から胴部下半まで残る大型の破片で、算盤形の形態で胴部中位に注口部が付く。口縁部下と胴部下半に浮き彫り状の文様と縄文が施文される。753も口縁部から胴部の大型破片で注口部は見つからなかったが、754と同様な形態である。口縁部下と胴部下に雲形文が施文される。大洞C1式と判断した。755は注口部と底部付近のみ残存する形態で、底部は丸底である。わずかに見える胴部には羊歯状文が施文されるので、大洞BC式と判断した。

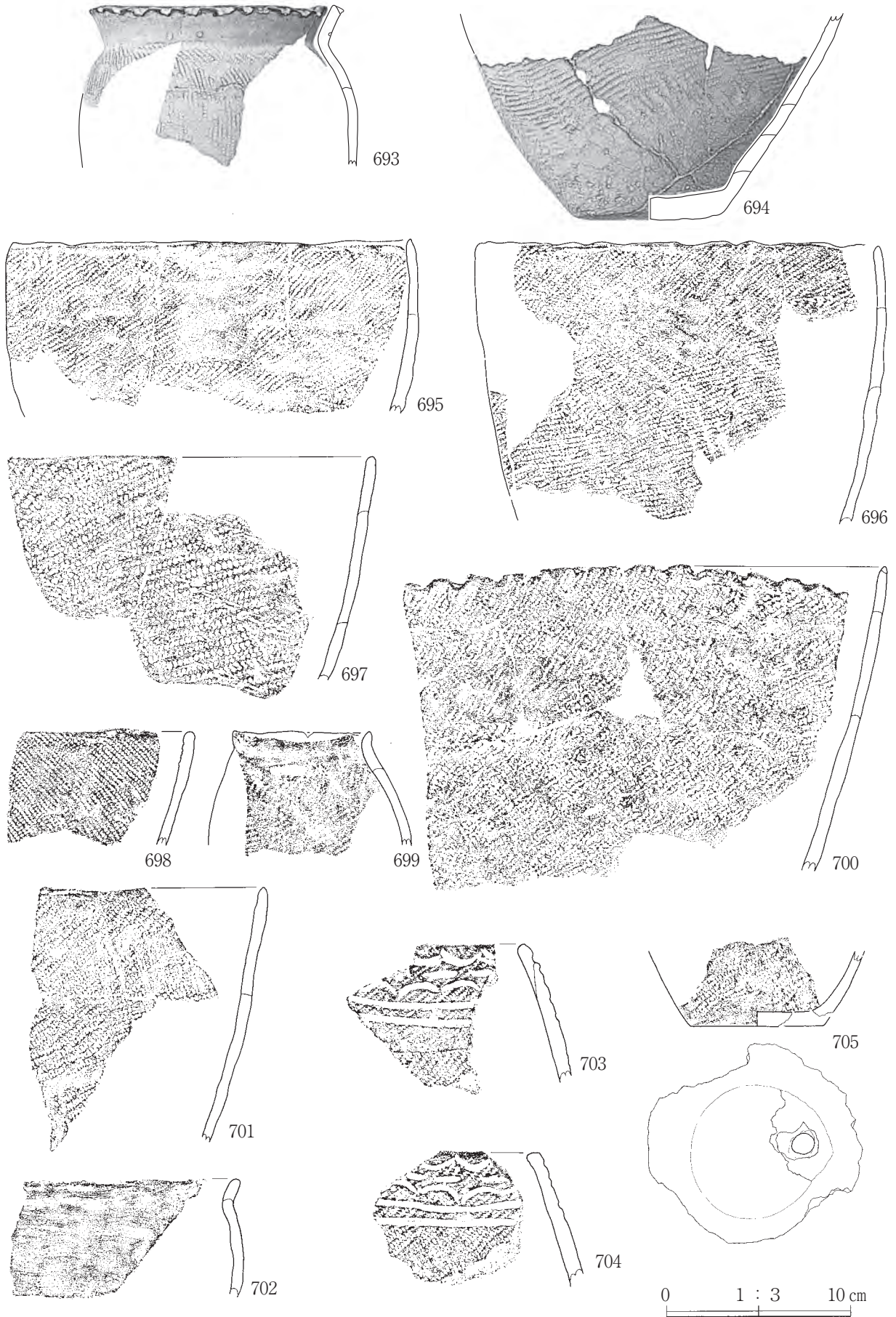
いずれも大洞BC式からC1式の範疇に収まる土器群であるが、別の時期の土器が一部混じる。757は後期中葉前半の深鉢口縁部片で、波頂部が団扇状に肥厚する。758は後期後葉の深鉢胴部片で、貼瘤とそれらを連結する沈線文が描かれる。761は中期の深鉢に付く横位の把手破片で円形の刺突文が施文される。

土製品は円盤形土製品2点（759・760）を掲載した。深鉢の胴部片を転用し円形に整形する。

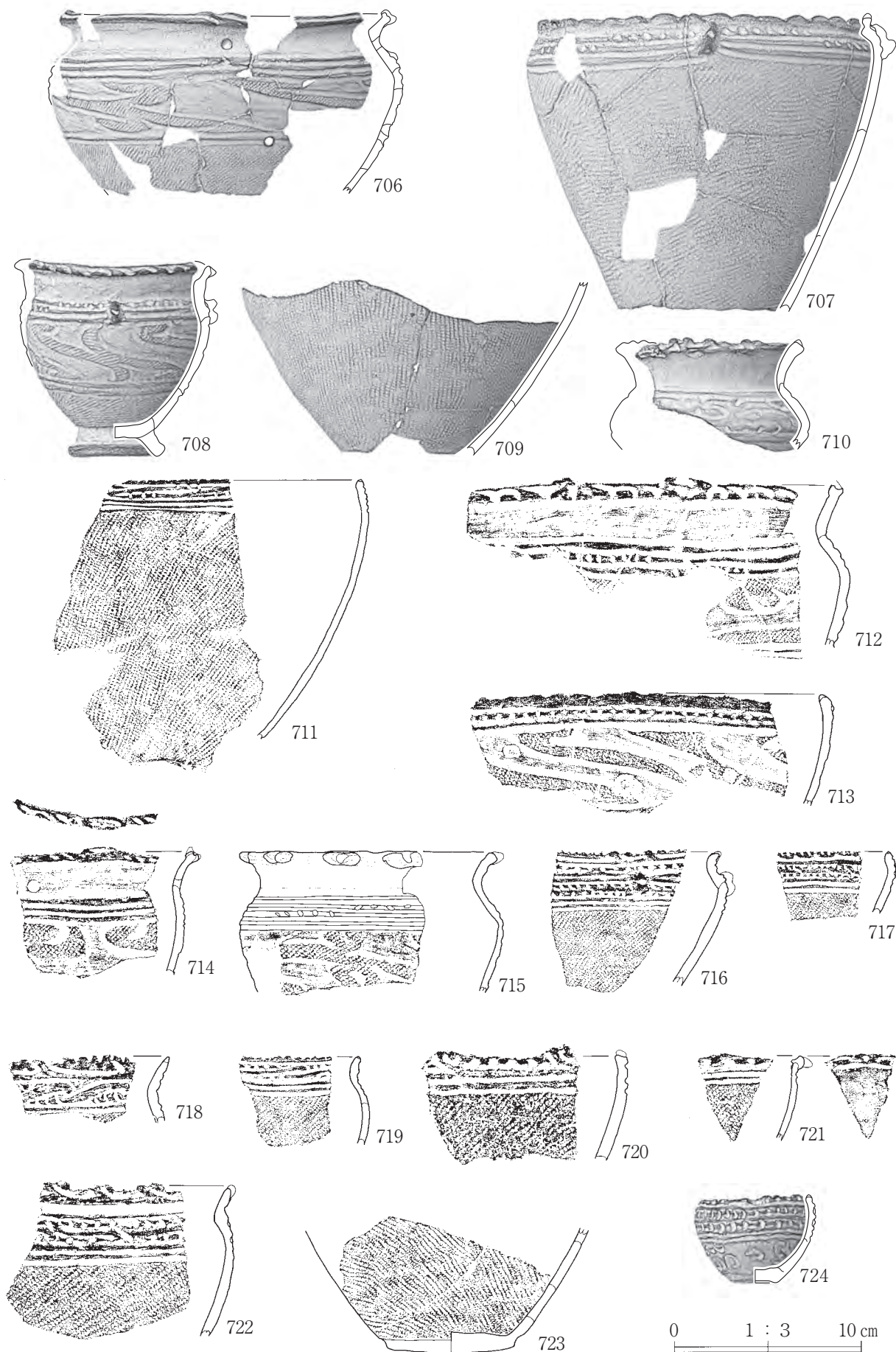
石器は4点掲載した。762は石匙でⅡ類。片面のみに二次加工を施し、刃部を作出している。763はフレイクⅣd類で剥離状態が不明である。764は敲磨器類Ⅳ類で、厚みのある楕円形の礫を素材とし、両面とも中央に敲打痕が見受けられ、また片面のみ磨痕が見受けられる。765は礫器で、両面全周に剥離作業を施す。端部は細かい剥離が巡るが、刃部を作出するためなのか、打撃を加えた際の剥離が不明である。

[時期] 出土した土器は概ね、大洞BC式と大洞C1式に二分されるが、最も出土量の多かった大洞C1式が本遺構の時期と判断した。

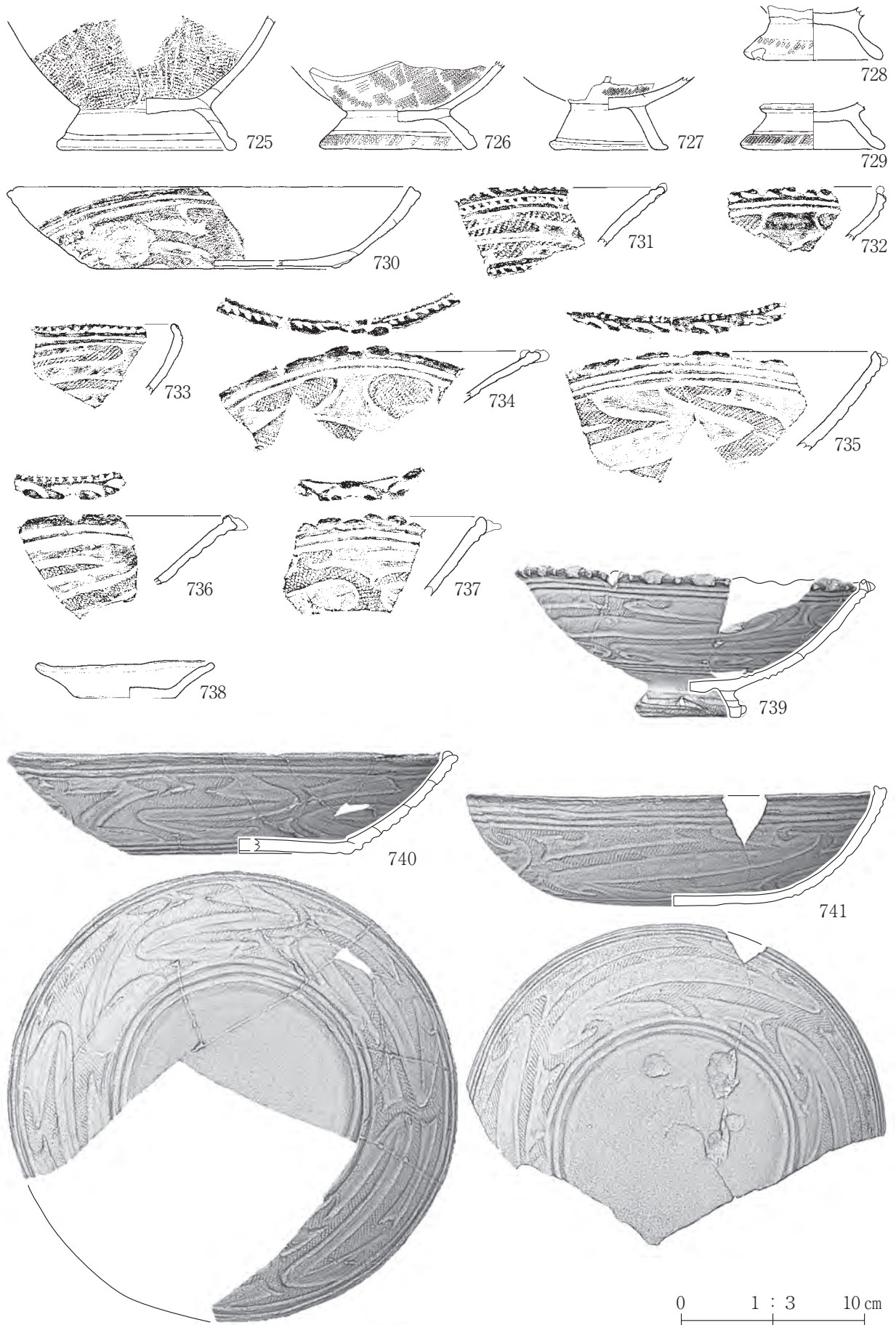
[推測される用途] 底面の形態などから、粘土採掘坑（土取り穴）の可能性が考えられる。



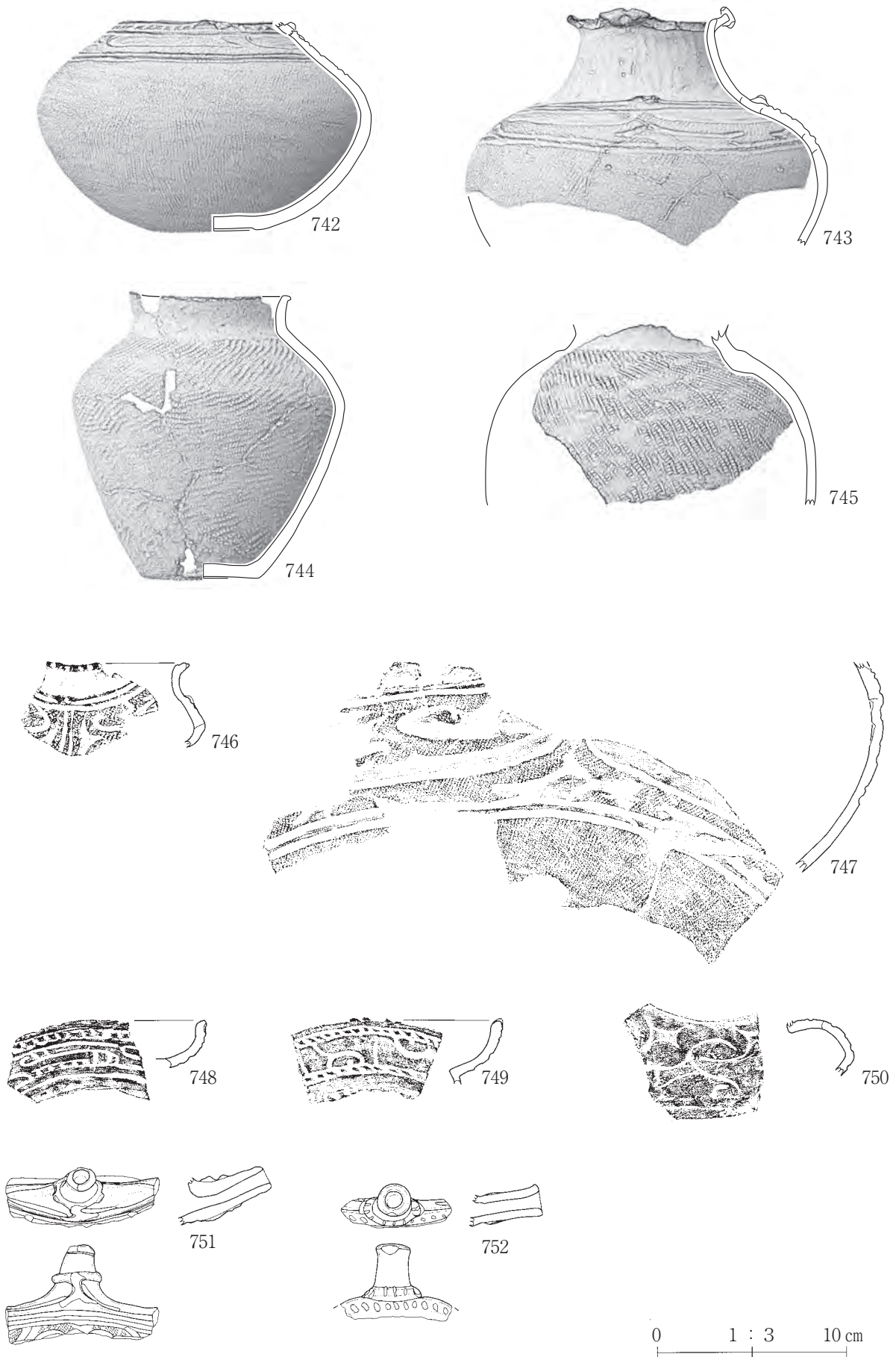
第 158 図 1 号性格不明遺構出土遺物 1



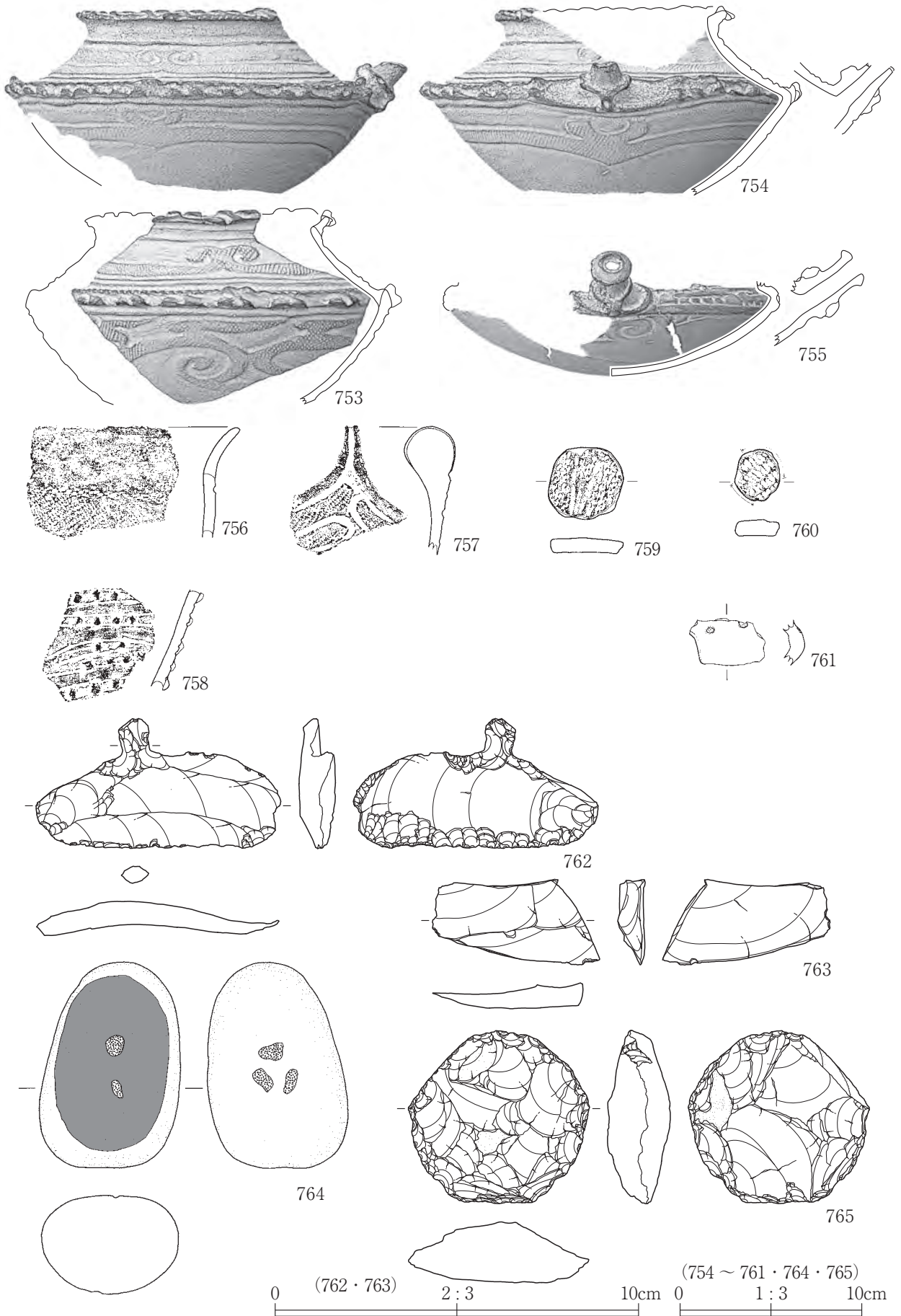
第 159 図 1 号性格不明遺構出土遺物 2



第 160 図 1 号性格不明遺構出土遺物 3



第 161 図 1 号性格不明遺構出土遺物 4



第 162 図 1 号性格不明遺構出土遺物 5

(6) 柱 穴 群 (第 163 図、写真図版 91)

[位置・検出状況] 北側調査区 I B 5f、I B 5g、I B 5h グリッド周辺に集中する。VI層上面で検出した。

[規模] 径 20～50cm、深さ 20～50cm の範囲に収まる (第 5 表)。

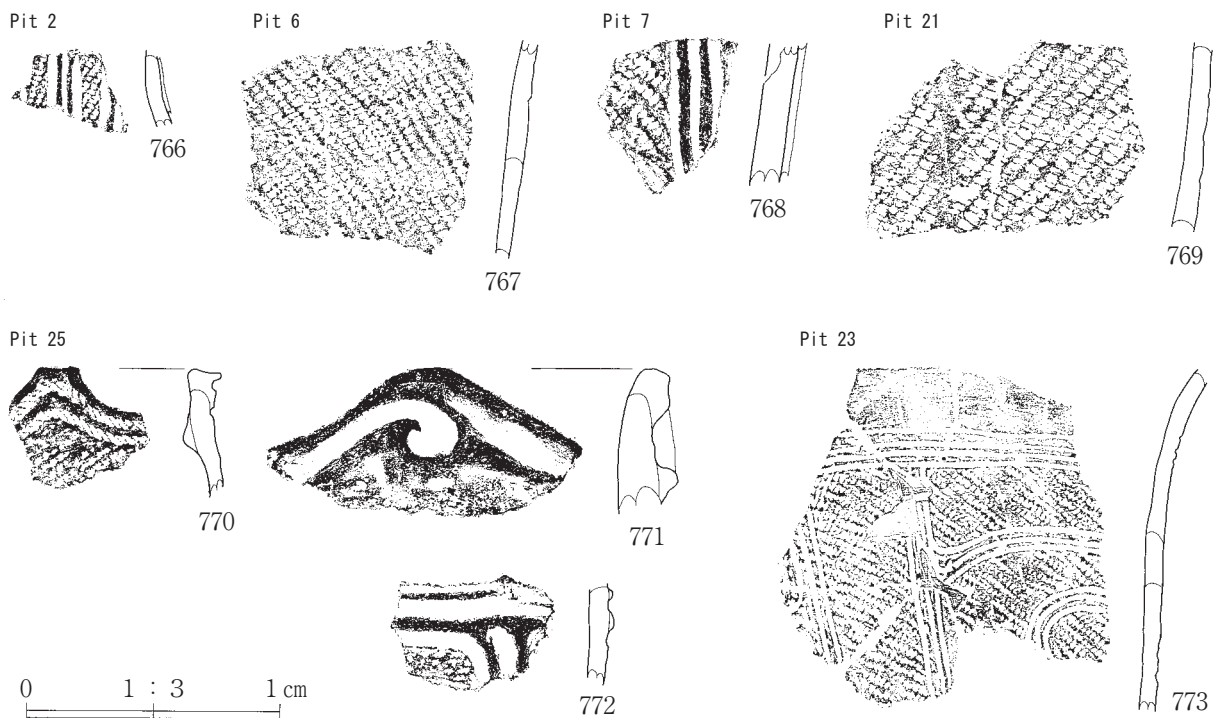
[埋土] 概ね黒～暗褐色シルトを主体とする単層が多く、柱痕跡の残るものは確認できなかった。

[出土遺物] 埋土中から縄文土器が出土するものが幾つか見受けられた。文様の分かるものについては第 163 図に図示しているが、人為的に混入したと推測できるものはなく、いずれも流れ込みによるものとする。

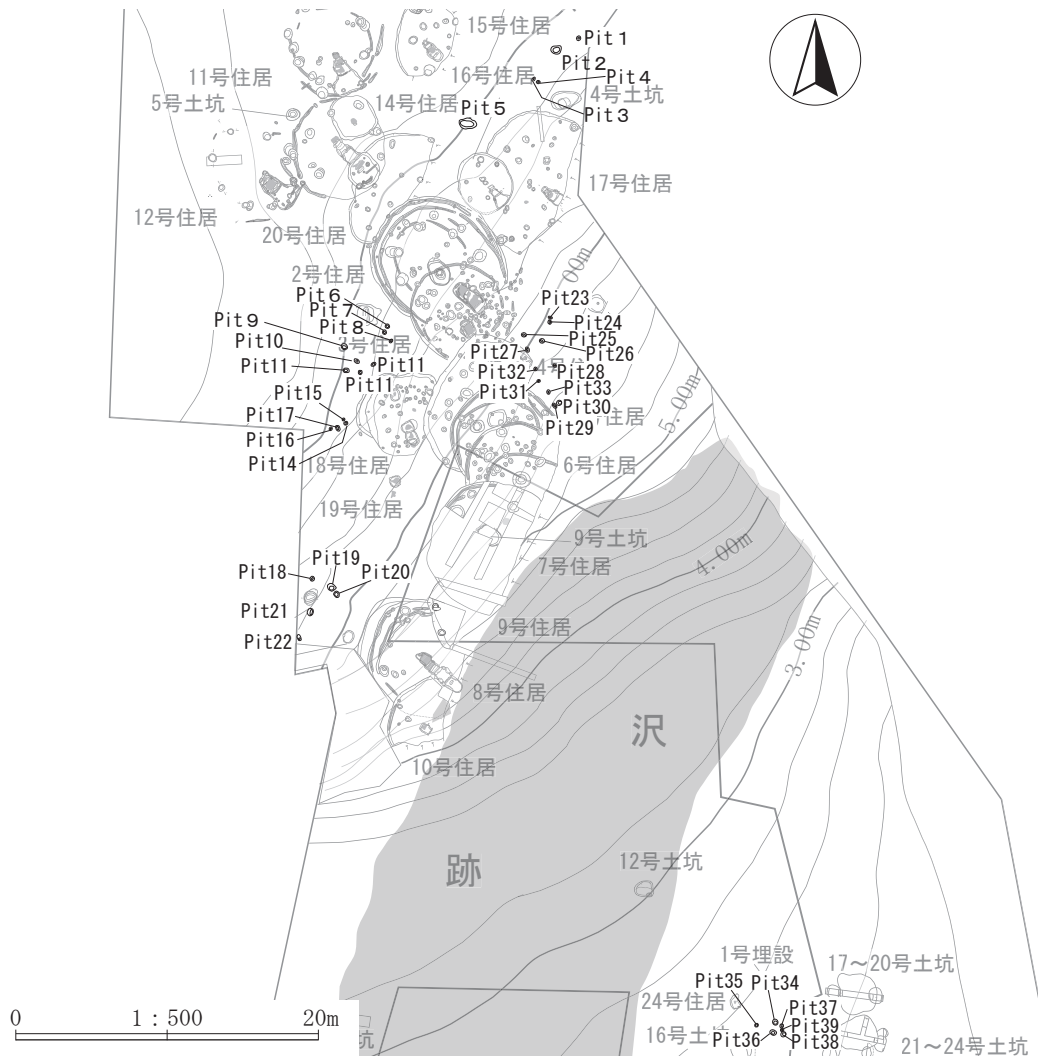
縄文土器を 8 点掲載した。766 は Pit 2 から出土した。深鉢の胴部片で、隆帯が施文され、大木 8 b 式新段階と推定する。767 は Pit 6 から出土した深鉢胴部片で縄文のみ施文される。縄文原体の形態から中期であることが分かる。768 は Pit 7 から出土した深鉢の胴部片である。縦位の隆帯が施文され、渦巻き文は認められないが、大木 8 b 式新段階と判断された。769 は Pit 21 から出土した。767 同様、深鉢の胴部片で縄文のみ施文される。中期と判断した。770～772 は Pit 25 から出土した。770 は縄文原体押圧文を施す深鉢口縁部片で、大木 7 b 式である。771 は口縁部に隆帯と沈線で横位の渦巻き文が巡る。大木 8 b 式新段階である。772 も大木 8 b 式新段階の深鉢胴部片である。773 は Pit 23 から出土した。深鉢胴部片で縄文施文後、沈線文を描く。大木 8 b 式古段階と判断する。

[時期] 縄文土器が出土する柱穴も見受けられるが、上記の通り、流れ込みによる混入の可能性が高く、時期判断の根拠としては薄い。むしろ周辺の遺構、特に竪穴住居跡の年代から縄文時代中期後葉から末葉の範疇と推定する。

[推測される用途] 周辺に竪穴住居跡が位置するものについては、各住居跡の補助的な機能をする柱穴の可能性はある。位置的に単体の柱穴は不明である。



第 163 図 柱穴状土坑出土遺物



第 164 図 柱穴状土坑

第 5 表 柱穴一覧

柱穴名	検出位置 (グリッド)	規模 (cm)	検出面高 (m)	底面標高 (m)	深さ (cm)
Pit1	I B 8 a	35×32	7.079	6.759	32.0
Pit2	I B 8 b	70×60	7.112	6.719	39.3
Pit3	I B 8 b	30×20	7.144	6.976	16.8
Pit4	I B 8 b	15×12	7.126	6.985	14.1
Pit5	I B 6 c	120×75	7.226	7.044	18.2
Pit6	I B 5 f	32×30	7.032	6.808	22.4
Pit7	I B 5 f	30×26	6.976	6.816	16.0
Pit8	I B 5 f	20×20	6.924	6.691	23.3
Pit9	I B 5 f	45×40	7.187	6.977	21.0
Pit10	I B 5 g	40×20	7.049	6.715	33.4
Pit11	I B 5 g	28×28	6.925	6.491	43.4
Pit12	I B 5 g	37×23	6.931	6.767	16.4
Pit13	I B 5 g	41×25	7.006	6.530	47.6
Pit14	I B 5 h	30×25	6.726	6.575	15.1
Pit15	I B 5 h	20×20	6.756	6.636	12.0
Pit16	I B 5 h	25×18	6.837	6.678	15.9
Pit17	I B 5 h	40×28	6.777	6.724	5.3
Pit18	I B 4 j	30×30	6.368	6.165	20.3
Pit19	I B 4 j	55×50	6.231	5.855	37.6
Pit20	I C 4 a	41×37	6.186	5.887	29.9

柱穴名	検出位置 (グリッド)	規模 (cm)	検出面高 (m)	底面標高 (m)	深さ (cm)
Pit21	I C 4 a	55×40	6.248	5.919	32.9
Pit22	I C 4 a	42×22	6.301	5.963	33.8
Pit23	I B 8 f	30×25	5.941	5.639	30.2
Pit24	I B 8 f	31×31	5.902	5.578	32.4
Pit25	I B 8 f	35×30	6.016	5.803	21.3
Pit26	I B 8 f	32×32	5.965	5.735	23.0
Pit27	I B 7 g	35×27	5.981	5.740	24.1
Pit28	I B 7 g	20×20	5.766	5.552	21.4
Pit29	I B 7 g	40×25	5.581	5.435	14.6
Pit30	I B 7 g	40×40	5.566	5.302	26.4
Pit31	I B 7 g	22×22	5.693	5.173	52.0
Pit32	I B 7 g	24×24	5.834	5.538	29.6
Pit33	I B 7 g	38×38	5.602	5.448	15.4
Pit34	II C 1 h	39×32	2.800	2.223	57.7
Pit35	II C 1 h	25×25	2.897	2.652	24.5
Pit36	II C 1 h	42×35	2.804	2.567	23.7
Pit37	II C 2 h	30×15	2.732	2.518	21.4
Pit38	II C 2 h	40×40	2.729	2.211	51.8
Pit39	II C 2 h	22×22	2.746	2.602	14.4

(7) 遺構外出土遺物

出土遺物は、縄文土器が大コンテナ 475 箱分、石器は大コンテナ 133 箱分に及び、そのうちの約 6 割が遺構外から出土している。

遺構外出土遺物の時期については、縄文時代前期・中期・後期・晩期である。特に中期初頭以降、晩期中葉までは継続して出土しており、したがって検出遺構群とは異なる時期の土器も出土していることになる。

遺構外出土遺物は、調査区のほぼ全域から出土している。第 IV 章に記した通り、今回の調査では、地形や調査区の形状を考慮に入れ、遺物取り上げ用のグリッド（4 m × 4 m 四方）を設定し遺物を取り上げている（第 4 図参照。なお、図中に数字が記していないグリッドは出土遺物がなかったグリッドである）。各グリッドの遺物出土量について、土器は第 6 表に、また石器は第 7 表に示し、また第 6・7 表を基に縄文土器は時期毎、石器は器種毎に分布を示した（第 165～170・172・173 図）。

遺構外出土遺物の出土量は、遺物取り上げグリッドにより、大きく異なる。まず調査区の北端は後世の削平により、Ⅲ層以下を大きく削られ、そのため出土量が極端に少ない。それ以外のグリッドでは包含層の堆積を確認したが、縄文土器の出土位置を時期ごとにみても、集中的に出土する場所が異なっていることが分かる。縄文時代前期では調査区中央周辺、縄文時代中期は調査区の北側から中央にかけて、また縄文時代後期は調査区の南端、縄文時代晩期では調査区の南側全域に集中している。

遺構外出土遺物はⅢ層とⅤ層から、また出土量は少ないが、Ⅳ層からも出土している。すでに第 III 章で記したが、Ⅲ層は縄文時代後晩期の包含層、Ⅴ層は縄文時代中期の包含層である。

Ⅲ層は、調査区南側で厚く堆積しており、そのため縄文時代後晩期の遺物が多量に出土している。一方、調査区北側では削平によって、Ⅲ層はほぼ消失しており、縄文時代後晩期の遺物はほとんど出土していない。またⅢ層自体は細分できるのだが、それは時期差を示すものでないため、出土した土器と細かい層位毎に取り上げても遺物間の時間差を観察できるものではない。そういった点で、層位的には良好とは言えない。また調査区南側でも後期と晩期で集中的に出土する地点が異なっている。

Ⅴ層は調査区全体に残存している層位だが、調査区北側から中央の範囲で、比較的厚く堆積し、一方、調査区南側は、薄くのみ堆積していた。ただし調査区北側は厚く堆積していたとはいえ、またⅢ層と同様、層位的には良好とは言えない。調査区の北端では後世の削平により、Ⅴ層もほとんど消失している。にもかかわらず、Ⅴ層からは多量の出土遺物があり、特に調査区中央の遺 1～5 周辺では極めて多量の土器大木 8a～8b 式が出土している。

Ⅳ層は主に調査区南側の沢跡内および、その周辺に堆積した層で、縄文時代中期から後期の遺物が出土している。調査時、Ⅳ層とⅤ層の判別がしづらく、また出土する遺物の時期も類似することから「Ⅳ～Ⅴ層」として取り上げている。

次項からは遺構外出土遺物について、縄文土器は時期毎に、石器およびその他の遺物は器種ごとに概観する。

縄文時代前期の土器（第2分冊第1～7図、写真図版92～98）

前期初頭～前葉、大木2a式に比定される土器群が出土している。ただし、破片のみである。出土分布は第165図に示した通りである。遺1～5や遺32～38周辺のV層中から集中的に出土している。一方、調査区南側のIV～V層中からも出土しているがわずかである。IV層もV層も縄文時代中期の包含層であるので、前期の遺物は全て流れ込みによる混入と考える。ただし、出土量は少なくないので、調査区外に該期に相当する遺構や包含層がある可能性が高い。

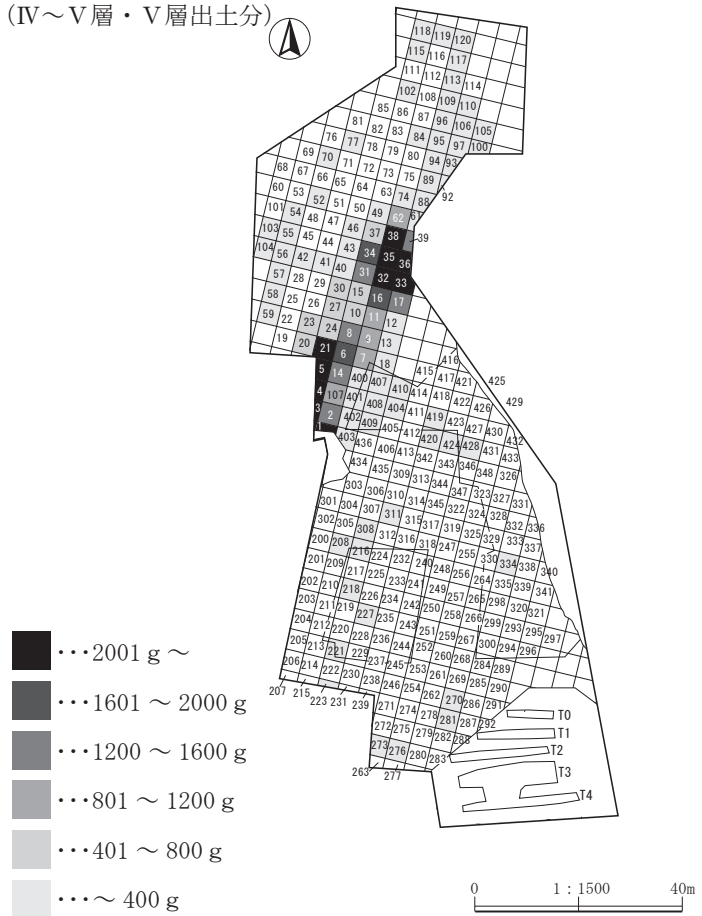
190点掲載した。774～786は尖底土器の底部片、また787～805は尖底土器と推測できる胴部片である胎土に繊維を多量に混入し、器面には斜行縄文（単節縄文が主体で、複節縄文も少ないが見受けられる）を施文する。774は底部から胴部下半が丸みを持ちながら立ち上がる形態である。779は直線的に外へと開く形態である。また778は底部に1箇所小さい刺突が見受けられた。故意によるものか分からないが文様ではなく、整形時によるものと推測する。

806～860は斜行縄文が施文される口縁部片である。外反する形態または直線的にわずかに外へと開く形態と推測する。口縁部から胴部へと縄文のみ施文され、806～810は口唇部にも縄文が施文される。また811は口唇部に短い沈線が施文される。施文される縄文は、単節縄文が主体であるが、0段多条や組縄縄文（びっちり縄文）が施文されるものも見受けられる。いずれも胎土に繊維が多量に混入する。861～944は斜行縄文が施文される胴部片である。

945は口縁部片で、環付末端回転文を横位に施文し、大木1式に比定される。また947～949は非結束羽状縄文が施文される土器群で、これらの土器も大木1式に比定できる可能性が高い。952・953は横位の結節回転文が口縁部に施文される土器で大木2a式に比定される。また946・949・954～961は結束羽状縄文が施文され、これらの土器も大木2a式の範疇と捉えられる。951は口縁部に結束羽状縄文、胴部には複節縄文が施文される。963は底部片で縄文のみ施文される。胎土に繊維の混入が見受けられたので、前期と判断した。器形の特徴から大木2a式ではないかと推測する。

前期の土器は他に円筒下層d式と推測する口縁部片が出土している（1009～1015）。いずれも胎土に少量の繊維を混入し、口縁部に縄文原体押圧文を横位に施文する。1009は口唇部にも縄文原体押圧文を施文する。1010は4条の縄文原体押圧文が並び、胴部には斜行縄

前期初頭～前葉（大木2a式を含む）
（IV～V層・V層出土分）



第165図 遺構外出土土器分布1

第6表 遺構外出土縄文土器一覽(時期別)

重量: g

位置	層位	各層の出土 土器総重量(g)	前期初頭～ 前葉	円筒下層 d	大木 7a	大木 7b	円筒上層 b	大木 8a 古	大木 8a 新	大木 8b 古	大木 8b 新
遺 001	V層	75624.6	1626.2		2028.7	306.6		2650.8	9695.7	2302.8	6370.9
遺 002	V層	110423.8	1588.5		1823.2	616.7		1805.5	22939.2	1636.9	5202.8
遺 003	V層	115618.7	3246.7	21.9	1476.0	7190.7	45.1	3833.7	15975.8	1495.4	2827.7
遺 004	V層	126909.0	6671.5	25.1	1028.0	402.9	30.3	6410.0	29745.8	1164.0	747.8
遺 005	V層	101363.5	5476.7	22.9	3086.2	453.8		3304.5	22906.7	1415.4	961.9
遺 006	V層	78708.3	1853.1		417.2	258.4		150.1	20378.1	3637.0	4285.3
遺 007	V層	133147.9	1036.1	28.7	421.9	60.8		208.3	10827.5	3182.6	15477.3
遺 008	V層	53716.3	1255.5		766.0	81.1		1458.5	12086.8	354.1	3349.0
遺 009	V層	108737.7	1093.9		9.9	74.8	44.2	442.7	10287.5	948.4	17419.9
遺 010	V層	64985.1	419.2		81.8	18.3		170.2	2078.6	925.9	13945.1
遺 011	V層	135032.7	908.9	16.3	18.9			299.8	4905.1	3418.8	26465.4
遺 012	I～II層	103.1									6.8
	V層	16570.2	65.9		93.2				219.2	25.5	733.2
遺 013	I～II層	37.7									20.6
	V層	25191.8	80.8		65.3	34.1			416.1	979.2	4684.3
遺 014	V層	121557.0	1419.2		409.1	425.9	137.1	768.7	24823.7	5480.8	3244.0
遺 015	V層	40942.3	456.7					40.7	3464.0	310.0	2554.2
遺 016	V層	79015.5	1824.8		39.0	107.5		519.7	6974.7	677.3	7215.9
遺 017	V層	29924.9	1281.1		64.7	19.5		181.3	2840.7	209.8	5249.7
遺 018	IV～V層	4734.6	42.3		9.3				132.8	148.8	460.0
	V層	1659.3							202.0		166.7
遺 019	V層	647.9						52.6	79.6		
遺 020	I～II層	14.7									
	V層	3800.8	552.3	45.6	37.4				776.9	46.5	102.8
遺 021	IV～V層	8367.0	125.9		44.7			52.6	2182.0	9.6	83.9
	V層	15810.8	2996.7		365.0			229.5	2638.0	109.4	88.6
遺 022	V層	230.7							17.9		8.9
遺 023	V層	4950.1	639.9						319.4		154.6
遺 024	V層	6723.4	637.2		127.9	47.4		738.8	1793.8	84.0	101.1
遺 025	V層	248.5							23.9		83.6
遺 026	V層	816.8							194.5		
遺 027	V層	6633.1	472.4		27.4			48.0	583.3	17.4	73.3
遺 028	V層	211.7							21.0		51.0
遺 029	V層	217.3									14.5
遺 030	V層	10077.6	453.3		16.9			14.4	1222.1	50.4	801.3
遺 031	V層	22102.7	1250.6		16.3			75.6	3528.6	261.0	564.6
遺 032	V層	31282.7	2971.9		99.4			63.9	3024.6	290.2	782.7
遺 033	V層	71093.6	3801.0		102.1	64.0		56.7	6390.8	442.1	5679.3
遺 034	V層	8372.9	1924.5						672.4		294.3
遺 035	V層	30789.7	4531.6		78.3			54.5	3908.4	154.1	418.1
遺 036	V層	30025.2	8795.3		127.1			168.3	1949.7	172.6	1762.1
遺 037	V層	5179.8	790.8			67.7		13.9	375.5	156.4	608.0
遺 038	V層	12961.0	2678.6	15.2					749.3	49.0	779.7
遺 039	V層	9710.9	1519.7		51.7			74.4	1582.0	166.3	766.8
遺 040	V層	7159.2	360.8		64.3			219.8	717.4		199.3
遺 041	V層	333.2	10.1						9.0		61.3
遺 042	V層	265.5	103.9						14.1		8.6
遺 043	V層	5769.6	212.8		19.8	12.7			672.1	15.2	167.7
遺 044	V層	925.1							181.2		
遺 046	V層	1820.1	38.0				27.5		82.6		22.5
遺 047	V層	354.1							46.3		
遺 048	V層	76.7							13.8		
遺 049	V層	367.9	57.7						20.5		
遺 050	V層	381.2									
遺 051	V層	67.2									
遺 052	V層	195.4	14.5					15.1			
遺 054	V層	368.4	6.2						110.5		51.7
遺 055	V層	937.9	185.6						46.3		47.8
遺 056	V層	1191.3	70.8						36.9	18.5	114.6
遺 057	V層	597.5	16.4						61.3		23.9
遺 058	V層	2563.5	21.0		25.8				238.1	25.7	192.8
遺 059	V層	936.0	73.3						191.7		12.7
遺 061	V層	19417.2	368.0		15.5				1721.6	53.0	3583.0
遺 062	V層	2327.2	838.1						38.2		74.4
遺 063	V層	4740.4						16.2	200.9	106.1	243.6
遺 066	V層	12.4									
遺 070	V層	2208.8	11.1						109.3		111.5
遺 071	V層	583.2							41.0		37.6
遺 072	V層	32.1									13.1
遺 073	V層	258.1							138.9	142.3	27.2
遺 074	V層	588.4	56.6						58.0		
遺 075	V層	292.4							31.4		12.3
遺 077	V層	3874.0	60.6			44.0		8.5	553.6	36.7	168.0
遺 079	V層	945.5							139.3	66.9	202.4
遺 080	V層	255.0							64.0		
遺 082	V層	8.5									
遺 084	V層	727.2	65.3						154.3		14.0
遺 085	V層	24.3									
遺 086	V層	20.6									
遺 087	V層	737.5							91.2		56.2
遺 088	V層	7747.4	101.4	7.2	8.1			14.6	189.6	123.7	1086.9
遺 089	V層	13098.1	303.1		29.3				430.5	101.0	2353.8
遺 092	V層	23985.6	348.1					21.7	4322.5	1592.0	3956.9
遺 093	V層	17257.3	115.6						2827.7		3562.1
遺 094	V層	3611.0	142.6		24.4				493.0		217.1
遺 095	III層	1708.3	42.0					61.6	49.2		175.6
	V層	6462.7	63.4		11.7				751.9		788.3
遺 096	V層	10125.2	199.0		25.2				739.5		1958.2
遺 097	V層	32851.5	388.1		36.7			7.3	2743.2	1245.8	5277.4
遺 100	V層	15611.9	75.7		47.2				1736.9	173.1	1875.3
遺 101	V層	667.8							128.9		20.1
遺 102	V層	468.8	63.7						69.0		15.5
遺 103	V層	2768.8	19.4		120.3				292.5		221.2
遺 104	V層	1200.7	25.9						37.6		53.9
遺 105	V層	1829.1	211.7						206.4		141.4
遺 106	V層	12520.2	178.6		64.6	27.9		34.4	874.8		1178.1
遺 107	V層	76896.3	1360.1		772.5	103.2		1051.0	14665.1	1645.8	1610.0
遺 109	V層	4171.4	67.9			14.2		9.0	247.3		726.2
遺 110	V層	6472.3	76.1						16.1	21.2	612.7
遺 111	V層	1020									

Ⅶ 検出遺構と出土遺物

重量：g

大木9	大木10	後期初頭	後期前葉	後期中葉	後期後葉	大洞 B	大洞 BC	大洞 C 1～2	粗製 (中期)	粗製 (後期)	粗製 (晩期)
478.4	116.9								2689.1		
94.8	80.0		38.3					3.4	1284.5		14.5
24.5	38.3		8.2						1845.6		32.8
			44.1						4310.9		3.9
			15.4						632.4		113.8
33.5	131.0		9.4				94.3	9.8	1449.3		5.4
1068.8	2553.0		324.2					14.3	4961.7		
160.8	9.1								875.5		
1517.3	553.1	13.3	132.6	80.8				19.1	5712.9		
1495.3	943.6		14.9	42.7				13.7	7010.7		
7414.2	3548.9		25.0					14.4	6948.8		41.8
206.3	7292.7		24.9						303.7		
607.1	78.5								2473.7		
53.4	33.3		45.4					5.2	2143.0		8.9
1060.7	1411.3		222.7						1258.6		
1122.9	2974.9		63.6	50.2				6.7	3650.6		4.9
629.7	59.6								1674.2		
146.2									140.4		
187.3									59.3		
	9.7								31.3		
				39.4					79.4		
									52.7		
									22.9		
									341.7		
									15.3		
129.7								8.6	701.1		
7.2											
	17.2								72.0		
38.0									463.5	12.4	
12.4	2334.4								437.6		
1650.4	661.0	26.6							4473.4		7.9
	85.8								140.2		
77.3	364.9								33.9		
	8.2								342.1		
19.0				18.8					36.1		
	16.2								391.6		
43.5	23.0								43.8		
20.6											
26.0											
	15.4								34.9		
									12.1		
									9.9		
	8.2										
21.8											
31.9									21.7		
									194.8		
									32.1		
1114.0									104.7		
79.9									10.6		
									40.9		
									27.6		
									407.1		
									28.5		
110.8									272.2		
63.6									725.6		
72.0									250.2		
158.2	10.5						20.8		100.4		
55.7									15.9		
	3.7								25.0		
22.5									17.40		
560.7			34.3				11.5		606.7		
473.7	58.9				68.5				208.6		
189.1	8.0								16.9		
10.7											
468.8	63.7					69.0		15.5	26.4		
32.7									10.5		
53.2											
275.3	33.9							8.2	136.1		
46.4	33.0								2956.3		5.1
42.7	29.4								6.4		
									35.9		

1 縄文時代

重量：g

位置	層位	各層の出土 土器総重量(g)	前期初頭～ 前葉	円筒下層 d	大木 7a	大木 7b	円筒上層 b	大木 8a 古	大木 8a 新	大木 8b 古	大木 8b 新
遺 113	V層	1936.4	23.7	37.5					162.3	75.1	165.3
遺 114	V層	356.3									60.3
遺 115	V層	3697.3	38.1		120.9	9.6		19.6	1108.3		3.4
遺 116	V層	583.9	38.1			17.0	14.8		16.7		23.2
遺 117	V層	2837.9	63.9						294.7		422.3
遺 118	V層	5652.9	204.3		546.9	29.1	91.3		167.2		29.8
遺 119	V層	933.8	114.1						141.7		106.5
遺 120	V層	3878.4	51.5					55.3	253.8	13.9	468.4
遺 201	IV～V層	3489.0							106.3		618.0
遺 202	IV～V層	1275.6									498.3
遺 203	IV～V層	1844.0							68.0		365.0
遺 207	III層	1110.6									31.7
遺 208	III層	20893.5	13.9		12.1				196.9		1054.5
遺 208	IV～V層	57833.5	14.9		224.6			43.7	335.0	44.9	3231.4
遺 209	III層	69910.1	33.9					131.3	1679.9	123.4	2970.8
遺 209	IV～V層	11434.0						13.2	192.0	22.3	979.5
遺 210	III層	21740.0			37.8			47.4	58.7		1588.9
遺 210	IV～V層	8542.5							55.7		655.7
遺 211	I～II層	96.7									
遺 211	III層	3316.4						57.7	3.7	122.9	229.4
遺 211	IV～V層	1929.4							30.1		96.4
遺 212	III層	4261.6									1243.0
遺 212	IV～V層	476.0									110.9
遺 216	III層	20295.3	70.9					12.5	200.7		1482.1
遺 216	IV～V層	195.3	4.6						35.9		
遺 217	III層	62383.3	147.2		12.8	31.9	7.8	13.2	919.3	7.1	1630.8
遺 217	IV～V層	8654.5			8.8				20.2		332.4
遺 218	III層	141171.6	77.5		49.5	43.2		190.8	1218.3	54.8	4071.7
遺 218	IV～V層	46836.4	41.5			48.6		46.0	280.8	39.0	1761.4
遺 219	III層	63239.3						70.5	811.3	46.4	2940.5
遺 219	IV～V層	176.9									13.4
遺 220	III層	78235.1			39.8	34.1		63.7	1500.5	30.5	4033.7
遺 220	IV～V層	16248.3			5.7	41.1		16.9	283.5	116.7	1123.5
遺 221	III層	32030.4			53.0			54.2	395.0		2524.8
遺 221	IV～V層	5815.2	11.0		24.8						446.0
遺 222	III層	206.1									
遺 222	IV～V層	604.5									19.3
遺 221	III層	40216.2			28.7		1.0		108.8		800.9
遺 221	IV～V層	3993.7	7.3								234.1
遺 224	III層	1443.0									
遺 224	IV～V層	117.8							79.4		38.4
遺 225	III層	23944.8							198.8		318.1
遺 225	IV～V層	404.7						25.5	28.1		
遺 226	III層	93863.0	7.3		31.5	15.0		19.0	1147.7		1502.6
遺 226	IV～V層	15067.0			12.5				582.7		350.7
遺 227	III層	61178.3							617.4		882.7
遺 227	IV～V層	16885.7	16.2					32.1	75.0		292.7
遺 228	III層	76784.4			104.1			58.2	917.1		1085.7
遺 228	IV～V層	13347.3			19.7				249.5		479.8
遺 229	III層	99421.6			24.7	57.8		44.8	1004.1	69.6	2180.4
遺 229	IV～V層	18410.3			12.6				319.9		527.2
遺 230	III層	74511.2	13.5		114.2			83.0	2543.3		4189.5
遺 230	IV～V層	14275.4			57.7				252.5		973.4
遺 231	III層	11791.9						58.8	670.9	86.7	1138.8
遺 231	IV～V層	4651.7							465.8		415.3
遺 232	III層	12126.1	10.5		71.3				195.6		174.3
遺 232	IV～V層	485.0							66.4		
遺 233	III層	19637.4	12.2			11.6			291.1		91.0
遺 233	IV～V層	341.2							45.6		11.0
遺 234	III層	26129.3	8.8					64.1	49.2		432.0
遺 234	IV～V層	2060.5							19.6		196.7
遺 235	III層	14715.5						10.9	92.4		339.2
遺 235	IV～V層	782.6									
遺 236	III層	30539.3						55.0	415.4	22.0	499.8
遺 236	IV～V層	4966.6							46.2		151.5
遺 237	III層	60621.3	22.0					42.2	797.0	21.6	759.0
遺 237	IV～V層	7684.9							245.3		114.5
遺 238	III層	66318.1	45.4		35.3	61.0	131.6	44.7	688.7	132.2	1350.7
遺 238	IV～V層	10206.6							88.8		922.0
遺 240	III層	605.1									14.3
遺 241	III層	5456.1							24.4		164.0
遺 241	IV～V層	6566.3			57.3			4.4	56.5		259.1
遺 242	III層	20787.8				9.3		52.4	186.6	3.8	464.9
遺 242	IV～V層	8081.3							93.2		214.6
遺 243	III層	3458.9							21.6		166.5
遺 243	IV～V層	1085.9							58.9		45.2
遺 244	III層	6689.7							96.7		166.6
遺 244	IV～V層	2302.3							78.0		63.8
遺 245	III層	12821.2						10.0	95.4		262.8
遺 245	IV～V層	10734.3						7.2	105.4		250.9
遺 246	III層	16239.1							154.4		500.9
遺 246	IV～V層	15696.4	0.0		10.0	0.0	0.0	92.3	158.1	133.9	531.5
遺 247	III層	1855.3	25.3								122.1
遺 248	III層	4112.5	17.2								91.5
遺 248	IV～V層	46.5							32.7		7.9
遺 249	III層	3737.9							23.1		70.8
遺 250	III層	4267.7									69.9
遺 250	IV～V層	1389.1									111.1
遺 251	III層	573.7									21.9
遺 252	III層	1803.8							17.2		234.4
遺 252	IV～V層	66.6									
遺 253	III層	4221.9							60.1		176.1
遺 254	III層	2825.1							21.9		44.6
遺 255	III層	995.8									35.3
遺 255	IV～V層	263.8							8.7		14.8
遺 256	III層	598.4							18.8		15.3
遺 257	III層	673.0							16.1		11.4
遺 258	III層	3840.4							120.5		105.7
遺 258	IV～V層	521.5									4.2

Ⅶ 検出遺構と出土遺物

重量：g

大木 9	大木 10	後期初頭	後期前葉	後期中葉	後期後葉	大洞 B	大洞 BC	大洞 C 1～2	粗製 (中期)	粗製 (後期)	粗製 (晩期)
8.4			5.0						75.1		
16.5									26.5		
								39.8	1350.5		
9.7									88.7		
24.4					10.8				2754.8		
27.0											
49.5	43.5		11.8						202.1		
									83.4		
	104.1										
9.6	25.0							155.9	37.7		45.9
869.8	421.2		39.5	71.5					1653.3		
695.1	2393.3		135.9	142.7			140.5	100.2	11080.9	140.5	64.6
1669.7	6070.3		46.2	126.3			9.8	39.2	3533.3	331.5	26.9
283.4	249.0							8.1	765.7		
784.8	527.4		19.2	8.2					1508.1		3.3
457.6	201.9	12.2		17.0		9.5		119.9	393.3		
11.8	270.1						28.4		46.0	47.5	7.6
232.3	43.2								32.4		
316.7	76.3			44.3					129.1	19.9	11.9
10.9	16.4								62.5		
168.6	303.3		384.4	175.7	128.3		363.8	1213.1	310.4	782.0	388.2
837.2	1141.1		399.3	207.9	19.0		1314.6	2698.9	1683.7		1720.0
101.8	22.9		154.5				96.7	154.1	296.9	75.9	166.6
2970.0	6507.0		3322.0	842.2	213.1		1979.4	3811.8	8369.8	574.3	2807.1
908.9	7938.4		150.9						3834.5	96.8	41.9
2273.7	2845.0		331.1	179.9	442.7		287.3	454.1	3284.2	114.5	358.9
4538.1	1893.1		664.8	118.4			13.2	325.3	3032.3	1778.4	27.3
920.4	1223.4	1262.5	375.5	151.6	10.0		153.4	204.5	1233.7	91.5	155.9
2079.1	708.2		26.0					9.2	1536.7	55.9	
351.3	170.2								237.9		
42.4											
									18.8		
25.2			100.7	10.6			866.4	2832.6	6.3	65.1	1534.0
38.2	123.4		9.9				57.1	111.2	249.5		2834.7
			49.0				287.4	940.5			171.2
	20.7		53.8	86.5		16.4	1254.1	2675.9	78.5		406.0
								12.5			
842.3	2394.3	12.9	324.5	306.6	192.8	82.5	3861.4	9579.6	1509.9	917.3	3906.1
212.4	608.3		1120	35.7			60.1	148.2	439.2	21.2	
492.3	60.5		421.1	346.3	74.6		3998.9	5562.5	271.4	231.0	3910.7
550.2	216.4		233.9	131.5		10.1	448.6	288.7	308.3	122.0	351.5
600.6	574.7		757.9	432.7	2202.5	15.2	6381.8	7841.9	1788.8	269.0	5520.9
487.8	223.2	76.8	59.3	54.4			119.9	124.8	438.4	217.3	104.0
1982.8	1827.2	574.5	421.0	347.3	45.5		3508.6	4205.4	6088.7	839.1	2958.5
513.6	501.7		55.6	51.9			139.8	255.6	1172.2	15.2	25.9
1911.6	2820.3	279.3	134.3	692.7	135.0		1959.1	1371.2	4551.5	426.7	857.8
527.5	240.8	21.3	33.6				385.4	153.0	1605.7		59.4
596.7	122.9			37.5				30.7	3986.7		
65.5	163.9								285.4		
122.3			72.5			4.1	197.7	522.9	106.1		718.1
84.0	30.9						261.5	494.5	92.7		334.4
16.1							40.5	47.0			157.6
121.0	126.1		110.4	122.4	38.7	5.0	1172.3	1862.6	147.7	34.8	1395.3
12.4	68.5							2.0	50.5		
10.8	41.0		31.9	3.8				440.9	783.0	86.5	26.6
	10.5		73.9	19.5					18.7	12.3	124.2
113.0	213.4		65.3	103.9		48.1	2415.8	2426.9	289.6		1593.1
100.3	18.9			11.8	29.0		118.0	214.6	332.4	10.7	219.3
498.3	371.5		71.5	364.2	164.7	43.0	3490.4	6045.2	561.3	284.3	4299.7
159.2	213.6		73.9	49.9	48.3		138.7	125.3	267.5	33.3	243.8
1364.0	517.6	7.8	682.3	498.2	27.5	102.4	2502.3	4062.4	2249.9	282.7	2379.1
181.0	290.5		53.6	46.1			258.3	86.2	350.8	115.4	20.9
12.3	28.0				69.9		25.9	7.7	42.1		
46.2	9.7		16.7		3.9		125.9	172.5	18.0		78.4
150.9	77.0		20.8					26.7	94.6		52.4
140.5	68.8		83.1		45.8		466.5	791.1	193.4		322.9
124.7	155.2		20.5				44.9	8.0	2406.3	29.0	8.8
							14.5	32.6	13.9		
28.9					7.2		8.4	9.2			
			36.1		5.2	21.6	105.4	211.1	55.3	16.0	76.5
60.1				34.3			7.1	70.4	5.1	41.6	1.9
16.4	42.7		4.6		9.9	12.0	305.2	363.2	55.8	63.7	69.0
273.2	30.7		68.6	79.2	19.4	8.7	137.3	102.0	238.5	22.9	98.4
65.6	23.9		100.7	237.2	39.6	62.0	557.8	719.4	20.1	106.3	257.4
185.8	210.8	0.0	255.1	221.7	172.4	23.6	319.3	160.0	91.7	190.7	368.3
26.3			13.4	8.3	74.3	21.9	8.2	19.8	14.4		12.6
	21.5		61.9	94.9		6.1	30.1	23.9		33.4	
21.4							3.6				
25.3	26.8		83.1			15.5	24.5	42.8	75.5		51.7
			52.9				34.1	20.3	25.5		10.7
	22.8							13.5	14.2		
18.5	15.7					8.6	9.8		15.0		
53.5	125.2		41.0		25.4		69.6	89.1	77.2	23.7	66.2
								5.9			
			20.3	97.4	41.2	4.6	85.9	53.8	67.6		
1.9			30.1	43.4	8.5	3.7	124.5	30.3		79.1	42.6
21.9			13.6				8.6		134.8	16.3	63.8
						315.9			28.6		
			21.6	126.1					14.9		
9.6	197.8	19.3	5.0	17.6	33.4		85.8	62.5		80.7	
								17.6			8.8

1 縄文時代

重量：g

位置	層位	各層の出土 土器総重量(g)	前期初頭～ 前葉	円筒下層 d	大木 7a	大木 7b	円筒上層 b	大木 8a 古	大木 8a 新	大木 8b 古	大木 8b 新
遺 259	Ⅲ層	4228.4							41.4		148.8
	Ⅳ～Ⅴ層	2424.1			25.6						94.9
遺 260	Ⅲ層	11169.6						13.6	191.0		458.9
	Ⅳ～Ⅴ層	2592.5									137.3
遺 261	Ⅲ層	7764.4							140.7		286.4
遺 262	Ⅲ層	6338.3						48.8	817.0		71.4
遺 263	Ⅲ層	614.2						24.5			
遺 264	Ⅲ層	893.7	25.7		15.8						
遺 265	Ⅲ層	2557.2							7.1		104.9
遺 266	Ⅲ層	6930.7							161.4	21.3	217.8
遺 267	Ⅲ層	2106.0									140.3
	Ⅲ層	3215.0						7.9	196.7		180.7
遺 268	Ⅳ～Ⅴ層	77.0									
	Ⅲ層	3548.0							273.6		90.6
遺 269	Ⅳ～Ⅴ層	2384.1									172.3
	Ⅲ層	4012.6							125.5	14.7	51.1
遺 270	Ⅳ～Ⅴ層	13888.4	19.3		49.6				317.6		486.9
	Ⅲ層	9499.8				22.2		23.8	199.2		165.5
遺 271	Ⅳ～Ⅴ層	168.0									
	Ⅲ層	3170.5							36.2		89.1
遺 272	Ⅳ～Ⅴ層	8388.9							110.2		207.5
	Ⅲ層	13674.1						34.6	252.9		310.1
遺 273	Ⅳ層(砂層)	11062.7							146.3		137.4
	Ⅳ～Ⅴ層	75178.0	52.3		70.4			24.2	1296.4	20.1	2535.9
遺 274	Ⅲ層	871.6									31.6
	Ⅳ～Ⅴ層	51.5									
	Ⅲ層	20262.9				24.5			303.0		598.5
遺 275	Ⅳ層(砂層)	213.4									
	Ⅳ～Ⅴ層	67750.2			15.9		60.8	84.0	637.9		1279.5
	Ⅲ層	51035.5			31.9	21.8		13.9	426.3		1051.7
遺 276	Ⅳ層(砂層)	3760.6						15.8	116.3		155.8
	Ⅳ～Ⅴ層	92954.9	16.0			80.2		19.5	666.8	10.3	1114.8
遺 277	Ⅳ～Ⅴ層	3600.6									
遺 278	Ⅲ層	2683.0									31.9
	Ⅲ層	39490.3						17.9	695.2		503.0
遺 279	Ⅳ層(砂層)	28.6									
	Ⅳ～Ⅴ層	58127.2				19.7		64.6	955.1	15.2	1250.8
	Ⅲ層	67525.0		12.3	65.3			4.3	898.5	10.3	1255.3
遺 280	Ⅳ層(砂層)	1536.1							101.9		48.7
	Ⅳ～Ⅴ層	57128.4						36.8	578.1	63.0	820.4
	Ⅲ層	31436.4	84.2		33.1			92.0	186.7		451.6
遺 281	Ⅳ～Ⅴ層	32967.1	12.1		67.2			40.3	297.0	6.1	797.5
遺 282	Ⅲ層	55155.8	17.9					129.5	729.5		523.1
	Ⅳ～Ⅴ層	39998.0						32.1	541.8		658.3
遺 283	Ⅲ層	14513.9	17.9					6.0	200.7		129.1
	Ⅳ～Ⅴ層	3393.0							13.6		39.3
遺 284	Ⅲ層	341.1									81.1
	Ⅳ～Ⅴ層	71.2									
遺 285	Ⅲ層	264.1							8.0		68.3
	Ⅳ～Ⅴ層	728.7									33.9
遺 286	Ⅲ層	642.9									25.7
	Ⅳ～Ⅴ層	5615.0							121.7		86.2
遺 287	Ⅲ層	21629.3							109.8		141.4
	Ⅳ～Ⅴ層	14115.0			39.2				402.2		429.4
遺 288	Ⅲ層	3898.1							26.1		
	Ⅳ層(砂層)	347.0							21.7		
	Ⅳ～Ⅴ層	2620.9							19.4		
遺 289	Ⅲ層	147.4							35.5		
	Ⅳ～Ⅴ層	413.9									18.9
遺 290	Ⅳ～Ⅴ層	273.5							13.9		92.1
遺 291	Ⅳ～Ⅴ層	3242.5				18.4			77.0		126.7
遺 292	Ⅲ層	118.2									
	Ⅳ～Ⅴ層	578.8							5.8		24.1
遺 293	Ⅲ層	1270.9							12.6	8.9	71.4
	Ⅳ～Ⅴ層	1023.3									11.8
遺 294	Ⅲ層	200.4							12.0		
	Ⅳ～Ⅴ層	1081.7							10.7		55.2
遺 295	Ⅲ層	1465.8							41.1		25.3
遺 296	Ⅲ層	953.5							23.9		8.4
	Ⅳ～Ⅴ層	18.0									
遺 298	Ⅲ層	49.8									
遺 299	Ⅲ層	3391.2	21.3		24.4	29.5			179.4		48.7
	Ⅳ～Ⅴ層	1772.1							32.8		50.9
遺 300	Ⅲ層	1145.5									41.6
	Ⅳ～Ⅴ層	527.1									9.9
遺 303	Ⅳ～Ⅴ層	5023.3						9.9	90.2		339.4
遺 304	Ⅳ～Ⅴ層	79137.7			20.4	76.2		15.0	1050.3	49.3	2541.8
遺 305	Ⅲ層	20954.4						17.3	394.5		848.5
	Ⅳ～Ⅴ層	48941.4						21.8	689.3		1847.5
遺 306	Ⅲ層	451.4							30.8		11.0
	Ⅳ～Ⅴ層	1991.9							32.0		65.7
遺 307	Ⅲ層	35651.5						19.8	648.6	56.8	761.8
	Ⅳ～Ⅴ層	11761.4							162.6		341.0
遺 308	Ⅲ層	25162.0						41.7	362.6	6.5	471.6
	Ⅳ～Ⅴ層	23670.2	9.3					3.2	154.3	23.6	438.8
	Ⅲ層	1789.1	16.0								65.5
遺 309	Ⅳ～Ⅴ層	183.3									19.3
	Ⅴ層	2815.1							105.6		95.6
遺 310	Ⅲ層	3055.8									228.7
	Ⅲ層	24880.9				15.8		38.4	384.0	17.2	790.7
遺 311	Ⅳ～Ⅴ層	16294.0	11.8					38.5	319.5	4.8	504.9
遺 312	Ⅲ層	60006.0	34.2		3.9			18.3	385.3	130.6	894.0
	Ⅳ～Ⅴ層	10276.5									225.4
遺 313	Ⅳ～Ⅴ層	71.3									29.0
	Ⅴ層	460.1									
遺 314	Ⅲ層	2841.6							37.1		113.0
遺 315	Ⅲ層	6264.9						21.6	176.6		137.4
遺 316	Ⅲ層	35242.9	11.2		24.4				224.6		419.6
遺 317	Ⅲ層	1499.6							42.6		55.3
遺 318	Ⅲ層	695.3									

Ⅶ 検出遺構と出土遺物

重量：g

大木 9	大木 10	後期初頭	後期前葉	後期中葉	後期後葉	大洞 B	大洞 BC	大洞 C 1～2	粗製 (中期)	粗製 (後期)	粗製 (晩期)
	59.3		6.4	104.4		12.0	179.3	136.5		48.9	51.7
37.8			15.4	36.4			68.4	15.6	89.0	28.1	17.4
55.9	6.6		125.0	252.4	61.9	39.6	214.1	304.7	153.4	11.6	297.0
56.2	34.1			48.3			7.6	3.7	76.6		7.6
	8.8		106.6	151.0	43.2	11.9	149.8	218.9	77.8		183.3
34.6	52.3		35.9	76.5	13.0	16.0	141.9	129.3	206.3		41.6
7.6											
							9.3	20.0	109.0		14.7
13.9			5.2	46.7			48.7	9.0	90.4		24.4
58.6	25.3					32.6	233.3	418.7	68.8		147.5
41.6			13.1	86.4		16.6	307.1	159.6	42.5		12.8
82.3	18.7		10.4				83.3	44.9			41.8
								2.9			
62.1	39.7		16.4	69.4				64.2	20.3		36.8
20.1			22.1	39.2	13.0	25.5	73.3	28.8		16.8	25.4
27.9	7.9		4.6	170.5	53.3		247.8	201.7	18.0	76.7	169.8
151.3	92.8		544.0	514.3	135.0	17.0	279.0	292.2	82.9	211.3	44.9
84.1			91.6	139.4	49.3	3.9	381.8	289.0	96.7	25.2	188.9
15.1							7.4	2.9			
40.3			47.7	13.3			193.1	200.3	44.6		
25.4	126.3		204.3	831.5	71.5			28.6	103.6	111.9	16.7
76.2	79.1		296.1	32.4	49.8	19.7	469.4	573.9	63.0	311.7	157.2
242.7	215.7		122.4	128.4	36.1			15.7	495.9	745.1	12.0
1316.1	3813.8		1590.4	3716.8	637.7	85.3	153.9	824.7	2619.0	490.9	361.7
18.3							66.6	66.6	14.3	39.4	
37.9	119.7		75.8	779.1	366.3	66.0	955.8	511.7	179.7	678.6	113.7
264.4	203.3		1064.1	4631.1	2079.3	164.3	1743.5	409.4	566.0	3250.3	300.5
192.0	342.5		768.8	5926.7	433.3	349.4	2822.1	1348.4	566.5	940.9	3104.2
80.2	6.7		192.4	129.1			72.0		59.1	92.4	
463.3	106.8		1717.7	27220.9	1359.9	25.8	482.2	138.4	1330.9	5066.9	532.1
				3600.6							
47.4			14.8	30.9	52.1	39.8	83.5	167.5	14.4	32.8	
419.7	7.7		664.9	683.0	327.7	130.6	3728.0	1208.2	126.6	926.5	960.4
108.5	143.5		1036.3	6752.4	1200.1	260.0	1695.4	1453.9	273.1	3240.1	3736.4
319.2			1242.4	17421.0	620.8	291.6	625.4	517.5	340.2	4044.7	437.4
			64.1	21.9			3.2	7.1		75.9	31.3
128.5	32.7		806.3	17228.2	791.3	103.4	945.1	192.6	289.5	6387.5	132.1
113.5	43.3		363.0	595.1	99.2	230.5	3036.0	998.9	169.9	861.8	1975.3
97.0	45.1		973.3	3653.8	908.1	252.0	1119.8	186.5	58.9	3925.8	1074.9
	36.4		803.4	4798.8	393.6	889.8	4798.4	2020.8	17.6	2413.7	1410.6
144.9	51.1		660.2	9666.9	361.0	69.2	295.1	48.0	105.6	5766.7	61.7
91.9			178.7	5156.9	183.5	53.2	154.7	65.1	25.9	1130.0	
24.0			18.7	1188.8						147.3	
											23.5
33.9											
93.7						7.9				21.5	
41.3							29.8			43.1	6.3
	123.8		382.0	176.8	35.3	24.4	59.4	56.1	49.4	298.1	
36.6	19.8		377.4	1141.1	388.7	419.5	1755.3	588.9	40.2	324.9	2300.4
36.9	43.9		364.6	2226.5	96.2	414.8	80.0	84.7	24.3	462.6	31.3
	34.0		6.3	201.2	239.9	304.9	49.1	114.7		370.1	353.2
									9.9		
			111.9	214.5	179.2		46.5			71.4	
			40.1								
6.5	75.4				9.9		4.2				
									8.3		
	19.4		373.6	269.7			5.5	13.2		12.3	56.7
				88.2					80.5		
					38.2	196.4	10.8	145.5		8.9	120.4
							15.6	37.3		54.0	7.6
							5.8				
64.7						7.9	23.3	27.2	33.0	17.8	
17.2	10.7			22.1	42.9	20.1	58.9	69.9	44.0		3.4
40.0					20.0		29.9	22.2	6.7		
49.8											
26.0			9.4	33.0		6.7	206.1	67.9		9.9	89.7
11.4			52.5	13.5	58.9	18.7	96.0	13.7	36.4	55.0	43.8
19.3				68.8		6.3	62.4	75.3		15.1	
				14.7				6.4			
134.2	97.3		19.7						118.5		
1832.0	3646.6	102.0	45.3				13.5	35.0	13782.5	57.9	86.5
164.5	1773.3		82.8					52.2	278.7		94.6
859.9	2944.5		350.4	11.1				33.7	46.4	1744.8	90.3
			18.6					25.0	20.6		4.8
21.3	75.7								421.8	11.5	
1134.9	2328.2		94.0	59.9			64.1	573.2	2281.4	78.1	58.6
230.1	622.8		5.6				7.1	106.7	439.4		68.0
327.4	367.6		235.3	35.2	22.9		845.4	1122.2	380.4	1557.5	430.0
414.9	639.0		127.2	43.4			303.1	506.0	371.3	41.7	308.3
92.1	58.2		44.9				3.3	10.4	67.8		9.1
			21.8						9.1		11.0
58.2	113.8		285.4		187.3				58.0		
63.5	25.9			34.8		16.3	122.2	133.7	39.7		67.3
231.1	264.1		339.4	46.9	259.2	51.3	767.5	454.8	157.1	236.8	655.8
118.6	286.8		115.8	25.8	34.4	4.2	108.1	113.9	437.6	108.4	135.2
113.4	273.2	60.0	328.0	121.9	12.2	16.2	1929.2	3040.2	234.3	56.7	1244.7
56.8	55.5		190.7	100.7		8.3	314.6	257.5	144.3		192.6
	9.6						2.0				9.8
				38.6				25.8	46.0		
	236.0		238.2				152.6	62.1			109.5
14.6	47.3		199.5	55.4			148.9	516.2		32.2	227.5
16.4	131.2		167.6	81.1	24.3		1451.3	1763.5	138.3	12.3	1324.2
163.2		29.3	18.8	8.9			65.3		14.9		4.6
			11.7		15.0		23.9	5.6			

1 縄文時代

重量：g

位置	層位	各層の出土 土器総重量(g)	前期初頭～ 前葉	円筒下層 d	大木 7a	大木 7b	円筒上層 b	大木 8a 古	大木 8a 新	大木 8b 古	大木 8b 新
遺 319	Ⅲ層	2149.1							17.9		12.2
遺 320	Ⅲ層	5048.3							15.8		143.9
	Ⅳ～Ⅴ層	1869.1			127.7						33.5
遺 321	Ⅲ層	9692.6									163.7
	Ⅳ～Ⅴ層	138.0									
遺 322	Ⅲ層	1865.2							66.4		123.5
	Ⅳ～Ⅴ層	142.3									
遺 323	Ⅲ層	665.5							47.4		66.0
	Ⅳ～Ⅴ層	214.4									
遺 324	Ⅲ層	3465.4							11.0		134.2
	Ⅳ～Ⅴ層	34.8									
遺 325	Ⅲ層	2681.0							43.7		137.6
遺 326	Ⅲ層	1841.6							109.3		26.8
	Ⅳ～Ⅴ層	169.0							32.9		
遺 327	Ⅲ層	2701.8			26.0				16.5		144.2
	Ⅳ～Ⅴ層	267.0							33.7		
遺 328	Ⅲ層	6786.9							82.2		88.9
	Ⅳ～Ⅴ層	2075.0							30.7		32.7
遺 329	Ⅲ層	1584.1							20.5		68.1
遺 330	Ⅲ層	230.2									9.0
遺 332	Ⅲ層	2039.3							25.3		35.0
	Ⅳ～Ⅴ層	2744.3									63.5
遺 333	Ⅲ層	1257.0							36.1		
	Ⅳ～Ⅴ層	2007.5							14.8		29.7
遺 334	Ⅲ層	295.6							15.4		28.0
	Ⅳ～Ⅴ層	2465.4	19.4						37.2		68.4
遺 335	Ⅲ層	1935.6									42.6
	Ⅳ～Ⅴ層	2509.2							117.8		152.5
遺 336	Ⅲ層	489.3									60.6
遺 337	Ⅳ～Ⅴ層	356.5							13.3		2.4
	Ⅲ層	277.5									37.7
遺 338	Ⅲ層	1739.4									46.8
遺 339	Ⅲ層	697.7									11.6
	Ⅳ～Ⅴ層	72.8									
遺 340	Ⅳ～Ⅴ層	23.9									
	Ⅲ層	135.9									16.7
遺 341	Ⅳ～Ⅴ層	115.2									
	Ⅳ～Ⅴ層	168.6									
遺 342	Ⅳ～Ⅴ層	1037.2							28.3		
	Ⅴ層	284.2							31.8		
遺 343	Ⅳ～Ⅴ層	255.3									57.6
遺 344	Ⅴ層	154.0							49.6		
遺 345	Ⅲ層	294.2									
遺 346	Ⅲ層	533.8	40.6								10.1
	Ⅴ層	171.2				25.8					8.0
遺 347	Ⅲ層	781.8							6.1		55.8
	Ⅴ層	596.1									32.2
遺 348	Ⅲ層	324.1									21.6
	Ⅳ～Ⅴ層	1017.0							7.6		42.8
遺 400	Ⅴ層	1493.5	24.1		97.6				160.3	31.9	71.4
遺 401	Ⅴ層	3224.4	22.3					15.6	194.6		1037.3
遺 402	Ⅴ層	2541.5	12.1						166.6	10.9	307.3
遺 403	Ⅳ～Ⅴ層	675.6									88.1
	Ⅴ層	3021.8	27.2						118.3	36.8	664.6
遺 404	Ⅴ層	12324.1	30.4		26.4			11.5	388.8		898.0
遺 405	Ⅴ層	7432.6						34.3	238.8		733.8
	Ⅳ～Ⅴ層	464.0							19.1		86.8
遺 406	Ⅴ層	2816.1							264.7		262.7
	Ⅴ層	1250.2							115.2		175.4
遺 408	Ⅳ～Ⅴ層	11681.7							68.7		302.0
	Ⅴ層	9490.0	50.9						172.1		734.8
遺 409	Ⅳ～Ⅴ層	9236.6	14.4		26.0				92.2	248.4	949.5
	Ⅴ層	9595.7							2.7	60.5	1110.5
遺 410	Ⅳ～Ⅴ層	1725.7								10.6	
	Ⅴ層	2814.3									112.9
遺 411	Ⅲ層	1821.0						25.2			273.0
	Ⅳ～Ⅴ層	7589.0							75.6		1040.1
遺 412	Ⅴ層	307.3									181.1
	Ⅲ層	110.0	12.0								9.3
遺 413	Ⅳ～Ⅴ層	1579.4							35.4		76.3
	Ⅲ層	229.7	16.2								
遺 414	Ⅳ～Ⅴ層	977.6									78.2
	Ⅳ～Ⅴ層	594.3							32.0		118.4
遺 415	Ⅴ層	1543.9							8.9		302.1
	Ⅴ層	298.1							7.7		
遺 417	Ⅳ～Ⅴ層	813.6							97.1		
遺 418	Ⅳ～Ⅴ層	1934.5							8.5		51.4
遺 419	Ⅳ～Ⅴ層	1471.8	7.5						8.3		104.9
遺 420	Ⅳ～Ⅴ層	7283.0	27.0								347.5
遺 421	Ⅳ～Ⅴ層	137.1									
遺 422	Ⅳ～Ⅴ層	2662.9									262.0
遺 423	Ⅳ～Ⅴ層	2257.0							30.0		188.6
遺 424	Ⅳ～Ⅴ層	6839.8	41.2			24.3			58.3		186.5
遺 426	Ⅳ～Ⅴ層	1633.9									259.6
遺 427	Ⅳ～Ⅴ層	490.4									21.0
遺 428	Ⅳ～Ⅴ層	6923.4	30.9		35.3				41.4		370.8
遺 430	Ⅳ～Ⅴ層	579.7							31.4		44.0
遺 433	Ⅳ～Ⅴ層	2724.2							33.0		104.7
遺 434	Ⅲ層	1235.9			18.0				6.2		87.5
遺 435	Ⅲ層	1615.2							78.2		37.3
遺 436	Ⅴ層	1607.1									242.1
T 0	Ⅲ層	4737.9									
	Ⅳ～Ⅴ層	1809.6									
T 1	Ⅲ層	0.0									
	Ⅳ～Ⅴ層	4522.0							112.9		
T 2	Ⅲ層	0.0									
	Ⅳ～Ⅴ層	5309.6									
T 3	Ⅲ層	16196.8									
	Ⅳ～Ⅴ層	10275.0									50.5
T 4	Ⅲ層	7170.4									
	Ⅳ～Ⅴ層	3661.8									

Ⅶ 検出遺構と出土遺物

重量：g

大木 9	大木 10	後期初頭	後期前葉	後期中葉	後期後葉	大洞 B	大洞 BC	大洞 C 1～2	粗製 (中期)	粗製 (後期)	粗製 (晩期)
50.3	21.8		528	332			75.6	32.2	25.7		28.3
5.1	35.5		226	177.7		23.2	460.1	303.3	107.4	26.2	111.3
			195	90.8			71.3	14.7	39.6		119.9
32.3	20.5		43.1	149.5	72.8		183.5	321.8	20.8	289.6	280.8
									12.2		
53.1	11.9		103.2	34.8	10.3			26.8	37.4		
			11.4	34.8		7.9	25.9		32.5		13.9
							4.4		8.6		13.9
	128.2		11.6	131.5	17.2		116.9	246.5	80.1		500.9
	49.7		33.2	15.2		14.5	24.5	34.6	65.2	10.4	
	20.3		64.0	42.9	17.5			13.0	10.4		12.3
	54.9										
	52.3		71.8		74.5	31.7		17.5	40.6	133.0	
	37.4										
97.3	206.2		22.7	35.5		7.1	42.2	80.7	282.7	71.4	347.6
228.1	55.0						24.9		103.5		
	16.8						64.0	57.7			167.6
				12.4			7.2				
63.0	14.0		19.7	7.8			68.2		12.3		
149.2	21.4		68.9	11.3	13.9		9.8	34.1	49.3		12.0
				29.2				7.4	58.9		395.2
84.3	35.4		30.4						24.0		16.0
31.8				7.3		9.8	141.2	33.5	74.9	174.3	
68.3				47.4	52.4		73.8	58.5	36.0		
42.5	200.9		44.5	5.5					65.4		
				5.4			16.5	44.1	37.4		6.7
	13.0			13.8							
					9.8			23.4			
			179.7	190.5							
							12.0	12.4			11.1
				14.4							
								15.0			
	33.8										
	16.2		6.5								
15.7	21.5						9.2	20.0			
5.6											
			24.9								
	10.9		37.9								
									83.8		
			14.9					4.9			
7.4			11.9	95.9			16.7				
	142.0		15.5				18.4		38.9	96.9	
									30.2		51.0
41.4			27.4						79.4	67.3	
16.3	15.9										
115.6				13.7					134.0		
30.6	25.2								58.1		
	106.2								32.5		
77.2									392.6		
433.5	684.7		85.7	53.0					1394.5		
1351.5	78.4			30.8					987.1		
12.5								4.8			
28.5	64.5			23.4					190.2		
	65.6								18.9		28.7
233.9	268.7								1664.9		
235.9	411.6								318.9		
1125.5	258.6								393.2		
348.7	355.4		128.0	8.0					401.9		
	37.4								90.0		
273.5	21.6		22.5					18.4	86.6		
132.9	36.6								52.0		
47.9	57.6		664.0						198.9		
	36.4										
4.3	10.3		5.5	8.8				4.1			
								26.5	244.4		
											3.5
36.5	57.7								105.5		
	59.8								20.5		
26.1	273.2								70.5		
90.8	72.8			21.9				95.8			
142.2	228.7			46.7				3.4	1206.5		
810.7	41.9			23.8					99.6		
32.2	33.0		38.4	15.0					176.6	80.3	
69.3	67.0		63.4	7.9				14.7	63.6	32.5	11.8
115.9				13.6					21.5		
18.4									10.7		
80.2	79.6	50.0	74.4	24.1		64.0	87.2	87.7	138.1	250.3	51.0
43.5	71.1							1.8	9.5		
43.3	32.6	41.9		25.5					101.7	44.7	
197.8					52.3				15.1		
206.5			18.1						28.7		
81.7	108.3								133.8		
				53.1	46.5					249.0	
										19.9	
				196.5			29.1			65.4	
	212.6		110.9		33.6			59.4	560.7		
	755.6			1442.2	10.2			55.5	434.2	564.1	
	7.0							53.5		110.1	
				199.6				122.9		533.0	105.3
			174.0	142.5					233.8		

文を施文する。1011 は矢羽状に縄文原体押圧文を施文し、胴部との間には刺突文が巡る。胴部は横位の結束羽状縄文である。1012・1013 は胴部との間に刺突文を加えた隆帯が巡る。胴部には横位の羽状縄文を施文する。1014 は縄文原体押圧文の原体が細かい。1015 は胴部との間に刺突文を加えた隆帯が巡る。

縄文時代中期の土器

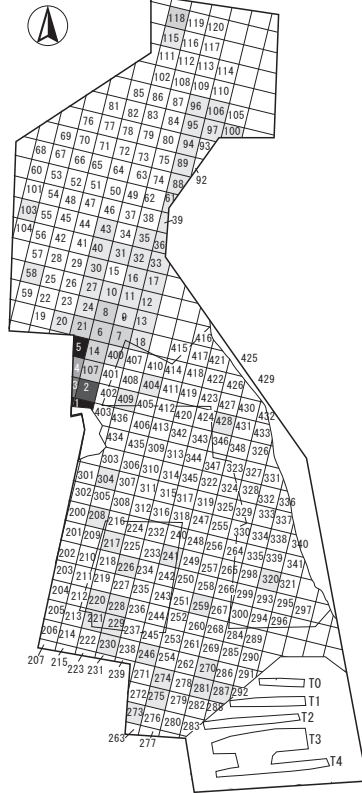
大木7a式古段階・新段階（第2分冊第8～11図、写真図版98～102）

大木7a式に比定される土器の分布は第166図左上に示した通りである。調査区中央、遺1～5のV層に集中し、その周辺にも広がる。前期同様、流れ込みによる混入と推測する。

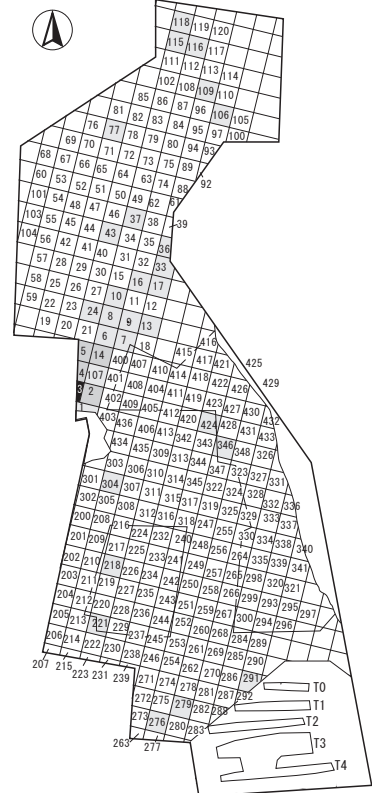
964～1008は大木7a式古段階に比定される土器で、ほとんどが深鉢A類の口縁片である。964～969は口縁部に環状あるいは逆U字状の突起が付く。突起には刻みや沈線が加えられる。970は押圧文を加えた隆帯で口縁部を横位に区画する。971は口縁部に大きな突起が付くものと推測するが、剥離している。細い工具による平行沈線で環状に文様を描いている。973も同様の文様である。972は波頂部から縦位に隆帯を垂下する。隆帯も含め、口縁部全体に刺突文を充填する。974～981は口縁部に、棒状工具による短沈線で弧状文、波状文、渦巻き文を充填する。974は球胴形深鉢の口縁部と推測する。波状口縁で波頂部から短い隆帯が垂下する。975は波状口縁部で波頂部が内面に向け、片口状に整形される。また口唇部に押圧文が施文される。976は口縁部にX字状の把手が付く。ただし貫通していない。981は口唇部から口縁部にかけて、押圧文を加えた隆帯が環状を描きながら付く。982は細い工具による平行沈線で格子状文を描く。口唇部には刻みが巡る。983は深鉢B類の大型破片で、口唇部に半円状の突起が付く。口唇部には沈線文が巡る。口縁部は短沈線による斜線文が巡る。また刻みを施した楕円形の突起が付く。胴部には結節部分が残る斜行縄文を縦位に施文する。984は口縁部に付く突起で、幅広の押圧文と交互刺突文を施文する。985は口唇部から口縁部にかけて刻みを加えた隆帯が付くが、内面にも環状の隆帯が付く。986も口唇部から口縁部に隆帯が付く、内面にも隆帯が付く。外面の隆帯上には縄文が施文される。989～992は横位に平行沈線が巡り、その間を刺突文や刻みを充填する。993・994・996・1001は斜行沈線を連続して充填する。998は平行沈線で鋸歯状文を描く。999は非常に細い沈線で鋸歯状文を描く。1000は多段化した横位の沈線の間を刺突文が充填する。また刺突文はやや押しに近い。1005は深鉢A類としたが、胴部から口縁部にかけて丸く内湾する器形と推測する。口縁部には縄文原体押圧文が施文され、胴部には結節部分が残る縦位の斜行縄文が施文される。口縁部は円筒下層d式、胴部は大木7a式古段階に特徴的な文様がみられる土器である。1006も同様で、口縁部には縄文原体押圧文、胴部には縄文が施文され、また口縁部と胴部の間には2条の沈線による波状文が施文される。

1016～1031は大木7a式新段階に比定される土器である。1016は波状口縁で縄文を地文とし、刺突文を充填した平行沈線と交互刺突文を加えた隆帯が付く。1017は口唇部から口縁部に、交互刺突文を加えた隆帯が付く。1019は波状口縁で、波頂部の口唇部と垂下する隆帯に縄文原体押圧文が施文され、また口縁部文様も沈線と縄文原体押圧文である。形態の特徴から該期としたが、ほぼ大木7b式に近い。1020～1026は口縁部片で、幅広の沈線や押し文、交互刺突文を加えた隆帯が施文される。1020・1021は波状口縁で、口唇部に押し文が施文される。1025は平縁で、縄文を地文とし、沈線と刺突文が横位に巡る。胴部には細い隆帯が斜位に垂下する。1027は口唇部直下が肥厚し、また口縁部にボタン状の突起が付く。また沈線による楕円形文が描かれる。1028は地文に結束羽状縄文を施文するが、口縁部は横位、胴部は縦位と別々に施文される。口縁部と胴部の間は浅い沈線のみで三角形を呈する隆帯が付く。1030・1031は胴部片で、沈線を充填した楕円形文が描かれる。

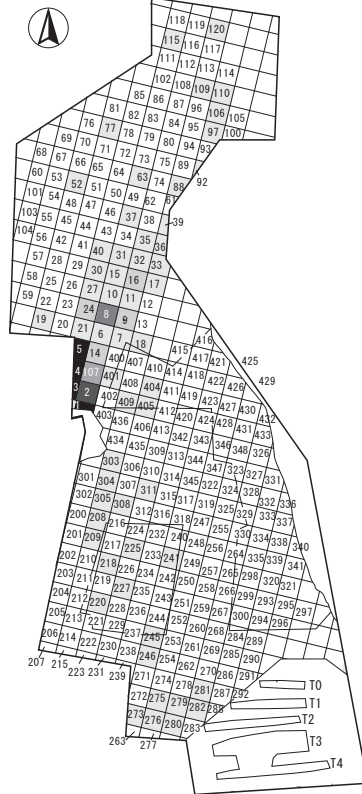
大木 7a式
(Ⅳ～Ⅴ層・Ⅴ層出土分)



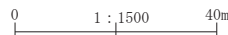
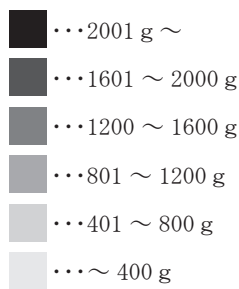
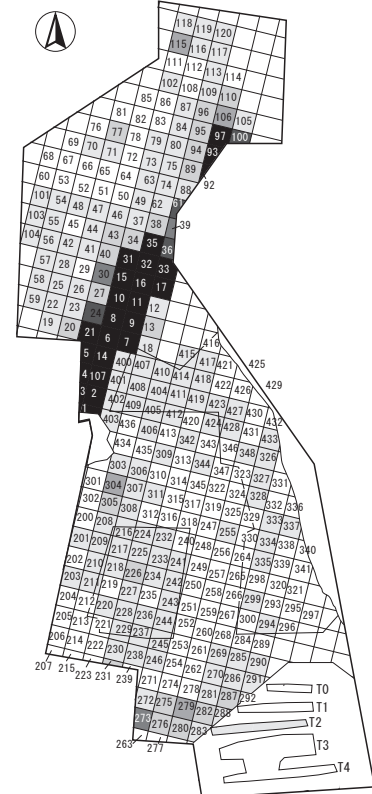
大木 7b式
(Ⅳ～Ⅴ層・Ⅴ層出土分)



大木 8a式古段階
(Ⅳ～Ⅴ層・Ⅴ層出土分)



大木 8a式新段階
(Ⅳ～Ⅴ層・Ⅴ層出土分)



第 166 図 遺構外出土土器分布 2

大木7b式（第2分冊第12・13図、写真図版103～104）

1032～1050は大木7b式に比定される土器である。分布は第166図右上に示した通りである。出土量は少ない。調査区中央、遺3の周辺V層のみに集中し、他は散在的である。また大木7a式同様に流れ込みによる混入である。出土量は比較的少ないものの、大木7a式と比べると、略完形や器形復元の可能な土器が含まれる。

1032は深鉢A類である。形態は大木7a式新段階の深鉢A類に類似するが、文様は地文以外、口縁部に縄文原体押圧文を施文するのみで、大木7a式新段階とは異なる。1033は深鉢B類で、平縁で口縁部が大きく外反する。口縁部には縄文原体押圧による曲線文が巡り、胴部にも地文のほか、縄文原体押圧文が垂下する。1034は大型の深鉢胴部片で、地文のほか、縄文を施文した隆帯が巡り、その脇には縄文原体押圧文が施文される。1035は略完形の浅鉢で、4単位の波状口縁を呈する。口縁部には隆帯による三角形状文が巡り、その脇には縄文原体押圧文が施文される。1036～1045は口縁部片、1046～1050は胴部片である。いずれも縄文を施文した隆帯や縄文原体押圧文による文様が施文される。

円筒上層b～c式（第2分冊第18図、写真図版107）

数片であるが、円筒上層b～c式の特徴を有する破片が、主に調査区北側のV層中から出土している。

文様が明瞭な7点（1108～1114）を掲載した。1108は深鉢の口縁部片で、平縁で口縁部が大きく外反する。口唇部直下に縄文を施文した隆帯が波状に付く。口縁部には横位に細い隆帯が数条巡り、その隆帯の間に短いU字状の縄文原体押圧文が充填される。1109も深鉢の口縁部片であるが、地文はなく、縄文原体押圧文を施文される隆帯のみである。隆帯はV字状を呈するものが上下に連結する。1110も同様に地文はないが、押圧文や縄文を施文される隆帯の在り方が円筒上層b～c式にみられるものと類似しているため該期ではないかと推測する。1111は1108と同様の文様が施文される。1112は地文に半裁竹管状工具による平行刺突文が充填され、円筒上層c式と類似する文様を有する。1113・1114は曲線状を呈する隆帯が付く。隆帯と隆帯脇には複数条の縄文原体押圧文が沿う。この文様の在り方自体は円筒上層b式ないしc式には見受けられないが、隆帯の形態的な特徴は共通するので、該期と判断した。

大木8a式古段階（第2分冊第14～19図、写真図版105～108）

1051～1107は大木8a式古段階に比定すると判断した土器である。分布は第166図左下に示した通りである。調査区中央、遺1～5のV層に集中している。他は散在的に分布している。なお、この段階から出土量が増大し、また略完形、あるいは器形が復元できる土器が多く出土するようになる。それでも次の段階以降に比べるとまだ出土量は比較的少ない。

1051～1058は、形態は前段階の大木7b式に類似しており、両時期の過渡期に相当する土器群の可能性がある。1051は深鉢B類とした。ほぼ直立気味で、口唇部に山形突起が並ぶ。口縁部に縄文原体押圧文による横位の楕円形区画を並べ、また区画内には同じく縄文原体押圧文で弧状文を連続する。この文様の在り方から、大木8a式古段階と判断した。1052も深鉢B類とした。口唇部に山形突起が付く。口縁部が外へわずかに開き、文様の在り方は深鉢A類（キャリパー形）と共通するので、キャリパー形の祖形ではないかと推測する。1054も同様と推測する。1053・1057・1058はわずかに外へと開き、口縁部に縄文原体押圧文の弧状文が横位に連続する。1057は地文に横位の結節回転文が施文され、特異である。1055・1056は1033に類似する形態で、また口唇部直下に縄文原体押圧文を加え

た隆帯が付くことから、まだ大木7b式に近い段階の可能性が高い。

1059～1065は深鉢A類とした。ただし口縁部は直立気味、あるいはわずかに丸みをもつ程度で大木8a式新段階の深鉢A類（キャリパー形）とはやや異なる。文様は口縁部と胴部に分かれるが、胴部は地文のみである。1059・1060・1061は縄文原体押圧文による横位の楕円形区画を施文し、その上下には同じく縄文原体押圧文や隆帯が付く。1062も同様な文様であるが、隆帯と沈線による楕円形区画も横位に巡る。1063は口縁部の上下に縄文原体押圧文が巡り、その間に縄文原体押圧文による弧状文が連続する。1064は縄文原体押圧による渦巻き文が口縁部を4単位に区画し、それらを4条の縄文原体押圧文で連結させている。また口縁部に施文される斜行縄文と縄文原体押圧文は、原体に無節縄文を用いているのが特徴である。1065は他と比べて口縁部が強く内湾する形態である。1単位の突起が口唇部に付くが、欠損している。口縁部の上下に隆帯が付き、その間に縄文原体押圧文が縦位に充填される（縦位の単軸絡条体1類?）。

1066～1096は深鉢の口縁部片である。いずれも数条の縄文原体押圧文を横位に巡らす文様が施文される。また細い隆帯を曲線状や弧状、鋸歯状に施文し、隆帯脇に縄文原体押圧文を沿わせるものも多い。1069は口唇部直下に橋状の突起が付く。把手に類似するが、貫通していない。1082は波状口縁で、口唇部直下に隆帯による波状文が付く。また隆帯には縄文が施文される。1083は口縁部に把手が付く。1085～1088は口縁部に横位の縄文原体押圧文が複数条巡る。文様だけみると円筒下層d式に類似するが、胎土に繊維の混入が見受けられない点と、断面からみた口縁部形態から該期の土器と判断した。1094は縄文原体押圧文で格子状文を描き、また1095・1096は口縁部に縦位の縄文原体押圧文を連続的に施文する隆帯が付く。1094～1019は形態・文様に特徴がないが、縄文原体押圧文を施文することから該期と判断した。

1097～1107は浅鉢で、口縁部片や口縁部から胴部にかけての大型破片である。1097・1098は口唇部から口縁部に4単位の突起が付く。突起は上面に向けた隆帯による渦巻き文が付く。口縁部には楕円形区画が巡り、区画内に縄文原体押圧文が充填される。胴部には地文のほか、縄文原体押圧文で渦巻き文などが施文される。1099は口縁部は隆帯による区画のみ、胴部には地文と縄文原体押圧文による曲線状文が施文される。1100は口縁部と胴部の境が不明瞭であるが、全体に斜行縄文を縦位に施文後、口縁部に縄文原体押圧文で幾何学状の文様を描いている。1101は口縁部と口縁部直下の胴部との間に突起が付く。口縁部には隆帯によって鋸歯状に区画され、区画内には縄文原体押圧文が充填される。1102は口縁部と胴部の間に隆帯が付き、大きく内湾する。文様は1101と同様であるが、口唇部に波状を呈した隆帯が付く。胴部には地文に加え、沈線文が施文されるので、大木8a式新段階に近い可能性が高い。1104・1105・1106は胴部に地文のほか、縄文原体押圧文で弧状文が連続する。

1115・1116は深鉢A類とした。1059～1065と比べると、口縁部が丸く膨らみ、頸部の括れも明瞭で大木8a式新段階の深鉢A類の形態に近い。口縁部には隆帯と、その隆帯に沿う縄文原体押圧文で、大きな波状文あるいは鋸歯状文が描かれる。これは大木8a式新段階の深鉢A類の口縁部でよく見られる文様に類似し（たとえば1125・1126）、違うのは施文する文様が縄文原体押圧文か沈線かのみである。胴部は地文のみである。1117～1120は深鉢B類で、胴部がほぼ直立気味である。口縁部に複数条の横位の縄文原体押圧文を施文しており、この文様の特徴から大木8a式古段階と判断した。また1119は幅の狭い口縁部に隆帯による区画を巡らせ、区画内には縄文原体押圧文を施文する。

1122～1124は浅鉢である。いずれも口縁部が内側に大きく屈曲する。1121～1123には口縁部に4単位の突起が付く。口縁部は隆帯により区画され、区画内には縄文原体押圧文を充填する。胴部は地文の上に隆帯と隆帯脇に沿う縄文原体押圧文による渦巻き文や曲線文が縦位に垂下する。1124は口縁

部に隆帯や突起は付かず、地文と縄文原体押圧文による弧状文のみが施文される。

大木8a式新段階（第2分冊第20～52図、写真図版110～135）

1125～1405は大木8a式新段階と判断した土器である。分布は第166図右下に示した通りである。出土量が激増し、調査区北東側から中央、V層中の広い範囲に集中している。V層中から出土した中期の土器では該期の土器が最も多く、略完形や器形復元できた土器も多い。

1125～1153は深鉢A類である。地文には口縁部と胴部、それぞれ異なる原体の縄文を施文し、口縁部には隆沈線を三角形に巡らせる文様（1125～1129・1131～1136・1149）や隆帯や沈線で波状文を横位に巡らせる文様（1137～1141）、隆帯によるクランク状文が施文される文様（1142・1143）、隆帯による楕円形区画が4単位ないし、複数単位で配される文様（1144～1148）が見受けられる。口唇部形態は平縁が主体であるが、大型の突起を付した4単位の波状口縁を呈するもの（1151～1153）も見受けられる。他に特徴として縦位の押圧文を施した半球状の突起（例えば1125・1131・1132の口唇部直下など）が付いたり、渦巻状の隆帯が横位に付くもの（例えば1128・1131）がある。胴部は地文のみが主体であるが、沈線文が加えられるもの（1128・1134・1138）もある。1162～1214は口縁部片で、上記の文様が施文される。

1154～1159も深鉢A類としたが、上記の深鉢A類とは形態や文様がやや異なる一群である。形態では1154や1159のように胴部が膨らむものや、1157のように筒状に近いものが見受けられる。口縁部の文様は隆帯による曲線状（1154・1159）や、鋸歯状（1155）が施文される。1156～1159は沈線文や無文帯で頸部文様帯を形成している。1160は口縁部の膨らみが弱く、深鉢B類に近い。口縁部から胴部にかけて歪な楕円形区画が並ぶ。1230～1239は深鉢の口縁部片であるが、同様な文様が施文される。

1215～1221も深鉢A類で、該期の深鉢に特徴的な胴部が大きく伸びる形態を呈する。胴部は地文のみで、口縁部には地文のほか隆帯による渦巻き文（1215・1216・1218・1219）が付くものや横S字状文がつくもの（1220）、隆帯を三角形に巡らせるもの（1221）がある。1222～1229も同様な形態の深鉢口縁部片と考える。

1240～1247は形態は不明の口縁部片で、口唇部から口縁部にかけて大型あるいは中空の突起が付くものを一括した。

1248～1273は深鉢B類とした。4単位の波状口縁を呈するものが主体となる。口縁部は幅が狭く、隆帯と沈線による渦巻き文が巡るもの（1248～1252など）や横S字状の突起が付くもの（1256・1262・1265など）が多い。また1257は平縁であるが、口唇部に円環状の大型把手が1個付く。深鉢A類とは違い、胴部には地文のほか、沈線文が施文されるものが多くなり、縦位・斜位の直線文と渦巻き文を組み合わせるもの（1248・1251など）と複数条の平行沈線が横位に直線的あるいは弧状、波状に巡るもの（1253・1260・1261）、歪な区画文を描くもの（1256・1262など）が見受けられる。1274～1309はそれらの文様が施文される口縁部片を掲載した。

1312～1357も深鉢B類としたが、上記の深鉢B類とはやや異なる形態を呈する。1312～1314・1316は口縁部が大きく外反し、胴部下半が膨らむ器形で、文様は上記の深鉢とは異なるものの、曲線状の沈線や隆帯の文様の在り方など、該期の特徴を部分的に有する。1315・1317・1318は口縁部下の括れが弱い寸胴形で、文様は縦位の短沈線や沈線による弧状文が施文される。1319～1347は口縁部片であるが、形態は不明である。1348・1353は外へと直線的に広がる形態で、1348は口縁部上が屈曲し、曲線状の隆帯や、短沈線が巡る。口縁部下は横位の沈線文のみである。1353は口縁部は隆帯による波

状文が付き、胴部は地文にこの時期には珍しく、縦位の結束羽状縄文を用い、沈線文を加える。

1359～1362は大型の深鉢で、いずれも深鉢B類とした。口縁部が内湾し、胴部上半に最大径をもつ寸胴形を呈する。1359は口縁部を隆帯で区画し、区画内には縄文原体押圧文を充填する。この特徴のみであれば、大木8a式古段階と考えるが、胴部は地文に沈線文を施文しており、該期とした。1360は口縁部に沈線を連続的に施文し、鋸歯状文を描く。また胴部上半には平行沈線による弧状文が横位に連続する。1361は口唇部に1単位の曲線状の突起が付き、その下には刺突文が巡る。胴部上半は沈線文が横位と縦位に施文される。1362は口縁部に把手と曲線状の突起が付く。口縁部と胴部の間には押圧文を加えた隆帯により区分され、胴部には地文に隆帯による曲線文が施文される。

1371～1377は地文以外の文様が乏しい深鉢である。形態や口縁部文様（1371・1372など）から該期の範疇と判断した。1378～1387はそれらと同じ文様を有する口縁部片と考えている。

1388～1390は深鉢の口縁部ないし胴部上半に付く大型把手の破片である。把手の脇には沈線が施文される。大木8b式にも同様な大型把手が見受けられるが、1388～1390は文様に渦巻き文が加えられないことから、該期のものと判断した。

1391～1405は浅鉢である。口縁部が屈曲する浅鉢A類（1391など）と、外へと直線的に開く浅鉢B類（1396など）が見受けられるが、前者の方が多い。文様はどちらも口縁部に集中する傾向が見受けられ、胴部は地文のみが主体である。口縁部に沈線文が巡るもの（1396・1397など）が多いが、刺突文が巡るもの（1391）や縦位の短沈線が巡るもの（1392・1393）も見受けられる。また地文を施文し、隆帯を直線状あるいは波状に施文するもの（1398）もある。1405は浅鉢の大型破片で、口縁部から胴部へと縦位に把手が付いていたと推測するが欠損する。あまり見受けられないが、胴部は地文に隆帯による曲線文であり、該期の文様の特徴を有する。

大木8b式古段階（第2分冊第53～55図、写真図版136～138）

1406～1442を大木8b式古段階に比定される土器とした。分布は第167図左上に示した通りである。前時期に比べ出土量が減少し、出土する範囲は狭くなったが、調査区北側、遺6・7・14のV層中からとその周辺に集中する。出土量の減少については、該期の土器が主に口縁部の文様に特徴があり、胴部の破片では判別ができず、見落としがある可能性もある。

1406～1426は深鉢の口縁部片である。いずれも口縁部上下を隆帯で区画し、隆帯による渦巻き文を横位に延ばし、次の渦巻き文へと連結している。該期では渦巻き文に有棘文（1418・1420・1421）が付くのが特徴であるが、本遺構では決して多くない。口唇部形態は波状口縁と平縁、両方ある。1406のように口唇部に曲線状の突起が付くものもあるがまれである。胴部文様は地文のみ（1408・1409など）が多いが、沈線による渦巻き文が描かれるもの（1423・1426）も見られる。

1427は器形復元できた深鉢で、前時期の深鉢A類と同じ形態である。口縁部を大きく欠損するが、4単位の波状口縁を呈するものと推測する。胴部は地文のみで、口縁部は地文の上に隆帯による渦巻き文が横位に巡る。また欠損しているが渦巻き文には有棘文が付くものと推測する。1429は大型の口縁部片で1427と同様な文様である。1428は胴部片で地文の上に平行沈線で渦巻き文が描かれている。

1431～1435は胴部片である。いずれも地文の上に隆帯や沈線で渦巻き文を描き、また連結する有棘文が描かれている。

1438・1440・1441は深鉢の口縁部片で、中空の大型突起が付く。口縁部は隆帯で区画し、区画内には縦位の沈線を充填する。中空の突起は1単位と推定され、沈線による渦巻き文で装飾される。1439・1442も同じく口縁部に付された突起である。正面および上面に沈線による渦巻き文を施文して

いる。これらは口縁部に渦巻き文が巡らず、該期の特徴を有してないが、口縁部形態と突起に施文される渦巻き文により、該期と判断した。

大木8b新段階（第2分冊第56～65図、写真図版138～146）

1443～1543は大木8b式新段階に比定される土器とした。分布は第167図右上に示した通りである。再び出土量が増加し、調査区北側から中央、V層中に集中し、また調査区南側も遺208・304・305周辺のIV～V層から多量に出土している。竪穴住居跡群から出土した土器も合わせれば、出土量はさらに膨大な量になるが、遺構内出土と違い、遺構外から出土した土器は破片が多い。

1443～1450は大型の破片で、深鉢A類とした。1443は胴部中位がわずかに括れ、口縁部が外へと開く形態である。口縁部は無文、胴部には隆沈線による大小の渦巻き文が短い隆帯で連結される。1444は大木8a式新段階の深鉢に類似するが、胴部に沈線による渦巻き文が施文されており、該期と判断した。1445は口縁部に隆帯と沈線で渦巻き文が描かれる。胴部は大きく欠損するが、地文の上、平行沈線による渦巻き文が描かれていると推測する。1446～1450は胴部のみであるが器形を復元できた。いずれも胴部から底部にかけ、複数の渦巻き文がそれぞれ連結しながら描かれている。1451～1456・1458は口縁部片、1457は胴部片であるが、同様の文様が施文される土器群である。1459は深鉢の胴部下半のみ残存する。底径からみて、非常に大型の深鉢である。隆沈線による渦巻き文は小さく、それを曲線文が連結する。

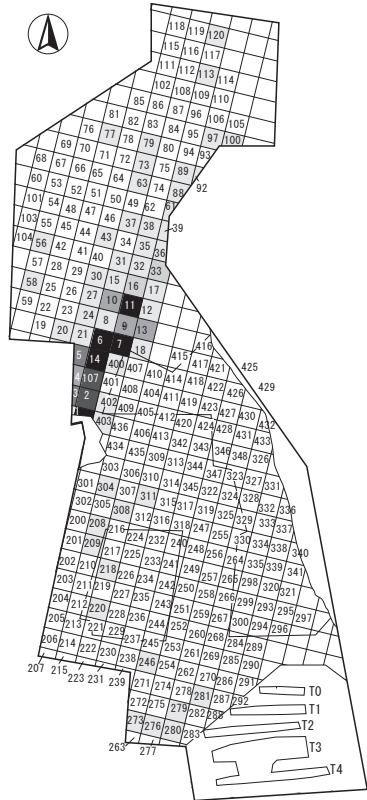
1460～1467は器形を復元できた深鉢A類で、該期に特徴的な、胴部中位で括れ、2単位の波状口縁を呈する。胴部から底部へと隆沈線で渦巻き文を描き、縦位の隆沈線で連結する。また1460は口縁部に小さく歪な方形区画が見受けられ、大木9式古段階に近い段階である。1468～1531は同様な文様が施文される破片で、1470・1505は浅鉢としたが、他は深鉢である。すべて隆沈線で渦巻き文を描き、直線状の隆沈線が連結する。1476や1500は口縁部と胴部の間に刺突文が巡る。1508・1509は口唇部から口縁部に円環状あるいは中空の突起が付く。1513～1515は口縁部と胴部との間に1～2段の円形刺突文が巡る。1518～1523は渦巻き文の数が減少、あるいは退化するものや、また縦位の隆帯が垂下するものが目立つ。大木9式古段階に近い段階の可能性もある。1529は2号住居跡出土の深鉢(81)と同様の文様が施文される。1532～1534は胴部に付く把手の破片である。1532は把手自体に円孔が施される。1533は隆帯に渦巻き文が付く。

1535は深鉢C類の大型破片である。口縁部と胴部にそれぞれ隆沈線で渦巻き文と区画文が施文され、大木9式古段階に近い段階の可能性もある。また無文の頸部文様帯が見受けられる。1536・1537は浅鉢である。1536は胴部が大きく外へと開き、口縁部が内湾する。口縁部には隆沈線による渦巻き文が横位に延びる。文様の在り方は大木8b式古段階の深鉢口縁部に類似するが、渦巻き文の形態がやや異なるので、該期に含めた。1537は内湾する口縁部を隆帯で区画し、その間に沈線で渦巻き文を描く。区画内には短沈線を矢羽根状に充填する。

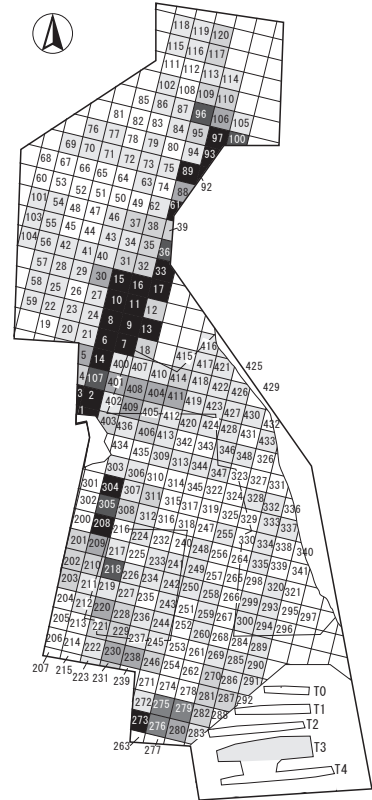
1538は焼成失敗品と推測する。渦巻き文が施文されるので該期と判断した。残存する口縁部から推測する口径が、他の深鉢の口径と比べてあまりに小さく、また残存部からは形態が推定できない。焼成、あるいは製作時に失敗し、変形したものと推測する。

1539～1542は該期に含めたが、文様から限りなく大木9式古段階に近い時期の一群と考える。1539は胴部が膨らみ、口縁部が直立する形態である。胴部に隆沈線の渦巻き文が付くが、縦位の隆沈線の方が主体となり、方形区画が形成し始める。1540は3単位の波状口縁を呈する深鉢で、胴部上半に隆帯による渦巻き文が付くが、やや退化気味で、また方形や三角形区画が見受けられる。1541は2

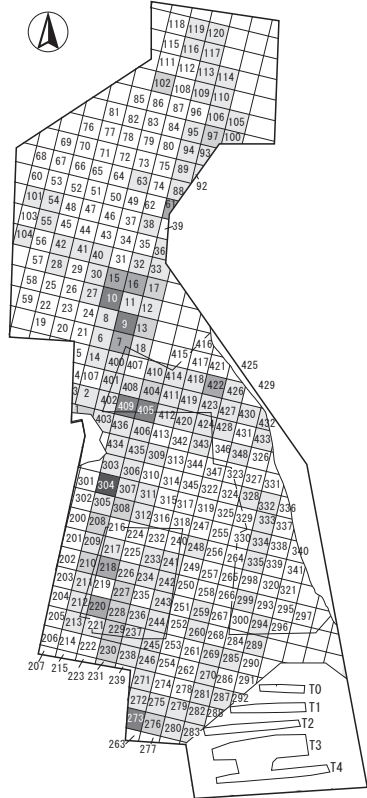
大木 8b 式古段階
(Ⅳ～Ⅴ層・Ⅴ層出土分)



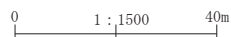
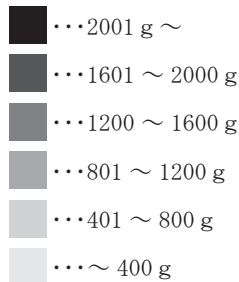
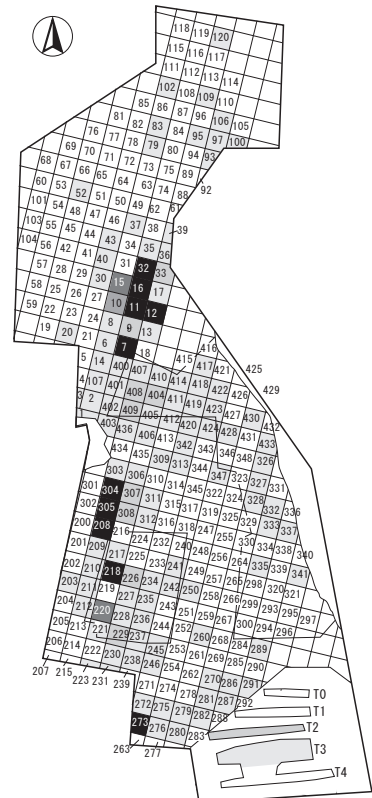
大木 8b 式新段階
(Ⅳ～Ⅴ層・Ⅴ層出土分)



大木 9 式
(Ⅳ～Ⅴ層・Ⅴ層出土分)



大木 10 式
(Ⅳ～Ⅴ層・Ⅴ層出土分)



第 167 図 遺構外出土土器分布 3

単位の波状口縁を呈する深鉢で、1540よりは渦巻き文が明確であるが、やはり胴部上半に楕円形区画が形成し始めている。1543は有孔鍔付土器である。鍔には小孔が巡り、また縦位に大きな円孔が施される。胴部は地文のみである。該期としたが渦巻き文が施文されないのもっと新しい可能性もある。

大木8b新段階～大木9式古段階（第2分冊第66～69図、写真図版146～149）

1544～1574を該期の土器とした。分布については図示していないが、概ね調査区北側から中央部、特に大木8b式新段階が集中的に出土した範囲で多く出土する傾向にある。また2～4号住居跡から、完形や器形の復元できる該期の土器が多く出土しており、その周辺でも多く出土する。ただし遺構内出土と違い、破片が多い。

1544～1550は器形復元できた土器である。ただし1545・1548以外は部分的な復元に留まる。1544は大型の破片で、口縁部が肥厚し無文、胴部には円文に近い渦巻き文と楕円形区画文が施文される。地文には単軸絡条体1類が縦位に施文される。1545は一部大きく欠損するが、形態は復元できる。ただし第66図に示した通り、全体が歪んでいる。文様は口縁部から胴部まで斜行縄文を地文とし、円形、楕円形区画を描く。1549も同様な文様である。1546は緩い波状口縁で、口唇部に山形突起が付く。地文を施文した上で、沈線により、連結する複数の渦巻き文を描いている。1547は大木8b式新段階の深鉢A類に類似し、2単位の波状口縁を呈する。胴部に地文を施文後、円文に近い渦巻き文と楕円形区画文を描いている。1548は地文の上、U字状区画と渦巻き文が描かれている。

1551～1556・1559～1567は口縁部片、1557・1558・1568～1574は胴部片である。いずれも地文を施文した上で、沈線による渦巻き文と区画が施文される。区画の外は地文（縄文）が磨り消されず、器面全体に地文が残るのが特徴である。1551～1556は幅の狭い口縁部がわずかに肥厚し、無文となる。1551は口唇部に上面に向けた沈線による渦巻き文が施文される。1556・1561・1562・1567には口縁部直下に刺突文が巡る。地文は斜行縄文（単節・複節）が主体であるが、縦位の単軸絡条体1類（1554・1557・1560・1562・1567・1574）も少なくない。

大木9式古段階・新段階（第2分冊第69～72図、写真図版149～152）

1577～1627を大木9式とした。大木9式は古段階・新段階に細分しているが、第167図左下には合わせて、その分布を示している。出土量が減り、出土する地点も散在的である。また該期の土器は出土量が少ないためか、ほとんどが破片である。

1575～1582は大木9式古段階に比定される深鉢の口縁部片である。隆帯による渦巻き文や曲線状文が付き、その先は胴部へと垂下するものが多い。隆帯の脇には区画文が施文され、区画内には磨消技法で縄文が施文される（1579～1581）。1582は胴部片でH字状を呈する隆帯が付く。その下は区画文であり、区画内に磨消技法で縄文が施文されている。

1583～1627は大木9式新段階とした。1583は胴部が大きく膨らみ、口縁部がすぼまる深鉢B類である。口縁部は無文で、胴部に隆帯による渦巻き文が付き、その先は胴部下半へと垂下する。胴部には沈線による楕円形区画が縦位に並び、区画内には磨消技法で縄文が施文される。隆帯による渦巻き文が残るが大木9式新段階の特徴である沈線による楕円形区画が並んでいるので新段階とした。

1584は胴部下半が膨れ、口縁部が外反する深鉢A類である。口縁部はわずかに肥厚し、胴部は縦位の楕円形区画が並ぶ。1585は胴部のみで胴部中位が括れる。括れを境として2段に楕円形区画が並んでおり、上段の楕円形区画には棒状工具による刺突文が充填され、下段の楕円形区画には磨消技法で縄文が施文される。また胴部上半には隆帯が付されており、口縁部に渦巻き文が付いていた可能性が

高い。大木9式古段階の可能性もあるが、沈線による楕円形区画が文様の主体であることから新段階と判断した。

1587～1591・1594～1615は深鉢の口縁部片、1586・1592・1616～1621は深鉢の胴部片である。いずれも口縁部から胴部へと縦位の楕円形区画が並び、区画内に磨消技法で縄文が施文される。1591や1613・1614は逆U字状区画が施文される。また1612や1615では区画内に縄文ではなく刺突文が充填される。区画の外は無文であることがほとんどであるが、なかには沈線によるC字状、あるいはS字状文が施文されるもの(1597～1600)や、刺突文、円形刺突文を充填するもの(1608・1616・1618)も見受けられる。また口縁部に円形刺突文を円形に並べて施文するもの(1607)もある。

1622・1625・1626は横位の把手が付く破片である。1622は口縁部片で、深鉢A類としたが、筒形を呈すると推測する。口縁部から胴部へと横位に把手が付き、その脇に沈線による区画文が施文される。1625は深鉢B類で胴部が膨らみ、口縁部がすぼまる。胴部上に隆帯と把手が付く。胴部には縦位の楕円形区画が並ぶ。1626は、把手の下に楕円形区画が施文される。

1623～1627は大木9式新段階の文様が付く小型の深鉢で、いずれも破片である。1623は口縁部片で、沈線でU字状文を2段に施文する。1624・1627は胴部から底部の破片で、沈線による区画と縄文が施文される。ミニチュア土器とすべきかもしれないがやや大きい。

大木10式古段階・中段階・新段階(第2分冊第73～88図、写真図版152～164)

1628～1757を大木10式とし、古・中・新の3段階に細分している。大木10式古～新段階合わせて、第167図右下に、その分布を示している。集中する範囲は大木8a・8b・9式と比べ、やや北側に移行している。また調査区南側のⅣ～Ⅴ層でも集中する地点が見受けられる。出土量は大木9式に比べるとやや増加する。また形態が復元できた土器も増えている。

1628～1631・1633は大木10式古段階の深鉢である。いずれも胴部が膨らみ、口縁部が外反する形態である。胴部にはS字状の曲線状区画が横位に並び、区画内は充填技法で縄文が施文される。また1628や1629は口縁部に円形刺突文が施文される。1630は胴部下半が残存する。波状沈線が巡り、その下には地文となる斜行縄文が施文される。1633は楕円形区画が横位に施文される。胴部下半には地文が施文されており、大木10式古段階の範疇と判断した。

1632・1634～1637・1639～1642は大木10式中段階の深鉢ないし鉢である。1632は深鉢の口縁部片で、曲線状区画が施文されるが、口縁部側のみ区画の幅が大きく歪な区画である。また口縁部には刺突文が施文される。1634は口縁部へと大きく開く深鉢で4単位の波状口縁を呈する。区画は隆帯で描かれているが、胴部上半の曲線状区画が胴部下半を区画する隆帯と連結している。同様な文様は1635～1640にも見受けられる。1638は加えて口縁部に隆帯による曲線文が施文される。1639は口縁部が無文になり、胴部に胴部下半から連結する曲線状区画が施文される。1641は大木10式中段階と判断したが、他と比べて文様の在り方が異なる。胴部下半から連結する区画文と口縁部下からの区画文が施文される。また口縁部と胴部上半には刺突文が巡る。1642は鉢である。口縁部は無文、胴部下半がほとんど欠損するが、おそらく胴部下半から連結する曲線状区画が施文される。1643は浅鉢で胴部上半が屈曲する。口縁部から胴部は上記の文様が施文される。1644は大型の深鉢の破片で、口縁部に2段の刺突文が巡り、胴部には曲線状の区画文が横位に巡る。大木10式中段階の範疇と判断した。1645も口縁部片で1633と同様な文様が描かれる。1646は注口土器である、口縁部は無文で、胴部に微隆帯で曲線状文が描かれている。注口部は胴部上半に付く。

1647～1689は大木10式古段階、中段階の破片である。

1690～1700は大木10式新段階の深鉢である。1690・1691・1695は深鉢A類で胴部が直立、口縁部でわずかに外反する。縄文を地文とし、細い曲線状区画が斜位・縦位に描かれる。区画内は無文である。1692は口縁部が外反する。口縁部は刺突文、胴部は曲線状区画が描かれる。1693は胴部上半がわずかに括れ、口縁部が外反する。口縁部から胴部にかけて、細い曲線状区画が縦位に連続する。また口縁部には刺突文が充填され、口縁部と胴部には鱗状突起が付く。1696は深鉢B類で胴部上半が大きく内湾する。全体に地文（縄文）が施文され、口縁部に円形区画を挟んで、襷掛け状の無文帯が横位に巡る。4単位の波状口縁で波頂部に円孔が施される。1700は胴部から底部の破片で、地文となる縄文が施文され、胴部中位に鱗状突起が付く。1697～1719は該期の破片である。いずれも地文に細い無文帯が描かれている。1713・1715には内面に曲線状の突起が付く。

1720～1725は深鉢に付く把手の破片である。形態は不明。内外面に黒漆の付着を確認した。1726は片口土器と思われる口縁部片で大きな円孔が見受けられる。1726も口縁部片であるが、注口土器か深鉢の口縁部に付く円孔付の突起か判断できない。1728は底部に故意によるものと思われる大きな穴が開けられている。1729は微隆帯が施文され、朱の痕跡を確認した。

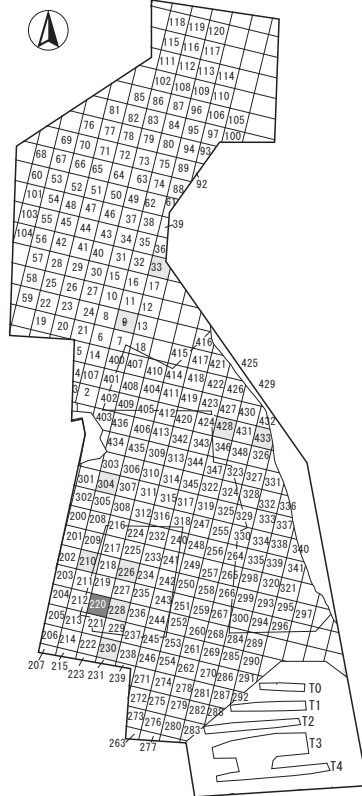
1730～1738は破片で、上記の文様が施文されるが、無文帯の両脇を沈線で掘り下げ、浮き彫り状にしている。また無文帯もミガキを施している。

1739は片口土器で、胴部下半が丸く、口縁部はほぼ直立気味である。内外面に朱の痕跡がある。1740は口唇部が歪な形態をする深鉢で、胴部上半が大きく膨らみ、口縁部はやや外反する形態である。口縁部から胴部上半に曲線状区画が描かれ、区画内は無文である。また無文帯には、一部に刺突文が2段で巡る。地文は縦位の単軸絡条体1類である。

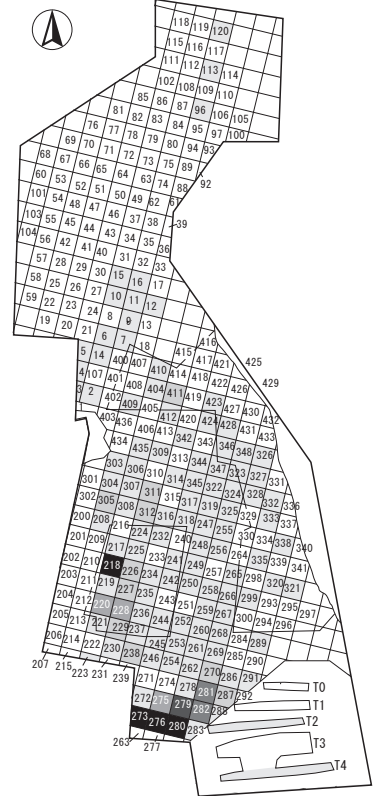
1741～1744は微隆帯で無文帯を描く深鉢である。1741は口縁部の無文帯がやや歪である。1742は口縁部に刺突文が巡る。

1748～1756は口縁部と胴部の間に隆帯が巡り、その隆帯脇に刺突文が沿う。1748～1750は波頂部が折り返し状の把手になっている。1757も折り返し状の把手が付き、その先は胴部との間に巡る隆帯に連結する。隆帯脇には刺突文はない。胴部に無文帯が襷掛け状に巡る。また地文は縦位の単軸絡条体1類である。

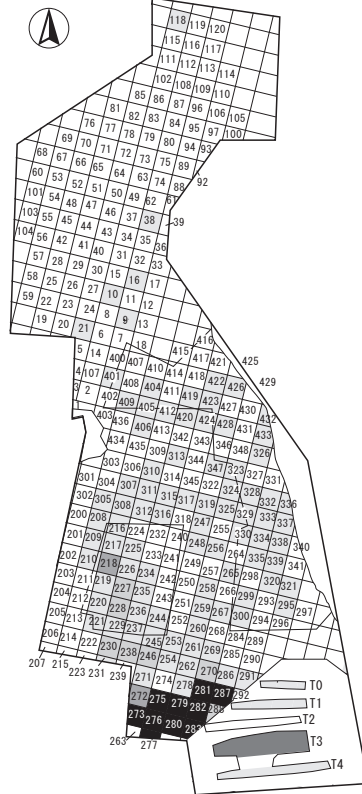
後期初頭
(Ⅳ～Ⅴ層・Ⅴ層出土分)



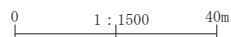
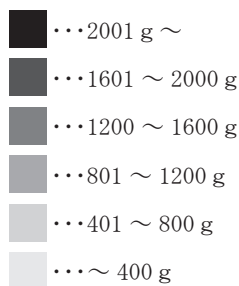
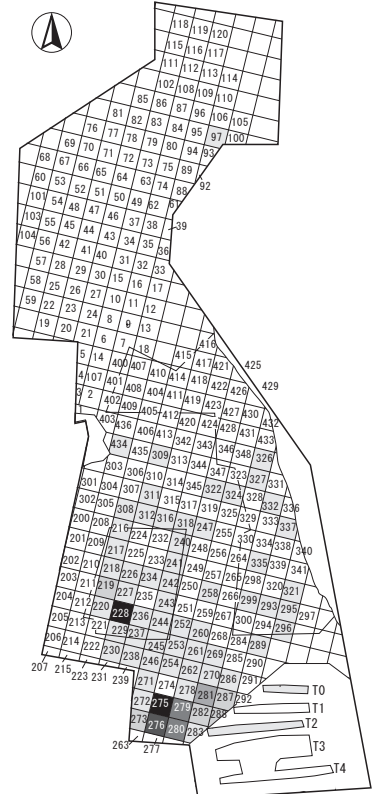
後期前葉
(Ⅳ～Ⅴ層・Ⅴ層出土分)



後期中葉
(Ⅳ～Ⅴ層・Ⅴ層出土分)



後期後葉
(Ⅳ～Ⅴ層・Ⅴ層出土分)



第 168 図 遺構外出土土器分布 4

縄文時代後期の土器

後期初頭～後期前葉前半（第2分冊第89図、写真図版164）

1758～1767を後期初頭～後期前葉前半とした。第168図左上には後期初頭の分布を示している。出土量は少なく、分布は散在的で、集中しない。形態が分かる土器は1758と1759の2点のみである。

1758は大木10式新段階の文様と類似する曲線状区画が胴部上半に描かれており、まだ大木10式新段階に近い段階と考える。胴部は直立気味で口縁部がわずかに外反する。口縁部から胴部へと円形刺突文を加えた隆帯が巡り、胴部には曲線状区画が施文される。1759もまだ大木10式新段階に近い段階と考える。胴部上半が膨れ、わずかに口縁部が内傾する深鉢で、口唇部は平縁で半円状（橋状）の把手が付く。口縁部は無文で、胴部との間に縦位の押引文が巡る。胴部は斜行縄文のみである。

1760～1767は深鉢の口縁部片である。1760～1762・1767は所謂「門前式」に特徴的にみられる連鎖状隆帯が口縁部から胴部に付される。

1763・1764は後期前葉前半に比定される土器と推測する。1758と同じ円形刺突文を加えた隆帯が付き、隆帯の脇には沈線が施文される。1765・1766は波状口縁を呈し、波頂部から蛇行する沈線文が垂下する。1767は口縁部に押圧文を加えた隆帯が垂下する。内面に朱の痕跡が残る。これらは後期初頭から後期前葉前半の範疇と判断した。

後期前葉後半（第2分冊第90～95図、写真図版164～169）

1768～1898を後期前葉後半とした。第168図右上に、その分布を示している。出土量は前時期に比べると増加しているが、多いとは言えず、分布も遺218・273・276・280の周辺、IV～V層に集中する以外は散在的である。形態が分かる土器もわずかで、第90図に示したものが全てで、他は破片である。

1768は略完形の深鉢で、わずかに開きながら直線的に立ち上がり、口唇部は5単位の波状口縁を呈する。口縁部は縄文を施文した上に、蛇行沈線が横位に巡る。胴部上半には帯縄文（縄文を施文した平行沈線文）で渦巻き文を描く。1769は胴部下半のみ残存するが、1768と同様な深鉢である。1770は形態から香炉形土器かと推測する。口縁部以外に胴部側面の四方が空いており、その縁辺と口縁部に縄文が施文される。下部は欠損する。文様の在り方から刻期としたが、もっと新しい時期の可能性もある。1771・1772は壺と推定する。どちらも胴部が丸く膨らみ、口縁部はすぼまる。胴部上半に帯縄文で斜行（1771）、渦巻き文（1772）が描かれる。1773は台付鉢（器台？）と判断した。非常に事例の少ない形態で、略完形である。鉢部は逆台形で口唇部は平縁だが3単位の小さな突起が付く。帯縄文で渦巻きと方形の意匠を交互に描いている。台部は細長で、中空である。底部は口縁部よりも広がる。台部にも帯縄文で文様が描かれる。1774は1773と同じ台付鉢で、台部の破片である。帯縄文が施文される。

1775～1813は深鉢の口縁部片である。1775～1802は波状口縁で、縄文施文の上、平行沈線で文様を描くものや帯縄文で文様を描くものがある。また口縁部に刺突文が加えられるもの（1775・1776・1786・1787など）や円形刺突文が加えられるもの（1790・1795）も見受けられ、他に波頂部の内面に平行沈線が施文されるもの（1792・1794・1796・1797）もある。1803～1813は口唇部形態が平縁で、帯縄文で文様が描かれる。1814～1826は胴部片で、同じように帯縄文で文様が描かれる。

1827～1867も該期の範疇と判断した。口縁部に縄文を施文し、複数条の平行沈線が施文されるもの（1827・1828など）が多い。これらのうち1847や1848は口唇部にも縄文が施文され、刻みが増えられる。1831・1833は幅の狭い帯縄文で、三角形や菱形文が描かれる。1841～1845は口縁部の上下

に1条ずつ縄文原体押圧文が横位に巡り、その間は無文である。1859・1860は口縁部に幅広の沈線を矢羽根状に連続させる。1862・1865は口縁部と胴部の間に沈線を巡らし、口縁部は縄文のみ施文される。1866・1867は多段の押引文が横位に施文される。

1868～1880は深鉢の口縁部片で口唇部に大きな突起が付く。

1881は沈線による区画文が描かれ、区画内に縄文と刺突文が施文される。1882は口縁部に円形刺突文が充填される。1884・1885は口縁部に押引文が充填される。1886～1890は口縁部から胴部にかけて、帯縄文が施文されるが幅が広い。1891～1893は複数条の条線文を斜位、横位に施文、あるいは曲線文を描いている。1894は口縁部片で縄文を施文し、沈線や平行沈線で文様を描いている。このように該期に相当する土器の文様には帯縄文に限らず、多岐にわたっている。

1895は片口土器の口縁部片で、片口部分は無文、胴部は縄文のみ施文される。1896は小型の台付鉢の台部破片と考える。1897は胴部片で縦位に円孔を施した半球状の突起が付く。1898も胴部片で小型の縦位把手が付く。

後期中葉前半・後半（第2分冊第96～119図、写真図版169～186）

1899～2148を後期中葉とし、さらに文様から前半と後半とに細分した。後期中葉前半と後半あわせて、第168図左下に、その分布を示している。出土量は前時期から一気に増加し、特に後期中葉前半は中期の大木8a式や大木8b式に次いで多い。この時期遺構は22号住居跡のみしか見つかっていないので、遺物のみ的大量に出土したことになる。分布は調査区南端の遺273～287周辺のIV～V層に集中する。

1899～1904・1907・1909は深鉢A類で5単位の大型波状口縁を呈する。1899は口縁部の縁辺と胴部上半に押圧文が巡る。口縁部は無文である。胴部上半には縄文を施文し、その上に蛇行沈線を連続する。1900も口縁部は無文で押圧文は施文されない。胴部上半の文様は1899と同じである。1901は胴部片であるが1899と同じ文様である。1902も胴部片で胴部上半の文様は上記の文様と同じであるが、その上下に押圧文が巡り、また縦位2列に短沈線文が連続する。

1904～1908は口縁部片である。1905は口縁部の縁辺に縄文が施文される。1908は波頂部の口唇部に円環状の隆帯が付き、口縁部にも隆帯が横位に巡る。1913・1914は平縁の口縁部片である。口縁部から胴部にかけて、縄文を施文し、横に伸びる蛇行沈線文を連続する。

1921・1922は浅鉢、1923は台付鉢、1924は小型の深鉢でいずれも胴部に縄文と蛇行沈線文が施文される。1925は浅鉢で大きく外へ開く形態である。口縁部は無文、胴部には縄文を施文後、平行沈線で曲線状文が施文される。1926は略完形の鉢で、逆台形状を呈する。口唇部には山形突起が付き、口縁部には縦位の刻みが巡る。胴部には複数条の平行沈線による曲線状文が描かれている。1927～1932は口縁部片、1933～1937は胴部片で、いずれも胴部に平行沈線による曲線状文などが描かれている。1938は浅鉢で、胴部に複数条の沈線が巡り、沈線間に刺突文が充填される。

1939～1966は深鉢A類で、5単位の大型波状口縁を呈する。口唇部直下に押圧文が巡る以外は無文、胴部には沈線によるクランク状の磨消縄文文様が描かれるものがほとんどである。胴部下半は、1939は全体に縄文を施文、1940は無文、1946・1947・1867は異方向羽状縄文が施文されるなど様々である。口縁部縁辺に縄文ないし異方向羽状縄文が施文されるもの（1967・1969・1971）も少ないが見受けられる。1972も深鉢A類の波状口縁で、上記の土器と比べ、波頂部が小さい。5単位と推定する。胴部上半に歪な磨消縄文文様が描かれているのが特徴である。

1989～2003は深鉢B類で、口縁部から胴部にかけてクランク状あるいはS字状の磨消縄文文様が

描かれる深鉢である。逆台形状を呈し、1993 や 1994、1996 のように大型の深鉢も見受けられる。

2005 ～ 2026 は磨消縄文文様が施文される破片である。

2027 ～ 2054 は注口土器である。2027 ～ 2032 は胴部に浮き彫り状の文様が施文される。2033・2034 は胴部に磨消縄文文様が施文される。2035 ～ 2054 は注口部の破片で、概ね無文で下部が突起状に膨らむ。

2055 ～ 2148 は後期中葉後半で異方向羽状縄文を多用する一群である。

2055 ～ 2064 は深鉢 A 類で、前半と同形態の 5 単位の大型波状口縁 (2055) もあるが、波頂部が短くなるもの (2066・2067・2069) が目立つ。2070 は平縁で、胴部に襷掛文が描かれる。2129・2131 は平縁で、胴部が括れる器形の深鉢で、口唇部に立体的な突起が付く。

2132 ～ 2137 は壺である。

2144 は単孔土器であるが、欠損部が多く、穿孔箇所が 2 箇所可能性があるがどちらか分からない。沈線による菱形文が描かれている。

2148 は蓋形土器と考える。上下面に細かい刺突文を縁辺に 2 ～ 3 重巡らせる。上面には縄文も施文する。

後期後葉 (第 2 分冊第 120 ～ 124 図、写真図版 186 ～ 190)

2149 ～ 2260 を後期後葉とした。第 168 図右下に、その分布を示している。出土量は前時期からはかなり減少し、器形が復元できた土器は 2149 のほかになく、破片のみが出土している。分布は調査区南端、遺 275 とその周辺、また遺 228 の IV ～ V 層に集中する。

2149 ～ 2164 は入組文が施文され、内部に縄文あるいは異方向羽状縄文が施文される一群である。貼瘤も見受けられる (2151・2152・2158 など) が多用されない。2149 は胴部で括れ口縁部が大きく開く深鉢で、口縁部と胴部に入組文が描かれ、内部に異方向羽状縄文が施文される。2150 ～ 2164 は口縁部片である。2156・2157 は山形突起が付き、内面にも隆帯による装飾が施される。

2165 ～ 2193 は貼瘤を多用する一群である。2165 は鉢で胴部が括れ、口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁部と胴部に施文される帯縄文に貼瘤が付く。2166 は注口土器の胴部片である。文様は 2165 と同様である。2200 ～ 2211 は刻みを連続させるもので、その上に貼瘤が付くものもある。2212 ～ 2222 は入組文を多段化させ、その内部に刻みを充填するものである。概ね平縁であるが口唇部に突起が付くものが多い (2213 ～ 2220)。

2227 ～ 2229 は壺の胴部片で、沈線による入組文を描き、貼瘤が付く。2230・2231 は壺の口縁部片で、頸部に沈線で入組文を描いている。

2234 ～ 2260 は注口土器である。2235 ～ 2238 は胴部に入組文を施文する。2239 は胴部上半に沈線による曲線文が展開する。2240 は口縁部に沈線による入組文、胴部は無文で胴部中位に貼瘤が巡る。2241 は無文の注口土器で、口唇部に突起が付く。2242 は口縁部に沈線のみ、胴部は無文である。2243 は平行沈線に刻みを充填させた曲線状文が展開する。2244 は小型の注口土器 (ミニチュアか) で沈線と刻みが巡る。2245 ～ 2259 は注口部の破片である。2248 ～ 2250 は欠損部にアスファルトが付着しており、修復した痕跡と考えられる。2260 は底部片で、非常に小さい台状の底面が付く。

中期・後期の粗製深鉢・鉢（第2分冊第125～143図、写真図版191～206）

第125～143図に文様が主に縄文のみ、または無文で時期の判断が難しい、所謂粗製の深鉢、鉢を一括した。文様からは時期を定めるのが困難であるが、なかには形態の特徴から、ある程度は推測でき、それらの時期については分かる範囲で記した。

2261～2266・2277・2278は口縁部が無文で、胴部に縄文が施文される一群である。沈線で区画するもの（2261・2262・2265）、口縁部が肥厚するもの（2263・2264）、微隆帯で区画するもの（2266）がある。形態的な特徴から中期に比定されるものと推測する。

2268～2273・2276～2290は口縁部片である。2268は肥厚する口縁部に縄文が施文される。2269・2278は口縁部に円形刺突文が巡る。2270～2272・2276・2277は口縁部に隆帯のみ巡る。2282・2283は口縁部から胴部に結節部分の残る縄文を施文し、胴部に刻みを施した突起のみが付く。2285は縄文ではなく沈線による曲線状文が展開する。2286・2289は口縁部に突起が付く。

2291～2341は縄文のみ施文される深鉢である。口唇部直下は縄文が及ばず、無文となるものが多い。2295・2296は口唇部直下まで縄文が施文される。胴部上半が膨らみ口縁部がわずかに外反する形態（2291など）や、胴部中位か下半が膨らみ、口縁部がわずかに外反する形態（2293）が多く、その特徴から中期の範疇と推測する。2319・2338は口縁部に2条の横位の沈線が巡る。2322は口縁部と胴部の境に隆帯が巡る。2362は口唇部にも縄文が施文される。2365は胴部片で横位の結束羽状縄文が施文される。2366も胴部片で、縦位に非結束羽状縄文が施文される。

2367・2368・2376・2380は小型の深鉢である。2368は縦位に単軸絡条体1類が施文される。2376は2単位の波状口縁で大木8b式新段階によくみられる形態だが、器面全体が無文である。2380は底面に敷物圧痕として木葉痕が残る。2369・2373・2375は浅鉢と判断した。ただ形態は鉢に近い。2375は口縁部が肥厚し、無文である。2371・2372・2377・2378は鉢である。2370は深鉢と考えるが、口縁部の一部を片口状に外側から打ち欠かされている。故意によるものか不明。

2379・2381～2390は底部片で、2379～2388は斜行縄文のみ施文され、2390・2389は無文である。2383は底面の内面中央が凸状にせり上がっている（第137図写真参照）。故意に、整形して残したものか、偶然そうなったものなのかは定かではない。

2391～2433も深鉢であるが、形態の特徴や施文される原体の種類から後期以降の可能性が高いものを一括した。2391～2397は逆台形状の器形で、後期中葉前半の深鉢B類（1993など）と類似する。2395は異方向羽状縄文が施文される。また2395と2396は接合部が無かったが、同一個体である。2398～2403は口縁部片であるが、概ね上記の土器と類似する器形と推測する。

2404～2406は小型の深鉢である。2405は口縁部から底部まで異方向羽状縄文が施文される。

2407～2430は口縁部片である。2407は口唇部にも縄文が施文され、頸部が無文となる。概ね斜行縄文が施文されるが、異方向羽状縄文（2410・2411・2418・2419）や非結束羽状縄文（2416）、条線文（2420）も見受けられ、また2421・2422は無文である。2423は口縁部と胴部に細い単軸絡条体5類が施文される。

2431は底部片であるが、底面には整形の際のケズリ痕が残っている。2432・2433も底部片で底部に異方向羽状縄文が施文されるので、後期と判断した。

2434～2438は比較的小型の深鉢の胴部から底部の破片である。2434は斜行縄文、他は無文である。2435は胴部下半が大きく窪んでいる。

縄文時代晩期の土器

大洞B式（第2分冊第144・145図、写真図版206～208）

2439～2490を大洞B式とした。第169図左上に、その分布を示している。出土量は大きく減少するが、分布は調査区南側全体に散在する。ほとんど破片で形態が分かる土器は掲載した2458～2461のみである。

2439～2457は精製深鉢の口縁部片である。口縁部に横長の入組文・三叉文が連続する。2439～2442は口唇部が緩い連続波状口縁を呈する。また2449・2450は口唇部に刻みが巡る。2457は口唇部に眼鏡状の突起が付く。

2458は鉢とした。胴部が緩く開きながら立ち上がり、口唇部は連続波状口縁を呈する。口縁部には沈線による三叉文が連続する。2459・2461も鉢、2460は台付鉢である。3点とも胴部は丸みをもって立ち上がり、口縁部がわずかに外反し、口唇部は連続波状口縁を呈する。2460・2461は連続波状口縁に合わせて、口縁部に沈線による弧線状文が施文され、また胴部上半には入組文・三叉文が施文される。2460の台部は無文である。2459は2460や2461と類似する形態で、胴部に縄文を施文し、その上に横位の沈線を巡らせ、また縦位に短沈線が施文される。

2462～2477は深鉢の口縁部片である。口縁部に入組文・三叉文が施文されるが、2439～2457に比べ、文様がやや複雑で、また横位の沈線や刻みが多用される一群である。

2478～2482は鉢の口縁部片である。2460・2461と同様な文様が施文される。2484も口縁部片であるが、鉢か深鉢か不明である。口縁部は無文、胴部上半に縄文を伴う入組文が施文される。2483は壺の胴部で胴部中位に入組文、三叉文が施文される。2485・2486も壺の胴部片で胴部全体に入組文が施文される。また2486は器面全体に縄文を施文する。2488・2489も同様な文様が施文される。2490は台付鉢の台部の破片で、文様が無く、時期については判断が難しい。ただし後述する大洞BC～大洞C1式の台付鉢の台部と比べ底径が小さいなど様相が異なるので、該期の範疇とした。

大洞B式～大洞C2式の深鉢（第2分冊第146～150図、写真図版208～212）

前述の中期・後期の粗製深鉢とは形態などが異なり、晩期の深鉢と考えられるもので、口縁部の文様や、地文（縄文）では、詳しい時期の判別が難しい大洞B式から大洞C2式まで含まれるものを一括した。

分布については図示していないが第6表の「晩期」がこれらに相当する。

第146図（2491～2499）は、口縁部に縄文以外の文様が見受けられる深鉢、口縁部文様からある程度の時期は推定できる。2491は3条の沈線が横位に巡る。時期は不明であるが、大洞B式頃と推測する。2514・2515・2519は、口縁部片であるが、同様な文様が施文される。2492・2493・2495は口唇部に刻みが巡り、口縁部には沈線と刻みが施文される。大洞BC式の範疇と考える。2494・2496も口唇部に刻みが連続し、口縁部には沈線が横位に巡る、あるいはその上に連続刻みが充填される。これらも大洞BC式の範疇と捉える。2497～2499は胴部上半に最大径を有し、口縁部は直立する形態で、口唇部直下に押圧文を巡らせ、口縁部には複数条の沈線と押圧文が横位に巡る。大洞C1～C2式の範疇と考える。

2500～2514は縄文のみ、あるいは無文で形態の分かる深鉢である。2500・2501は砲弾形を呈し、器面全体に縄文を施文する。大洞B式頃か。2506・2507も同様な形態の小型深鉢で、無文である。2502～2505は口縁部が外反し、2502・2504は口縁部が無文、また2505は口縁部下半が無文である。2508・2509も砲弾形の形態で、口唇部に押圧文を加え連絡波状口縁を呈する。2510～2513は口縁部が外反し、

口唇部が連続波状口縁を呈すか、あるいは平縁でも押圧文が巡る。2508 以外は口縁部は無文である。

2515 ～ 2545 は口縁部片・2546 は胴部片である。いずれも上記と同様な文様が施文される。2542 ～ 2544 は口縁部の上下に 1 ～ 2 条の沈線が巡る。

大洞 B C 式 (第 2 分冊第 151 ～ 165 図、写真図版 212 ～ 227)

2547 ～ 2842 を大洞 BC 式とした。第 169 図右上に、その分布を示している。前時期から出土量は増大し、晩期の中では出土量のピークにあるとあってよく、完形、略完形の土器も少なくない。分布は調査区の南側の西寄り、遺 226 ～ 229 周辺と、南端の遺 279 ～ 282 周辺の 2 箇所集中する。

2547 ～ 2584 は略完形あるいは形態が復元できた鉢である。胴部が丸く膨らみ、口縁部が内湾するものと口縁部が外反するものに二分され、数は多くないが、胴部上半で屈曲するもの (2562) も見受けられる。またいずれも口唇部に細かい刻みを巡らせている。2552・2565 は口唇部に突起が付く。文様は口縁部に羊歯状文、あるいは複数条の横位沈線に刻みを充填するものが主体であり、胴部は縄文のみである。数は少ないが、器面全体に縄文を施文し、口縁部に 2 ～ 3 条の沈線文のみのものもある (2556・2557)。また羊歯状文が口縁部から胴部上半におよぶもの (2549・2565) も見受けられる。ほかに口縁部に縦位ないし横位に B 突起が付くもの (2565・2567・2571・2576 ～ 2578・2581・2582) がある。

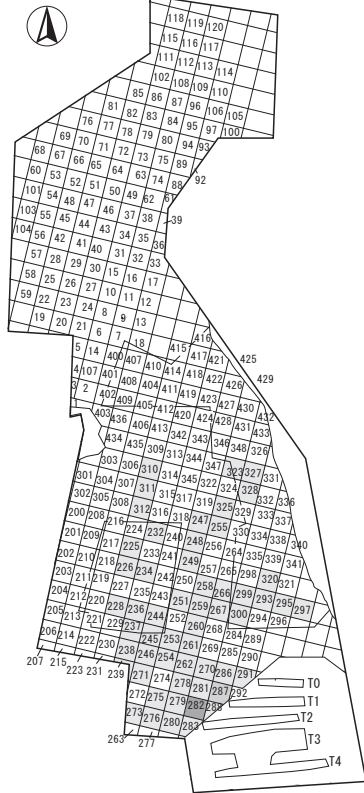
2585 ～ 2622・2624 ～ 2699 は鉢の口縁部片である。2585 は沈線による K 字状文、2586 ～ 2622 は羊歯状文が描かれる。また 2622 は胴部に縄文を施文し、その上に沈線による波状文が連続する。2623 は胴部片であるが、同じく縄文と波状文が施文される。2624 ～ 2675 は沈線と刻みが施文される一群である。2666 ～ 2668 は口縁部に縦位の B 突起が付く。2672 は口唇部に羊歯状文が施文され、口縁部は沈線文と刻み、胴部は縄文と入組文が施文される。2376 は刻みのほかに沈線による曲線状文が展開する。2677 は横位の押引文が 2 段で巡る。2683 ～ 2686 は口縁部に沈線による K 字状文が横位に連続する。2687 ～ 2699 は口縁部に 2 ～ 3 条の沈線が横位に巡る。また 2071 は小型の鉢で、口唇部に刻み、口縁部に 2 条の沈線が巡る。

2702 ～ 2761 は台付鉢である。2702 ～ 2709・2711・2712 は略完形か形態の復元できた土器である。2702 は口唇部に刻みが巡り、口縁部に羊歯状文が施文される。胴部は条線を矢羽根状に連続させ、横位の羽状縄文のように見せている。あまり事例の少ない文様である。また台部には透かしが施される。

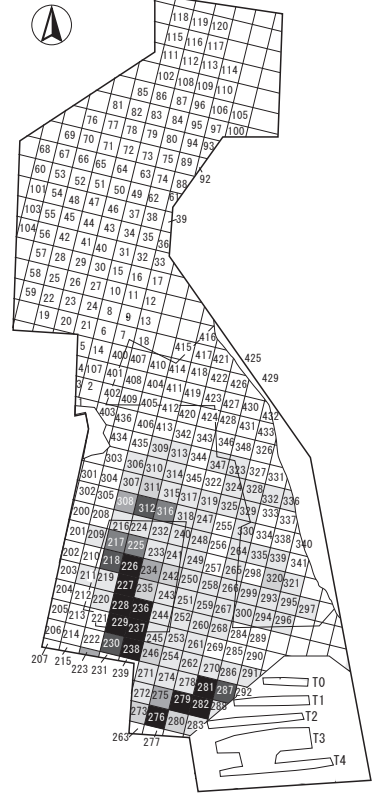
2703 ～ 2706 は口唇部に刻みを巡り、連続波状を呈している。口縁部にも沈線と刻みが巡る。2707 ～ 2712 は口縁部に沈線が巡る。2710・2713 ～ 2761 は台部の破片である。2710 は沈線による入組文が施文される。2714・2726 ～ 2730 は羊歯状文が施文される。2515 ～ 2517・2725 は透かしが施される。2719・2721 は K 字状文が描かれ、その間を透かしが施される。また 2720・2732 には単位は不明だが台の中央に貫通孔が見受けられる。2723 は大きな円孔と透かしが施される。2731 は台部に隆帯と突起が巡り、それに沿うように穿孔も巡る。2733 ～ 2736 は浮き彫り状の沈線文が施文される。2737 ～ 2745 は刻みを加えた隆帯が横位に巡る。2739 は欠損した胴部に 3 箇所穿孔されている。位置からみて補修のためかは不明。2746 ～ 2751 は縄文と沈線のみ、2752 ～ 2757 は隆帯が付く。2758 ～ 2761 は台部が無文になる。2759 は歪な穿孔が見受けられる。

2762 ～ 2766 は浅鉢、2767・2768 は台付浅鉢、2769 ～ 2781 は浅鉢、台付浅鉢の破片である。2762 は多段化する入組文が口縁部から胴部下半まで施文される。2763 は羊歯状文が胴部上下にそれぞれ施文される。2765 は口縁部に羊歯状文、胴部は沈線文が施文される。2764 は口縁部に沈線が施文される。2766 は口唇部に装飾的な突起が連続する。口縁部から胴部まで縄文のみ施文される。2767 は胴部に沈線による K 字状文が施文され、台部には刻みを加えた隆帯が巡り、また歪な透かしが施される。

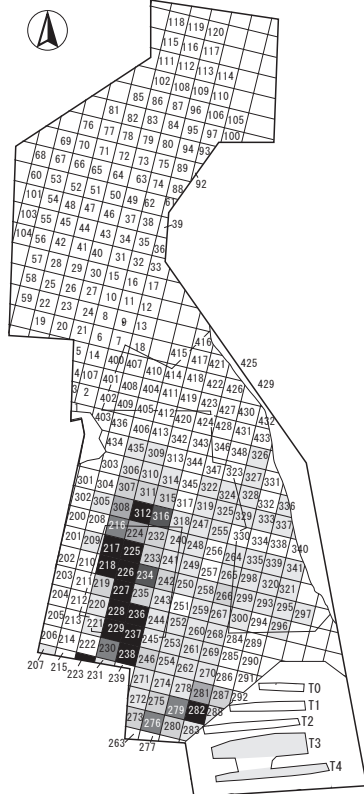
大洞B式
(Ⅲ層出土分)



大洞B C式
(Ⅲ層出土分)



大洞C 1～C 2式
(Ⅲ層出土分)



- … 2001 g ~
- … 1601 ~ 2000 g
- … 1200 ~ 1600 g
- … 801 ~ 1200 g
- … 401 ~ 800 g
- … ~ 400 g

0 1 : 1500 40m

第 169 図 遺構外出土土器分布 5

2769～2776は口縁部片で入組文および羊歯状文が施文される。2777・2778は口縁部に沈線と刻みが巡る。2779・2780は沈線のみ巡る。2781は四脚付きの浅鉢、胴部片であるが、透彫状を呈する沈線文が胴部から底面まで施文される。

2783～2797は壺で、破片が多い。2783は頸部から胴部上半のみで、胴部にK字状文が連続する。また器面に朱が塗られた痕跡が残る。2784も頸部から胴部上半のみで、頸部下に4単位の突起が付く。2783同様、朱塗りの痕跡が残る。2785は口縁部から胴部上半の破片で、胴部に2段の沈線と刻みが巡る。2786は口縁部と胴部に縄文のみが施文される。2788は口縁部が胴部よりも幅広で、口縁部と胴部に沈線と刻みが施文される。2789～2791・2794は口縁部片で、大きく外へと屈曲する。2792・2793・2795は胴部片で沈線による波状文や浮き彫り状の文様が描かれており、また2795は器面全面に朱が塗られている。2796・2797も胴部片で縄文と入組文が施文される。

2798～2836は注口土器である。2798～2810は略完形あるいは形態が復元できた土器である。2798～2808は胴部中位で大きく屈曲し、その屈曲部分に注口部が付く。また2798・2799・2801は丸く膨らむ口縁部が付く。いずれも口縁部から胴部上半にかけて沈線によるK字状文が施文される。2806や2807はこれに沈線と刻みも施文される。2809は胴部が丸く膨らみ口縁部は直立気味で、他とは形態が異なる。頸部は無文で、胴部から底面にかけて浮き彫り状の文様が描かれている。2810は口縁部から胴部上半の破片であるが、第163図に示した通り、残存する胴部径から、非常に大型の注口土器であることが分かる。胴部に沈線による入組文が施文される。2811～2819は口縁部片で、2798に類似する形態である。沈線文やK字状文が施文される。2820～2822は胴部片で胴部の屈曲が見受けられる。2823～2835は注口部破片である。沈線文が施文されるものを該期と判断した。2836は胴部の大型破片である。器形は2809に類似するが、口縁部と頸部に沈線があるのみで無文である。ただし器面全体にミガキを施している。注口部は見つかっていないが器形の特徴から注口土器と判断した。

2837～2842は香炉形土器である。2837は胴部の一部から底面までが残存する。胴部中位で屈曲し、胴部上半には沈線と刻みを施文し、また円孔が並ぶ。2839は残存状態が悪く、器面の表面が一部剥離しているが、形態は2837と同様で、胴部上半全体に透かし彫りが施されている。また口縁部に2単位の装飾突起が付く。2842は胴部の一部を除き、略完形で、頂部に鳥を模したような突起が付き、天窓部は碗形で、胴部は大きく外へと膨らむ形態である。天窓部、胴部ともに入り組み文や沈線文が描かれ、また胴部中位に4単位の突起が付く。台部は無文である。

大洞 C1 式・C2 式 (第2分冊第166～188図、写真図版228～246)

2843～3154を大洞 C1・C2 式とした。前述の通り、大洞 C2 式は出土量が少ないので一括した。第169図左下に、その分布を示している。出土量は大洞 B C 式に次いで多く、完形や形態復元できた土器が目立つ。特に浅鉢が多い傾向がある。分布は大洞 B C 式とほぼ同じだが調査区南側の西方に寄る。

2843～2853・2857～2867は鉢で、形態の復元できた土器である。2843～2851は大洞 C1 式に比定される鉢 A 類で、胴部が丸く膨らむ形態で、口縁部が内湾するもの(2845・2846・2849)や直立気味に屈曲するもの(2843・2844・2848・2850・2851)が多く、他に口縁部下が内側に屈曲するもの(2847)や外反するもの(2850・2851)がある。口唇部は緩い連続波状を呈するものが多く、また刻みを巡らせるものも見受けられる。文様はどの形態も口縁部に沈線と刻みを巡らせ、胴部上半には雲形文が施文される。また2844や2850には口縁部に縦位のB突起が付く。2857～2865は、胴部が膨らみ、頸部で括れ、口縁部は外反する形態である。口唇部には押圧文や刻目が巡るものが多く、また1単位の山形突起が付くもの(2860・2862)もある。文様は口縁部が無文、胴部上半は沈線や雲形文が施文さ

れる。また胴部上半に縦位のB突起（2857・2858・2861）や二又の突起（2860・2862・2863）が付くものも見受けられる。2866は直線的に外へと開き口縁部が外へと屈曲する形態で、他とは異なる。文様は口縁部が無文で、胴部には縄文のみが施文され、1単位と考える縦位のB突起が付く、大洞C2式と推測する。2867は口縁部が水平に屈曲する形態で、この形態も本遺跡ではこれ以外に出土していない。大洞C2式の範疇か。口唇部に沈線と刺突文が巡り、1単位の山形突起が付く。口縁部から胴部には雲形文が施文される。2854～2856は台付鉢で、2843などと同じ形態に無文の台部が付く。文様も同様である。2868～2913は鉢・台付鉢の口縁部片である。2868～2897は大洞C1式、2898～2913は大洞C1～C2式の範疇か。

2914～3072は浅鉢である。前述の通り、出土量が多く、略完形や器形が復元できた土器が少なくない。2814～2932は浅鉢A類とした。底面が丸い形態で、胴部が膨らみ、口縁部で緩く内湾する。また口縁部が屈曲するもの（2929）や外へと直線的に開くもの（2930）もあるが少ない。文様は、口縁部に沈線と刻みが巡り、胴部には広く雲形文が施文される。また底面はわずかに上げ底を呈する。2922は口唇部に大型の突起が1単位付く。この突起にはさらに枝葉状の小さな突起が付き、また縦位の隆帯が区画するため、何かの顔を模したようにも見える。2933～2961は浅鉢B類とした。器高が浅く、胴部から口縁部へと大きく開き、底面は2933や2934のように平坦で広いものと2935や2938のように丸いもの、また1点のみであるが低い台が付くもの（2954）もある。2954については、後述する台付浅鉢（3074～3076）とは形態や文様が異なるので、浅鉢に含めた。口唇部は装飾的な突起が巡るものと平縁がある。口縁部は沈線が巡り、胴部には雲形文が施文される。底面は無文でわずかに底上げ状になるものが多いが、縄文を施文するもの（2938）や雲形文が施文されるもの（2941～2948・2955）がある。2964～3019は平縁を呈する浅鉢の口縁部片である。同様の文様が施文される。3020は浅鉢A類だが、口唇部に緩いB突起が付く。文様は口縁部に沈線が巡るのみで縄文も施文されない。3021は浅鉢B類だが、底面に浅い脚が付く（4単位か）。文様は沈線と浮き彫り状の三角形文、三叉文のみである。3022～3068は浅鉢B類の口縁部片である。前述の文様の他に口縁部から内面の口縁部にかけて装飾突起や刺突文が巡るもの（3048～3055）が見受けられる。また3058は内面に細い隆帯が垂下する。3069～3073は胴部片や底部片である。胴部には雲形文が施文される。3072は径の小さい台状の底面を呈し、さらにB突起に類似する4脚が付く。3073は無文で底面はわずかに上げ底である。3箇所穿孔（補修孔か）が見受けられる。

3074～3076は台付浅鉢である。口縁部から胴部は浅鉢A類と同形態で、文様も同様である。台部は、3074はやや長く括れを有し、上半には透かしが施される。3075は台部が欠損するが、無文で低い台が付くものと推測する。3076は同様な形態と推定されるものの台部の破片である。

3077・3078は無文の小型浅鉢で、3077は浅鉢A類、3078は浅鉢B類で外へと開くが、浅鉢B類よりも器高が深い。

3079～3126は壺である。出土量は少ない。鉢や浅鉢と違い、完形のものはなく、また形態復元できた土器も多くない。壺A類（3079・3099・3113・3116）や壺B類（3082・3119・3120）、壺C類（3083～3087）が見受けられる。文様は口縁部が無文で、胴部に雲形文が施文されるものが多い。3082は口縁部と胴部それぞれに雲形文が施文される。また無文や口縁部に縄文のみ施文されるもの（3098～3114）も多く、口縁部や頸部に突起付くもの（3098・3100～3106）や朱が塗られた痕跡があるもの（3107）も見受けられる。また無文でも、器面を丁寧にミガキで整形しているもの（3111～3113）もあり、粗製の類ではないと考える。3114は胴部から底部が残存し、底面に小さい四脚が付く。3117～3120は小型の壺で文様が沈線のみあるいは無文である。

3127～3154は注口土器である。壺同様、出土量は少なく、破片のみ見つっている。形態は大洞BC式の注口土器に類似するが、胴部上半がわずかに外反する点、また口縁部が外へと屈曲する点、口唇部と胴部の中位に装飾突起が巡る点が異なる。文様は前述の装飾突起のほか胴部の上半と下半でそれぞれに雲形文が施文される。また注口部は胴部中位に付き、隆帯や突起が付くものが多い。3149～3151は口縁部片で、丸みをもって立ち上がる形態である。沈線のみ施文されている。同様の文様を有し、復元できた注口土器は本遺跡では見受けられない。したがって時期の判断が難しいが、大洞BC式では見受けられない文様であり、該期と判断した。3152・3153は無文の注口土器であるが、器面全体にミガキが施される。3149～3151と同様な理由から、該期とした。3154は胴部片で外面に朱が塗られている。

晩期の粗製鉢・壺、ミニチュア土器（第2分冊第189～192図、写真図版246～248）

鉢や壺で文様が縄文のみや無文のもので、形態の特徴から晩期の範疇と推測できるが、詳細な時期が分からないものを粗製とし、第189・190図に一括した。

3155～3161は鉢である。3155は口縁部が無文、胴部は縄文が施文される。3156・3157は口唇部が連続波状を呈する、また4単位の突起が付くものである。3160は小型の鉢で、器面全体に縄文が施文される。3162は底部片である。内面に黒色の付着物が見受けられ、アスファルトの可能性はある。

3163～3167は台付鉢の胴部から底部の破片である。いずれも台部は無文である。

3168～3176は壺A類とした口縁部がすぼまる形態で、口縁部は無文、胴部に縄文が施文される。3177～3179は壺の胴部から底部の破片である。3178・3179は浅い台部が付く。

3180～3183は鉢の底部片や胴部片である。いずれも内面にアスファルトが付着する。3183は底部片で、底部内面にアスファルトが塊状で堆積しており、アスファルトの収納容器であった可能性がある。

3184～3216はミニチュア土器とした一群である。3184～3186は深鉢を模したと考える。3184は口縁部が無文、頸部に沈線が施文される。3185・3186は縄文のみ。3187～3191は鉢を模したと考える。胴部が丸く膨らみ、口縁部が外反するもの（3187～3189）、直線的に外へと開くもの（3190・3191）がある。3192は台付浅鉢を模している。胴部には隆帯と刺突文が巡り、台部にも浮き彫り状の文様が展開する。大洞BC式にみられる文様に類似する3195～3197は浅鉢を模したものである。3195・3196は無文。3197は碗形で、器面全体に縄文が施文される。3198・3199は台部の破片で台付鉢を模している。3200は壺を模している。頸部に沈線と刺突文が巡る。3201・3202は注口土器を模している。どちらも浮き彫り状の文様を施文している。

3206～3216は底部片である。

深鉢の底部片（第2分冊第193～197図、写真図版249～253）

深鉢の底部片で、底面に敷物圧痕が見受けられるものを一括した。胴部文様が縄文のみか無文なので、時期は中期から晩期のいずれかである。なお敷物圧痕の種別については一戸町教委2015を参照した。

3217～3257はござ目で、3258・3259は網代痕が見受けられる。3257は底面の上面に輪積み痕が残る。

3260～3262は沈線状の痕跡が見受けられる。整形時の工具痕の可能性はある。3263～3273は木葉痕である。葉の種類は不明であるが、葉脈が太いもの（3263～3266）、細いもの（3267～3273）に分けられる。

3274・3275は底面に敷物圧痕はないが、底面の縁辺1箇所を穿孔している。3276は底面の中央を比較的大きく穿孔する。3277は底面の破片で、外面が凹んでいるが、整形時のものと推測する。

土偶・人面付土器（第2分冊第198・199図、写真図版254・255）

後期と晩期の土偶が、破片のみで32点出土している。接合は試みたが、接合できたものはない。分布状況は第170図に示した通りで、調査区南側の中央から南端に集中している。後期と晩期で分布域に差はない。出土層位はⅢ層が多い。

3278～3293は後期と判断した土偶である。

3278～3280は頭部破片である。いずれも後期前葉である。3278は三角形状を呈し、押圧文で目のみ表現されている。3279は顔の表現はなく、平坦な面のみである。3280は隆帯で眉・鼻、刺突文で目が表現され、また額にカール状の表現が付く。首には放射状に刺突文が施文されている。3281は刺突文により目と耳のみ表現されている。ただし顔の中央が剥離しており、鼻の表現が欠損している可能性がある。首には刺突文が施文される。

3282～3285は腕の破片である。いずれも後期前葉と考える。3283は沈線で手首を、また浅い刻みで五指が表現されている。3282・3284・3285は浅い窪みで掌を表すのみである。

3286～3288・3291～3293は脚の破片である。3286～3287は後期中葉、他は後期前葉から中葉の範疇と推定する。3286・3287は沈線と縄文が施文される。3288は無文であるが、やや細長く、側面が膨らむ形態の特徴から後期後葉と判断した。他は無文で、3291～3293はやや幅広の足首のみ。3294は手前側が湾曲する形態である。

3289・3290は体部から脚部の破片で、どちらも無文であるが、形態の特徴から後期前葉と推定する。3290はへその位置がわずかに窪んでいる。

3295～3306は晩期と判断した土偶である。

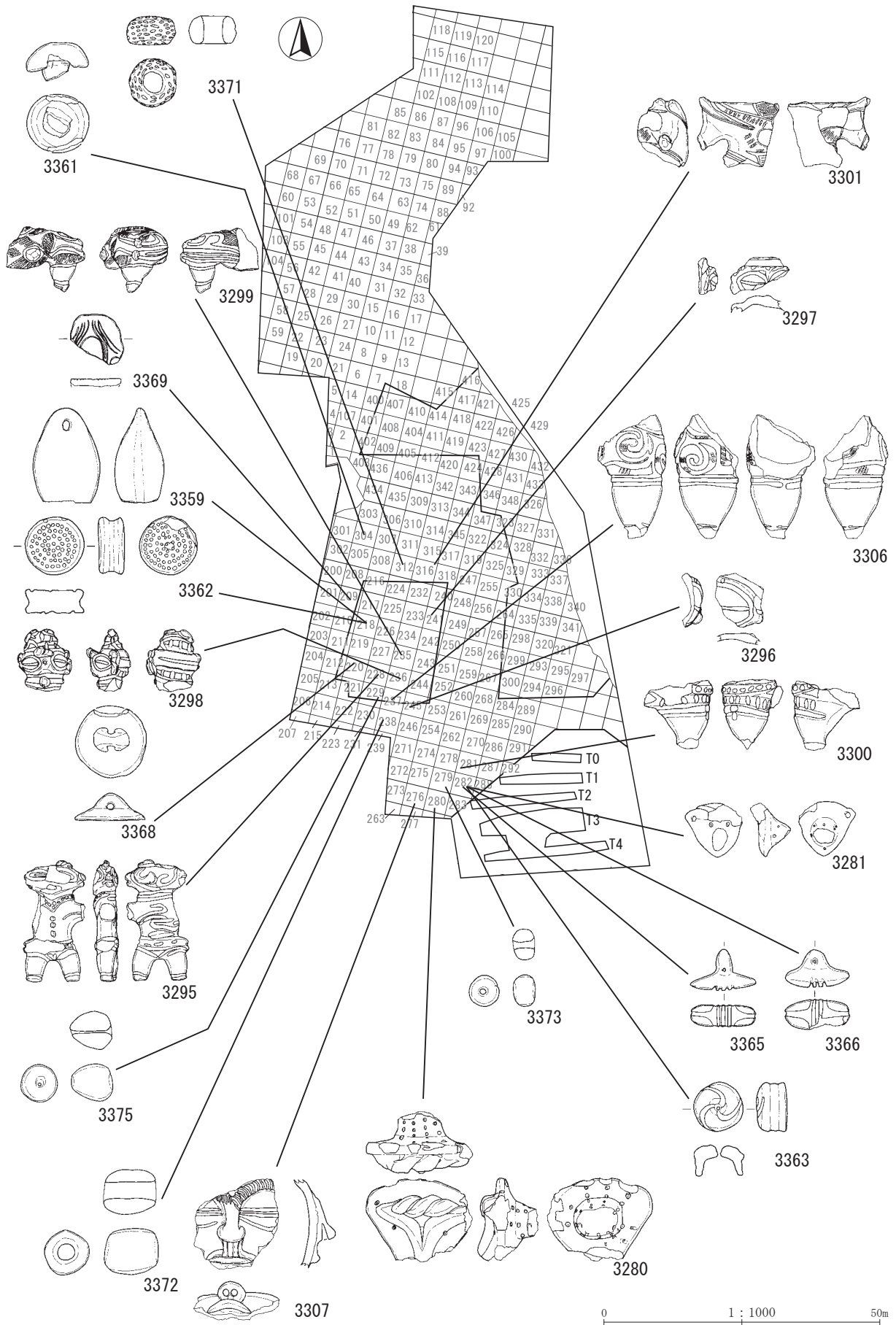
3295・3298は小型の中実遮光器土偶で、3295は頭部の一部と両腕以外は残存する。3298は頭部破片である。3295は沈線で各部分を表現しており、頭頂部には一部欠損するが、二又の突起が付く。3298も顔の表現は沈線で描かれる。また頭頂部と額に二又状の突起が付く。

3296・3297は中空遮光器土偶の頭部破片である。3296は右目周辺の破片で、目の縁取りに隆帯が付く。3297は右目から額の破片で目とその縁取りは沈線で、また額には刺突文が施文される。

3299～3301は中空遮光器土偶の肩から腕の破片である。3299は肩から体部には沈線文と縄文が施文され、腕部は無文であるが、手首が沈線で表現されている。また乳房が表現され、肩には突起が付く。3300は押圧文と沈線が施文される。手首は欠損している。3301は体部に沈線と縄文が施文される。乳房の位置には剥離した痕跡のみが残る。腕は極端に短く無文、細い沈線で手首のみ表現されている。

3303～3305は中実遮光器土偶、3306は中空遮光器土偶の脚の破片である。3303は沈線で足首を、また浅い刻みで指が表現されている。3304は足首が欠損する。沈線で文様が表現されている。3305は沈線と刻みを施文する。3306は沈線による曲線状文が描かれ、あわせて縄文が施文される。細い沈線で足首が表示されるが、足の先は欠損している。

また土製品ではないが、人面付土器の人面部分破片が1点（3307）出土している。胴部の一部で、接合をしつこく試みたが、これ以外の部分は見つからなかった。秋田県向様田A遺跡での出土事例（秋田県教委2004）から推測すると浅鉢の胴部片の可能性はあるが、定かではない。隆帯により眉・鼻・鼻唇溝・唇がそれぞれ表現される。また眉には爪形文を連続させ、強調している。目は沈線で遮光器土偶のような表現がなされている。



第 170 図 遺構外出土土偶、土製品分布

円盤形土製品（第2分冊第200図、写真図版255・256）

672点出土している。分布については図示していないが、概ね調査区の全域で出土している。出土層位はⅢ～Ⅴ層まで偏りなく出土しており、したがってこれらが帰属する時期は前期から晩期までと捉えられる。なお出土した円盤形土製品は全て、土器片（胴部片主体、数少ないが口縁部片もある）を転用し、打ち欠き、研磨で整形したものであった。

49点掲載した（3308～3356）。形態から円形、方形、三角形の3種類に分けることができ、円形が最も多く、方形、三角形は多くはない。

3308～3345は円形を呈する。大きさは最大で径6.2cm（3315）、最小で径1.9cm（3345）である。中央が穿孔されるもの（3308～3314）があり、穿孔を途中でやめたもの（3341）も少ないが見受けられる。上面に残る文様は縄文が多いが、中には隆帯（3315・3318・3324・3339）が残るものや区画文と思われる沈線と縄文が残るもの（3317・3320・3323・3330・3336）があり、これらは中期の大木8a式から10式の範疇と考える。また、入組文と推測する沈線文が残るもの（3331・3337）や沈線と刻みが残るもの（3343）があり、これらは晩期大洞B～BC式の範疇と推測する。

3346～3352は方形を呈し、3347は五角形、ほかは四角形（正方形が多い）である。円形の円盤形土製品と比べ、整形時の縁辺への研磨が丁寧である。今回出土した中では穿孔されたものはない。大きさは最大が一辺5.0cm（3346）、最小は一辺3.9cm（3352）で大きな差はない。隆帯が残るもの（3347・3350・3351）があり、これらは中期の大木8a式から8b式の範疇と考える。

3353～3356は三角形を呈する。大きさは最大が長軸5.0cm（3353）、最小は長軸2.0cm（3356）でこちらも大きな差はない。整形時の研磨は丁寧であるが、3354や3356は側縁が直線的ではなく、しっかりとした三角形に整形されていない。またほぼ中央が穿孔されるもの（3354）が見受けられる。

その他の土製品・粘土塊（第2分冊第201・202図、写真図版256・257）

中期から晩期の土製品が23点出土している。これらの分布は第170図に図示した。縄文土器の出土量が多いのに対し、土製品の点数は極端と言っているほど少ない。通常、縄文時代後晩期は土製品が増加する。しかし本遺跡でも縄文土器が多量に出土しているにもかかわらず、各細分した種類の土製品が1～2点しか出土しておらず、またその分布も散在的である（第170図）。

21点（3357～3377）掲載した。

3357・3358は中期後葉の斧状土製品で、どちらも先端の破片である。3357は両面とも、沈線と縄文が施文され、3358は縄文のみである。

3359・3360は後期の鐸形土製品で、3359は完形、3360は上部半分が残存する。どちらも無文であるが、丁寧にミガキが施される。

3361はキノコ形土製品で、蓋部分の一部と先端が欠損する。蓋部分は手づくねにより整形しており、形態がやや歪である。出土層位がⅣ～Ⅴ層であり、中期～後期の範疇と考える。

3362～3364は土製耳飾である。3362は円盤形を呈し、両面に刺突文が充填される。3363は中空の円盤形で、片面には中央が小さく穿孔され、そこから沈線文が施文される。3364は4分の1ほどの破片であるが環状を呈するものである。

3365・3366はスタンプ形土製品で、同形態で、文様のモチーフも同じである。沈線を縦横に施している。摘み部には貫通孔が開けられている。

3368は蓋状土製品である。円盤形を呈し、山形の摘み部が付く。摘み部には横位に貫通孔が開けられている。

3369 は土版の破片である。非常に小型である。約 1/2 欠損し、また片面は全面剥離している。細い工具で、文様が描かれている。

3367・3370 は不明な土製品である。3367 は円盤形で中央が穿孔される。また穿孔の周辺は微隆帯が付くようだが、剥離している箇所が広くて、詳細が分からない。土製垂飾品としたが蓋型土製品の可能性もある。3370 は手づくねで整形されている。粘土塊ではないと判断したが、それ以上は不明である。

3371 は土製の装飾品で、非常に小さい。環状で器面全体に刺突文が施文される。指輪のような用途で用いられた可能性がある。

3372～3377 は土玉である。大きさは 1～2 cm の範疇でおさまり、長軸方向に貫通孔が開けられている。3376 は貫通孔が途中までである。形状は様々で円柱状 (3372)、算盤玉状 (3373・3374)、木の実状 (3375～3377) が見受けられる。

粘土塊 (第 2 分冊第 202 図、写真図版 257)

14 点出土している。分布は図示していないが、調査区全域から出土しているものの、数は少なく、散在的である。

3 点 (3378～3380) を掲載した。3378 は偏平な粘土塊で、全体に手づくねの痕跡が見受けられる。3379・3380 も同様な上、穴が開いており、これらは棒状工具か何かを突き刺した痕跡ではないかと推測する。

石器の出土点数や内訳について（第 171 図）

遺構外からは、剥片石器 3,567 点、礫石器 3,510 点、石核・フレイク 15,661 点、石棒類・石製品 118 点で、合計 22,856 点の石器が出土している。

第 171 図には器種毎の出土点数を示した。また遺物取り上げ用グリッドごとにもみた、各器種の出土点数は第 7 表に記している。

出土層位はⅢ～Ⅴ層であり、ここまでみてきた縄文土器と共伴する。そのため帰属時期は前期から晩期の範疇と幅が広いことになる。形態から、各石器の時期を特定することは困難であり、厳密には時期別の出土点数を割り出すことはできない。ここに層位ごとの点数を記しておく。

Ⅲ層：16,139 点

Ⅳ～Ⅴ層：2,859 点

Ⅴ層：3,857 点

Ⅲ層は後晩期の包含層、Ⅳ層が中期から後期の堆積層、Ⅴ層が中期の包含層であり、この点を考慮すれば、上記の点数から 3 つの時期においては石器の出土量を傾向としてとらえることができる、後晩期の石器が多く、中期は少ないといえるかもしれない。ただし縄文土器同様、石器も流れ込みによる混入が多いことが推測され、出土量の傾向も厳密なものとは言えない。

剥片石器では U フレイクが多く、次いで石鏃が多い。石鏃には石鏃失敗品も多数含まれている。次いで多いのは不定形石器である。ただし点数が多い割に 3692 や 3693 のように刃部を精巧に作出するものは多くなく、むしろ 3704 のような 3 類としたものが目立つのが特徴である。他に石錐・石匙も決して少なくない。石錐は欠損品が多い。また石匙も形態が I 類に偏る傾向が見て取れた。

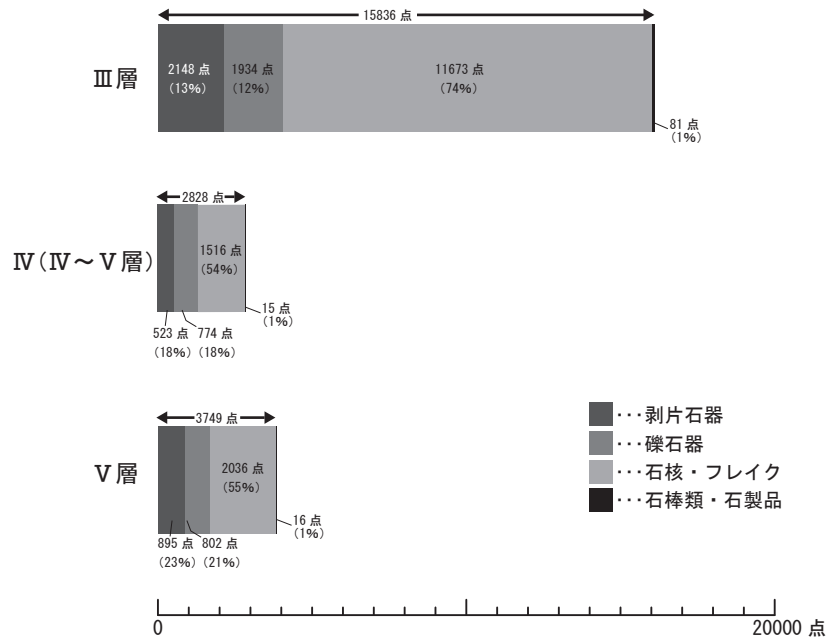
礫石器は敲磨器類が圧倒的に多く、剥片石器を含めた全器種の中でも、最も多かった。これは磨る、敲くといった複数の機能を有する石器を一括しているためかもしれないが、後述の通り、一定の分類に偏る傾向が見て取れる。石皿・台石が少ない。石皿・台石は完形品がわずかで、ほとんど破片である。また使用痕から、砥石に転用されている可能性があるものも多い。このような転用品ではない、砥石と判断できたものは 32 点で少ない。磨製石斧は少なくない。製作途中の失敗品も含まれるが、比較的完成品の方が多い。ただし完形品は少なく、ほとんどが欠損品である。礫器も少なくないが、形態や大きさが様々で、統一性がない点の特徴である。

石器製作の残滓である、石核・フレイク類は石器（ツール類）と比べ、圧倒的に点数が多く（第 171 図上）、なかでもフレイクの多さが目立つ。前述の通り、出土層位からフレイクの時期も前期から晩期に及ぶと推定されるので、当然出土点数が多くなるが、これだけの出土量は、時期はともかく、遺跡内あるいは遺跡周辺で石器製作が行われていたことをうかがわせるものである。

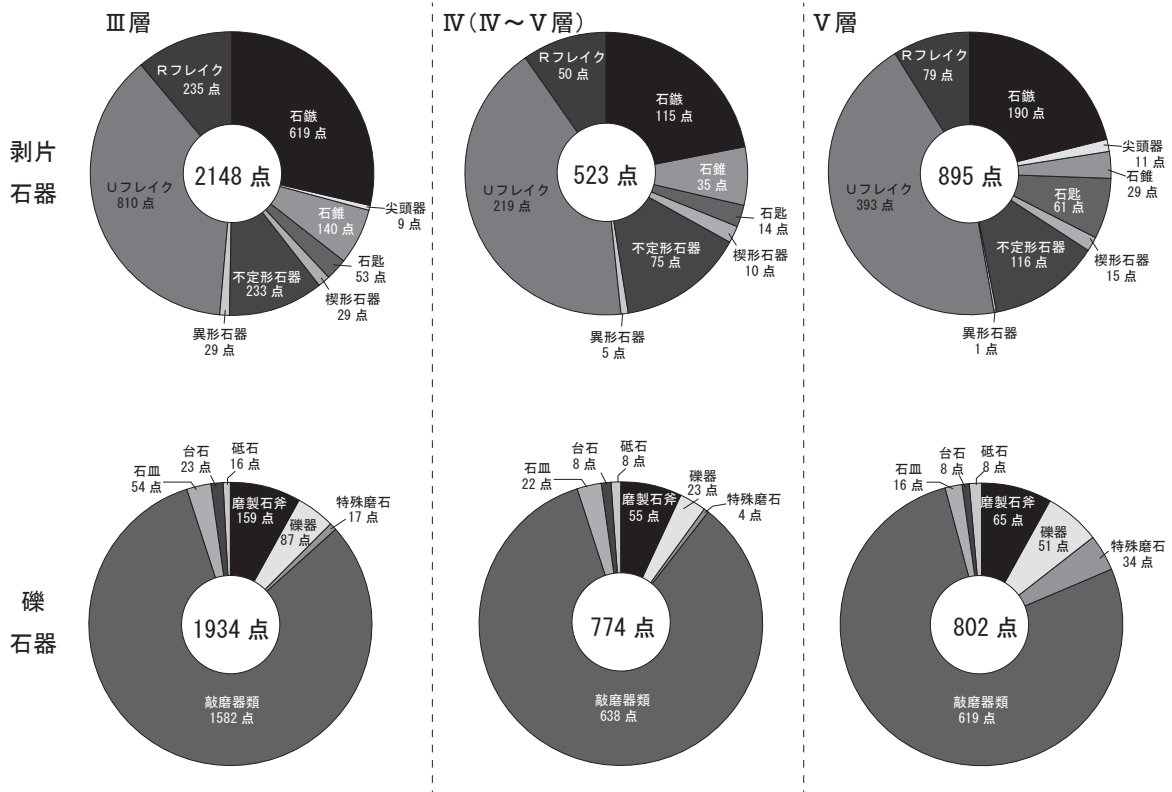
石棒類、石製品の類は全体的に少ない。そのなかで石棒類は多く見えるが、3913～3924 のような小さい破片が多い。形態の特徴から中期の石棒が少なく、ほとんどが晩期と考えられる。石製品は後述する通り、細分すると数種の石製品が出土している。ただし、それぞれの点数が少ない。土製品の項でも記したが、縄文時代後晩期は石製品の多い時期であり、それに該当する石製品がもう少し多く出土してもよさそうだが、各種 1～2 点ずつしか出土しない。

以上が、本遺跡から出土した石器全体の傾向である。次に各器種の特徴を属性観察と分布（第 172～176 図）から概観する。

【各層の出土点数内訳】



【各層の剥片石器・礫石器器種組成】



第 171 図 出土石器（器種毎）点数

第7表 遺構外出土石器一覽（器種別）

出土位置	出土層位	石器（点）															石器チップ（g）	軽石製品	石棒/石製品（点）								
		石鏃	尖頭器	石錐	石匙	楔形石器	不定形石器	異形石器	磨石	製斧	礫器	特殊磨石	敲器類	石皿	台石	砥石				石核	Uフレイク	Rフレイク	フレイク				
遺001	V層	2	1			1	5		2	1		15						9	4	18							
遺002	V層	3	1	1	2	1	2		2	3		4				1	2	10	4	57			1				
遺003	V層	5	1	1	2				3			4	1	2	20	1		3	20	5	115						
遺004	V層	14	1	4	7	1	4	1	5	5	1	25	1	1			4	23	3	156	0.27		2				
遺005	V層	19	1	1	8	4	4					2	11	1	2		1	24	9	270	0.32						
遺006	V層	1			1		1		1			15	1					5		27							
遺007	V層	1		1	1	1	5		6	3	1	45	2			3	1	12	2	47		2	1				
遺008	V層	7			2		6		2		6	18						9	4	75	2.25						
遺009	V層	6		1	3		2		4	3	1	24	1				1	31	7	72			1				
遺010	V層	3		2			4		3	1	1	16						10	1	32			2				
遺011	V層	1		1			8		4	5		56			1	1	2	17		43		1	1				
遺012	I～II層																										
	V層					1	1				1	1	13					2	1	5							
遺013	I～II層																										
	V層	1			1		3				4	1	15		1			5	1	18							
遺014	V層	26	1	3	1		9		5	2	3	29					1	49	5	217	8.25						
遺015	V層	4					4		1	1		7						13	2	31	0.62						
遺016	V層	1			1	1	7		3	1	2	21	1		1			3	2	23							
遺017	V層	2			2		1		1			11					1	6	1	24		2	1				
遺018	IV～V層										1	1															
	V層											4								2							
遺019	V層											1															
遺020	I～II層																										
	V層						1					4								2							
遺021	IV～V層					1						2								3							
	V層		1		2		2		1	2	2	10						2	1	12				1			
遺022	V層																										
遺023	I～II層	1																									
	III層	1																									
	V層			1	1							4						1		2							
遺024	V層	2	1		2		1					2	3	1					1	4							
遺025	V層																										
遺026	V層											1						1		2							
遺027	V層	4			1		1											3	1	32				1			
遺028	V層																			1							
遺029	V層																										
遺030	V層				1		1					7	1					1		7	1.87						
遺031	V層	4			1	1	1		1			8						12	4	29							
遺032	V層	7		1	3		2			1		16					1	1	8	2	49	0.93		1			
遺033	V層	3		1	2		7		4		2	20	1		2			10	2	39	0.18	1					
遺034	V層	2	1		1	1	2											2		30	1.05						
遺035	V層	2			3		1		1	1	2	8						6		43	3.08			1			
遺036	V層	2		1	2		3		3	1	1	9						8		22	0.12						
遺037	V層	1				1						7						2		8							
遺038	V層	1		1	2		1					6						5		26							
遺039	V層											3						2		9							
遺040	V層			1	1	1	3			1		3			1			4	2	11							
遺041	V層																										
遺042	V層																										
遺043	V層											1								2							
遺044	V層																			2							
遺046	V層																			4							
遺047	V層																										
遺048	V層																										
遺049	V層											1															
遺050	V層											2						1		1							
遺051	V層																										
遺052	V層																										
遺054	V層											4															
遺055	V層																										
遺056	V層											1															
遺057	V層																										
遺058	V層																										
遺059	V層																			1							
遺061	V層	1		1			1					4							3	14							
遺062	V層	3			1		1											2	1	5	0.06						
遺063	V層						1													1							
遺066	V層																										

1 縄文時代

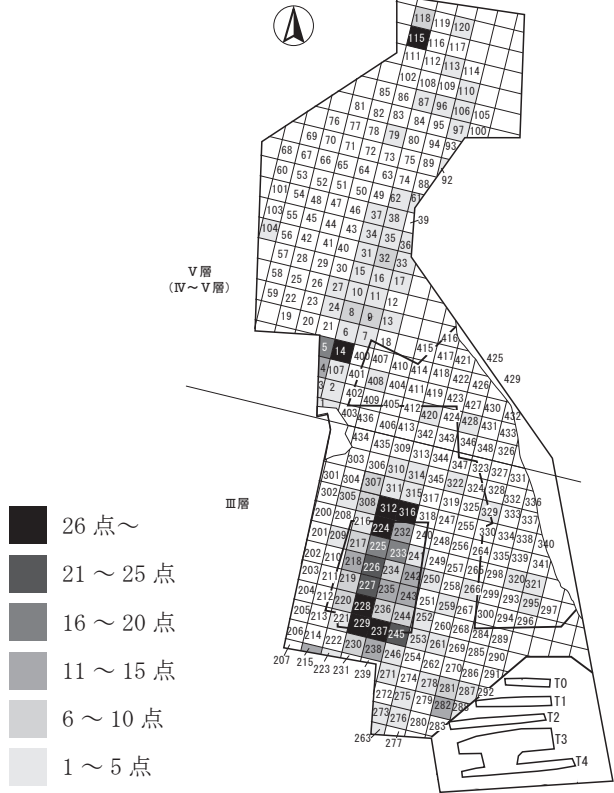
出土位置	出土層位	石器 (点)														石器 チップ (g)	軽石 製品	石棒/ 石製品 (点)			
		石鏃	尖頭器	石錐	石匙	楔形 石器	不定形 石器	異形 石器	磨石 製斧	礫器	特殊 磨石	敲 磨類	石皿	台石	砥石				石核	Uフレ イク	Rフレ イク
遺293	Ⅲ層																	5			1
	Ⅳ～Ⅴ層	1																			
遺294	Ⅲ層						1														
	Ⅳ～Ⅴ層	1					1									1					
遺295	Ⅲ層	1														2			9		
遺296	Ⅲ層																				
	Ⅳ～Ⅴ層																				
遺298	Ⅲ層																				
遺299	Ⅲ層																			2	1
	Ⅳ～Ⅴ層															3					
遺300	Ⅲ層																				
	Ⅳ～Ⅴ層																			1	
遺302	Ⅴ層						2									1	1		3		
遺303	Ⅳ～Ⅴ層																				
	Ⅲ層																				2.02
	Ⅳ～Ⅴ層	7		1		1	7		2			17	1			10	2	38			
遺305	Ⅲ層	1			1				1			4	1			1		20			
	Ⅳ～Ⅴ層	2		2		1	1		2	1		12	1		1	4	2	32			
遺306	Ⅲ層																				
	Ⅳ～Ⅴ層						1					1									
遺307	Ⅲ層	8					4					14			1	5		51	6.06		
	Ⅳ～Ⅴ層	1					1					3			2	1		6			
遺308	Ⅲ層	8					1		1	1	1	6		1	1	12		196	3.71	1	
	Ⅳ～Ⅴ層	7		1			4		1			8		1		12	2	196			1
遺309	Ⅲ層																				
	Ⅳ～Ⅴ層																				
	Ⅴ層																				
遺310	Ⅲ層	1																			
	Ⅳ～Ⅴ層																				
遺311	Ⅲ層	1					4				3	1	16			1	5	1	36	2.97	
	Ⅳ～Ⅴ層	3				1	2					6	1			7	2	46			
遺312	Ⅲ層	77		7	1		11	2	2	1		19			5	32	26	1989	1.46		
	Ⅳ～Ⅴ層	5		2	1		1		2			5				3		130			
遺313	Ⅲ層																				
	Ⅳ～Ⅴ層																				
	Ⅴ層																				
遺314	Ⅲ層	1							1												2
遺315	Ⅲ層	1			1	1					1					1		12			
遺316	Ⅲ層	39		6	1		9	1	6			17		1		59	8	1323	29.61		1
	Ⅳ～Ⅴ層											3									
遺317	Ⅲ層																				2
遺318	Ⅲ層																				1
遺319	Ⅲ層						1					2									1
遺320	Ⅲ層	2														1	1	13			
	Ⅳ～Ⅴ層															2		6			
遺321	Ⅲ層	1					2					8	1	1		1	2	1	23		1
	Ⅳ～Ⅴ層																				
遺322	Ⅲ層	1																			
	Ⅳ～Ⅴ層															1		4			
遺323	Ⅲ層								1			3									
	Ⅳ～Ⅴ層																				
遺324	Ⅲ層								1			3									
	Ⅳ～Ⅴ層															1					
遺325	Ⅲ層																				
	Ⅳ～Ⅴ層																				
遺326	Ⅲ層							1													1
	Ⅳ～Ⅴ層																				
遺327	Ⅲ層																				1
	Ⅳ～Ⅴ層																				
遺328	Ⅲ層								1			4									3
	Ⅳ～Ⅴ層				1																2
遺329	Ⅲ層	1																			1
遺330	Ⅲ層																				
遺332	Ⅲ層				1											1	1		2		
	Ⅳ～Ⅴ層																				1
遺333	Ⅲ層								1							1		1			1
	Ⅳ～Ⅴ層															1		1			
遺334	Ⅲ層								1												
	Ⅳ～Ⅴ層																				1

Ⅶ 検出遺構と出土遺物

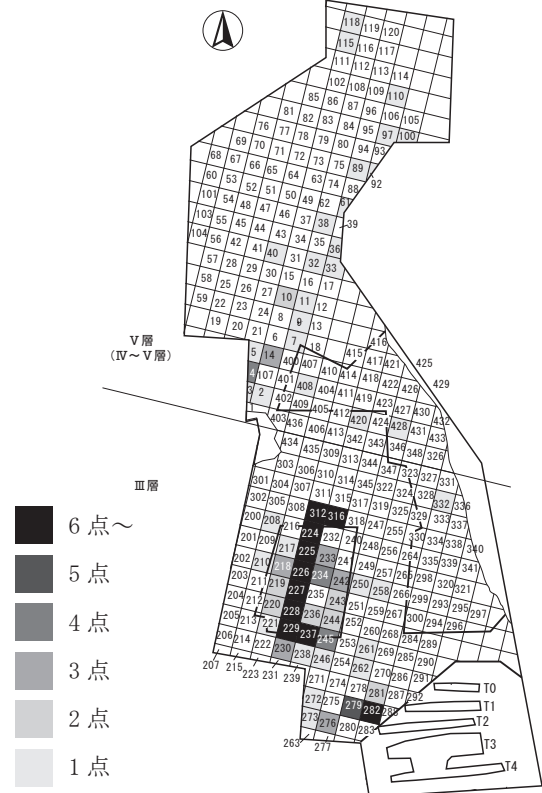
出土位置	出土層位	石器 (点)													石器 チップ (g)	軽石 製品	石棒/ 石製品 (点)					
		石鏃	尖頭器	石錐	石匙	楔形 石器	不定形 石器	異形 石器	磨石 製斧	礫器	特殊 磨石	敲 器類	石皿	台石				砥石	石核	Uフレ イク	Rフレ イク	フレ イク
遺335	Ⅲ層																		1			
	Ⅳ～Ⅴ層																		2			
遺336	Ⅲ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																		2			
遺337	Ⅲ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																		2			
遺338	Ⅲ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																		1			
遺339	Ⅲ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																		3			
遺340	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺341	Ⅲ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺342	Ⅳ～Ⅴ層																					
	Ⅴ層																		3			
遺343	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺344	Ⅳ～Ⅴ層																					
	Ⅴ層																					
遺345	Ⅲ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺346	Ⅲ層																					
	Ⅴ層																					
遺347	Ⅲ層																					
	Ⅴ層																					
遺348	Ⅲ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺368	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺400	Ⅴ層																					
遺401	Ⅴ層																					
	Ⅴ層																					
遺402	Ⅴ層																					
遺403	Ⅳ～Ⅴ層																					
	Ⅴ層																					
遺404	Ⅴ層																					
遺405	Ⅴ層																					
遺406	Ⅳ～Ⅴ層																					
	Ⅴ層																					
遺407	Ⅴ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺408	Ⅴ層	2																				
	Ⅴ層																					
遺409	Ⅳ～Ⅴ層																					
	Ⅴ層																					
遺410	Ⅳ～Ⅴ層																					
	Ⅴ層																					
遺411	Ⅲ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																					
	Ⅴ層																					
遺412	Ⅲ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺413	Ⅲ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺414	Ⅳ～Ⅴ層																					
	Ⅴ層																					
遺415	Ⅴ層																					
遺417	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺418	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺419	Ⅳ～Ⅴ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺420	Ⅳ～Ⅴ層	1																				
遺421	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺422	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺423	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺424	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺426	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺427	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺428	Ⅳ～Ⅴ層	1																				
遺430	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺433	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺434	Ⅲ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																					
遺435	Ⅲ層																					
	Ⅳ～Ⅴ層																					

出土位置	出土層位	石器 (点)														石器 チップ (g)	軽石 製品	石棒/ 石製品 (点)					
		石鏃	尖頭器	石錐	石匙	楔形 石器	不定形 石器	異形 石器	磨石	製斧	礫器	特殊 磨石	敲 磨類	石皿	台石				砥石	石核	Uフレ イク	Rフレ イク	フレ イク
15号住居	埋土上位					1			1									3		4			
	埋土下位	1				1	3						1	1				6	1	9			
	床直/床面																						
	炉内																				1		
16号住居	柱穴/壁溝内																				1		
	埋土下位																	1		1			
17号住居	炉内	1																2		4			
	埋土上位																						2
	埋土下位								1	2	2	8						5		17			
	床直/床面											3						2		4			
18号住居	炉内					1						2						1		3			
	柱穴/壁溝内																						
20号住居	埋土上位												1		1							2	
	埋土下位																					1	
	埋土中									2												1	
	床直/床面																	1				2	
	炉内												1										
21号住居	柱穴/壁溝内																	1					
	埋土上位												8	1		1	1	1		3	0.15		
	埋土下位																					1	1
	床直/床面																						
22号住居	炉内																						
	埋土上位	2									1	4										16	
	埋土下位	1									1							3	1	11			
	埋土中												2					1					
23号住居	柱穴/壁溝内																						
	埋土上位	5						4	1	2	10							5	2	56			
1号埋設土器	埋土下位									1	3							1	1	11			
	埋土中																						
2号埋設土器	埋土中																					2	
3号埋設土器	埋土中																						
1号土坑	埋土中																						
2号土坑	埋土中																						
3号土坑	埋土中																						
4号土坑	埋土中																						
5号土坑	埋土中					1	1														3		
6号土坑	埋土中																				1		
7号土坑	埋土中																						
10号土坑	埋土中																						
11号土坑	埋土中																						
12号土坑	埋土中									1												5	
13号土坑	埋土中											4		1			1				2		
14号土坑	埋土中					1					2	5							1	1			1
15号土坑	埋土中											2											
16号土坑	埋土中											1											
22号土坑	埋土中																						
23号土坑	埋土中					1																	
24号土坑	埋土中																					1	
25号土坑	埋土中											1	1										
26号土坑	埋土中											3											
27号土坑	埋土中											1										1	
28号土坑	埋土中																						
29号土坑	埋土中																						
30号土坑	埋土中											1											
32号土坑	埋土中	2																1		2			
33号土坑	埋土中											1									1		
34号土坑	埋土中									1		1									1		
35号土坑	埋土中											1											
36号土坑	埋土中																						
38号土坑	埋土中																					2	
40号土坑	埋土中																						
42号土坑	埋土中																					2	
1号性格不明遺構	埋土上位	2					2		1	1	15						8	1	75	0.20			
	埋土下位	1			1	2	4				26						5	4	36				
	埋土中																					4	
柱穴群	埋土中						1					3										4	
出土地点不明	-	19		3			8		4	2	3	35	1	4		1	24	2	232	5.40	2	1	

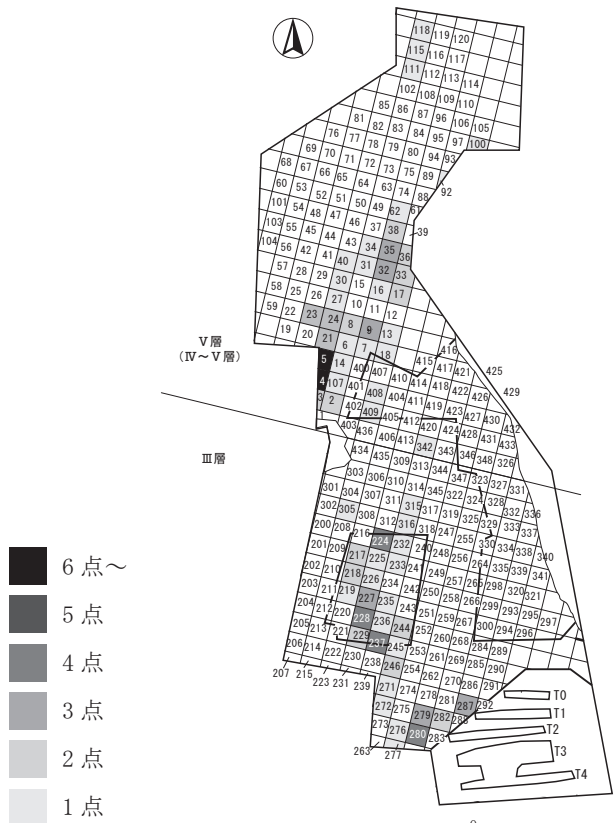
石鏃
(Ⅲ層・Ⅴ層(Ⅳ～Ⅴ層)出土分)



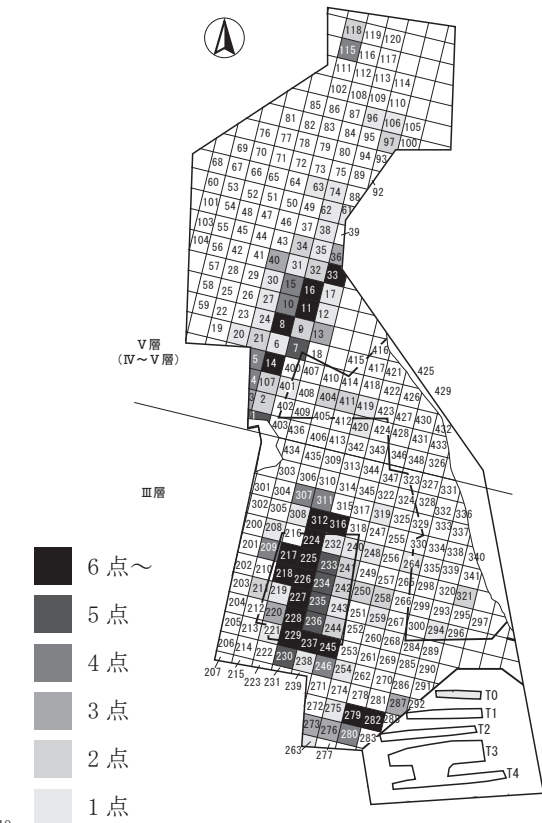
石錐
(Ⅲ層・Ⅴ層(Ⅳ～Ⅴ層)出土分)



石匙
(Ⅲ層・Ⅴ層(Ⅳ～Ⅴ層)出土分)



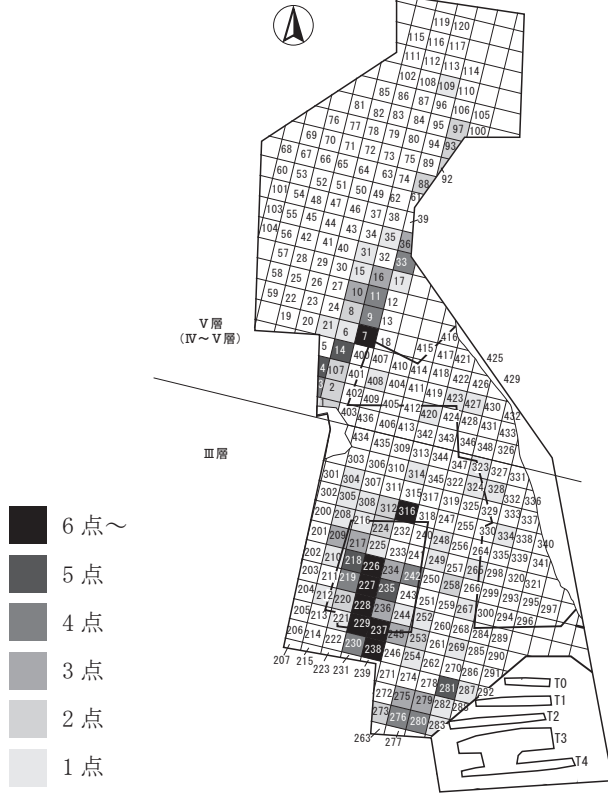
不定形石器
(Ⅲ層・Ⅴ層(Ⅳ～Ⅴ層)出土分)



第172図 遺構外出土石器1

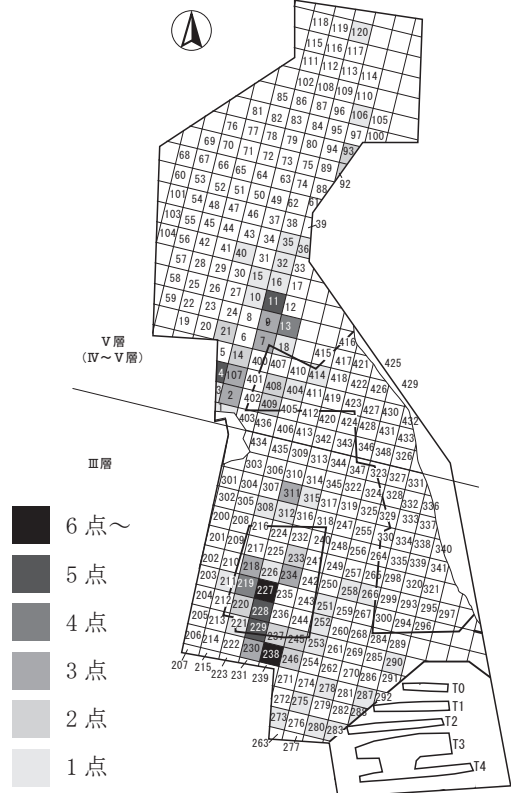
磨製石斧

(Ⅲ層・Ⅴ層 (Ⅳ～Ⅴ層) 出土分)



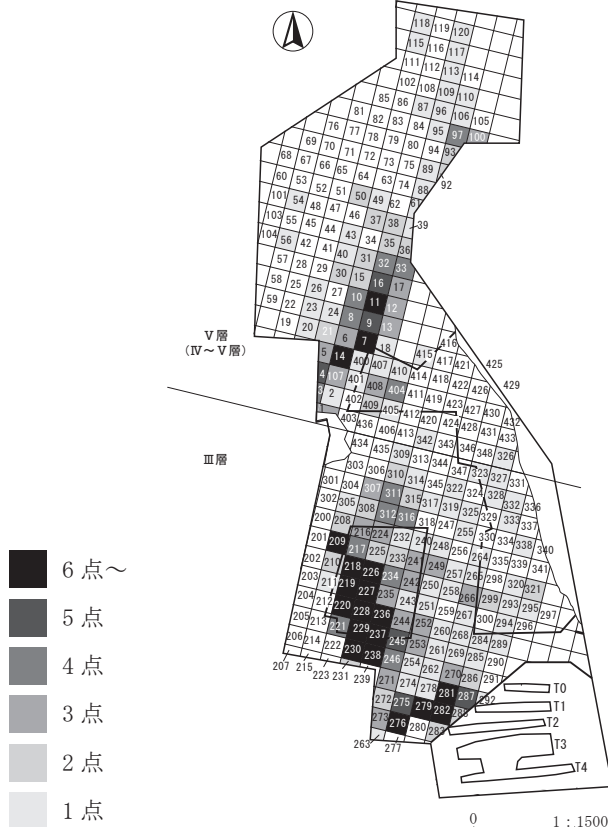
礫器

(Ⅲ層・Ⅴ層 (Ⅳ～Ⅴ層) 出土分)



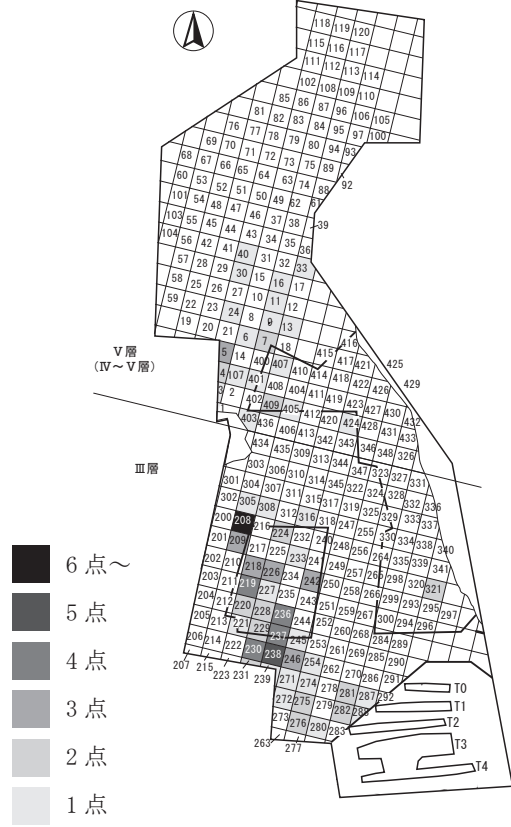
敲磨器類

(Ⅲ層・Ⅴ層 (Ⅳ～Ⅴ層) 出土分)



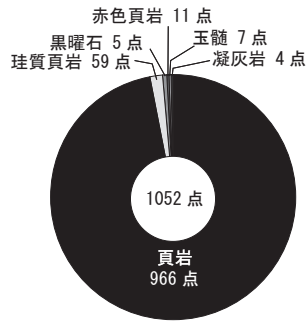
石皿・台石

(Ⅲ層・Ⅴ層 (Ⅳ～Ⅴ層) 出土分)



第 173 図 遺構外出土石器 2

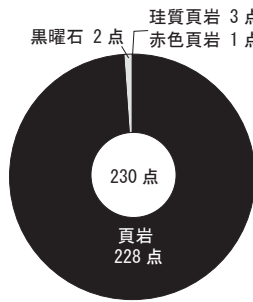
【石鏃】



【尖頭器】



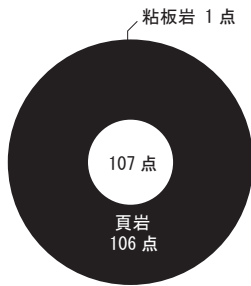
【石錐】



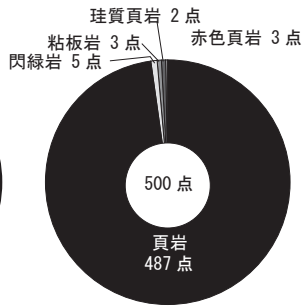
【楔形石器】



【石匙】



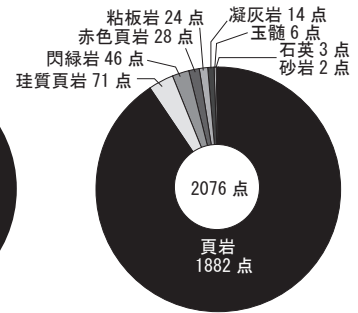
【不定形石器】



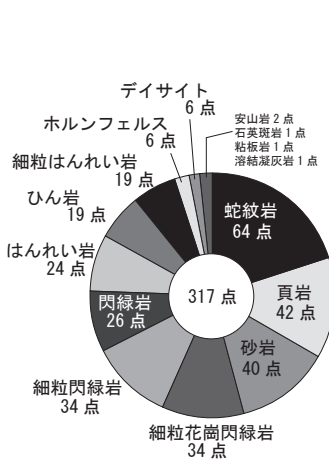
【異形石器】



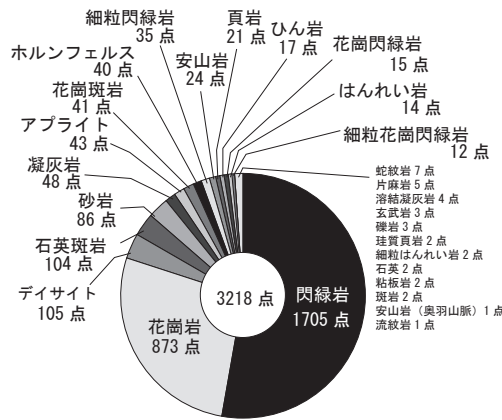
【Uフレイク・Rフレイク】



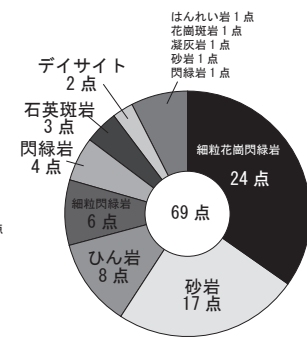
【磨製石斧】



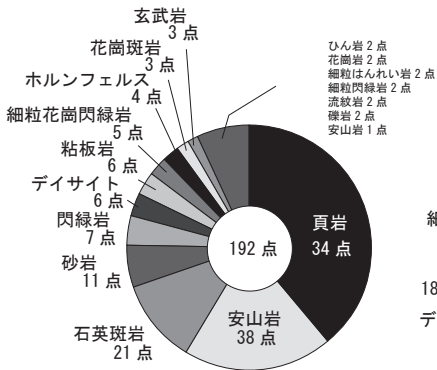
【敲磨器類】



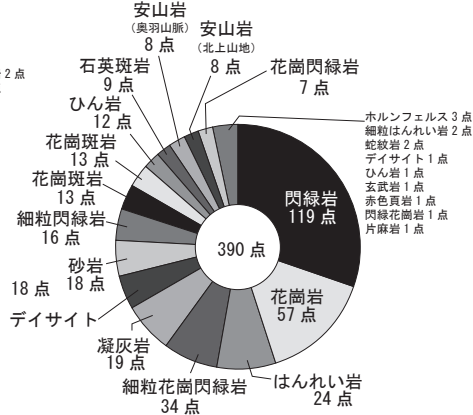
【特殊磨石】



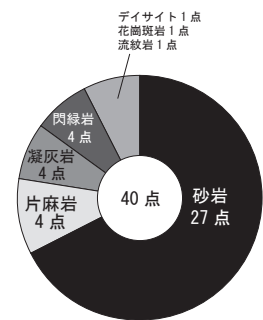
【礫岩】



【石皿・台石】



【砥石】



※遺構内出土も含む。

第 174 図 石器の石質

石鏃（第2分冊第203～206図、写真図版265～268）

【出土位置・層位】調査区の全域から出土している（第172図左上）。V層では、遺14・115周辺に集中し、またⅢ層では遺224～229の周辺が多い（第172図）。Ⅲ層から出土する石鏃の方が多く、したがって晩期に比定されるものが多い可能性が高い。

【分類毎の出土点数】Ⅰ類22点、Ⅱ類221点、Ⅲ類81点、Ⅳ類46点、Ⅴ類205点、Ⅵ類40点、Ⅶ類19点、Ⅷ類2点、不明83点で、Ⅱ類、Ⅴ類が多い。また失敗品は208点である。

【形態の特徴】Ⅰ類（3381～3383）は茎部の抉れが深く、円形を呈するもの（3381～3382）とややⅡ類に類似するもの（3383）がある。Ⅱ類（3384～3413）は茎部の抉れが深いもの（3384～3403）と浅いもの（3404～3413）がある。また前者は三角形を呈するが、後者は細長い形態である。3407のように長辺が歪なものがあるが少ない。Ⅲ類（3414～3417）は三角形を呈するが、平基部がやや内側に窪むもの（3415）がある。Ⅳ類（3418～3431）は体部が三角形か二等辺三角形を呈するものが主体であるが、なかに極端に長い三角形を呈するもの（3423）も見受けられる。3431は茎部から体部半分のみ残存するが、非常に大きい石鏃である。Ⅴ類は菱形状や木の葉状の体部に基部が付く形態（3432・3436～3465）と十字状の形態（3433～3435）がある。Ⅵ類は全体が菱形を呈する形態（3466）や基部より体部から先端が細くなる形態（3467）がある。3469は先端部が丸く、一見して失敗品かとも思ったが、二次加工が全体に及んでおり、完成品と推定しⅥ類に含めた。Ⅶ類（3471～3476）は全体的に歪で、基部の方が鋭利に作出されている。Ⅶ類は1点（3477）のみであるが、アメリカ式石鏃のように体部が括れる。

石鏃失敗品は形態の特徴から、剥離が及ばず、瘤状に残るもの（3478～3481・3483）、著しく左右非対称な形態（3482・3484～3497）、二次加工が刃部のみで全体に及んでいないもの（3498～3502）がある。

【石材】6種確認した（第174図）。9割以上が頁岩で、珪質頁岩がそれに次ぐ。それ以外の石材は1～5点程度しか利用されていない。黒曜石が5点あり、そのうち1点（3502）は産地は北上川流域と推定されている（第Ⅷ章-2）。

【アスファルトの付着】全体の3%にアスファルトの付着が確認できた。Ⅰ～Ⅲ類は体部から茎部にかけて付着し（3385・3394・3395・3411）、Ⅳ～Ⅶ類は基部に付着する（3450・3453・3459・3460・3465・3469・3475）。またⅤ類で基部ではなく体部に付着するもの（3464）もあるが、この1点のみである。

尖頭器（第2分冊第207図、写真図版268）

【出土位置・層位】調査区全体に分布する。出土点数自体が少ないので、わずかに遺226～230に偏っているが、厳密には不明である。

【形態の特徴】細長の槍先状の形態をするもの（3506・3507）が少なく、またやや小型である。3503は大型で、槍先状の形態に相当する可能性があるが、両端が欠損しており、断言できない。また3509は端部片で、若干歪であるが、槍先状の形態の可能性がある。

両端が丸みを帯びる形態（3504・3505・3508・3510・3511）があり、出土点数では、こちらの方がやや多い。

【石材】頁岩のみである。

【アスファルトの付着】1点のみ確認した（3511）。端部の縁辺に点的に付着するのを確認した。

楔形石器（第2分冊第207図、写真図版268）

【出土位置・層位】 調査区のほぼ全域から出土しているが、調査区の南側、遺282周辺のⅢ層にやや偏っている。出土点数自体が多くない。

【分類毎の出土点数】 I類17点、II類21点で、II類の方が多い。

【形態の特徴】 I類・II類共に方形基調である。I類については遺構外出土からは掲載していないが、5号土坑出土（685）が相当し、すでに記した。II類は1点（3512）を掲載した。偏平なフレイクを素材とし、上下左右の2方向から打撃を加えた痕跡があるが、階段状剥離が全体に及んでいるわけではなく、特に長辺の側辺は一部のみ剥離している。

【石材】 頁岩のみである（第174図）。

【アスファルトの付着】 見受けられない。

石錐（第2分冊第208～212図、写真図版268～271）

【出土位置・層位】 調査区全域から出土しているが、圧倒的に調査区の南側Ⅲ層に偏る傾向が見て取れ、遺224～229周辺に集中する（第172図右上）。縄文時代後晩期の土器の集中範囲に類似するので、出土した石錐も後晩期が多いと推測する。

【分類毎の出土点数】 I類57点、II類69点、Ⅲ類25点、IV類26点、V類18点、不明7点で、II類が最も多く、I類がそれに次ぐ。

【形態の特徴】 I類（3513～3547）は両端が鋭利に仕上げられるもの（3513～3517など）と一端は鋭利に作出されるが、もう一端は比較的丸く仕上げるもの（3518・3529）、あまり意図して仕上げていないもの（3523・3533など）がある。また歪な細長の菱形状を呈するもの（3519・3531）も見受けられる。

II類（3548～3580）は点数が多いものの、摘み部の形態が一様でない。3550～3554、3558～3567は摘み部を作出しているが、その形態に意図的なものがない。3555は摘み部が二又になる。3556は半円状、3557は突起状、3568～3567は楕円形、3574はT字状、3576は菱形を呈している。

Ⅲ類（3581～3596）はII類同様に摘み部があるが、II類ほど明確ではないものを含めた。摘み部自体が体部の半分近くを占め、摘み部が歪である。なかには楕円形（3582）や三角形（3583・3588）を呈するものがある。また3593～3596は逆三角形を呈し、錐部と摘み部の境が明確ではない。

IV類（3597～3606）は形態が菱形や涙滴形を呈し、一見すると石鏃に類似するが、前述の石鏃と比べて厚みがあり、先端部（錐部）の作出で石錐と判断したものである。

V類（3607）は偏平なフレイクの一端のみ錐部として作出する。

【残存部位】 比較的完形品が多く、出土点数全体の6割に相当する。欠損品には錐部が欠損するものが多い。

【大きさ・重量】 大きさでは、長さは1.8～4.6cm、幅0.3～3.6cmの範囲に収まる。最も大きいものは3550、小さいものは3545である。重量は0.5～3.5gに集中する。最も軽いものが0.27g（不掲載）、最も重いのは3568（12.07g）であるが、欠損品なので、実際はもっと重い。

【石材】 4種確認した（第174図）。ほとんど頁岩、他は1～3点である。

【アスファルトの付着】 3540は縁辺部、3551は摘み部に付着する。

石匙（第2分冊第212～218図、写真図版271～275）

【出土位置・層位】調査区全域から出土し、大きな偏りはないが、V層では遺4・5にⅢ層では遺228・237・280に集中する（第172図左下）。

【分類毎の出土点数】Ⅰ類45点、Ⅱ類36点、Ⅲ類33点、Ⅳ類7点、不明7点で、比較的Ⅰ類が多く、Ⅱ類がそれに次ぐ。

【形態の特徴】Ⅰ類（3608～3632）は刃部が両面加工（3608～3614・3616～3619・3628～3630・3632）と片面加工（3615・3621～3627・3631）がある。また3620は刃部の二次加工が不連続であり、まだ製作途中か失敗品の可能性がある。3608～3619・3628は二次加工が刃部や摘み部のみではなく、体部全体に及んでいる。

Ⅱ類（3633～3650）も刃部が両面加工（3637・3639・3641・3643・3646・4367・3649・3650）と片面加工（3633～3636・3638・3640・3642・3644・3645・3648）があり、Ⅰ類に比べて片面加工が多い。二次加工は刃部と摘み部のみ施され、素材となるフレイクの状態が残る。また3648は自然面の残るフレイクを素材としており、やや変わっている。

Ⅲ類（3651～3667）は刃部が縦長（3651～3666）と横長（3667）があり、したがって意図的に摘み部から斜位に刃部を作出したかは定かではない。刃部は両面加工（3651・3652・3654・3655・3664～3666）、片面加工（3653・3656～3663・3667）がある。

Ⅳ類（3668～3677）は形態からⅠ～Ⅲ類に含められないものを一括した。体部の形態が歪なもの（3666～3671）、体部の長幅がほぼ同じで縦長、横長ともいえないもの（3672～3676）があり、また3677は厚みがあり、全体に二次加工が施されるもので、摘み部の括れが太く、他の石匙と比べ形態がやや異なる。刃部の加工は、両面加工（3669・3670・3672～3677）、片面加工（3668・3671）があり、比較的両面加工の方が多。

【残存部位】比較的完形品が多く、出土点数の6割を占める。

【大きさ・重量】大きさは、長さではⅠ類で3～5cmの範囲に集中する傾向があり、最大で71.36mm（3609）、幅ではⅡ類で3～5cmの範囲に集中し、最大で96.49mm（3649）がある。重量では4～6gの範囲に集中するが、それ以上のものも少なくなく、3651は41gを超えている。

【石材】頁岩のみである（第174図）。

【アスファルトの付着】3670は体部に付着する。

不定形石器（第2分冊第218～220図、写真図版275・276）

【出土位置・層位】調査区全域で出土しており、V層では遺8・11・14・16・33に、Ⅲ層では遺224～229周辺に集中する（第172図右下）。

【分類毎の出土点数】Ⅰ類240点、Ⅱ類100点、Ⅲ類84点で、Ⅰ類が多い。ただし出土点数が多い割に、刃部を作出する二次加工が明瞭でなく、掲載できるものも少なかった。

【形態の特徴】第218～220図に掲載したものは、分類別ではなく主に形態の特徴が類似するものを順に並べた。

Ⅰ類は楕円形のもの（3679・3681・3697・3700～3702）、不整な方形を呈するもの（3685～3688）、縦長（3689・3690）、横長（3702）、端部が鋭利に整形されるもの（3693・3699）がある。

Ⅱ類は楕円形のもの（3683・3694～3696）、不整な方形を呈するもの（3698）、縦長（3691・3692）、横長（3701）、端部が鋭利に整形されるもの（3678・3682・3684）がある。このようにⅠ・Ⅱ類は刃部の角度は異なるものの、形態の特徴はほぼ類似する。

Ⅲ類も形態はⅠ・Ⅱ類とほぼ類似するが、第Ⅴ章に記した通り、刃部の二次加工が不連続なものを本類としている。3680・3705は楕円形を呈する。側面全周に二次加工が施されるが、Ⅰ・Ⅱ類と比べて、粗い。3703は菱形、3704は三角形を呈するが、刃部の二次加工と考えられる押圧剥離縁辺に全周せず、また粗いので本類とした。

【大きさ・重量】 大きさについては、不定形石器の形態に規則性がないので、傾向を捉えきれないが、長幅3～6cmの範囲に集中し、長さは最大で71.93mm(3692)、幅では63.98mm(3701)を測るものがある。重量も様々で、1g前後から10g前後が多いが、なかには100～200gに及ぶものも少なくない。

【石材】 5種確認した(第174図)。ほとんどが頁岩で、他の石材は1～5点程度しか利用されていない。
【アスファルトの付着】 3701の刃部に付着する。

異形石器 (第2分冊第221図、写真図版277)

【出土位置・層位】 調査区南側Ⅲ層に偏っている。

【形態の特徴】 様々であるが、出土点数が少なく、細分はしていない。3706は三日月形、3707～3713は石鏃や石匙に類似するが枝のような突起が作出されている。3714・3715は円形に二又が付く。3716は石匙のような摘み部に似る部分が付くが、体部は石錐に類似し、またカーブを描いている。3717・3718は石錐の錐部のように鋭利な部分と石匙状(3717)や二又(3718)が付く。

【大きさ・重量】 大きさについては、上記の通り、形態に規則性がないので、傾向を捉えきれないが、長幅3～5cmの範囲に集中する。もっとも大きいものは3712で、長さ40.40mm、幅53.60mmを測る。重量は1g前後から10g前後に収まるが、ばらつきがある。

【石材】 頁岩のみである(第174図)。

【アスファルトの付着】 不掲載としたものに1点付着しているのを確認した。

Uフレイク・Rフレイク (第2分冊第221～223図、写真図版277～279)

【出土位置・層位】 Uフレイク・Rフレイクともに調査区全域で出土している。出土点数が多いので、かえって偏りが見受けられない。なお3722～3725・3727・3728・3732～3735は「遺278」Ⅴ層で、重なるように出土している。詳細な観察はしなかったが、剥片集中遺構の可能性もあった。

【形態の特徴】 U・Rフレイクどちらも素材となるフレイクに部分的な押圧剥離(微細剥離)を施したものであり、形態的な特徴は見受けられない。

3719～3726はUフレイクである。微細剥離(3719～3721・3723・3724・3726)が見受けられるもの、刃部と思われる二次加工が不連続なもの(3722・3725)が見受けられる。

3727～3735はRフレイクである。第Ⅴ章でも記したが、不規則に二次加工が施され、刃部を作出するためか不明なものである。ただし、3729・3730・3732は部分的に二次加工を集中させており、Uフレイクに類してもよいといえる。

【大きさ・重量】 大きさは長幅2～5mm大の範囲に集中する。たださらに大きなものもある。重量も0.5～2.0gに集中するが、最大100gを測るものもある。

【石材】 9種確認した(第174図)。頁岩が多く、珪質頁岩、閃緑岩、粘板岩、赤色頁岩がそれに次ぐ。3731は黒曜石である。産地は月山と推測される(第Ⅷ章-2)。

【アスファルトの付着】 見受けられない。

磨製石斧（第2分冊第223～227図、写真図版279～281）

【出土位置・層位】V層は遺7周辺、Ⅲ層は遺226～229周辺に集中する（第173図左上）。

【分類毎の出土点数】刃部・基部共に分かれるものは少なく、I a類26点、I b類3点、Ⅲ a類14点、Ⅲ b類6点で、刃部形態ではI類44点、Ⅱ類7点、Ⅲ類50点、基部形態ではa類52点、b類19点、不明36点で、他に未成品が28点である。

【形態の特徴】3736～3776は長さ6～15cm前後で、完成品である。刃部に剥離（刃こぼれ?）、基部の欠損が見受けられるものが多い。ほとんどの磨製石斧で、製作時の研磨痕が確認でき、また製作時の敲打痕が残るもの（3741・3742・3748・3756・3764など）も多い。形態の特徴は上記の形態分類を組み合わせたものであるが、なかには3742のように左右非対称なまま仕上げられたものも見受けられた。3755～3762はやや小さい。ただし後述する小型の磨製石斧よりは大きく、また形態の特徴も上述のものと同じである。3764・3765は厚みがあり、全体的に丸い形態、3766・3767は棒状の形態、3776は形態は上記と変わらないが、厚みが扁平である。いずれも出土点数は少ない。

3773は欠損した基部を敲打しており、二次利用あるいは補修している可能性がある。3774・3775は製作途中品である。また3777～3781は欠損した刃部や基部を敲打し、修正したものである。磨製石斧に分類したが、敲打された刃部形態をみると、敲磨器類（Ⅲ類など）として利用されているものと考えた方がよいかもしれない。

3782～3798は長さ2～6cm前後の、小型の磨製石斧である。この中でも比較的大きい3782～3789の形態は上述の磨製石斧とそれほど変わらない。ただし、側面などの整形はやや歪なものがある（3782）。さらに小型の3791～3798は同形態のものもあるが、短冊状のもの（3793～3796・3798）も見受けられる。

【残存部位】ほとんどが刃部や基部を欠損する。完形品は出土点数全体の1割程度である。

【大きさ・重量】大きさは完形品のみで考えると、長さ8～15cm、小型は2～6cmに集中する。重量では100～250g前後、小型は2～15g前後が多い。

【石材】15種類の石材を確認した（第174図）。最も多いのは蛇紋岩で、この点は周辺の縄文時代の遺跡の磨製石斧の在り方と変わらないものと推測するが、他に、はんれい岩、砂岩、閃緑岩、頁岩も多く、あまり石材へのこだわりが見受けられない。特に砂岩、閃緑岩は周辺地形から採集が容易な石材である。

【アスファルトの付着】見受けられない。

礫器（第2分冊第228～233図、写真図版281～284）

【出土位置・層位】V層では遺4・11周辺、Ⅲ層では遺227～230周辺に集中する（第173図右上）。

【分類毎の出土点数】I a類15点、I b類16点、Ⅱ a類8点、Ⅱ b類6点で、I a類が比較的多かった。

【形態の特徴】第228～233図にI a類、I b類の代表的なものを掲載した。3799～3814は厚みがあり、比較的丸みのある礫を素材とする礫器で、剥離が縁辺のほぼ全周に及んでいる。3804・3807・3808・3814は平坦面や縁辺の一部に敲打痕が見受けられる。3813は縁辺の一部に被熱痕が見受けられる。

3815～3821は素材となる礫の縁辺の一部にのみ剥離が見受けられるもので、素材となる礫の形態・大きさも様々である。また敲打痕が残るもの（3821）がある。

3822・3823は特殊磨石に形態が類似する。3822は特殊磨石（3824）と比べても、形態や縁辺が剥離する特徴などほぼ同じであるが、磨痕が確認できないので礫器とした。3823は素材となる礫の形態は特殊磨石と同じであるが、片側の側縁を剥離するのみであり、磨痕もないので、礫器とした。

【大きさ・重量】大きさは、形態が一様ではないので傾向が分からないが、長幅3～20cm大の範囲に収まり、多くは10cm以上である。重量は10g～1.7kgまでであるが、概ね500g以上、1kg前後の範囲に集中する。

【石材】18種類の石材を確認した(第174図)。頁岩が最も多く全体の4割を占める。それに安山岩、石英斑岩が次ぎ、この3種がほとんどを占めており、比較的硬質な礫を素材とすることが分かる。

【アスファルトの付着】見受けられない。

特殊磨石(第2分冊第233・234図、写真図版284・285)

【出土位置・層位】調査区の全域から出土しているが、比較的、調査区の北側、V層からの出土点数が多い傾向が見受けられる。

【形態の特徴】第V章に記した通り、偏平な礫の側面に敲打と磨痕が見受けられるものを特殊磨石としており、縦長で偏平な礫を素材とする。3824は方形基調の礫、3825～3831は楕円形の礫を素材とする。3824は剥離する側面には敲打痕が残るが、もう片方の側面には磨痕が見受けられる。3826は剥離する側面に広く磨痕が見られ、もう片方の側面には敲打痕が見受けられる。3827は平坦面の片面に敲打痕が残る。

【大きさ・重量】長辺は10～20cm、厚さは2～3cmの範囲に収まる。重量は200～600gの範囲に集中するが、800gを超えるものもある。

【残存部位】欠損品が多く、全体の7割が欠損品で、1/3～1/2欠損するものがほとんどである。

【石材】13種類の石材を確認した(第174図)。遺跡周辺から採取できる細粒花崗閃緑岩を素材とするものが多く、それに砂岩やひん岩が次ぐ。いずれも周辺で採集できる石材である。

【アスファルトの付着】見受けられない。

敲磨器類・多面体敲石(第2分冊第234～236図、写真図版285・286)

【出土位置・層位】V層は遺3～17周辺、Ⅲ層は遺218～238の広い範囲に集中する。

【分類毎の出土点数】I類2382点、II類41点、III類402点、IV類12点、V類283点、VI類7点、VII類3点、VIII類61点、多面体敲石2点で、I類が圧倒的に多い。

【形態の特徴】遺構外からは多量に出土しているが、遺構内出土も多く、すでに掲載しており、第234～236図では特徴的な資料のみ掲載した。

3832はIV類で、両面の広い範囲に磨痕があり、一部に敲打痕が見受けられる。3833はVIII類で厚みのある礫が素材となり、その縁辺が磨痕により偏平に変形している。またその両側面も磨った痕跡が残る。このようなものをVIII類とした。3834・3840はVI類で偏平な楕円形を素材とする。通常幅広の面を使用面とするものが多いが、3834はそれに加え、側面にも使用痕(敲打痕)が見受けられる。3835は数少ないV類で、安山岩を素材とし、広く磨った痕跡があり、両面中央に大きな凹痕が見受けられる。3836・3837はIV類で、厚みのある円形の礫を素材とし、両面に磨痕、側面は全面に敲打痕が見受けられる。大きさ、形態が類似しており、同じ用途で使用されたものと考えられる。3841はIV類だが、3834や3840とは違い、歪な礫を素材とする。両面とも比較的幅広であるが、使用痕は小さく、また側面に敲打痕が見受けられる。3842は最も少ないVII類で偏平な円形の礫を素材とし、両面に磨痕とそれぞれ敲打痕、凹痕が見受けられる。

3843は多面体敲石で球状を呈し、ほぼ全面に敲打痕があり、打撃を加えられた際の剥離も見受けられる。

【大きさ・重量】長幅4cm～20cm大の範囲に収まるが、ピークは7～9cm前後である。重量は概ね40g～2000gの範囲におさまるが、目立ったピークがない。後述の通り、様々な石材を用いているため、大きさはほぼ同じでも重量にはばらつきが生じている。

【残存部位】完形が多く全体の7割以上を占める。

【石材】29種の石材を確認した(第174図)。ただしそのうち5割強を占めるのは、閃緑岩で、花崗岩、デイサイトがこれに次ぐ。いずれも遺跡周辺の地形から採集可能な石材である。また石英斑岩も多いが、遺跡周辺より北上山地の方が採集可能であり、必ずしも遺跡に近い場所から採集しているわけではないことが窺える。

【アスファルトの付着】見受けられない。

石皿・台石(第2分冊第236～238図、写真図版286・287)

【出土位置・層位】V層ではやや散在し、遺5にやや偏る。一方、Ⅲ層も同じく散在的だが、遺208周辺、遺218～238周辺に集中する(第173図右下)。

【分類毎の出土点数】石皿はI類257点、II類44点、台石はI類68点、II類は20点である。石皿I類の多さが目立つが、台石も少なくない。後述するが、台石は礫の形状をあまり気にせず利用しているものと推測でき、必然的に多くなるのかもしれない。

【形態の特徴】3844～3846は石皿I類である。厚みはあるが、比較的偏平な大型礫を素材とし、幅広の1面あるいは上下2面を使用面としている。3847は片面の中央に1条の浅い溝がはしっており、研溝の可能性もある。3846は両面に磨痕のほか、被熱により部分的に赤色を呈しているのを確認した。

3847～3857は石皿II類である。すべて破片である。3847～3850は側縁のみ加工し、隅丸方形や楕円形に整形する。3851～3857はそれに加え、下面に脚を作出している。使用面は上面の1面のみで磨痕が見受けられるもの(3847・3848・3851～3853)があるが、使用面に使用痕が見受けられないもの(3849・3850・3854～3857)もある。また3848・3854～3856は側面や下面に敲打痕・凹痕・研溝が見受けられるので、破損した砥石を別の用途に二次利用している可能性が高い。

3858・3860は台石I類で、球状の大型礫を素材とし、3858は全面に磨痕が、3860は両面の中央に敲打痕・凹痕が見受けられる。

3859・3861は台石II類で、厚みのある棒状の礫(3859)や角柱状の礫(3861)など台石らしくない礫を素材とし、その広い面の1面のみ使用している。このような台石は通常あまり見受けられないが、本遺跡では、一定量出土している。3861は側面に被熱により赤色に還元した痕跡が見受けられた。

【大きさ・重量】石皿は長幅11cmから15cmの範疇に収まるものが多い。重量では800～1500gの範疇であるが、2000gを超えるものも少なくない。

台石の大きさは、I類とII類で形態が異なる。I類は石皿と同様であり、II類は長10～20cm、幅は5～10cmの範疇である。重量は石皿と同様である。

【残存部位】石皿I類は完形と欠損品とで半々である。II類はすべて欠損品である。

台石I類は完形が多く、II類は欠損品が多い。

【石材】24種の石材を確認した(第174図)。閃緑岩・花崗岩・細粒閃緑花崗岩でほとんどを占めており、やはり大きな石材である故に、近場から採集しているものと推測する。

【アスファルトの付着】見受けられない。

砥石（第2分冊第239～241図、写真図版287・288）

【出土位置・層位】 調査区のほぼ全域から出土しているが、調査区の南側のⅢ層に偏る傾向が見受けられる。

【形態の特徴】 特に細分していないが、使用痕や形態からいくつかの特徴が見受けられる。

3862～3864は大型で厚みのある礫を素材とし、ほぼ全面に研磨痕やそれに伴う磨痕（磨面）、また研溝が見受けられる。3862は中期の石棒の転用の可能性がある。磨痕、研磨痕の他、被熱も受けている。3863も同形態で細かい敲打痕の範囲がいくつも見受けられる。石棒か台石の転用と推測する。3864は古代以降の砥石にも類似するが、出土層位から縄文時代と判断した。側縁5面を使用面とし、研磨のために平坦に変形している。

3865～3867は側縁が大きく欠損している礫（石皿等の破片か）を素材としている。平坦な面に研磨痕や研溝が見受けられる。大きさから、手持で使用するのに適している。

3868は偏平な方形基調である。側縁を敲打し、方形に変形したものと推測する。平坦な両面に無数の研磨痕があり、この研磨痕から砥石の範疇と判断したが、あまり事例のない砥石である。

3869～3871も側縁が欠損する。形態から石皿の転用と推測する。どちらも研磨痕は見受けられないが、磨面の状態が石皿の使用面と比べても、非常に滑らかで研磨によるものと判断した。特に3869は研磨によって面がすり減っているのが断面から見て取れる。

【大きさ・重量】 大きさはさまざまである。重量では、500g～1800g以上まで、幅が広い。

【残存部位】 完形は1点（3868）のみで、他は欠損品である。ただし、使用によって破損したというより、元々別の器種の石器で破損したものを転用したものである可能性が高い。

【石材】 7種の石材を確認した（第174図）。砂岩が圧倒的に多く、遺跡周辺から採集でき、かつ軟質であることから選ばれた石材と推測する。

【アスファルトの付着】 見受けられない。

石核（第2分冊第241～243図、写真図版288～290）

【出土位置・層位】 Ⅲ層・Ⅴ層ともに散在的だが、調査区南側、Ⅲ層からの出土が多い（第175図右上）。

【形態の特徴】 出土点数は少なくないが、大きく2種に分けられ、1つは剥片石器を製作するために剥離作業を行ったと推測できるもので、そのうち6点（3872～3877）を掲載した。もう1つは剥離の状態などからは剥離作業を推測できないが、フレイクの範疇とするのは、大きさや形態が異なるもので、これについては掲載していない。

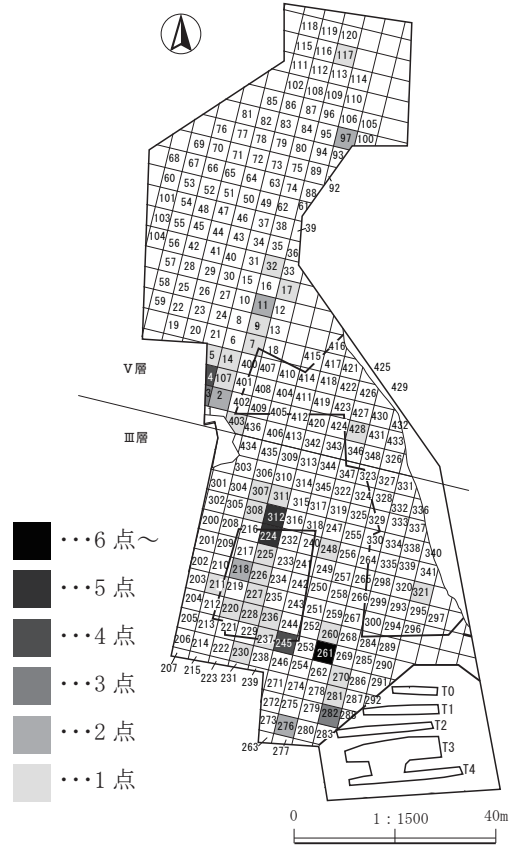
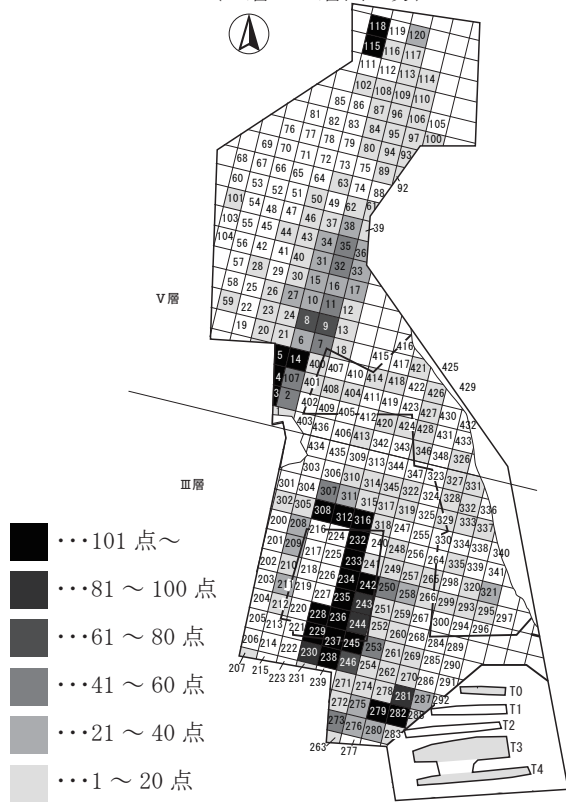
3872は厚みがある。側面の一端が作業面となり、ほぼ同一方向から剥離作業を行っている。3873は偏平で小型、両面を上下方向から剥離している。3874は自然面の残る礫を素材とする。状態からみて大型のフレイクを素材としているものと推測する。自然面の残る一端から剥離作業を行い、また90°回転し、剥離作業を行っている。3875も自然面の残る大型のフレイクを素材とする。側面の一端を剥離し、作業面を作り、剥離作業を行っている。またその面から左右それぞれに90°回転した方向でも剥離作業が行われている。なおその片側には微細剥離が連続している。3876は大型で厚みのある方形基調の石核で、部分的に自然面が残る。側面の上下両端から広い面で剥離作業を行っている。またその際のものと推測する敲打痕が見受けられる。3877は小型の棒状を呈する石核で、端部のほぼ全周から剥離作業が行われている。

【大きさ・重量】 大きさは長幅50～120mm大の範疇に収まる。重量は6g前後から1kg弱まで幅広いが、ピークは20～40gである。

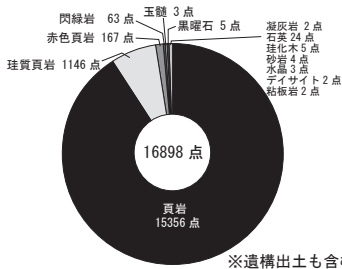
【分布】

フレイク
(Ⅲ層・Ⅴ層出土分)

石核
(Ⅲ層・Ⅴ層出土分)



【フレイク 石材組成】



【フレイク 分類点数内訳 (層位別)】

層名	分類	I a	I b	I c	II a	II b	II c	III a	III b	III c	IV a	IV b	IV c	IV d	総計
Ⅲ		24	174	396	23	382	2765	17	288	2014	506	387	1086	3611	11673
Ⅳ (Ⅳ～Ⅴ)		6	37	70	5	60	340	2	48	219	114	47	210	358	1516
Ⅴ		4	72	104	7	56	351	6	58	230	123	115	334	576	2036
総計		34	283	570	35	498	3456	25	394	2463	743	549	1630	4545	15225

【フレイク 分類点数内訳 (層位・大きさ別)】

分類	Ⅲ層								総計
	1.0~2.25cm	2.26~4.00cm	4.01~6.25cm	6.26~9.00cm	9.01~12.25cm	12.26~16.00cm	16.01~20.25cm	20.26~25.00cm	
I a	2	5	4	7	3	2	1	4	24
I b	15	54	45	26	18	5	6	1	174
I c	94	131	103	41	13	5	2	4	396
II a	4	7	3	6	3				23
II b	59	114	114	49	24	6	11	2	382
II c	1234	946	423	124	55	19	9	4	2765
III a	1	7	3	4		2			17
III b	36	84	88	48	20	6	3	2	288
III c	803	759	330	124	33	13	5	2	2014
IV a	34	120	143	112	56	21	11	5	506
IV b	140	144	55	25	11	2	3		387
IV c	212	338	329	147	75	32	12	1	1086
IV d	2557	691	149	34	15	7	1		3611
総計	5191	3400	1789	747	326	120	64	21	15225

分類	Ⅳ (Ⅳ～Ⅴ) 層								総計
	1.0~2.25cm	2.26~4.00cm	4.01~6.25cm	6.26~9.00cm	9.01~12.25cm	12.26~16.00cm	16.01~20.25cm	20.26~25.00cm	
I a	1	1	1	1	1				6
I b	1	11	8	5	6				37
I c	14	12	16	13	7	2	2	2	70
II a		1	3		1				5
II b	5	15	13	12	4	6	3	2	60
II c	130	97	63	26	13	3	3	2	339
III a									2
III b	1	18	12	7	3	4	1		48
III c	66	77	38	23	11	6	2	1	288
IV a	10	18	29	27	16	6	2	5	114
IV b	4	18	10	8	3		1		45
IV c	32	61	52	36	23	4	2	2	215
IV d	212	96	27	11	3	2			351
総計	475	425	274	169	91	37	16	14	1516

分類	Ⅴ層								総計
	1.0~2.25cm	2.26~4.00cm	4.01~6.25cm	6.26~9.00cm	9.01~12.25cm	12.26~16.00cm	16.01~20.25cm	20.26~25.00cm	
I a	1	1	1	1	1				4
I b	3	4	9	13	17	12	5	6	72
I c	12	13	26	21	18	8	6		104
II a	2	1	1	1	2				7
II b	2	7	11	7	13	7	4	1	56
II c	90	98	64	47	32	19	7	2	365
III a			4		1	1			6
III b	3	5	10	14	5	10	3	2	58
III c	45	73	51	22	25	18	6	1	243
IV a	6	27	37	22	13	10	5	1	123
IV b	28	25	19	19	9	4	6	2	112
IV c	49	91	86	62	27	14	12	2	343
IV d	283	164	62	22	10	1	1	1	544
総計	524	509	380	251	173	105	55	18	2036

第175図 フレイク分布、分析

【石材】頁岩である。

【アスファルトの付着】見受けられない。

フレイク（第2分冊第244・245図、写真図版290）

【出土位置・層位】調査区の全域、ほぼ全ての遺物取り上げグリッドから出土している。ただし出土点数については、グリッドによって、大きな差が見受けられ、Ⅴ層では遺3～5・14周辺、Ⅲ層では遺232～238周辺に集中する（第175図左上）、各層、非常に多くのフレイクが出土しているが、中でもⅢ層から出土するものが多い。

【分類毎の出土点数】Ⅰa類34点、Ⅰb類283点、Ⅰc類570点、Ⅱa類35点、Ⅱb類498点、Ⅱc類3456点、Ⅲa類25点、Ⅲb類394点、Ⅲc類2463点、Ⅳa類743点、Ⅳb類549点、Ⅳc類1630点、Ⅳd類4545点である。分類基準である打点・打面の不明なⅣa類～Ⅳd類は除くと、Ⅱc類、Ⅲc類が圧倒的多く、またⅠa類、Ⅱa類、Ⅲa類は極端に少ないと言える。この点から出土したフレイクは自然面を打面とするものあるいは自然面自体が残るものは少なく、多くが複雑に剥離された、剥離作業の進んだ段階で排出されたものであると推測できる。

【形態の特徴】3878はⅠa類、3879はⅢb類、3880はⅠb類、3881はⅡa類、2882はⅢc類、3883はⅢb類、3884はⅣa類である。

【大きさ・重量】大きさは概ね長幅10～100mm大の範疇に収まるが、100mmを超えるフレイクも少なくない。ピークは30～50mmである。重量は0.1g前後から100gまで見受けられ、100gを超えるものも少ないが見受けられる。ピークは5～10gである。

【石材】13種の石材を確認した（第175図）。頁岩が9割近くを占めており、それに珪質頁岩、赤色頁岩が次ぐ。また玉随、閃緑岩も少なくない。頁岩以外の石材は、石核が出土していないので、遺跡外から搬入したと推測する。他に特筆すべき点としては黒曜石が一定量出土していることである。このうち遺構外出土の16点（3885～3900）は第245図に掲載し、あわせて産地同定分析を行っている（第八章-2）。黒曜石はいずれも小片で、Ⅳ類に帰属するものがほとんどである。3886（Ⅰb類）や3889（Ⅱc類）は剥離の状態が観察できたが、このようなものは少ない。また2点（3901・3902）、水晶製のフレイクが出土している。

【アスファルトの付着】見受けられない。

石製品

軽石製石製品（第2分冊第245図、写真図版291）

【出土位置・層位】調査区の北側に偏る傾向がある。Ⅲ～Ⅴ層である。

【形態の特徴】細分はしていないが、楕円形と隅丸方形のものが見受けられる。

楕円形のもは球状のもの（3903）と扁平なもの（3904）がある。

隅丸方形は扁平なもの（3905）のみ見つかっている。

【大きさ・重量】長さ10cm前後、幅4～6cmの範疇である。概ね大きさはほぼ同じであるのが特徴ともいえる。重量は10～50gまで様々である。

【石材】灰白色の軽石および、黒色の安山岩を素材とする。前者は十和田湖系の軽石と考えられ、後者は岩手山系である。掲載した3点は全て十和田湖系の軽石で、ほかの遺構内出土の軽石製石製品も同様である。

【アスファルトの付着】見受けられない。

石棒・石刀・石剣（第2分冊第246～248図、写真図版291・292）

【出土位置・層位】数点を除き、ほとんどが調査区南側から出土している（第176図）。出土層位はⅢ層が主体である。

【分類毎の出土点数】石棒20点、石刀1点、石剣5点である。形態と出土層位から石棒の帰属する時期は中期と晩期に分けられ、石刀、石剣は晩期のみと推測する。

【形態の特徴】3906・3907は棒状を呈する石棒で、縄文時代中期に帰属すると推測する。3906は完形で部分的に研磨され、また器面全体に窪んでいる（敲打痕?）。3907は欠損品で、器面に磨痕（研磨痕?）や敲打痕が残る。3908～3910は大型の石棒の破片で、時期は縄文時代晩期か。3908は頭部の破片である。3909・3910は体部の破片で、全体に敲打痕が残るので未成品と推測する。

3911～3924は細身の石棒で全て破片である。縄文時代晩期に帰属するものと推測する。3911は頭部片で、全体に敲打痕が残り、未成品と推測する。3812は頭部の剥片で、頭部下に沈線が刻まれるが、全体に敲打痕が残る。3913～3924は体部および先端部の破片である。3913・3918は体部に浅い窪みが巡るが、ほかは直線的である。3924は先端部に敲打痕が残る。

3925は石刀で先端部が欠損する。頭部を算盤玉状に整形し、体部はわずかに曲線を描いている。

3926～3931は石剣である。いずれも頭部側を欠損している。また両側面を鋭利に整する。3926～3928は細身で、3929～3931は大型の石剣である。3931は未成品と推測する。

【石材】14種の石材を確認した。半数近くが粘板岩で、ホルンフェルス、頁岩がそれに次ぐ。どれも遺跡周辺では採集できないので、北上山地で採集したものと推測するが、1点奥羽山脈系の安山岩が見受けられた。

【アスファルトの付着】見受けられない。

石製品（第2分冊第248・249図、写真図版292・293）

【出土位置・層位】調査区南側から多く出土している（第177図）。出土層位はⅢ層が主体である。

【形態の特徴】形態の特徴から、下記のように細分できる。なお名称については、日本考古学協会2016に準拠している。

3932は独鈷形石製品で、一端が欠損する。概ね県内から出土する独鈷形石製品と同形態（日本考古学協会2016）で、括れと端部ともに厚みがある。

3933・3934 は円盤形石製品で、3933 は側面全周を敲打し整形する。3934 は明瞭ではないが側面が研磨により整形されている。

3935 は翡翠製の大型大珠である。遺4、V b 層から出土しており、このグリッドおよび周辺から出土する土器の時期から縄文時代中期中葉～後葉（大木8a式～8b式期）に帰属するものと推測する。直径が約3.5cmで、県内から出土している翡翠製大珠の中では小型の方である。中央が穿孔されているが、両面から半分ずつ穿孔し、わずかに中央でずれが生じている。3936 も翡翠製で、形態から勾玉と判断した。こちらは遺234、Ⅲ層から出土しており、また同グリッドから出土する土器の時期から縄文時代晩期（大洞BC式期ころか）と推測する。中央に穿孔があり、側面に刻みが施されている。もう片方の端部は欠損したのか、元々破損している翡翠を素材とし、整形しなかったのか、定かではない。なお3935・3936 についてはX線マイクロアナライザーを使った定量分析を行っており、両者とも糸魚川産の翡翠であることが分かっている（第Ⅷ章-3）。

3937 は琥珀玉の破片である。後述する遺17、V b 層から出土した琥珀片の中に1点のみ混じっていた。出土位置・層位から縄文時代中期後葉から末葉に帰属するものと推測する。方形の形態を呈し、中央が穿孔されているが約半分が欠損している。周辺から出土した琥珀の破片と違い、硬い。

3938 は環状石製品で側面にも穿孔しようとした痕跡がある。3939 は複数孔石製垂飾と考える。形態が特徴的で獣歯を模したものか。3941・3943・3946 も複数孔石製垂飾である。扁平で細長の礫を素材とする。3946 は全体に整形時の研磨痕が残る。また3942 は上記の複数孔石製垂飾と形態が類似するが、穿孔は1箇所である。3940 は円形の石製垂飾である。

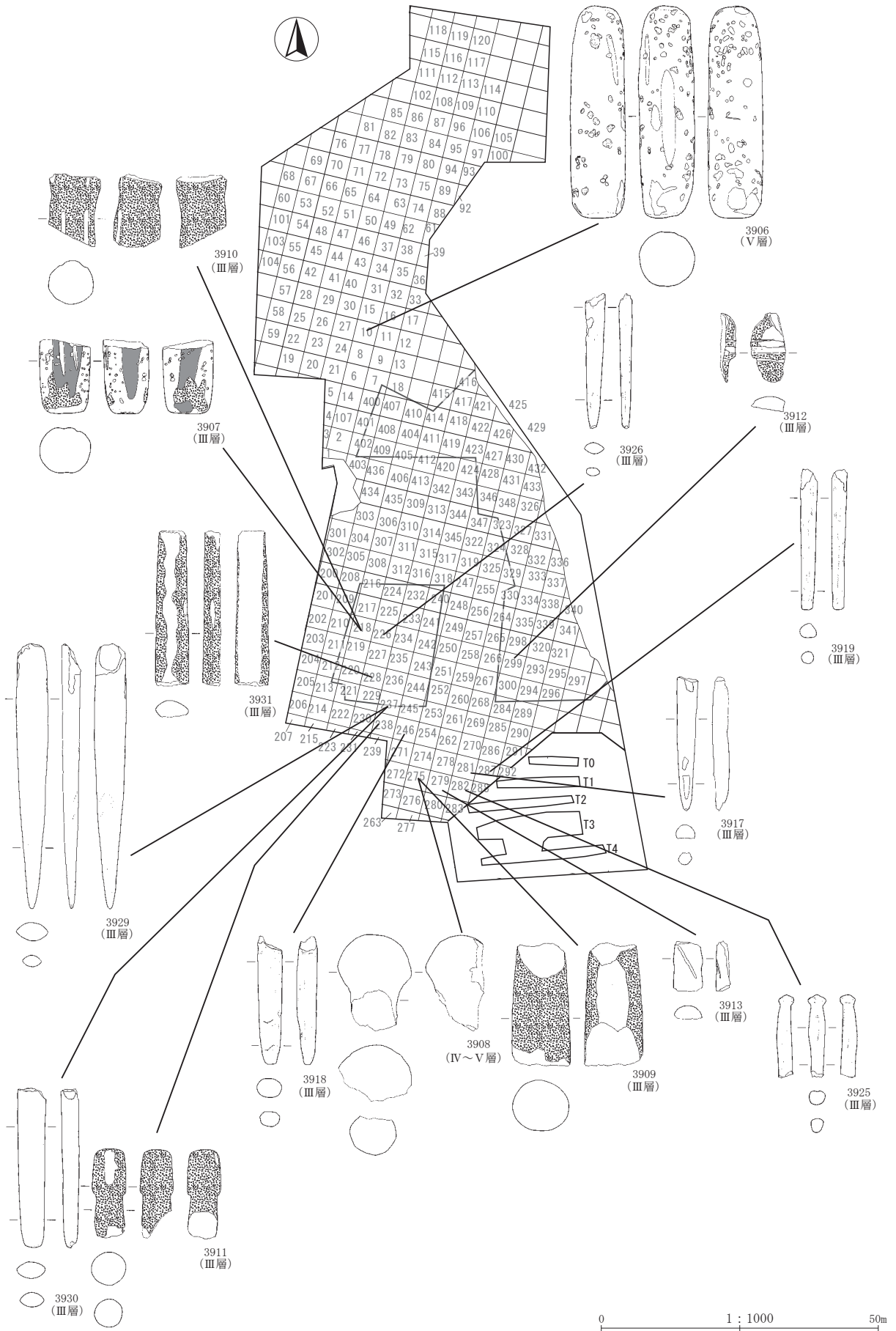
3944 は有溝石製品で、球状を呈する。

3945 も複数孔石製垂飾りで、穿孔部が欠損する。上記の複数孔石製垂飾とは形態が異なり、扁平な半円状を呈し、片面に文様が刻まれる。全面、研磨され光沢を帯びる。

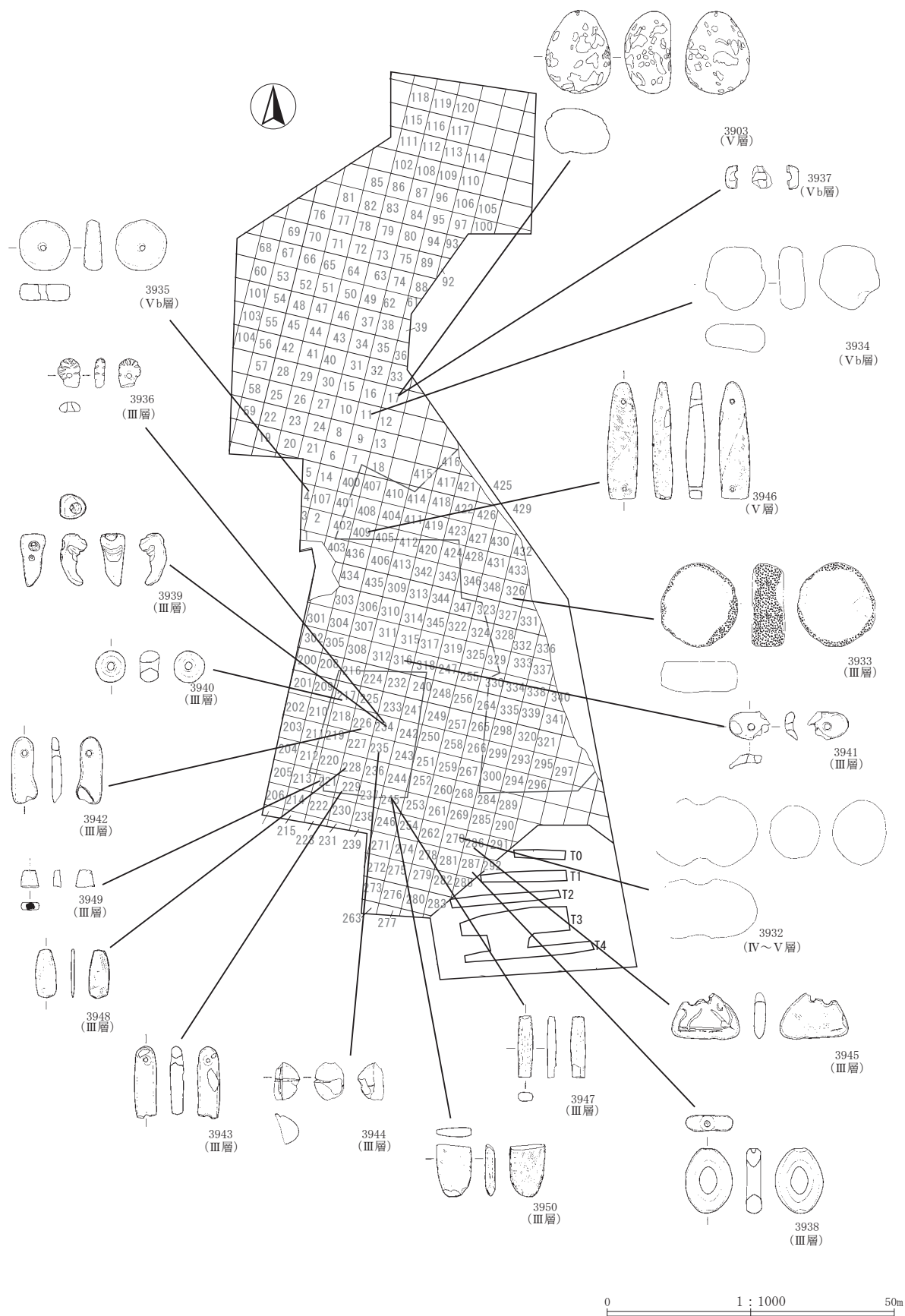
3947～3950 は板状石製品である。いずれも整形時の研磨痕が残る。

【石材】 各種、形態や大きさが異なるので、石材も一様には考えられないが、上述の翡翠は別にして、滑石や頁岩が多く、周辺よりも北上山地に採集場所があるものが多い。ただ凝灰岩も多く、整形しやすさと、手に入れやすさから選択されている可能性がある。

【アスファルトの付着】 3949 は欠損部に付着しており、補修のためと推測する。



第176図 石製品分布1



第177図 石製品分布2

その他

琥珀片（写真図版 294・295）

【出土位置・層位】 調査区北側のV層および遺構内で8箇所、調査区南側Ⅲ層で2箇所、数片ずつの琥珀片が出土している。前者は縄文時代中期、後者は縄文時代後晩期に比定されるものと推測する。

【形態の特徴】 図化はしていないが、写真図版 294・295 に出土した範囲ごとに写真掲載している。いずれも1～2mm大の破片で、非常に脆く、壊れやすい。故意に整形した痕跡はない。前述の琥珀玉(3937)の素材となった琥珀は硬いので、使い分けがなされている可能性がある。

【重量】 第2分冊遺物観察表第9表にそれぞれの重量を記しているが、見つかった範囲ずつまとめて計量しても、最も多いもので1g強、あとは1gに満たない。

【産地】 産地同定を行っていないが、久慈産ではないかと推測する。

【用途】 不明である。

アスファルト塊（写真図版 295）

【出土位置・層位】 遺 218、Ⅲ層から1点出土した。層位から縄文時代後晩期に帰属するものと推測する。

【形態の特徴】 図化はしていないが、写真図版 295 に写真掲載している。角の丸い塊状である。光沢を帯びる部分と、無光沢のままの部分がある。整形した痕跡はないが、端部が丸い形状を呈するので、元々、何かに包んで収納してあった可能性がある。

【大きさ・重量】 大きさは7cm大、厚さ4cmを測り、重量97.92gである。県内から出土しているアスファルト塊と比べ（菅野 2017）、決して小さくないが、格別大きいものでもない。山田町の沢田 I 遺跡では400gを超えるアスファルト塊（中期中葉）が出土しており、それと比べれば、かなり小さいと言える。

【産地】 不明である。

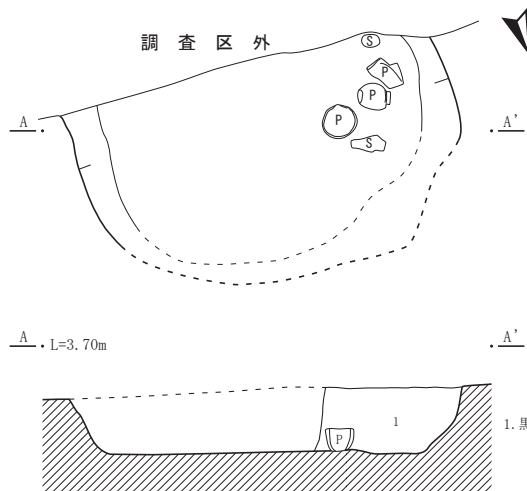
2 古代以降

(1) 土 坑

44号土坑（第178図、写真図版33・296）

[位置・検出状況] 調査区南側 I D 5d、I D 6d グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。本遺構は南側の一部が調査区外に及んでいる。また本遺構は縄文時代の包含層（Ⅲ～Ⅴ層）を掘り下げる際に検出した遺構であり、北壁とその周辺の床面を掘りすぎており、消失している。

[その他の遺構との重複] なし。

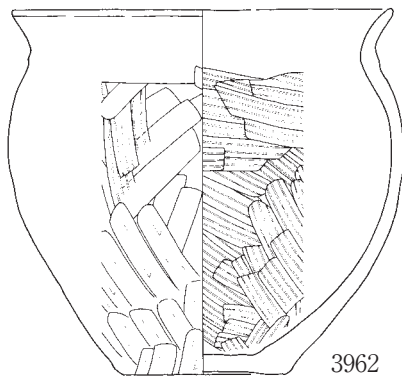


土師器・須恵器出土状況

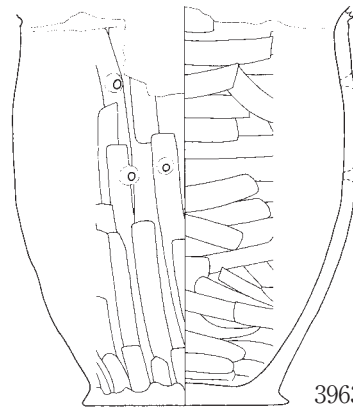


1. 黒色シルト(10YR1.7/1) 粘性強 しまり密 焼土ブロック少量、風化花崗岩粒微量、10~30cm程度の花崗岩礫少量含む。

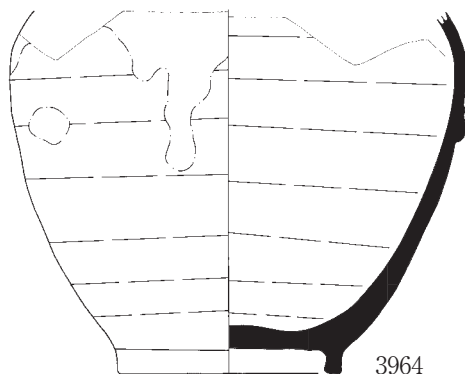
0 1 : 40 2m



3962



3963



3964

0 1 : 3 10 cm

第178図 44号土坑・出土遺物

[平面形] 不整な楕円形と推定される。 [規模] 201 × (120) cm、深さ 35cm

[埋土] 1層のみ確認した。黒色シルトを主体とし、炭化物が混入する。

[底面・壁] VI層面を底面と推定した。平坦である。壁は東、西壁が残存する。緩やかに広がりながら立ち上がる。

[出土遺物] 底面から土師器 2点 (3962・3963)、須恵器 1点 (3964) が出土している。いずれも残りが良い土師器、須恵器である。第 178 図に示した出土状況写真の通り、出土状態からは故意に置かれたような痕跡はないが、3964 のみは遺構底面に正位にして置かれたようにも見受けられる。

[性格] 不明。

[時期] 出土した土器の年代から平安時代 (10 世紀ごろか) と判断した。

(2) 遺構外出土遺物

古代 (第 2 分冊第 250 図、写真図版 296・297)

土師器・須恵器、また羽口・鉄床石が出土している。

3965～3968 は土師器坏である。3965 は外内面にナデ整形を施し、底面にはケズリ痕が残る。3966～3968 は口縁部が欠損する。いずれもロクロ整形である。

3969・3970 は大型甕の胴部片である。3969 は外面に、3970 は内外面にタタキメが残る。

3971・3972 は羽口の破片で、外面に鉄滓が融着しており、先端に近い部分と推定する。

3973～3975 は鉄床石である。3973 は小型の楕円形礫を素材とし、片面には磨痕が見受けられ、その縁辺に 3 cm 大の鉄滓が付着する。縄文時代の敲磨器類を転用 (?) したもののか。3974 は半分欠損するが、本来円形で大型の礫を素材とするものと推定する。中央は穿孔され、両面とも穿孔を通して、溝を 1 条ずつ穿っており、その溝内に鉄滓が融着する。3975 は大型礫で端部全周を打ち欠いている。その側面の一部に鉄滓が付着している。いずれも形態がばらばらで、機能が推測できない。

中世 (第 2 分冊第 251 図、写真図版 297)

中世陶器 1 点 (3976) が出土している。壺の口縁部で大きく外へと開く器形で、口縁部下に緩い段を有する。1220 年代 (第 5 型式) に帰属するものと推定する。

近世 (第 2 分冊第 252 図、写真図版 297)

陶磁器、石臼、が出土している。

3877～3988 は陶磁器片で、小片が多い。出土地点、層位は様々であり、流れ込みによる混入と考える。

陶器は碗の破片が多く、大堀相馬産 (3977・3979、19 世紀代)、瀬戸産 (3978、19 世紀代)、東北在地系 (3980、18 世紀代) がある。また東北在地系には皿 (3981・3982 ?、18～19 世紀代) も出土している。また肥前産の染付皿が破片 (3984～3988、18 世紀代、3989、20 世紀代) で出土している。

3991 は石臼の片側である。花崗岩製で、内側に径 2 cm の穴が穿たれており、内側には孔から放射状に 4 本 1 単位で溝が穿たれている。

近代～現代 (第 2 分冊第 253 図、写真図版 298)

銃弾 (米軍戦闘機用) とガラス製品が出土している。

3992～3996 は戦闘機用の銃弾で、12.7mm 弾である。長さ 6 cm、最大径は全て 13mm に統一されている。体部の中央に溝が 2 条刻まれるもの (3992・3993・3996) と 1 条刻まれるもの (3994・3995) がある。

3992 以外は先端が破損あるいは、へこんでいる。ただし使用によって破損したものかは定かではない。また第2分冊第253図の中央に、同時に出土した20mm弾を掲載した。参考として写真掲載したが、現物は内部に火薬が残存する可能性があり、室内整理作業期間に自衛隊に引き渡して、現存しない。なお、これらの戦争遺物については、加藤昭雄氏によると本遺跡の場所が戦時中、石油貯蔵基地として利用されており、それが1945年8月9・10日に、この石油貯蔵基地をめがけて米軍艦上機がおびただしい攻撃を行っている（加藤2006）。出土した銃弾はその際のもと考え、したがって3992～3996ならびに20mm弾は米軍艦上機から発射されたものと推測する。

3997は現代のガラス製品で、ビール瓶である。体部に「Sapporo ☆ Beer」と浮き彫り状に描かれている。

VIII 自然科学分析

1 浜川目沢田 I 遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

浜川目沢田 I 遺跡は、岩手県下閉伊郡山田町大沢浜川目地内 (北緯 39° 29′ 5″、東経 141° 59′ 9″) に所在し、海岸 (山田湾) にほど近い丘陵東側に広がる緩斜面地に立地する。測定対象試料は、竪穴住居跡等から出土した炭化物 5 点である (表 1)。

2 測定の意義

試料が出土した遺構等の年代を検討する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) δ ¹³C は、試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C 年代は δ ¹³C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。¹⁴C 年代と誤差は、

下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1 \sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2 \sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

試料の ^{14}C 年代は、No.1、2、4 の 3 点の値が $4090 \pm 30\text{yrBP}$ (No.4) から $4010 \pm 30\text{yrBP}$ (No.2) の狭い範囲にまとまる。他の 2 点はこれら 3 点から離れた値で、No.3 が $2830 \pm 30\text{yrBP}$ 、No.5 が $3360 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、古い方から順に No.4 が縄文時代中期中葉から後葉頃、No.1 が中期後葉から末葉頃、No.2 が中期末葉頃、No.5 が後期中葉頃、No.3 が晩期中葉頃に相当する (小林編 2008)。

表 1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-142550	No.1	11 号住居跡炉 3 層	炭化物	AAA	-26.46 ± 0.27	4060 ± 30	60.36 ± 0.19
IAAA-142551	No.2	遺 238 IV~V 層	炭化物	AAA	-25.45 ± 0.25	4010 ± 30	60.67 ± 0.21
IAAA-142552	No.3	23 号住居跡 埋土上位	炭化物	AAA	-25.57 ± 0.27	2830 ± 30	70.34 ± 0.23
IAAA-142553	No.4	2 号住居跡伏壘 1 埋土中	炭化物	AaA	-25.09 ± 0.26	4090 ± 30	60.08 ± 0.20
IAAA-151685	No.5	遺 276 IV 層	炭化物	AAA	-22.70 ± 0.63	3360 ± 30	65.85 ± 0.21

[#7061, 7630]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-142550	4,080 \pm 30	60.18 \pm 0.19	4,055 \pm 25	4571calBP - 4516calBP (46.7%) 4471calBP - 4447calBP (21.5%)	4784calBP - 4767calBP (4.6%) 4612calBP - 4595calBP (2.9%) 4586calBP - 4495calBP (56.7%) 4490calBP - 4437calBP (31.1%)
IAAA-142551	4,020 \pm 30	60.61 \pm 0.21	4,014 \pm 27	4519calBP - 4463calBP (54.7%) 4452calBP - 4438calBP (13.5%)	4530calBP - 4420calBP (95.4%)
IAAA-142552	2,840 \pm 30	70.26 \pm 0.22	2,825 \pm 26	2958calBP - 2881calBP (68.2%)	2997calBP - 2861calBP (95.4%)
IAAA-142553	4,090 \pm 30	60.07 \pm 0.19	4,092 \pm 26	4784calBP - 4766calBP (12.0%) 4615calBP - 4527calBP (56.2%)	4807calBP - 4760calBP (19.7%) 4698calBP - 4672calBP (5.2%) 4649calBP - 4520calBP (69.0%) 4462calBP - 4452calBP (1.5%)
IAAA-151685	3,320 \pm 20	66.16 \pm 0.20	3,356 \pm 26	3633calBP - 3571calBP (68.2%)	3688calBP - 3662calBP (6.6%) 3645calBP - 3556calBP (84.8%) 3532calBP - 3508calBP (4.0%)

[参考値]

試料の炭素含有率はすべて 60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

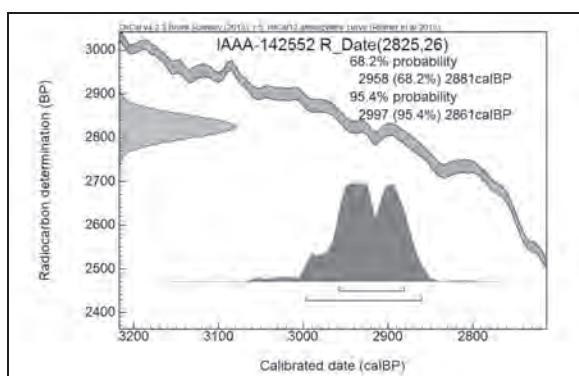
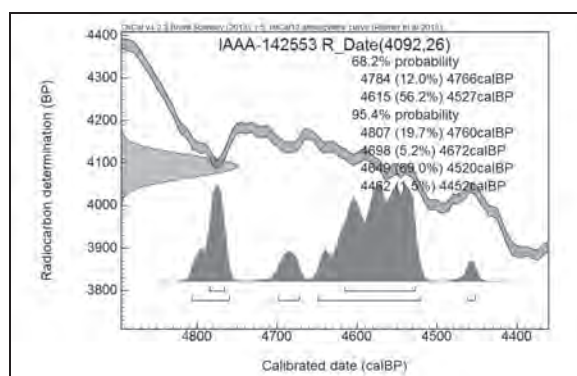
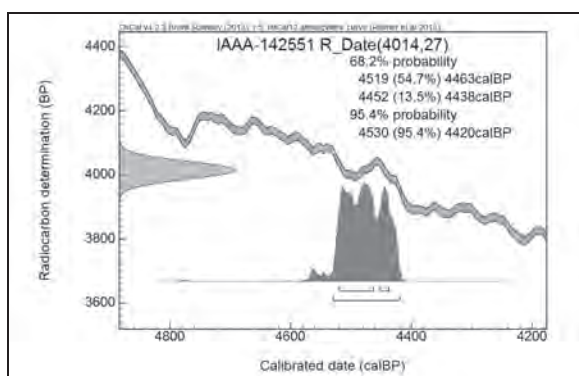
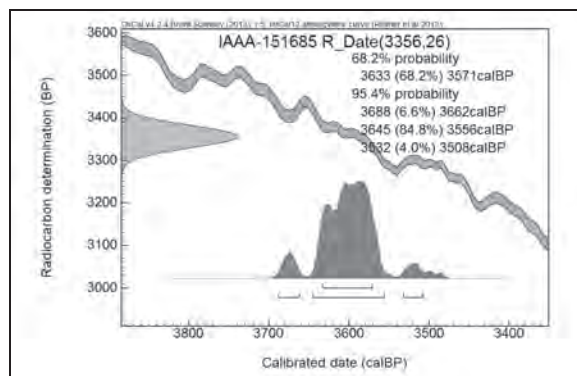
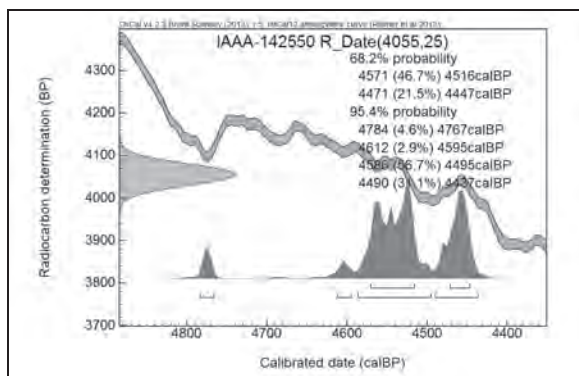
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

1 浜川日沢田 I 遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)



[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

2 浜川目沢田 I 遺跡出土黒曜石製遺物の産地同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県山田町大沢浜川目に所在する浜川目沢田 I 遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡、土坑等の遺構や土器、石器等の遺物が検出されており、縄文時代中期および後晩期を中心とする集落跡と考えられている。本分析調査では、遺跡から出土した黒曜石製遺物の石材産地に関わる情報を得ることを目的とし、蛍光 X 線分析装置による測定を行った。

1 試料

分析に供された試料は、浜川目沢田 I 遺跡より出土した縄文時代中期から後晩期の遺物とされる、黒曜石製石器 51 点である。各試料の詳細は試料一覧表（表 1）に記したので参照されたい。

表 1 分析試料一覧

試料番号	掲載番号	出土地点	出土層位	器種
1	170	2号住居	埋土下位	石錐
2	187	2号住居	埋土下位	フレイク
3	-	2号住居	埋土下位	フレイク
4	35	1号住居	埋土上位	フレイク
5	36	1号住居	埋土上位	フレイク
6	332	6号住居	検出面上	フレイク
7	-	6号住居	埋土下位	チップ
8	245	4号住居	埋土下位	フレイク
9	3893	遺 4	V b層	フレイク
10	3897	遺 5	V b層	フレイク
11	-	遺 5	V b層	チップ
12	3890	遺 16	V層	フレイク
13	3891	遺 32	V層	フレイク
14	3888	遺 34	V層	フレイク
15	-	遺 115	V層	チップ
16	-	遺 115	V層	チップ
17	3892	遺 115	V層	フレイク
18	-	遺 115	V層	チップ
19	-	遺 115	V層	フレイク
20	2894	遺 115	V層	フレイク
21	3887	遺 115	V層	フレイク
22	-	遺 115	V層	チップ
23	-	遺 115	V層	フレイク
24	-	遺 115	V層	チップ
25	-	遺 115	V層	チップ
26	3896	遺 115	V層	フレイク

試料番号	掲載番号	出土地点	出土層位	器種
27	-	遺 115	V層	チップ
28	-	遺 118	V層	チップ
29	3502	遺 118	V層	フレイク
30	-	遺 118	V層	フレイク
31	3889	遺 118	V層	フレイク
32	-	遺 118	V層	フレイク
33	3895	遺 118	V層	フレイク
34	-	遺 118	V層	チップ
35	-	遺 118	V層	チップ
36	3886	遺 120	V層	石核?
37	-	遺 226	III層	フレイク
38	3885	遺 227	III層	フレイク
39	3898	遺 243	III層	フレイク
40	3899	遺 244	III層	フレイク
41	3731	遺 248	III層	フレイク
42	-	遺 281	IV~V層	フレイク
43	3389	遺 24	V層	石鏃
44	3396	遺 10	V層	石鏃
45	-	遺 218	III層	石鏃
46	-	遺 229	III層	フレイク
47	-	遺 273	IV~V層	フレイク
48	-	遺 281	III層	フレイク
49	-	遺 282	III層	フレイク
50	-	遺 304	カクラン層	石鏃失敗品
51	-	遺 312	III層	石錐

※掲載番号「-」は不掲載を示す

2 分析 方 法

(1) エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (EDX) による測定

本分析の特徴は、試料の非破壊による測定が可能であり、かつ多元素を同時に分析できることが利点として挙げられる。一方、非破壊分析である以上、測定は試料表面のみが対象となることから、表

表2 黒曜石原産地試料一覧

大分類	中分類	判別群	記号	該当する原産地
北海道	白滝	白滝1群	白滝1	明石山頂、八号沢、白滝山頂、明石山頂
北海道	白滝	白滝2群	白滝2	八号沢、ホロカ、黒曜の沢、でんぶん沢、あじさいの滝
北海道	赤井川	赤井川	赤井川	赤井川、土木川、曲川
北海道	豊浦	豊浦	豊浦	豊泉
北海道	置戸	置戸1群、2群	置戸1、置戸2	置戸山系
北海道	十勝	三股	三股	十勝三股、十三の沢、タウシュベツ川、中阿寒
北海道	名寄	名寄	名寄	名寄布川
北海道	旭川	旭川	旭川	高砂台・雨粉台・春光台
北海道	ケシヨマップ	ケシヨマップ	ケシヨ	ケシヨマップ川
東北	深浦	深浦	深浦	岡崎浜、深浦公園、日和見、六角沢、八森山
東北	岩木山	出来島	出来島	出来島
東北	男鹿	男鹿1群	男鹿1	金ヶ崎、脇本
東北	男鹿	男鹿2群	男鹿2	脇本
東北	月山	月山1群	月山1	西川町志津、朝日町田代沢など
東北	月山	月山2群	月山2	鶴岡市今野川、鶴岡市大綱川
東北	北上	北上1群	北上1	水沢折居、花泉日形田ノ沢、雫石小赤沢
東北	北上	北上2群	北上2	水沢折居、花泉日形田ノ沢、雫石小赤沢
東北	北上	北上3群	北上3	水沢折居
東北	湯ノ倉	湯ノ倉	湯ノ倉	湯ノ倉
東北	秋保	秋保1群	秋保1	秋保土蔵
東北	秋保	秋保2群	秋保2	秋保土蔵
東北	色麻	色麻	色麻	色麻町根岸
東北	塩竈	塩竈港群	塩竈	塩竈市塩竈漁港
東北	小泊	小泊	小泊	青森小泊村折腰内
関東	天城	柏峠1群、2群	柏峠1、柏峠2	天城柏峠
関東	箱根	畑宿	畑宿	箱根畑宿
関東	箱根	鍛冶屋	鍛冶屋	箱根鍛冶屋
関東	箱根	黒岩橋	黒岩橋	箱根黒岩橋
関東	箱根	上多賀	上多賀	箱根上多賀
関東	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯	箱根芦ノ湯
関東	神津島	恩馳島	恩馳島	恩馳島、長浜
関東	神津島	砂糠崎	砂糠崎	砂糠崎、長浜
関東	高原山	高原1群	高原1	甘湯沢、桜沢
関東	高原山	高原2群	高原2	七尋沢
信州	霧ヶ峰	男女倉1群	男女1	ぶどう沢、牧ヶ沢、高松沢、本沢下
信州	霧ヶ峰	男女倉2群	男女2	ぶどう沢、牧ヶ沢
信州	霧ヶ峰	男女倉3群	男女3	ぶどう沢、牧ヶ沢、高松沢、本沢下
信州	霧ヶ峰	鷹山系	鷹山	星糞峠、鷹山
信州	霧ヶ峰	西霧ヶ峰系	星ヶ塔	星ヶ塔、星ヶ台
信州	霧ヶ峰	和田峠1群	和田1	古峠、土屋橋北
信州	霧ヶ峰	和田峠2群	和田2	丁子御領、芙蓉パーライト、鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠3群	和田3	小深沢、芙蓉パーライト、新和田トンネル、土屋橋北、土屋橋東、18地点、24地点、26地点、丁子御領、鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠4群	和田4	小深沢、芙蓉パーライト、新和田トンネル、土屋橋北、土屋橋西、土屋橋東、18地点、24地点、26地点、丁子御領、鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠5群	和田5	24地点、25地点、26地点、小深沢
信州	霧ヶ峰	和田峠6群	和田6	小深沢、芙蓉パーライト、24地点、25地点、26地点、土屋橋西、土屋橋東
信州	霧ヶ峰	和田峠7群	和田7	東餅屋、芙蓉パーライト、古峠、丁子御領、鷲ヶ峰、土屋橋北
信州	霧ヶ峰	和田峠8群	和田8	25地点、26地点、土屋橋東
信州	北八ヶ岳	横岳系双子池	双子池	双子池
信州	北八ヶ岳	横岳系亀甲池	亀甲池	亀甲池 搦鉢池
信州	北八ヶ岳	冷山・麦草系	麦草系	冷山、麦草峠、双子池、渋ノ湯、八ヶ岳7、八ヶ岳9、長門美しの森
信州	北八ヶ岳	中ツ原	中ツ原	中ツ原 (遺跡試料)
東海・北陸	新潟	新発田	新発田	新発田板山
東海・北陸	新潟	新津	新津	新津金津

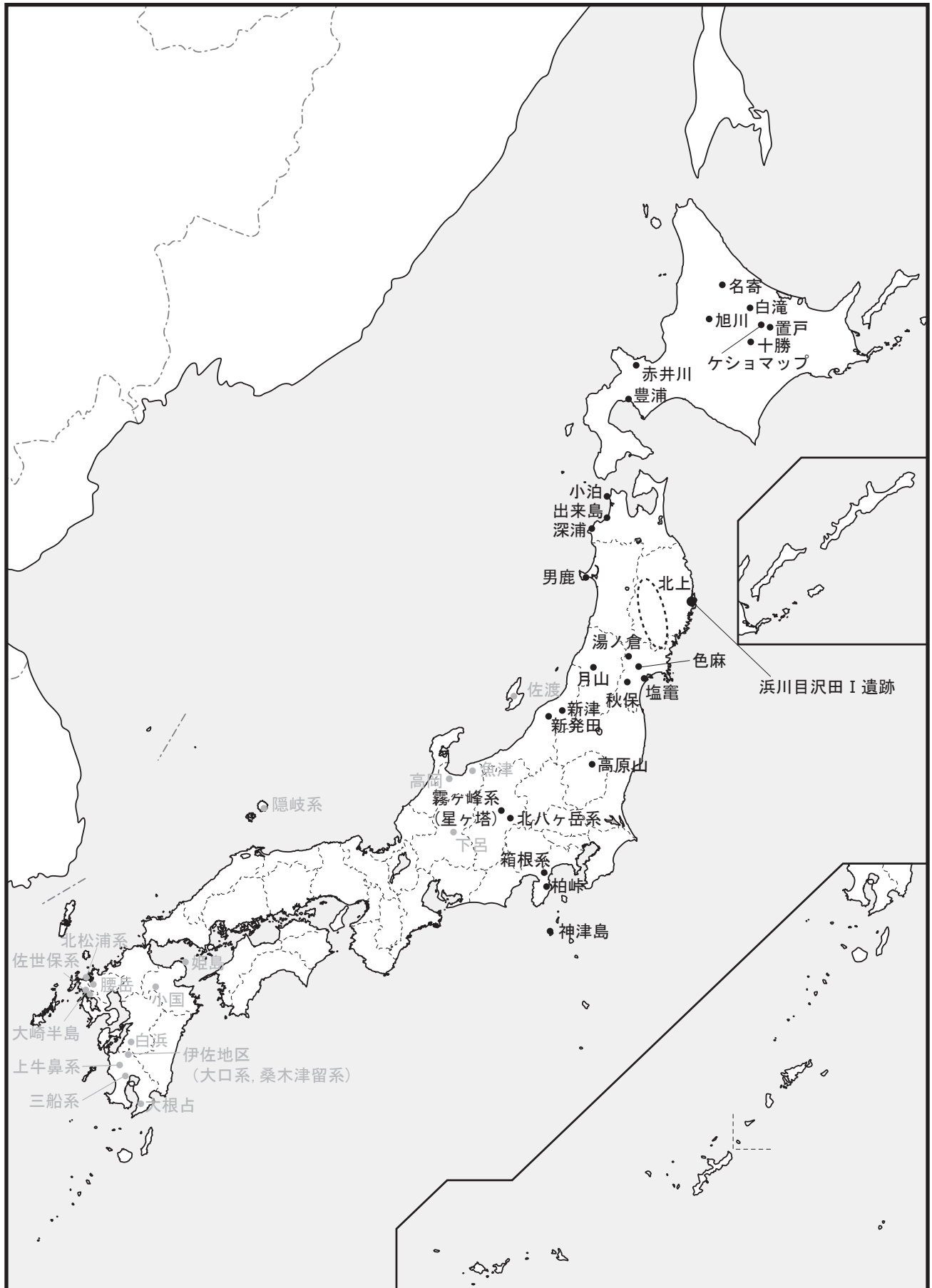


図1 黒曜石産地一覧 (淡色の産地は今回の判定対象外の地域)

面が汚れた試料や風化してしまっている試料については試料の洗浄あるいは測定面の選択が必要となる。本分析では試料が貴重な遺物であることから、汚れが少なく、風化が進んでいない面を選択して測定を行っている。ただし、表面の風化、汚れが目立つ場合は、メラミンスポンジを用いて洗浄したあと分析を実施している。

本分析で使用した装置は、セイコーインスツルメンツ製エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (SEA2120L) であり、X線管球はロジウム (Rh)、検出器は Si (Li) 半導体検出器である。測定条件は、励起電圧 50kV、管電流自動設定 (μ A)、測定時間 300 秒、コリメータ (照射径) ϕ 10.0mm、フィルターなし、測定室雰囲気は真空である。測定元素は、Al (アルミニウム)、Si (ケイ素)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Mn (マンガン)、Fe (鉄)、Rb (ルビジウム)、Sr (ストロンチウム)、Y (イットリウム)、Zr (ジルコニウム) の 11 元素であり、測定試料全てにおいてマイラー膜 (PE, 2.5 μ m; ケンプレックス製 CatNo107) を介して元素X線強度 (cps) を測定した。

(2) 産地推定方法

産地推定は、望月 (2004 など) による方法に従い、測定結果 (元素X線強度 (cps)) から、5つの判別指標値を求める。5つの判別指標値は、Rb 分率 $\{Rb \times 100 / (Rb + Sr + Y + Zr)\}$ 、Sr 分率 $\{Sr \times 100 / (Rb + Sr + Y + Zr)\}$ 、Zr 分率 $\{Zr \times 100 / (Rb + Sr + Y + Zr)\}$ 、 $Mn \times 100 / Fe$ 、 $\text{Log} (Fe/K)$ である。

一方、産地推定に必要な原産地の資料に関しては、望月 (2004) で用いられている原産地試料の分析データを使い、原産地判定用資料を作成する。産地推定に用いた黒曜石原産地を図 1 に示す。

原産地試料の各分析データを、Rb 分率と $Mn \times 100 / Fe$ 、Sr 分率 - $\text{Log} (Fe/K)$ についてグラフ化する。グラフの産状ならびに二次元正規分布密度関数の結果から、原産地を元にした判別群を設定し、その名称ならびに判別群と原産地との関係を表 2 に示す。

各判別群について、二次元正規分布密度関数から計算した、重心より 2σ (約 95%) の範囲を示す楕円を上記のグラフに書く (原産地試料の各分析データは図が煩雑になるため割愛する)。これに、遺跡出土試料の分析結果を重ね合わせると、各判別群の範囲楕円内に収まるかどうか視覚的にわかるため、産地推定の指標の一つとなる。

一方、各判別群の 5つの判別指標値について、基本統計量 (平均値や分散、共分散など) を求める。さらに、各判別群と遺跡出土試料とのマハラノビス平方距離を計算する。マハラノビス平方距離による判別は、先に述べた 5つの判別指標値を使う方法 (望月、2004 など) と、基本的に Zr 分率を除くグラフに使った 4つの判別指標値を使うが、群間の判別が難しい場合に Zr 分率を加える方法 (明治大学古文化財研究所、2009 など) がある。今回は、4成分、5成分双方の結果を掲載するが、判別には前述したグラフとの親和性などから、後者の方法を参考にする。測定試料と各判別群全てについて、4成分、5成分のマハラノビス平方距離を求め、測定試料に近いものから 3判別群を表に示す。これらについてカイ二乗検定を行い、99.5% の範囲に入った場合を「True」、入らなかった場合を「False」とする。

3 結果および考察

元素X線強度 (cps) および判別指標値を表 3 に示す。また、Rb 分率と $Mn \times 100 / Fe$ 、Sr 分率 - $\text{Log} (Fe/K)$ について、原産地試料の重心から 2σ (95%) の範囲を記したグラフに、各試料の結果を重ね合わせた図を図 2・3 に記す。表 4 には、測定試料に近いものから 3 原産地分のマハラノビス平方距離を示し、これらについてカイ二乗検定を行なった結果を示す。合わせたものを表 5・6 と、図 4・5 に

示す。

図2・3に示すように、今回分析を実施した51点の産地は、北上系が26点、男鹿系が16点、月山系が5点、湯ノ倉、星ヶ塔、置戸が各1点、判別不能が1点と推定された。このうち、星ヶ塔は長野県、置戸は北海道で本地域からは遠い。双方とも古くから知られた大きな原産地であり、本遺跡が所在する地域まで流通していた可能性はあるが、伝播の過程については周辺の遺跡から出土した黒曜石製遺物についても同様の分析資料を蓄積し、検討する必要がある。

また、図では月山2の円の中に入っているようにみえるが、判定表で月山1になっているのは、2つの円が接していることに加え、マハラノビス平方距離を求める際にRb、Srの数値に重みをおいていることによる。

なお、北上系等の中にはカイ二乗検定でFalseのものもあるが、付近に該当する産地がないことから、4成分の第一候補に示されたもので良いと思われる。No.9は図の上では北上3に近いが、北上3は計測数が少なく、統計学的な検討ができなため、表では北上3?としてある。

引用文献

明治大学古文化財研究所 2009 『蛍光 X 線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定 - 基礎データ集 1 -』 (294p)

望月明彦 2004 「和野 I 遺跡出土黒曜石製石鏃の石材原産地分析」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 452 集

和野 I 遺跡発掘調査報告書』 (476-480p)

表3 スペクトル強度と判別指標値

No.	強度 (cps)											判別指標				
	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb 分率	Sr 分率	Zr 分率	Mn*100 /Fe	log (Fe/K)
1	58.97	409.22	55.71	25.92	3.22	12.69	72.44	16.09	10.47	6.16	11.41	36.46	23.73	25.85	17.52	0.114
2	66.10	459.99	49.80	21.98	3.85	10.80	83.48	10.09	12.51	5.30	10.65	26.18	32.46	27.62	12.94	0.224
3	66.07	481.75	63.41	24.85	2.96	13.61	76.07	16.33	9.61	5.59	10.86	38.53	22.67	25.62	17.89	0.079
4	62.79	451.70	57.46	26.09	3.34	14.32	79.30	18.05	10.64	6.90	12.34	37.66	22.20	25.75	18.06	0.140
5	64.04	444.98	57.56	25.46	3.21	12.52	74.22	14.51	8.94	6.09	10.43	36.30	22.36	26.10	16.87	0.110
6	75.43	549.28	72.31	30.69	3.91	16.03	89.61	17.97	10.14	7.02	11.80	38.30	21.60	25.14	17.88	0.093
7	77.59	571.43	72.66	37.53	3.47	16.11	86.56	15.55	9.62	5.94	8.30	39.46	24.40	21.06	18.62	0.076
8	65.90	452.46	60.05	24.35	3.16	13.94	81.33	16.46	10.39	6.56	11.15	36.94	23.32	25.02	17.14	0.132
9	58.02	412.36	21.60	23.67	2.41	8.42	158.10	4.64	6.16	12.77	21.68	10.26	13.62	47.90	5.33	0.865
10	71.99	562.93	41.66	34.22	6.04	8.44	182.76	7.72	9.68	6.92	21.39	16.89	21.17	46.79	4.62	0.642
11	80.35	630.29	47.33	41.76	5.66	8.52	190.16	7.85	8.88	6.77	18.30	18.77	21.25	43.78	4.48	0.604
12	63.50	436.46	57.24	24.62	3.51	12.87	71.86	15.40	10.38	5.97	10.19	36.73	24.74	24.29	17.91	0.099
13	67.95	481.32	51.74	23.12	3.87	10.76	84.24	10.24	10.94	5.10	10.76	27.65	29.53	29.05	12.77	0.212
14	66.18	457.77	62.03	25.63	3.19	14.13	77.35	16.18	9.83	5.73	10.52	38.30	23.26	24.89	18.27	0.096
15	77.55	601.13	45.68	42.28	5.54	9.01	184.46	7.67	9.67	5.91	17.98	18.61	23.45	43.60	4.89	0.606
16	82.91	647.94	52.51	45.07	6.43	9.31	207.18	7.67	9.43	5.47	19.17	18.38	22.60	45.93	4.49	0.596
17	65.96	500.34	40.59	33.84	5.59	7.31	169.76	7.51	10.57	5.79	19.88	17.17	24.16	45.44	4.30	0.621
18	81.77	640.55	52.63	45.33	6.28	9.59	202.90	7.46	8.71	5.88	18.22	18.52	21.63	45.25	4.73	0.586
19	72.65	555.77	50.73	32.17	4.03	6.47	163.66	9.75	8.55	4.43	17.62	24.16	21.18	43.67	3.95	0.509
20	65.75	501.63	41.03	31.08	4.72	7.27	159.30	7.24	9.33	5.99	21.44	16.45	21.21	48.73	4.56	0.589
21	59.67	443.22	36.84	25.29	4.91	6.48	154.41	7.40	9.99	6.13	21.08	16.59	22.39	47.27	4.20	0.622
22	77.63	610.89	48.49	34.41	6.39	8.62	195.41	7.23	10.13	5.92	20.04	16.69	23.38	46.26	4.41	0.605
23	77.06	600.73	58.84	29.79	4.94	8.82	174.37	7.69	8.51	7.32	19.82	17.73	19.64	45.74	5.06	0.472
24	89.40	694.32	51.11	40.45	6.66	9.37	216.01	7.33	9.74	5.00	16.71	18.90	25.11	43.10	4.34	0.626
25	82.49	622.47	48.33	35.17	6.93	9.02	204.25	6.23	9.12	5.80	18.57	15.67	22.97	46.75	4.41	0.626
26	59.86	453.41	38.60	24.99	4.64	6.57	152.81	7.06	9.89	6.54	18.84	16.68	23.36	44.52	4.30	0.598
27	90.58	734.42	59.10	38.61	6.12	10.81	221.64	6.95	7.77	4.49	14.91	20.37	22.77	43.72	4.88	0.574
28	81.92	632.27	50.13	34.19	5.43	8.79	183.38	6.34	7.46	6.46	16.22	17.38	20.45	44.47	4.80	0.563
29	72.17	564.15	42.66	28.26	5.41	8.30	174.80	7.65	9.76	6.78	21.05	16.91	21.57	46.52	4.75	0.612
30	77.80	607.24	50.17	33.81	6.73	9.20	201.67	8.03	10.86	5.74	21.45	17.43	23.56	46.54	4.56	0.604
31	67.06	519.49	47.88	27.85	5.38	7.32	164.98	7.77	9.98	5.75	20.12	17.82	22.88	46.12	4.43	0.537
32	77.49	626.66	50.79	32.96	6.10	9.28	195.44	8.06	9.82	6.65	19.86	18.15	22.12	44.73	4.75	0.585
33	65.14	507.89	40.79	28.11	5.69	7.48	165.75	6.65	10.59	6.35	19.56	15.41	24.54	45.33	4.51	0.609
34	72.92	576.43	44.82	30.11	5.00	9.04	173.21	6.91	8.71	7.75	20.16	15.86	20.01	46.31	5.22	0.587
35	76.01	609.50	47.73	33.36	5.50	9.23	186.18	7.63	8.24	5.74	16.64	19.95	21.53	43.52	4.96	0.591
36	59.93	464.45	38.75	22.92	4.04	6.88	144.37	7.81	9.03	7.13	20.27	17.66	20.41	45.82	4.76	0.571
37	74.08	536.58	69.03	26.25	3.91	15.04	85.44	16.50	9.91	7.03	11.14	37.00	22.24	24.99	17.61	0.093
38	61.56	437.50	47.58	16.40	3.10	10.16	77.36	9.29	9.91	4.99	10.49	26.80	28.56	30.25	13.13	0.211
39	72.75	526.23	72.83	25.01	3.77	16.08	87.48	17.94	11.23	7.43	12.26	36.72	22.99	25.08	18.39	0.080
40	67.89	497.73	41.00	27.89	5.38	7.73	174.12	6.78	9.65	5.62	22.68	15.16	21.58	50.69	4.44	0.628
41	69.49	552.63	46.43	28.14	4.91	8.57	180.28	7.77	9.74	6.34	20.16	17.65	22.13	45.82	4.75	0.589
42	67.68	510.05	69.33	17.99	3.32	8.54	77.82	14.57	3.95	6.35	11.99	39.54	10.72	32.52	10.97	0.050
43	66.71	488.11	65.71	22.96	3.66	14.79	80.05	18.55	10.25	7.01	11.52	39.19	21.66	24.34	18.47	0.086
44	60.15	470.73	39.45	23.72	4.42	7.42	153.13	7.12	8.09	6.05	19.99	17.27	19.60	48.47	4.85	0.589
45	68.82	481.34	71.56	24.45	3.66	15.30	86.97	17.21	10.80	6.80	10.76	37.77	23.70	23.61	17.59	0.085
46	50.22	383.31	19.09	41.87	4.95	7.48	254.45	2.78	15.92	3.95	24.10	5.95	34.06	51.55	2.94	1.125
47	56.17	454.34	61.04	22.91	3.08	12.93	72.91	16.94	9.99	6.85	11.92	37.07	21.86	26.09	17.73	0.077
48	55.96	450.01	48.98	19.68	3.56	10.28	79.08	10.32	11.73	5.44	10.28	27.32	31.07	27.21	13.00	0.208
49	56.21	462.85	50.62	17.98	3.54	10.41	79.54	9.73	9.91	5.41	10.02	27.74	28.26	28.58	13.08	0.196
50	55.65	449.79	62.38	23.18	3.00	13.55	78.09	17.25	10.70	6.13	11.87	37.54	23.29	25.82	17.36	0.098
51	52.33	416.17	60.05	23.10	3.04	13.40	74.06	16.60	10.18	5.99	10.57	38.29	23.49	24.38	18.10	0.091

表4 黒曜石判定結果

No.	4成分									5成分								
	第1候補			第2候補			第3候補			第1候補			第2候補			第3候補		
	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定
1	男鹿1	7.8	T	月山1	143.3	F	男鹿2	215.9	F	男鹿1	11.8	T	月山1	143.8	F	男鹿2	215.9	F
2	月山1	48.8	F	出来島	53.6	F	月山2	72.4	F	月山1	49.4	F	出来島	53.8	F	月山2	79.8	F
3	男鹿1	5.6	T	男鹿2	200.3	F	月山1	222.6	F	男鹿1	10.6	T	男鹿2	202.0	F	月山1	224.5	F
4	男鹿1	27.8	F	月山1	165.6	F	男鹿2	343.8	F	男鹿1	28.5	F	月山1	166.1	F	男鹿2	344.2	F
5	男鹿1	13.2	T	月山1	115.3	F	男鹿2	181.6	F	男鹿1	13.6	T	月山1	115.4	F	男鹿2	182.6	F
6	男鹿1	2.1	T	月山1	200.0	F	男鹿2	242.7	F	男鹿1	2.1	T	月山1	200.1	F	男鹿2	247.3	F
7	男鹿1	17.6	F	男鹿2	251.7	F	月山1	288.6	F	男鹿1	20.2	F	月山1	292.3	F	男鹿2	340.1	F
8	男鹿1	19.3	F	月山1	115.1	F	男鹿2	214.8	F	男鹿1	19.5	F	月山1	115.1	F	男鹿2	218.1	F
9	北上3		T?															
10	北上1	8.4	T	北上2	25.4	F	高原1	129.5	F	北上1	8.6	T	北上2	25.5	F	高原1	129.7	F
11	北上2	11.6	T	北上1	18.8	F	置戸2	95.8	F	北上2	13.3	T	北上1	26.0	F	高原1	101.0	F
12	男鹿1	9.0	T	月山1	185.6	F	男鹿2	216.4	F	男鹿1	10.5	T	月山1	185.7	F	男鹿2	229.1	F
13	月山2	7.2	T	月山1	25.2	F	出来島	91.8	F	月山2	7.6	T	月山1	25.3	F	出来島	92.2	F
14	男鹿1	1.7	T	月山1	221.1	F	男鹿2	256.7	F	男鹿1	4.3	T	月山1	221.6	F	男鹿2	257.6	F
15	北上2	22.7	F	北上1	27.0	F	高原1	158.7	F	北上2	22.9	F	北上1	29.6	F	高原1	158.7	F
16	北上1	15.4	F	北上2	16.2	F	置戸2	103.0	F	北上1	15.7	F	北上2	23.7	F	置戸2	108.4	F
17	北上1	6.9	T	北上2	47.9	F	高原1	85.9	F	北上1	6.9	T	北上2	52.2	F	高原1	87.5	F
18	北上2	7.9	T	北上1	28.5	F	置戸2	107.2	F	北上2	9.0	T	北上1	28.9	F	置戸2	119.0	F
19	置戸2	3.0	T	高原1	88.5	F	ケショ	143.4	F	置戸2	3.0	T	高原1	115.1	F	北上1	168.9	F
20	北上2	10.4	T	北上1	21.7	F	置戸2	114.9	F	北上2	20.3	F	北上1	26.0	F	置戸2	117.2	F
21	北上1	6.2	T	北上2	35.3	F	高原1	78.8	F	北上1	6.8	T	北上2	39.4	F	高原1	80.3	F
22	北上1	7.8	T	北上2	25.5	F	高原1	108.4	F	北上1	8.0	T	北上2	30.2	F	高原1	110.1	F
23	豊浦	96.2	F	置戸2	164.1	F	北上1	183.9	F	豊浦	119.0	F	置戸2	168.6	F	北上1	184.2	F
24	北上1	21.7	F	北上2	72.7	F	高原1	82.7	F	北上1	23.5	F	北上2	75.3	F	高原1	83.8	F
25	北上1	3.1	T	北上2	34.7	F	高原1	113.5	F	北上1	3.1	T	北上2	35.5	F	高原1	113.5	F
26	北上1	12.7	T	北上2	31.2	F	高原1	99.6	F	北上1	15.2	F	北上2	31.2	F	高原1	100.3	F
27	北上2	30.5	F	北上1	57.7	F	置戸2	116.8	F	北上2	35.9	F	北上1	58.2	F	置戸2	122.5	F
28	北上2	25.2	F	北上1	49.6	F	置戸2	107.8	F	北上2	28.9	F	北上1	56.5	F	置戸2	139.7	F
29	北上2	4.9	T	北上1	12.8	T	高原1	151.3	F	北上2	5.2	T	北上1	12.9	T	高原1	151.3	F
30	北上1	10.1	T	北上2	21.7	F	高原1	120.3	F	北上1	11.7	T	北上2	33.6	F	高原1	127.6	F
31	北上1	58.6	F	置戸2	74.4	F	北上2	79.1	F	北上1	60.0	F	置戸2	75.1	F	北上2	95.5	F
32	北上2	8.5	T	北上1	25.6	F	置戸2	117.3	F	北上2	8.8	T	北上1	26.9	F	置戸2	132.1	F
33	北上1	12.7	T	北上2	43.9	F	高原1	141.2	F	北上1	13.1	T	北上2	44.5	F	高原1	141.3	F
34	北上2	18.1	F	北上1	59.1	F	置戸2	210.5	F	北上2	22.7	F	北上1	61.9	F	置戸2	239.1	F
35	北上2	13.2	T	北上1	51.3	F	置戸2	134.6	F	北上2	13.2	T	北上1	55.4	F	置戸2	153.8	F
36	北上2	17.4	F	北上1	43.9	F	置戸2	103.8	F	北上2	17.4	F	北上1	44.9	F	置戸2	120.5	F
37	男鹿1	2.8	T	月山1	175.0	F	男鹿2	212.1	F	男鹿1	2.9	T	月山1	175.2	F	男鹿2	229.4	F
38	月山2	9.8	T	月山1	26.7	F	出来島	84.0	F	月山2	10.0	T	月山1	27.1	F	出来島	84.1	F
39	男鹿1	8.4	T	月山1	237.5	F	男鹿2	255.4	F	男鹿1	8.8	T	月山1	237.5	F	男鹿2	273.7	F
40	北上1	9.2	T	北上2	27.4	F	高原1	129.0	F	北上1	21.9	F	北上2	44.0	F	高原1	139.6	F
41	北上2	6.2	T	北上1	21.5	F	置戸2	127.1	F	北上2	8.2	T	北上1	21.5	F	置戸2	136.5	F
42	星ヶ塔	5.8	T	和田6	40.9	F	和田8	114.6	F	星ヶ塔	6.0	T	和田6	46.7	F	和田8	115.2	F
43	男鹿1	6.6	T	月山1	254.0	F	男鹿2	285.6	F	男鹿1	6.6	T	月山1	254.0	F	男鹿2	297.4	F
44	北上2	6.9	T	北上1	44.5	F	置戸2	130.8	F	北上2	10.1	T	北上1	46.1	F	置戸2	136.4	F
45	男鹿1	7.2	T	男鹿2	167.9	F	月山1	192.2	F	男鹿1	7.2	T	男鹿2	190.6	F	月山1	192.8	F
46	湯ノ倉	11.6	T	鍛冶屋	82.3	F	畑宿	82.8	F	湯ノ倉	11.6	T	鍛冶屋	85.5	F	畑宿	111.7	F
47	男鹿1	8.7	T	月山1	204.7	F	男鹿2	212.6	F	男鹿1	9.5	T	月山1	204.9	F	男鹿2	214.3	F
48	月山1	25.6	F	月山2	57.4	F	出来島	78.1	F	月山1	26.7	F	月山2	62.6	F	出来島	82.6	F
49	月山1	14.7	T	月山2	33.5	F	出来島	119.1	F	月山1	15.1	F	月山2	34.5	F	出来島	127.6	F
50	男鹿1	4.2	T	月山1	160.7	F	男鹿2	172.7	F	男鹿1	9.6	T	月山1	162.0	F	男鹿2	175.0	F
51	男鹿1	2.3	T	月山1	216.8	F	男鹿2	226.9	F	男鹿1	3.6	T	月山1	216.9	F	男鹿2	231.0	F

距離：マハラノビス平方距離 判定は χ^2 乗検定の結果：T (TRUE) , F (FALSE)
 北上3群は試料数が少ないため、計算による判定ができない

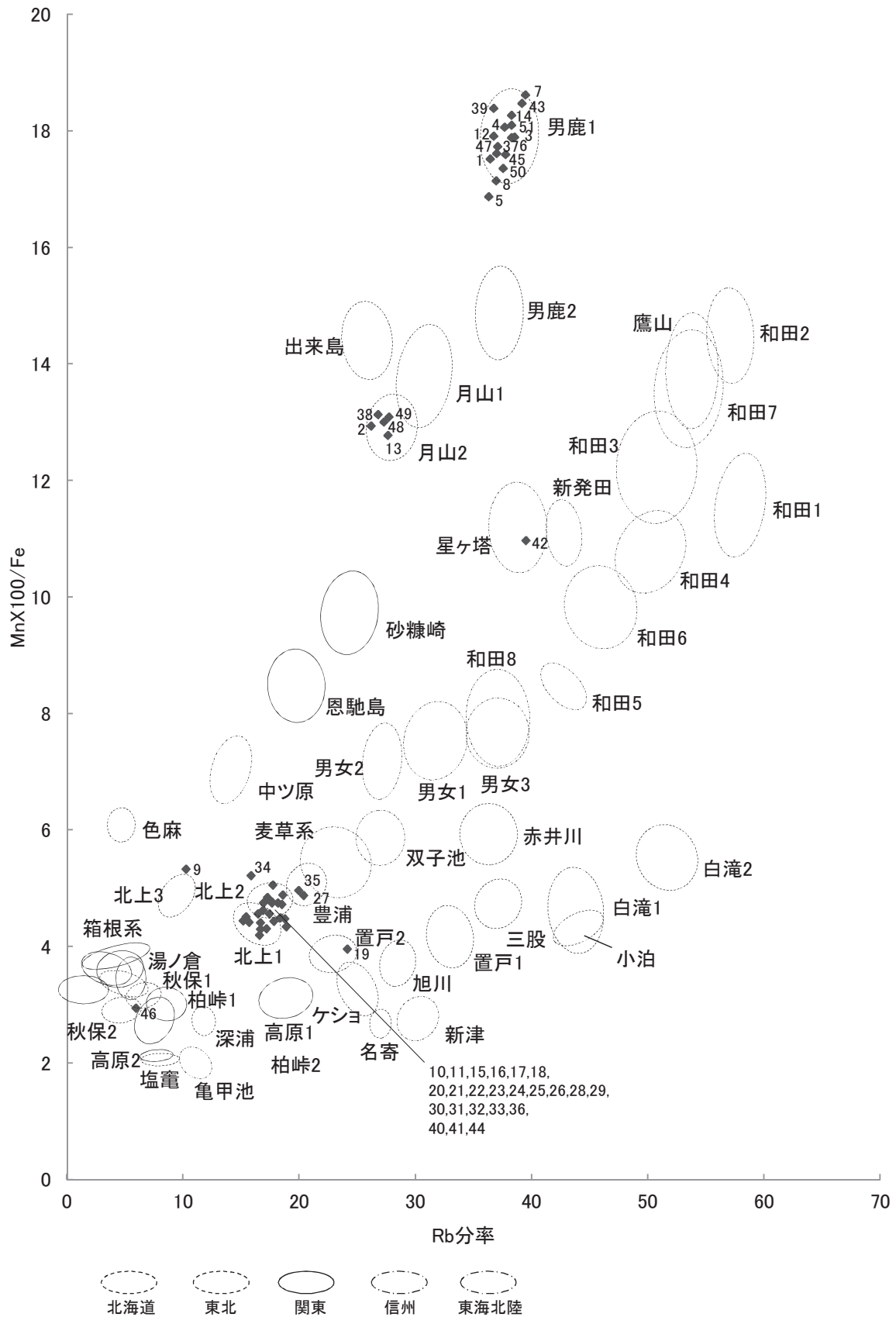


図2 黒曜石産地推定結果 (1)

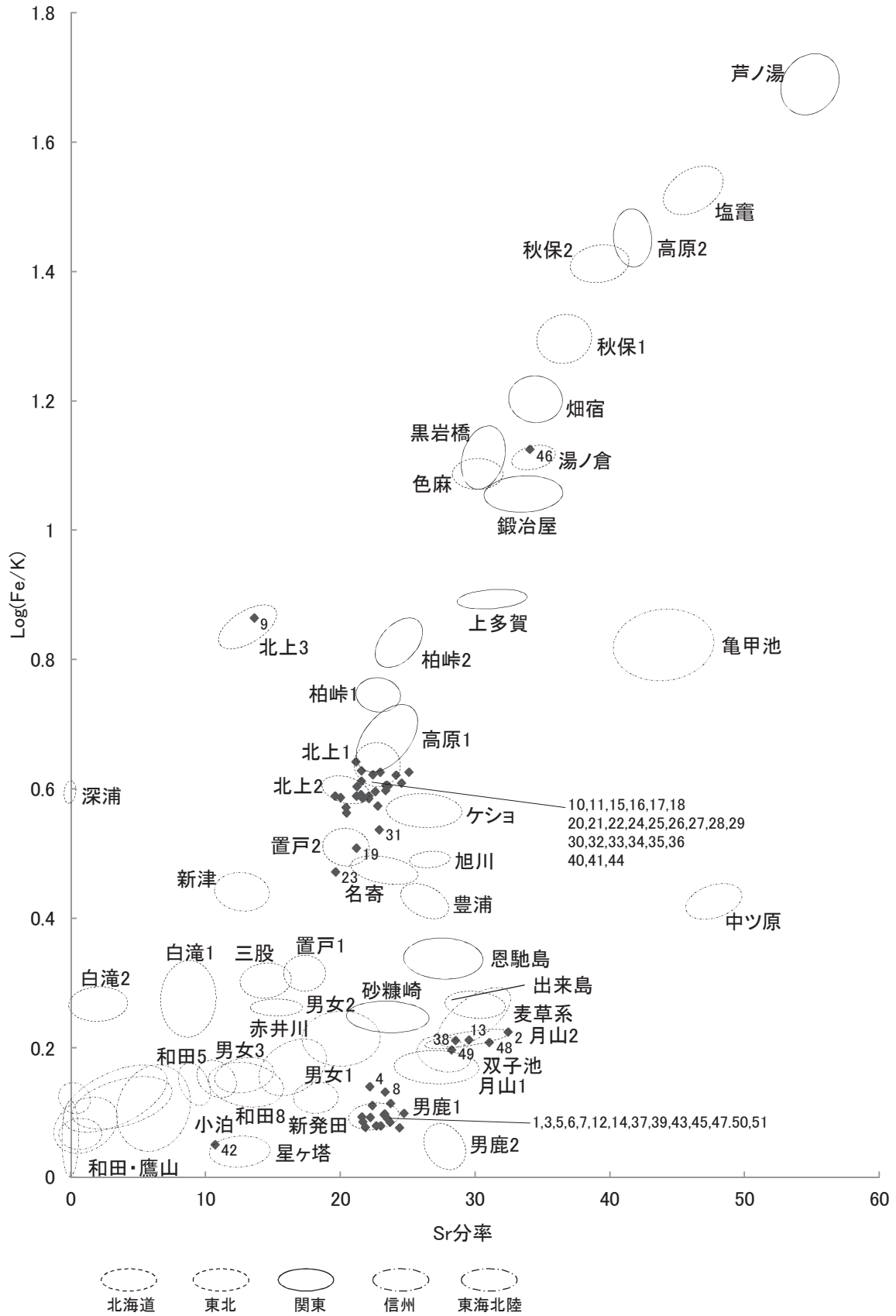


図3 黒曜石産地推定結果 (2)

3 大珠・勾玉の石材について

浜川目沢田 I 遺跡 調査担当 須原 拓

1 はじめに

遺構外から出土した石製品2点(3935・3936)は、色調や質感から、素材となる石材が翡翠であると推定した。ただしこれはあくまで肉眼観察による推定であり、同2点の石材が翡翠であるかどうかを明らかにするため、石材の同定分析を試みることにした。

分析には、調査担当者(須原)が新潟県糸魚川市に所在するフォッサマグナミュージアムに赴き、同博物館に依頼し、X線マイクロアナライザーを用いた元素組成の同定および定量分析を行った。

2 分析方法について

X線マイクロアナライザーは、電子線を試料に照射し、その際に発生する特性X線を用いて試料表面の定量分析等を行う方法で、鉱物学、岩石学では、一般的に使われる技術・方法である。この方法を用い、上記の石製品2点の元素組成の同定および定量分析(厳密には半定量分析)を行った(下表参照)。

3 分析結果

3935 (石製品・大珠、縄文時代中期前～中葉)

304 p 図1上に示した。上写真は照射した範囲の顕微鏡写真である。

その下のグラフは元素組成を示している。含まれている元素はグラフのピークとなって表れており、左から鉄(Fe)、ナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、珪素(Si)、カルシウム(Ca)が含まれていることが分かる(他に酸素(O)が含まれるが、これはグラフには表れない)。

グラフ下の表は、定量分析の結果を表している。Na₂O、MgO、Al₂O₃、SiO₂、CaO、FeOが含まれ、それぞれの質量パーセントを示した。

これらの結果から、3935に電子線を照射した範囲は、オンファス輝石((Na, Ca)(Al, Mg, Fe)SiO₆)である(あるいは多く含む)ことが分かった。

3936 (石製品・勾玉、縄文時代晩期中葉)

304 p 図1下に示した。上写真は照射した範囲の顕微鏡写真である。

その下のグラフは元素組成を示している。含まれている元素はグラフのピークとなって表れており、左から鉄(Fe)、ナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、珪素(Si)、

表1 資料の半定量化学分析について

使用した機械	分析走査電子顕微鏡(SEM-EDS)に日本電子製エネルギー分散型エックス線スペクトロメーターをつけた走査型電子顕微鏡 JSM-6510LV
分析条件	低真空モード
炭素蒸着	なし
加速電圧	15 k V
分析時間(リアルタイム)	120 秒
ワーキングディスタンス	10mm
分析範囲	面分析 0.25mm×0.2mm
施設名	糸魚川市フォッサマグナミュージアム
分析年月日	2015年12月13日
分析者	宮島 宏(館長補佐・2015年当時)

カルシウム (Ca) が含まれていることが分かる (3935 同様、酸素 (O) も含まれる)。

グラフ下の表は、定量分析の結果を示している。やはり 3935 と同様に Na_2O 、 MgO 、 Al_2O_3 、 SiO_2 、 CaO 、 FeO が含まれ、それぞれの質量パーセントを示した。

これらの結果から、3936 に電子線を照射した範囲も、オンファス輝石 ($(\text{Na}, \text{Ca}) (\text{Al}, \text{Mg}, \text{Fe}) \text{SiO}_6$) であることが分かった。

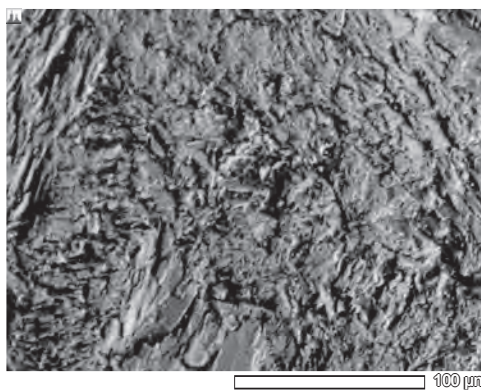
4 考 察

翡翠は近年の研究結果から、白色部分が「ヒスイ輝石 ($\text{NaAlSi}_2\text{O}_6$)」、緑色部分は「オンファス輝石 ($(\text{Na}, \text{Ca}) (\text{Al}, \text{Mg}, \text{Fe}) \text{SiO}_6$)」であり、この両者が混合したものであることが判明してきた。まだ全ての翡翠で、緑色部分がオンファス輝石であるかどうかは分かっていないようであるが、宮島宏氏の分析・観察では、糸魚川産の翡翠に関しては、緑色の部分に必ずオンファス輝石が含まれることが判明している (宮島 2014)。上記の結果、3935・3936 はともにオンファス輝石であり、従って 2 点の資料は翡翠であると同時に糸魚川産であるものと推測できる。

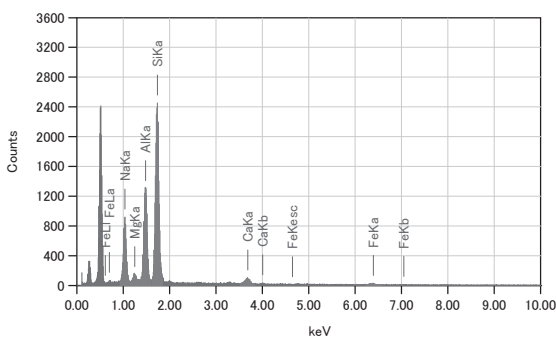
3 大珠・勾玉の石材について



3935



タイトル : IMG1
 装置 : 6510 (LA)
 加速電圧 : 15.00 kV
 倍率 : x 500
 測定日時 : 2015/12/13
 画素数 : 1024 x 768



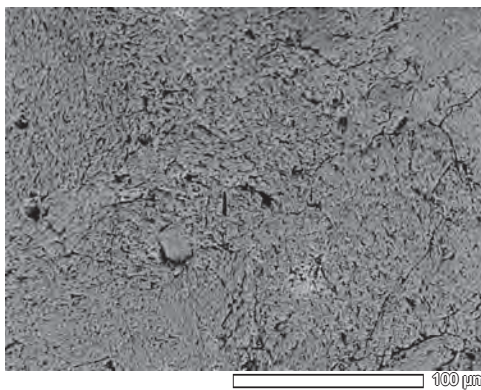
測定条件 : 6510 (LA)
 装置名 : 15.00 kV
 加速電圧 : 0.18625 nA
 照射電流 : T4
 PHAモード : 257.26 sec
 経過時間 : 120.00 sec
 有効時間 : 53 %
 デッドタイム : 7843 cps
 計数率 : 0 - 20 keV
 エネルギー範囲

ZAF法 簡易定量分析(酸化物)
 フィッティング係数 : 0.5243
 全酸素数 : 6.0

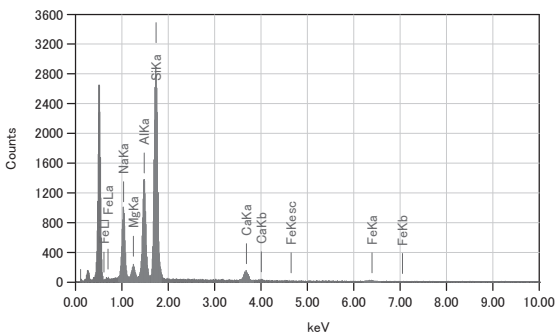
元素	(keV)	質量%	誤差%	モル%	化合物	質量%	カチオン数	K
O		46.85						
Na K	1.041	9.83	0.80	14.22	Na2O	13.24	0.88	18.7278
Mg K	1.253	0.92	0.94	2.53	MgO	1.53	0.08	1.4753
Al K	1.486	12.82	1.08	15.81	Al2O3	24.23	0.97	23.3647
Si K	1.739	26.69	1.43	63.23	SiO2	57.10	1.95	49.8844
Ca K	3.690	1.65	1.82	2.74	CaO	2.31	0.08	4.0067
Fe K	6.398	1.23	4.79	1.47	FeO	1.59	0.05	2.5391
合計		100.00		100.00		100.00	4.00	



3936



タイトル : IMG1
 装置 : 6510 (LA)
 加速電圧 : 15.00 kV
 倍率 : x 500
 測定日時 : 2015/12/13
 画素数 : 1024 x 768



測定条件 : 6510 (LA)
 装置名 : 15.00 kV
 加速電圧 : 0.18625 nA
 照射電流 : T4
 PHAモード : 255.96 sec
 経過時間 : 120.00 sec
 有効時間 : 53 %
 デッドタイム : 7784 cps
 計数率 : 0 - 20 keV
 エネルギー範囲

ZAF法 簡易定量分析(酸化物)
 フィッティング係数 : 0.5000
 全酸素数 : 6.0

元素	(keV)	質量%	誤差%	モル%	化合物	質量%	カチオン数	K
O		46.80						
Na K	1.041	9.81	0.76	13.94	Na2O	13.23	0.88	18.5917
Mg K	1.253	1.45	0.89	3.90	MgO	2.40	0.12	2.3001
Al K	1.486	11.48	1.03	13.90	Al2O3	21.69	0.87	20.6534
Si K	1.739	27.21	1.34	63.29	SiO2	58.21	1.99	50.8795
Ca K	3.690	2.55	1.73	4.16	CaO	3.57	0.13	6.1507
Fe K	6.398	0.70	4.55	0.82	FeO	0.80	0.03	1.4246
合計		100.00		100.00		100.00	4.01	

図1 分析結果

IX 総 括

1 出土遺物の検討

【分布からみた縄文土器の変遷】

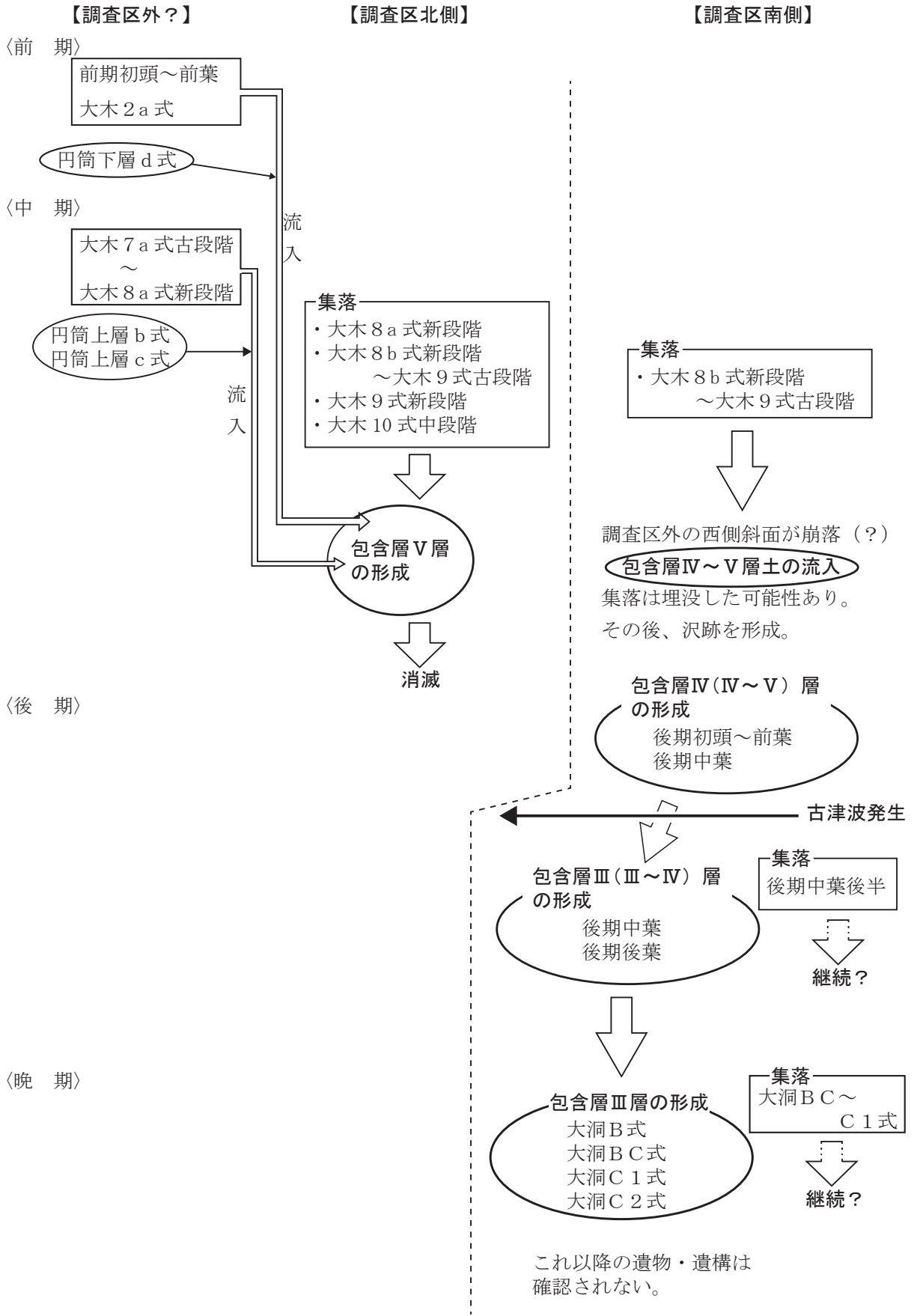
出土した縄文土器は、前期初頭から晩期中葉までと幅広い。これらを出土地点と土器の時期から整理し、その変遷を概観する（第179図）。

調査区北側は、遺構（1～9号住居跡、1～11号土坑）から中期前葉（大木8a式）～末葉（大木10式）の土器が出土している。特に大木8a式新段階から大木8b新段階にかけての土器が大量に出土した。大木9、10式は、出土量は多くないが、8号、9号住居跡からまとまって出土している。遺構検出面（Ⅵ層上面）の上には、Ⅴ層が堆積し、遺物包含層を形成している。Ⅴ層から出土した土器の時期は、遺構内出土土器と概ね同じである。このⅤ層中からも特に大木8a式～大木8b式が大量に出土している。また他に、遺構よりも古い土器（前期初頭～前葉、大木7a式古段階～大木8a式古段階の土器）も出土している。遺構よりも上層から、それよりも古い土器が出土するということは、層序的には正しくないの、調査区外からの流れ込みによって混入したものと推定する。ただし、この流れ込みと推定する土器が非常に多く、それも本遺跡の特徴と言える。

このように調査区北側では流れ込みによる混入も含め、前期初頭から中期末葉までの土器が大コンテナ100箱以上出土した。そしてその多くは調査区北側でもやや南寄りの緩斜面地に集中しており（第165～167図）、場所によっては足の踏み場もないほどであった（巻頭カラー写真図版2）。所謂「捨て場」を形成している可能性も考えたが、上述の通り、流れ込みによる土器が大量に含まれているので、土器の出土が集中した範囲がそのまま捨て場と判断できない。なお、調査区北側においては後期以降の土器はほぼ皆無であり、また後期以降に帰属する遺構も見受けられず、大木10式新段階をもって、調査区北側での、縄文人の生活の痕跡は途絶えたと考える。

調査区南側は、調査区北側とはやや様相が異なる。まず調査範囲の広い範囲に沢跡が広がり、その沢跡に堆積するⅣ層から、中期初頭～後期前葉の土器が出土している。この沢跡の底面には竪穴住居跡（21号住居跡）が位置するが、この住居跡は大木8b式新段階～大木9式古段階に帰属するので、この遺構よりも古い土器が出土する点や、また中期から後期の土器がほぼ混在状態で出土する点など沢跡内のⅣ層から出土する土器は原位置をとどめない、流れ込みによるものと推測する。ただしこの沢跡の外側にもⅣ層が堆積し、特に調査区の南端では層が比較的厚く、層中から後期中葉の土器がまとまって出土し、Ⅲ層まで続く（巻頭カラー写真図版3）。なおこの南端に堆積するⅣ層の下位には3800年前の古津波層と推測する灰白色の細砂層が堆積する（巻頭カラー写真図版3）。そして遺構（22・23号住居跡、12～43号土坑、1～3号埋設土器、1号性格不明遺構）からは、後期中葉～晩期大洞C2式までの土器が出土しており、特に大洞BC式、大洞C1式が大量である。この遺構群の上にはⅢ層が堆積し、Ⅴ層とは別の遺物包含層を形成している。Ⅲ層から出土した土器の時期は、遺構内出土土器と概ね同じである。このⅢ層中には遺構よりも古い土器（後期後葉～大洞B式）も出土しているが、Ⅴ層のような流れ込みによる混入というより、遺構の希薄な範囲に堆積したⅢ層ないし、その下のⅣ層に古い土器が混入したものではないかと推測する。

このように調査区南側は、中期初頭から晩期中葉までの土器が大コンテナで200箱以上出土し、遺構のみならず、広大な包含層を形成している。しかし、大洞C2式を最後に、それ以降の土器は皆無であり、大洞C2式をもって、調査区南側（あるいは遺跡全体）の縄文人の生活の痕跡は途絶えたと考える。



第 179 図 浜川目沢田 I 遺跡の変遷

【各時期の縄文土器の特徴】

前期

器面の色調はにぶい黄橙色、にぶい橙色など暗色が半数を占め、野焼きの焼成があまり良くないと推測でき、胎土の焼成も不良、やや不良がほとんどで、内面にも火が回っていないことが分かる。

出土した土器はすべて破片であり、形態は不明である。文様については第七章で述べた通りで、斜行縄文や非結束羽状縄文、また組縄文が施文される土器が多い。宮古市越田松長根 I 遺跡（岩埋文 2017）の例を参考にしても、これらの土器群は大木 1 式に平行するものと推測するが、本遺跡からは大木 1 式のメルクマールとなるループ文を施文する土器は 1 点（945）のみである。この点は本遺跡における該期の土器の特徴と言えるかもしれない。大木 2a 式は出土しているが、点数は少ない。また特筆する点として、円筒下層 d 式が出土しているが、平行する大木 6 式は出土していない。

大木 7a 式、大木 7b 式

器面の色調はにぶい橙色、灰黄褐色など暗色が多いが、橙色、赤褐色などの明色も少なくない。胎土の焼成は不良、やや不良がほとんどであるが、良好、やや良好が 3 割弱あり、前期に比べて、野焼きの精度が上がっていると推測する。

大木 7a 式古段階、新段階はすべて破片であり、形態は不明である。文様については第七章で述べた。多様であるが、他地域にみられる同型式と差異はない。大木 7b 式は遺構外から、形態の分かる深鉢、浅鉢が出土している（1032～1035）。県内でも大木 7b 式は破片で出土するものが多く、本遺跡の資料は貴重といえる。

大木 8a 式古段階、新段階

器面の色調はにぶい黄橙色、灰黄褐色、にぶい褐色など暗色が多く、橙色、明赤褐色などの明色は 3 割程度である。胎土の焼成は不良、やや不良がほとんどで、良好、やや良好は 2 割以下である。前時期に比べて、野焼きの精度が下がっているが、土器自体が大きくなっているせいであろうか。

古段階は破片が多いが、形態の分かる深鉢、浅鉢が出土している（180 図上）。A 類としたキャリアパー形の深鉢が出現し、前時期と同じく、縄文原体押圧文を施文する。

新段階は中期でも出土量が激増した時期で、形態が分かる深鉢、浅鉢が多い。代表的なものを第 180 図に示した。深鉢は A 類と B 類の割合がほぼ半々である。福島・宮城県域では、深鉢 B 類が主体で深鉢 A 類は決して多くない（中野 2008 など）ので、本遺跡で深鉢 A 類が多い点の一つの特徴と言える。文様は口縁部に集中する傾向にある。ただし深鉢 B 類は、胴部にも沈線で文様が描かれることが多く、その特徴は福島・宮城県域の土器と類似する傾向がある。浅鉢は形態がやや多様化するものの、文様自体は前時期と大きな差が無い。

大木 8b 式古段階、新段階

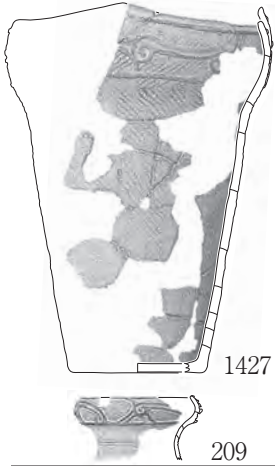
器面の色調はにぶい黄橙色、褐色、にぶい黄褐色など暗色が多いが、橙色、明赤褐色などの明色が増え、3 割強見受けられる。ただし胎土の焼成は不良、やや不良がほとんどで、良好、やや良好は 2 割以下である。

渦巻き文の発生を該期の出現と捉えている。ただし、前時期にも渦巻き文が施文される土器（例えば 1215）があり、両時期を跨ぐ土器も存在する。古段階は所謂「大木 8b - 1 式」（高橋 1982）の範疇である。本遺跡では少なく、形態の分かるものは第 181 図左上に示した 2 点のみである。新段階は遺構内外共に多く、代表的な土器を第 181 図に示した。該期は所謂「大木 8b - 2 式」と「大木 8b - 3 式」に相当する土器を一括している。本来は二分出来るはずであるが、本遺跡では両者の境界が判別できず、また「大木 8b - 3 式」と推定する土器には、すでに次の大木 9 式に見られる区画文が

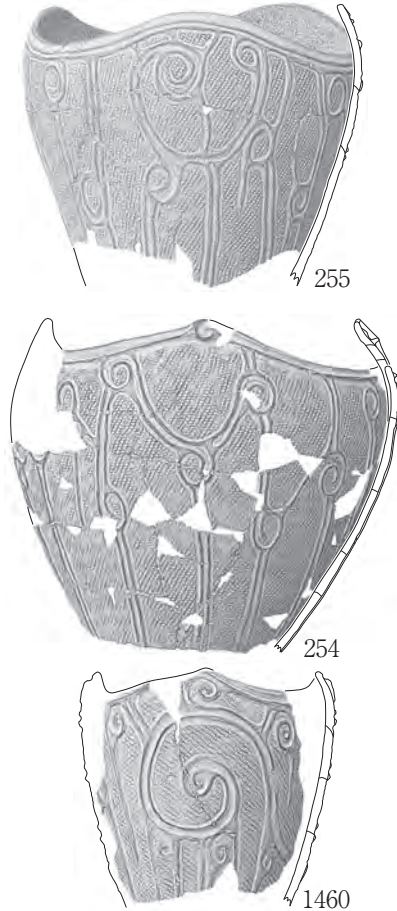


第180図 大木8a式古段階・新段階集成

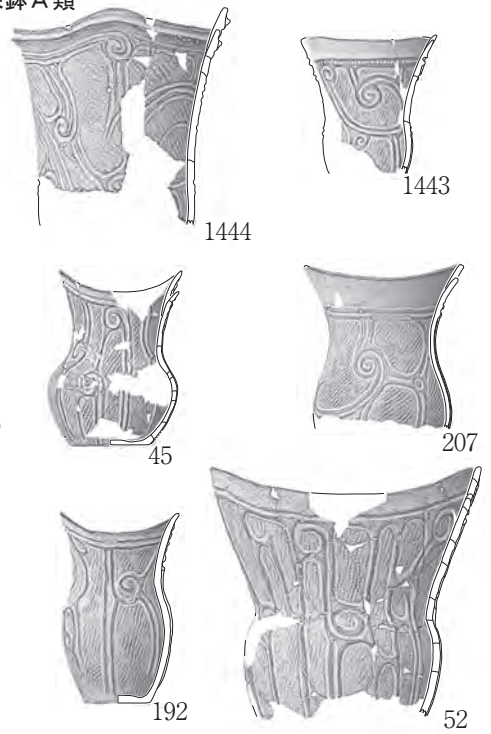
大木8b式古段階
深鉢



大木8b式新段階
深鉢B類



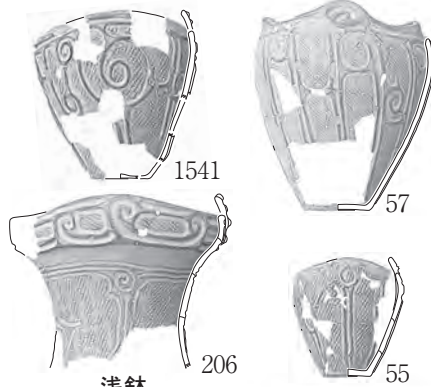
深鉢A類



深鉢D類



深鉢C類



浅鉢



大木8b式古段階~大木9式古段階
深鉢



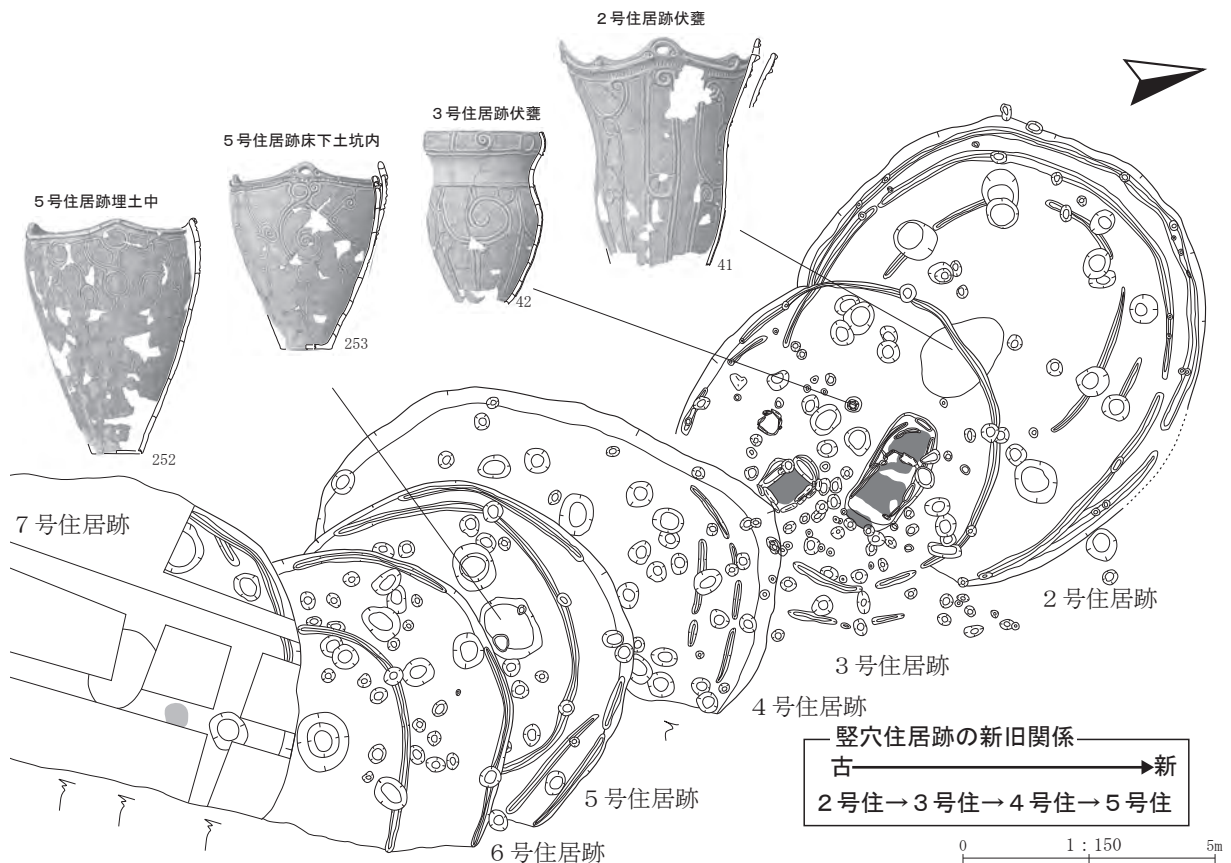
第181図 大木8b式古段階・新段階集成

発生している土器があり、その境界の判別も難しい。したがって今回は二分せず一括した。深鉢は大型のものはB類が多く、小型になるにつれA類が多い傾向がある。出土した深鉢のほとんどはこのA類かB類であり、C、D類は希である。41はB類としたが、口唇部形態が4単位である点、また口縁部の文様など、他のB類とやや異なり、むしろ大木8b式新段階～大木9式古段階とした土器（例えば253）の方が類似する点がある。浅鉢は大木8a式新段階の浅鉢A類をそのまま継いだと思われるが、やや大きくなる。

大木8b式新段階～大木9式古段階

器面の色調は橙色、明赤褐色、にぶい橙色など明色が半数を占め、器面への野焼きの際の火周りの良さがうかがえるが、ただし胎土の焼成は不良、やや不良がほとんどである。

形態、文様共にあまり例のない一群である。第181図下に代表的な土器を示した。形態は前時期の深鉢B類に類似する。文様は沈線による渦巻き文があり、大木8b式新段階とのつながりがうかがえるが、一方で沈線による区画文も施文されるので大木9式の範疇とも言える。問題は区画文の内外側に縄文が施文されたままであり、区画外の縄文が磨り消されていない点であり、まだ大木9式に変化したとは言い切れない。したがってこれらの一群は大木8b式新段階から大木9式古段階の境界に位置すると判断した。なおこの一群の時期的な位置づけに関しては、重複する2～5号住居跡から出土した大木8b式新段階の土器（41・42）と該期の土器（253）、また大木9式古段階（253）との関係からも裏付けられている（第182図）。なお、該期の土器は所謂「最花式土器」（成田2003）に類似するが、該期の方が、通常考えられている最花式土器よりも時期がやや古い可能性があり、また施文される文様に差異（例えば地文に縦位の単軸絡条体第1類が多用される点など）があるので、両者が同じであるとは断言できない。



第182図 2～10号住居跡の新旧関係と出土土器

大木9式古段階、新段階

器面の色調は橙色、明赤褐色、にぶい橙色など明色が3割を占めるが、他は暗色である。胎土の焼成は不良、やや不良が多いが、良好、やや良好が3割で、色調と符合する。

古段階はほとんどが破片で、形態の分かるものは第183図左上の深鉢2点である。文様についても不明瞭で、60は隆帯による区画文が並ぶが、この文様が施文される土器は、本遺跡では少ない。252は前時期の深鉢と形態も文様も類似しているが、沈線による渦巻き文が施文されないので該期と判断した。同様な文様が描かれる土器が、いくつか見受けられるので、むしろこの文様の土器が該期となるかとも考える。ただし252は磨消縄文が施文されていないので、前時期の範疇に含めるべきかもしれない。

新段階は、古段階よりは出土量が増加するが、あまり多くはない。第183図右上には深鉢A・B類の代表的なものを図示した。深鉢B類の方が隆帯による渦巻き文が残っており、やや古い可能性があるが、A類と時期差があるかは分からなかった。また図示していない深鉢C類はほとんど例がない。有孔鏝付土器(425)は1点のみ出土している。特徴的な形態で、文様が稚拙であるのも特徴である。

大木10式古段階、中段階、新段階

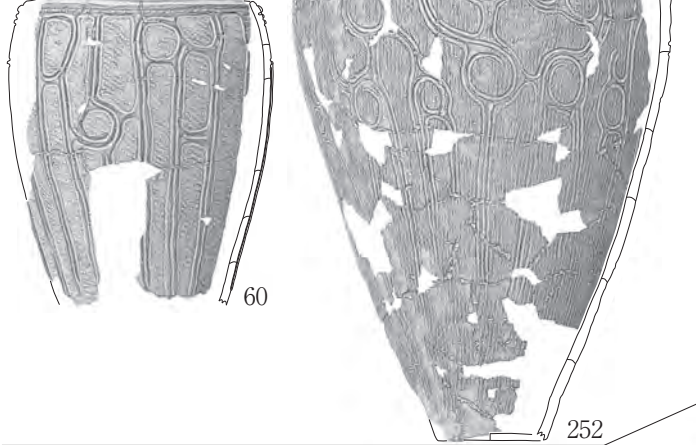
器面の色調は橙色、にぶい橙色など明色が半数を占めるが、にぶい褐色、にぶい黄褐色など暗色も少なくない。胎土の焼成は不良、やや不良が多く、良好、やや良好は3割程度である。

古段階は出土量が少なく、破片が多い。形態の分かる土器は第183図に示した。形態は中、新段階の深鉢A類と同じで、この形態の深鉢は大木10式で共通する。図示していないが、1633もこれらの深鉢よりも胴部が膨らむが、同じ形態と判断した。文様は横位の曲線状区画が並ぶ点、区画内は充填縄文が施文される点など共通し、また他地域のものとも差異はない。あえていえば口縁部周辺に微隆帯や刺突文が巡るものが多いのが特徴である。

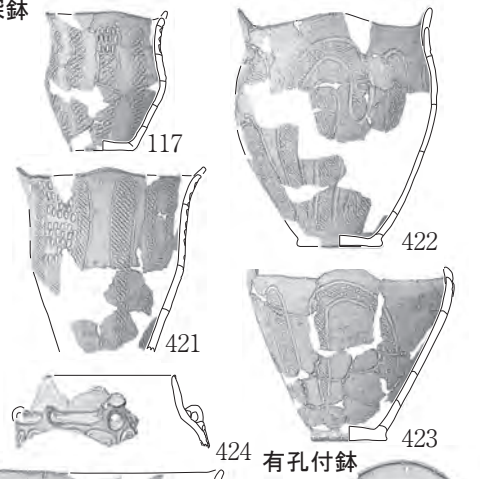
中段階とした土器は出土量が増加する。第183図中央に代表的なものを図示したが、上記の通り深鉢A類は継続し、また深鉢B類が追加、鉢、注口土器も見受けられる。427はA類、B類とは異なる形態で、鉢にも類似するが口縁部形態などから、深鉢と判断した。427のような形態の深鉢は他になく、また朱の痕跡も見受けられるので、特殊な土器かもしれない。該期の文様は胴部上半の曲線状区画と胴部下半の地文が連結するものが主体である。なお県内では胴部上半の曲線状区画と胴部下半の地文が連結しない土器も多く(阿部2008)、したがって文様が連結する土器は本遺跡での特徴と言えるかもしれない。322は胴部上半にT字状の区画文が描かれる。この形態の区画文は例があまりない。また1638は曲線状区画に隆帯で渦巻き文が付くが、これも希である。鉢の文様は深鉢と同じであるが、注口土器の文様は縄文を施文せず、微隆帯のみで曲線状の文様を描いており、その文様の形から中段階と判断したが、古段階か新段階の可能性も否めない。

新段階も出土量は多く、第183図下に代表的な土器を示した。深鉢のほか、片口土器がある。中段階にみられた鉢や注口土器は確認していない。全体的に大型化する傾向が見て取れた。深鉢はA類が主体で、1741のように胴部が大きく膨らむものも見受けられる。また数は少ないがB類が追加される。ただしB類は1696と1740でも形態がやや異なり、多様化している。片口土器は深鉢B類と同形態で、口縁部に片口部が付く。該期の文様は縄文の施文範囲が広がり、地文化し、無文の細長い区画文が描かれる。この文様のあり方は他地域でもみられるので、他地域と大きな差異はないと言える。あえて言えば口縁部や胴部に付く鱗状突起があまり多くない点が特徴である。また1740のように縦位の単軸絡条体第1類を地文とする点の特異である。その1740や片口土器(1739)は、文様に小さな楕円形の区画文が並べており、他とはやや異なる文様である。また微隆帯で区画するもの(1741)もあるが希である。

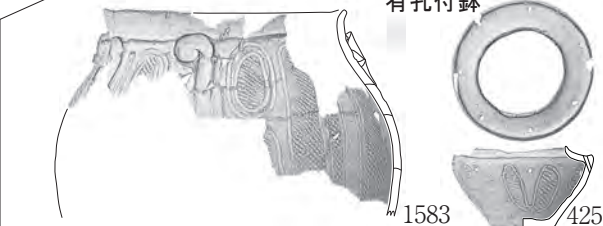
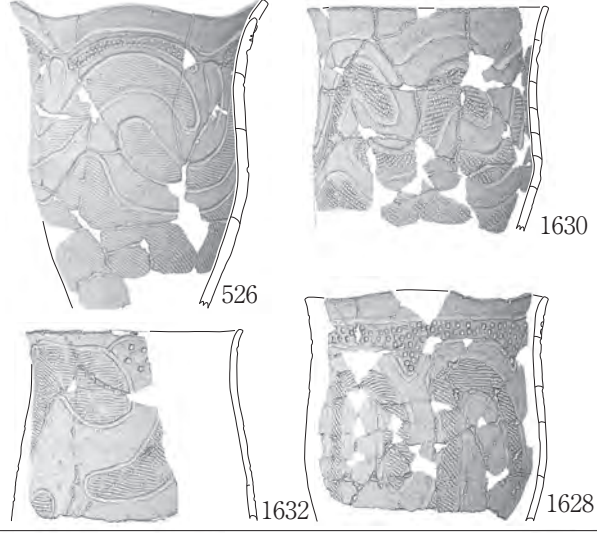
大木 9 式古段階
深鉢



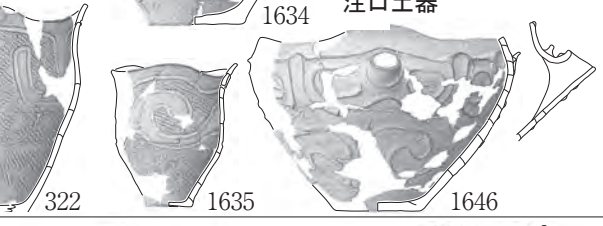
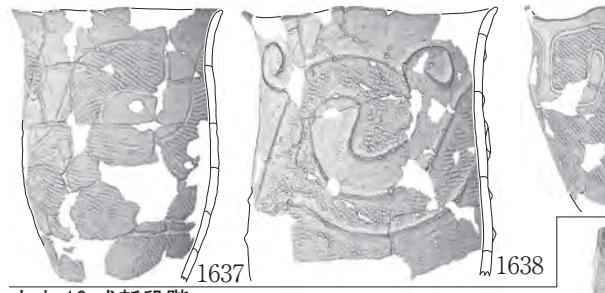
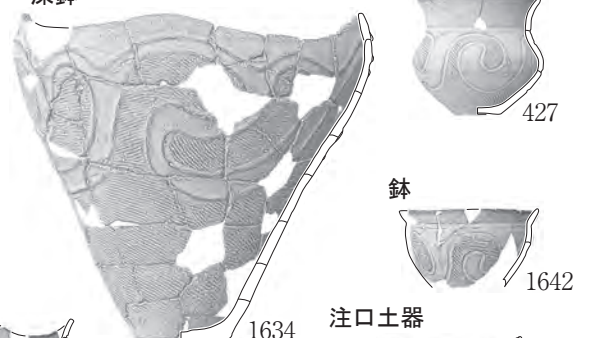
大木 9 式新段階
深鉢



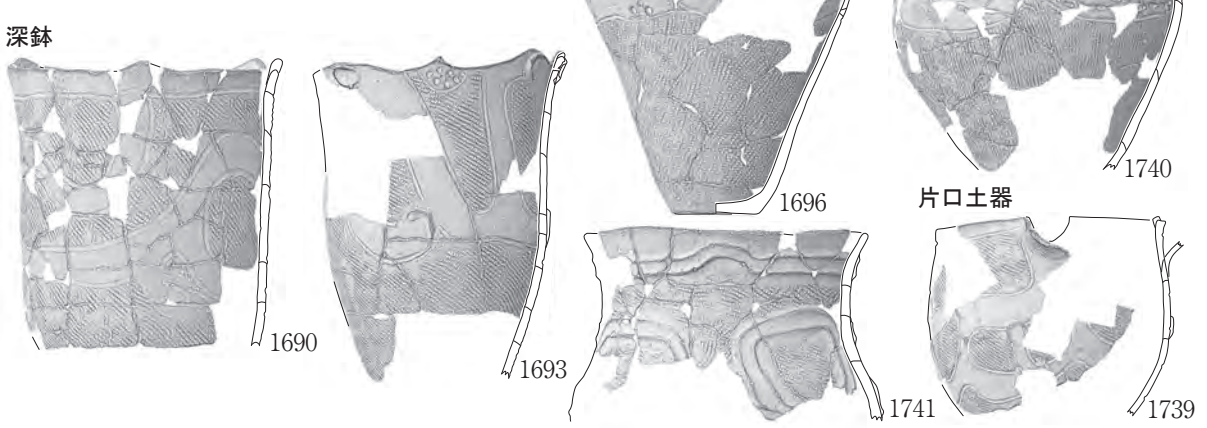
大木 10 式古段階
深鉢



大木 10 式中段階
深鉢



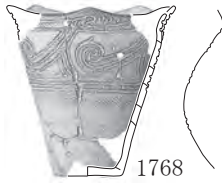
大木 10 式新段階
深鉢



第 183 図 大木 9 式～後期前葉集成

後期前葉後半

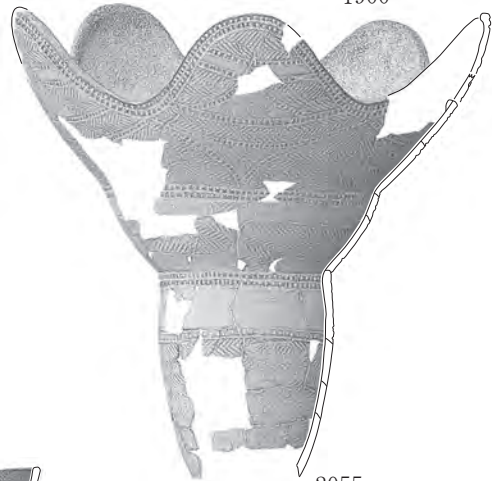
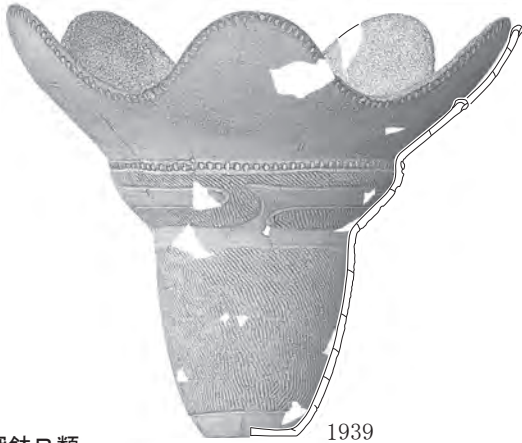
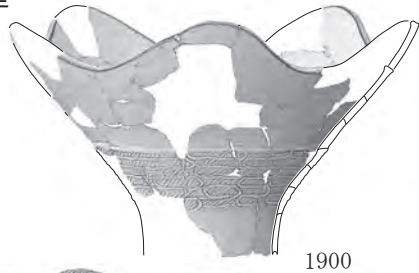
深鉢 壺



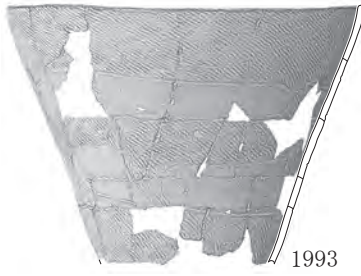
台付鉢



後期中葉前半
深鉢A類



深鉢B類



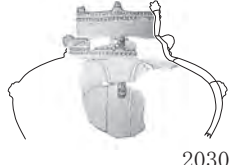
鉢



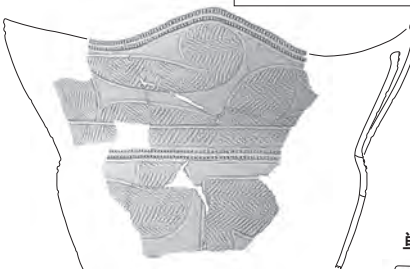
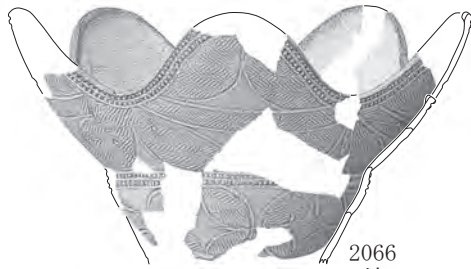
浅鉢



注口土器



後期中葉後半
深鉢A類



深鉢B類



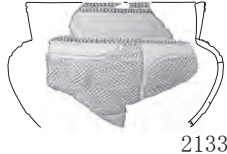
蓋形土器



単孔土器



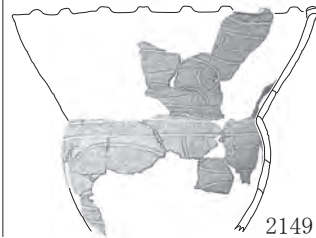
壺A類



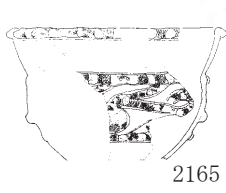
壺B類



後期後葉 深鉢A類



注口土器



第184図 後期中葉～後葉集成

後期初頭～後期前葉後半

器面の色調はにぶい黄橙色やにぶい黄褐色など暗色がほとんどを占め、橙色などの明色は3割程度である。胎土の焼成は不良、やや不良が多く、良好、やや良好は3割である。

該期と判断とした土器は少ない。形態が分かる土器も1758・1759のみである。時期的には連鎖状隆帯をメルクマールとする「門前式」が相当するが、本遺跡ではその文様を施文する土器が非常に少なかった。1758は前時期の深鉢A類に類似し、胴部上半に区画文と充填縄文が施文されるなど大木10式新段階の様相が強く、円形刺突文を連続的に加えた隆帯が施文されるので該期としたが、まだ大木10式新段階の範疇の可能性が高い。他は破片がほとんどで、連鎖状隆帯はわずかである。円形刺突文を加えた隆帯を施文する土器があり、本遺跡の該期土器は、門前式と異なるのか、あるいは単純に出土量が少ないか定かではない。

後期前葉後半とした土器は、出土量が多いがほとんどが破片で、形態の分かる土器は第184図左上に示した3点のみである。深鉢、壺、台付鉢である。1733は台付鉢としたが、特徴的な形態を有し、県内でもあまり例がない。該期は所謂「十腰内遺跡第I群」の特徴と共通しており、文様は斜行、あるいは渦巻き状の帯縄文が施文される。

後期中葉前半

器面の色調はにぶい黄橙色やにぶい黄褐色など暗色がほとんどを占め、橙色などの明色は2割以下である。胎土の焼成は不良、やや不良がほとんどを占め、良好、やや良好は2割以下である。

出土量は増大し、形態の分かる土器も多い。第184図に代表的な土器を示した。なおこれらのうち、調査区の南端から出土している土器は、古津波層と推定するIV層中の砂層よりも上から出土している。深鉢、鉢、浅鉢、注口土器があり、深鉢はこの時期に特徴的な5単位の大型波状口縁を呈する深鉢A類と逆台形を呈するB類があるが、本遺跡ではA類の方が非常に多い。該期は所謂「十腰内遺跡第Ⅱ・Ⅲ群土器」に類似する土器を一括している。これらの土器群は文様に差異が認められるものの、本遺跡では層位的に分かれて出土したものではないので、一括している。なお深鉢では1900はⅡ群、1939・1993・1996などはⅢ群に類似する。2055は異方向羽状縄文が施文されIV群に類似するが、形態や文様のあり方などから該期に含めた。深鉢A類はⅡ、Ⅲ群のどちらにも確認され、また次の後期中葉後半にも継続するのが特徴である。一方で、深鉢B類はⅢ群に類似し、後期中葉後半に継続する。鉢、浅鉢はⅡ群のみである。注口土器にはどれに帰属するか判断する特徴的な文様が施文されないので、不明である。

後期中葉後半

器面の色調はにぶい黄橙色やにぶい黄褐色、にぶい褐色など暗色がほとんどで、橙色などの明色は2割以下である。胎土の焼成は不良、やや不良がほとんどを占め、良好、やや良好は2割以下である。

出土量は前時期と比べ、かなり減少するが、器種や形態のバラエティーに富む。第184図下に代表的な土器を示した。深鉢は前時期と同じA類とB類があり、深鉢A類が多い。壺はA類、B類の2種見受けられるが出土量は少ない。他に鉢、単孔土器、蓋形土器がある。該期は所謂「十腰内遺跡第IV群土器」に類似する一群である。異方向羽状縄文が多用される。単孔土器は沈線による菱形文が連続し、蓋形土器は多重の刺突文が巡る。該期に含めているが、異方向羽状縄文が施文されないので、前後の時期の可能性はある。

後期後葉

器面の色調はにぶい黄橙色やにぶい黄褐色、にぶい褐色など暗色が多く、橙色、にぶい橙色などの明色は3割である。胎土の焼成は不良、やや不良がほとんどを占め、良好、やや良好は3割である。

ほとんどが破片で、形態の分かる土器は第184図に示した4点のみであるが、これらも部分的である。

深鉢と注口土器のみ確認した。該期は所謂「十腰内遺跡第V群土器」や瘤付土器に類似する土器を一括した。どちらかという沈線による入組文が施文される土器が多く、貼瘤が付される土器は少ない傾向にある。

大洞 B 式

器面の色調はにぶい黄橙色やにぶい黄褐色、にぶい褐色など暗色が多く、橙色、にぶい橙色などの明色は3割である。胎土の焼成は不良、やや不良がほとんどを占め、良好、やや良好は1割である。

ほとんど破片であるが、形態の分かる土器は第185図上に示した。深鉢、鉢、台付鉢で、深鉢は縄文のみ、他は口縁部に沈線による三叉文が巡る。

大洞 BC 式

器面の色調はにぶい黄橙色やにぶい黄褐色など暗色が多く、また黒褐色も多い。橙色、にぶい橙色などの明色は2割である。胎土の焼成は不良、やや不良がほとんどを占め、良好、やや良好は1割強である。

出土量は膨大で、形態の分かる土器も多い。第185・186図に代表的な土器を示したが、深鉢、鉢、台付鉢、浅鉢、台付浅鉢、壺、注口土器、香炉形土器を確認した。鉢、台付鉢が多く、それ以外の器種は少ない。特に浅鉢は大洞 C1 式と比べると非常に少なかった。また全体的に出土量が多いものの施文される文様のバラエティーに乏しく、概ね口縁部から胴部に羊歯状文や沈線による N 字状文が施文され、その下は縄文のみである。2702 は地文に縄文ではなく、細い沈線（条線？）を矢羽根状に巡らし、横位の羽状縄文のようにみせている。このような文様の土器はこの1点のみであった。

大洞 C1 式・大洞 C2 式

器面の色調はにぶい黄橙色やにぶい黄褐色など暗色が多く、また黒褐色の占める割合はさらに大きくなる。橙色、にぶい橙色などの明色は2割である。胎土の焼成は不良、やや不良がほとんどを占め、良好、やや良好は1割である。

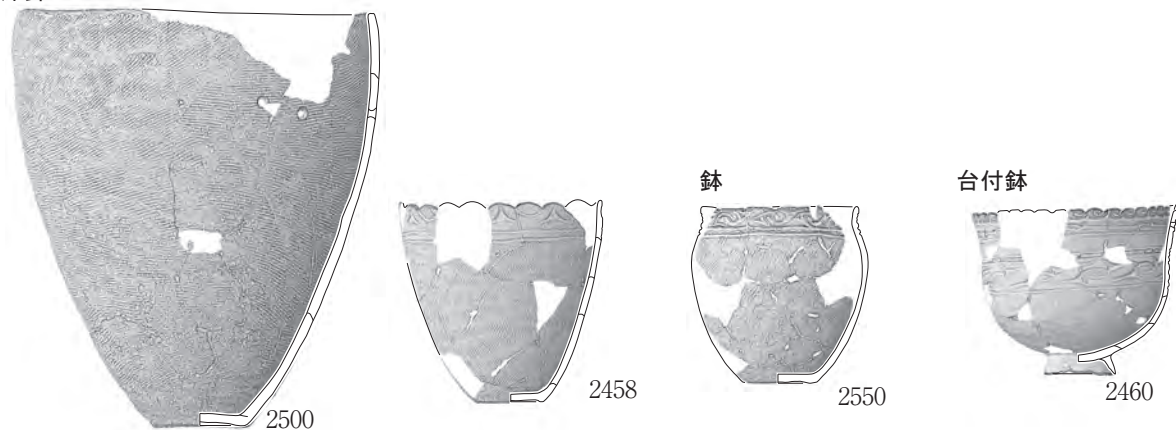
大洞 BC 式と同様に出土量が多く、形態が分かる土器も多い。胴部に雲形文を描く土器を一括し、口縁部形態から大洞 C1 式と大洞 C2 式に分けている。ただしすでに述べたとおり、該期の土器群はほとんどが大洞 C1 式に相当すると考えている。第186・187図に代表的な土器を示したが、深鉢、鉢、台付鉢、浅鉢、台付浅鉢、壺、注口土器がある。文様は主に胴部に雲形文が施文され、口縁部には沈線と刻みや羊歯状が施文される。形態や文様構成は画一的であるが、雲形文自体は様々である。器種をみると、鉢、台付鉢は大洞 BC 式と比べ少なくなり、代わって浅鉢の出土量が増加する。浅鉢は A 類と B 類の2種あり、また文様や文様の施文範囲などがバラエティーに富み、2922 のように口唇部に人面のような大型の突起つくものも見受けられる。壺は少ないが、形態は A～D 類の4種に分けられる。注口土器も大洞 BC 式と比べて少なくなる。形態は大洞 BC 式の注口土器と同じであり、胴部に施文される文様が雲形文に変わる。

以上、各時期の土器を概観した。各時期の土器の焼成について、掲載した土器の色調と断面から、その焼成具合を観察し記したが、どの時期も6～7割近くは野焼きの火周りが悪いせいか、焼成は不良が多い。また器面の色調は暗色が多かった。この点について、時期によって差異が見出せるかと期待したが、全時期通じて大きな変化はない。

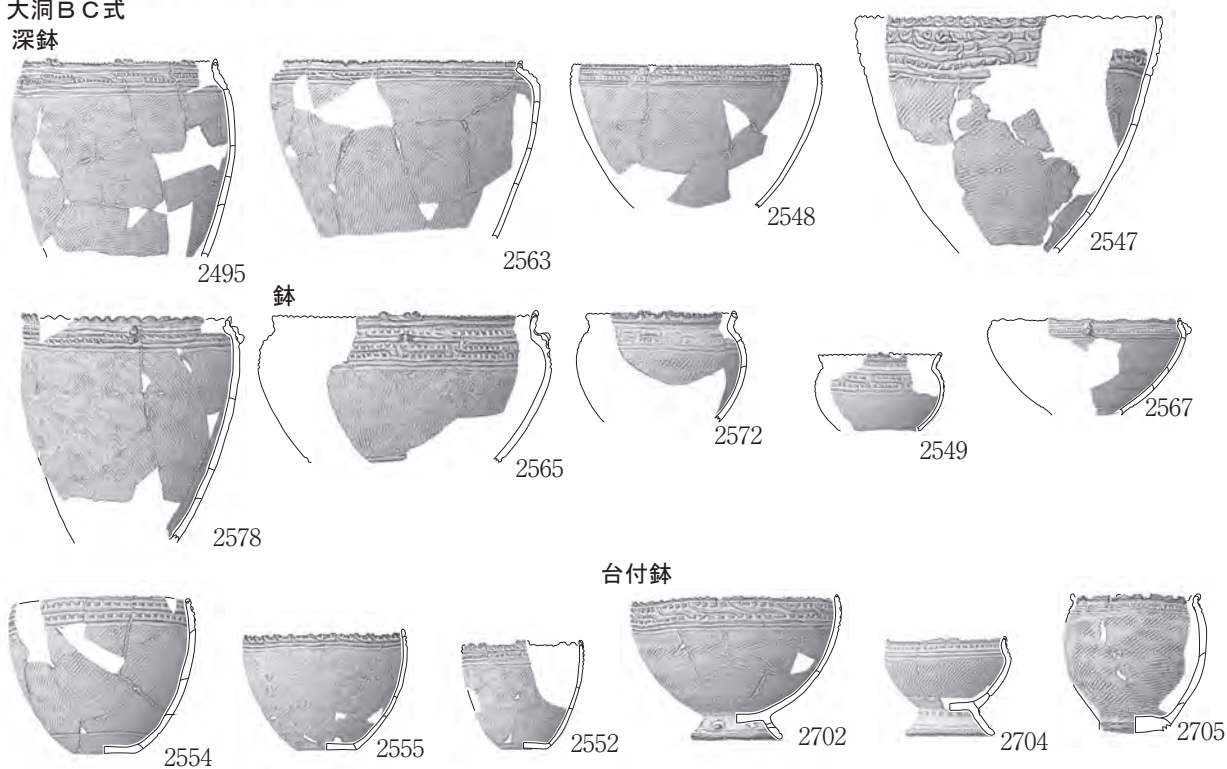
各時期の形態や文様の特徴については第四章、第六章で具体的に述べたので、ここでは詳細には触れないが、前期、中期については、本遺跡あるいは本遺跡が所在する沿岸地域の特徴ではないかと思われる点がいくつか見出せた。一方、後期、晩期では他地域との差異がないように見受けられる。

（ここまで須原）

大洞B式
深鉢



大洞BC式
深鉢



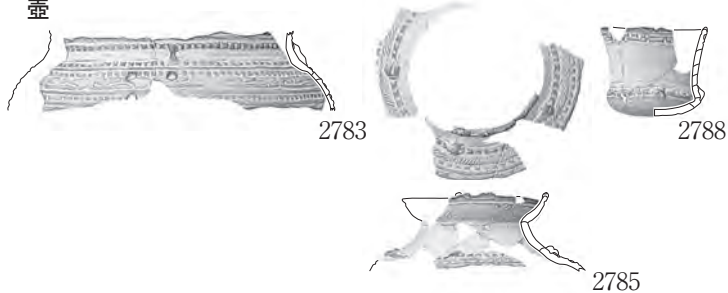
浅鉢



台付浅鉢

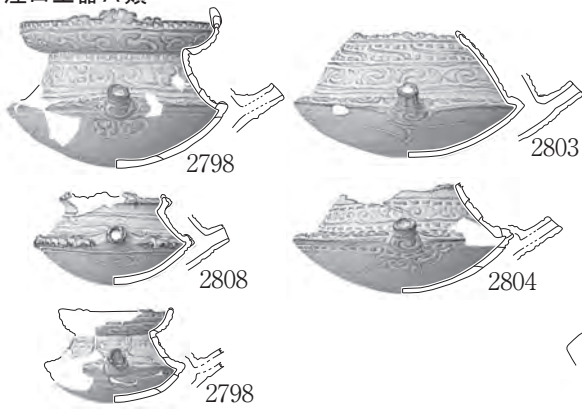


壺



第185図 大洞B・BC式集成

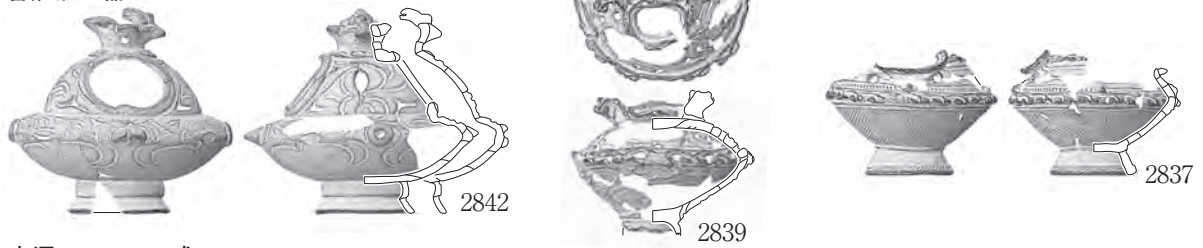
大洞BC式
注口土器A類



注口土器B類



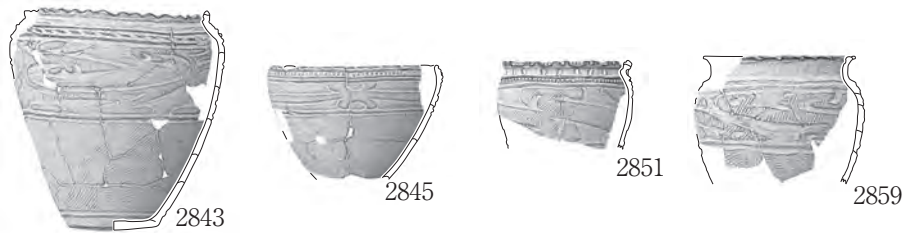
香炉形土器



大洞C1・C2式
深鉢



鉢A類



台付鉢



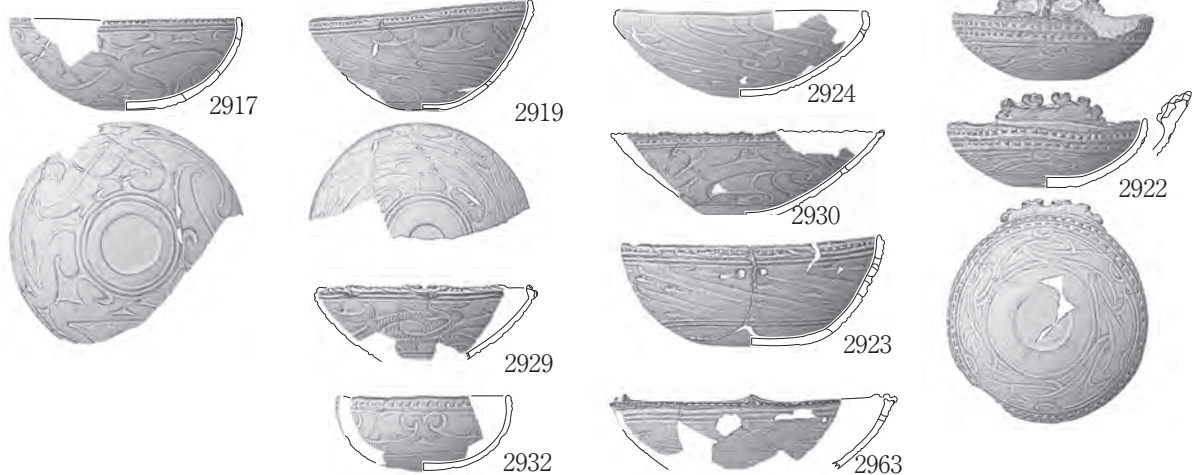
鉢B類



鉢C類

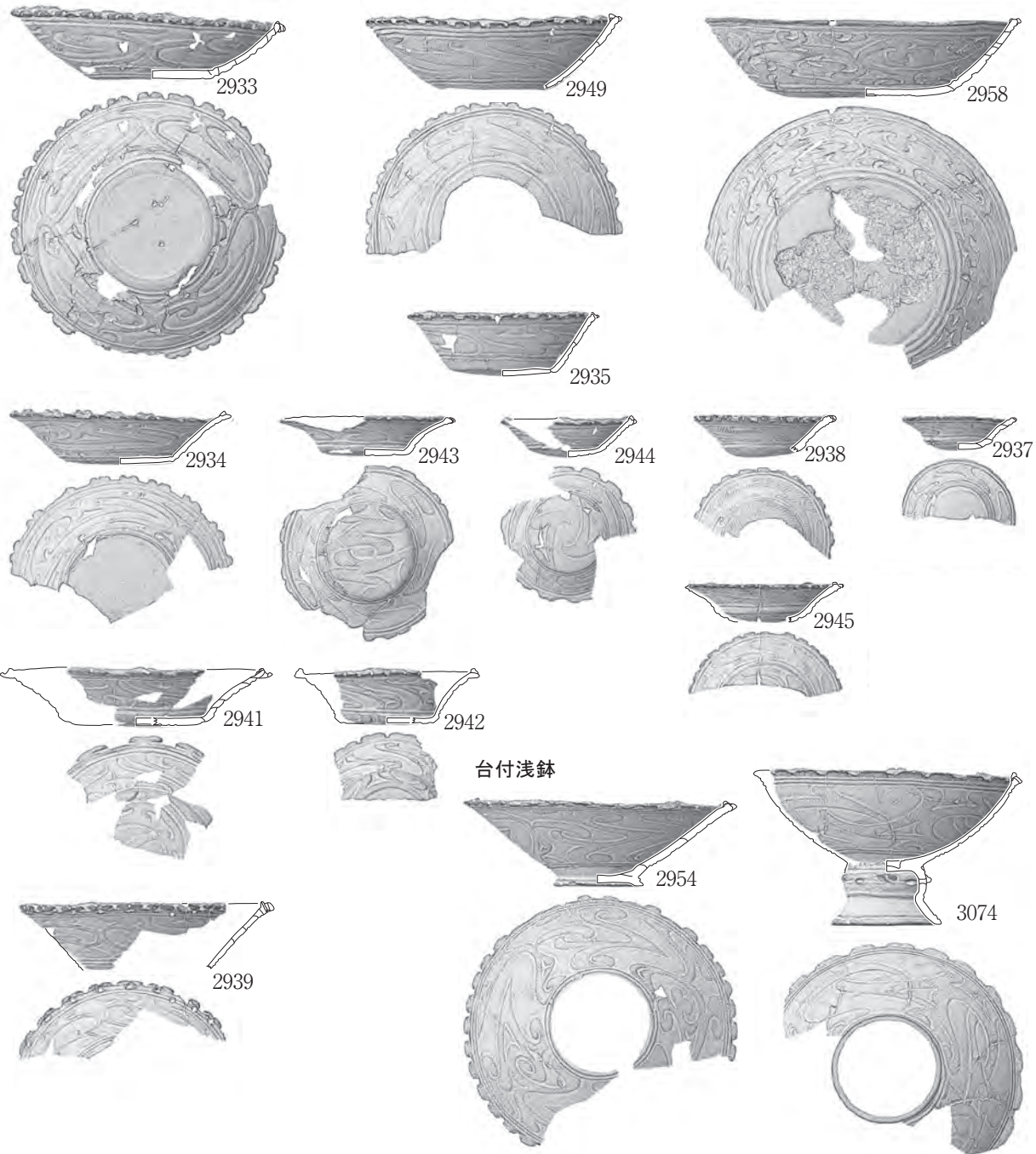


浅鉢A類



第186図 大洞BC式集成

大洞C1~C2式
浅鉢B類



壺A類



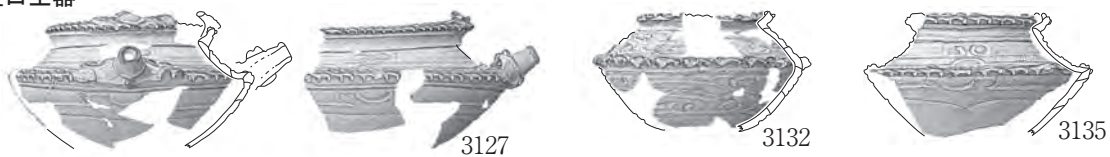
壺B類



壺C類



注口土器



第187図 大洞C1・C2式集成

【胎土からみた縄文時代における土器製作の諸相】

胎土観察の目的

土器胎土には、その材料が採取された場所という地質的特徴とその材料を選択したという当時の土器製作流儀の両者が反映されている。それゆえ、土器胎土の様相を明らかにすることによって、人や土器の移動および土器作りの実態といった、その土器を出土した遺跡にかかわる過去の社会の様子を探ることができる。

今回の浜川目沢田 I 遺跡の調査では、縄文時代前期から晩期にかけての土器が出土した。いずれの時期にも豊富な出土量があり、各時期でどのような材料をもって土器が製作され、どのように変遷していったかを窺い知る良好な資料である。出土した土器の文様や調整技法を分析することで、その遺跡を形成した集団が他の地域の集団といかなる関係性を有していたかが推察できるように、当時の土器製作流儀に基づく材料選択という行為の結果である土器胎土からも、同様の検討が可能であり、この作業によって、調査された遺跡の歴史的な位置付けをよりいっそう明確にすることも期待できる。そこで、当遺跡の資料について、肉眼による土器の胎土観察をおこなった。

観察資料

当報告書に実測図が掲載されている縄文土器のうち、208 点を観察した。観察した土器は第 11～14 表に示している。なお、胎土を観察し評価する上での作業内容の詳細、および土器胎土観察表とした第 11～14 表の記載内容については、旧稿（河本 2011）を参照されたい。

観察方法および胎土分類

①観察方法

ニコン社の携帯型実体顕微鏡ファール（倍率 20 倍）を用いて土器胎土を観察した。観察の際には、土器の断面だけでなく、器表面も観察し、総合的に土器の胎土を評価している。断面だけでは、観察面積が少なく、含まれる砂粒の種類・大きさ・量を評価するのが難しいからである。

②胎土分類（第 8・9 表）

第 8・9 表に示したような、土器に含まれる砂粒・混和材の種類および大きさによる分類を設けた。

第 8 表 砂粒・混和材の種類による胎土分類

分類	特徴
A 類	黒色光沢粒（角閃石または輝石）を一定量含む土器。
B 類	雲母を一定量含む土器。
C 類	頁岩・チャートを一定量含む土器。
D 類	結晶片岩を一定量含む土器。
E 類	凝灰岩を一定量含む土器。
F 類	火山ガラスを一定量含む土器。
G 類	酸化粒または腐り礫を一定量含む土器。
H 類	上記以外の有色砂粒を一定量含む土器。
I 類	土器片を一定量含む土器。
J 類	上記のような特徴的な砂粒・混和材を含まず、ほぼ無色鉱物（石英・長石）だけからなる土器。

※ 黒色光沢粒と雲母をともに含めば AB 類、頁岩と結晶片岩をともに一定量含めば CD 類と、上記の分類記号を足し合わせた分類を適宜設定し、土器胎土観察表に記載している。なお、一定量とは、観察した土器片中にその砂粒・混和材が不偏的に含有されており、少なくとも 2cm²中に 1 粒は 0.5mm 前後でその存在が認められる量を指す。

第 9 表 砂粒・混和材の大きさによる胎土分類

分類	特徴
2 一類	2.0mm～2.5mm の砂粒・混和材を一定量有する土器。2.5mm 以上のものはほとんど含まれていない。
1 + 類	1.5mm～2.0mm の砂粒・混和材を一定量有する土器。2.0mm 以上のものはほとんど含まれていない。
1 一類	1.0mm～1.5mm の砂粒・混和材を一定量有する土器。1.5mm 以上のものはほとんど含まれていない。
0 類	1.0mm 未満の砂粒・混和材で構成されている、および肉眼ではそれらを確認できない土器。

※ 今回観察した資料中には、2.5mm 以上の砂粒・混和材を一定量含む土器は認められなかったため、上記の基準で全ての土器を分類できた。

第 10 表 浜川目沢田 I 遺跡における縄文土器胎土の変遷

時期・型式	胎土		A 類	B 類	C 類	D 類	E 類	F 類	G 類	H 類	I 類	J 類
	黒色光沢粒を含む	雲母を含む	黒色光沢粒を含む	雲母を含む	頁岩・チャートを含む	結晶片岩を含む	凝灰岩を含む	火山ガラスを含む	酸化粒を含む	その他有色砂粒を含む	土器片を含む	石英・長石のみ
中期	大木 7a 式	28/28	21/28	—	—	17/28	—	1/28	2/28	2/28	—	—
	大木 7b 式	8/8	3/8	—	—	2/8	—	—	—	—	1/8	—
	大木 8a 式	18/18	8/18	2/18	—	3/18	4/18	—	2/18	—	4/18	—
	大木 8b 式	20/21	7/21	2/21	—	3/21	3/21	—	—	2/21	8/21	—
	大木 9 式	15/17	9/17	—	—	1/17	1/17	—	1/17	—	3/17	1/17
	大木 10 式	24/24	14/24	1/24	—	12/24	1/24	—	4/24	—	1/24	—
後期	後期前葉	19/19	13/19	—	—	4/19	2/19	—	2/19	—	—	—
	後期中葉	13/13	6/13	—	—	8/13	—	—	—	1/13	—	—
	後期後葉	8/10	5/10	1/10	—	3/10	1/10	—	—	2/10	—	—
晩期	大洞 B 式	21/23	20/23	—	—	3/23	—	9/23	—	1/23	—	—
	大洞 BC 式	13/15	10/15	—	—	1/15	—	9/15	—	—	—	—
	大洞 C1~C2 式	5/12	3/12	1/12	—	—	—	12/12	—	—	—	—

※たとえば1つの資料中に黒色光沢粒と雲母をともに含めば、それぞれで1点ずつ集計しているため、横列の合計は総観察点数より多くなる。

観察結果（第 10 表、第 188～192 図）

第 10 表に、縄文時代中期から晩期にかけての土器胎土の様相を示した。黒色光沢粒を含む A 類と雲母を含む B 類に該当するものは、ほぼ全ての時期で一定して多くみられる一方、結晶片岩を含む D 類、火山ガラスを含む F 類、土器片を含む I 類は、時期ごとでそのあり方が大きく異なる。そこで、これら時期的に大きく変動するものに注目して、当遺跡の縄文土器胎土の様相について述べる。

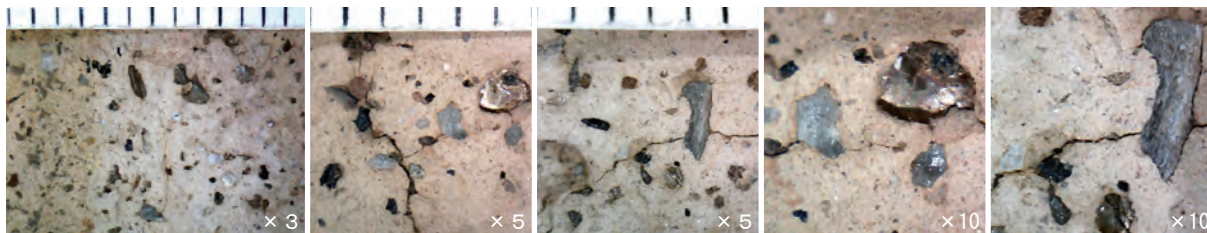
大木 7a 式期では D 類（第 188 図-1・2）の存在が顕著であるが、大木 7b 式期には減少する。一方、この時期から I 類（第 188 図-3）が出現し、以後大木 8b 式期にかけてその割合は増加する。大木 8a 式期には E 類（第 188 図-4・5）が出現し、常に少数ながら後期後葉まで認められる。大木 8b 式期になると I 類が顕著になり、当遺跡では焼成失敗品にもこの存在を確認できた（第 189 図-8）。この材料を使用する流儀が当遺跡の集団に定着していたことが窺える。大木 9 式期から I 類は減少し、大木 10 式期には極少数となる。しかし反対に、この時期から D 類が再び顕著な存在となる（第 189 図-11）。

後期になると I 類は消滅し、D 類（第 190 図-13・17・18）以外に顕著なものはみられない。大木 10 式期以降、後期を通じて使われる材料に大きな変化はない。ただし、掲載番号 2032 の内面に赤色顔料が残る注口土器の胎土に、当遺跡では極少数である海綿骨針の含有が認められた（第 190 図-15）。器種や赤彩されたものとそれ以外とで材料の使い分けがあったか否か、今後注意すべきであろう。

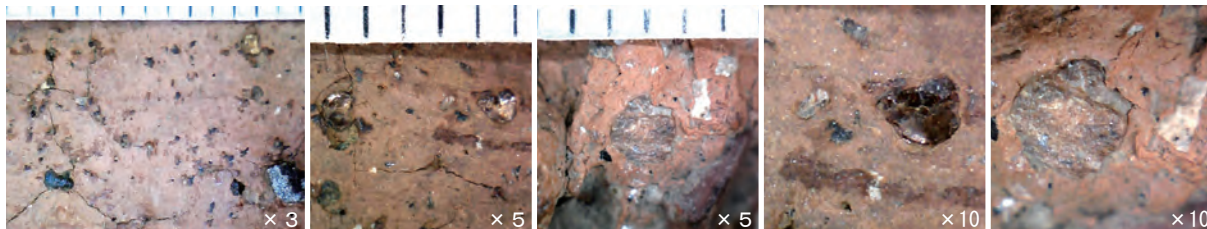
晩期になると使用される材料が大きく変化し、F 類が顕著になる（第 192 図-21・23）。大洞 B 式期に出現した F 類は、時期が下るにつれてその割合が増加する一方、後期後葉まで多くみられた D 類は減少していく。なお、特筆すべきものとして、掲載番号 2445 の 1 点だけであるが、2 種類の素地により製作された土器が確認できた（第 191 図-19）。隆帯などの装飾部ではなく、器の本体部に 2 種類の素地を使う例は、東北では仙台市西台畑遺跡出土の土師器に存在するが（仙台市教育委員会 2010）、縄文土器では極めて珍しい例であろう。

評価・検討

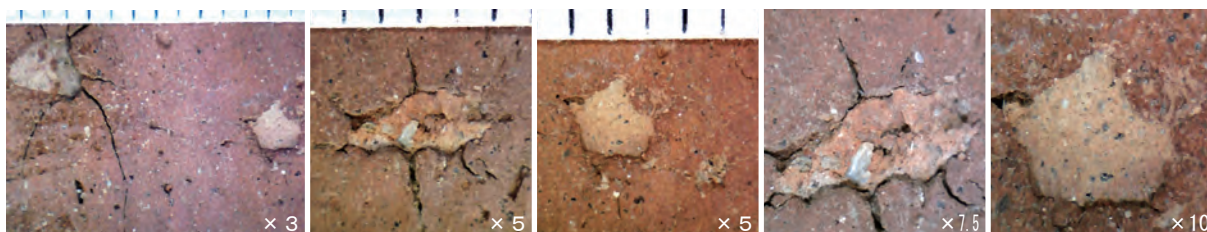
以上、土器胎土の様相を概観したが、特に F 類や I 類の時期的消長が、これまで秋田県や岩手県内陸部で確認されてきた状況（西田 1998、河本 2017）と同様であることは注目に値する。文様だけでなく、材料選択という土器製作の出発点から共通するほどに、北上山地を越えて沿岸部と内陸部との集団間に強い関係性があったことが窺える。また、2 種類の素地を使った土器の存在からは、当時の土器製作の場には複数種類の材料が並べられており、決して特定の限られた材料だけで土器を作っていたわけではなく、多様な材料を用いて土器作りをおこなっていたことが推察される。（河本）



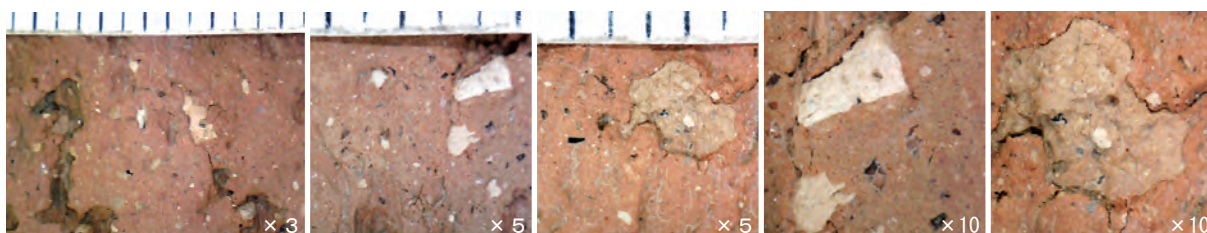
1. 観察No.9 (掲載番号 974 大木 7a 式 (古) 深鉢 胎土 ABD2- 類)



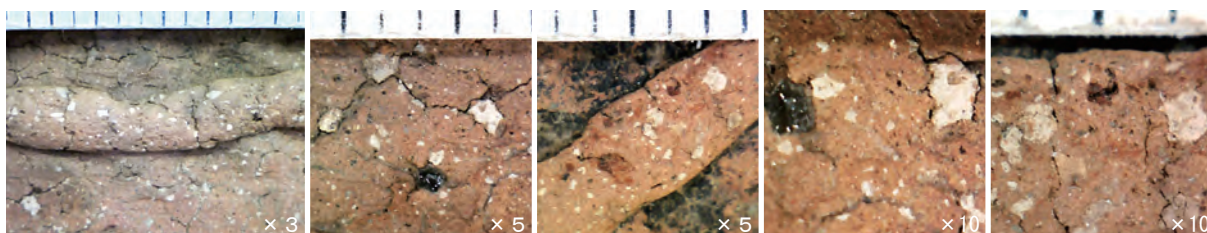
2. 観察No.16 (掲載番号 985 大木 7a 式 (古) 深鉢 胎土 ABD1- 類)



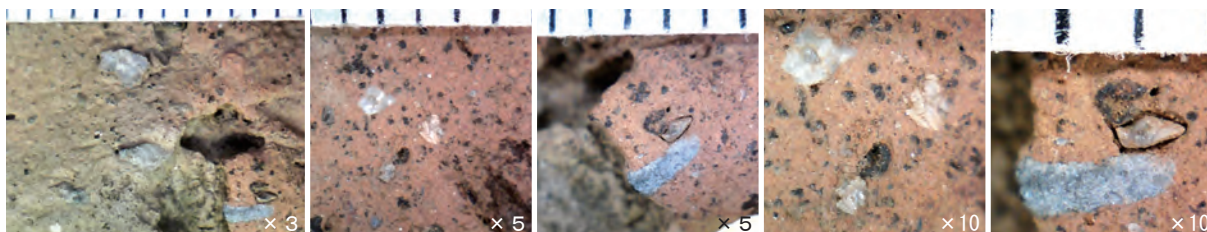
3. 観察No.35 (掲載番号 1045 大木 7b 式 深鉢 胎土 A10 類)



4. 観察No.39 (掲載番号 1115 大木 8a 式 (古) 深鉢 胎土 AE11- 類)

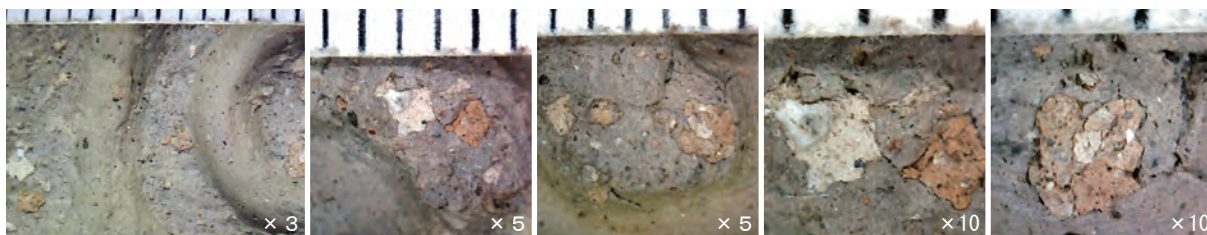


5. 観察No.45 (掲載番号 1322 大木 8a 式 (新) 深鉢 胎土 AE0 類)

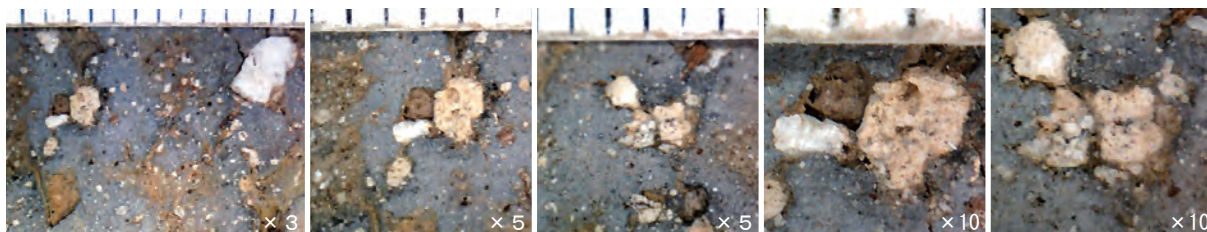


6. 観察No.47 (掲載番号 1329 大木 8a 式 (新) 深鉢 胎土 ABD1- 類)

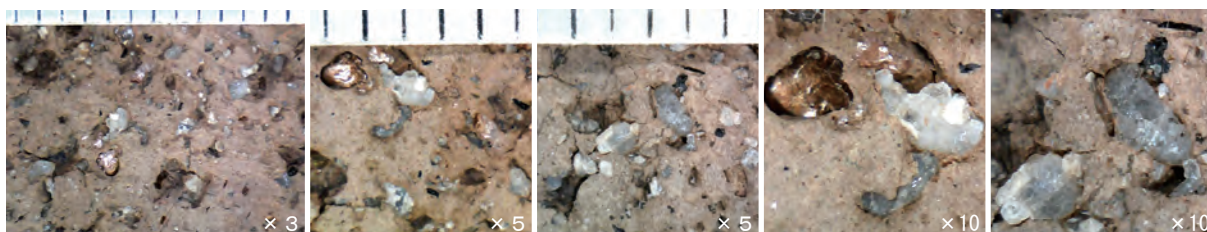
1 出土遺物の検討



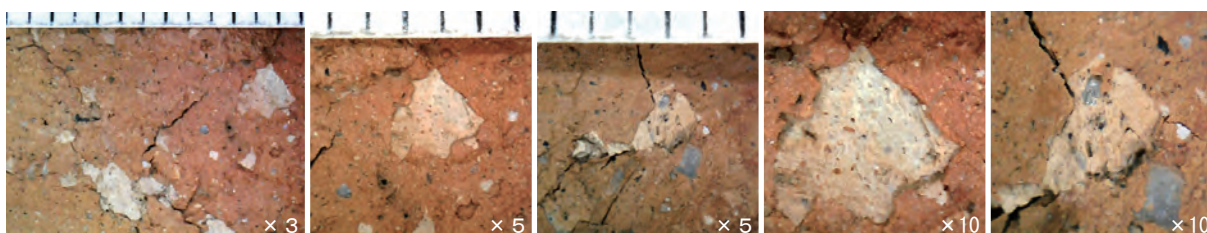
7. 観察No.58 (掲載番号 1411 大木 8b 式 (古) 深鉢 胎土 AEI1- 類)



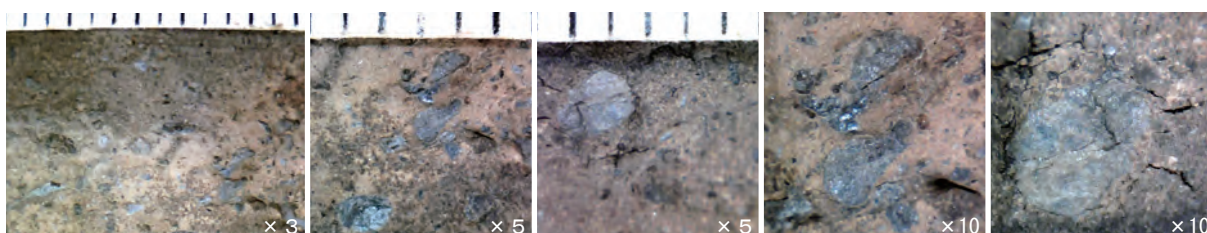
8. 観察No.75 (掲載番号 1538 大木 8b 式 (新) 深鉢 (失敗品) 胎土 AI1+ 類)



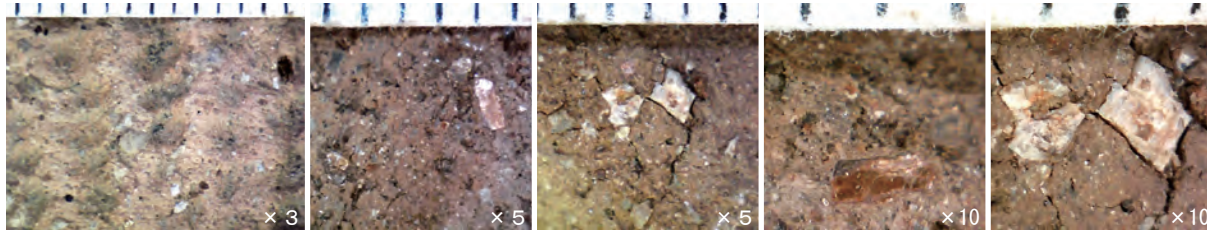
9. 観察No.77 (掲載番号 1588 大木 9 式 (新) 深鉢 胎土 AB1- 類)



10. 観察No.79 (掲載番号 1590 大木 9 式 (新) 深鉢 胎土 AI2- 類)

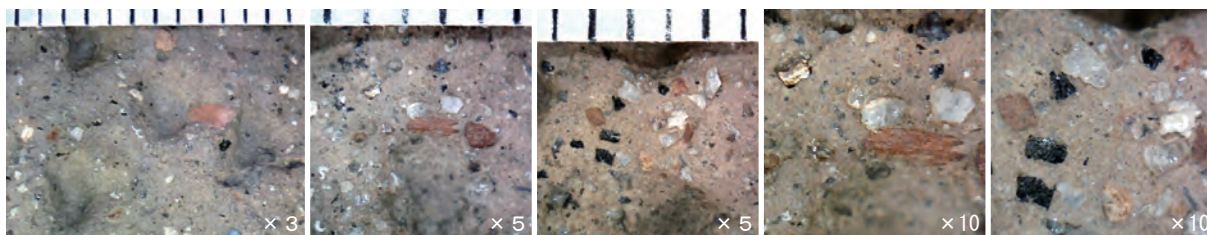


11. 観察No.93 (掲載番号 1647 大木 10 式 (古) 深鉢 胎土 AD2- 類)

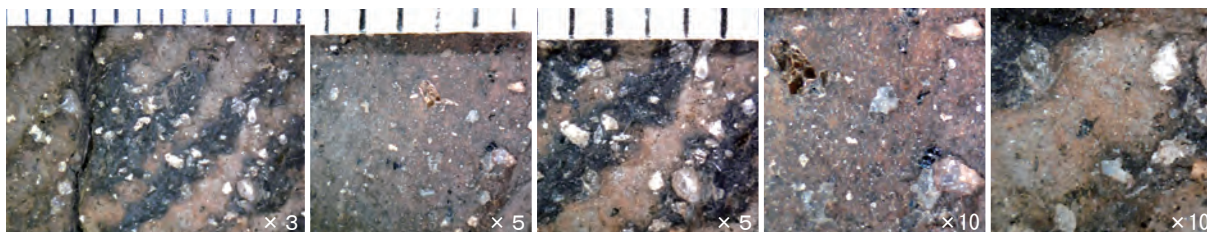


12. 観察No.103 (掲載番号 1680 大木 10 式 (中) 深鉢 胎土 AB1- 類)

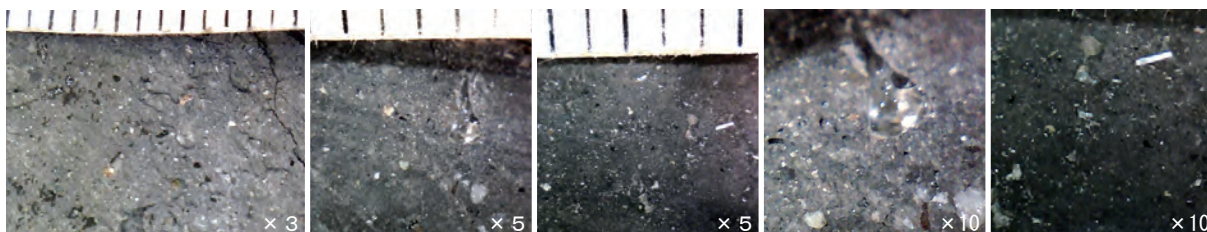
第 189 図 縄文土器の胎土写真 (2) 中期大木 8b ~ 10 式



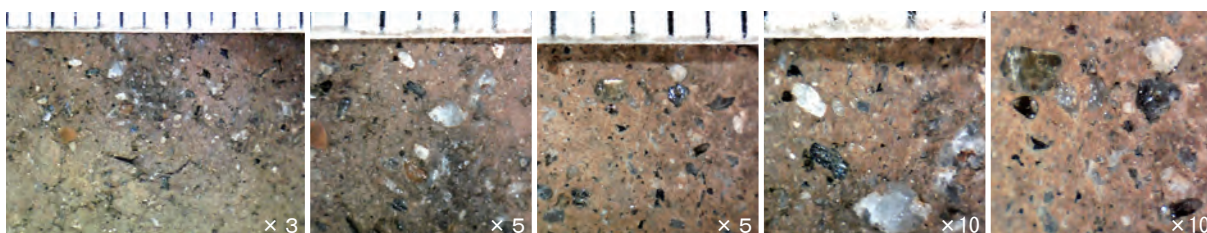
13. 観察No.132 (掲載番号 1885 後期前葉後半 深鉢 胎土 ABDO 類)



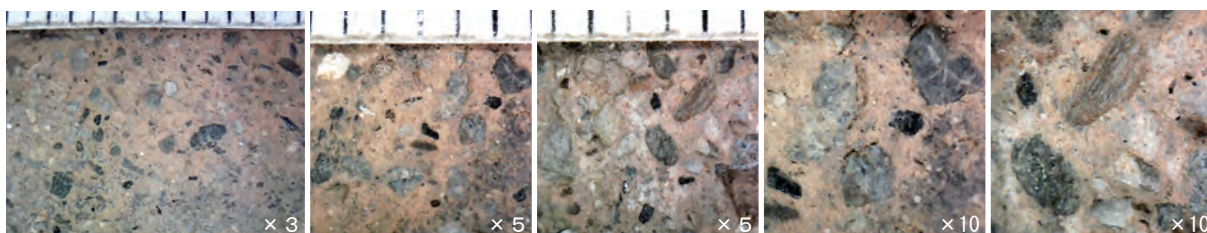
14. 観察No.134 (掲載番号 1887 後期前葉後半 深鉢 胎土 AB1- 類)



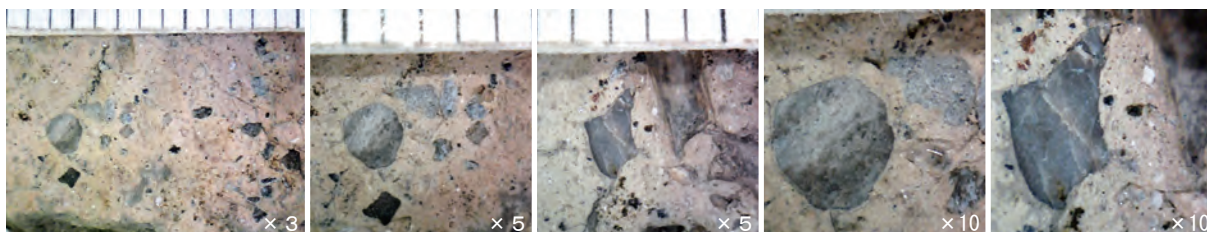
15. 観察No.138 (掲載番号 2032 後期中葉前半 注口土器 胎土 AHO 類)



16. 観察No.142 (掲載番号 2059 後期中葉後半 深鉢 胎土 AB1- 類)



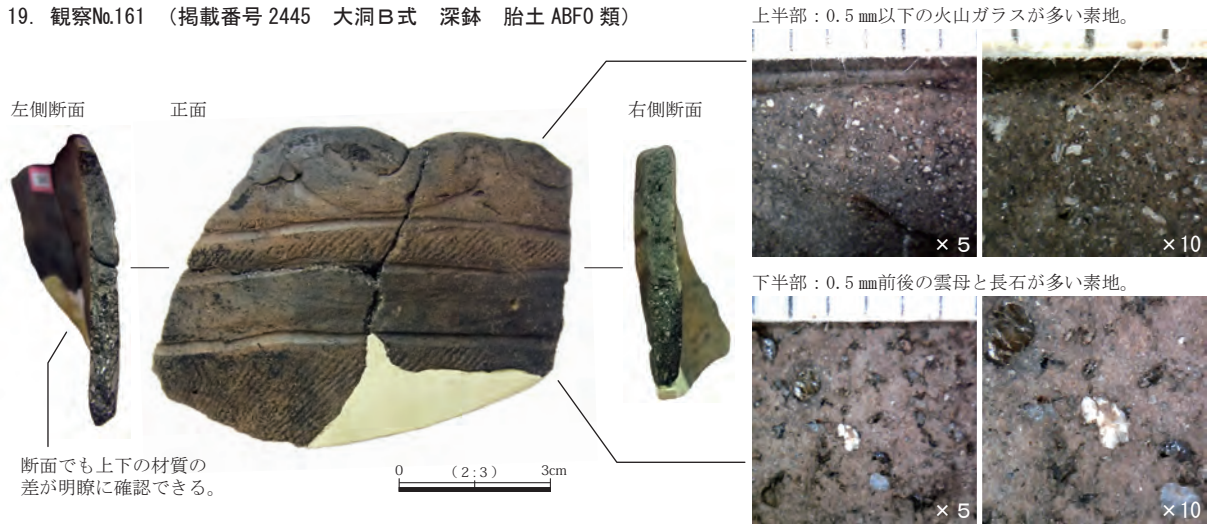
17. 観察No.144 (掲載番号 2061 後期中葉後半 深鉢 胎土 AD1- 類)



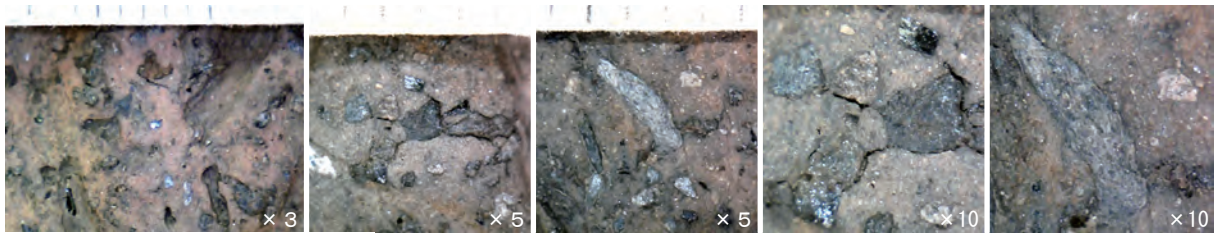
18. 観察No.156 (掲載番号 2638 後期後葉 深鉢 胎土 ADE1- 類)

1 出土遺物の検討

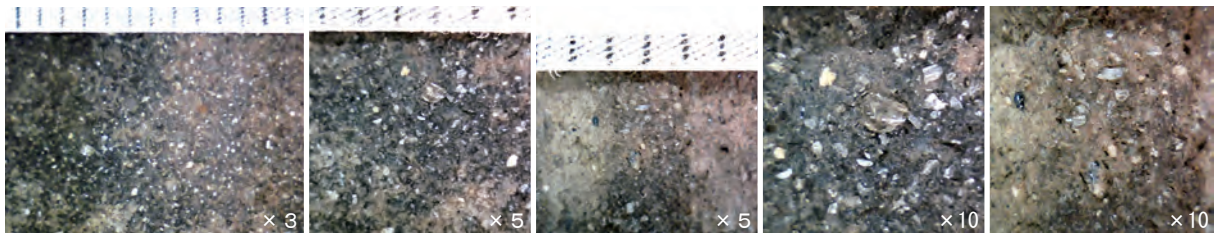
19. 観察No.161 (掲載番号 2445 大洞B式 深鉢 胎土 ABF0 類)



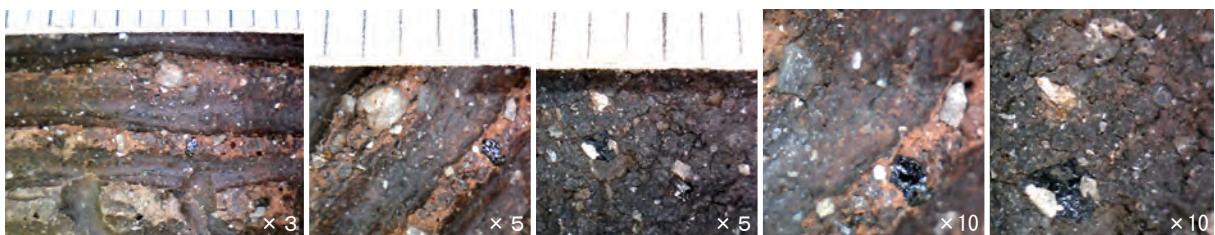
第 191 図 縄文土器の胎土写真 (4) 2種類の素地を使用した土器



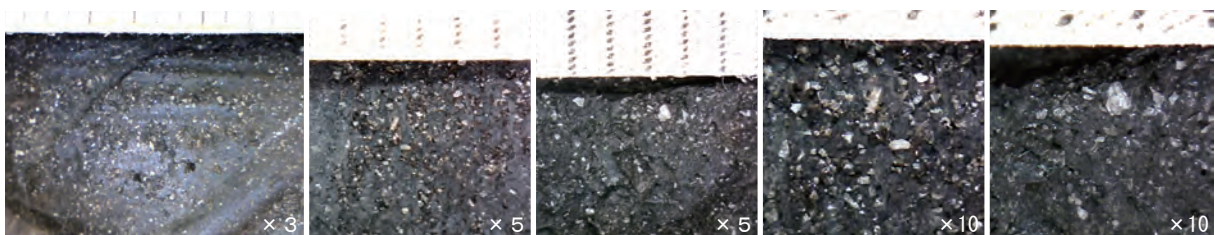
20. 観察No.171 (掲載番号 2467 大洞B式 深鉢 胎土 ABD1-類)



21. 観察No.187 (掲載番号 2621 大洞BC式 鉢 胎土 ABF0 類)



22. 観察No.192 (掲載番号 2634 大洞BC式 鉢 胎土 AB1-類)



23. 観察No.204 (掲載番号 3055 大洞C1式 浅鉢 胎土 F0 類)

第 192 図 縄文土器の胎土写真 (5) 晩期大洞B~大洞C1式

第11表 土器胎土観察表(1)

観察 No.	掲載 番号	掲載 器種	時期・ 器種	胎土 分類	色調				含有砂粒・混和材				石炭	石英	長石	土砂片	
					内面 (G表面)	外面 (G裏面)	肌色 光沢度	雲母 チャート	積晶片岩 チャート	凝灰岩	火山 ガラス	酸化 ガラス					その他 有色砂粒
1	964	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB1-	10185/3 にない質焼	10185/2 肌色	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
2	965	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB1-	10187/3 にない質焼	2.534/1 肌色	0.5	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
3	966	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB0	2.534/1 肌色	10185/2 にない質焼	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
4	968	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB2-	5186/6 肌色	7.5186/4 にない質焼	(1.0)	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
5	969	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB1-	10187/4 にない質焼	2.532/2 肌色	(1.0)	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
6	970	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB1-	10184/3 にない質焼	10185/2 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
7	971	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB1-	10186/4 にない質焼	10185/2 肌色	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
8	972	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB2-	10185/4 にない質焼	10186/2 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
9	974	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB2-	10187/4 にない質焼	7.5186/4 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
10	975	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB2-	10187/4 にない質焼	10186/4 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
11	976	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB1-	10185/3 にない質焼	2.532/1 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
12	978	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB1-	10186/3 にない質焼	2.532/1 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
13	979	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB2-	10187/4 にない質焼	7.5186/4 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
14	980	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB0	10186/4 にない質焼	10185/2 肌色	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
15	982	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB1-	2.532/1 肌色	10185/4 にない質焼	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
16	985	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB1-	7.5186/4 にない質焼	2.532/1 肌色	(1.0)	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
17	986	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB1-	10186/4 にない質焼	10187/4 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
18	989	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB1-	2.532/2 肌色	7.5186/6 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
19	993	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB1-	10184/1 肌色	10186/4 にない質焼	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
20	994	大木2号(左) 甕鉢	大木2号(左) 甕鉢	AB0	2.534/1 肌色	7.5186/4 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
21	1016	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB1+	10185/3 にない質焼	10185/4 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
22	1017	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB2-	2.532/6 肌色	7.5186/6 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
23	1019	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB1-	10185/1 肌色	7.5186/3 肌色	(1.0)	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
24	1020	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB2-	10185/3 にない質焼	10185/2 肌色	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
25	1021	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB1-	2.532/1 肌色	2.534/1 肌色	<0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
26	1024	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB1-	5186/6 肌色	5186/6 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
27	1027	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB2-	10185/4 にない質焼	10184/4 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
28	1028	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB1-	10186/4 にない質焼	10185/3 肌色	0.5多	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
29	1032	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB0	2.532/1 肌色	10184/2 肌色	0.5少	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
30	1036	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB1-	7.5186/6 肌色	7.5186/6 肌色	0.5多	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
31	1038	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB0	10185/3 にない質焼	10185/2 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
32	1039	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB0	5186/6 肌色	7.5186/3 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
33	1043	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB0	10186/4 肌色	10187/4 肌色	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
34	1044	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB1-	7.5186/3 肌色	7.5186/3 肌色	0.5多	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
35	1045	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB0	5186/6 肌色	7.5186/3 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
36	1055	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB1-	2.532/1 肌色	10184/2 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
37	1066	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB1-	10186/3 肌色	5186/6 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
38	1068	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB0	10184/2 肌色	7.5186/2 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
39	1115	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB1-	10186/4 肌色	5186/6 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
40	1116	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB1-	7.5186/6 肌色	7.5186/6 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
41	1069	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB0	10187/4 肌色	10186/4 肌色	0.5多	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
42	1097	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB1-	10187/4 肌色	5186/6 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
43	1104	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB0	10185/4 にない質焼	7.5186/4 肌色	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5	(1.0)	0.5
44	1320	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB1-	2.532/1 肌色	7.5186/6 肌色	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少
45	1322	大木2号(右) 甕鉢	大木2号(右) 甕鉢	AB0	5186/6 肌色	10184/4 肌色	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少	(1.0)	0.5少

第12表 土器胎土観察表(2)

観察 No.	掲載 番号	掲載 器種	時期・ 器種	胎土 分類	色面			含有砂粒・黒田材			酸化度	火山 ガラス	石炭	石英	その他 有色砂粒	土粒子
					内面 (α表)	外面 (α裏)	断面 (α断面)	細灰質 土	粗灰質 土	黒田材 土						
46	1326	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	2.537/1 粗灰質 にぶい質	7.538/6 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
47	1329	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AD1-	10382/3 粗灰質 にぶい質	10382/4 粗 にぶい質	0.5少	(2.0) 0.5	(2.0) 0.5	(2.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
48	1338	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/3 粗灰質 にぶい質	10382/4 粗 にぶい質	0.5少	(2.0) 0.5	(2.0) 0.5	(2.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
49	1339	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	2.534/1 粗灰質 にぶい質	7.538/6 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
50	1343	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/2 粗灰質 にぶい質	10382/3 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
51	1344	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/4 粗灰質 にぶい質	7.538/6 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
52	1346	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/4 粗灰質 にぶい質	7.538/6 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
53	1351	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/4 粗灰質 にぶい質	7.538/6 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
54	408	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/4 粗灰質 にぶい質	7.538/6 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
55	1408	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/2 粗灰質 にぶい質	10382/3 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
56	1409	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/4 粗灰質 にぶい質	10382/3 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
57	1410	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	2.537/2 粗灰質 にぶい質	7.538/6 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
58	1411	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/4 粗灰質 にぶい質	10382/3 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
59	1412	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	2.537/2 粗灰質 にぶい質	7.538/6 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
60	1413	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/2 粗灰質 にぶい質	10382/3 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
61	1414	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/3 粗灰質 にぶい質	10382/4 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
62	1416	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	2.537/1 粗灰質 にぶい質	7.538/6 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
63	1417	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/3 粗灰質 にぶい質	10382/4 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
64	1415	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/3 粗灰質 にぶい質	10382/4 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
65	1474	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/4 粗灰質 にぶい質	7.538/6 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
66	1478	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/2 粗灰質 にぶい質	10382/3 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
67	1480	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/4 粗灰質 にぶい質	7.538/6 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
68	1481	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	7.538/6 粗灰質 にぶい質	10382/3 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
69	1482	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/4 粗灰質 にぶい質	10382/3 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
70	1483	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/4 粗灰質 にぶい質	7.538/6 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5
71	1485	大木3(胎) 甕鉢	大木3(胎) 甕鉢	AB1-	10382/3 粗灰質 にぶい質	10382/4 粗 にぶい質	0.5少	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	(1.0) 0.5	0.5少	0.5	0.5	0.5少	0.5	0.5

第13表 土器胎土観察表 (3)

観察 No.	掲載 番号	掲載 時期・ 器種	胎土 分類	色面				含有砂粒・黒母粒				長石	石英	その他 有色砂粒	酸化 ガラス	火山 ガラス	土砂片
				内面 (G表)	外面 (G裏)	顔色 光沢	雲母 チャート	結晶片 チャート	細灰 チャート	酸化 ガラス	火山 ガラス						
96	1454	大木山(古) 深鉢	A0	7.538/6 縹	1038/4 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
97	1457	大木山(古) 深鉢	A2-	2.535/2 明赤	7.538/6 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
98	1459	大木山(古) 深鉢	A0-	7.538/3 縹	7.538/4 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
99	1461	大木山(古) 深鉢	A0	1038/2 縹	7.538/4 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
100	1464	大木山(古) 深鉢	A1+	2.535/2 明赤	1038/2 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
101	1469	大木山(古) 深鉢	A1-	7.537/4 縹	1038/4 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
102	1476	大木山(古) 深鉢	A0	1038/4 縹	1038/2 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
103	1480	大木山(古) 深鉢	A1-	1038/3 縹	1038/2 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
104	1481	大木山(古) 深鉢	A0	1037/3 縹	2.534/1 明赤	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
105	1485	大木山(古) 深鉢	A0	538/6 縹	7.538/5 縹	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
106	1704	大木山(古) 深鉢	A1-	1038/3 縹	1038/2 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
107	1705	大木山(古) 深鉢	A0	1037/3 縹	1037/4 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
108	1706	大木山(古) 深鉢	A0	538/8 明赤	2.538/6 明赤	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
109	1707	大木山(古) 深鉢	A0	1038/2 縹	1038/2 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
110	1708	大木山(古) 深鉢	A2-	7.538/4 縹	1038/4 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
111	1709	大木山(古) 深鉢	A0	2.534/1 明赤	1038/2 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
112	1711	大木山(古) 深鉢	A0	2.536/2 明赤	1038/4 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
113	1712	大木山(古) 深鉢	A0	538/8 明赤	538/6 明赤	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
114	1714	大木山(古) 深鉢	A1-	1038/4 縹	1038/2 縹	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
115	1715	大木山(古) 深鉢	A0	1038/2 縹	1038/2 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
116	1716	大木山(古) 深鉢	A1-	7.537/6 縹	1038/3 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
117	1836	後期中継後半 深鉢	A1-	1037/3 縹	1038/3 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
118	1837	後期中継後半 深鉢	A1-	1037/4 縹	1038/3 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
119	1838	後期中継後半 深鉢	A1-	2.535/2 明赤	1038/2 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

観察 No.	掲載 番号	掲載 時期・ 器種	胎土 分類	色面				含有砂粒・黒母粒				長石	石英	その他 有色砂粒	酸化 ガラス	火山 ガラス	土砂片
				内面 (G表)	外面 (G裏)	顔色 光沢	雲母 チャート	結晶片 チャート	細灰 チャート	酸化 ガラス	火山 ガラス						
120	1841	後期中継後半 深鉢	A2-	7.538/6 縹	1037/4 縹	0.5多	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
121	1842	後期中継後半 深鉢	A0	1038/4 縹	2.538/6 明赤	0.5多	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
122	1843	後期中継後半 深鉢	A1-	1038/2 縹	1038/2 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
123	1845	後期中継後半 深鉢	A1-	1038/2 縹	1038/2 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
124	1846	後期中継後半 深鉢	A1-	7.538/3 縹	1038/1 縹	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
125	1847	後期中継後半 深鉢	A1-	2.537/3 明赤	1038/2 縹	0.5多	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
126	1848	後期中継後半 深鉢	A1-	7.538/4 縹	1038/2 縹	0.5多	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
127	1874	後期中継後半 深鉢	A1-	1038/2 縹	1037/3 縹	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
128	1877	後期中継後半 深鉢	A0	1038/2 縹	1037/3 縹	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
129	1879	後期中継後半 深鉢	A0	1038/1 縹	1038/3 縹	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
130	1881	後期中継後半 深鉢	A0	1038/1 縹	538/6 明赤	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
131	1884	後期中継後半 深鉢	A0	7.538/6 縹	1038/4 縹	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
132	1885	後期中継後半 深鉢	A0	2.537/1 明赤	1038/3 縹	0.5多	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
133	1886	後期中継後半 深鉢	A0	2.536/2 明赤	2.538/1 明赤	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
134	1887	後期中継後半 深鉢	A1-	1038/1 縹	1038/2 縹	0.5多	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
135	1859	後期中継後半 深鉢	A0	1038/4 縹	1038/4 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
136	2027	後期中継後半 深鉢	A0	1038/1 縹	2.532/1 明赤	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
137	2028	後期中継後半 深鉢	A0	2.535/1 明赤	537/1 明赤	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
138	2032	後期中継後半 深鉢	A0	2.534/1 明赤	2.532/1 明赤	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
139	2056	後期中継後半 深鉢	A0	538/6 明赤	7.538/4 縹	0.5多	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
140	2057	後期中継後半 深鉢	A0	2.534/1 明赤	1038/4 縹	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
141	2058	後期中継後半 深鉢	A1+	2.537/1 明赤	1038/3 縹	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
142	2059	後期中継後半 深鉢	A1-	82/0 明赤	7.538/6 縹	0.5多	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
143	2060	後期中継後半 深鉢	A1-	7.538/2 縹	1038/2 縹	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
144	2061	後期中継後半 深鉢	A1-	2.535/2 明赤	2.538/4 明赤	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
145	2062	後期中継後半 深鉢	A0	1038/2 縹	1038/2 縹	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
146	2063	後期中継後半 深鉢	A0	1038/2 縹	1038/2 縹	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
147	2064	後期中継後半 深鉢	A1-	1038/1 縹	1038/3 縹	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
148	2065	後期中継後半 深鉢	A1-	2.535/2 明赤	7.538/4 縹	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
149	2175	後期中継後半 深鉢	D1-	2.535/2 明赤	1038/2 縹	0.5多	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
150	2177	後期中継後半 深鉢	CH1-	2.534/1 明赤	2.534/1 明赤	0.5少	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

第14表 土器胎土観察表(4)

観察 No.	掲載 番号	時期・ 器種	胎土 分類	色面			含有砂粒・炭粉粒			石英	長石	土砂片
				内面 (ϕ 基準)	外面 (ϕ 基準)	肌色 光沢	酸化岩	火山 ガラス	酸化 炭			
151	2216	後期縄文 器種	AB0	M076/4 肌色 に少ない炭粉粒	M076/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5				0.5	0.5	(1.0)
152	2217	後期縄文 器種	AH0	7.530/6 肌色 に少ない炭粉粒	7.530/6 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
153	2218	後期縄文 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
154	2219	後期縄文 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
155	2220	後期縄文 器種	AB0	2.530/8 肌色 に少ない炭粉粒	3.536/6 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
156	2258	後期縄文 器種	AB1-	M076/4 肌色 に少ない炭粉粒	2.537/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
157	2176	後期縄文 器種	AB0	N3/0 肌色 に少ない炭粉粒	2.536/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
158	2178	後期縄文 器種	A0	2.531/2 肌色 に少ない炭粉粒	2.536/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
159	2459	大形B 器種	AB1-	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	7.530/6 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
160	2440	大形B 器種	AB1-	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	7.538/4 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
2445	大形B 器種	AB0	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
2446	大形B 器種	AB0	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
161	2447	大形B 器種	AB0	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
162	2447	大形B 器種	AB0	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
163	2448	大形B 器種	AB0	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
164	2449	大形B 器種	AB0	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
165	2450	大形B 器種	AB1-	1.083/1 肌色 に少ない炭粉粒	N3/0 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
166	2453	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.086/4 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
167	2454	大形B 器種	AB0	1.083/2 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
168	2463	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.086/4 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
169	2464	大形B 器種	AB1-	1.083/4 肌色 に少ない炭粉粒	1.083/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
170	2465	大形B 器種	AB1-	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
171	2467	大形B 器種	AB1-	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.086/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
172	2468	大形B 器種	AB1-	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	7.530/6 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
173	2452	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.086/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
174	2455	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.086/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
175	2456	大形B 器種	AB0	N3/0 肌色 に少ない炭粉粒	N3/0 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
176	2458	大形B 器種	AB0	2.536/2 肌色 に少ない炭粉粒	1.086/4 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
177	2461	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
178	2469	大形B 器種	AB1-	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.086/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
179	2470	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.086/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
180	2460	大形B 器種	AB0	N3/0 肌色 に少ない炭粉粒	N3/0 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
181	2451	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.086/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5

観察 No.	掲載 番号	時期・ 器種	胎土 分類	色面			含有砂粒・炭粉粒			石英	長石	土砂片
				内面 (ϕ 基準)	外面 (ϕ 基準)	肌色 光沢	酸化岩	火山 ガラス	酸化 炭			
182	2494	大形B 器種	AB1-	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	7.530/6 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
183	2495	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
184	2625	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
185	2626	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
186	2620	大形B 器種	AB0	1.084/3 肌色 に少ない炭粉粒	2.532/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
187	2621	大形B 器種	AB0	1.084/3 肌色 に少ない炭粉粒	2.532/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
188	2630	大形B 器種	AB1-	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
189	2631	大形B 器種	AB0	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
190	2632	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
191	2633	大形B 器種	AB1-	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
192	2634	大形B 器種	AB1-	1.084/3 肌色 に少ない炭粉粒	1.084/3 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
193	2635	大形B 器種	AB0	1.084/4 肌色 に少ない炭粉粒	1.084/3 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
194	2636	大形B 器種	AB0	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	7.530/6 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
195	2637	大形B 器種	AB0	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
196	2640	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.084/3 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
197	2498	大形B 器種	AB0	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
198	2499	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
199	2875	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.532/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
200	2876	大形B 器種	AB0	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
201	2877	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
202	2878	大形B 器種	AB0	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	2.532/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
203	2879	大形B 器種	AB1-	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.084/2 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
204	3055	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.532/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
205	3056	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
206	3063	大形B 器種	AB0	1.084/4 肌色 に少ない炭粉粒	1.084/4 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
207	3064	大形B 器種	AB0	2.531/1 肌色 に少ない炭粉粒	2.532/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5
208	3068	大形B 器種	AB0	1.084/1 肌色 に少ない炭粉粒	1.084/1 肌色 に少ない炭粉粒	肌色 0.5						0.5

※観察No.3・15810.5mm前後の胎土観察を一定量含む。観察No.12・118・135・162・203にも転少量ではあるが0.5mm前後の胎土観察を一定量含む。

【土偶・土製品について】

調査区南側のⅢ層（一部Ⅳ～Ⅴ層）で土偶や土製品が出土している（170 図）。

土偶は調査区南側のほぼ中央に集中する。出土層位と形態からみて、概ね後期、晩期の土偶である。近年沿岸地域でも遺跡の調査件数が増え、土偶の出土事例も増加傾向にある。本遺跡もその一つに数えられるが、晩期の土偶の出土事例はまだ少なく、その点で貴重である。しかし大洞 BC 式、大洞 C1 式の土器が膨大な出土量であるのに対し、土偶は第 2 分冊第 199 図に示したものが概ね全てであり、割合的には非常に少ないと言える。この点は後期の土偶も同様である。

土製品も調査区南側のほぼ中央に集中する（第 170 図）。土製品の器種、あるいは形態から後期に帰属するものが多い。概ね該期の遺跡から出土する土製品であり、本遺跡特有の土製品はない。なおすでに述べた通り、土製品は各器種 1～2 点程度出土するのみで、後期の土器出土量と比較すると、非常に少ない。他地域で土製品が出土する後期の遺跡と比較しても少ない方であると言える。

多くの土偶・土製品共に遺構外から出土し、その出土状況に特異性は見出せない。また遺構内から出土するものも同様で、故意に遺構内に置かれたものではなかった。

【石器・石棒類・石製品について】

第Ⅶ章で述べた通り、本遺跡からは膨大な量の石器が出土している。これらの石器は、出土した土器に共伴することを考えると、石器の時期は、縄文時代前期から晩期の広い範疇に含まれる。また縄文土器がそうであるように、石器も遺構外からの流れ込みが多い可能性が高い。傾向として見るならば、調査区北側Ⅴ層から出土した石器は中期に、調査区南側Ⅲ層から出土した石器は後晩期に帰属する可能性が高い。また第Ⅶ章で示した器種ごとの分布図を同じく縄文土器の分布図と照らし合わせて、出土が集中する範囲が同じ土器（型式）があれば、その時期に比定される石器の可能性が高くなる。その点では、縄文時代晩期大洞 BC 式、大洞 C1 式に帰属する石器は多い可能性が高い。

石棒類は 3906 が調査区北側Ⅴ層、他は調査区南側Ⅲ層（Ⅳ～Ⅴ層もある）から出土している。出土状態に特異性はなく、故意に置かれたような出土はしていない。またほとんどの石棒類は欠損品である。時期としては 3906 が中期に、他は晩期に比定されるものと推定する。土偶・土製品と同様に、縄文土器の出土量と比較すると、非常に少ない。

石製品も一部調査区北側のⅤ層から出土しているが、ほとんどは調査区南側Ⅲ層から出土している（第 176 図）。器種や形態から晩期に比定されるものが多い。石棒類同様、出土状態に特異性がない。また出土点数も少ない。器種や形態は、概ね該期の遺跡から出土する石製品であり、特徴的と呼べるものはない。

石製品で特筆すべき点として、調査区北側の遺 4、Ⅴ b 層から翡翠製大珠（3935）が、また調査区南側の遺 234、Ⅲ層から翡翠製の勾玉（3936）が出土している。大珠は中期、おそらく大木 8a 式～8b 式に比定され、また勾玉は晩期、おそらく大洞 BC 式～大洞 C1 式に比定される。2 点とも同定分析を行い（第Ⅷ章－3）、糸魚川産の翡翠であることが分かっている。翡翠製の石製品は、山田町内では大浦半島に所在する畠中遺跡で縄文晩期の翡翠製垂飾品が 1 点見つかったのみで、本遺跡が 2、3 例目となる。一つの遺跡から時期の異なる翡翠製の石製品が出土すること自体珍しく、本遺跡が複数の時期に重要な役割を担った場所であったことを裏付ける資料である。

また調査区北側を中心に琥珀片および琥珀製玉（3937）が、また調査区南側の遺 218、Ⅲ層からはアスファルト塊が出土している。出土位置や出土層位からいずれも中期の範疇と推定する。同定分析を行っていないが、琥珀は久慈産、アスファルトは秋田県域の日本海ではないかと推測する。翡翠同様、これらの石材、自然遺物は他地域、特に遠方と交流していたことを意味している。

2 検出遺構からの検討

第七章で、各遺構について出土した縄文土器や炭化物の年代測定（AMS測定）から時期を推定し、記した。それらを集約した結果、本遺跡の遺構は6つの時期に区分することができる。以下、各時期について概観する。

【Ⅰ期（大木8a式新段階）】

1号住居跡、19号住居跡が相当し、また14号住居跡もその可能性がある（第193図左上）。いずれも調査区北側に位置し、1号、19号住居跡は標高6～7mの平坦面の末端に立地する。1号、19号住居跡は隣接するが、19号住居跡は炉しか検出できなかったため、重複していたかどうか定かではなく、したがって両者は同時存在かどうか分からない。最大で竪穴住居跡3棟の、小規模な集落であるが、周囲のV層中から大量の大木8a式新段階の土器が出土しており、また該期では貯蔵穴などが見つかっておらず、そういった点でも、調査区外にも集落域が広がっている可能性が高い。

竪穴住居跡の規模は1号住居跡が径5～6m、14号住居跡は径3mで、比較的小型である。また炉が付属し、1号、19号住居跡は石囲炉（第194図）、14号住居跡は地床炉である。石囲炉はどちらも一辺80cm程度の方形基調で、該期によくみられる形態といえる。

【Ⅱ期（大木8b式新段階～大木9式古段階）】

Ⅰ期とは継続せず、空白期を経ている。

2～6号、21号住居跡が相当し、20号住居跡もその可能性がある。（第193図中央上）。21号住居跡以外は、いずれも調査区北側に位置し、2～7号住居跡は標高5～7mを測る、平坦面の末端緩斜面地に立地、20号住居跡はそれより北西側の平坦面に立地する。21号住居跡は調査区南側、沢跡の底面に立地する。

前時期と比べ、住居数は増加したが、2～7号住居跡は重複しており、同時存在ではない。したがって、1時期あたりの住居数は1～2棟程度であり、Ⅰ期同様、小規模な集落と言える。ただし包含層V層からは該期の土器が大量に出土しており、またⅠ期同様、竪穴住居跡以外の遺構がみつからないので、調査区外に集落域が広がる可能性が高い。

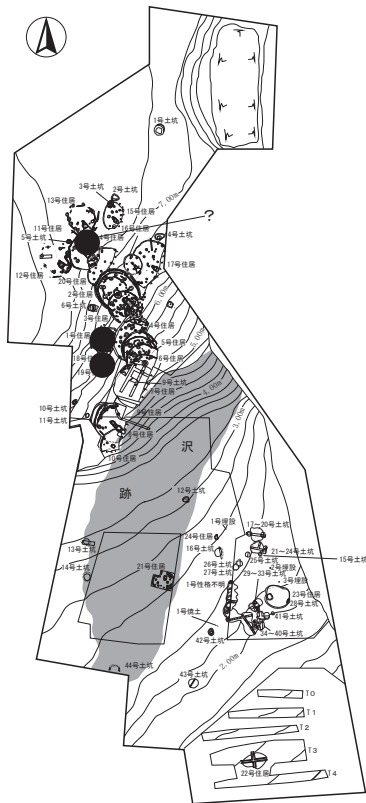
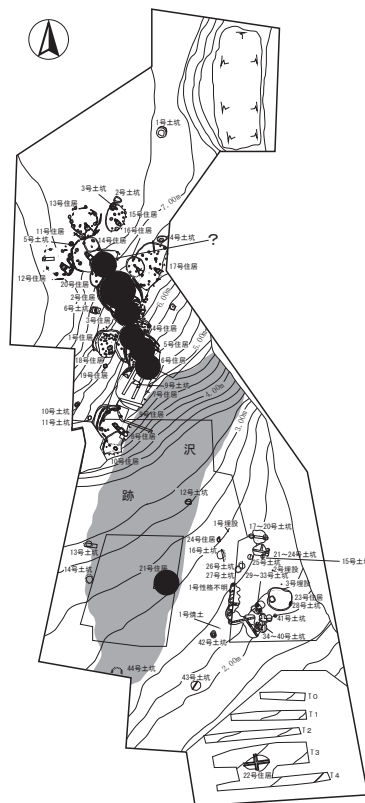
調査区南側に位置する21号住居跡は沢跡の底面で検出した。したがって沢跡が埋没する以前に集落域が広がっていたことになるが、標高は1～2mに満たない低地であり、このような場所で、中期に集落が営まれていたことは特筆すべき点である。残念ながら、21号住居跡の周辺は確認調査範囲で、全容を知ることは出来なかった。ただし基本土層を調べるために、沢跡にトレンチを入れ、土層を確認したが（第Ⅵ章）、その際、沢跡の底面では、同じような遺構がみつかることはなかった。

竪穴住居跡の規模は最も小さい21号住居跡は推定で径約4mだが、3号住居跡は径6m、2号では径8mを超えており、様々である。住居には炉が付属しており、いずれにも石囲炉が付く（第194図）。2号、3号住居跡の炉は大きく主軸が1mを超えており、また炉石が抜かれている。

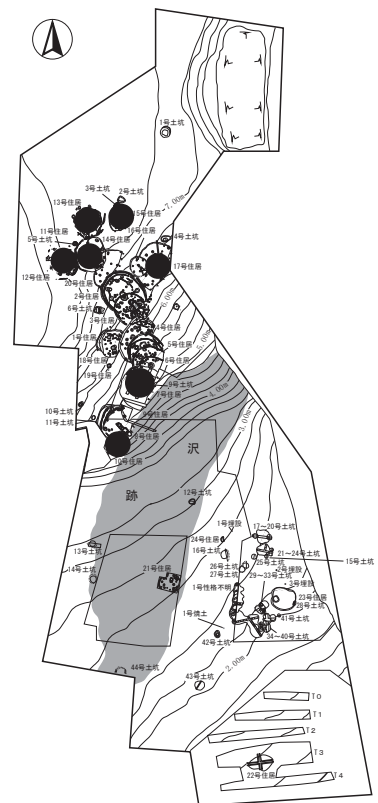
【Ⅲ期（大木9式新段階）】

Ⅱ期から継続しており、7号、10～13号、17号住居跡が相当する（第193図右上）。住居数はⅡ期とほぼ同じでやや分散気味に分布する。標高5mの緩斜面地に立地する。11～13号住居跡は重複している可能性があり、1～数棟の小規模な集落である。ただしそれでも2～3棟程度であり、小規模な集落であることに変わりはない。他の時期同様、竪穴住居跡以外の遺構がみつからない。

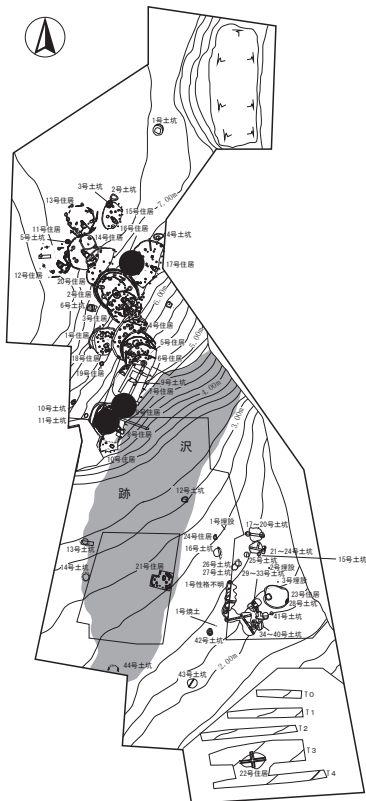
I 期 (大木 8a 式新段階)

II 期 (大木 8b 式新段階
~大木 9 式古段階)

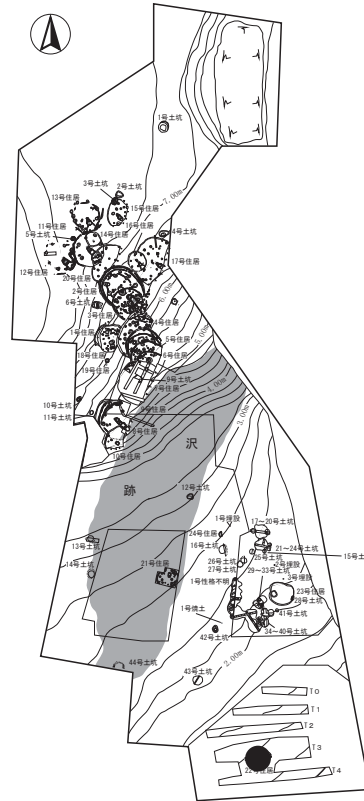
III 期 (大木 9 式新段階)



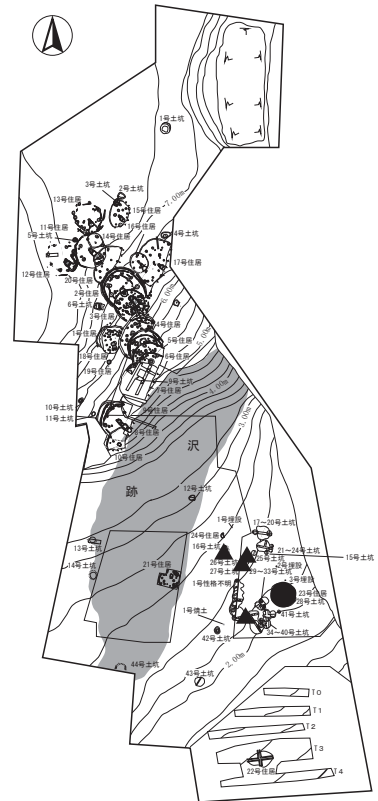
IV 期 (大木 10 式中~新段階)



V 期 (後期中葉)



VI 期 (大洞 C 1 式)

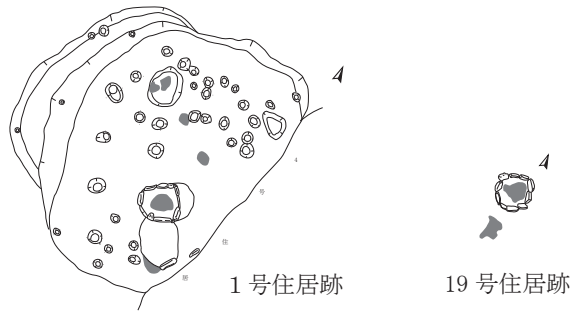


● …堅穴住居跡 ▲ …土坑 / 性格不明遺構

0 1 : 1500 40m

第 193 図 遺構の変遷

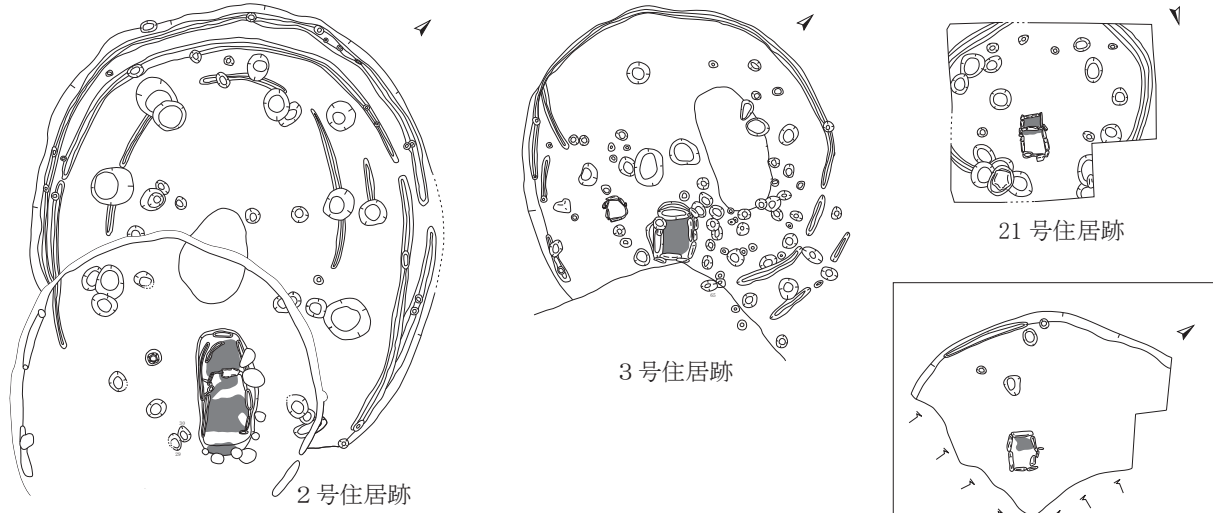
大木 8 a 式



1号住居跡

19号住居跡

大木 8 b 式 (~大木 9 式)



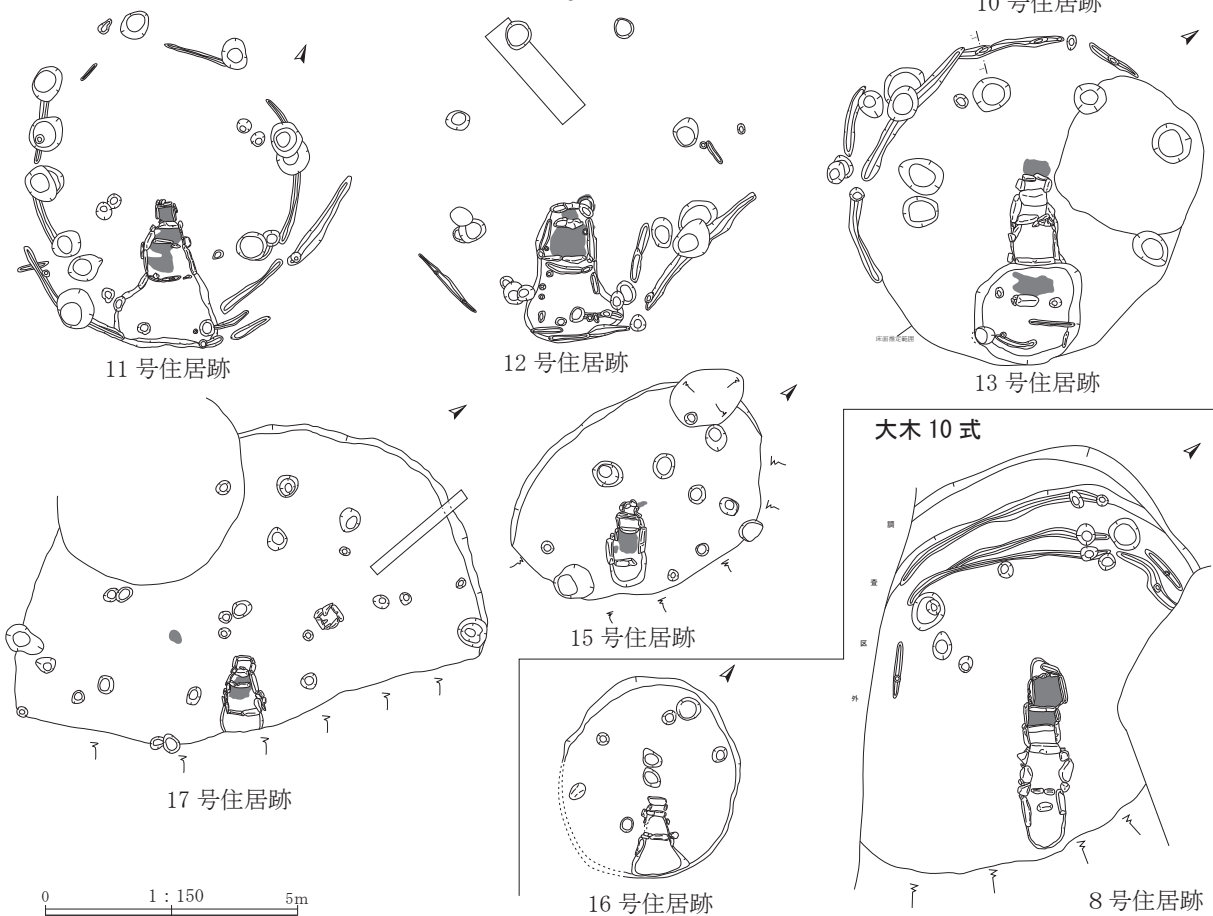
2号住居跡

3号住居跡

21号住居跡

10号住居跡

大木 9 式 (~大木 10 式)



11号住居跡

12号住居跡

13号住居跡

15号住居跡

17号住居跡

16号住居跡

大木 10 式

8号住居跡

第 194 図 中期の竪穴住居跡集成

竪穴住居跡の規模は11～13号住居跡で約6mを測る。17号住居跡は8mで大きい。また炉は複式炉（第194図）が多いが、10号住居跡は石囲炉である。大木9式新段階では通常、複式炉が付されるので、10号住居跡はやや特異である。

【IV期（大木10式新段階）】

III期とは継続せず、僅かな空白期を経ている。

8号、16号、18号住居跡が相当する。（第193図左下）。16号住居跡は調査区北側中央、他の2棟は、標高5mの緩斜面地に立地する。8号、18号住居跡は隣接するが、18号住居跡は炉しか検出出来なかったもので、重複していたか定かではなく、両者は同時存在かどうかとも分からない。同時存在であったとしても2～3棟の小規模な集落である。他の時期同様、竪穴住居跡以外の遺構がみつかっていない。

竪穴住居跡の規模は8号住居跡が一部消失するが、残存部だけでも8mを超えており、大型である。また炉は複式炉（第194図）で、主軸は3mを超える大きな炉である。

なお、調査区北側では、IV期が遺構の最終時期である。

【V期（後期中葉）】

IV期とは継続せず、大きな空白期を経ている。

22号住居跡が相当する。（第193図中央下）。調査区南側のさらに南端に位置し、標高1～2mの低地に立地する。確認調査範囲で全容は不明。

22号住居跡は、4×3mの楕円形を呈し、やや歪な竪穴住居跡である。炉は確認していない。確認調査範囲で、不明な点が多いが、周辺には該期の遺物が多量に出土しており、集落域は、調査区外も含め、大きく広がる可能性がある。

【VI期（大洞C1式）】

V期とは継続せず、大きな空白期を経ている。

23号住居跡、および周辺の貯蔵穴群、1号性格不明遺構が相当し、他に1号焼土、1～3号埋設土器も含まれる可能性がある。（第193図右下）。調査区南側の東側に位置し、標高2～3mの低地に立地する。各遺構は隣接するが重複していないので、同時期存在の可能性がある。竪穴住居跡1棟の小規模な集落であるが、貯蔵穴の数の多さからみて集落域は調査区外へと広がる可能性が高い。

23号住居跡は径4m強の不整な楕円形で、炉を有しない。ただし隣接する1号焼土遺構は屋外炉の可能性が高い。貯蔵穴は深さ1mを超え、底面規模も径1mを超える比較的大きなものである。1号性格不明遺構は、大型の遺構で、用途が分からない。底面の形状から土取り穴の可能性を考えたが、あくまで推測である。

なお調査区南側ではVI期が遺構の最終時期であり、またこの時期をもって、本遺跡自体、遺構群が消滅する。

以上が、本遺跡にみられる縄文時代の遺構の変遷である。断続的だが、小規模な集落が縄文時代中期前葉から縄文時代晩期中葉まで続いたことが見て取れた。

また他に、古代の土坑（44号土坑）があり、中世、近世の陶磁器も出土していることから、古代以降も人の生活の営みは続けられたことがうかがえる。そして第II章で述べたが、戦時中、石油備蓄庫として利用された時期を経て、現代に至るようである。

（須原）

引用参考文献

- 相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年
- 仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に -」(『考古学雑誌』第76巻 第1号)
- 2012 「縄文・弥生時代における超巨大地震津波と社会・文化変動に関する予察
- 東日本大震災津波の地平から -」(『東北歴史博物館研究紀要13』)
- 秋田県教育委員会 2004 『向様田 A 遺跡 遺物編』(秋田県文化財調査報告書第370集)
- 阿部昭典 2008 『縄文時代の社会変動論』(未完成考古学叢書⑥)
(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 2002 『清水遺跡発掘調査報告書』(岩埋文第382集)
- 2008 『力持遺跡発掘調査報告書』(岩埋文第510集)
『袋帯遺跡発掘調査報告書』(岩埋文第522集)
- 2012 『川目 A 遺跡発掘調査報告書』(岩埋文第568集)
- 2015 『平成26年度発掘調査報告書』(岩埋文第647集)
- 2018 『越田松長根 I 遺跡発掘調査報告書』(岩埋文第666集)
- 一戸町教育委員会 2015 『御所野遺跡 V』
- 今井富士雄・磯崎正彦 1968 『岩木山』
- 海峽土器編年研究会 2007 『第5回 縄文時代後期末葉～晩期初頭土器群の諸問題 - 資料集 -』
- 加藤昭雄 2006 『岩手の戦争遺跡をあらく』
- 河本純一 2011 「泉南地域における縄文土器胎土の時期的変化」(『大阪文化財研究』38 財団法人大阪府文化財センター)
- 2017 「県内出土の縄文土器胎土について(3)」(『紀要』XXXVI (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)
- 菅野紀子 2017 「アスファルト関連資料集成 岩手県」(『縄文時代のアスファルト利用 I』)
- 久保健太郎 2012 「異形石器の一視点」(『季刊考古学』第119号)
- 鈴木道之助 1991 『石器入門事典-縄文』(柏書房)
- 関根達人 2005 「十腰内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器に関する今日的理解」(『北奥の考古学』)
- 高橋憲太郎 1982 『柿ノ木平遺跡』(盛岡市文化財調査報告書第23集)
- 中野幸大 2008 「大木7a～8b式土器」(『総覧 縄文土器』)
- 成田滋彦 2003 「最花式土器-在地式土器群の様相-」(『研究紀要』第8号 青森県埋蔵文化財センター)
- 西田泰民 1998 「虫内 I 遺跡出土縄文土器、土製品の胎土」(『虫内 I 遺跡』秋田県文化財調査報告書第274集)
- 仙台市教育委員会 2000 『仙台市 王ノ壇遺跡』(仙台市文化財調査報告書第249集)
- 2010 『西台畑遺跡第1、2次調査』(仙台市文化財調査報告書第359集)
- 日本考古学協会 2005 『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』
- 2016 『第1分科会 津軽海峡圏の縄文文化 研究報告資料集』
- 丹羽茂 1981 「大木式土器」(『縄文文化の研究』4)
- 1989 「中期大木式土器様式」(『縄文土器大観』1)
- 早瀬亮介 2009 「前期大木式土器の変遷と地域性-編年研究の現状と課題-」
(『日本考古学協会2009年度山形大会研究発表資料集』)
- 藤沼邦彦 1989 「亀ヶ岡式土器様式」(『縄文土器大観』4)
- 宮島宏 2014 『とっておきのヒスイの話 第4版』(フォッサマグナミュージアム)
- 盛岡市教育委員会 2004 『縄文の彩華-中期の技と美-』(盛岡市遺跡の学び館)
- 山田町教育委員会 1999 『山田町内遺跡詳細分布調査報告書 I』(山田町埋蔵文化財調査報告書第4集)
- 2002 『山田町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』(山田町埋蔵文化財調査報告書第7集)
- 2003 『山田町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ』(山田町埋蔵文化財調査報告書第9集)
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄文』

報告書抄録

ふりがな	はまかわめさわだ1いせきはくつちようさほうこくしよ							
書名	浜川目沢田 I 遺跡発掘調査報告書							
副書名	大沢地区漁業集落防災機能強化事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 689 集							
編著者名	須原 拓・河本純一							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2018 年 3 月 16 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所収遺跡	コード		北緯 〃	東経 〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はまかわめさわだ 浜川目沢田 いせき I 遺跡	いわてけんしもへいぐんやまだ 岩手県下閉伊郡山田 まちおおさわはまかわめだ 町大沢浜川目第 11 地 わり 割	03482	LG84 - 2393	39 度 29 分 05 秒	141 度 59 分 09 秒	2014.06.02 ～ 2014.12.17	6,240㎡	大沢地区漁業集落防災機能強化事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
浜川目沢田 I 遺跡	集落跡	縄文時代 中期・晩期	竪穴住居 24 棟 土坑 43 基 埋設土器 3 基 焼土遺構 1 基 性格不明遺構 1 基 柱穴 39 個	縄文土器 (前・中・後期・晩期) 土偶 (縄文晩期) 土製品・石製品 (主に晩期) 石器	海沿いの低地に営まれた縄文集落。中期は複式炉をともなう竪穴住居群を検出。また周辺から多量の土器や石器、翡翠製大珠が出土。晩期は小規模集落 (竪穴住居と貯蔵穴) で、周辺から多量の土器や石器、土偶や石棒、また翡翠製勾玉が出土。			
		平安時代 中世以降	土坑 1 基	土師器、須器器、羽口、鉄床石 中世陶器・近世陶磁器・銃弾 (戦争遺物)				
要約	山田湾から約 200 m に位置し、微高地末端から低地にかけてに立地する。縄文時代中期前～末葉の集落と晩期中葉の小規模集落の複合遺跡であることが調査の結果明らかになった。検出した竪穴住居跡は 24 棟を数え、中期では複式炉や石囲炉をともない、また伏甕が設置される住居も見受けられた。土坑は性格不明のものも多いが、晩期では貯蔵穴が多く見つっている。また中期・晩期の遺物包含層を形成し、前期前葉から晩期中葉までの膨大な量の遺物が出土した。遺物包含層からは縄文土器や石器の他に、土製品・石製品・土偶・石棒・翡翠製の大型大珠 (中期)、翡翠製勾玉 (晩期) も出土している。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 689 集

浜川目沢田 I 遺跡発掘調査報告書

大沢地区漁業集落防災機能強化事業関連遺跡発掘調査
(第 1 分冊 本文・遺構図版・遺構内出土遺物図版)

印 刷 平成 30 年 3 月 10 日

発 行 平成 30 年 3 月 16 日

編 集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地
電話 (019) 638-9001

発 行 山田町建設課
〒028-1392 岩手県下閉伊郡山田町八幡町 3-20
電話 (0193) 82-3111

(公財) 岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号
電話 (019) 654-2235

印 刷 河北印刷株式会社
〒020-0015 岩手県盛岡市本町通 2 丁目 8 番 7 号
電話 (019) 623-4256